

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第18集

はる つじ
原の辻遺跡 総集編Ⅱ

—平成17年度から平成26年度までの調査成果—

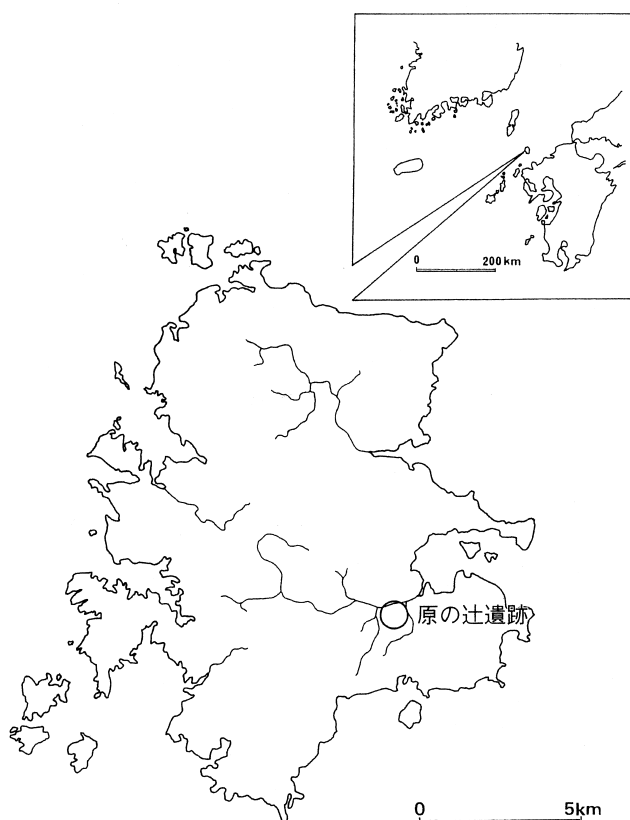
2016

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第18集

はる つじ
原の辻遺跡 総集編Ⅱ

—平成17年度から平成26年度までの調査成果—





カラー写真1 原の辻遺跡全景



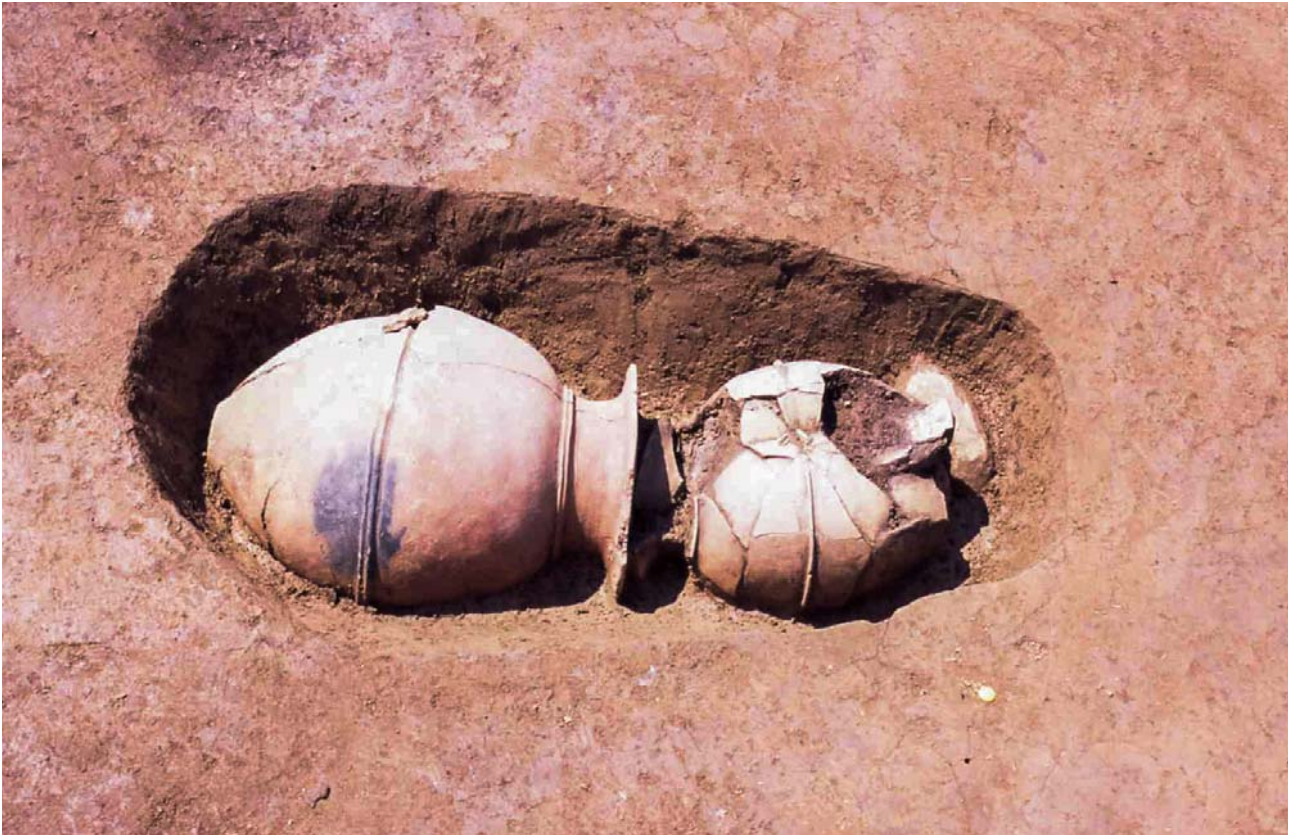
カラー写真2 原の辻遺跡復元建物



カラー写真3 平成19年度八反地区船着き場跡南側分水遺構



カラー写真4 平成23年度不條地区船着き場跡北側石組遺構



カラー写真5 平成20年度原地区2号甕棺墓検出状況



カラー写真6 平成20年度石田高原地区 箱式石棺墓検出状況



カラー写真7 平成25年度川原畑地区1号竪穴建物跡



カラー写真8 平成18年度高元Ⅲ-6地点 土器溜り検出状況



カラー写真9 丹塗土器



カラー写真10 粘土帯土器



カラー写真11 楽浪系土器・三韓系土器



カラー写真12 石製品



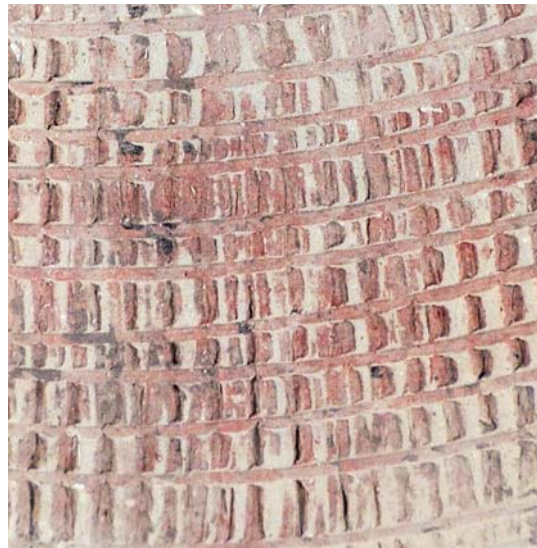
カラー写真13 鉄器



赤色塗彩楽浪系土器

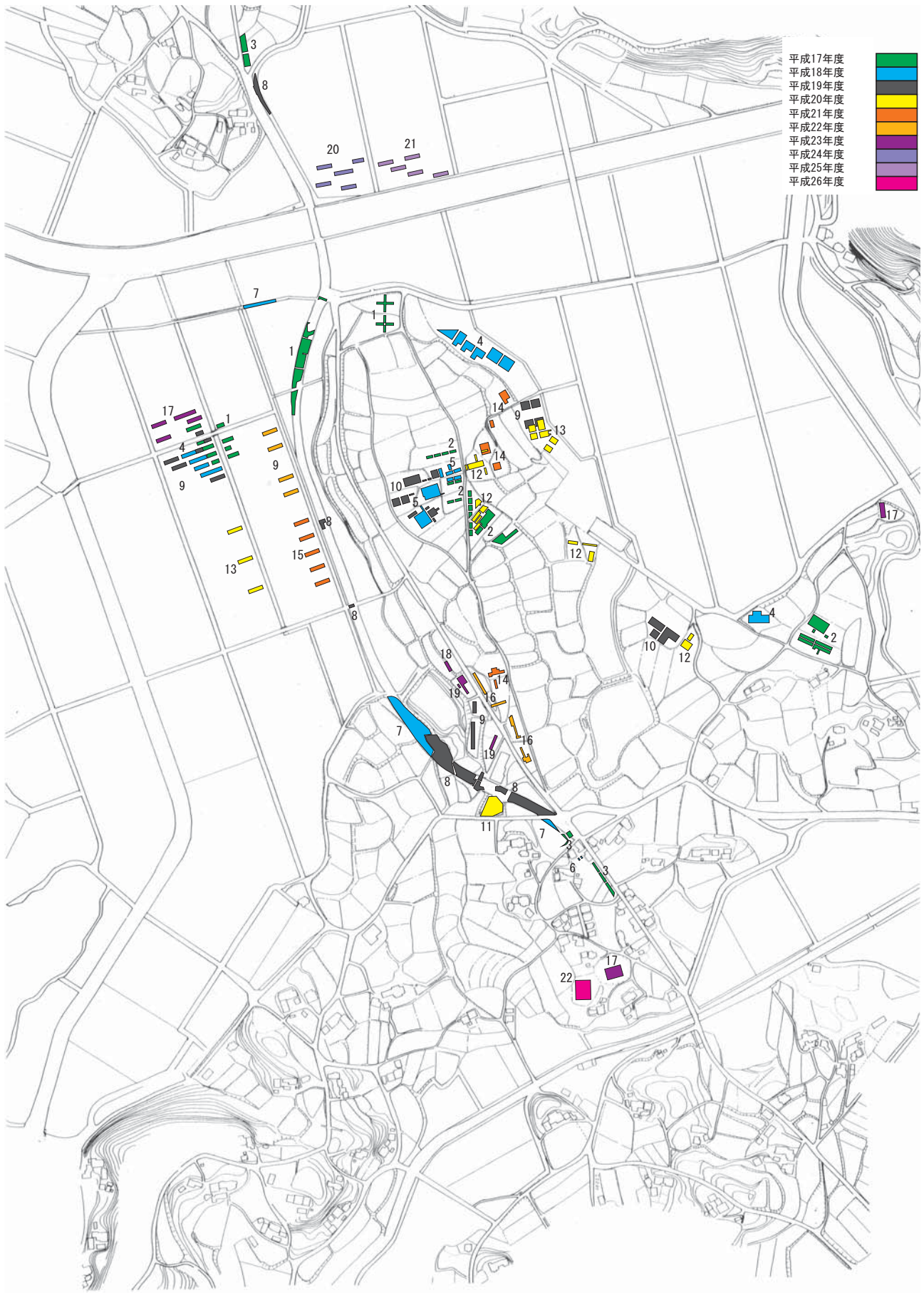


赤色塗彩三韓系瓦質土器



三韓系瓦質土器赤色塗彩細部

カラー写真14 赤色塗彩された大陸・半島系土器



カラー図1 平成17年度～平成26年度の調査経過
 ※番号は本文P7を参照

発刊にあたって

長崎県教育委員会では、平成17年度から本格的に始まる遺跡の保存整備に合わせ、平成16年度までの発掘調査成果を総括するとともに、その後の調査の指標となることを目的として平成17年3月に原の辻遺跡総集編Ⅰを刊行しました。総集編Ⅰについては、研究者をはじめ多くの方々にご活用いただくとともに、新たな観点や御考察も頂戴するなど、原の辻遺跡の研究を進める上で大変有意義な資料であったと認識しております。

このような中、原の辻遺跡の調査については、遺跡の全容解明と国特別史跡の追加指定を目指して調査研究を継続してきたところですが、毎年度発行する報告書が自ずと速報的な色合いの濃いものであったことや、出土品を再整理し研究することにより、新たな知見も得られたことから、総集編Ⅰ以降の調査研究成果を一書に整理し、今般総集編Ⅱの刊行に至った次第です。

総集編Ⅱにおいては、総集編Ⅰにおいて取り上げた調査経過や遺構、遺物、自然科学分析について、新たな研究成果を織り込みつつ加筆するほか、保存処理についても新たな項を起し研究成果として記しています。加えて、平成27年5月に友好機関協定を締結した釜山博物館をはじめとする国内外研究機関の御協力を得ながら、これまで原の辻遺跡で出土した大陸・半島系土器全点に関し、全面的な再検討を行い得られた新知見についてまとめています。

なお、総集編Ⅰを刊行した平成17年からの10年間には、平成22年に原の辻遺跡を南に見下ろす丘の上に壱岐市立一支国博物館・長崎県埋蔵文化財センターが開館するとともに、史跡内には竪穴建物など17棟が復元整備されたほか、平成25年には、昭和49年以降の発掘調査で出土した原の辻遺跡の遺物のなかで、遺構や場所が明確で遺跡の時代や対外交流の歴史を裏付けることができる資料1,670点が重要文化財に指定されるなど調査研究や保存活用の条件整備が充実したところではあります。

特に、長崎県埋蔵文化財センターでは、原の辻遺跡の調査研究を中心に据えて、中国大陸や朝鮮半島との古代からの交流に焦点をあてた考古学研究を、中国や韓国の研究機関等と連携して取り組んでおりますので、今後のさらなる研究の進展にご期待ください。

末筆ながら、編集にあたり諸先生方より御指導を賜りましたことに厚く感謝申し上げますとともに、調査・研究に御理解と御協力をいただきました地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。これらの調査成果が学術的な資料として広く活用され、さらには地域の方々の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成28年3月31日

長崎県教育委員会教育長
池松 誠 二

例 言

1. 本書は、平成17年度～平成26年度まで長崎県教育委員会と壱岐市教育委員会によって実施された原の辻遺跡発掘の成果を整理した調査報告書である。
2. 本報告書は、平成27年度の国庫補助を受け、作成された。
3. 発掘調査、本報告書執筆にあたっては調査指導委員会委員、文化庁記念物課、壱岐市教育委員会の協力があつた。平成17年度から平成27年度までの調査組織については以下のとおりである。

・平成17年度

原の辻遺跡調査事務所 所長 安楽 勉 係長 村川 逸朗・森崎 伸一 主任文化財保護主事 福田 一志 文化財保護主事 寺田 正剛・林 隆広・溝上 貴稔
壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 山内 義夫 課長補佐 松尾 実
係長 山口 信幸・下條 健輔・山川 秀光 主査 河合 雄吉・田中 聡一 主事 松本 浩二・松見 裕二 文化財指導員 山口 優

・平成18年度

原の辻遺跡調査事務所 所長 安楽 勉 係長 村川 逸朗・森崎 伸一 文化財保護主事 川畑 敏則・寺田 正剛・林 隆広・溝上 貴稔
壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 山内 義夫 課長補佐 松尾 実
係長 山口 信幸・山川 秀光 主査 河合 雄吉・田中 聡一 主事 松本 浩二・松見 裕二 文化財指導員 山口 優

・平成19年度

原の辻遺跡調査事務所 所長 安楽 勉 課長 宮崎 貴夫 係長 村川 逸朗・森崎 伸一
文化財保護主事 川畑 敏則・林 隆広・小林 利彦
壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 村田 正明 係長 松本 明久・河合 雄吉 主事 田中 聡一・松本 浩二 文化財指導員 山口 優

・平成20年度

原の辻遺跡調査事務所 所長 安楽 勉 課長 宮崎 貴夫 係長 四辻 義仁 文化財保護主事 川畑 敏則・林 隆広
壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 村田 正明 係長 河合 雄吉 主事 田中 聡一・松本 浩二・石村 利彦 文化財指導員 山口 優

・平成21年度

原の辻遺跡調査事務所 所長 安楽 勉 課長 宮崎 貴夫 係長 川道 寛・四辻 義仁
文化財保護主事 川畑 敏則・林 隆広・片多 雅樹・古澤 義久 主事 生方 佑典
長崎県埋蔵文化財センター 所長 川久保 芳洋 (総務課) 課長 四辻 義仁 主事 生方 佑典 (調査課) 課長 宮崎 貴夫 係長 川道 寛・町田 利幸 文化財保護主事 川畑 敏則・林 隆広・片多 雅樹 (東アジア考古学研究室) 室長 安楽 勉 文化財保護主事 古澤 義久
壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 市山 等 係長 河合 雄吉・小畑

彰一 主事 田中 聡一・石村 利彦 文化財指導員 山口 優

・平成22年度

長崎県埋蔵文化財センター 所長 川久保 芳洋 (総務課) 課長 四辻 義仁 主事 生方
佑典 (調査課) 課長 川道 寛 係長 町田 利幸 文化財保護主事 川畑 敏則・吉野
正剛・林 隆広・片多 雅樹 (東アジア考古学研究室) 室長 安楽 勉 文化財保護主事
田口 貴久・古澤 義久

壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 山口 信幸 係長 河合 雄吉・小畑
彰一 主事 田中 聡一・松見 裕二・石村 利彦 文化財指導員 山口 優

・平成23年度

長崎県埋蔵文化財センター 所長 金子 眞二 (総務課) 課長 北川 和広 主事 生方
佑典 (調査課) 課長 川道 寛 係長 町田 利幸 文化財保護主事 川畑 敏則・吉野
正剛・林 隆広・片多 雅樹 (東アジア考古学研究室) 室長 安楽 勉 文化財保護主事
田口 貴久・古澤 義久

壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 山口 信幸 係長 河合 雄吉・小畑
彰一 主事 田中 聡一・松見 裕二 文化財指導員 山口 優

・平成24年度

長崎県埋蔵文化財センター 所長 木村 忠男 (総務課) 課長 北川 和広 主任主事 増
田 誠 (調査課) 課長 川道 寛 係長 町田 利幸 文化財保護主事 林 隆広・片多
雅樹 (東アジア考古学研究室) 室長 安楽 勉 文化財保護主事 田口 貴久・古澤 義久
壱岐市教育委員会 教育長 須藤 正人 文化財課長 山口 信幸 係長 河合 雄吉 主
事 田中 聡一・松見 裕二 文化財指導員 山口 優

・平成25年度

長崎県埋蔵文化財センター 所長 木村 忠男 (総務課) 課長 小島 克孝 主任主事 増
田 誠 (調査課) 課長 町田 利幸 文化財保護主事 片多 雅樹・白石 溪冴 (東アジ
ア考古学研究室) 室長 川道 寛 文化財保護主事 田口 貴久・古澤 義久

壱岐市教育委員会 教育長 久保田 良和 文化財課長 尾関 孝人 係長 河合 雄吉・田
中 聡一・松見 裕二 文化財指導員 山口 優

・平成26年度

長崎県埋蔵文化財センター 所長 山本 忠敬 (総務課) 課長 小島 克孝 主任主事 増
田 誠 (調査課) 課長 町田 利幸 主任文化財保護主事 片多 雅樹 文化財保護主事
白石 溪冴 (東アジア考古学研究室) 室長 川道 寛 主任文化財保護主事 古澤 義久
文化財保護主事 楠本 正樹

壱岐市教育委員会 教育長 久保田 良和 文化財課長 尾関 孝人 係長 河合 雄吉・田
中 聡一・松見 裕二 文化財指導員 山口 優

・平成27年度

長崎県埋蔵文化財センター 所長 山本 忠敬 (総務課) 課長 小島 克孝 主事 高見
朋弘 (調査課) 課長 (兼任) 川道 寛 主任文化財保護主事 片多 雅樹・松元 一浩

文化財保護主事 白石 溪沔 (東アジア考古学研究室) 室長 川道 寛 主任文化財保護主事 古澤 義久 文化財保護主事 楠本 正樹
壱岐市教育委員会 教育長 久保田 良和 文化財課長 野元 和夫 係長 河合 雄吉・田中 聡一・松見 裕二 文化財指導員 山口 優

・原の辻遺跡調査指導委員会委員

福岡大学名誉教授 小田 富士雄 (1995～2009) 天理大学名誉教授 金関 恕 (2003～2009)
大阪府立狭山池博物館長 工楽 善通 (1995～) 関西外国語大学教授 佐古 和枝 (2010～)
東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長・教授 澤田 正昭 (1995～2009) 龍谷大学国際学部教授 徐 光輝 (2014～) 西南学院大学名誉教授 高倉 洋彰 (2010～) 福岡大学人文学部教授 武末 純一 (2010～) 佐賀大学名誉教授 日野 尚志 (1995～2009) 九州国立博物館学芸部特任研究員 本田 光子 (2010～2012) 九州大学名誉教授 西谷 正 (1995～)
東北芸術工科大学名誉教授 宮本 長二郎 (1995～2012) 元・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長 松井 章 (1995～2015) 愛媛大学古代東アジア鉄文化研究センター長・教授 村上 恭通 (2013～)

4. 本書に関わる記録類及び出土遺物については長崎県埋蔵文化財センター及び壱岐市立一支国博物館に保管されている。
5. 本書の韓国語要旨は古澤義久が作成し、金恩瑩氏(釜山広域市庁文化芸術課)に校閲を依頼した。また中国語要旨は王達来氏(龍谷大学大学院博士課程)に翻訳を依頼した。
6. 本書の執筆担当者は、本文目次に()で示している。
7. 本書の編集は川道寛と古澤義久が行った。

本文目次

I. 平成17年度～平成26年度の調査経過	1	(楠本正樹)
II. 弥生時代の遺構		
1. 丘陵上の遺構	8	(松見裕二)
2. 丘陵西側低地部(不條・八反地区)の遺構	17	(古澤義久)
3. 丘陵北側低地部(川原畑地区)の遺構	23	(古澤義久)
III. 弥生時代の遺物		
1. 弥生土器	26	(松見裕二)
2. 大陸・半島系土器	53	(古澤義久)
◆三韓系土器と楽浪系土器に付着した赤色顔料について	151	(今西亮太)
◆日本列島の楽浪系土器概観	153	(武末純一)
3. 石器	169	(川道 寛)
4. 金属器	182	(古澤義久)
5. 木器・骨角器	190	(古澤義久)
IV. 自然科学分析		
1. 原の辻遺跡出土石器の蛍光 X 線分析による原産地推定	192	(川道寛・片多雅樹)
V. 原の辻遺跡の保存整備と活用	205	(田中聡一)
VI. 総括		
1. 東アジアにおける原の辻遺跡	217	(古澤義久)
2. 原の辻遺跡の盛衰	221	(松見裕二・古澤義久)
VII. 附編		
1. 原の辻遺跡の旧石器時代～縄文時代草創期	228	(川道 寛)
2. 原の辻遺跡出土遺物の保存処理	245	(片多雅樹)
要旨(韓国語・中国語)	266	

目 次

カラー図1 平成17年度～平成26年度の調査経過

図1	原の辻遺跡調査区地区割	
図2	丘陵上調査地点位置図(1/1000) ……12	
図3	土器溜り遺構出土遺物(1/6) ……13	
図4	土器溜り遺構出土遺物(1/6) ……14	
図5	土器溜り遺構出土遺物(1/6) ……15	
図6	西側低地部遺構配置図 ……18	
図7	船着き場跡周辺図 ……19	
図8	船着き場跡詳細図 ……20	
図9	川原畑地区弥生時代中期後葉の状況 ……24	
図10	弥生土器① ……33	
図11	弥生土器② ……34	
図12	弥生土器③ ……35	
図13	弥生土器④ ……36	
図14	弥生土器⑤ ……37	
図15	弥生土器⑥ ……38	
図16	弥生土器⑦ ……39	
図17	弥生土器⑧ ……40	
図18	弥生土器⑨ ……41	
図19	弥生土器⑩ ……42	
図20	弥生土器⑪ ……43	
図21	弥生土器⑫ ……44	
図22	弥生土器⑬ ……45	
図23	弥生土器⑭ ……46	
図24	弥生土器⑮ ……47	
図25	未報告大陸・半島系土器① ……66	
図26	未報告大陸・半島系土器② ……67	
図27	未報告大陸・半島系土器③ ……68	
図28	未報告大陸・半島系土器④ ……69	
図29	未報告大陸・半島系土器⑤ ……70	
図30	未報告大陸・半島系土器⑥ ……71	
図31	未報告大陸・半島系土器⑦ ……72	
図32	未報告大陸・半島系土器⑧ ……73	
図33	未報告大陸・半島系土器⑨ ……74	
図34	未報告大陸・半島系土器⑩ ……75	
図35	未報告大陸・半島系土器⑪ ……76	
図36	未報告大陸・半島系土器⑫ ……77	
図37	未報告大陸・半島系土器⑬ ……78	
図38	未報告大陸・半島系土器⑭ ……79	
図39	未報告大陸・半島系土器⑮ ……80	
図40	未報告大陸・半島系土器⑯ ……81	
図41	未報告大陸・半島系土器⑰ ……82	
図42	未報告大陸・半島系土器⑱ ……83	
図43	未報告大陸・半島系土器⑲ ……84	
図44	未報告大陸・半島系土器⑳ ……85	
図45	未報告大陸・半島系土器㉑ ……86	
図46	未報告大陸・半島系土器㉒ ……87	
図47	未報告大陸・半島系土器㉓ ……88	
図48	未報告大陸・半島系土器㉔ ……89	
図49	未報告大陸・半島系土器㉕ ……90	
図50	未報告大陸・半島系土器㉖ ……91	
図51	未報告大陸・半島系土器㉗ ……92	
図52	未報告大陸・半島系土器㉘ ……93	
図53	未報告大陸・半島系土器㉙ ……94	
図54	未報告大陸・半島系土器㉚ ……95	
図55	未報告大陸・半島系土器㉛ ……96	
図56	未報告大陸・半島系土器㉜ ……97	
図57	未報告大陸・半島系土器㉝ ……98	
図58	未報告大陸・半島系土器㉞ ……99	
図59	未報告大陸・半島系土器㉟ ……100	
図60	未報告大陸・半島系土器㊱ ……101	
図61	未報告大陸・半島系土器㊲ ……102	
図62	未報告大陸・半島系土器㊳ ……103	
図63	未報告大陸・半島系土器㊴ ……104	
図64	未報告大陸・半島系土器㊵ ……105	
図65	未報告大陸・半島系土器㊶ ……106	
図66	未報告大陸・半島系土器㊷ ……107	
図67	未報告大陸・半島系土器㊸ ……108	
図68	未報告大陸・半島系土器㊹ ……109	
図69	未報告大陸・半島系土器㊺ ……110	
図70	未報告大陸・半島系土器㊻ ……111	
図71	未報告大陸・半島系土器㊼ ……112	
図72	未報告大陸・半島系土器㊽ ……113	
図73	粘土帯土器・擬粘土帯土器の分布 ……135	
図74	楽浪系土器・擬楽浪系土器の分布 ……136	

図75	三韓系土器・列島産格子タタキ土器の分布	137	図105	敲石・磨石類④	173
図76	陶質土器の分布	138	図106	石皿類	174
図77	共伴関係資料①	140	図107	砥石類①	175
図78	共伴関係資料②	143	図108	砥石類②	176
図79	原の辻遺跡出土遼東系土器	144	図109	扁平片刃石斧	177
図80	原の辻遺跡出土馬韓系土器	145	図110	石庖丁	177
図81	片岡宏二が指摘した原の辻遺跡・韓半島南部の類似事例	145	図111	石鎌	178
図82	興洞遺蹟1号住居址出土土器	146	図112	石製支脚	179
図83	縄原体と土器器面	148	図113	石製漁撈具	179
図84	縄原体S撚/Z撚出土比率	149	図114	原の辻遺跡出土青銅器	183
図85	三韓系土器片赤色部、非赤色部分析結果	151	図115	原の辻遺跡出土中国貨幣	186
図86	楽浪系土器片赤色部、非赤色部分析結果	151	図116	原の辻遺跡出土鉄器	188
図87	日本列島の楽浪系土器	155	図117	原の辻遺跡出土木器	191
図88	楽浪土器以前とみられる中国系土器・関連資料	156	図118	原の辻遺跡出土骨角器	191
図89	対馬の楽浪系土器	156	図119	黒曜石原産地のRb分率・Sr分率判別図	193
図90	壱岐の楽浪系土器①	156	図120	鶴田遺跡出土石器 Rb分率・Sr分率判別図	195
図91	壱岐の楽浪系土器②	156	図121	鶴田遺跡原産地別出土遺物	196
図92	糸島の楽浪系土器①	158	図122	原ノ久保地区出土石器のRb分率・Sr分率判別図	197
図93	糸島の楽浪系土器②	158	図123	原ノ久保地区原産地別出土遺物	198
図94	糸島の楽浪系土器③	158	図124	原地区出土石器のRb分率・Sr分率判別図	199
図95	糸島の楽浪系土器④	158	図125	原地区原産地別出土遺物	200
図96	糸島の楽浪系土器⑤および福岡の楽浪系土器	160	図126	第I段階整備のゾーニング図(壱岐市教育委員会2011)	210
図97	早良および周縁地域、中国・四国地域の楽浪系土器	160	図127	復元整備盛土構成模式図(壱岐市教育委員会2011)	211
図98	十双遺跡の楽浪系土器と関連資料((1)~(11))	160	図128	中心域復元建物配置図(壱岐市教育委員会2011)	212
図99	城野遺跡3区M2の楽浪系土器と共伴土器	160	図129	建物復元状況断面模式図[上:竪穴建物, 下:壁立建物](壱岐市教育委員会2011)	213
図100	半球形平底鉢の変遷	162	図130	原の辻一支国王都復元公園活用状況	215
図101	海村と国邑の関係模式図	162	図131	原の辻遺跡における集落の変遷	227
図102	敲石・磨石類①	170	図132	萱ノ木地区第1試掘坑の落し穴状遺構	229
図103	敲石・磨石類②	171			
図104	敲石・磨石類③	172			

図133	原ノ久保地区検出の皿状土坑……………229	……………117～133
図134	鶴田遺跡遺物分布……………230	表7 原の辻遺跡大陸・半島系土器出土現況 ……………134
図135	鶴田遺跡出土の石器……………231	表8 粘土帯土器・弥生土器甕比較 ……146
図136	萱ノ木地区第1試掘坑の遺物分布…232	表9 縄原体S撚/Z撚出土点数 ……149
図137	萱ノ木地区出土石器……………233	表10 三韓系土器分析結果 ……152
図138	原ノ久保地区土層断面図……………234	表11 楽浪系土器分析結果 ……152
図139	原ノ久保地区遺物分布図……………235	表12 北部九州と韓半島南部の併行関係 …155
図140	原ノ久保地区出土石器①……………236	表13 弥生時代石器観察表……………180～181
図141	原ノ久保地区出土石器②……………237	表14 平成17～26年度原の辻遺跡出土青銅器 ……………184
図142	原地区遺物分布……………238	表15 原の辻遺跡出土中国貨幣 ……187
図143	原地区出土石器……………239	表16 平成17～26年度原の辻遺跡出土鉄器 ……………189
図144	原ノ久保地区細石刃核……………239	表17 平成17～26年度原の辻遺跡出土木器 ……………190
図145	原の辻遺跡細石器関連資料の地区別 出土状況……………240	表18 平成17～26年度原の辻遺跡出土骨角器 ……………190
図146	原の辻遺跡低地部出土の細石器関連 資料①……………241	表19 蛍光X線分析表 ……201～204
図147	原の辻遺跡低地部出土の細石器関連 資料②……………242	表20 原の辻遺跡発掘調査成果等概要①〔平 成5～20年度〕……………207
図148	原の辻遺跡丘陵部出土の細石器関連 資料……………243	表21 原の辻遺跡発掘調査成果等概要②〔平 成21～27年度〕……………208
図149	PEG含浸処理 ……246	表22 原の辻遺跡出土遺物の保存処理一覧 ……………245
図150	鉄器の錆取り……………248	
図151	事前調査機器……………249	
図152	貨泉の透過X線写真……………250	
図153	赤色顔料の成分分析……………250	
図154	トンボ玉の成分分析……………251	
図155	繊維痕の断面観察……………251	
図156	人面石のレプリカ作成……………252	

表 目 次

表1	平成17年度～平成26年度の調査区域地 図との対応……………7
表2	掲載資料目録（土器溜り遺構出土遺 物）……………16
表3	船着き場跡周辺基本層序……………21
表4	掲載資料目録……………48～52
表5	未報告大陸・半島系土器観察表…55～65
表6	既報告大陸・半島系土器観察表

写 真 目 次

カラー写真1	原の辻遺跡全景
カラー写真2	原の辻遺跡復元建物
カラー写真3	平成19年度八反地区船着き場跡 南側分水遺構
カラー写真4	平成23年度不條地区船着き場跡 北側石組遺構
カラー写真5	平成20年度原地区2号甕棺墓検 出状況
カラー写真6	平成20年度石田高原地区 箱式 石棺墓検出状況
カラー写真7	平成25年度川原畑地区1号竪穴

	建物跡		況 ……………258
カラー写真8	平成18年度高元Ⅲ-6地点 土器溜り検出状況	写真16	平成23年度不條地区船着き場跡北側 石組遺構 ……………259
カラー写真9	丹塗土器	写真17	平成23年度不條地区1号礫群 ……259
カラー写真10	粘土帯土器	写真18	平成24年度川原畑地区河川土器出土 状況 ……………259
カラー写真11	楽浪系土器・三韓系土器	写真19	平成24年度川原畑地区河川土器出土 状況 ……………260
カラー写真12	石器	写真20	平成24年度川原畑地区2号土坑 ……260
カラー写真13	鉄器	写真21	平成24年度川原畑地区9号土坑 ……260
カラー写真14	赤色塗彩された大陸・半島系土 器	写真22	平成25年度川原畑地区1号竪穴建物 跡炉跡 ……………261
写真1	平成17年度不條地区船着き場跡8区 礫検出状況 ……………254	写真23	平成25年度川原畑地区炉跡直上壺出 土状況 ……………261
写真2	平成17年度不條地区船着き場跡2区 礫検出状況1 ……………254	写真24	平成25年度川原畑地区1号土坑 ……261
写真3	平成17年度不條地区船着き場跡2区 礫検出状況2 ……………254	写真25	平成25年度川原畑地区14号土坑 ……262
写真4	平成17年度不條地区船着き場跡9区 礫検出状況 ……………255	写真26	平成25年度川原畑地区細石刃出土状 況 ……………262
写真5	平成18年度不條地区船着き場跡11区 東 石組検出状況(北から) ……255	写真27	平成25年度川原畑地区更新統自然木 出土状況 ……………262
写真6	平成18年度池田大原地区 1号濠完 掘状況 ……………255	写真28	平成26年度原ノ久保地区1号土坑断 面 ……………263
写真7	平成20年度原地区 箱式石棺墓検出 状況 ……………256	写真29	平成26年度原ノ久保地区2号土坑 ……………263
写真8	平成20年度原地区 箱式石棺墓完掘 状況 ……………256	写真30	平成18年度不條地区 SX2出土遺 物 ……………263
写真9	平成20年度原地区 11号甕棺墓検出 状況 ……………256	写真31	平成18年度池田大原地区 1号濠下 層出土遺物 ……………264
写真10	平成20年度原地区 13号甕棺墓検出 状況 ……………257	写真32	未報告黒色長頸壺(115) ……264
写真11	平成20年度石田高原地区 箱式石棺 墓完掘状況 ……………257	写真33	未報告黒色長頸壺(115)細部 ……264
写真12	平成21年度八反地区 土橋検出状況 ……………257	写真34	勒島8号住居址Ⅳ層出土三角形粘土 帯甕 ……………265
写真13	平成22年度八反地区 2号濠と竹検 出状況 ……………258	写真35	原の辻遺跡石田高原環濠出土「擬弥 生土器」甕 ……………265
写真14	平成22年度八反地区 竹検出状況 ……………258	写真36	原の辻遺跡不條1号旧河道出土城ノ 越式甕 ……………265
写真15	平成22年度原地区 小児甕棺検出状 況 ……………258		

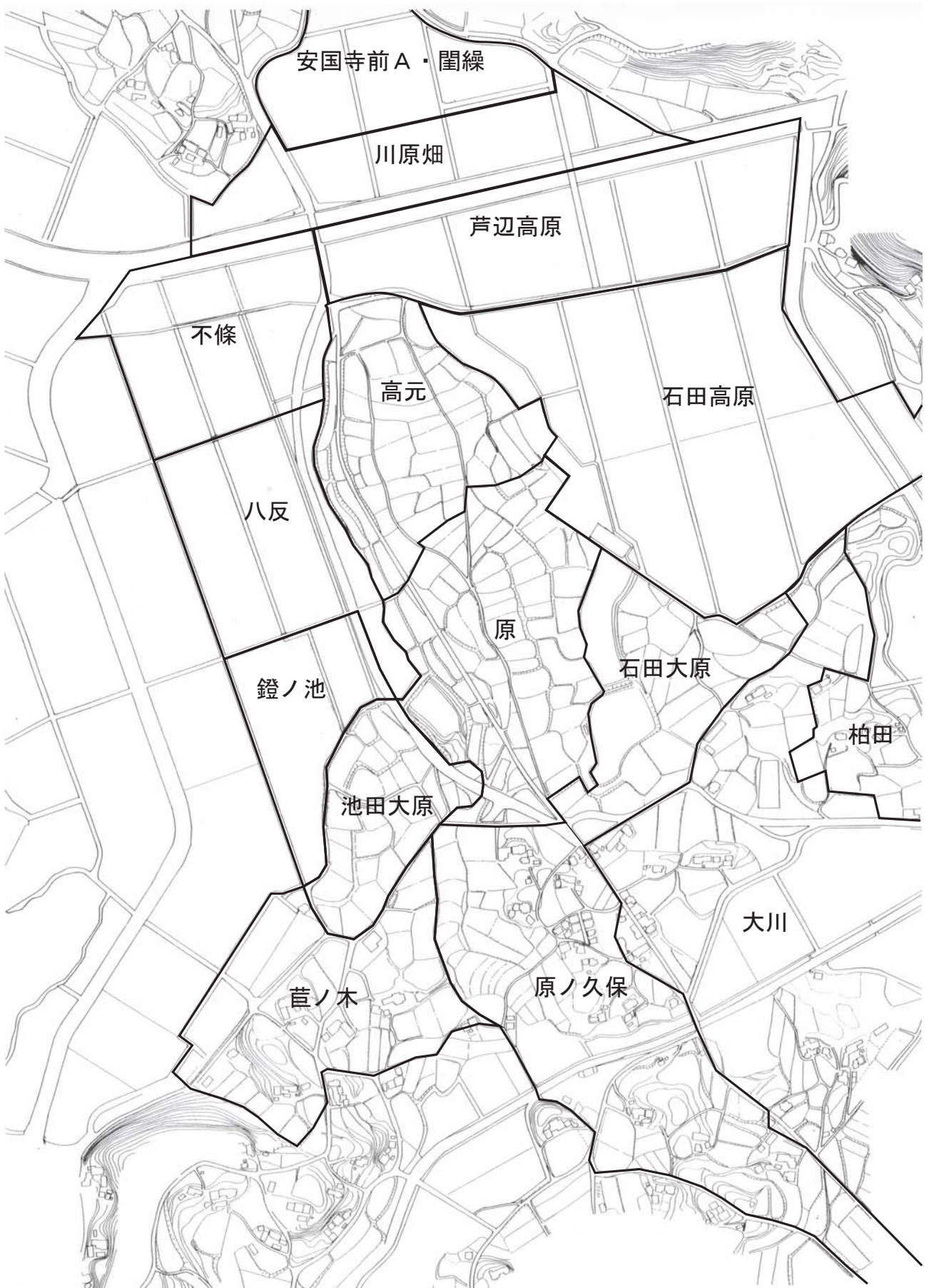


図1 原の辻遺跡調査区地区割

I. 平成17年度～平成26年度の調査経過

1. 平成17年度の調査

(1) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第33集
- 調査期間 平成17年5月9日～平成17年12月27日
- 調査場所 不條地区、船着き場跡、高元地区

不條地区の調査では、弥生時代中期前半以降の河川の流路とその変化、護岸遺構の周辺における集石遺構や溝状の落ち込みなどが確認された。1号河川跡は弥生時代後期以降水田造成のために埋められていることが明確となり、埋土中には祭祀関係の土器が集中することが判明した。船着き場跡の調査では、船着き場が周囲に水路をめぐらす島状の地形であったことが判明し、船着き場が繋がる河川の幅や船着き場の南北軸の範囲などが確認された。高元地区の調査では、甕棺墓、溝が確認された。溝が埋められて弥生時代後期の墓域がつくり出されたものとみられている。

(2) 原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査

- 報告書名 彦岐市文化財調査報告書第9集（原地区、高元地区、大川地区）
彦岐市文化財調査報告書第12集（大川地区）
- 調査期間 平成17年7月1日～平成18年1月31日
- 調査場所 原地区、高元地区、大川地区

原地区の調査では、竪穴建物跡、土坑、甕棺墓などの遺構が確認された。平成16年度調査で検出された遺構との繋がりが指摘されている。遺物は弥生土器、有茎式の銅鏃、ガラス製勾玉などが出土した。高元地区の調査では、竪穴建物跡、土坑、土器溜り、ピットなどの遺構が確認された。土器溜り遺構からは、弥生時代後期中葉から後葉の遺物が集中して出土した。大川地区の調査では、掘立柱建物、石棺墓・甕棺墓・土壙墓などの墓坑、環状遺構などが確認された。遺物としては、丹塗りを施した高坏や壺といった祭祀系土器、板状鉄斧などの出土がみられた。

(3) 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第34集
- 調査期間 平成17年11月10日～平成18年3月10日
- 調査場所 安国寺A地区、原ノ久保地区

安国寺A地区の調査では、溝状遺構と河道跡が確認された。遺物は溝状遺構ではほとんどみられず、河道跡では土器片・石器片などが出土した。原ノ久保地区の調査では、溝状遺構と河川跡が確認された。遺物は、耕作土層および包含層から弥生土器片、陶磁器、石器片などが出土した。

2. 平成18年度の調査

(1) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第36集
- 調査期間 平成18年6月1日～平成18年12月26日
- 調査場所 石田高原地区、石田大原地区、船着き場跡

石田高原地区の調査では、溝状遺構、道路状遺構などが確認された。この調査で検出された溝状遺構と平成5・14・16年度調査で検出された溝状遺構との繋がりが判明した。石田大原地区の調査では、溝状遺構、柱穴（ピット状遺構）、不定形土坑などの遺構が確認された。船着き場跡の調査では、船着き場西側縁辺部で石組遺構が検出され、船着き場跡の南側でも船着き場に付随する石組遺構が確認された。

(2) 原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査

- 報告書名 壱岐市文化財調査報告書第10集
- 調査期間 平成18年6月12日～平成19年1月15日
- 調査場所 高元地区

前年度検出された土器溜り遺構付近を含む調査が実施され、土器溜り遺構の西端部分のほか、竪穴建物跡、溝状遺構なども確認された。遺物としては、多量の弥生土器に加え、石器、鉄器、骨角器(紡錘車)、ガラス玉、銅鏃・銅銭などの出土がみられた。

(3) 市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査

- 報告書名 壱岐市文化財調査報告書第11集
- 調査期間 平成18年7月4日～平成18年8月4日
- 調査場所 原ノ久保地区

個人倉庫の建設に伴い原ノ久保地区において調査が行われた。調査では遺構は確認されず、遺物は近世および近代以降と考えられる陶磁器が数点出土した。

(4) 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第37集
- 調査期間 平成18年12月11日～平成19年3月20日
- 調査場所 不條地区、池田大原地区、原ノ久保地区

不條地区の調査では、濠、溝状遺構、土坑などの遺構が確認された。遺物としては、弥生土器、無文土器などの出土がみられた。池田大原地区の調査では、濠、ピット群などの遺構が確認された。原ノ久保地区の調査では、平成16年度調査で検出された溝状遺構に繋がると考えられる溝が確認された。この遺構が西側へ延びる可能性が指摘されている。

3. 平成19年度の調査

(1) 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第39集
- 調査期間 平成19年4月16日～平成20年1月31日
- 調査場所 閩繰地区、八反地区、池田大原・原地区

閩繰地区の調査では河川跡が確認された。これは平成7年度調査における大溝や平成17年度調査における河道跡と一連のものとの指摘がなされている。八反地区の調査では、溝状遺構、ピットなどの遺構が確認された。溝状遺構からは貨泉2枚と朝鮮半島系無文土器、弥生土器片などの遺物が出土した。池田大原・原地区の調査では、ピットなどの遺構、黒曜石製剝片などの遺物が確認された。

(2) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第38集
- 調査期間 平成19年6月25日～平成19年12月17日
- 調査場所 石田高原地区、原地区、不條地区（船着き場跡）

石田高原地区の調査では、平成5年度調査で検出された1号溝につながる濠の状況が詳しく確認された。その他、水場と考えられる落ち込み、ピット群などの遺構も確認された。遺物としては、濠や落ち込みから多くの弥生土器が出土した。原地区の調査では、濠、ピット群が確認された。不條地区（船着き場跡）の調査では、船着き場西突堤の先端部分、船着き場の西側を流れる河川に沿った環濠、船着き場南側河川中の石積み分水遺構などが確認された。

(3) 原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査

- 報告書名 壱岐市文化財調査報告書第12集
- 調査期間 平成19年7月3日～平成20年2月20日
- 調査場所 高元地区、石田大原地区

高元地区では、前年度までの調査で判明した土器溜り遺構とその周辺部の調査が進められた。遺構としては、竪穴建物跡、溝状遺構、柱穴群などが確認された。遺物は弥生土器、須恵器、土師器、無文土器、三韓土器、楽浪土器など土器類に加え、石器、鉄製品などが出土した。石田大原地区の調査では、甕棺墓、溝状遺構などが確認され、出土した遺物は弥生土器など非常に少量であった。

4. 平成20年度の調査

(1) 主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第39集
- 調査期間 平成20年4月14日～平成20年7月9日
- 調査場所 原地区

この調査では、土壙墓、甕棺墓、箱式石棺墓の墳墓遺構が確認された。併せて濠、土坑、ピットなどの遺構も確認された。遺物としては、甕棺墓等を構成する土器類に加え、ナイフ形石器、鉄剣、玉類などの出土がみられた。

(2) 原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査

- 報告書名 壱岐市文化財調査報告書第14集
- 調査期間 平成20年7月14日～平成21年2月20日
- 調査場所 高元地区、原地区、石田大原地区

高元地区の調査では、住居跡、溝状遺構、土坑、ピット群などの遺構が確認された。遺物としては、弥生土器、土師器、三韓土器、楽浪土器などの土器類、石器、青銅製の銅鏃や鉄鎌と考えられる鉄製品、ガラス製玉などが出土した。原地区の調査では、土坑、ピット、溝状遺構、落ち込み状遺構が確認された。遺物としては土器類（弥生土器・土師器・韓半島系土器）を中心に、石器類・金属器類・骨角器類・玉類の出土がみられた。石田大原地区の調査では、甕棺墓、土壙墓、土坑、ピットなどの遺構が確認された。遺物としては、小児用の甕棺と推定される壺など土器類に加え、「昭明」銘帯鏡（銅鏡）の破片が出土した。

(3) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 原の辻調査事務所調査報告書第40集
- 調査期間 平成20年8月25日～平成20年12月16日
- 調査場所 石田高原地区、八反地区

石田高原地区の調査では、平成19年度に検出されたピット群の続きが検出された。環濠、落ち込み、箱式石棺墓などの遺構も確認された。遺物としては、弥生土器、土師器、三韓系瓦質土器、陶質土器、敲石、砥石、鉄鎌、ガラス管玉などの出土がみられた。八反地区の調査では、河川跡、溝状遺構、落ち込みが確認された。また、杭4本も確認されたが、原の辻遺跡が本格的な集落として形成される以前の年代値を示したことが記されている。

5. 平成21年度の調査

(1) 原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査

- 報告書名 老岐市文化財調査報告書第16集
- 調査期間 平成21年7月30日～平成22年3月19日
- 調査場所 高元地区、原地区

高元地区の調査では、住居跡、土坑、ピット群、溝状遺構などが確認された。遺物は突帯下に線刻画が施された弥生土器などが出土した。原地区の調査では、遺構は環濠、土坑、ピットが確認された。この環濠については、平成7年度調査で検出された溝状遺構・落ち込み状遺構と一連の遺構であることが判明した。遺物としては、弥生土器・土師器・灰白色軟質土器など土器類が確認されたが、出土量としては丘陵部の居住地と比較すると極端に少ないことが指摘されている。

(2) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 調査期間 平成21年10月1日～平成21年12月24日
- 調査場所 八反地区

この地区の調査では環濠を埋め戻して作られた土橋が確認された。土橋の覆土中から1個体分の土器が出土したことなどから祭祀的な行いがあったことが指摘されている。その他、溝、河川、落ち込みなどの遺構も確認された。

6. 平成22年度の調査

(1) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第1集
- 調査期間 平成22年7月1日～平成22年12月6日
- 調査場所 八反地区、原地区

八反地区の調査では、底に竹が不規則に突き刺された濠が確認された。年代は弥生時代後期前葉とみられ、3㎡の調査区域から径1cmほどの竹が約220本検出された。また、弥生時代中期後半～弥生時代後期初頭の河川跡も確認された。原地区の調査では、旧石器時代の包含層から遺物（石器）が検出されたほか、弥生時代後期の住居跡、小児甕棺墓、濠、ピットなどの遺構が確認された。

7. 平成23年度の調査

(1) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第5集
- 調査期間 平成23年5月26日～同7月29日、平成23年10月7日～同12月26日
- 調査場所 柏田地区、原ノ久保地区、不條地区

柏田地区の調査では、原位置を保持していないと思われる旧石器時代の石器が出土した。遺構については確認されなかった。原ノ久保地区の調査では、近現代のものと思われる溝などの遺構が確認された。遺物は旧石器時代の石器などの出土がみられた。不條地区の調査では、長さ約4.8m、幅約1.2mの石列をはじめ、50cm程度の大きな礫を配置した礫群、溝、ピット、河川、落ち込みが確認された。

(2) 側面の自然崩落による復旧前調査

- 報告書名 壱岐市文化財調査報告書第19集
- 調査期間 平成23年9月22日～平成23年10月7日
- 調査場所 原地区

この調査では2条の溝状遺構が検出された。これらは、原の辻遺跡調査事務所の平成7年度調査で確認された2条の溝状遺構の延長線上にあたり、両者が繋がる可能性が指摘されている。また遺物としては、弥生土器、石器などが確認された。

(3) 原の辻遺跡実態解明調査

- 報告書名 壱岐市文化財調査報告書第19集
- 調査期間 平成23年10月17日～平成23年12月22日
- 調査場所 原地区

この調査では、丘陵を横断する溝跡、隅丸長方形竪穴遺構、多数のピットが確認された。遺物は弥生土器、尖頭器、石鏃、管玉などが出土した。

8. 平成24年度の調査

(1) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第9集
- 調査期間 平成24年11月1日～平成25年1月18日
- 調査場所 川原畑地区

この調査では、弥生時代中期後葉のものと思われる多数の土坑・ピット群、弥生時代の河川跡などが確認された。河川跡出土遺物のうち4a区・4b区で確認された土器については、人為的に形成されている点、丹塗土器が多く認められる点などから、弥生時代中期の河川に対する祭祀行為の可能性が指摘されている。

9. 平成25年度の調査

(1) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

- 報告書名 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第12集

○調査期間 平成25年10月17日～平成25年12月27日

○調査場所 川原畑地区

この調査では、竪穴建物跡と、建物跡中央では炉跡とみられる遺構がそれぞれ確認された。炉跡では、支石として用いられたと推定される被熱痕跡のある石2点と、供献されたとみられる底部を打ち欠いた壺が出土した。一方、多数の土坑・ピット群が確認され、それを囲むような弥生時代の自然河川跡の状況が明らかとなった。遺物は須玖Ⅱ式を中心とする時期の弥生時代の土器が出土したが、韓半島・中国大陸系といった地域からの搬入土器の出土はみられなかった。

10. 平成26年度の調査

(1) 原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査

○報告書名 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第14集

○調査期間 平成26年10月14日～平成27年1月8日

○調査場所 原ノ久保地区

この調査では、旧石器時代の遺物や遺構が確認された一方、弥生時代の遺構や包含層は確認されなかった。発見された遺物のほとんどが旧石器時代の黒曜石製石器で、主なものとしては、ナイフ形石器、台形石器、石核、細石刃核があげられる。遺構は旧石器時代の土坑が2基確認された。

表 1 平成17年度～平成26年度の調査区域地図との対応

調査年度		調査名	報告書番号	調査場所	カラー図1中番号
H17	(1)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NH33	不條、船着き場跡、高元	1
	(2)	原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査	IS 9 IS12	原、高元、大川	2
	(3)	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査	NH34	安国寺A、原ノ久保	3
H18	(1)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NH36	石田高原、石田大原、船着き場跡	4
	(2)	原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査	IS10	高元	5
	(3)	市内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査	IS11	原ノ久保	6
	(4)	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査	NH37	不條、池田大原、原ノ久保	7
H19	(1)	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査	NH39	閨繰、八反、池田大原・原	8
	(2)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NH38	石田高原、原、不條（船着き場跡）	9
	(3)	原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査	IS12	高元、石田大原	10
H20	(1)	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査	NH39	原	11
	(2)	原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査	IS14	高元、原、石田大原	12
	(3)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NH40	石田高原、八反	13
H21	(1)	原の辻遺跡史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査	IS16	高元、原	14
	(2)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NM 1	八反	15
H22	(1)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NM 1	八反、原	16
H23	(1)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NM 5	柏田、原ノ久保、不條	17
	(2)	側面の自然崩落による復旧前調査	IS19	原	18
	(3)	原の辻遺跡実態解明調査	IS19	原	19
H24	(1)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NM 9	川原畑	20
H25	(1)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NM12	川原畑	21
H26	(1)	原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査	NM14	原ノ久保	22

Ⅱ. 弥生時代の遺構

1. 丘陵上の遺構

《はじめに》

本報告は、総集編Ⅰ刊行後の平成16年度より平成26年度までの期間に新たに丘陵上で実施した発掘調査で検出された遺構や出土した遺物についてまとめを行う。

なお、誌面の都合上、各調査区の遺構配置図、個別実測図及び土層断面図等については、各文末に【参考報告書】を掲載しているので、刊行報告書を参照していただきたい。

■遺構確認調査〔平成16年度〕

平成16年度に長崎県教育委員会が丘陵上の旧地形を確認する試掘調査を実施した。

丘陵尾根上に幅4メートル×長さ220メートルのAトレンチからIトレンチの9区の試掘トレンチを設定し、旧地形と丘陵全体に広がる遺構状況を確認した。

旧地形の確認成果としては、Fトレンチで丘陵上の一部に入り込んだ凹地が検出され、凹地に堆積した遺物包含層から、弥生時代中期から弥生時代後期にかけての遺物が確認された。この調査成果から、丘陵上に入り込んだ凹地全体に土器溜り遺構が広がっていることが新たに判明した。

遺構の確認成果としては、北側の丘陵先端部に近いトレンチでは弥生時代中期～弥生時代後期の遺構や遺物が、Eトレンチで弥生時代前期後葉の遺物が、南側の祭儀場跡に近いトレンチでは弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構や遺物が確認された。

【参考報告書】

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集「原の辻遺跡」2005 中尾篤志・溝上貴稔編

■遺構確認調査〔平成17年度～平成20年度〕

平成16年度の長崎県教育委員会の試掘調査の成果を受けて、平成17年度から4ヵ年計画で壱岐市教育委員会が土器溜り遺構及び丘陵上の遺構確認調査を実施した。

《高元Ⅲ区・高元Ⅳ区の調査成果》

長崎県教育委員会が設定したFトレンチの隣接部に土器溜り遺構の広がりを確認する目的で、調査区〔高元Ⅲ-5区～Ⅲ-8区・高元Ⅳ-6区・Ⅳ-7区〕を設定した。

遺構確認の結果、Fトレンチの東側に設定した高元Ⅲ-6区及び高元Ⅳ-6区に遺物が集中し、凹地の地形に縁に沿う形で遺物が廃棄されているのが確認された。土器溜り遺構は、凹地の先端部付近に南北30メートル、東西40メートルの範囲に広がっており、その規模から、長い期間、継続的に使用されていたことが推測できる。50センチの幅で遺構内部を確認するための調査坑を設定し、詳細確認を実施した結果、遺構検出面から土器溜り遺構の床面まで深いところで70センチから80センチの遺物包含層が堆積しており、遺物包含層からは積み重なるように廃棄された遺物が確認された。

調査坑から発見された遺物包含層の出土遺物は、土器をはじめ、石器、青銅器や鉄器などの金属製品、動物の骨や骨製品など多種にわたる。出土遺物は、完形品は少なく、ほとんどは一部欠損もしくは全損した破片資料であるが、特殊筒形器台や暗文を施す丹塗り土器片などの祭祀系土器も廃棄遺物に含まれていることから、日常生活で不要になった土器だけでなく、祭器として使用した土器も同じ場所に廃棄されていたことがみえてくる。発見された土器から、弥生時代後期中葉～後期後葉を中心に使用された土器溜り遺構であることが判明した。

《高元Ⅴ区の調査成果》

土器溜り遺構の西側にあたる丘陵尾根上の遺構確認を行う目的で、高元Ⅴ区を設定し、調査を実施した。

遺構確認の結果、調査区の中央付近で居住エリアを取り囲む区画溝〔SD-01〕が確認された。検出段階で幅60センチの区画溝が調査区の東側側壁から西側に向かって延び、調査区の西側側壁の前で緩やかに湾曲し、南側へと方向を変化させる。区画溝の内側にあたる部分からは竪穴建物跡や土坑群が検出され、区画溝の外側にあたる部分からは円形土坑〔SK-05〕を取り囲む4本の柱穴、さらにその4本の柱穴を取り囲む溝状遺構〔SD-03〕が検出された。土坑〔SK-05〕の遺構内部の詳細調査を行ったが、埋土内や床面に熱を受けて変色した痕跡や埋土内から遺構の用途を特定するような遺物は発見されなかったため、用途については特定できなかったものの、土坑に覆屋が付随することや覆屋を取り囲むように周溝状遺構が掘り巡らされていることなどみても、同調査区で検出された他の土坑群とは異なる何らかの意図があったと思われる。

《高元Ⅵ区の調査成果》

土器溜り遺構の西側にあたる丘陵尾根上の遺構確認を行う目的で、高元Ⅵ区を設定し、調査を実施した。

遺構確認の結果、高元Ⅵ-1区から東西方向に丘陵を横断する区画溝〔SD-04〕が、高元Ⅵ-2区から南北方向に丘陵を縦断する区画溝〔SD-05〕が検出され、時期によって方向の異なる区画溝が掘られていたことが判明した。また、調査区内からは、竪穴建物や集石状遺構が検出されており、遺構配置関係から区画溝〔SD-05〕は、居住エリアを区画する溝の役割があったものと想定される。50センチの幅で遺構内部の調査坑を設定し、詳細確認を実施した結果、区画溝は断面が逆台形状を呈し、埋土内から出土した遺物から、弥生時代後期段階に使用され埋没したものと思われる。区画溝と並行関係にある集石状遺構〔SX-02〕は不整楕円形状を呈し、遺構の中心部分に石が集中してみられ、玄武岩、安山岩、砂岩、軽石等の自然石だけでなく、クド石、敲石、凹石、石皿などの日常生活使用品も廃棄されていることから、石器生産もしくは石器関連の遺構である可能性が考えられる。

《高元Ⅶ区の調査成果》

土器溜り遺構の西側にあたる丘陵尾根上の遺構確認を行う目的で、高元Ⅶ区を設定し、調査を実施した。

遺構確認の結果、高元Ⅶ-2区から大型竪穴建物跡〔SC-02〕と大型不整土坑〔SK〕が、高元Ⅶ-5区から炭化物や焼土塊を含む円形土坑〔SK〕が検出された。

大型竪穴建物は、原の辻遺跡では祭儀場の北側の丘陵尾根上で確認されており、長軸8メートル、短軸6メートル、床面積48平方メートルの規模を誇る。一辺が4メートル前後、床面積16平方メートルの遺跡内で検出された平均的な弥生時代後期の竪穴建物跡と規模を比べると約3倍の規模をもつ。本調査において検出された大型竪穴建物跡は、南側の立ち上がりが調査区にのびるため、全体規模は不明であるが、遺構検出段階で、長軸方向7 + aメートル、短軸方向5メートルの規模を測る。20センチの幅で遺構内部の調査坑を設定し、詳細確認を実施した結果、北側の立ち上がりから約2メートルの場所で支柱穴が確認された。これまでに遺跡内で検出されている大型竪穴建物跡と同じく2本の支柱で屋根を支える構造であることが詳細調査によって判明した。

《高元Ⅷ区の調査成果》

土器溜り遺構の東側にあたる丘陵凹地縁部の遺構確認を行う目的で、高元Ⅷ区を設定し、調査を実施した。

遺構確認の結果、高元Ⅷ-1区から貯蔵穴〔SK-01〕が、高元Ⅷ-2区から溝跡〔SD-01〕が、高元Ⅷ-5区から集石状遺構〔SX〕が検出された。原の辻遺跡では貯蔵穴の検出事例は少なく、これまでに検出された貯蔵穴は10基にも満たない。ほとんどが後世の削平によって上部構造が消失しているが、丘陵先端部で検出された貯蔵穴は残存状態が良く、出入り口がフラスコ状に窄まる形状を留めた状態で検出されている。本調査区において検出された貯蔵穴も削平によって上部構造は消失しているが、まっすぐに立ち上がる側壁と平坦な床面が貯蔵穴の痕跡を留めている。集石状遺構は、高元Ⅵ区で検出された集石状遺構と同じく、人頭大の石が積み重なるように集められた状態で検出され、ほとんどは自然石であるものの、凹石や敲石などの石製品も含まれる。

《原XⅤ区の調査成果》

土器溜り遺構の東側にあたる丘陵凹地縁部の遺構確認を行う目的で、原XⅤ区を設定し、調査を実施した。

遺構確認の結果、弥生時代中期から古墳時代初頭段階にかけての土器溜り遺構、竪穴建物跡、甕棺墓が検出された。原XⅤ-F区で検出された竪穴建物跡〔SC-03〕は、長軸4.2メートル、短軸3.7メートルの規模で、やや東西方向に長い長方形を呈す。竪穴建物の規模としては平均的な大きさであるが、住居跡の南東隅から炭化物や焼土塊が集中するカマド状遺構が確認されたため、詳細調査を実施した。詳細調査の結果、竪穴建物の縁に沿う形で設置され、煙道はトンネル状に掘られ、住居外へ煙を排出する構造となっていることが判明した。また、カマドの袖部の基礎及び燃焼部はつくられた当時のまま原位置を保ち、袖部の基礎は加熱を受けて、赤茶褐色に変色した焼土塊となっており、硬質に変形しているのが特徴である。幅40センチの燃焼部はさらに高温の熱を受けているため、明黄橙色に変色した焼土塊となっており、燃焼部の上部には赤茶褐色の焼土塊が2次堆積していることから、本来ドーム状に覆うカマドの天井部が住居廃絶時に取り壊された一部が堆積したものと推測できる。古墳時代以降にみられる住居跡に伴うカマドの機能にまでは至らないものの、簡易カマドとして住居内に設置され、オンドル的な用途としてカマド状遺構が使用された可能性が想定される。

土器溜り遺構は、大きく弥生時代中期中葉～中期末にかけてと弥生時代後期後葉～古墳時代初頭にかけての2時期に区分される。出土遺物は、高元Ⅲ区及びⅣ区で検出された土器溜り遺構と同様に完形品は少なく、ほとんどは一部欠損もしくは全損した破片資料であるが、日常生活で不要になった土器だけでなく、祭器として使用した土器も同じ場所に廃棄している。土器では、瓢形土器や周防・豊後系の特徴を持つ壺が出土しており、石製品や金属製品も出土しているが点数はわずかである。

また、弥生時代中期段階の土器溜り遺構を掘り込んで弥生時代後期後葉段階の合口式甕棺墓がつくられている。原の辻遺跡では基本的に弥生時代中期以降、環濠内を居住域、環濠外に墓域と明確にエリアを区分する傾向がみられる。弥生時代後期段階になると、基本的には環濠外の墓域に墓坑がつくられているが、環濠内の居住域に単独で存在する甕棺墓が丘陵の東斜面を中心に数基検出されている。使用されている甕棺の大きさから小児の埋葬に使用された可能性が推測されるが、棺内や墓坑内から人骨や副葬品は検出されておらず、被葬者の性別や年齢、地位や身分を示す痕跡は確認されていない。

《原XVI区の調査成果》

土器溜り遺構の東側にあたる丘陵凹地縁部の遺構確認を行う目的で、原XVI区を設定し、調査を実施した。

遺構確認の結果、同じ場所に何度も建て替えられた竪穴建物跡が検出された。中でも竪穴建物跡(SC-07)は南側の立ち上がりが調査区にのびるため、全体規模は不明であるが、遺構検出段階で長軸方向8メートル、短軸方向5+aメートルの規模を測る。長軸方向に据えられた2本の支柱で屋根を支える構造になっており、床面には立ち上がりに沿う形でベット状遺構が周りを取り囲む。

【参考報告書】

- 岐阜市文化財調査報告書第1集「国特別史跡 原の辻遺跡」2005 松見 裕二編
- 岐阜市文化財調査報告書第9集「国特別史跡 原の辻遺跡」2006 田中聡一・山口優・松見裕二編
- 岐阜市文化財調査報告書第10集「国特別史跡 原の辻遺跡」2007 田中聡一・山口優・松見裕二編
- 岐阜市文化財調査報告書第12集「国特別史跡 原の辻遺跡」2008 田中聡一・山口優・松見裕二編
- 岐阜市文化財調査報告書第14集「国特別史跡 原の辻遺跡」2009 田中聡一・山口優・松見裕二編

《おわりに》

原の辻遺跡の丘陵上のほとんどのエリアは国特別史跡の指定を受けており、第1次遺跡整備が完了した平成21年度以降は丘陵上の発掘調査を行っていない。今回報告した調査成果も遺構検出面での遺構確認が調査の目的であり、遺構内の調査は必要最小限に留め、幅20～50センチの調査坑を設定し、遺構内部の詳細確認を行っていることから、出土遺物については包含層出土のものを除くと遺構検出面上で確認されたものと詳細確認で設定した調査坑内から出土したものに限られる。

土器溜り遺構の調査では、丘陵に入り込んだ凹地部分に土器溜り遺構が数か所にグルーピングされ点在し、1つのグルーピングとしては直径20～30メートルの範囲で構成され、土器溜り遺構の縁部に遺物が集中して廃棄されているのが特徴である。主な使用時期としては弥生時代中期後葉～中期末、弥生時代後期中葉から後期後葉の2時期に大区分できるが、古墳時代初頭まで使用される土器溜り遺構も中には存在している。

遺構確認の調査では、祭儀場の北側エリアにも居住域が広がっていることが新たに判明し、丘陵上に広がる居住域の全貌を解明する上で貴重な成果を得られた。特に祭儀場周辺で検出される大型竪穴建物の存在は一般的な竪穴建物跡とは規模も大きく異なり、用途についても日常の居住空間とは異なる用途があったと推測できる。また、祭儀場の北側や南側で検出された丘陵を横断する区画溝が集落を取り囲む環濠内に掘り巡らされていることも新たに判明し、丘陵上での居住空間の棲み分けエリアを特定する1つの判断基準として捉えることができる。

《今後の課題・テーマ》

今後の丘陵上の発掘調査の課題として、第2次整備対象エリア〔丘陵先端部の未調査地区〕の遺構確認を行い、丘陵全体に広がる居住域の様相を解明することが必要不可欠である。

これまでに実施された丘陵先端部の試掘調査では、弥生時代中期初頭～中期前葉にかけての円形竪穴建物跡や貯蔵穴、弥生時代中期前葉段階の甕棺墓などが確認されており、まだ解明されていない弥生時代前期後葉から中期初頭にかけての居住域の実態解明が期待されることから、今後も継続的に丘陵上の遺構確認を行い、原の辻集落の全貌を解明することが求められている。



図2 丘陵上調査地点位置図 (1/1000)

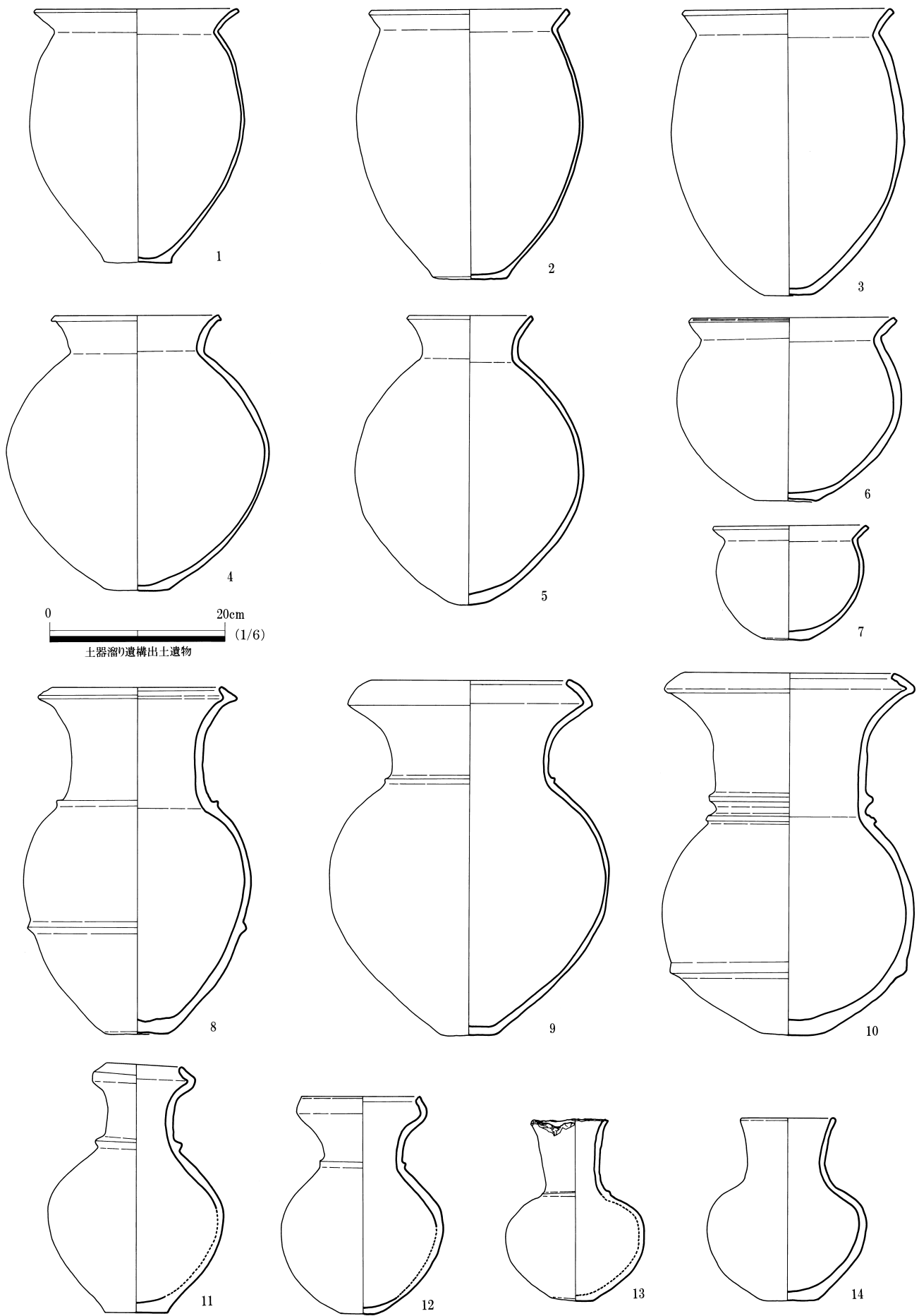


图3 土器溜り遺構出土遺物 (1/6)

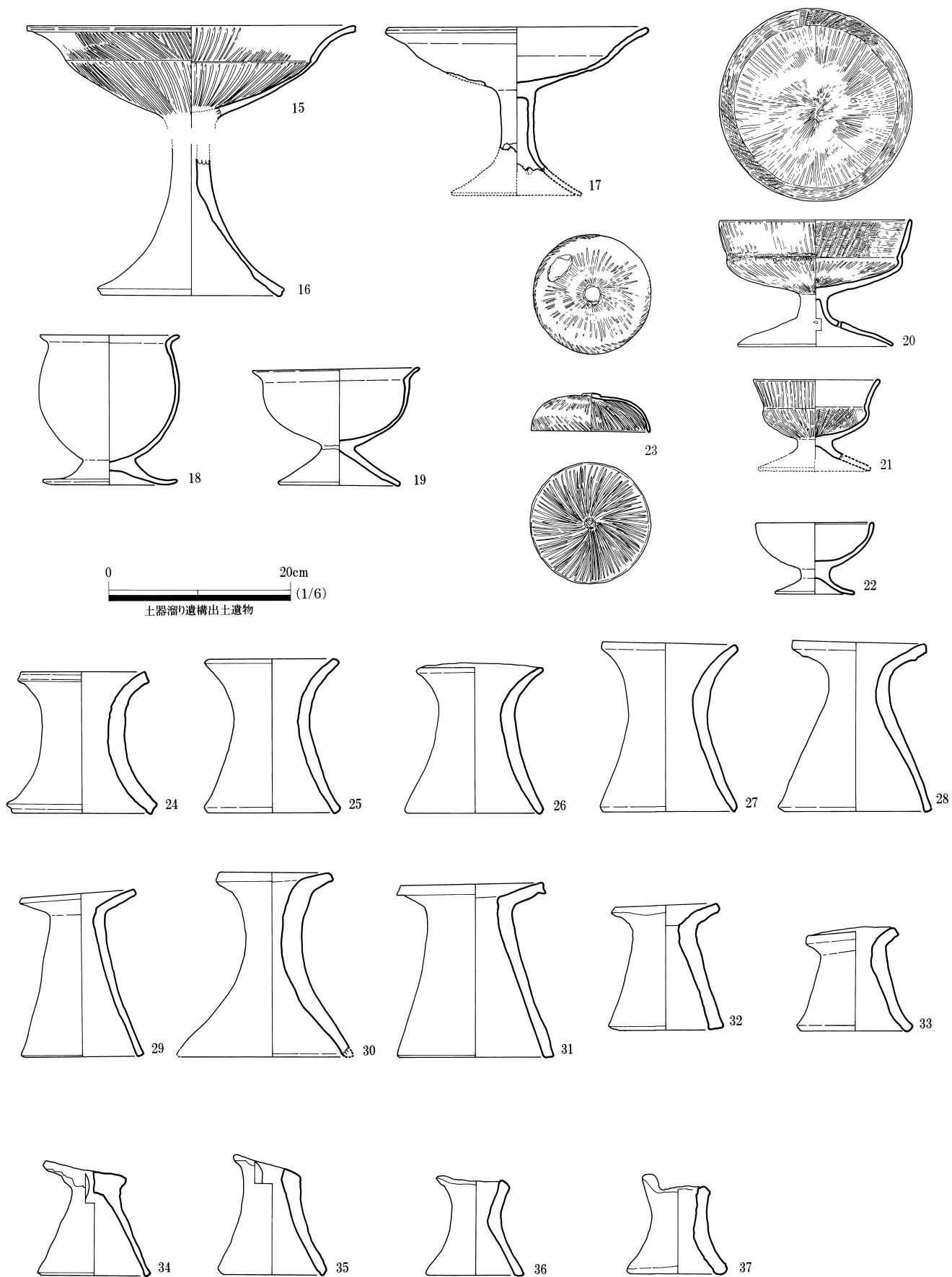


图 4 土器溜り遺構出土遺物 (1/6)

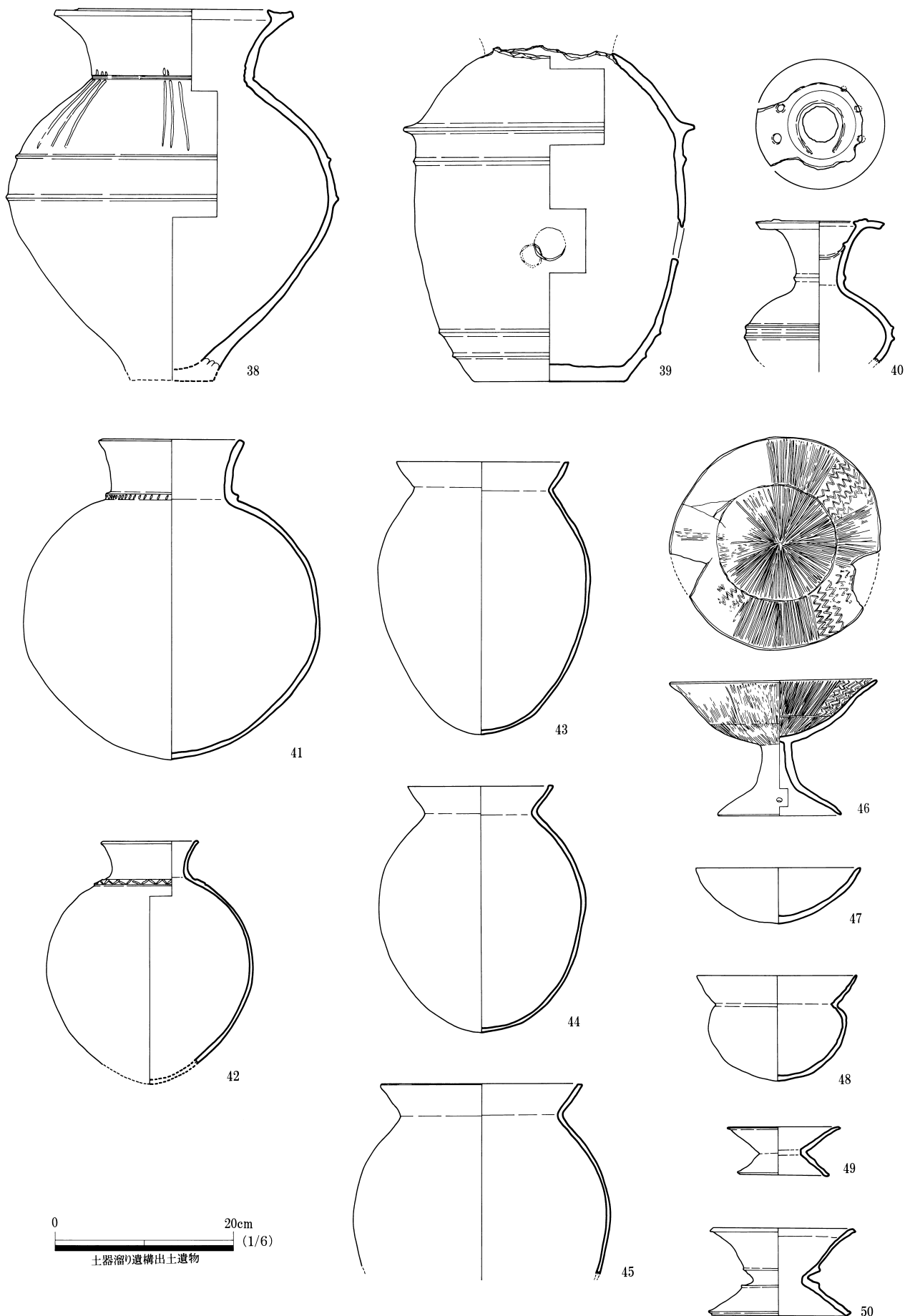


图5 土器溜り遺構出土遺物 (1/6)

表2 掲載資料目録（土器溜り遺構出土遺物）

掲載資料No.	種別	出土遺跡名	掲載資料名	資料ID	掲載報告書
1	土器溜り 遺構出土	原の辻遺跡	甕	IK010040006	沓崎市文化財調査報告書第10集
2		原の辻遺跡	甕	IK010039001	沓崎市文化財調査報告書第10集
3		原の辻遺跡	甕	IK010040005	沓崎市文化財調査報告書第10集
4		原の辻遺跡	甕	IK010051071	沓崎市文化財調査報告書第10集
5		原の辻遺跡	甕	IK010051072	沓崎市文化財調査報告書第10集
6		原の辻遺跡	甕	IK010046053	沓崎市文化財調査報告書第10集
7		原の辻遺跡	甕	IK010046058	沓崎市文化財調査報告書第10集
8		原の辻遺跡	壺	IK010049066	沓崎市文化財調査報告書第10集
9		原の辻遺跡	壺	IK010048062	沓崎市文化財調査報告書第10集
10		原の辻遺跡	壺	IK010048061	沓崎市文化財調査報告書第10集
11		原の辻遺跡	壺	IK010049064	沓崎市文化財調査報告書第10集
12		原の辻遺跡	壺	IK010049065	沓崎市文化財調査報告書第10集
13		原の辻遺跡	長頸壺	IK010054093	沓崎市文化財調査報告書第10集
14		原の辻遺跡	長頸壺	IK010054091	沓崎市文化財調査報告書第10集
15		原の辻遺跡	高坏	IK010063143	沓崎市文化財調査報告書第10集
16		原の辻遺跡	高坏	IK010063144	沓崎市文化財調査報告書第10集
17		原の辻遺跡	高坏	IK010063145	沓崎市文化財調査報告書第10集
18		原の辻遺跡	脚付甕	IK010061127	沓崎市文化財調査報告書第10集
19		原の辻遺跡	脚付鉢	IK010058120	沓崎市文化財調査報告書第10集
20		原の辻遺跡	脚付鉢	IK010061123	沓崎市文化財調査報告書第10集
21		原の辻遺跡	脚付鉢	IK010058122	沓崎市文化財調査報告書第10集
22		原の辻遺跡	脚付鉢	IK010061128	沓崎市文化財調査報告書第10集
23		原の辻遺跡	摘付蓋	IK010058121	沓崎市文化財調査報告書第10集
24		原の辻遺跡	器台	IK010064152	沓崎市文化財調査報告書第10集
25		原の辻遺跡	器台	IK010064150	沓崎市文化財調査報告書第10集
26		原の辻遺跡	器台	IK010064157	沓崎市文化財調査報告書第10集
27		原の辻遺跡	器台	IK010064154	沓崎市文化財調査報告書第10集
28		原の辻遺跡	器台	IK010064155	沓崎市文化財調査報告書第10集
29		原の辻遺跡	器台	IK010065161	沓崎市文化財調査報告書第10集
30		原の辻遺跡	器台	IK010065160	沓崎市文化財調査報告書第10集
31		原の辻遺跡	器台	IK010065164	沓崎市文化財調査報告書第10集
32		原の辻遺跡	器台	IK010065166	沓崎市文化財調査報告書第10集
33		原の辻遺跡	器台	IK010065167	沓崎市文化財調査報告書第10集
34		原の辻遺跡	土製支脚	IK010066174	沓崎市文化財調査報告書第10集
35		原の辻遺跡	土製支脚	IK010066173	沓崎市文化財調査報告書第10集
36		原の辻遺跡	土製支脚	IK010066175	沓崎市文化財調査報告書第10集
37		原の辻遺跡	土製支脚	IK010066172	沓崎市文化財調査報告書第10集
38		原の辻遺跡	壺	IK014076103	沓崎市文化財調査報告書第14集
39		原の辻遺跡	樽形土器	IK014079129	沓崎市文化財調査報告書第14集
40		原の辻遺跡	壺	IK014105256	沓崎市文化財調査報告書第14集
41		原の辻遺跡	直口壺	IK014064015	沓崎市文化財調査報告書第14集
42		原の辻遺跡	直口壺	IK014097189	沓崎市文化財調査報告書第14集
43		原の辻遺跡	甕（畿内系）	IK014063009	沓崎市文化財調査報告書第14集
44		原の辻遺跡	甕（畿内系）	IK014096185	沓崎市文化財調査報告書第14集
45		原の辻遺跡	甕（畿内系）	IK014096187	沓崎市文化財調査報告書第14集
46		原の辻遺跡	高坏（畿内系）	IK014063013	沓崎市文化財調査報告書第14集
47		原の辻遺跡	鉢（畿内系）	IK014063010	沓崎市文化財調査報告書第14集
48		原の辻遺跡	丸底埴（畿内系）	IK014092179	沓崎市文化財調査報告書第14集
49		原の辻遺跡	器台（畿内系）	IK014092177	沓崎市文化財調査報告書第14集
50		原の辻遺跡	鼓形器台（山陰系）	IK014092175	沓崎市文化財調査報告書第14集

2. 丘陵西側低地部（不條・八反地区）の遺構

丘陵西側低地部では旧河川跡、護岸遺構、環濠、そして船着き場跡などが確認されている（図6）。ここでは平成17年度から平成26年度にかけての調査成果について整理する。

(1) 船着き場跡

1) 調査の経過

船着き場跡が発見されたのは、1996年度の幡鉾川流域総合整備計画に伴う緊急調査においてであった（NH4）。その後、2005～2007年度の三カ年にわたり原の辻遺跡調査研究事業として船着き場跡の調査が実施された（NH33、NH36、NH38）。2011年度の原の辻遺跡調査研究事業では船着き場跡の北側にあたる地点が調査された（NM5）。

2) 船着き場の構造

① 船着き場本体（図8）

船着き場は、河川中の島状の地形となっており、ここに南北約15mの突堤を2条築いて整備している。突堤先端から船着き場南岸までの南北長は約40m、東西幅は約30mである。船着き場東側にあたる2005年度調査7区では東側の立ち上がりが急激であることから人工的に開削したものとみられ、本来、河川東岸に突出した微高地を幅6～9mの水路により断ち切ることで島状に分離していたことが判明した。人頭大の石を積んで、護岸機能を持たせている。突堤では基礎に木材を敷き、木材を石で押さえて土を盛り、側面には杭を打ち込んで樹皮状の繊維で覆って横崩れを防いでいる。軟弱な地盤を強化して施設を維持するために「敷粗朶工法」と呼ばれる土木技術が用いられている。この石積みによる護岸工事や「敷粗朶工法」は大陸系の技術であり、当時の最先端の技術が導入されたものとみられる。船渠は19区付近が該当し、東西両突堤の間で、南へ凹状に入り込む。この船渠も石積みによって構築されているものと考えられる。船着き場縁辺部や一部河床にも14区、11区、9区、8区、7区などで石積みが認められる。特に11区では河川と接する部分に石の倒壊を防ぐため、杭と横木を樹皮・草束などでしっかりと固定した様相が確認されている。

② 周辺施設

i. 南側に位置する石積み分水遺構（図7、カラー写真3）

船着き場跡の南側にあたる13区やその南の18区では一段高い石組みが認められる。これを境に西へは急激に落ち込み、調査区西側では緩やかに立ち上がるため、河川であると考えられる。一方、東には浅いながらも断面U字状の溝状落ち込みがみられ船着き場東側の水路に続くと考えられる。そのため、この石組みは南から流れる河川を分水し、船着き場東側の水路へと導水する分水遺構であると考えられる。

ii. 北側に位置する石組遺構（図7、カラー写真4）

船着き場突堤北端から北へ約15mの河川中に中洲状の陸地がみられる。この中洲状陸地の東岸で長さ約4.8m、幅約1.2mの石組遺構が確認された。30～50cm程度の玄武岩を1段積んでいるが部分的に2段になっている部分もある。中洲状陸地の護岸機能が想定され、船着き場に至る河川の水利施

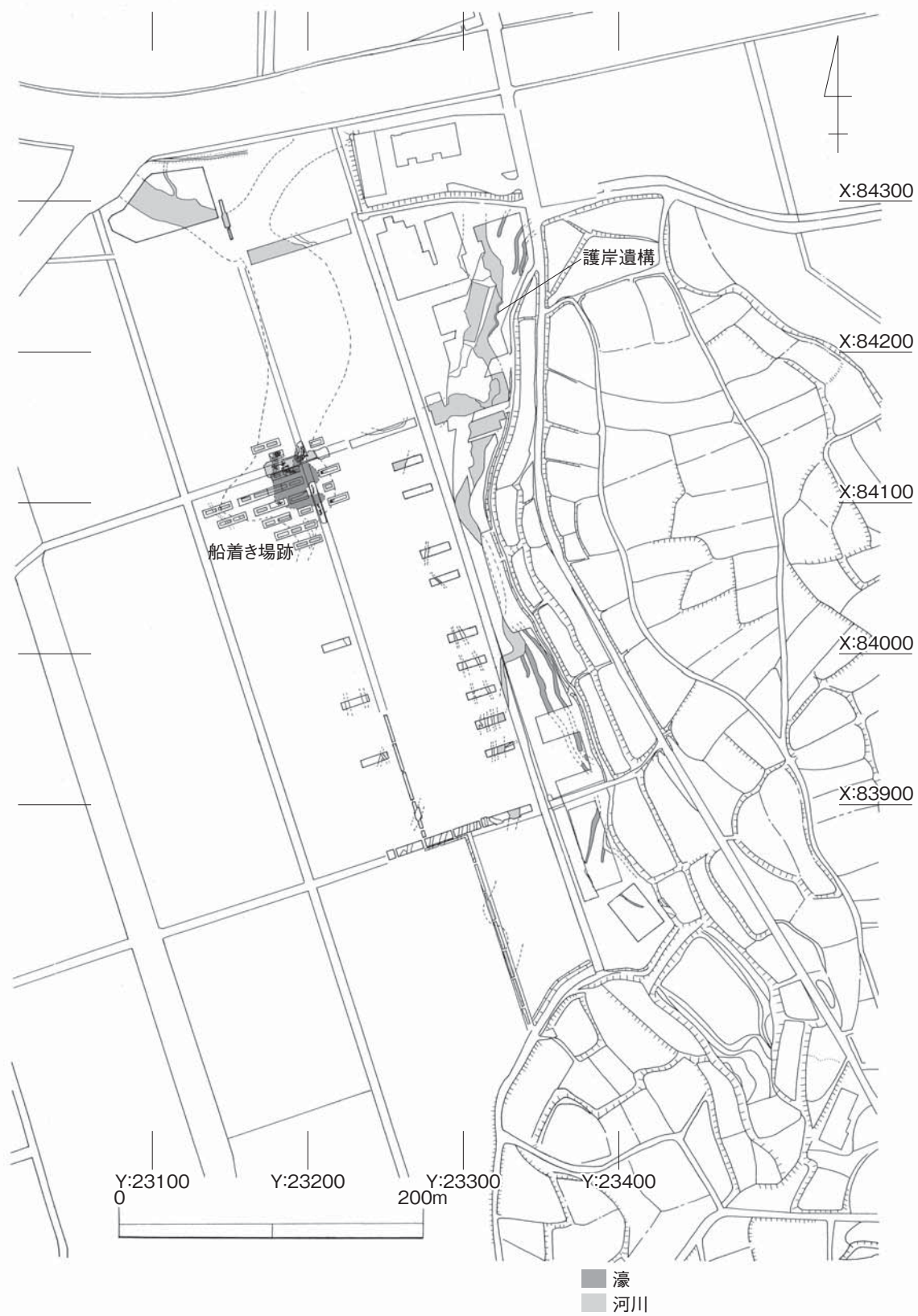


図6 西側低地部遺構配置図

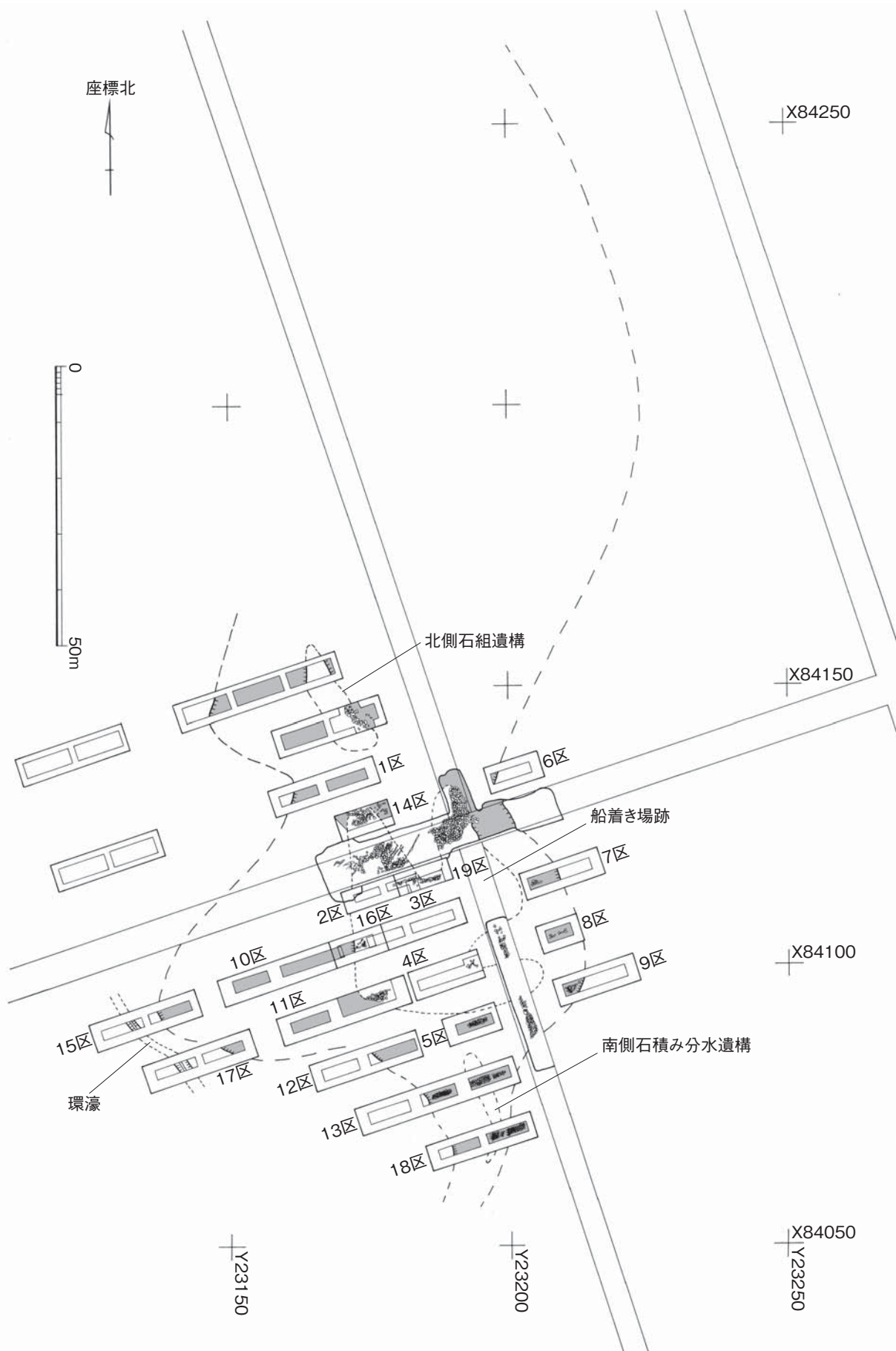


図7 船着き場跡周辺図

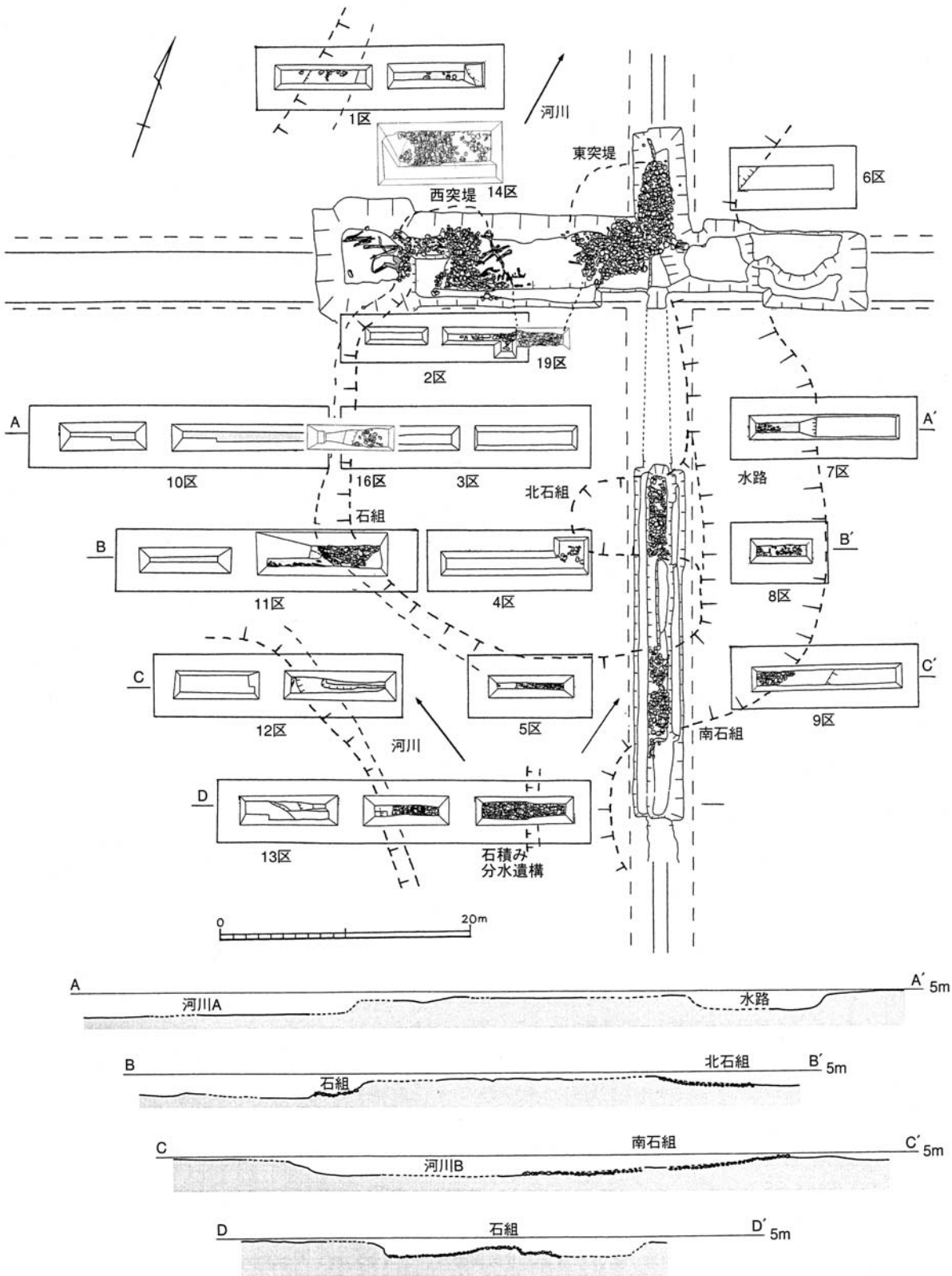


図8 船着き場跡詳細図

設である可能性がある。

③ 船着き場跡周辺環濠（図7）

船着き場跡西側で環濠が確認されている。幅2.3～2.5m、残深さ約0.7～0.8mで、断面はV字状を呈する。出土遺物に恵まれず、時期の特定は難しいものの、堆積土が河川と類似したことから、埋没時期は、船着き場跡と同様であると考えられる。集落の西側を区画するとともに、船着き場を防御するものであったものと推定されている。

3) 河川堆積と船着き場の年代

船着き場跡周辺の河川堆積土の様相は基本的に表3のようになる。砂礫層の上に、灰白色の粘質土が堆積し、船着き場跡の基盤層となる。河川は大きく2段階の堆積がみられ、下層は灰白色粘質土で埋没初期段階を示し、上層は黒褐色粘質土で有機物を多く含み、埋没最終段階を示す。

出土遺物としては最も古い資料は、船渠部河床面と埋没初期段階の土層から出土した城ノ越式である。河川自体の利用がこの段階に始まるとみられる。船着き場の築造に関する資料としては、西突堤盛土から出土した須玖I式古段階の土器が挙げられ、この段階に船着き場が築造されたものとみられる。関連遺構として周辺環濠もこの時期に造営されたものとみられ、北側に位置する石組遺構も須玖I式が出土する土層上に構築されており、この時期の造営であるとみられる。

船着き場本体周囲出土土器には須玖I式古段階、須玖I式新段階、須玖II式古段階の土器があり、この時期に船着き場が利用されたものとみられる。船着き場跡西側河川や北側河川の堆積土出土資料には須玖II式新段階や後期前葉頃の資料も含まれており、弥生時代後期前葉頃までは河川として機能していたものとみられる。河川堆積層上部から山陰系土師器や古式土師器が出土することから、古墳時代初頭には河川が埋没し、沼状の堆積土に覆われたことが想定される。

以上から船着き場の使用の上限は須玖I式古段階頃で、下限は須玖II式古段階頃であるとみることができる。

表3 船着き場跡周辺基本層序

1996(H8) 年度	2005(H17) 年度	2006(H18) 年度	2007(H19) 年度	2011(H23)年度		土質
				3区	4区	
—	1～2層		1～2層	1a層	1a層	近世の水田耕作土
—	3層	IV	3層	1b, 2, 3層	1b, 2, 3, 4層	古代～中世の水田耕作土。
3層	4層	V	4層	4, 5層	5, 6, 7, 8層	黒褐色で有機質を多く含む。船着き場跡や河川、濠が埋没する最終段階。
4層	5層	VII	5層	6, 7層	9層	灰白色で、船着き場跡や河川が埋没する初期段階。
	6層	—	6層	8, 9層	10層	灰白色で、船着き場跡の基盤層
—	7層	VIII	7層	10層	11～12層	青灰色（オリーブ）の砂礫層

(2) 八反地区の環濠（図6）

総集編I刊行段階までには、丘陵西側低地においては裾部に環濠が2条または3条廻り、その外側に河川が流れていたことが判明していたが、河川のさらに西側にも環濠が存在することも確認されていた。その後の調査により、丘陵西側裾部を流れる河川と船着き場跡に挟まれた地点の環濠について

の具体像が明らかになってきている。

1) 丘陵西側河川以西の環濠

① 調査の経過

1996年度の幡鉾川流域総合整備計画に伴う緊急調査により丘陵西側低地部の河川以西に環濠が存在することが確認された(NH4)。2008年度の原の辻遺跡調査研究事業による調査では船着き場跡南側の八反地区が調査され、河川跡や溝状遺構が確認された(NH40)。2009年度及び2010年度の八反地区における原の辻遺跡調査研究事業により西側低地部が調査され、環濠の延伸状況が確認されている(NM1)。

② 環濠の様相

2009年度八反地区調査では2条の濠が確認された。1号濠は2009年度八反1～4区で確認され、幅約1.6m、残存深約0.6mで、断面は逆台形(2区ではU字形)である。5区では確認されず、南西方向へ大きく向きを変えるものと推定される。河川が北東—南西方向に流れているので、河川に沿って造営されたものとみられる。覆土は大きく5層にわかれ、弥生時代中期末から後期前葉の土器が多く出土した。2号濠は2009年度八反1～5区で確認され、1号濠の東に位置する。幅は約1.6m、残存深約0.7mで、断面はU字形である。1号濠と同様に南西方向へ向きを変える。覆土は4～6層にわかれ弥生時代中期後葉から後期の土器が出土した。

2010年度八反地区調査では2条の濠が確認された。1号濠は2010年度八反9区で検出され、幅約1.5m、残存深約0.5mで断面はU字形である。覆土は3層にわかれ、弥生時代中期～後期の土器が出土した。この濠は2009年度1号濠に連続する可能性がある。2号濠は8区で確認され、幅約2.5m、残存深約0.6mで、断面は逆台形である。

2009年度調査八反地区より東方約300mに位置する2008年度八反地区では7条の「溝状遺構」が確認されているが、自然の流路であるとみられる。船着き場に流れ込む流路である可能性もある。

2) 土橋(写真12)

2009年度八反地区3区1号濠で土橋が確認された。東西長は1.5m、南北幅は1.8mで、濠底からの高さ0.6mで東西方向断面は底が平らな逆台形を呈する。土橋の南北方向の断面は台形状である。土橋を構成する土は濠の地山と非常に類似していることから、濠が掘削された後、さほど時間をおかずに橋にあたる部分を掘削した土で、橋を形成したものとみられる。橋の両側に船底状に腐植土の堆積がみられ、土橋に向かって濠が立ち上がっている。土橋構成土からはほぼ一個体分の弥生時代後期初頭の甕などが出土しており、何らかの祭祀が行われた可能性がある。

3) 環濠底の竹の突き刺し(写真13、写真14)

2010年度八反地区8区2号濠底で、直径1cm程度の竹が5cmほどの間隔を置き、不規則に突き刺さっていた。約3㎡の調査面積中、約220本確認された。竹は細いものが利用され、分割して差し込まれたものもある。土層の堆積状況から、この濠底には水が溜まっていたものとみられる。用途は不明であるが、防御用のものではなく、川魚を捕らえるための施設である可能性が提起されている。年代測定の結果によると弥生時代後期前葉頃の所産であるとみられる。

3. 丘陵北側低地部（川原畑地区）の遺構

丘陵北側低地部では河川跡、土坑・ピット群などが確認されている。総集編Ⅰ刊行までも調査事例があったが、2012年度及び2013年度の調査により、その具体像が明らかとなってきた。

(1) 調査の経過

川原畑地区では1992年度に範囲確認調査が行われ、1994年度に幡鉾川流域総合整備計画に伴う緊急発掘調査が実施された(NH1)。また、1994年には幡鉾川河川改修に伴う緊急発掘調査が行われた(NH9)。その後、2012年度及び2013年度に原の辻遺跡調査研究事業により発掘調査が実施された(NM9, NM12)。

(2) 河川跡（図9）

下流側からみると1994年度C6区とC3区で河川堆積土及び川岸の立ち上がりが確認されている。2013年度5区の中央付近まで弥生時代中期の土坑・ピット群が存在するため、5区中央部以東の地点に川岸があったものと考えられる。2013年度2a区で西岸、2013年度1a区で東岸が確認され、1994年度D11区とD14区に接続する。更に南側には1994年度河川改修調査区があるが、この調査では河川跡の西岸は把握されており、土器溜が確認されている。この河川の本流は1994年度河川改修調査区の範囲で、西へ続くものとみられるが、一方で、1994年度D1区、D2区、D3区、2012年度2区、4区では北側（安国寺方面）から支流が流れている様相が確認された。

河床面の標高は1994年度C6区で3.49m、1994年度C3区で3.25m、2013年度1a区で2.56m、1994年度D14区で2.93m、1994年度河川改修北側調査区で1.95m、1994年度河川改修南側調査区で2.12mとなっている。1994年度C6区、C3区側を下流と想定しているが、理解の難しい結果となっている。河川の一部に深い部分があった可能性や、数次に亘る堆積による影響も考えられる。支流の河床面の標高は2012年度1a区で3.22m、2b区で3.10m、4b区で3.24mとなっており、確実に本流の河床面を把握した2013年度調査区より高く整合的である。

河川幅は2013年度調査区で約35m、2012年度調査区で約45mであった。

出土遺物は本流・支流を含めてどの調査区でも圧倒的に弥生時代中期後葉の遺物が多いため、弥生時代中期後葉に河川の堆積があったものと考えられる。しかし、周辺の土坑・ピット群では弥生時代中期後葉の遺物が圧倒的に多く出土しており、河川に流れ込む遺物があるとなれば、弥生時代中期後葉の遺物にはほぼ限定されるという状況にあり、河川跡がいつまで存続したのかは河川堆積層出土遺物での判断は困難である。1994年度及び2012年度河川跡堆積土上層では古式土師器も少量出土しており、また弥生時代河川に重なる形で、より狭い川幅の近代河川が検出されていることから、弥生時代の河川跡の地が相対的に低いという状況は後世まで存続した可能性が高い。

河川からの遺物の出土状況については散漫に分布するのではなく偏りがあることも確認された。例えば2013年度1a区では川岸から離れたところに遺物が分布し、2a区では川岸に遺物が分布する。このことから2a区側では流れが緩慢で遺物が堆積しやすく、1a区側では落ち込みが急であることもあわせ侵食度合いが大きかったものと考えられた。同様の状況は支流である2012年度調査区でも確認され、狭い箇所では流速が異なっていたことは流路が必ずしも直線的ではなく、蛇行していたことを窺わせる。このような河川による二次堆積状況とは別に2012年度4区では磨耗が少なく一個体分が復

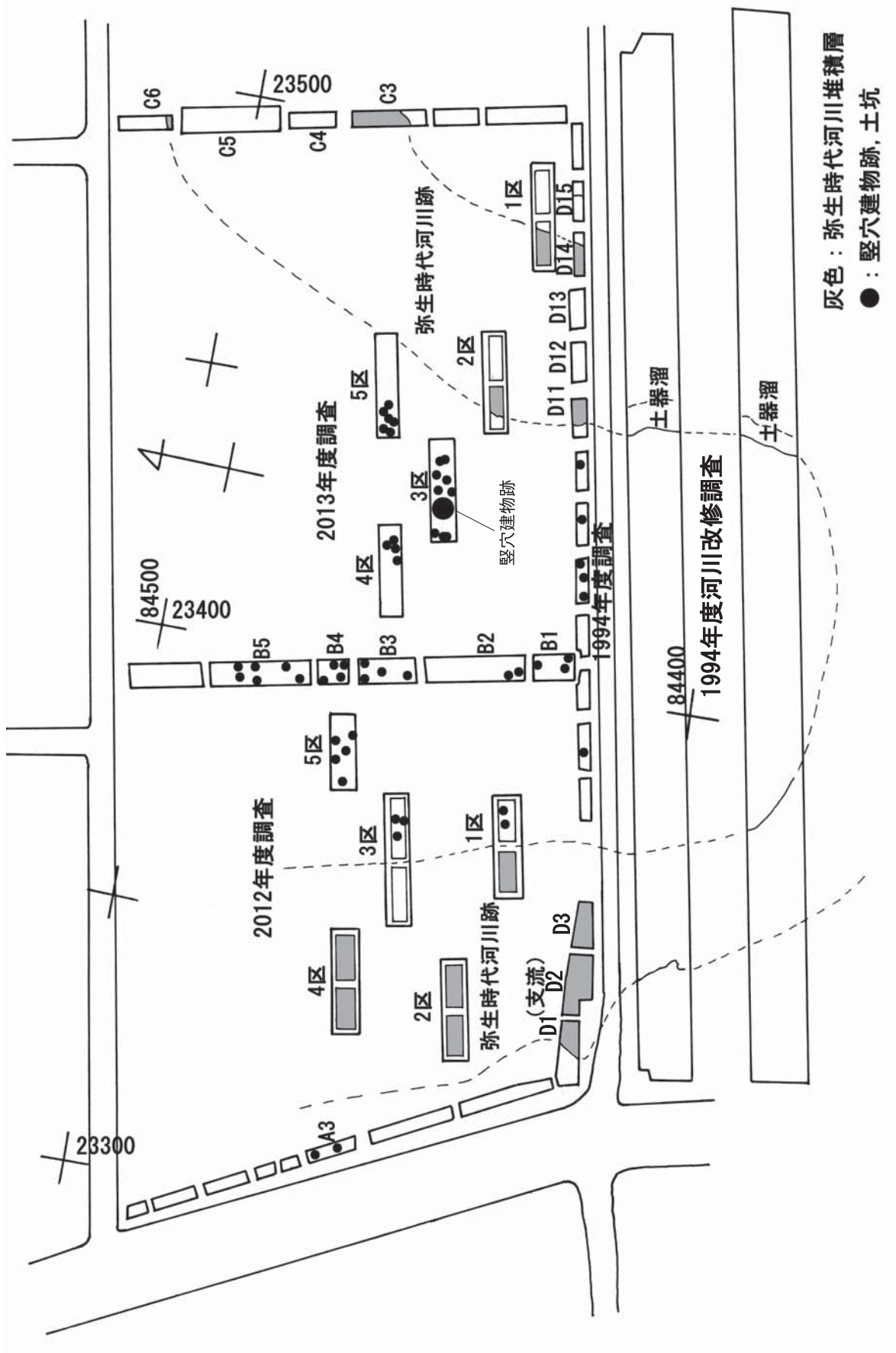


図9 川原畑地区弥生時代中期後葉の状況

元できるような遺存状況が極めて良好な土器片が多量に出土し、土器溜に近い様相であった（写真18、写真19）。河川に人為的に土器を投棄し、磨耗を受けることのないくらい短い期間で埋没し、水分の多い土壌で包含された結果であるとみられる。丹塗土器も多く、水辺の祭祀が行われた可能性もある。

(3) 土坑・ピット群（写真20、写真21、写真24）

1994年度B区、D区、2012年度1区、3区、5区、2013年度4、5区で土坑・ピット群が発見されたことにより、1994年度B区周辺を中心に、河川の本流と支流に挟まれた土地に土坑・ピット群の集中域が存在することが明確となった。

平面形態は円形、楕円形、不整形が多いが、長方形のものもみられる。これらの土坑・ピット群の時期は須玖Ⅱ式が主体的に出土していることから弥生時代中期後葉であるとみられる。土坑内から出土する土器は磨耗が甚だしいことや、断面を観察すると土層の堆積に沿って遺物も分布していることから土坑に廃棄後しばらくして土層が堆積したものとみられる。ただし、土器型式の時期幅は大きくないため、弥生時代中期後葉には既に埋没していたことは確実である。2013年度14号土坑では少なくとも3点の30～40cm大の板石が床面からやや浮いた状態で出土しているが、これまでの調査では確認されたことのない事例である（写真25）。

(4) 竪穴建物跡（カラー写真7）

これまで、多くの土坑・ピット群が確認されていたが、2013年度調査区では竪穴建物跡が1基確認された。平面はほぼ円形で、南北軸445cm、東西軸449cm、残存深21cmで、中央には直径約158cm、深さ14cmの円形の炉跡が検出されている（写真22）。この炉跡では、支石として用いられたものと推定される被熱痕跡のある石が2点確認されている。被熱痕跡のある石は定型化された石製支脚（クド石）ではないが、背部が直線状となっており、後に定型化されるクド石の祖形となる可能性がある。被熱石の間隔は24cmで、炉跡における使用状況を示す貴重な事例であると考えられる。また、底部を打ち欠いた壺が発見されているが、この壺の出土状況は炉床面直上で、残存状況は良好であるにも関わらず、底部片は全く出土しなかったことから、底部を打ち欠いたものと判断した（写真23）。壺自体に被熱痕跡はなく、本来、壺は火にかける器種ではないことから、炉跡廃絶後に供献したものと考えられる。

(5) 河川跡・竪穴建物跡・土坑・ピット群から出土した土器

川原畑地区では多数の土坑・ピット群等が確認されたが、遺構出土遺物は大多数が須玖Ⅱ式段階に属する。川原畑地区出土土器の特徴の一つとして、遠賀川以東系土器が占める比率が高いという点が挙げられる。1994年度調査土坑SK12では、甕口縁部の内、遠賀川以東系が20%を占めていた。この地区では遠賀川以東の地域との結びつきが強かった可能性がある。

なお、大陸・半島系土器は、川原畑地区では、わずかに2点擬粘土帯土器が出土している程度である。この地区が本来的に大陸・半島系土器が構造的に出土しない地区であることが明確となり、対外交流で果たした役割は小さかったものと考えられる。

Ⅲ. 弥生時代の遺物

1. 弥生土器

(1) 土器（弥生土器・古式土師器）

《はじめに》

原の辻遺跡ではこれまでに10万点を超える土器が出土しているが、今回は、昨年度までに刊行している発掘調査報告書に掲載している弥生土器・古式土師器についてまとめを行う。原の辻遺跡から出土した土器はそのほとんどが弥生土器であるが、一部古式土師器も含まれる。なお、外来系土器は次項の大陸・半島系土器にて別途まとめを行うため、この節には含まない。

原の辻遺跡は、出土した遺物から、弥生時代前期後葉から古墳時代初頭まで集落が営まれていたことが解明されているが、時期別でみると弥生時代中期及び弥生時代後期の遺物が主流であり、弥生時代前期及び古墳時代初頭の土器は前者と比べると出土例はやや劣る。交易・交流の拠点として栄えた原の辻遺跡は、国外を含む様々な地域から持ち込まれた土器も多く、土器の供伴関係を基に使用時期を比較・検証する上でも欠かすことができない貴重な資料である。

今回は、集落の変遷の画期を基に、弥生時代前期1期、弥生時代中期2期、弥生時代後期2期、古墳時代初頭1期の計6期に区分し、各時期の土器の特徴についてまとめていく。なお、掲載している土器はすべて縮尺1/6で統一し、資料が掲載されている調査報告書は、資料掲載目録を参照していただきたい。

1) I期 【弥生時代前期後葉から前期末段階】

これまでに原の辻遺跡の発掘調査において発見されている土器は、弥生時代前期後葉以降に限られる。現段階では、発見されている土器からこの時期が集落の定着時期と捉えており、これ以前の弥生時代前期の土器は発見に至っていない。I期の土器の器種としては、甕形土器が主流で一部、壺形土器も含まれるがその数は多くない。出土地点も丘陵東側低地の溝と丘陵上の先端部に集約され、出土数も少ない。

土器の特徴としては、焼成はやや不良で、全体的に器壁はやや厚めで、形状的には如意形の口縁を持ち、胴部の張りはほとんどみられず、底部に向かって窄まっている。全体的に器壁は厚く、外面底部が凹む上げ底を呈するのがこの時期の特徴といえる。口縁部外面に規則性のある刻目を施すものや口縁部下位に1条の沈線を施すものも一部みられる。破片資料は未掲載であるが、甕形土器に供伴して、ヘラ状工具もしくは貝殻等によって胴部上位に羽状文が施された壺形土器も確認されている。土器編年比較を行うとI期に分類した土器資料は板付Ⅱ式並行期に該当する。

1～9は胴部にやや張りがみられるタイプの甕形土器である。如意形の口縁をもち、口縁部下位にやや外反する張りが確認できる。2、3、4、5及び7は口縁部下位に1条の沈線が施されている。10～12は胴部に張りがみられず、底部に向かってほぼ直線的に窄まるタイプの甕形土器である。12は口縁部下位に沈線ではなく突帯1条が貼り付けられている。13～15は1～12に比べ比較的新しい時期に属する甕形土器である。13は如意形の口縁を制作する前段階で外面に丸くのぼした粘土帯を貼り付け、口縁部を成形したものである。14及び15は如意形の口縁の内側に粘土帯を貼り付け、口縁部を成

形したものである。弥生時代中期段階になってみられる断面L字状の口縁部と比べると未完成な部分が多く、断面L字状の口縁部の先駆的存在であることがわかる。**16**は壺形土器で、重心が低い胴部最大径を持ち、如意形の口縁部が付く。頸部と肩部の境界部分には沈線1条が施されている。**17**は如意形の口縁部の下位に2孔1組の穿孔が施された甕形土器である。

2) II期 〔弥生時代中期初頭から中期中葉段階〕

II期の土器の器種としては、甕形土器が主流であるが、壺形土器、蓋形土器、鉢形土器、器台、脚付土器など充実する。出土地点は船着き場がつくられた丘陵西側低地と丘陵上の先端部を中心に遺跡内から発見される。

土器の特徴としては、焼成はやや良好で、器壁はやや厚いものの、器高が40センチを超える大型の土器も日常生活の中で使用されている。土器編年比較を行うとII期に分類した土器資料は城ノ越式～須玖Ⅱ式古段階並行期に該当する。

18～20は蓋形土器で、蓋の摘み部分の中央には凹みを有し、裾部に向かって内反しながら広がる。同時期中での変遷をみると摘み部分の凹みが薄れていくとともに裾部の内反もほとんどなくなる傾向がみられる。**21**から**23**は断面L字状の口縁部を持つタイプの甕形土器である。**21**の口縁部は内側に傾斜しているが、**22**及び**23**の上面はほぼ水平になっている。**24**から**26**はやや大型の壺形土器である。**24**は如意形の口縁の内側に粘土帯を貼り付け、摘み上げ成形されている。頸部と肩部の境界部分には1条の突帯が巡らされ、外面頸部には等間隔で縦方向の暗文が施されている。**26**は如意形の口縁の上部に粘土帯を貼り付けた鋤先状口縁を持つタイプの壺形土器で、胴部最大径付近に断面三角形の突帯1条を巡らせ、外面頸部には連続で縦方向の暗文が施されている。**27～29**は如意形の口縁を持つ鉢形土器である。**28**及び**29**はやや断面L字状を呈すが成形にまでは至っていない。底部はやや幅広の平底になっている。**30～32**は小型の壺形土器で、球状の胴部に広口の如意形の口縁部が付く。**31**及び**32**の頸部には連続した縦方向の暗文が施されている。**33**及び**34**は器台である。受部及び脚部の幅がほぼ同じでくびれ部分がほぼ中央にあるのがこの時期の器台の特徴である。**35**は脚付鉢で半球状の鉢の底部に裾広がり脚が取り付けられている。

3) III期 〔弥生時代中期後葉から中期末段階〕

III期の土器の器種としては、甕形土器、壺形土器、蓋形土器、鉢形土器、器台、脚付土器に高坏が新たに加わる。また、III期になると丹塗磨研を施した土器も加わり、彩り豊かなバリエーション構成となる。出土地点は丘陵部、低地部問わず遺跡内から発見される。

土器の特徴としては、丹塗り土器を中心に精巧なつくりのものが多く、暗文やヘラミガキによって土器自体に芸術性を高めている。土器編年比較を行うとIII期に分類した土器資料は須玖Ⅱ式新段階並行期に該当する。

36～38は蓋形土器で、摘み部分の凹みは消え、裾部に向かってほぼまっすぐに広がる。**39～44**は甕形土器で、口縁部の断面L字状が明瞭化し、口縁部下位に突帯1条がつく。底部の凹みは完全に消え、平底となり、口縁部までの器壁が均一になっているのもIII期の甕形土器の特徴と云える。**44**の甕形土器は、断面L字状の口縁部が内側に傾斜し、くの字状口縁に近い形状を呈し、胴部が大きく膨らむ。

45～48は口縁部の先端を摘み上げで成形した跳上げ口縁甕で、遠賀川以東系土器の特徴を有するもので、対外地域との交流を示す指標土器である。49は大型の壺形土器で口縁部先端に刻目を施し、外面口縁部下位に連続した縦方向の暗文が確認できる。肩部と胴部最大径付近に取り付けられた突帯の形状も断面三角形から断面M字状になる。50及び51は器台で、受部と脚部の幅はほぼ同じであるが、くびれ部分がⅡ期と比べ、中央からやや上位に移る。

52は丹塗り甕形土器である。口縁部先端に刻目を施し、外面口縁部下位に取り付けられた突帯と胴部最大径付近に取り付けられた突帯の間には連続した縦方向の暗文が施されている。53及び54は丹塗り壺形土器で、外面頸部に5～7本をユニットとする縦方向の暗文が規則的に間隔をあけて施されている。55及び56は丹塗り脚付鉢で、55に取り付けられた脚には透かしが施されている。57及び58は丹塗り高坏で、鋤先状の口縁を持ち、裾広がり脚がつく。59は丹塗り双注口付脚付壺で、胴部最大径から口縁部下位にかけて突帯が連続して巡らされ、突帯と突帯の間には連続した縦方向の暗文が施されている。また、胴部最大径に取り付けられた2条の突帯の間には2口の注口がつく。60～62は丹塗り袋状口縁壺である。60は突帯を持たず、61及び62は胴部最大径から口縁部下位にかけて突帯を巡らし、突帯と突帯の間には連続する縦方向の暗文が施されている。63～65は丹塗り小壺蓋で、裾部に2孔1対の穿孔が対角線上に配置される。天井部に摘みが付くタイプの蓋とつかないタイプの蓋があり、外面中央より放射状に広がる暗文が確認できる。66～68は丹塗り小壺蓋と対になる丹塗り小壺である。口縁部上面に丹塗り小壺蓋と同様に2孔1対の穿孔が対角線上に配置される。69～71は丹塗り鉢である。69及び70は口縁部に返りを持たず、71は断面L字状の口縁を持つ。72は特殊筒形器台で脚部は欠損しているものの、本来は器高80センチを超える大型の器台だったと想定される。鏝の先端部分は断面M字状になっており、刻目が施され、受部から鏝部までの間には連続した縦方向の暗文が施されている。

4) Ⅳ期 [弥生時代後期前葉から後期中葉段階]

Ⅳ期の土器の器種としては、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、器台、高坏などがあり、蓋形土器は消滅する。出土地点は低地部に集中している。

土器の特徴としては、器高が40センチを超える大型の壺が日常生活の中で使用されており、壺形土器の使用頻度が増加傾向にあることが出土品からみえてくる。土器編年比較を行うとⅣ期に分類した土器資料は高三瀆式並行期に該当する。

73～78は甕形土器で、断面くの字状に外反する口縁を持ち、胴部は大きく膨らむ。79～82は短高の甕形土器である。球状の胴部に広口の断面くの字状に外反する口縁がつく。79の口縁部は内反しながら広がり、先端部は刻目が施されている。82の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、直口壺に近い形状を呈す。83から90までは鉢形土器で、甕形土器と同じく断面くの字状に外反する口縁をもつ。底部は平底を基本とするものの時期が新しくなるにつれ、丸平底に変化する傾向がみられる。91～108は壺形土器である。91～93は鋤先状口縁が変化した壺形土器で、91は内側に粘土が貼り付けられた鋤先状口縁の面影が残る口縁を持ち、口縁先端部には刻目が施されている。92はさらに退化し、口縁部内側に断面三角形の突帯1条が巡らされ、その面影をかすかに留める。93は鋤先状口縁が完全に消滅し、稜線となって残る程度でしか確認することができない。94～96はくの字状に内反する口縁をもつ壺形

土器で、時期が新しくなるにつれ、くの字状の屈折角度が鋭角になる傾向がみられる。97～100は如意形に開く口縁を持つ壺形土器である。肩部と頸部の境界部分が明瞭な稜線がみられるが時期が新しくなるにつれて稜線が不明瞭になる傾向がみられる。100は外面胴部に「×」印が線で刻まれている。101～108はくの字状に内反する口縁をもつ壺形土器で、101～104の頸部が長いタイプと105～108の頸部が短いタイプにわけることができる。どちらも時期が新しくなるにつれて、くの字状の屈折角度が鋭角になる傾向がみられる。109～111は小型の如意形に開く口縁を持つ壺形土器で、時期が新しくなるにつれて内反して広がる口縁部が直線的に広がる形状へと変化する傾向がみられる。112から114は高坏である。受部下位で屈曲し、垂直に立ち上がり、脚部の中央付近に3孔もしくは4孔の穿孔が施されるのが特徴である。115～120は器台である。115及び116はⅢ期の器台の名残を残しているが、117～120はくびれ部が上位に完全に移り、受部と脚部が明瞭になる。

5) V期 [弥生時代後期後葉から後期末段階]

V期の土器の器種としては、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、器台、高坏に土製支脚が新たに加わる。出土地点は丘陵部、低地部問わず遺跡内から発見される。

土器の特徴としては、甕形土器や壺形土器が大型化する傾向がみられ、壺形土器は直口壺や長頸壺など新たな形状のものがV期に集中する。土器編年比較を行うとV期に分類した土器資料は下大隈式～西新式並行期に該当する。

121～128は甕形土器である。くの字状の口縁は、直線的に広がり、より長くなる傾向がみられる。甕形土器の底部も時期が新しくなるにつれて平丸底から先が尖った丸底へと形状の変化がみられる。122は直線的に長いくの字状口縁を持つ甕である。胴部最大径下位と口縁部下位に断面台形状の突帯が1条ずつ巡らされている。125は直線的に長いくの字状口縁を持ち、胴部は縦長の卵型で、底部は尖った丸底状になっている。127は口縁部と肩部の境界部分に突帯1条を巡らしているが、突帯が断面台形状になり、平坦部分に刻目が施されている。129～132は短高の甕形土器である。球状の胴部に広口の断面くの字状に直線的に広がる口縁がつく。133～135は直口壺で、垂直に立ち上がる口縁と口縁部と肩部との境界に貼り付けられた刻目を施した断面三角形の突帯が特徴である。136～138は高坏で、受部下位で屈曲するものの、屈曲後もさらに外側に向かって直線的に広がる。脚部の中央付近に施された3孔もしくは4孔の穿孔はⅣ期と共通するが、脚部下位に屈曲部分がみられるようになる。139～145は鉢形土器で、底部が平丸底から先が尖った丸底へと形状の変化がみられる。142～145は先の尖った丸底の底部をもつ鉢形土器である。146～148は長頸壺で、底部の丸底化に合わせて、頸部も外反して立ち上がる形状から垂直に立ち上がる直口形状になる傾向がみられる。149～152は土製支脚である。サイズも大小様々であり、受部に取り付けられた突起の形状も規則性はみられない。153～157は器台で、受部と脚部との境界のくびれ部が上位で明瞭になり、時期が新しくなるにつれて、受部が内反しながら広がるタイプから直線的に広がるタイプへと移る傾向がみられる。また、156及び157のように大型の甕形土器や壺形土器を乗せるための大型器台も出現する。158～163はくの字状に内反する口縁をもつ壺形土器である。底部の丸底化に合わせて内反する口縁も角度が鈍角化し、垂直気味に立ち上がる口縁形状へと変化がみられる。164及び165は如意形に開く口縁を持つ壺形土器である。底部は平丸底から丸底へと移るにつれて、内反しながら立ち上がる口縁の広がり方もやや直線的

になる傾向がみられる。

6) VI期 〔古墳時代初頭〕

VI期の土器の器種としては、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、器台、高坏に小形丸底埴が新たに加わる。出土地点は丘陵東斜面と東側の低地部に集中している。

土器の特徴としては、大型の甕形土器や壺形土器は消滅し、器高30～40センチ前後の大きさが主流となる。鉢形土器、高坏、器台においては全体的に小型化する傾向がみられ、器高10～20センチ前後の大きさになる。土器編年比較を行うとVI期に分類した土器資料は庄内式～布留式並行期に該当する。

166～198は畿内系の古式土師器である。166～173は甕形土器である。形状の特徴から古式土師器に該当するものの、器壁の厚さは2ミリにも満たない土器から5ミリ以上の土器まで様々である。縦長の卵形から胴部が膨らんだ丸形へと形状の変化がみられ、尖った丸底の底部も完全な丸底になる。174～176は器高の低い甕形土器で、大きさ以外は上記の甕形土器と同じ特徴を持つ。177～180は小形丸底埴で、口縁部が長く、口縁部と胴部との境界部分が中央より下位にある。181～184は脚付鉢である。182～184は高坏の脚部と同じように穿孔3孔が施されている。185及び186は器台である。185は受部と脚部のくびれ部分が上位にあり、脚部に比べ受部の幅の方が小さい。186はほぼ中央にくびれ部があり、脚部と受部の幅はほぼ同じである。187～190は高坏で、脚部の中央付近に施された3孔もしくは4孔の穿孔は残るものの、脚部の屈曲部分は時期が新しくなるにつれてより明瞭になる。196～198は直口壺である。197の頸部下位には連続三日月文を挟む形で上下に沈線が入れられている。

199～219までは山陰系の古式土師器である。199～207は二重口縁壺である。底部の形状変化は畿内系の甕形土器の変化と同じであるが、口縁に繋がる頸部は時期が新しくなるにつれて曲線形状から直線形状へと変化がみられる。205の外面頸部には上から刺突文→沈線→波状文→沈線→波状文→沈線の順で文様が、206及び207は羽状文が肩部から頸部にかけて施されている。211及び212は小型の二重口縁壺で、縦長の卵形から胴部が膨らんだ丸形へと形状の変化がみられ、尖った丸底の底部も完全な丸底になる。213～219は鼓形器台である。受部と脚部の幅がほぼ同じで中央にくびれ部が位置するのが多いが、214のように受部に対して脚部の幅が小さいものや219のように受部が長く、くびれ部が中央よりやや下位に位置するものもみられ、統一した規則性はみられない。

(2) 甕棺 (弥生土器)

《はじめに》

原の辻遺跡ではこれまでに集落周辺につくられた墓域から甕棺墓が発見されている。今回は、昨年度までに刊行している発掘調査報告書に掲載している甕棺についてまとめを行う。原の辻遺跡では発見された土器と同様に弥生時代前期後葉段階になって甕棺文化がはじまり、弥生時代中期段階に最盛期を迎える。原の辻遺跡における甕棺文化のはじまりは北部九州地域の甕棺文化と比べやや遅れがみられるものの、最盛期の時期などはほぼ共通している。一般的に弥生時代後期段階になると北部九州地域では甕棺墓の埋葬が衰退する傾向がみられるものの、糸島地域を中心に甕棺文化が残る地域が存在し、原の辻遺跡でも甕棺文化が残る。発見された甕棺から原の辻遺跡における甕棺文化は弥生時代前期後葉にはじまり、弥生時代後期末まで継承され、終焉を迎える。

甕棺の特徴としては、大型の甕棺でも器高80センチ前後のものが最大で、ほとんどが50センチ前後の中型の甕棺を用いている。北部九州地域で見られるような器高100センチを超える大型の甕棺は現段階では発見されていない。

今回は、弥生時代前期末～弥生時代中期初頭、弥生時代中期前葉～弥生時代中期末、弥生時代後期の計3期に区分し、各時期の甕棺の特徴についてまとめていく。なお、掲載している甕棺はすべて縮尺1/10で統一し、資料が掲載されている調査報告書は、資料掲載目録を参照していただきたい。

1) 弥生時代前期後葉～弥生時代中期初頭 甕棺

弥生時代前期後葉～弥生時代中期初頭の甕棺は、やや大型の甕形土器や鉢形土器が使用されている。出土地点は集落が営まれた丘陵部につくられた原A墓域と別丘陵につくられた大原墓域で発見されている。

甕棺の特徴としては、日常生活の土器とは異なるやや大型の甕形土器や壺形土器が使用され、甕棺埋葬が始まった段階では、下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を用いた合口式の甕棺埋葬が主流であるが、時期が新しくなるにつれて下甕と上甕共に甕形土器を用いた合口式の甕棺埋葬へと変化がみられる。日常生活で使用した甕形土器を棺に転用した甕棺も発見されており、埋葬者によって使用する甕棺が使い分けされていたことがわかる。甕棺編年比較を行うと金海式～城ノ越式並行期に該当する。

220及び221は下甕に甕形土器、上甕に鉢形土器を使用した甕棺である。220の上甕は、如意形に開く鉢形土器を使用し、口縁部先端に刻目を施している。221の下甕は、如意形の口縁の内側に粘土帯を貼り付け口縁部を成形している。口縁部下位に断面三角形の突帯1条が巡り、外面底部の中央は凹み、上げ底となっている。222及び223は下甕と上甕共に甕形土器を使用した甕棺である。どちらも如意形の口縁の内側に粘土帯を貼り付け口縁部を成形し、口縁部下位に断面三角形の突帯が2条巡らされている。228及び229は金海式の面影が残る甕棺で、上甕と下甕共に口縁部先端に刻目を施し、上甕の外面胴部には、4条をユニットとする横方向の沈線が上下に1周巡り、その沈線の間には7条をユニットとする縦方向の沈線が間隔をあけて施されている。

2) 弥生時代中期前葉～弥生時代中期末 甕棺

弥生時代中期前葉～弥生時代中期末の甕棺は、甕形土器が主流であるが、この時期から壺形土器も甕棺として使用されはじめる。出土地点は集落が営まれた丘陵部とは別丘陵につくられた大原墓域、鶴田墓域、閩線遺跡、原C墓域、菅ノ木墓域などで発見されている。

甕棺の特徴としては、上甕と下甕共に甕形土器を用いた合口式の甕棺埋葬の割合が高いが、下甕に壺形土器を用いた合口式の三連甕棺もこの時期には存在する。当初から甕棺用としてつくられた甕形土器もあるが、ほとんどは日常生活で使用した甕形土器を転用している。甕棺の中には丹塗り暗文を施した甕形土器も含まれていることから丹塗り土器も甕棺として転用されていることがわかる。甕棺編年比較を行うと汲田式～須玖式並行期に該当する。

233は口縁部が断面T字状を呈し、外面底部の中央が凹み、上げ底が残っている。234～239、241～248は日常使用された甕形土器を甕棺に転用したもので、外面に煤の痕跡が残るものもある。240は三連甕棺の下甕に使用された壺形土器である。外面胴部に丹塗り痕が残り、底部と胴部に計3箇所の穿

孔が施されている。また、外面肩部には大型海遊生物を連想させる線刻絵画が、内面口縁部に船を連想させる線刻絵画がそれぞれ描かれているのが特徴である。

3) 弥生時代後期 甕棺

弥生時代後期の甕棺は、甕形土器と壺形土器が使用されているが、大型の甕棺は衰退し、中型もしくは小型の甕棺が主流になる。出土地点は集落が営まれた丘陵部とは別丘陵につくられた大原墓域、大川墓域、原の久保A墓域、原の久保B墓域、苜ノ木墓域などで発見されている。

249及び250は上甕と下甕共に壺形土器を使用した合口式の甕棺埋葬である。249の上甕は、鋤先状口縁の面影を残す壺形土器で胴部にやや張りがみられる。251及び252は下甕に壺形土器、上甕に甕形土器を使用した甕棺である。252の下甕は、口縁部の内側に稜線が残り、口縁部先端には刻目が施されている。253及び254は下甕に壺形土器、上甕に器高の低い甕形土器を使用した甕棺である。254は胴部最大径付近と頸部と肩部の境界部分に断面台形状の突帯がそれぞれ1条ずつ巡らされている。255及び256は上甕と下甕共に甕型土器を使用した甕棺である。255の上甕は、断面くの字状の口縁が直線的に広がり、胴部最大径下位と頸部と肩部の境界部分にそれぞれ1条ずつ突帯が巡り、刻目が施されている。256の下甕は、断面くの字状の口縁が内反しながら広がり、口縁部先端に刻目が施されている。胴部最大径下位と口縁部下位にそれぞれ1条ずつ断面台形状の突帯が巡らされている。257は断面くの字状の口縁が直線的に広がり、頸部と肩部の境界部分に1条の突帯が巡り、2本の指で摘み上げて成形している。259は、原の辻遺跡における甕棺文化の終焉を示す指標となる甕棺である。断面くの字状の口縁は直線で長くのび、底部は尖った丸底になっている。外面には断面台形状の突帯が計4条、間隔をあけて巡らされている。

《まとめ》

現段階において、原の辻遺跡からは弥生時代初頭～弥生時代前期中葉段階の遺物は発見されていない。集落が形成される弥生時代前期後葉段階〔原の辻Ⅰ期〕においても、集落がつくられた丘陵部及び周辺低地部での出土例は少なく、大原墓域を中心に発見された甕棺が指標となっている。

土器の出土量が増加するのは弥生時代中期前葉段階〔原の辻Ⅱ期〕以降で、弥生時代中期後葉から中期末段階〔原の辻Ⅲ期〕にかけてさらに増加傾向にある。土器の特徴としては原の辻Ⅱ期は福岡平野や糸島平野を中心とする北部九州系の土器が多く、原の辻Ⅲ期になると遠賀川以東系の土器や周防・豊後系の土器なども新たに加わり交流範囲の拡大がみられる。丹塗り土器も充実しており、暗文やヘラミガキなどを施した精巧な土器が多く、瓢箪形土器や瓢形土器など出土事例が少ない珍しい器種も揃う。弥生時代後期前葉から後期中葉段階〔原の辻Ⅳ期〕においては、単独時期区分では一定量の土器が出土しているものの、全体で捉えた場合、原の辻Ⅲ期及び続く弥生時代後期後葉から後期末段階〔原の辻Ⅴ期〕と比べるとやや少ない傾向にある。原の辻Ⅴ期になると土器の出土量だけでなく、器種も増え、バラエティ豊かな構成になる。様々な地域でつくられた特徴ある土器が発見されていることから、交流範囲が西日本一帯にまで拡大していったことがわかる。古墳時代初頭段階〔原の辻Ⅵ期〕になると畿内系や山陰系の土器の出土量が多いことから、北部九州系の勢力に代わり、畿内系の勢力が交流範囲を拡大していたことが発見された土器からみえてくる。

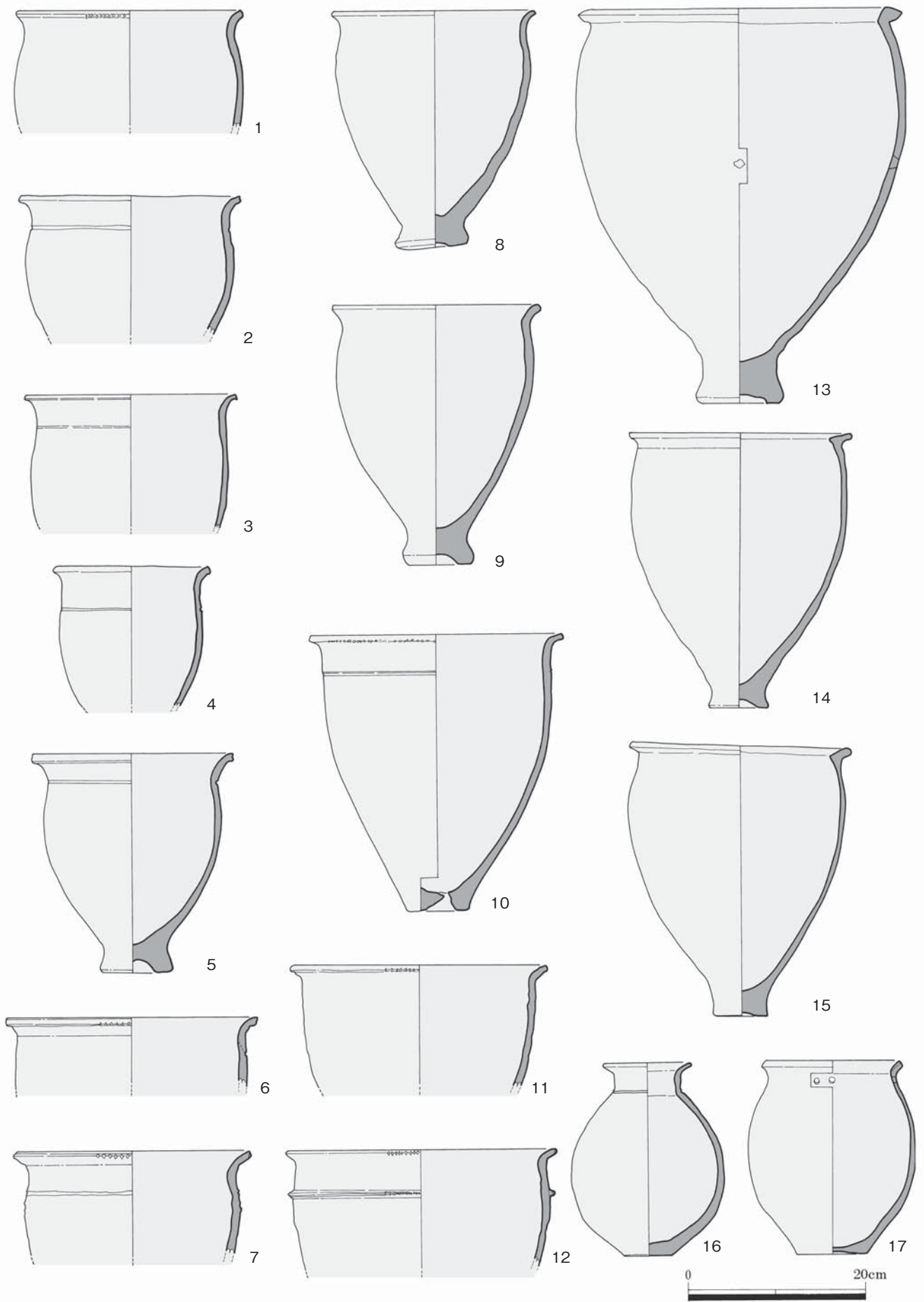


图10 弥生土器①

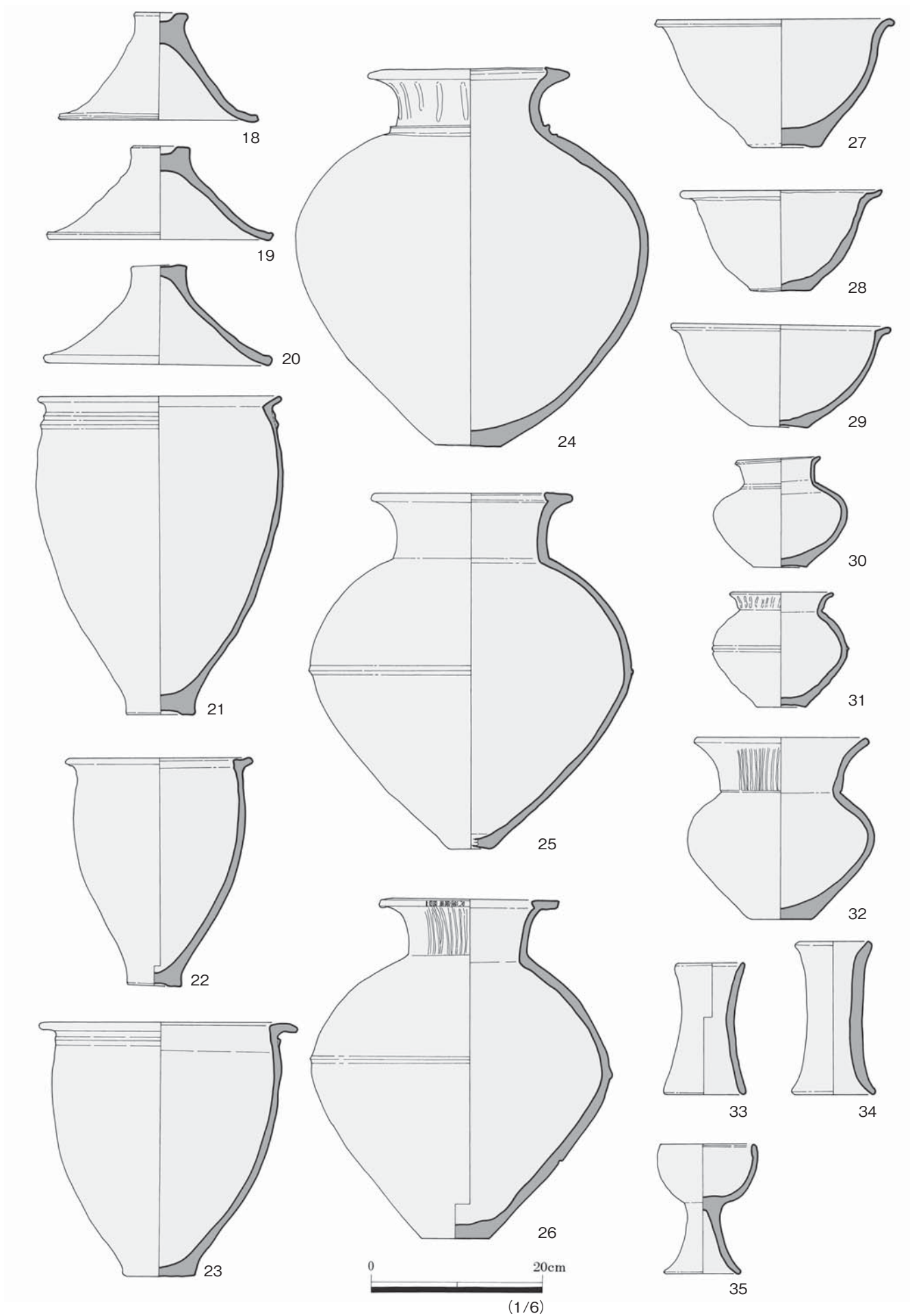


图11 弥生土器②

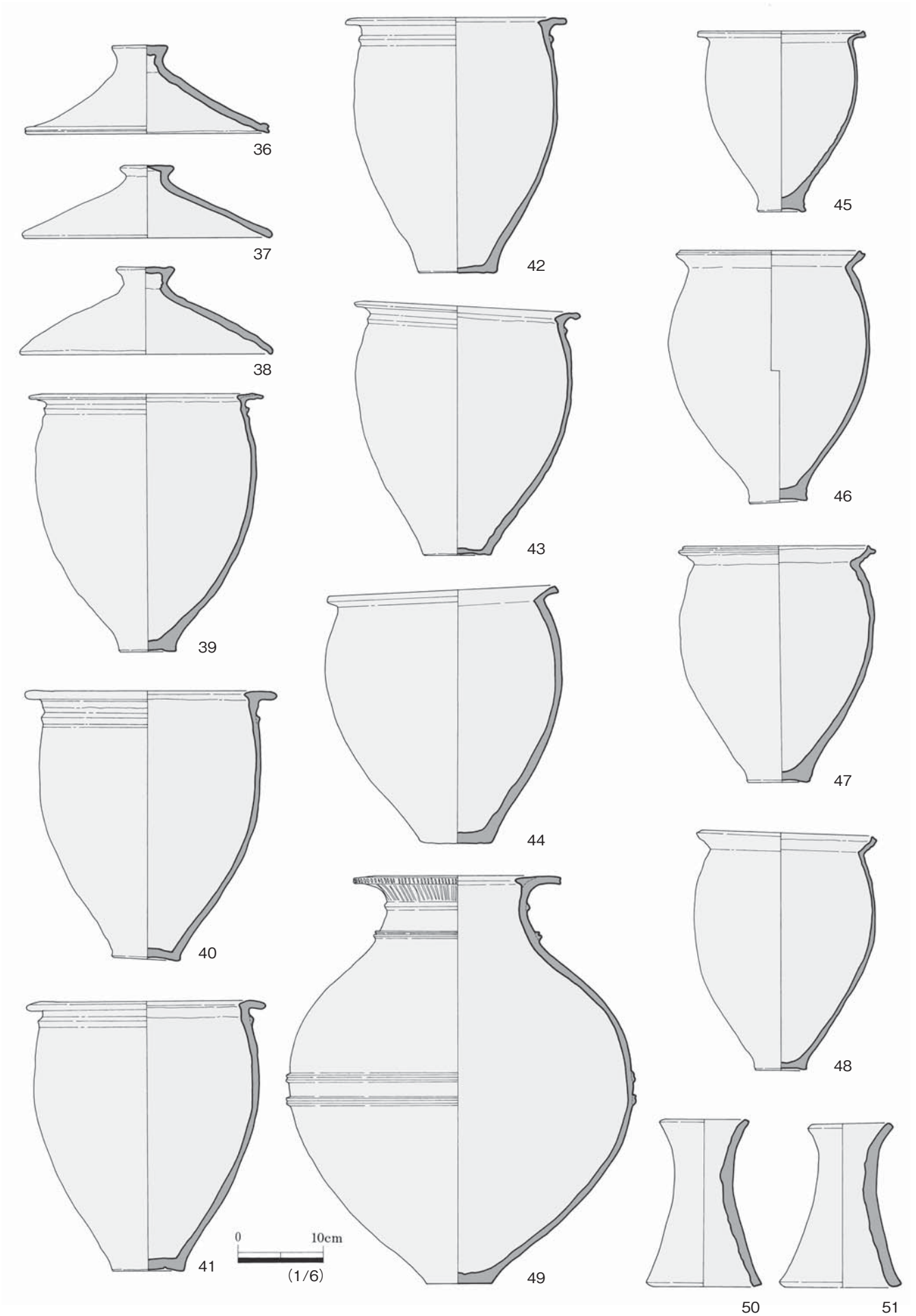


图12 弥生土器③

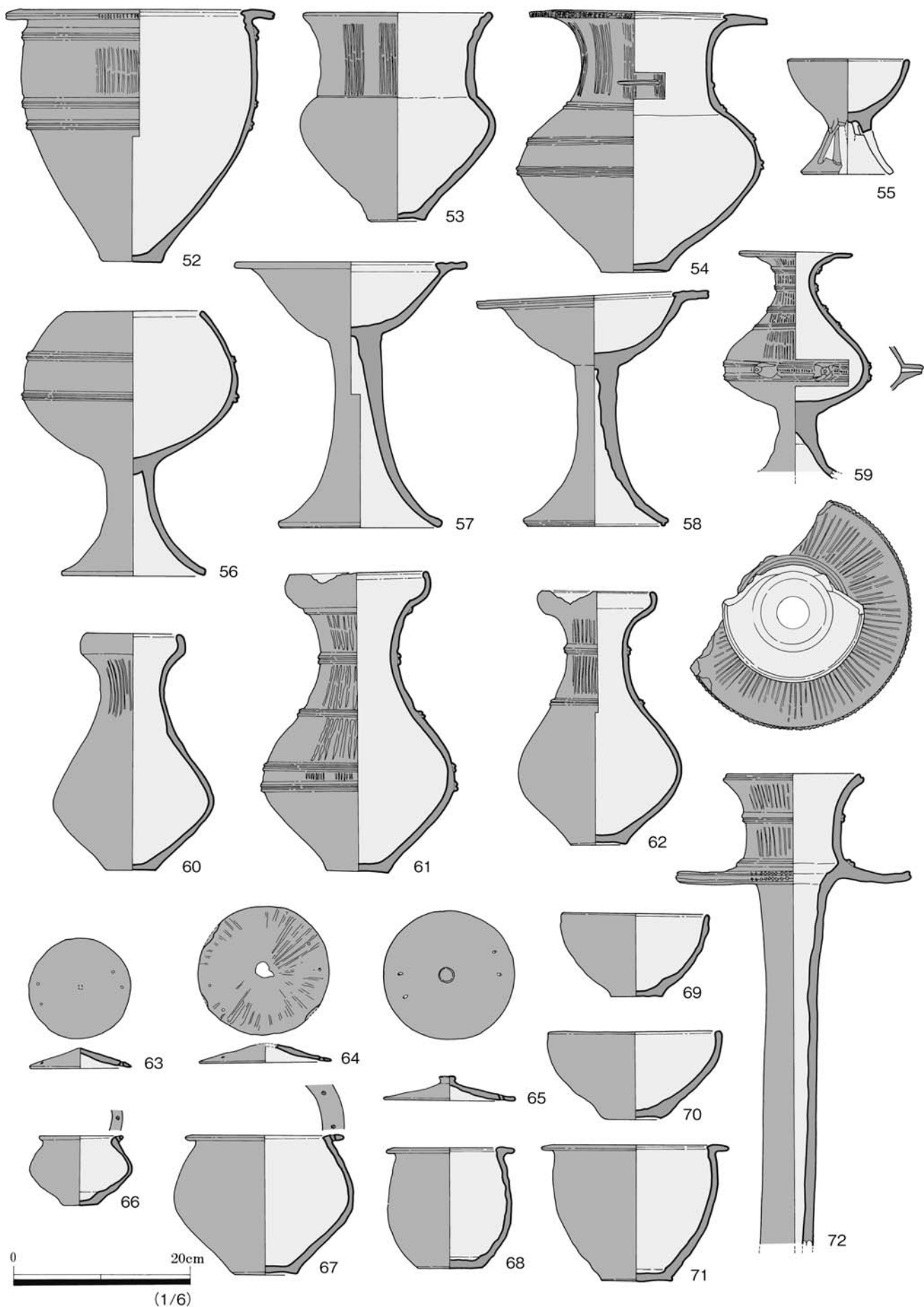


图13 弥生土器④

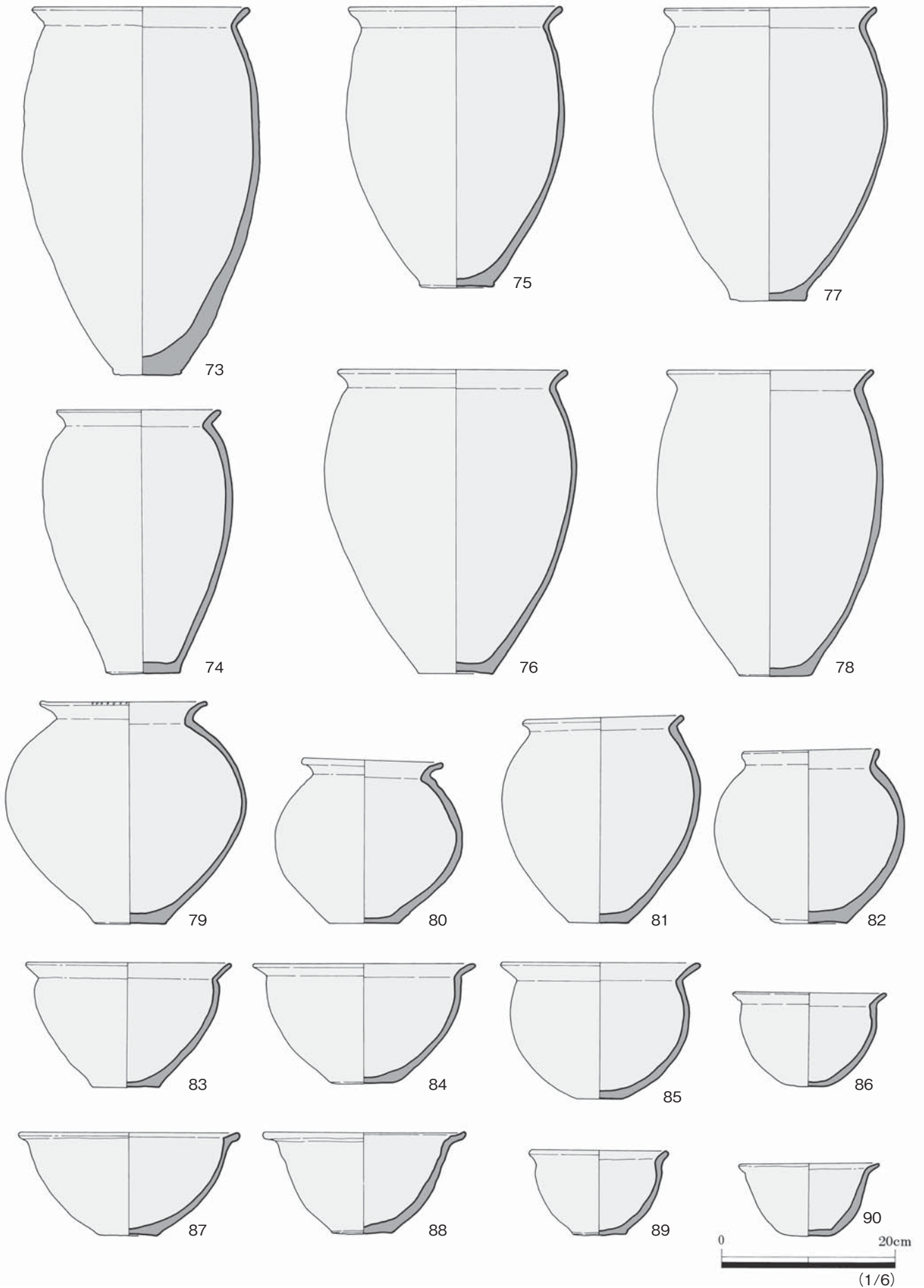


图14 弥生土器⑤

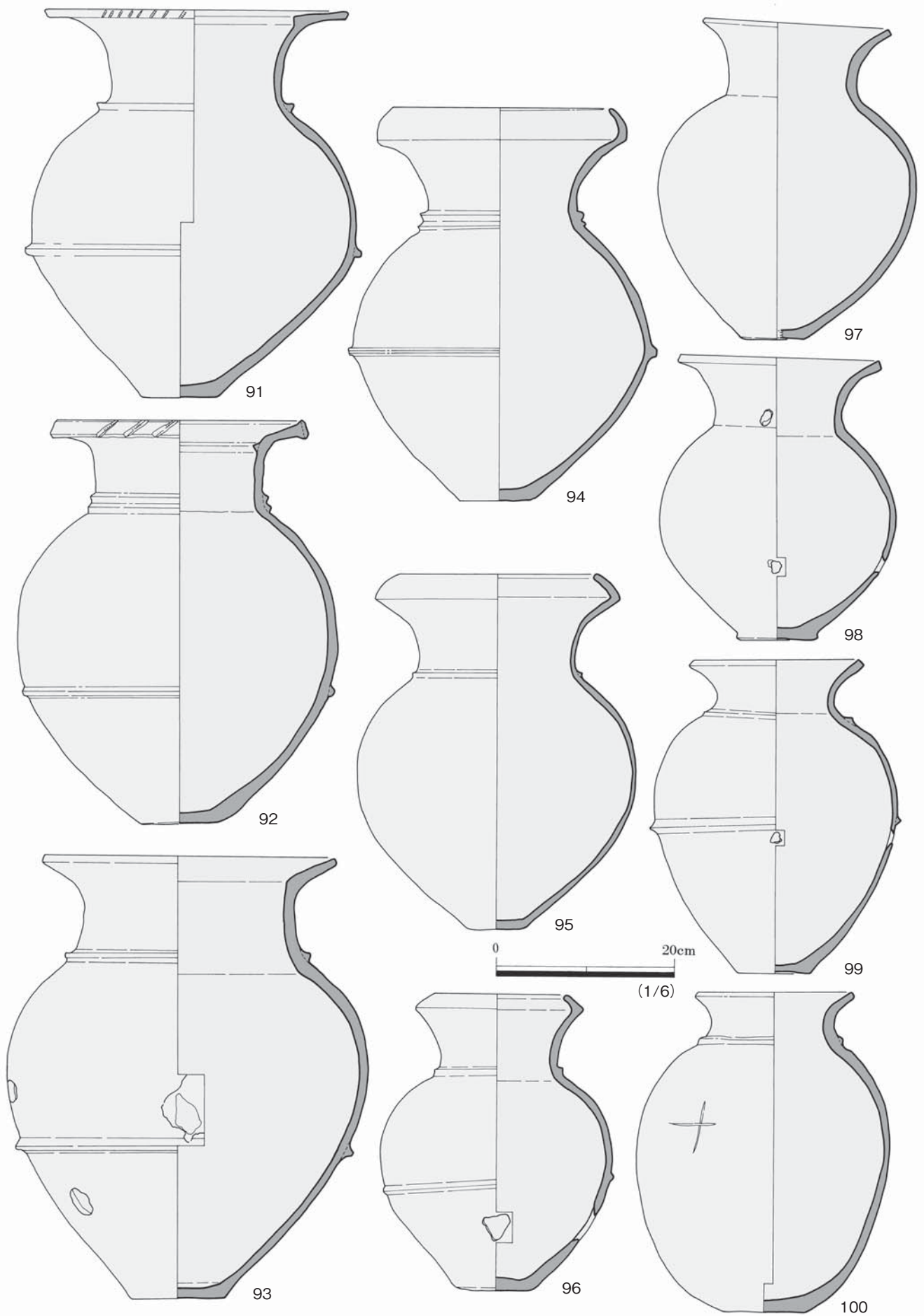


图15 弥生土器⑥

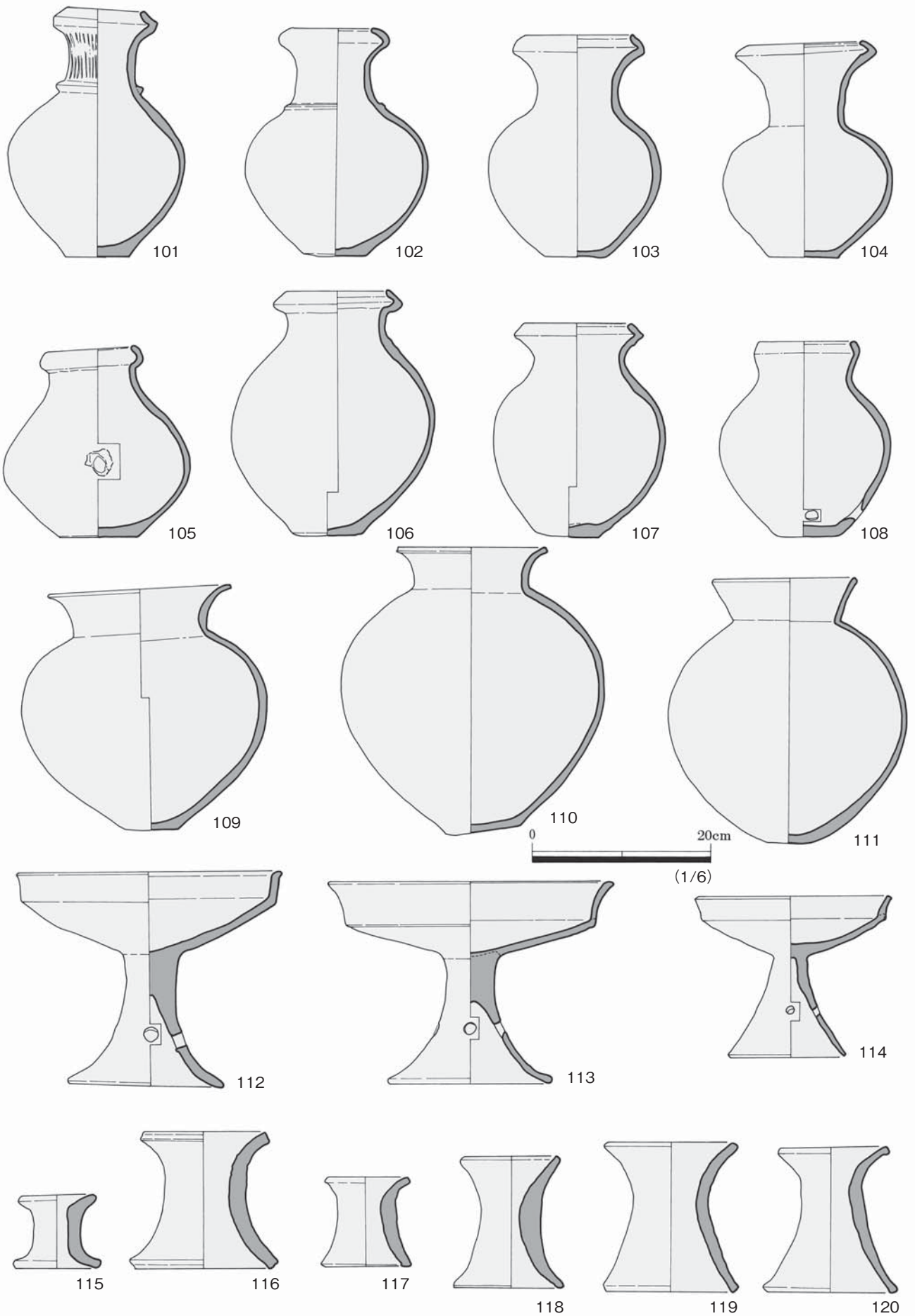


图16 弥生土器⑦

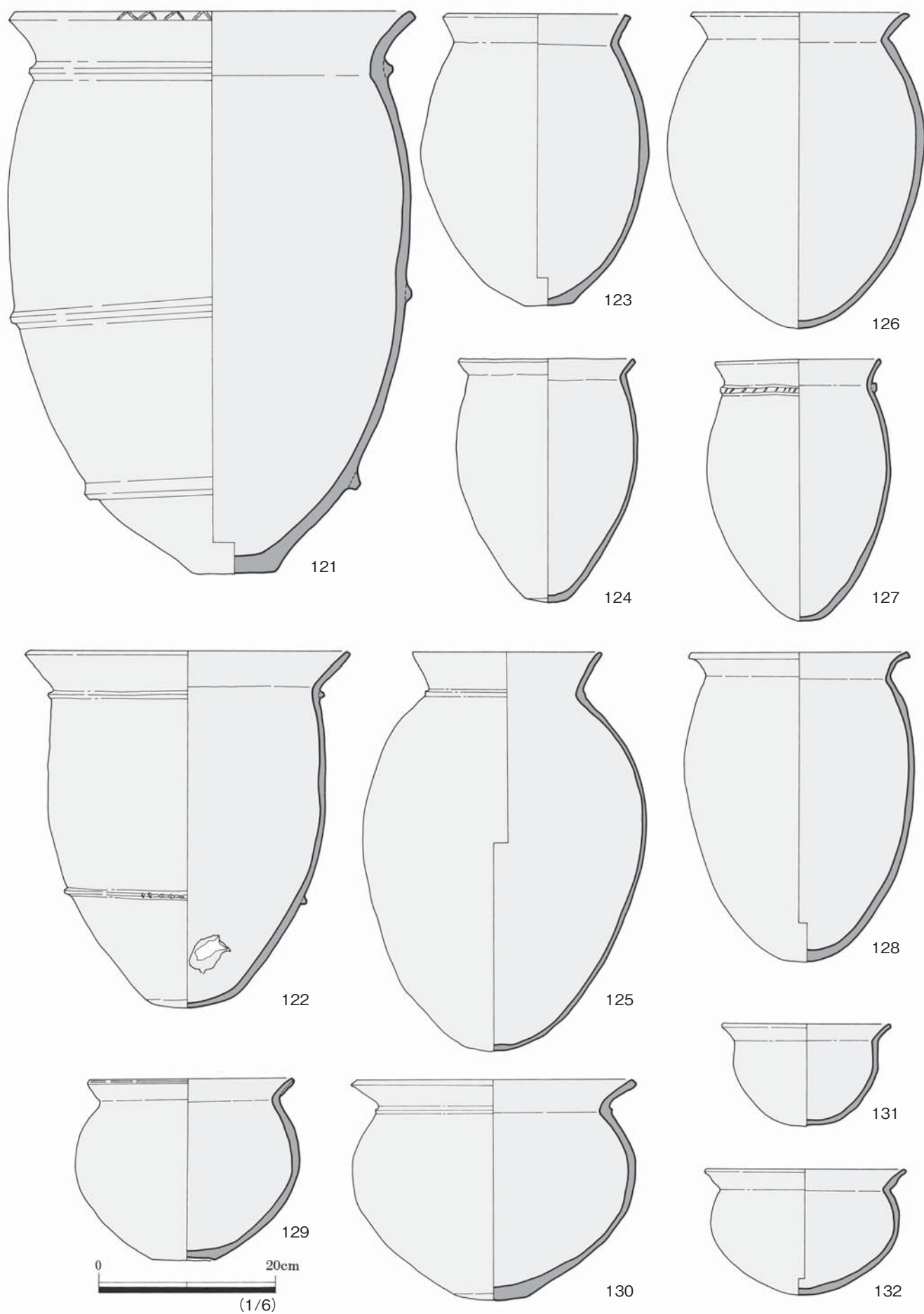


图17 弥生土器⑧

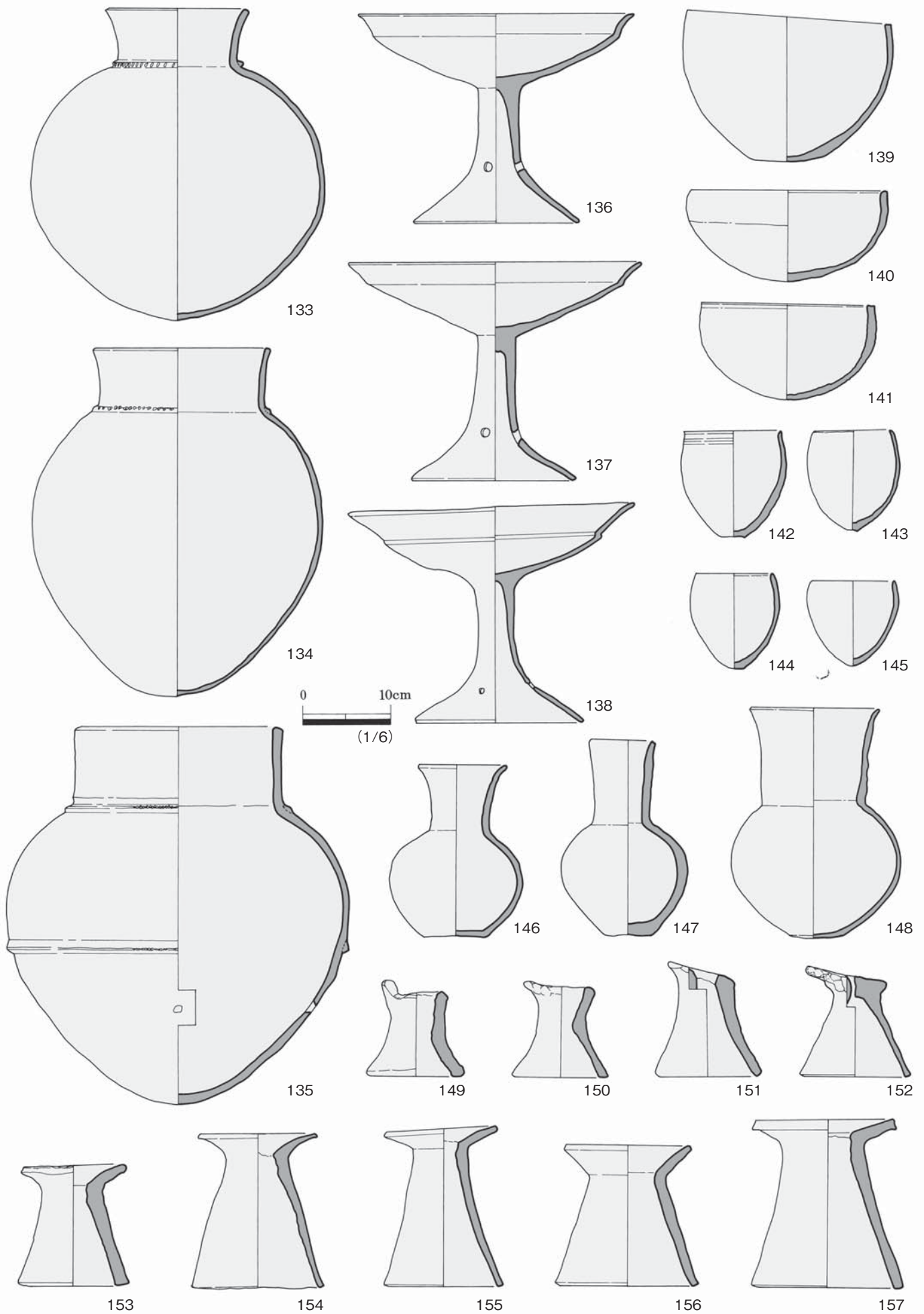


图18 弥生土器⑨

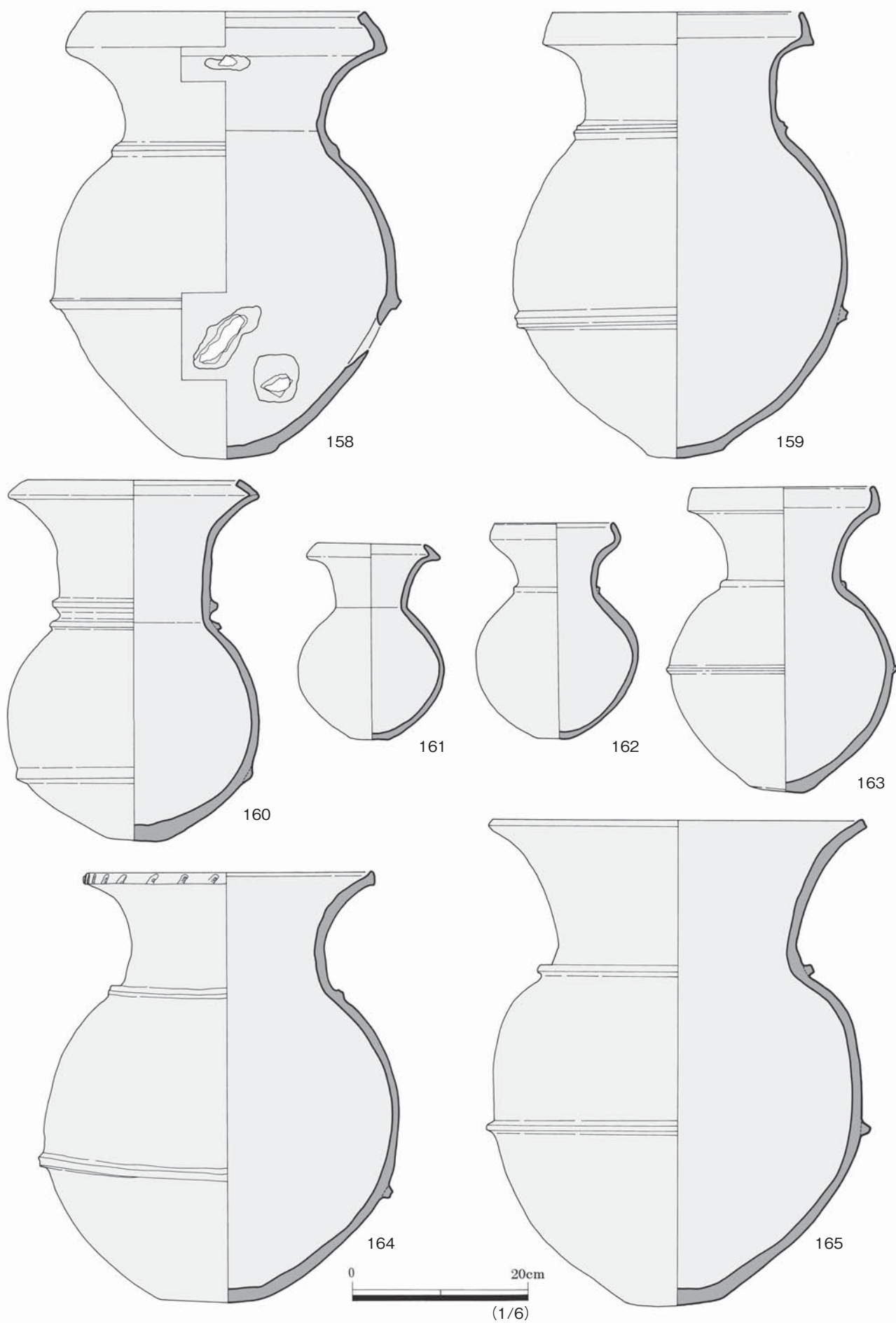


图19 弥生土器⑩

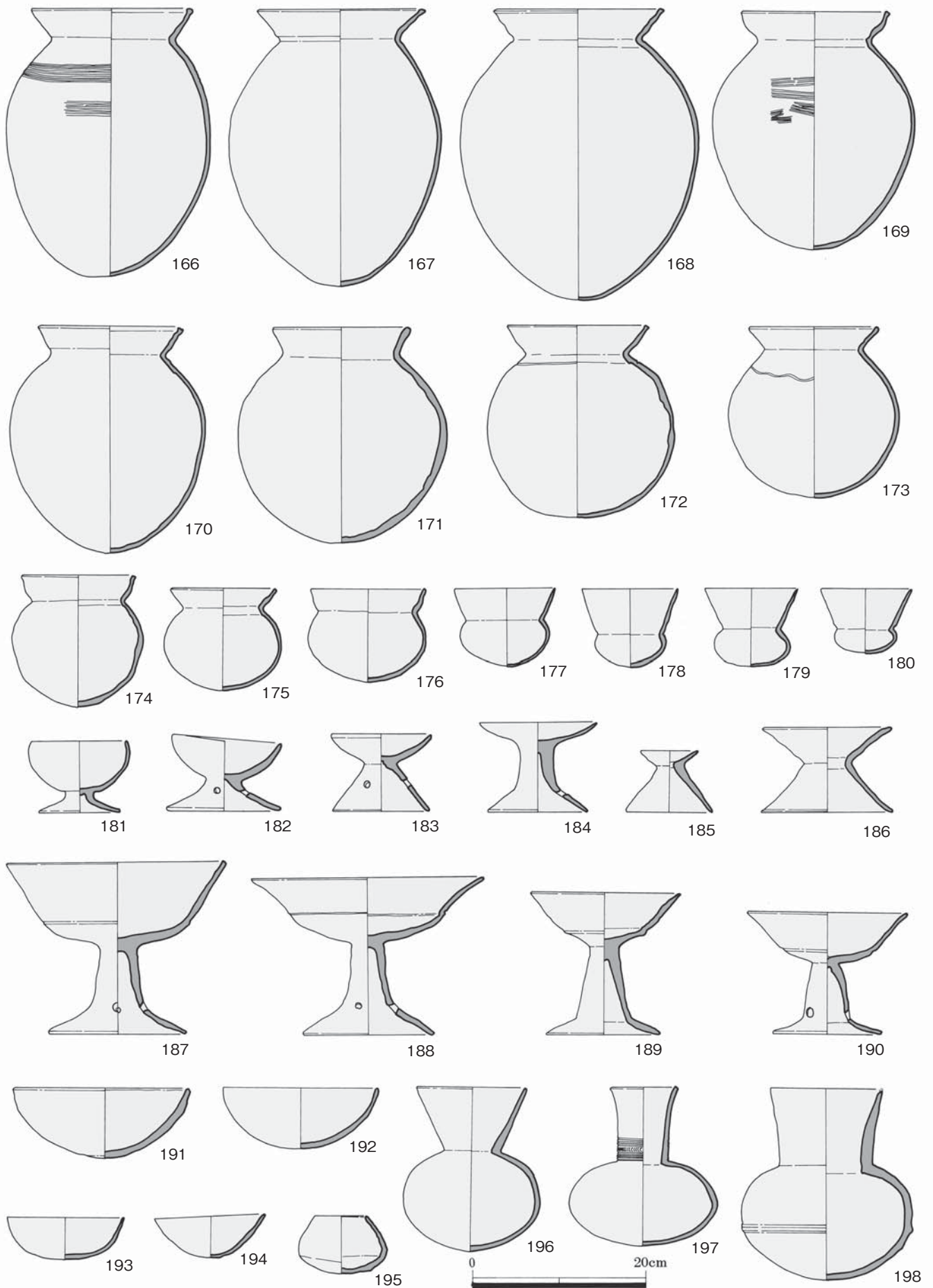


图20 弥生土器①

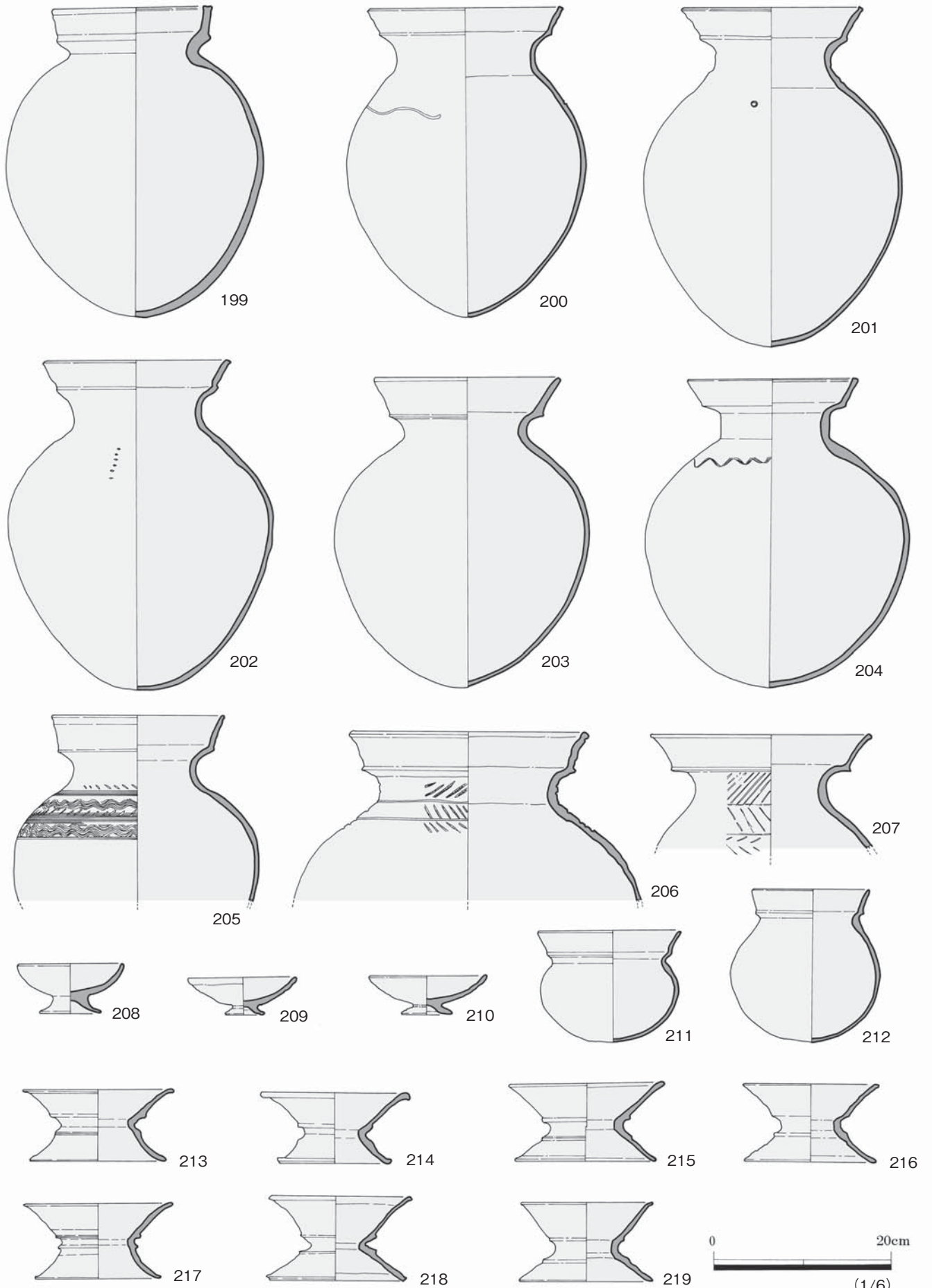


图21 弥生土器⑫

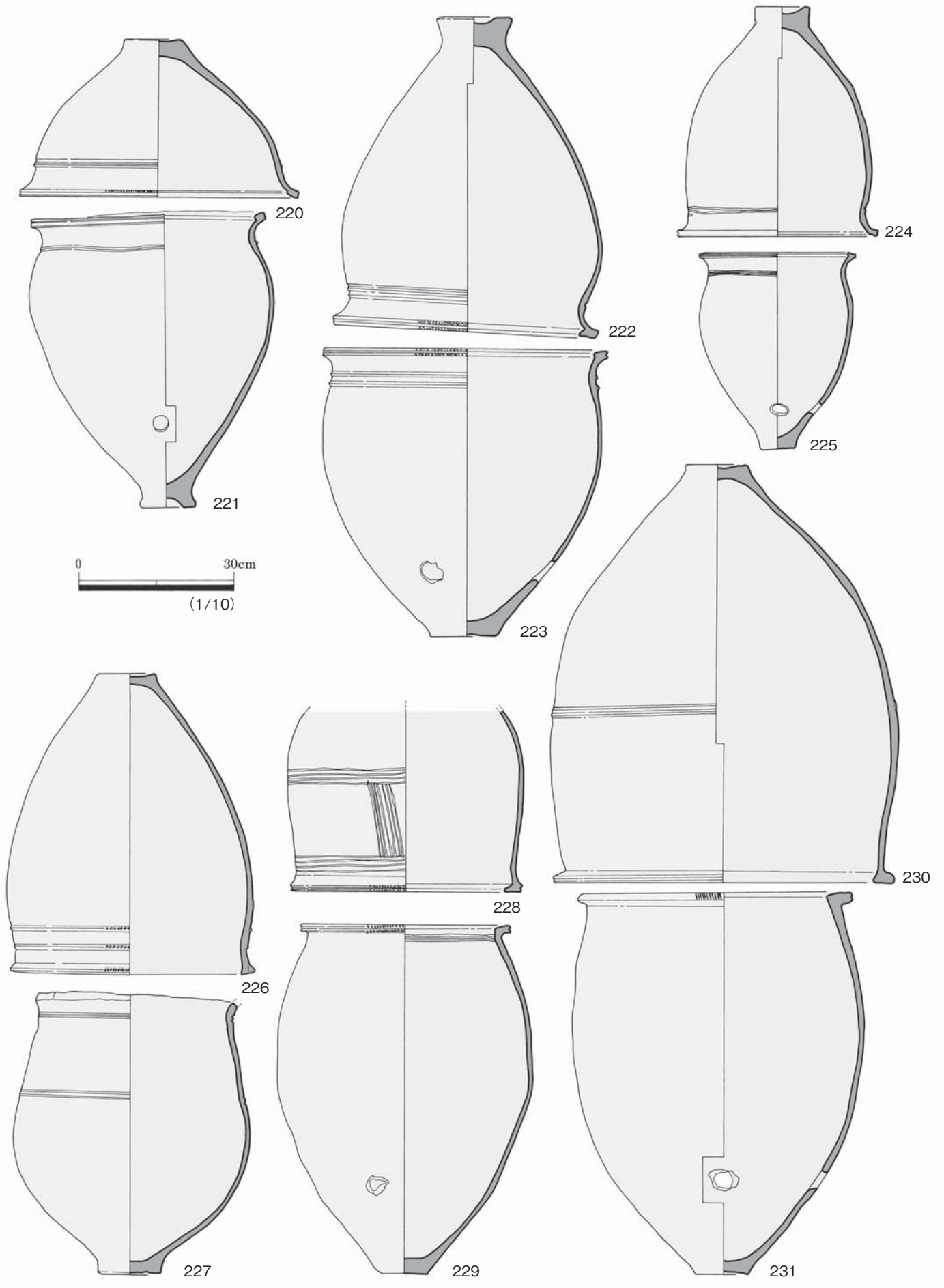


图22 弥生土器⑬

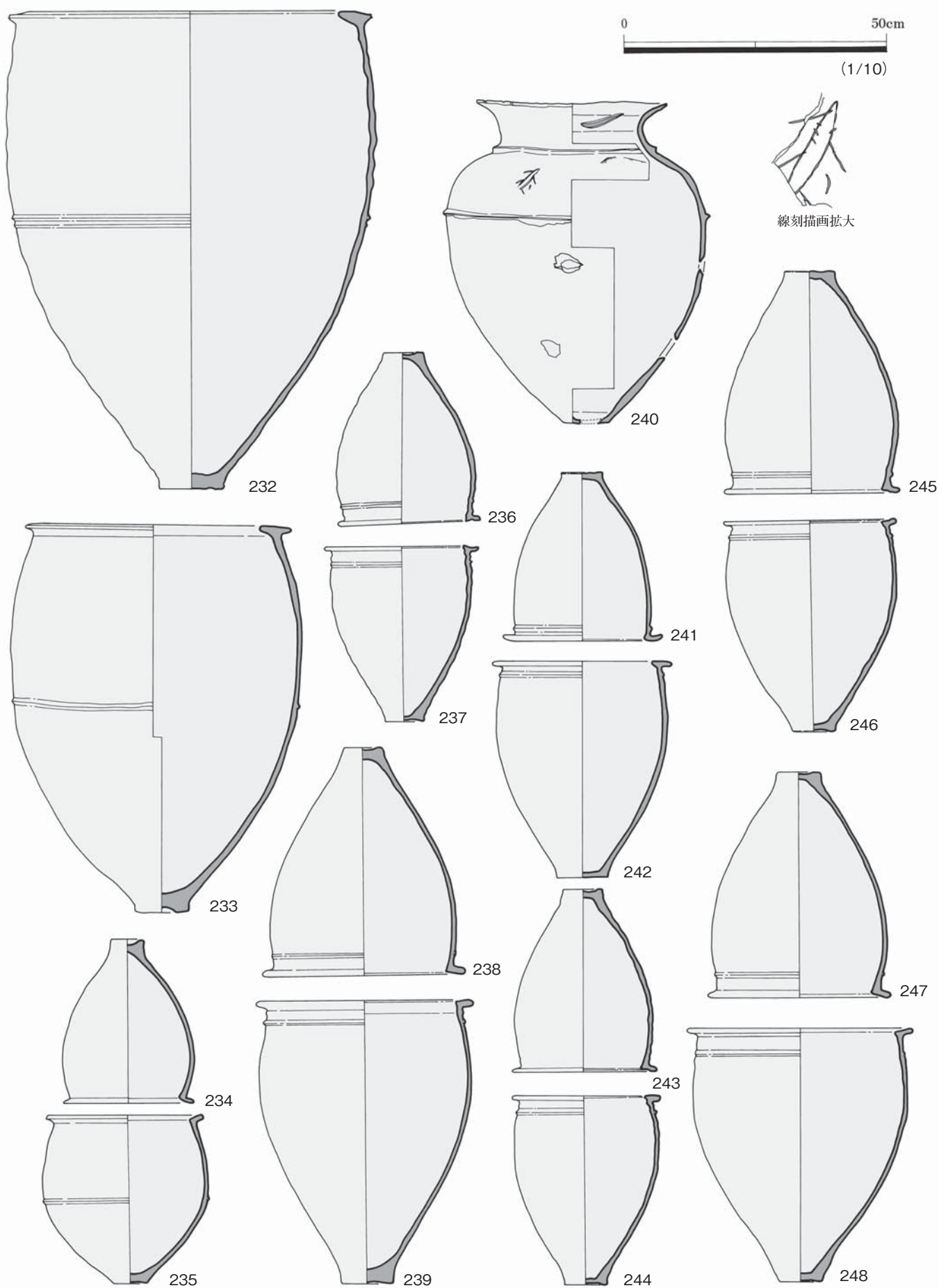


图23 弥生土器⑭

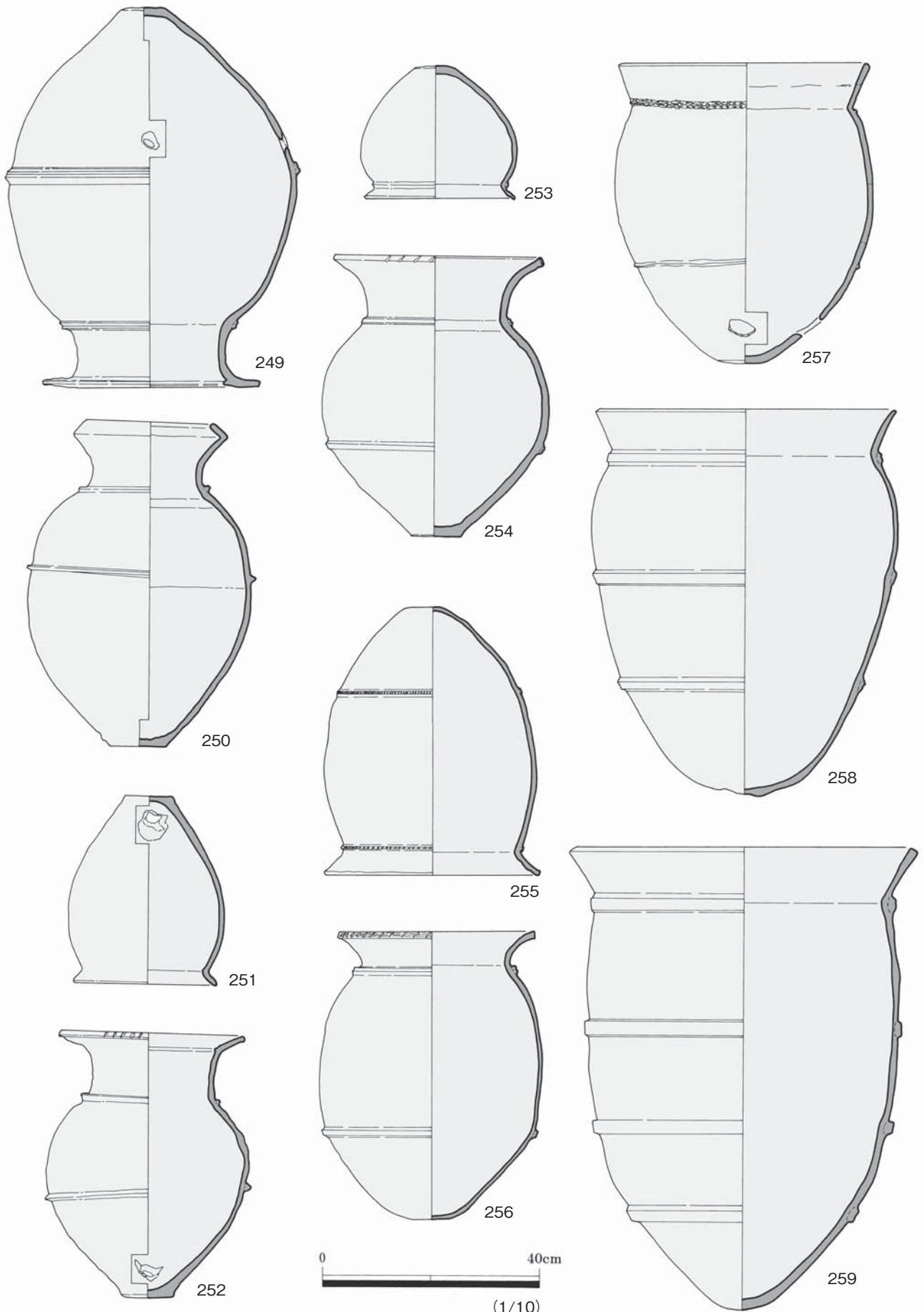


图24 弥生土器⑤

表4 掲載資料目録 (弥生土器・古式土師器)

掲載資料No.	種別	出土遺跡名	掲載資料名	資料ID	掲載報告書
1	原の辻 I期 土器資料	原の辻遺跡	甕	NH009025001	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
2		原の辻遺跡	甕	NH009025004	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
3		原の辻遺跡	甕	NH037015042	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第37集
4		原の辻遺跡	甕	NH009025002	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
5		原の辻遺跡	甕	NH009037002	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
6		原の辻遺跡	甕	NK124046010	長崎県文化財調査報告書第124集
7		原の辻遺跡	甕	NK124046012	長崎県文化財調査報告書第124集
8		原の辻遺跡	甕	NH009037003	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
9		原の辻遺跡	甕	AS009043018	芦辺町文化財調査報告書第9集
10		原の辻遺跡	甕	HH002025003	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第2集
11		原の辻遺跡	甕	NK124046009	長崎県文化財調査報告書第124集
12		原の辻遺跡	甕	NK124046013	長崎県文化財調査報告書第124集
13		原の辻遺跡	甕	AS009043017	芦辺町文化財調査報告書第9集
14		原の辻遺跡	甕	NH019068020	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
15		原の辻遺跡	甕	NH033021012	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集
16		原の辻遺跡	壺	NH009028031	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
17		原の辻遺跡	穿孔甕	NH022017007	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集
18	原の辻 II期 土器資料	原の辻遺跡	甕蓋	NH019069011	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
19		原の辻遺跡	甕蓋	NH009022025	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
20		原の辻遺跡	甕蓋	AS012034015	芦辺町文化財調査報告書第12集
21		原の辻遺跡	甕	NH019068019	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
22		原の辻遺跡	甕	NH019074005	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
23		原の辻遺跡	甕	NH037024087	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第37集
24		原の辻遺跡	壺	NH033024055	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集
25		原の辻遺跡	壺	NH022029007	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集
26		原の辻遺跡	壺	NM006007048	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集
27		原の辻遺跡	鉢	NH009022028	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
28		原の辻遺跡	鉢	NH019047064	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
29		原の辻遺跡	鉢	NH019047062	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
30		原の辻遺跡	壺	NM006014136	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集
31		原の辻遺跡	壺	NH009021015	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
32		原の辻遺跡	壺	NH009028041	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
33		原の辻遺跡	器台	NH022029006	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集
34		原の辻遺跡	器台	NH019053014	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
35		原の辻遺跡	脚付鉢	NH009022030	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
36		原の辻 III期 土器資料	原の辻遺跡	甕蓋	NH009004031
37	原の辻遺跡		甕蓋	NH019069012	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
38	原の辻遺跡		甕蓋	NH009004032	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
39	原の辻遺跡		甕	NH009010009	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
40	原の辻遺跡		甕	NH019059009	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
41	原の辻遺跡		甕	NH019059010	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
42	原の辻遺跡		甕	NH019059012	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
43	原の辻遺跡		甕	NH009010011	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
44	原の辻遺跡		甕	NH026075004	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集
45	原の辻遺跡		甕(跳上げ口縁)	NH001131010	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集
46	原の辻遺跡		甕(跳上げ口縁)	NH019060018	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
47	原の辻遺跡		甕(跳上げ口縁)	NH009011016	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
48	原の辻遺跡		甕(跳上げ口縁)	NH018135004	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
49	原の辻遺跡		壺	IK012202019	壱岐市文化財調査報告書第12集
50	原の辻遺跡		器台	NH009013040	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
51	原の辻遺跡		器台	NH009013041	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
52	原の辻遺跡		丹塗り甕	NH019059013	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
53	原の辻遺跡		丹塗り壺	NH009006044	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
54	原の辻遺跡		丹塗り壺	NH033042011	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集
55	原の辻遺跡		丹塗り透し脚付鉢	NH004042035	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第4集
56	原の辻遺跡		丹塗り脚付鉢	NH026073010	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集

表4 掲載資料目録 (弥生土器・古式土師器)

掲載資料No.	種別	出土遺跡名	掲載資料名	資料ID	掲載報告書
57	原の辻 Ⅲ期 土器資料	原の辻遺跡	丹塗り高坏	NH022068011	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集
58		原の辻遺跡	丹塗り高坏	NH009007060	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
59		原の辻遺跡	丹塗り注口土器	NH009006045	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
60		原の辻遺跡	丹塗り袋状口縁壺	NH019054031	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
61		原の辻遺跡	丹塗り袋状口縁壺	NH009039023	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
62		原の辻遺跡	丹塗り袋状口縁壺	NH009006055	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
63		原の辻遺跡	丹塗り小壺蓋	NH026126013	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集
64		原の辻遺跡	丹塗り小壺蓋	NH026126012	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集
65		原の辻遺跡	丹塗り小壺蓋	NH011089005	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
66		原の辻遺跡	丹塗り小壺	NH019054022	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
67		原の辻遺跡	丹塗り壺	NH019054025	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
68		原の辻遺跡	丹塗り甕壺	NH019059015	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
69		原の辻遺跡	丹塗り鉢	NH009007057	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
70		原の辻遺跡	丹塗り鉢	NH019055037	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
71	原の辻遺跡	丹塗り鉢	NH019059014	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集	
72	原の辻遺跡	丹塗り筒形器台	NH019061027	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集	
73	原の辻 Ⅳ期 土器資料	原の辻遺跡	甕	AS012101013	芦辺町文化財調査報告書第12集
74		原の辻遺跡	甕	NM006015140	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集
75		原の辻遺跡	甕	NH018135006	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
76		原の辻遺跡	甕	HH003021014	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
77		原の辻遺跡	甕	AS012101017	芦辺町文化財調査報告書第12集
78		原の辻遺跡	甕	HH003022019	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
79		原の辻遺跡	甕	HH003025031	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
80		原の辻遺跡	甕	NH018137010	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
81		原の辻遺跡	甕	HH003022017	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
82		原の辻遺跡	甕	HH003025040	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
83		原の辻遺跡	鉢	NH018056001	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
84		原の辻遺跡	鉢	HH003034128	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
85		原の辻遺跡	鉢	NH024021028	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集
86		原の辻遺跡	鉢	HH003029073	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
87		原の辻遺跡	鉢	NH019047062	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
88		原の辻遺跡	鉢	NH019047064	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
89		原の辻遺跡	鉢	NH019047065	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
90		原の辻遺跡	鉢	NM006015142	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集
91		原の辻遺跡	壺	NH029067002	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集
92		原の辻遺跡	壺	NH011140014	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
93		原の辻遺跡	壺	HH003026044	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
94		原の辻遺跡	壺	NH025025001	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集
95		原の辻遺跡	壺	IK010048062	壱岐市文化財調査報告書第10集
96		原の辻遺跡	壺	HH003027054	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
97		原の辻遺跡	壺	HH003026050	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
98		原の辻遺跡	壺	HH003026051	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
99		原の辻遺跡	壺	HH003026046	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
100		原の辻遺跡	壺	NH018073001	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
101		原の辻遺跡	壺	IK010049064	壱岐市文化財調査報告書第10集
102		原の辻遺跡	壺	HH003025036	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
103		原の辻遺跡	壺	NH018070003	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
104		原の辻遺跡	壺	NH019045052	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
105		原の辻遺跡	壺	NH009006056	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集
106		原の辻遺跡	壺	NH018070002	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
107		原の辻遺跡	壺	NH018070008	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集
108		原の辻遺跡	壺	HH001025011	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第1集
109		原の辻遺跡	壺	NH029071006	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集
110		原の辻遺跡	壺	HH003026049	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
111	原の辻遺跡	壺	NH036032039	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第36集	
112	原の辻遺跡	高坏	HH003029080	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	

表4 掲載資料目録 (弥生土器・古式土師器)

掲載資料No.	種別	出土遺跡名	掲載資料名	資料ID	掲載報告書	
113	原の辻 IV期 土器資料	原の辻遺跡	高坏	IK012202020	沓崎市文化財調査報告書第12集	
114		原の辻遺跡	高坏	HH003029081	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
115		原の辻遺跡	器台	HH003030087	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
116		原の辻遺跡	器台	IK010064152	沓崎市文化財調査報告書第10集	
117		原の辻遺跡	器台	HH003030088	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
118		原の辻遺跡	器台	IK010064148	沓崎市文化財調査報告書第10集	
119		原の辻遺跡	器台	IK010064150	沓崎市文化財調査報告書第10集	
120		原の辻遺跡	器台	HH003030084	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
121		原の辻 V期 土器資料	原の辻遺跡	甕	NH040056013	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第40集
122			原の辻遺跡	甕	NH011193008	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
123			原の辻遺跡	甕	NH040055003	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第40集
124	原の辻遺跡		甕	NH033017009	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集	
125	原の辻遺跡		甕	NH027023037	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
126	原の辻遺跡		甕	HH002031031	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第2集	
127	原の辻遺跡		甕	NH026026005	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集	
128	原の辻遺跡		甕	IK014139101	沓崎市文化財調査報告書第14集	
129	原の辻遺跡		甕	IK010046053	沓崎市文化財調査報告書第10集	
130	原の辻遺跡		甕	NH025020004	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集	
131	原の辻遺跡		甕	NH025020005	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集	
132	原の辻遺跡		甕	NH011141018	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集	
133	原の辻遺跡		直口壺	IK014064015	沓崎市文化財調査報告書第14集	
134	原の辻遺跡		直口壺	NH027022035	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
135	原の辻遺跡		直口壺	NH040048017	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第40集	
136	原の辻遺跡		高坏	NH011141021	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集	
137	原の辻遺跡		高坏	NH011141025	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集	
138	原の辻遺跡		高坏	NH033113008	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集	
139	原の辻遺跡		鉢	NH027063004	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
140	原の辻遺跡		鉢	NH011141017	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集	
141	原の辻遺跡		鉢	AS012106050	芦辺町文化財調査報告書第12集	
142	原の辻遺跡		鉢	NH024066040	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集	
143	原の辻遺跡		鉢	NH024066041	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集	
144	原の辻遺跡		鉢	IK010066178	沓崎市文化財調査報告書第10集	
145	原の辻遺跡		鉢	NH025020006	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集	
146	原の辻遺跡		長頸壺	NH025022003	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集	
147	原の辻遺跡		長頸壺	NH024021024	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集	
148	原の辻遺跡		長頸壺	NH011251002	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集	
149	原の辻遺跡		土製支脚	IK010066172	沓崎市文化財調査報告書第10集	
150	原の辻遺跡		土製支脚	IK010066175	沓崎市文化財調査報告書第10集	
151	原の辻遺跡		土製支脚	IK010066173	沓崎市文化財調査報告書第10集	
152	原の辻遺跡		器台	IK010066174	沓崎市文化財調査報告書第10集	
153	原の辻遺跡		器台	IK010065166	沓崎市文化財調査報告書第10集	
154	原の辻遺跡		器台	NH024060021	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集	
155	原の辻遺跡		器台	IK010065161	沓崎市文化財調査報告書第10集	
156	原の辻遺跡		器台	NH024047080	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集	
157	原の辻遺跡		器台	IK010065164	沓崎市文化財調査報告書第10集	
158	原の辻遺跡		壺	NM006015144	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集	
159	原の辻遺跡		壺	AS006044001	芦辺町文化財調査報告書第6集	
160	原の辻遺跡		壺	IK010048061	沓崎市文化財調査報告書第10集	
161	原の辻遺跡		壺	NM006003008	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集	
162	原の辻遺跡		壺	IK010049065	沓崎市文化財調査報告書第10集	
163	原の辻遺跡		壺	NH031070053	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集	
164	原の辻遺跡		壺	NH025025005	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集	
165	原の辻遺跡		壺	IK010047059	沓崎市文化財調査報告書第10集	
166	原の辻 VI期 土器資料		原の辻遺跡	甕(畿内系)	NH024045047	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集
167	原の辻遺跡		甕(畿内系)	NH027026056	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
168	原の辻遺跡		甕(畿内系)	NH016045016	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集	

表4 掲載資料目録 (弥生土器・古式土師器)

掲載資料No.	種別	出土遺跡名	掲載資料名	資料ID	掲載報告書
169	原の辻 VI期 土器資料	原の辻遺跡	甕 (畿内系)	NH016045017	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
170		原の辻遺跡	甕 (畿内系)	NH016045014	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
171		原の辻遺跡	甕 (畿内系)	NH001132006	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集
172		原の辻遺跡	甕 (畿内系)	NH016044006	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
173		原の辻遺跡	甕 (畿内系)	NH024045046	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集
174		原の辻遺跡	小形丸底埴(畿内系)	NH016046026	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
175		原の辻遺跡	小形丸底埴(畿内系)	NH016044003	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
176		原の辻遺跡	小形丸底埴(畿内系)	NK124048018	長崎県文化財調査報告書第124集
177		原の辻遺跡	小形丸底埴(畿内系)	NH027029075	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集
178		原の辻遺跡	小形丸底埴(畿内系)	HH003028068	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
179		原の辻遺跡	小形丸底埴(畿内系)	NH027029068	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集
180		原の辻遺跡	小形丸底埴(畿内系)	NH016046020	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
181		原の辻遺跡	脚付鉢 (畿内系)	HH002031035	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第2集
182		原の辻遺跡	脚付鉢 (畿内系)	NH031020015	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
183		原の辻遺跡	器台 (畿内系)	NH027030089	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集
184		原の辻遺跡	器台 (畿内系)	NH027030090	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集
185		原の辻遺跡	器台 (畿内系)	NK124055065	長崎県文化財調査報告書第124集
186		原の辻遺跡	器台 (畿内系)	NH016047043	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
187		原の辻遺跡	高坏 (畿内系)	NH016047035	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
188		原の辻遺跡	高坏 (畿内系)	NK124053053	長崎県文化財調査報告書第124集
189		原の辻遺跡	高坏 (畿内系)	NH001133020	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集
190		原の辻遺跡	高坏 (畿内系)	NH016047033	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
191		原の辻遺跡	鉢 (畿内系)	NH011197024	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
192		原の辻遺跡	鉢 (畿内系)	NK124053047	長崎県文化財調査報告書第124集
193		原の辻遺跡	鉢 (畿内系)	NH031015003	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
194		原の辻遺跡	鉢 (畿内系)	NH031015002	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
195		原の辻遺跡	鉢 (畿内系)	NK124048015	長崎県文化財調査報告書第124集
196		原の辻遺跡	長頸壺 (畿内系)	NH031055001	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
197		原の辻遺跡	長頸壺 (畿内系)	HH003028064	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集
198	原の辻遺跡	長頸壺 (畿内系)	AS012109004	芦辺町文化財調査報告書第12集	
199	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH028108001	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第28集	
200	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH016046028	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集	
201	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH016049009	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集	
202	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH016049008	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集	
203	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH027029067	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
204	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	HH003028071	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
205	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	HH003028070	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
206	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NK124048014	長崎県文化財調査報告書第124集	
207	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH027029064	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
208	原の辻遺跡	脚付鉢 (山陰系)	HH003030098	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
209	原の辻遺跡	脚付鉢 (山陰系)	NK124055069	長崎県文化財調査報告書第124集	
210	原の辻遺跡	脚付鉢 (山陰系)	NK124055068	長崎県文化財調査報告書第124集	
211	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH027029074	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
212	原の辻遺跡	二重口縁壺(山陰系)	NH026068008	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集	
213	原の辻遺跡	鼓形器台 (山陰系)	HH003030096	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
214	原の辻遺跡	鼓形器台 (山陰系)	NH027035016	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集	
215	原の辻遺跡	鼓形器台 (山陰系)	NH026068009	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集	
216	原の辻遺跡	鼓形器台 (山陰系)	AS015062051	芦辺町文化財調査報告書第15集	
217	原の辻遺跡	鼓形器台 (山陰系)	HH003030097	原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集	
218	原の辻遺跡	鼓形器台 (山陰系)	IK014092175	壱岐市文化財調査報告書第14集	
219	原の辻遺跡	鼓形器台 (山陰系)	NH011185036	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集	

表4 掲載資料目録(弥生土器)

掲載資料No.	種別	出土遺跡名	掲載資料名	資料ID	掲載報告書
220	前期後葉 ～ 中期初頭 甕棺文化	原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH035033K45上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
221		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH035033K45下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
222		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH035034K47上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
223		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH035034K47下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
224		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH035028K32上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
225		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH035028K32下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
226		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH035033K46上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
227		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH035033K46下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
228		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	IS006025K5上	石田町文化財調査報告書第6集
229		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	IS006025K5下	石田町文化財調査報告書第6集
230		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH035017～018K2上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
231		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH035017～018K2下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
232		中期前葉 ～ 中期末 甕棺文化	原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH006019020下
233	原の辻遺跡		甕棺(下甕)	NH035036K50下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
234	原の辻遺跡		甕棺(上甕)	NH035019K5上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
235	原の辻遺跡		甕棺(下甕)	NH035019K5下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
236	原の辻遺跡		甕棺(上甕)	NH006015001上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集
237	原の辻遺跡		甕棺(下甕)	NH006015002下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集
238	原の辻遺跡		甕棺(上甕)	IS006029016上	石田町文化財調査報告書第6集
239	原の辻遺跡		甕棺(下甕)	IS006029016下	石田町文化財調査報告書第6集
240	原の辻遺跡		鯨線刻絵画土器	NH035025～026K23下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
241	原の辻遺跡		甕棺(上甕)	NH022065001上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集
242	原の辻遺跡		甕棺(下甕)	NH022065002下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集
243	原の辻遺跡		甕棺(上甕)	NH006015003上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集
244	原の辻遺跡		甕棺(下甕)	NH006015004下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集
245	原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH006018014上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集	
246	原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH006018015下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第6集	
247	原の辻遺跡	甕棺(上甕)	IS006031022上	石田町文化財調査報告書第6集	
248	原の辻遺跡	甕棺(下甕)	IS006031022下	石田町文化財調査報告書第6集	
249	弥生後期 甕棺文化	原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH039061004上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集
250		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH039061005下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集
251		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH011034K3上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
252		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH011034K3下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
253		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	NH011256K5上	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
254		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH011256K5下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
255		原の辻遺跡	甕棺(上甕)	IK014106260上	沓崎市文化財調査報告書第14集
256		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	IK014106261下	沓崎市文化財調査報告書第14集
257		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	IK012166002下	沓崎市文化財調査報告書第12集
258		原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH011298K1下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
259	原の辻遺跡	甕棺(下甕)	NH011298K2下	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集	

2. 大陸・半島系土器

原の辻遺跡ではこれまで、数多くの大陸・半島系土器が出土している。その内容は、韓半島南部の粘土帯土器とその影響を受けた土器、楽浪系土器とその影響を受けた土器、三韓系土器とその影響を受けた土器、陶質土器などである。本稿では、土器分類については次のとおりとする。

- ・粘土帯土器：韓半島から搬入されたとみられる土器を指す。円形粘土帯土器と三角形粘土帯土器などがみられる。また、同時期の壺などの粘土帯が付着しない土器についても本稿では「粘土帯土器」という分類名を用いる。
- ・擬粘土帯土器：韓半島からの搬入品ではなく、日本列島で生産されたとみられる土器を指す。従来、朝鮮系無文土器や擬朝鮮系無文土器という用語が用いられてきたが、粘土帯土器を無文土器から除外する考え方や無文土器という概念自体にも疑義が提起されるに至るなどの近年の動向を鑑み、本稿では粘土帯土器・擬粘土帯土器とした。

全体として弥生土器を志向しているが、口縁の折り返しにのみ粘土帯土器の影響を受けたとみられるものもみられ、このような土器は本来、擬弥生土器とすべきであるが、粘土帯土器か弥生土器かいずれを志向していたかの判別に困難な部分もあるので、本稿では暫定的に全て擬粘土帯土器に包含する。

- ・楽浪系土器：楽浪郡で生産された土器を指す。近年の研究成果により隣接の遼東郡等で生産されたとみられる土器が出土していることがわかってきたが、判明した場合は遼東系土器とする。しかし、その判別は困難な部分があるため、本稿で楽浪系土器としたものには近接する遼東郡や玄菟郡等の土器が含まれている可能性がある。また、楽浪郡設置以前の古朝鮮の土器の実態が明確ではなく、場合によっては古朝鮮の土器が含まれる可能性もある。さらに、近年、帯方郡の土器を判別しようとする研究も現れ始めているが、やはりその弁別は困難で、帯方郡の土器も含めて楽浪「系」土器とする。
- ・擬楽浪系土器：楽浪系土器の影響を受けて日本列島で生産された土器を指す。
- ・三韓系土器：原三国時代の三韓地域で生産された瓦質土器を中心に構成される土器。嶺南地域以外の馬韓の領域の土器も含む。近年、粘土帯土器と瓦質土器の共伴が明らかとなってきたが、原の辻遺跡でその共伴・同時期性を十分に示すことは困難であるので、粘土帯土器は三韓系土器には含まれていない。
- ・列島産格子タタキ土器：三韓系土器の影響を受けて日本列島で生産された格子タタキ土器を指す。
- ・陶質土器：三国時代の陶質土器を指す。

これまで長崎県教育委員会、壱岐市教育委員会及び芦辺町教育委員会・石田町教育委員会、原の辻遺跡保存等協議会等により原の辻遺跡の発掘調査が実施され、調査終了後には調査報告書が刊行されてきた。しかし、諸般の都合により、報告から漏落した大陸・半島系土器も少なくない。そのため、東アジア考古学研究室では、これまで発掘された膨大な量の原の辻遺跡の土器資料全点に対して、大陸・半島系土器が含まれていないか総点検した。その結果、これまで報告されていた資料数に匹敵する量の大陸・半島系土器が出土していたことが判明した。そのため、本書では基本的に平成17年度～平成26年度の調査成果について扱っているが、本項についてはそれ以前の発掘資料も含めた未報告資

料について報告する。しかしながら、時間的な制約により未報告であった不條地区（NH 5 及び NH 9）の粘土帯土器を中心とする約100点の遺物については今回、報告することは叶わなかった。

また、既報告資料についても大陸・半島系土器についての調査・研究の進展により得られた新知見を十分に反映させる必要が生じている。そのため既報告資料についても全点を再点検し、現在の視点における観察表を新たに作成した。

本稿では未報告資料の個体を示す場合は、図25～72の数字で示す。既報告資料の個体を示す場合は次のとおりである。

NH○p△f□-◇⇒原の辻遺跡調査事務所文化財調査報告書第○集△頁第□図の◇番

報告書略号は次のとおりである。

NK = 長崎県文化財調査報告書 NH = 原の辻遺跡調査事務所調査報告書 NM = 長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 AS = 芦辺町文化財調査報告書 IS = 石田町文化財調査報告書 IK = 壱岐市文化財調査報告書 HH = 原の辻遺跡保存等協議会調査報告書

(1) 未報告資料（図25～図72）

未報告資料の点数は566点にのぼるため、個々の土器諸属性については観察表を参照されたい。ここでは、特徴的な遺物について述べることとする。5は三韓系瓦質土器で、外面は平行タタキの後、沈線が施文される。内面はナデである。胴部の屈曲度合から長胴壺ではないかとみられる。22は三韓系瓦質土器の鉢である。内外面とも回転ナデにより調整されるが、焼成は甘い。43は三韓系瓦質土器の短頸壺である。頸部外面には工具痕がみられ、胴部は内外面ともヘラミガキが施される。53は三角形粘土帯土器で、内外面ともナデ調整であり、指押さえがみられる。口径12.3cmで、粘土帯幅も約5mmと小さい。三角形粘土帯土器でも遅い段階に位置づけられる。

80は三韓系瓦質土器で、外面上部には平行タタキ後沈線が施されており、下部は格子タタキが施される。切りあい関係から格子タタキ後平行タタキがなされていることがわかる。88は楽浪系泥質土器である。断面は三角形を呈し、やや端部はやや内湾する。壺の口縁であろうか。

95は粘土帯土器甕口縁部である。粘土帯断面は円形に近く、ヨコナデで調整される。胴部外面と内面の口縁付近はハケメ調整が顕著に残る。全体に漆状の黒色が塗布されている。99は擬粘土帯土器である。口縁部はヨコナデによる調整であるが、胴部外面は横方向のミガキにより調整される。100は粘土帯土器の小鉢である。口縁外面は工具により擦過状に調整され、口縁直下は横方向のハケメ、胴部は縦方向のハケメで調整される。内面にもハケメがみられ指押さえが顕著である。口縁はいびつで、断面も箇所によって形状が異なるほどである。104は粘土帯土器甕である。粘土帯の断面は三角形であるが、ヨコナデと指押さえにより調整される。内面に残る指押さえの間隔は、ちょうど示指・中指・薬指の間隔に近い。胴部外面には縦方向のミガキ状の調整がみられる。105は粘土帯土器としては異質な土器でやや肥厚する外反口縁の甕である。外反部分は指押さえによりなされ、その痕跡が顕著である。口縁直下は横方向のハケメ調整、胴部は縦または斜方向のハケメ調整がなされる。口縁はいびつで直線的ではなく、指押さえ痕が顕著に残るという点では粘土帯土器の気風を感じさせる。106も外反口縁の甕口縁部である。口縁部はヨコナデで、胴部は縦位のハケメ調整がなされる。107は外反口縁の鉢である。口縁直下は指押さえが顕著に残り、胴部は縦位のハケメ調整がなされる。内面は口

表5 未報告大陸・半島系土器観察表④

番号	報告書	地区	遺構・層位	遺構で伴出した遺物の時期	分類	器種	部位	胎土	色調				文様・調整		備考
									外		内		外	内	
									色	Hue	色	hue			
156	NH24	八反	14区 3a層		楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・角閃石	灰白	5Y8/1	灰白	5Y8/1	回転ナデ	回転ナデ	
157	NH24	八反	13区 3a層		楽浪系		口縁部	長石・石英	灰	N6/0	灰	N6/0	回転ナデ	回転ナデ	
158	NH24	八反	4区 3a層		楽浪系		底部	長石・石英・角閃石	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	胴：回転ナデ、底：糸切・ナデ	回転ナデ	
159	NH24	八反	3a層・3b層		三韓系		胴部群	長石・石英・角閃石	灰	5Y5/1	灰	5Y5/1	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
160	NH24	八反	24区 3a層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	N7/0	灰白	N7/0	格子	ナデ	
161	NH24	八反	13区 3a層		陶質		胴部	長石・石英	灰	N6/0	灰	N5/0	ナデ	ナデ	
162	NH24	八反	34区 3層		粘土帯		把手	長石・石英	灰白	7.5Y7/1	灰白	7.5Y7/1	ナデ	-	
163	NH24	八反	3a層・3b層		三韓系		胴部群	長石・石英	灰	N6/0	灰	N6/0	格子	ナデ	
164	NH24	八反	26区 2層		楽浪系		底部	長石・石英・角閃石・赤粒	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	
165	NH24	八反	11区 3層		列島産格子タタキ		胴部	長石・石英	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/4	格子	当て具痕	酸化炭焼成
166	NH24	八反	9区西壁		陶質		胴部	長石・石英・赤粒	灰	N5/0	灰	N5/0	ナデ	ナデ	
167	NH25	八反	3層礫群		楽浪系	短頸壺	胴～底部群	長石・石英・角閃石・金雲母	にぶい黄灰黄灰白	2.5Y6/4 2.5Y6/2 2.5Y7/1	黄灰 灰黄 灰白	2.5Y6/1 2.5Y6/2 2.5Y7/1	頸：ナデ、胴：縄(原体S燃)→沈線	ナデ	
168	NH25	八反	26区 3層礫下		楽浪系	短頸壺	口縁部	長石・石英・金雲母	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	
169	NH25	八反	11区 3層		楽浪系		底部	長石・石英・角閃石・金雲母	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	糸切	回転ナデ	
170	NH25	八反	25区 3層礫		楽浪系		胴部	長石・石英・金雲母	オリーブ黒	5Y3/1	灰黄褐	10YR6/2	回転ナデ	回転ナデ	
171	NH25	八反	11区 3層		楽浪系		胴部	石英・角閃石	黄灰	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)→沈線	当て具痕	
172	NH25	八反					胴部	長石・石英・金雲母	にぶい黄橙褐灰	10YR6/3 10YR5/1	灰黄褐	10YR6/2	肩：ナデ、胴：縄(原体S燃)	ナデ	
173	NH25	八反	29区 3層礫下		楽浪系		胴部	長石・石英・金雲母	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	縄(原体S燃)→沈線	ナデ	
174	NH25	八反	29区 3層礫・2層		楽浪系	壺	底部	長石・石英・角閃石	にぶい黄灰黄	2.5Y6/3 2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	胴：回転ナデ・ケズリ、底：糸切	回転ナデ	
175	NH25	八反	29区 3層礫群		三韓系	短頸壺	口縁部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	灰白 灰黄	2.5Y7/1 2.5Y6/2	頸：回転ナデ、肩：格子	回転ナデ	
176	NH25	八反	25区 3層礫下		三韓系		肩部	長石・石英	灰白	5Y7/1	灰黄	2.5Y6/2	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
177	NH25	八反	21区 2層		楽浪系		底部	石英・角閃石	灰	5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
178	NH25	八反	26区 2層		楽浪系		頸部	長石・角閃石・金雲母	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	磨耗	磨耗	
179	NH25	八反	北区 2層		楽浪系		胴部	石英・角閃石・金雲母	灰黄	2.5Y6/2	黄灰	2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
180	NH25	八反	30区 2層		楽浪系		胴部	長石・金雲母	灰	5Y4/1	灰黄褐	10YR6/2	縄(原体Z燃)	当て具痕	
181	NH25	八反	26区 2層		三韓系		肩部	石英・角閃石	灰	7.5Y5/1	灰	5Y5/1	縄(原体S燃)→沈線	ナデ	
182	NH25	八反	25区 2層		三韓系		肩部	石英・角閃石・金雲母	灰	5Y5/1	灰	N5/0	肩：ナデ、胴：縄(原体S燃)→沈線	ナデ	
183	NH25	八反	25区 3層・10区 2層		三韓系		肩部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰	5Y4/1	灰	5Y5/1	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
184	NH25	八反	北区 2層		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰	5Y6/1	黄灰	2.5Y5/1	縄	ナデ	
185	NH25	八反	北区 2層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y8/1	灰白	5Y7/1	格子	ナデ	
186	NH25	八反	南区 2層		三韓系		肩部	長石・角閃石	灰	5Y5/1	灰	5Y6/1	格子	ナデ	
187	NH25	八反	北区 2層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	2.5Y8/1	灰白	5Y8/1	格子	ナデ	
188	NH25	八反	20区 2層		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰白	2.5Y7/1	黄灰	2.5Y5/1	格子	ナデ	
189	NH25	八反	北区 2層		三韓系		肩部	長石・石英・角閃石	灰白	10YR7/1	灰白	2.5Y7/1	回転ナデ	ナデ	
190	NH26	高元	1号住居址①層	古墳前期	三韓系		肩部	長石・石英・角閃石	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/4	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	軟質
191	NH26	高元	SB2②層	古墳前期	楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	回転ナデ	回転ナデ	
192	NH26	高元	18区 5層		楽浪系		胴部	石英・金雲母	褐灰	10YR5/1	灰黄褐	10YR5/2	回転ナデ	回転ナデ	
193	NH26	高元	18区 4層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	5Y5/1	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)	ナデ	
194	NH26	高元	D2層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N4/0	灰	N4/0	格子	ナデ	
195	NH26	高元	19区 4層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英・角閃石	灰白	5Y8/2	灰白	7.5Y8/1	回転ナデ	回転ナデ	
196	NH26	高元	17区 2層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	5Y8/1	灰白	5Y8/1	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
197	NH26	高元	18区 2層		陶質		胴部	長石・石英	灰	N6/0	灰	N6/0	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
198	NH26	高元	17区 1層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰白	10Y7/1	灰	10Y7/1	縄(原体S燃)	ナデ	
199	NH26	高元	17区 1層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N6/0	灰	N6/0	格子	ナデ	
200	NH26	高元	I CD ベルト		三韓系		肩部	長石	灰白	7.5Y7/1	灰白	7.5Y7/1	沈線	ナデ	
201	NH26	高元	表採		三韓系		胴部	石英・金雲母・赤粒	橙	7.5YR7/6	橙	5YR7/6	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
202	NH26	石田高原	V区床面清掃		三韓系		胴部	長石・石英	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	縄(原体Z燃)→沈線	磨耗	
203	NH26	石田高原	IV区 4層礫群		楽浪系		肩部	長石・石英	灰白	10YR7/1	黄灰	2.5Y6/1	肩：回転ナデ、胴：縄(原体S燃)→沈線	磨耗	
204	NH26	高元	IV層		楽浪系	壺	底部	長石・石英・角閃石	灰	5Y4/1	灰黄	2.5Y7/2	ナデ	回転ナデ	
205	NH26	高元	D30区 4層砂		楽浪系		底部	長石・石英・金雲母	灰オリーブ	7.5Y4/2	オリーブ黒	5Y3/2	胴：ヘラケズリ、底：ナデ	回転ナデ→暗文	
206	NH26	石田高原	VI区 4層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/1	縄(原体Z燃)	ナデ	
207	NH26	石田高原	V区 4層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N5/0	灰	N5/0	縄(原体Z燃)	ナデ	

表5 未報告大陸・半島系土器観察表⑤

番号	報告書	地区	遺構・層位	遺構で伴出した遺物の時期	分類	器種	部位	胎土	色調				文様・調整		備考
									外		内		外	内	
									色	Hue	色	hue			
208	NH26	石田高原	Ⅵ区4層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	格子→沈線	ナデ	
209	NH26	石田高原	Ⅳ区4層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	黄灰	2.5Y6/1	灰白	10YR8/1	格子	ナデ	
210	NH26	石田高原	Ⅲ区4層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N4/0	灰	N4/0	格子	ナデ	
211	NH26	石田高原	4層		三韓系		胴部	長石	灰	N5/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
212	NH26	石田高原	Ⅲ区4層磔群		三韓系		胴部	長石・石英	灰	5Y4/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
213	NH26	石田高原	Ⅵ区4層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2	格子→沈線	ナデ	
214	NH26	石田高原	4層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N5/0	灰白	N7/0	ナデ→沈線	ナデ	
215	NH26	石田高原	4層		陶質		胴部	長石・石英	灰白	N7/0	灰	N6/0	ナデ	ナデ	
216	NH26	石田高原	Ⅱ区3層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	7.5Y8/1	灰白	5Y8/1	縄	磨耗	
217	NH26	石田高原	Ⅲ区3層		楽浪系		肩部・胴部	長石・石英・角閃石	浅黄	2.5Y7/3	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)	ナデ	
218	NH26	石田高原	3層		三韓系		底部	長石・石英・角閃石	暗灰灰	N3/0 N5/0	灰黒	7.5Y3/1 N2/0	縄	ナデ	
219	NH26	石田高原	ⅡD区3層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	黒褐	2.5Y3/1	灰白	2.5Y8/1	縄	ナデ	軟質
220	NH26	石田高原	Ⅵ区3層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y6/2	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
221	NH26	石田高原	Ⅵ区北壁トレンチ		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰	N4/0	灰	N5/0	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
222	NH26	石田高原	表採		三韓系		胴部	長石・石英	黄灰	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	格子	ナデ	
223	NH27	八反	SD1①層		三韓系		肩部	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	10YR7/2	灰白	10YR8/2	平行	ナデ	
224	NH27	八反	SD1①層		陶質		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N6/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
225	NH27	八反	SD3①層	弥生終末期～古墳前期	陶質		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N6/0	灰	N6/0	格子	ナデ	
226	NH27	八反	SD2②層	弥生後期～古墳前期	楽浪系		胴部	長石・石英	にぶい黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR6/2	縄(原体Z燃)	当て具痕	
227	NH27	八反	SD2①層	弥生後期～古墳前期	楽浪系		底部	長石	褐灰	7.5YR5/1	褐灰	7.5YR5/1	ナデ	ナデ	
228	NH27	八反	SD2①層	弥生後期～古墳前期	列島産格子タタキ	支脚	脚部	長石・石英・砂粒	にぶい黄	2.5Y6/4	灰黄	2.5Y6/2	格子、脚縁：ナデ	ナデ	酸化焙焼成
229	NH27	八反	SD3	弥生終末期～古墳前期	陶質		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N4/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
230	NH27	八反	SD3③層	弥生終末期～古墳前期	三韓系		肩部	長石・石英	褐灰	10YR6/1	褐灰	10YR6/1	格子→沈線	ナデ	
231	NH27	八反	SD3③層	弥生終末期～古墳前期	三韓系		胴部	長石・石英	黄灰	2.5Y5/1	灰黄褐	10YR6/2	格子	ナデ	
232	NH27	八反	SD3③層	弥生終末期～古墳前期	三韓系		胴部	長石・角閃石	灰	N6/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
233	NH27	八反	SD3③層	弥生終末期～古墳前期	三韓系		胴部	長石・石英	褐灰	10YR5/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
234	NH27	八反	SD3③層	弥生終末期～古墳前期	陶質		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N6/0	灰	N6/0	格子	ナデ	
235	NH27	八反	SD3③層	弥生終末期～古墳前期	陶質		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N6/0	灰	N6/0	格子	ナデ	
236	NH27	八反	SD3②層・①層	弥生終末期～古墳前期	列島産格子タタキ	支脚	脚部	長石・石英・金雲母	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	格子	上：工具痕、下：ハケメ	
237	NH27	八反	SD3②層	弥生終末期～古墳前期	三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y5/1	暗黄灰	2.5Y5/2	格子	ナデ	
238	NH27	八反	SD3②層	弥生終末期～古墳前期	三韓系		肩部	長石・石英	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/2	格子→沈線	ナデ	
239	NH27	八反	SD4⑥層・SD5②層	弥生中期後葉～古墳初頭	楽浪系		胴部	長石・石英	オリーブ黒	5Y3/1	にぶい黄	2.5Y6/4	上：回転による凹線、下：縄(原体S燃)	当て具痕	
240	NH27	八反	SD4⑥層	弥生中期後葉	楽浪系		胴部	長石・石英	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR6/1	縄(原体S燃)	当て具痕	
241	NH27	八反	SD4⑤層	弥生中期後葉	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
242	NH27	八反	SD4③層	弥生中期後葉	楽浪系	壺	肩部	長石・石英・角閃石・金雲母	オリーブ黒	5Y3/2	にぶい黄	2.5Y6/3	回転ナデ	回転ナデ	
243	NH27	八反	SD4⑤層	弥生中期後葉	楽浪系	壺	肩部	長石	オリーブ黒	5Y3/1	にぶい黄	2.5Y6/4	回転ナデ	ナデ	
244	NH27	八反	SD4②層	弥生後期初頭～古墳初頭	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	5Y4/1	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)	当て具痕	
245	NH27	八反	SD4①層	弥生後期初頭～古墳初頭	不明		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y6/2	灰白	2.5Y7/1	格子	当て具痕	
246	NH27	八反	SD5②層	弥生後期初頭～古墳初頭	陶質		胴部	長石・石英	灰	N5/0	青灰	5PB5/1	ヨコナデ	ヨコナデ	249・250同一個体可能性
247	NH27	八反	9区6層		陶質		胴部	長石・石英	青灰	5PB5/1	青灰	5PB5/1	ヨコナデ	ヨコナデ	248・250同一個体可能性
248	NH27	八反	SD5③層	弥生中期後葉	陶質		胴部	長石・石英	灰	N5/0	青灰	5PB5/1	ヨコナデ	ヨコナデ・不整方向ナデ	248・249同一個体可能性
249	NH27	八反	SD5③層・SD8②層	弥生中期後葉～古墳初頭	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y5/1	灰黄	2.5Y6/2	縄(原体S燃)	当て具痕	
250	NH27	八反	SD5③層	弥生中期後葉	三韓系		肩部破片	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y4/1	灰	5Y4/1	格子→沈線	ナデ	
251	NH27	八反	SD5③層	弥生中期後葉	楽浪系		胴部	長石・石英	暗オリーブ	5Y4/3	暗オリーブ	5Y4/4	縄(原体S燃)	当て具痕	
252	NH27	八反	SD5③層	弥生中期後葉	列島産格子タタキ		胴部	長石・石英・金雲母	オリーブ褐	2.5Y4/3	暗黄灰	2.5Y5/2	上：ハケメ、下：格子	ケズリ	酸化焙焼成・方格タタキ→ハケメ
253	NH27	八反	SD5②層	弥生後期初頭～古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y4/1	黄灰	2.5Y5/1	格子	ナデ	
254	NH27	八反	SD5②層	弥生後期初頭～古墳初頭	楽浪系	壺	肩部	長石・角閃石	オリーブ黒	5Y3/2	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
255	NH27	八反	SD5②層	弥生後期初頭～古墳初頭	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y4/1	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)	当て具痕・ナデ	
256	NH27	八反	SD7灰黒色土	弥生後期初頭～中葉	陶質		胴部	長石	灰	N4/0	灰	N5/0	縄(原体Z燃)	ナデ	
257	NH27	八反	SD7灰黒色土	弥生後期初頭～中葉	不明		胴部	長石・石英	黄灰	2.5Y5/1	灰	5Y5/1	ハケメ状	ナデ	

表5 未報告大陸・半島系土器観察表⑥

番号	報告書	地区	遺構・層位	遺構で伴出した遺物の時期	分類	器種	部位	胎土	色調				文様・調整		備考
									外		内		外	内	
									色	Hue	色	hue			
258	NH27	八反	8区7層		三韓系		胴部	長石・石英	灰黄褐	10YR5/2	にぶい・黄橙	10YR7/2	格子	ナデ	
259	NH27	八反	10区6層		楽浪系		胴部	長石・石英	浅黄	2.5Y7/3	灰黄	2.5Y7/2	縄(原体S燃)	当て具痕	
260	NH27	八反	9区6層		楽浪系		口縁部	石英・角閃石・金雲母	灰白	2.5Y7/1	黄灰	2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
261	NH27	八反	20区6層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y6/2	灰	5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
262	NH27	八反	10区6層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N6/0	灰	N6/0	縄(原体Z燃)	ナデ	
263	NH27	八反	10区6層		三韓系	長頸壺	口縁部	長石・石英	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/2	ナデ	ナデ	
264	NH27	八反	10区6層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR5/1	格子	ナデ	
265	NH27	八反	9区6層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	浅黄	2.5Y7/3	灰白	10YR8/2	格子	ナデ	軟質
266	NH27	八反	9区5層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰白	5Y7/1	オリーブ黒	7.5Y3/1	回転ナデ	回転ナデ	
267	NH27	八反	1区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/2	縄(原体Z燃) → 沈線	ナデ	
268	NH27	八反	9区5層		三韓系		胴部	長石・石英	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	縄(原体Z燃)	ナデ	
269	NH27	八反	11区4層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2	縄	ナデ	
270	NH27	八反	4区4層		楽浪系		胴部	石英・角閃石	褐灰	10YR5/1	灰白	10YR7/1	縄(原体Z燃)	当て具痕	
271	NH27	八反	3区4層		楽浪系		底部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	胴:ケズリ、底:ナデ	回転ナデ	
272	NH27	八反	3区4層		楽浪系		底部	長石・石英	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
273	NH27	八反	1区4層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰黄	2.5Y7/2	灰白	2.5Y7/1	縄	当て具痕	
274	NH27	八反	11区4層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	格子	ナデ	
275	NH27	八反	2区4層		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰	N5/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
276	NH27	八反	8区3a'層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	灰	N5/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
277	NH27	八反	3区4層		陶質		底部	長石・石英・赤粒	灰	5Y5/1	黄灰	2.5Y5/1	縄(原体Z燃)	ナデ	
278	NH27	八反	8区3a'層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N4/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
279	NH27	八反	7区3a層		三韓系		胴部	長石・石英	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	縄(原体Z燃) → 沈線	ナデ	
280	NH27	八反	5区3a層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	5Y5/1	灰白	2.5Y7/1	格子	ナデ	
281	NH27	八反	5区サブトレ		楽浪系		胴部	長石・石英	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR6/2	ハラケズリ	回転ナデ	
282	NH27	八反	14区1層		楽浪系		底部	長石・石英	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	ナデ	回転ナデ	
283	NH27	八反	2区サブトレ		楽浪系		胴部	石英・角閃石	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
284	NH27	八反			楽浪系		肩部	長石・石英・角閃石	黒	5Y2/1	にぶい黄	2.5Y6/3	回転ナデ	回転ナデ	
285	NH27	八反	2区排土		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	5Y8/1	黄灰	2.5Y5/1	縄(原体Z燃)	ナデ	
286	NH27	八反	8区表採		楽浪系		底部	石英・角閃石	浅黄橙	7.5YR8/3	灰白	10YR8/2	磨耗	回転ナデ	
287	NH28	高元	SC8①層	古墳前期	三韓系		胴部	長石	灰黄	2.5Y6/2	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
288	NH28	高元	SK9①層	弥生中期後葉	三韓系		肩部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	灰白	10YR7/1	縄(原体Z燃) → 沈線	ナデ	
289	NH28	高元	II c区3層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y7/2	灰白	2.5Y7/1	ナデ	ナデ	
290	NH28	高元	II c区3層		楽浪系		胴部	長石・石英	黄灰	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
291	NH28	高元	II c区3層		三韓系		肩部	長石・石英・金雲母	灰白	10YR7/1	にぶい黄橙	10YR7/2	縄(原体Z燃) → 沈線	ナデ	軟質
292	NH28	高元	II c区3層		三韓系		胴部	長石	灰白	7.5Y7/1	灰白	N8/0	縄(原体Z燃)	ナデ	
293	NH28	高元	II c区3層		三韓系		肩部	長石・石英	黄灰	2.5Y4/1	灰	5Y5/1	縄(原体Z燃)	ナデ	
294	NH28	高元	II c区3層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	10YR7/1	灰白	10YR6/1	縄(原体S燃)	ナデ	
295	NH28	高元	II a区3層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/1	縄(原体Z燃) → 沈線	ナデ	
296	NH28	高元	II c区3層		三韓系		肩部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	格子 → 沈線	ナデ	
297	NH28	高元	II a区2層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英	黄灰	2.5Y4/1	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
298	NH28	高元	II a区2層		楽浪系		胴部	長石・金雲母	灰	5Y5/1	灰白	5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	
299	NH28	石田高原	SD1②層	弥生後期後葉～古墳初葉	三韓系		肩部	長石・石英	にぶい黄橙	10YR7/3	灰白	10YR7/1	工具痕・ナデ	当て具痕・ナデ	
300	NH29	八反	14区SD1⑦層	弥生中期後葉～後期初葉	楽浪系	壺	肩部・胴部	長石・石英・角閃石	暗灰	N3/0	灰	N6/0	縄 → 回転ナデ	回転ナデ	
301	NH29	八反	14区SD1⑥層	弥生中期後葉～後期初葉	三韓系		肩部	長石・石英・金雲母	黒	5Y2/1	黒褐	2.5Y3/1	格子	ナデ	
302	NH29	八反	14区SD1③層	弥生中期後葉～古墳初葉	楽浪系		肩部	長石・石英・角閃石	灰	5Y5/1	灰	5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
303	NH29	八反	14区SD1⑥層・③層・①層	弥生中期後葉～古墳初葉	三韓系		肩・胴部	長石・石英	暗灰	N3/0	暗灰	N3/0	格子	ナデ	
304	NH29	八反	14区SD1⑥層	弥生中期後葉～後期初葉	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	7.5Y4/1	灰	5Y4/1	回転ナデ	回転ナデ	
305	NH29	八反	15区SD1⑥層	弥生中期後葉～後期初葉	陶質	短頸壺	口縁～底部	長石・石英	黒	5Y2/1	黄灰	2.5Y4/1	口:回転ナデ、肩:ナデ、胴:回転ナデ	口:回転ナデ、胴:回転ナデ	
306	NH29	八反	14区SD1⑥層・赤砂礫層	弥生中期後葉～後期初葉	三韓系	短頸壺	口縁部・肩部	長石・石英	灰	5Y5/1	灰	7.5Y6/1	口:回転ナデ、肩:格子 → 沈線	回転ナデ	
307	NH29	八反	14区SD1③層	弥生中期後葉～古墳初葉	楽浪系		肩部	長石・石英	暗灰	N3/0	灰	5Y6/1	上:回転ナデ、下:縄(原体S燃) → 沈線	当て具痕	
308	NH29	八反	14区SD1③層	弥生中期後葉～古墳初葉	楽浪系		底部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰黄	2.5Y6/2	灰オリーブにぶい黄	5Y5/2 2.5Y6/4	胴:ナデ、底:糸切	回転ナデ	
309	NH29	八反	14区SD1③層	弥生中期後葉～古墳初葉	楽浪系	鉢	底部	長石・石英・角閃石	灰	5Y6/1	灰白	5Y7/1	胴:回転ナデ、底:糸切	回転ナデ	

表5 未報告大陸・半島系土器観察表⑦

番号	報告書	地区	遺構・層位	遺構で伴出した遺物の時期	分類	器種	部位	胎土	色調				文様・調整		備考
									外		内		外	内	
									色	Hue	色	hue			
310	NH29	八反	14区 SD 1 ③層・3層	弥生中期後葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	格子	ナデ	焼成後穿孔
311	NH29	不條	19区 SX		楽浪系	鉢	底部	長石・石英	灰黄	5Y6/2	にぶい黄	2.5Y6/3	胴：ヘラケズリ、 底：糸切	回転ナデ→暗文	
312	NH29	八反	14区 SD 1 ③層	弥生中期後葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英	灰白	2.5Y7/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
313	NH29	八反	17区 SD 1 ③層	弥生中期後葉～ 古墳初頭	三韓系		口縁部または脚部・ 胴部	長石・石英・角 閃石	灰白	7.5Y7/1	灰	N6/0	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
314	NH29	八反	14区 SD 1 ①層	古墳以降	楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・角 閃石	灰白	2.5Y7/1	灰	5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
315	NH29	八反	14区 SD 1 ①層	古墳以降	三韓系		胴部	長石・石英・角 閃石	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	格子	ナデ	
316	NH29	不條	22区 5層		三韓系		胴部	長石・石英・角 閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	格子→沈線	ナデ	
317	NH29	不條	22区 4層		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰	N5/0	灰	N6/0	縄(原体Z燃)→ 沈線	ナデ	
318	NH29	不條	19区 9層		楽浪系	鉢	底部	長石・石英	灰オリーブ	5Y5/2	灰オリーブ	5Y4/2	胴：ミガキ、底： 糸切	回転ナデ→暗文 →赤色塗彩	内面赤色 塗彩
319	NH29	不條	19区 3層		楽浪系		胴部	長石・石英・角 閃石	灰	N6/0	灰白	7.5Y7/1	回転ナデ	ナデ	
320	NH29	不條	22区 3層		三韓系		底部	長石・石英	灰	N5/0	灰白	2.5Y8/1	ナデ	ナデ	
321	NH29	八反	17区 3層		三韓系	壺	肩部	長石・石英	灰	N5/0	灰白	7.5Y7/2	格子	ナデ	
322	NH29	八反	14区赤砂礫 層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英	黒	N2/0	黒	N2/0	回転ナデ	回転ナデ	
323	NH29	八反	14区東側礫 層		三韓系		肩部	長石・石英	灰	N6/0	灰白	N7/0	縄(原体Z燃)→ 沈線	回転ナデ	
324	NH29	八反	17区 T 2一 拵		楽浪系		胴部	長石・石英	暗灰	N3/0	暗灰	N3/0	回転ナデ	回転ナデ	
325	NH29	不條	19区		楽浪系	長頸壺	口縁部	長石・石英	灰	N5/0	灰	N5/0	回転ナデ、頸 工具痕	回転ナデ	
326	NH29	八反	17区 T 2		楽浪系		胴部	長石・石英・角 閃石	灰	N4/0	灰白	N7/0	回転ナデ	回転ナデ	
327	NH29	八反	15区表採		楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・角 閃石	灰白	5Y7/1	灰	N5/0	回転ナデ	回転ナデ	
328	NH29	不條	22区表採		楽浪系		胴部	長石・石英・角 閃石	灰	N5/0	灰	N5/0	回転ナデ	回転ナデ	
329	NH29	八反	14区 ST 一 拵		楽浪系		胴部	長石・石英	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
330	NH29	八反	14区北トレ 一拵		楽浪系		胴部	長石・石英	灰	5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
331	NH29	八反	17区 T 3一 拵		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N6/0	灰白	N7/0	格子	ナデ	
332	NH29	不條	22区		陶質		胴部	長石・石英	灰	N4/0	灰	N4/0	平行→沈線	ナデ	
333	NH31	石田高原	B区 SD 5 ②層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英・角 閃石・金雲母	オリーブ黒	5Y3/1	灰白	5Y7/1	上：平行、下：格 子	ナデ	
334	NH31	石田高原	C区 SD 1 ②層	古墳前期	三韓系		胴部	長石・石英・角 閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	格子・ナデ	ナデ	
335	NH31	石田高原	SD 3 ①層	弥生中期～古墳 前期	粘土帯	甕	底部	長石・石英・角 閃石・金雲母	暗黄灰	2.5Y5/2	にぶい黄	2.5Y6/4	ナデ・指押さえ	ナデ	
336	NH31	石田高原	B区 SD 5 ①層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	粘土帯		把手	長石・石英・金 雲母	黄灰 暗灰黄	2.5Y4/1 2.5Y5/2	にぶい黄橙	10YR5/4	ナデ	ナデ	
337	NH31	石田高原	A区 SD 5 ①層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・金 雲母	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR5/2	回転ナデ	回転ナデ	
338	NH31	石田高原	SD 5 ①層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・角 閃石・金雲母	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	回転ナデ	回転ナデ	
339	NH31	石田高原	A区 SD 5 ①層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	楽浪系		胴部	長石・石英・金 雲母	灰黄	2.5Y7/2	黄灰	2.5Y7/2	タタキ→回転ナデ	回転ナデ	
340	NH31	石田高原	A区 SD 5 ①層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英	灰白	N7/0	灰	N6/0	格子	ナデ	
341	NH31	石田高原	A区 SD 5 ①層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英	灰白	10YR7/1	灰白	2.5Y7/1	格子	ナデ	
342	NH31	石田高原	B区 SD 5 ①層	弥生中期中葉～ 古墳初頭	陶質		胴部	長石・赤粒	黒	2.5GY2/1	灰	N5/0	縄(原体Z燃)	ナデ	
343	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英・角 閃石	灰白	2.5Y7/1	黄灰	2.5Y5/1	上：回転ナデ、 下：縄	回転ナデ	
344	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英・金 雲母	にぶい黄	2.5Y6/3	灰黄	2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	
345	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系	壺	胴部	長石・石英・角 閃石	黄灰	2.5Y5/1	灰白	2.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	
346	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系		底部	石英・角閃石	黄褐	2.5Y5/3	暗灰黄	2.5Y5/2	回転ナデ	回転ナデ	
347	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系		底部	石英・角閃石	灰	5Y5/1	灰	N6/0	胴：ヘラケズリ、 底：ナデ	回転ナデ	
348	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系		胴部	石英・角閃石	灰	5Y5/1	灰	N6/1	縄(原体S燃)	当て具痕	
349	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系		胴部	長石・石英・金 雲母	灰黄 明赤褐	2.5Y6/2 5YR5/6	黄灰	2.5Y4/1	回転ナデ	回転ナデ	
350	NH31	石田高原	A区 5層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英・角 閃石	暗黄灰	2.5Y5/2	黄灰	2.5Y5/1	ナデ	当て具痕	
351	NH31	石田高原	A区 5層		不明		胴部	長石・石英・角 閃石	灰	N5/0	灰	N5/0	ナデ	ナデ	
352	NH31	石田高原	A区 SD 5 ①層・A区 5層・B区 5層・C区 5層				胴部群	長石・石英・角 閃石	灰	N5/0	灰	N6/0	格子→沈線	ナデ	
353	NH31	石田高原	A区 5層		三韓系		胴部	長石・石英	灰黄	2.5Y6/2	黄灰	2.5Y7/2	格子	ナデ	
354	NH31	石田高原	A区 5層		三韓系		肩部	長石・石英	にぶい黄橙	10YR7/2	灰白	2.5Y7/1	格子	ナデ	
355	NH31	石田高原	A区 5層		三韓系		肩部	長石・石英	灰白 灰	2.5Y7/1 N6/0	灰白	2.5Y7/1	格子→沈線	ナデ	
356	NH31	石田高原	B区 5層		楽浪系	壺	底部	長石・石英・角 閃石	灰	5Y6/1	灰	5Y5/1	胴：ケズリ→ヨコ ナデ、底：ナデ	回転ナデ	
357	NH31	石田高原	B区 5層		楽浪系		胴部	長石・石英・角 閃石	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	磨耗	磨耗	
358	NH31	石田高原	A区 5層・ B区 5層		陶質		胴部群	長石・石英	灰 黒 黒	N4/0 10YR2/1 7.5YR2/1	灰 灰	N4/0 N5/0	ナデ	ナデ	
359	NH31	石田高原	B区 5層		楽浪系	小型甕	口縁部	長石・石英・角 閃石	灰	5Y5/1	黄灰	2.5Y5/1	回転ナデ→沈線	回転ナデ	
360	NH31	石田高原	B区 5層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰	N5/0	灰	N5/0	回転ナデ	回転ナデ	

表5 未報告大陸・半島系土器観察表⑧

番号	報告書	地区	遺構・層位	遺構で伴出した遺物の時期	分類	器種	部位	胎土	色調				文様・調整		備考
									外		内		外	内	
									色	Hue	色	hue			
361	NH31	石田高原	B区5層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	にぶい黄	2.5Y6/3	灰黄	2.5Y6/2	繩(原体S燃)	ナデ	
362	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		肩部	長石・石英・金雲母	にぶい橙	2.5YR6/4	淡赤橙	2.5YR7/3	平行→沈線→赤色塗彩・被熱	ナデ→赤色塗彩・被熱	内外面赤色塗彩または被熱
363	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	平行→沈線→赤色塗彩・被熱	磨耗	外面赤色塗彩または被熱
364	NH31	石田高原	B区5層		三韓系	長頸壺	胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	平行→沈線	ナデ	
365	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		肩部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	頸：ナデ、胴：平行→沈線	ナデ	
366	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	格子→沈線	ナデ	
367	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	N7/0	灰	N6/0	格子	ナデ	
368	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	N8/0	格子	ナデ	
369	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
370	NH31	石田高原	B区5層		三韓系		肩部	長石・石英・金雲母	灰	5Y4/1	黄灰	2.5Y6/1	繩(原体Z燃)→沈線	ナデ	
371	NH31	石田高原	B区5層		陶質		胴部	長石・石英	黒	5Y5/1	黒	5Y2/1	ナデ	ナデ	
372	NH31	石田高原	B区5層		陶質		胴部	長石・石英	青灰	5RB5/1	青灰	5RB6/1	ナデ	ナデ	
373	NH31	石田高原	C区5層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	繩(原体S燃)	当て具痕	
374	NH31	石田高原	C区5層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰	N6/0	灰白	N7/0	回転ナデ	回転ナデ	
375	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	10YR7/1	灰白	2.5Y7/1	繩(原体S燃)→沈線	ナデ	
376	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		肩部	長石・石英・金雲母	オリープ黒	7.5Y3/1	灰白	2.5Y7/1	繩→沈線	ナデ	
377	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		肩部	長石・石英・角閃石・赤粒	灰白	N8/0	灰白	N7/0	繩(原体Z燃)→沈線	ナデ	
378	NH31	石田高原	C区5層		楽浪系	鉢	底部	長石・金雲母	暗灰	N3/0	暗灰	N3/0	胴：回転ナデ、底：糸切→ナデ	回転ナデ→暗文	
379	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y6/1	繩(原体Z燃)→沈線	ナデ	
380	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		底部	長石・石英	灰白	2.5Y7/1	灰	N5/0	繩(原体Z燃)	ナデ	
381	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		底部	長石・石英・金雲母	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y6/2	繩(原体S燃)	ナデ	
382	NH31	石田高原	F区2層		楽浪系	滑石混和	胴部	滑石・長石・石英	黄灰	2.5Y4/1	黄灰	2.5Y4/1	ナデ・ナデツケ	ナデツケ・ナデ	焼後穿孔
383	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
384	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
385	NH31	石田高原	C区5層		三韓系		胴部	長石・石英	灰白	2.5Y8/1	灰白	N7/0	ナデ	ナデ	
386	NH31	石田高原	E区2層		楽浪系		肩部	長石・石英	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	ナデ	ナデ	
387	NH31	高元	G区 pit44		楽浪系	短頸壺	口縁部	長石・石英・角閃石	灰	5Y6/1	灰白	5Y7/1	タタキ→回転ナデ	回転ナデ	
388	NH31	高元	B区表土		三韓系		胴部	長石・石英	灰	N5/0	灰	N5/0	繩(原体Z燃)→沈線	ナデ	
389	NH31	高元	C区3層		三韓系		胴部	長石・石英	黒	N2/0	黒	7.5Y2/1	格子	ナデ	
390	NH31	高元	E区3層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰	5Y4/1	灰	7.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
391	NH31	高元	E区3層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰	5Y6/1	灰白	5Y7/1	繩(原体Z燃)	ナデ	
392	NH31	高元	H区2層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	
393	NH31	高元	F区2層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	褐灰	10YR6/1	繩(原体Z燃)→赤色塗彩・被熱	ナデ	外面赤色塗彩または被熱
394	NH31	高元	F区2層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	繩(原体Z燃)	ナデ	
395	NH31	高元	F区3層		三韓系		胴部	長石・石英	暗灰	N3/0	灰	N4/0	繩(原体Z燃)→沈線	ナデ	
396	NH31	高元	F区3層		陶質		胴部	長石・石英	暗灰	N3/0	灰	7.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
397	NH31	高元	H区トレンチ		楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・角閃石	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
398	NH31	高元	H区3層		楽浪系	壺	肩部	長石・石英	灰	5Y6/1	灰黄	2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	
399	NH31	高元	H区3層		楽浪系		底部	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	繩(原体S燃)	ナデ	
400	NH31	高元	H区2層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	繩(原体Z燃)	ナデ	
401	NH31	高元	I区3層		三韓系		肩部	長石・石英・砂粒	浅黄	2.5Y8/3	灰黄	2.5Y7/2	格子→沈線	ナデ	
402	NH31	高元	I区3層		楽浪系		底部	長石・石英・角閃石	灰	5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	磨耗	回転ナデ	
403	NH31	高元	I区3層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/2	繩(原体S燃)	当て具痕	
404	NH31	高元	I区1層		陶質		頸部・胴部	長石・石英	灰	10Y4/1	灰	10Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
405	NH32	原	E6区3層		楽浪系		底部	長石・石英(微量)	灰白	2.5Y8/2	灰黄	2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	
406	NH32	原	E6区3層		楽浪系		底部	長石・石英	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	
407	NH32	原	B区表探		不明		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	磨耗	磨耗	
408	NH33	石田高原	A区西礫上面		楽浪系		胴部	長石・石英	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2	繩(原体S燃)	ナデ	
409	NH33	石田高原	A区西礫上面		列島産格子タタキ		胴部	長石・石英(大粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	10YR8/2	格子タタキ	当て具痕	
410	NH34	安国寺前A	A区表探		三韓系		把手	長石・石英・金雲母	にぶい橙	7.5YR7/4	名赤褐	5YR5/6	ナデ	ナデ	赤焼
411	NH34	安国寺前A	A区IV層		粘土帯		把手	長石・石英・金雲母	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	ナデ	-	

表5 未報告大陸・半島系土器観察表⑨

番号	報告書	地区	遺構・層位	遺構で伴出した遺物の時期	分類	器種	部位	胎土	色調				文様・調整		備考
									外		内		外	内	
									色	Hue	色	hue			
412	NH35		No. 16		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	縄(原体Z燃)	ナデ	
413	NH35		表面採集		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰オリーブ	5Y6/2	灰	5Y6/1	格子	ナデ	
414	NH35		表面採集		陶質		胴部	長石・石英・角閃石	灰	7.5Y4/1	灰	5Y5/1	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
415	NH35		No. 5		楽浪系		底部	長石・石英・金雲母	にぶい黄	2.5Y6/3	灰黄	2.5Y6/2		胴:回転ナデ 底:糸切・ヘラケズリ	回転ナデ
416	NH38	石田高原	A II 区 落ち込み③層	8世紀	楽浪系		肩部	長石・石英・角閃石・金雲母	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
417	NH36	石田高原	A 区 西4c層		三韓系		底部	長石・石英・金雲母	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1	格子	ナデ	
418	NH36	石田高原	B 区北4層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	10YR8/1	黄灰	2.5Y6/1	ナデ	ナデ	
419	NH36	石田高原	C 区 南4b層		楽浪系		胴部	長石・角閃石	灰白	7.5YR8/1	黄灰	2.5Y5/1	縄(原体Z燃)→沈線	当て具痕	
420	NH36	石田高原	D 区南西4層		粘土帯		把手	長石・石英・金雲母	灰白	10YR8/2	-	-	ナデ	-	
421	NH36	石田高原	D 区南西4層		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰黄	2.5Y6/2	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
422	NH36	石田高原	D 区 北4c層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰白	2.5Y7/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	工具痕	
423	NH36	石田高原	D 区南4層		楽浪系		底部	長石・石英	灰黄	2.5Y6/2	黄褐	2.5Y5/3	縄(原体S燃)	当て具痕	
424	NH36	石田高原	D 区南4層		楽浪系		底部	長石・角閃石	にぶい黄褐	10YR5/4	にぶい黄褐	10YR5/4	回転ナデ	回転ナデ	
425	NH36	石田高原	D 区南4層		三韓系		胴部	長石(微量)・石英	灰黄	2.5Y6/2	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
426	NH36	石田高原	D 区南4層		三韓系		肩部	長石・石英	黄灰	2.5Y6/1	にぶい黄	2.5Y6/3	格子	ナデ	
427	NH36	石田高原	D 区南4層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	黄灰	2.5Y6/1	灰黄	2.5Y6/2	格子	ナデ	
428	NH36	石田高原	E 区北4層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	にぶい黄	2.5Y6/3	灰白	2.5Y7/1	格子	ナデ	
429	NH36	石田高原	E 区北4層		楽浪系	壺	底部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	胴:ケズリ、底:回転ナデ	回転ナデ	
430	NH36	石田高原	E 区北4層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	にぶい黄	2.5Y6/3	格子	ナデ	
431	NH36	石田高原	F 区南3層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	にぶい黄	2.5Y6/3	灰白	N7/0	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
432	NH36	石田高原	F 区南3層		楽浪系	鉢	口縁部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	灰	5Y6/1	口唇:沈線状、口縁:回転ナデ	回転ナデ	
433	NH37	不條	2区 SX 4		粘土帯	甕	口縁部	長石・石英	浅黄橙	7.5YR8/4	黒	5Y2/1	ナデ	ナデ	
434	NH38	石田高原	B II 区 落ち込み①層	弥生後期中葉～古墳初頭	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	
435	NH38	石田高原	B I 区 3a層		陶質		胴部	長石	にぶい褐	7.5YR5/3	褐灰	7.5YR5/1	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
436	NM01	八反	5 A 区 4号溝	弥生中期後葉	楽浪系	滑石混和土器	底部	砂粒・金雲母	にぶい黄褐	10YR4/3	暗褐	10YR3/3	ナデ	回転ナデ	
437	NM01	八反	6 a 区 1層		楽浪系		底部	長石・石英・金雲母	灰白	7.5YR8/1	灰白	10YR8/1	回転ナデ	ナデ	
438	IK12	高元	VI 区		三韓系		肩部破片	長石・石英・角閃石・金雲母	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	肩:鋸歯押捺、胴:平行	ナデ	馬韓
439	IK12	高元	VI 2区大溝	弥生中期末～後期末	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	回転ナデ	回転ナデ	
440	IK12	高元	VI 2区3層		楽浪系		胴部	長石・石英	黄灰	2.5Y5/1	灰白	2.5Y7/1	ナデ	ナデ	
441	IK12	高元	VI 2区3層		楽浪系		胴部	石英・角閃石・金雲母	灰白	10YR7/1	灰白	10YR8/1	縄(原体Z燃)	当て具痕	
442	IK12	高元	VI 2区3層		楽浪系		胴部	石英・角閃石・金雲母	灰白	10YR7/1	灰白	10YR8/1	縄(原体S燃)	当て具痕	
443	IK12	高元	VI 2区3層		楽浪系		底部	長石・石英・金雲母・赤粒	にぶい黄橙	10YR6/3	橙	7.5YR6/6	回転ナデ	回転ナデ	
444	IK12	高元	VI 2区3層		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	縄	ナデ	
445	IK12	高元	VI 2区3層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	縄(原体Z燃)	ナデ	
446	IK12	高元	VI 3区2層		楽浪系		胴部	長石・石英	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
447	IK12	高元	VI 4区3層		三韓系		胴部	長石・角閃石	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	格子	ナデ	
448	IK12	高元	VII 1区1層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y7/2	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
449	IK12	高元	VI 1区3層		三韓系		胴部	長石・石英・赤粒	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	格子	ナデ	
450	IK12	高元	III 9区5層SZ 1	弥生中期中葉～後期前葉	三韓系		肩部・胴部・底部	長石・石英・金雲母	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	格子→沈線	ナデ	
451	IK14	原	X V 区		擬粘土帯	甕	口縁部	砂粒・赤粒	橙	7.5YR7/6	浅黄	7.5YR8/4	ナデ	ナデ	
452	IK14	原	X V 区 Tr 4		粘土帯	甕	口縁部	長石・石英・角閃石・金雲母	にぶい橙	5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/2	口:ヨコナデ・指押さえ、胴:ナデ	ヨコナデ	
453	IK14	原	X V 区 包含層	弥生中期前葉～中期末	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
454	IK14	原	X V 区 SZ 01		楽浪系		胴部	長石・石英	黄灰	2.5Y4/1	黄灰	2.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	
455	IK14	原	X VII 区 4層				胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	縄	ナデ	
456	IK14				粘土帯	甕	口縁部	砂粒・金雲母	にぶい黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR5/2	ナデ	ナデ	
457	IK14				楽浪系		胴部	長石・石英	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/3	回転ナデ	回転ナデ	
458	IK16	高元	VIII 区 3・4層		陶質	短頸壺	口縁部	長石	灰	N5/0	灰	N5/0	口:回転ナデ、肩:ナデ、胴:縄(原体Z燃)→沈線	回転ナデ	
459	IK16	高元	VIII 区 3・4層		陶質		胴部	長石	灰	N5/0	灰	N5/0	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
460	HH 1	八反	SD01	弥生後期	粘土帯	甕	口縁部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄橙	10YR6/3	ナデ	ナデ	
461	HH 1	八反	SD01	弥生後期	粘土帯	甕	口縁部	長石・石英・角閃石	黒暗灰黄	2.5Y2/1 2.5Y5/2	暗黄灰	2.5Y5/2	ナデ	ナデ	
462	HH 1	八反	SD01	弥生後期	擬粘土帯	甕	口縁部	長石・石英	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	ナデ	ナデ	
463	HH 1	八反	SD01	弥生後期	粘土帯	小碗	底部	長石・石英・金雲母	暗黄灰	2.5Y5/2	黄灰	2.5Y4/1	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	

表5 未報告大陸・半島系土器観察表①

番号	報告書	地区	遺構・層位	遺構で伴出した遺物の時期	分類	器種	部位	胎土	色調				文様・調整		備考
									外		内		外	内	
									色	Hue	色	hue			
514	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	三韓系		胴部・底部	長石・石英・角閃石	灰	5Y4/1	黄灰	2.5Y6/1	格子	ナデ	
515	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	にぶい・褐	7.5YR5/3	格子	剥離	
516	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	三韓系		肩部破片	長石・石英・金雲母	灰	N6/0	灰	N5/0	平行→沈線	ナデ	
517	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	オリーブ黒	7.5Y3/1	オリーブ黒	7.5Y3/1	格子	ナデ	
518	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	三韓系		肩部破片	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	平行→沈線	ナデ	
519	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	不明		胴部	石英	灰白	10YR8/2	にぶい黄橙	10YR7/2	ナデ	ナデ	
520	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	楽浪系		肩部破片	角閃石・金雲母	黄灰	2.5Y5/1	灰白	2.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	
521	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	楽浪系		底部	長石・石英・角閃石	灰	5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	
522	HH3	八反	SD6	弥生中期～古墳初頭	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
523	HH3	八反	SD6	弥生中期～古墳初頭	楽浪系		肩部破片	長石・石英・角閃石・金雲母	灰	N4/0	灰	N4/0	縄(原体S燃)	回転ナデ	
524	HH3	八反	SD6	弥生中期～古墳初頭	三韓系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰	5Y4/1	オリーブ黒	5Y3/1	格子	ナデ	
525	HH3	八反	SD7	弥生中期～古墳初頭	三韓系?		肩部破片	石英・金雲母(多)	灰	5Y5/1	灰浅黄	5Y5/1 2.5Y7/3	肩:ナデ、胴:格子	ナデ	日本産の可能性あり
526	HH3	八反	北区畦状遺構	古代・中世	楽浪系		胴部	長石・石英	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	縄(原体S燃)	磨耗	
527	HH3	八反	中区畦状遺構	古代・中世	楽浪系		胴部	長石・石英・金雲母	オリーブ黒	7.5Y3/1	灰	5Y6/1	縄(原体S燃)	ナデ	
528	HH3	八反	中区畦状遺構	古代・中世	三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	灰白	10YR8/1	にぶい黄橙	10YR7/2	格子	ナデ	
529	HH3	八反	中区畦状遺構	古代・中世	三韓系		肩部破片	長石・石英	黄灰浅黄	2.5Y6/1 2.5Y7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	格子	ナデ	
530	HH3	八反	北区B-2・7		楽浪系		底部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰黄	2.5Y7/2	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)	ナデ	
531	HH3	八反	中区5層		楽浪系		口縁部	角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
532	HH3	八反	中区5層		楽浪系		肩部破片	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	縄(原体S燃)	当て具痕	
533	HH3	八反	中区5層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y7/2	浅黄	2.5Y7/3	ナデ→沈線	ナデ	
534	HH3	八反	中区5層		楽浪系		肩部破片	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	
535	HH3	八反	南区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N5/0	灰	N5/0	ナデ	回転ナデ	
536	HH3	八反	中区5層		三韓系		肩部破片	長石・石英	浅黄	2.5Y8/4	灰白	10YR8/1	格子	ナデ	
537	HH3	八反	中区5層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	浅黄	2.5Y8/3	灰白	2.5Y8/1	格子	ナデ	
538	HH3	八反	中区5層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2	格子	ナデ	
539	HH3	八反	中区5層		陶質		肩部破片	長石・石英	暗灰	N3/0	灰	N4/0	縄(原体Z燃)→沈線	回転ナデ	
540	HH3	八反	中区4b層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	
541	HH3	八反	南区4b層		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	暗灰黄	2.5Y5/2	黄灰	2.5Y5/1	縄(原体Z燃)	ナデ	
542	HH3	八反	中区4b層		三韓系		肩部破片	長石・石英	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄	2.5Y7/4	肩:ナデ、胴:縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
543	HH3	八反	南区4b層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y5/1	灰黄	2.5Y6/2	縄(原体Z燃)→沈線	ヨコナデ→タテナデ	
544	HH3	八反	南区4b層		三韓系	長頸壺	胴部	長石・石英	浅黄	2.5Y7/3	灰黄	2.5Y6/2	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
545	HH3	八反	中区4b層		三韓系		肩部・胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y4/1	黄灰	2.5Y5/1	格子	ナデ	
546	HH3	八反	南区4b層		陶質		胴部	長石・石英	オリーブ黒	5Y3/1	灰	5Y4/1	縄(原体S燃)→沈線	ナデ	
547	HH3	八反	南区4b層		三韓系		肩部破片	長石・石英・角閃石	灰白	N7/0	灰	N5/0	格子	ナデ	
548	HH3	八反	南区4b層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y5/1	格子	ナデ	
549	HH3	八反	北区4a層		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	N5/0	灰	N6/0	縄(原体S燃)	磨耗	
550	HH3	八反	南区4a層		三韓系		肩部破片	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y5/1	灰白	2.5Y7/1	肩:ナデ、胴:格子	ナデ	
551	HH3	八反	北区4a層		楽浪系		胴部	長石・石英・金雲母	灰黄	2.5Y7/2	灰白	5Y8/1	縄(原体Z燃)	磨耗	
552	HH3	八反	南区4a層		三韓系		胴部	長石・石英	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	縄(原体Z燃)	ナデ	
553	HH3	八反	南区4a層		三韓系		胴部	長石・石英	灰	5Y5/1	灰	7.5Y6/1	格子	ナデ	
554	HH3	八反	中区4a層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	N8/0	縄(原体Z燃)	磨耗	
555	HH3	八反	北区3b層		楽浪系	短頸壺	口縁部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	口:回転ナデ・沈線、肩:縄(原体S燃)	回転ナデ	
556	HH3	八反	中区3a層		三韓系		底部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	縄(原体Z燃)	ナデ	
557	HH3	八反	中区3b層		三韓系		胴部	長石・石英・角閃石	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y6/2	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
558	HH3	八反	北区水田面		三韓系		肩部破片	長石・角閃石	灰	N5/0	灰	N5/0	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
559	HH3	八反	C1D1トレンチ		三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	にぶい黄	2.5Y6/3	灰黄	2.5Y7/2	格子	ナデ	
560	HH3	八反	北トレンチ		楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石	灰	5Y5/1	灰	5Y5/1	ナデ	ナデ	
561	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	楽浪系		肩部・胴部・底部	長石・石英・金雲母	にぶい黄	2.5Y6/3	灰黄	2.5Y7/2	縄(原体S燃)	当て具痕	
562	HH3	八反	SD5	弥生中期末～古墳初頭	楽浪系		底部	長石・石英・角閃石	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)	当て具痕	
563	NH19	不條	D区SD2①層		楽浪系	長頸壺	肩部破片	長石・石英	灰	5Y6/1	灰	5Y5/1	タタキ→回転ナデ	回転ナデ	
564	NH19	八反	E区SX2③層	須玖1新～弥生後期末	楽浪系		胴部	長石・石英・角閃石・金雲母	灰	5Y5/1	黄灰	2.5Y6/1	縄(原体S燃)	当て具痕	
565	NK124	石田大原	IV区		楽浪系	長頸壺	胴～底部	長石・石英・角閃石	灰白	5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	タタキ→回転ナデ	回転ナデ	
566	NK124	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳前期	三韓系		胴部	長石・石英・金雲母	赤褐灰黄	10R5/3 2.5Y7/2	灰黄	2.5Y6/2	肩:ナデ、胴:平行→沈線	ナデ	外面赤色塗彩

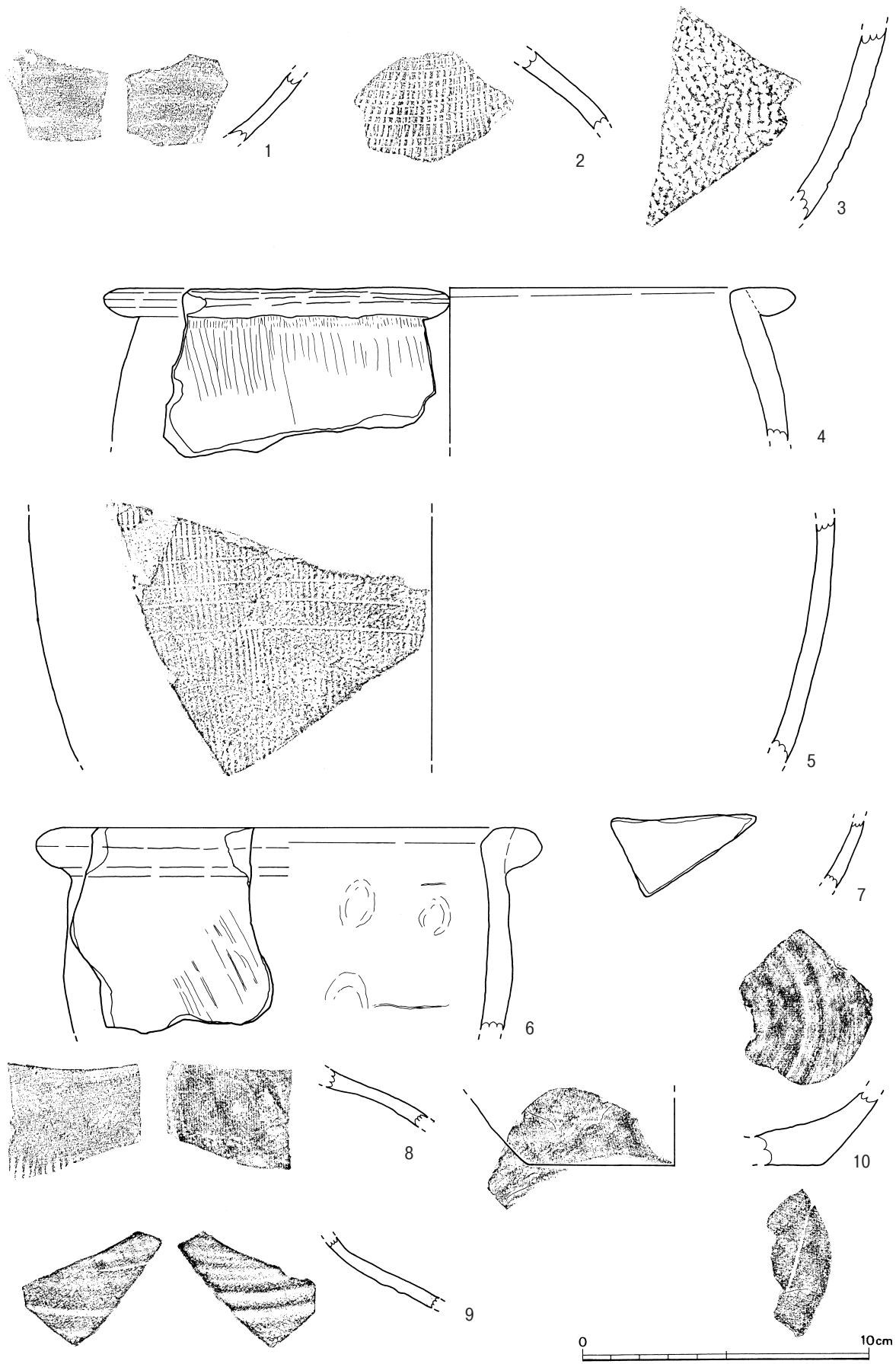


图25 未報告大陸・半島系土器①

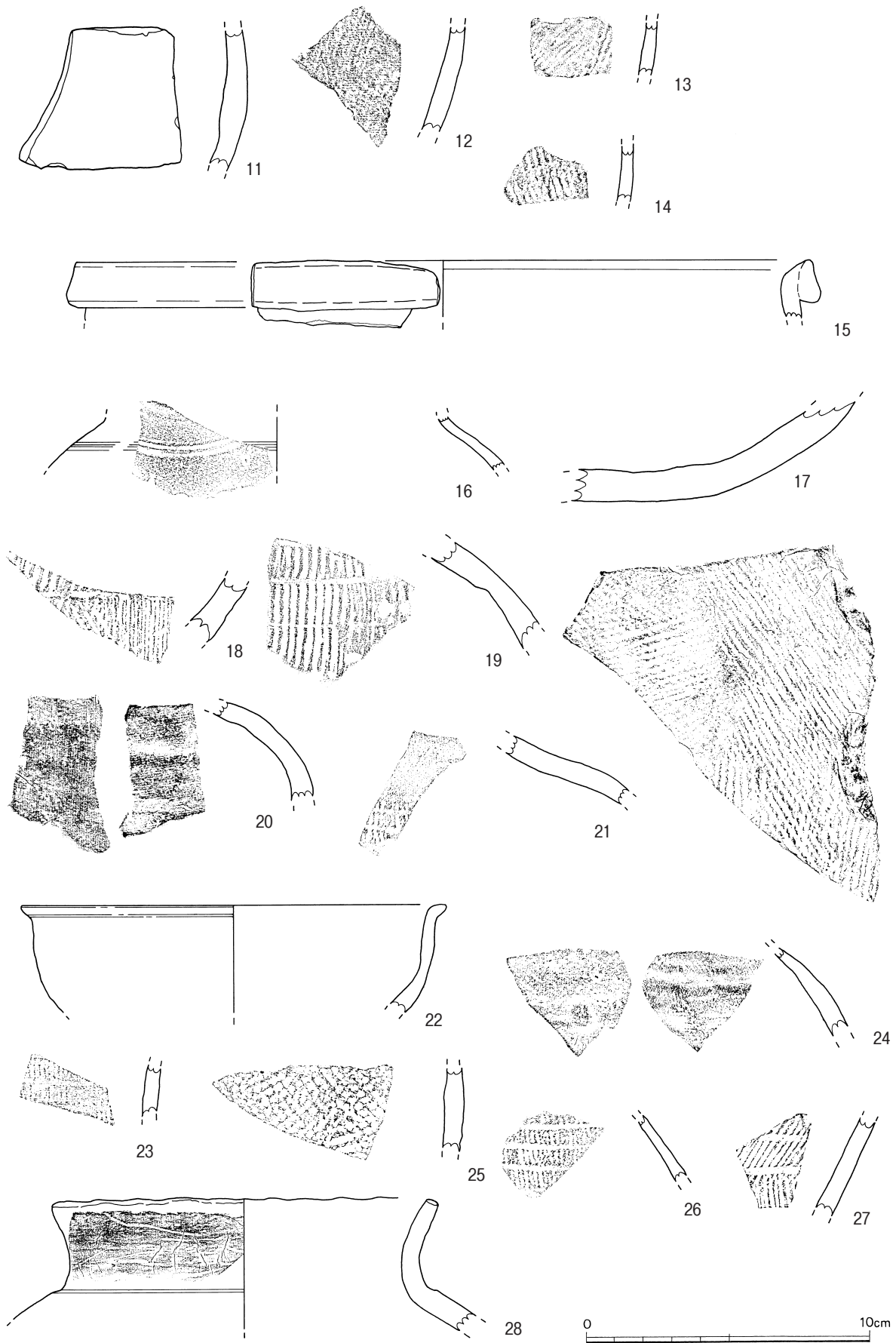


図26 未報告大陸・半島系土器②

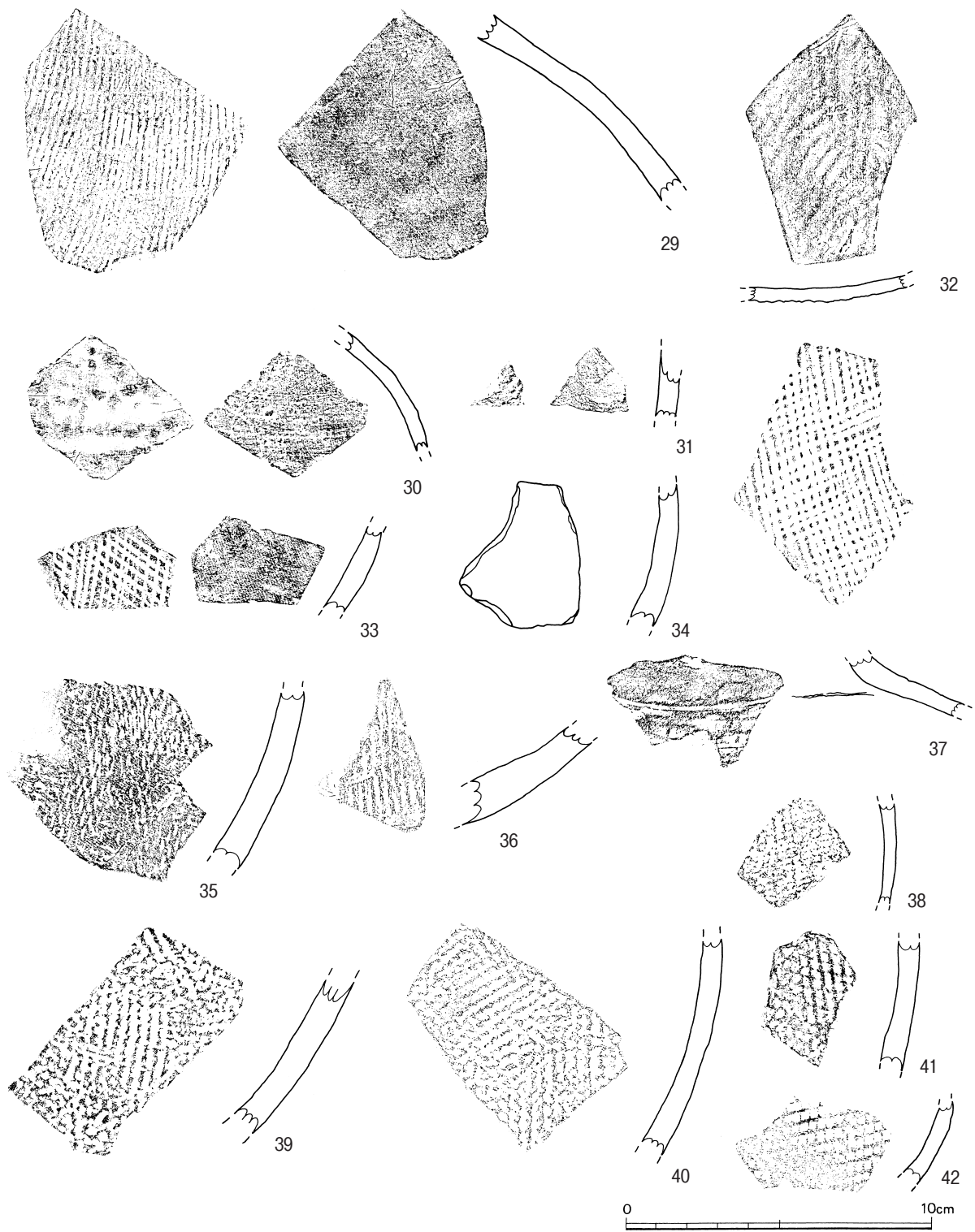


图27 未報告大陸・半島系土器③

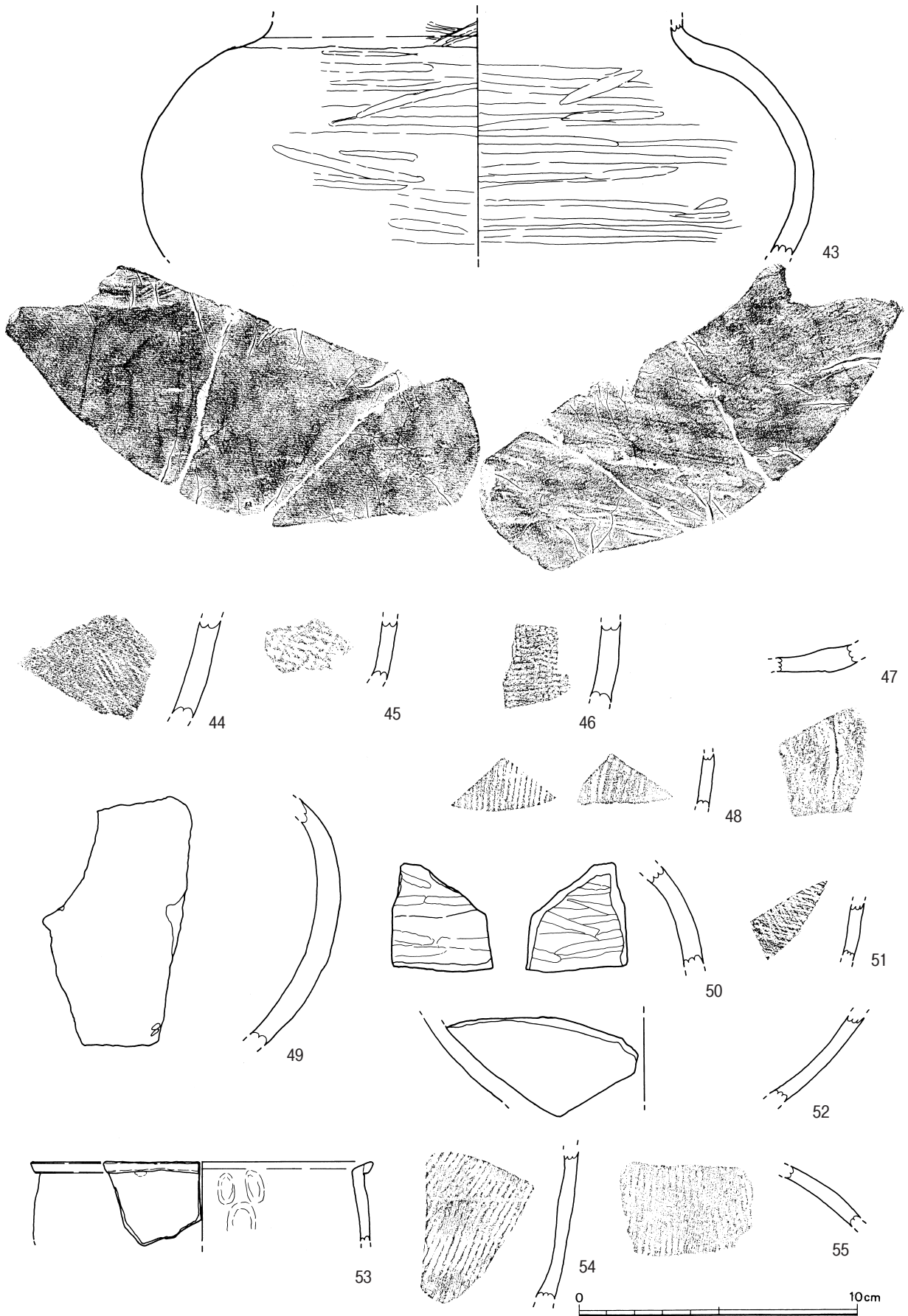


图28 未報告大陸・半島系土器④

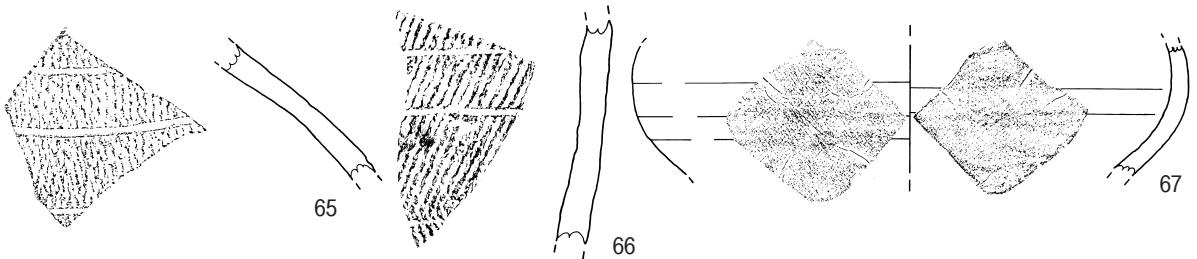
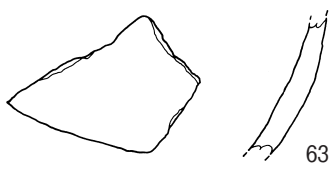
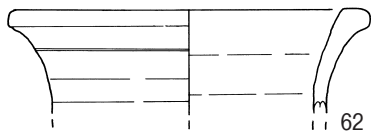
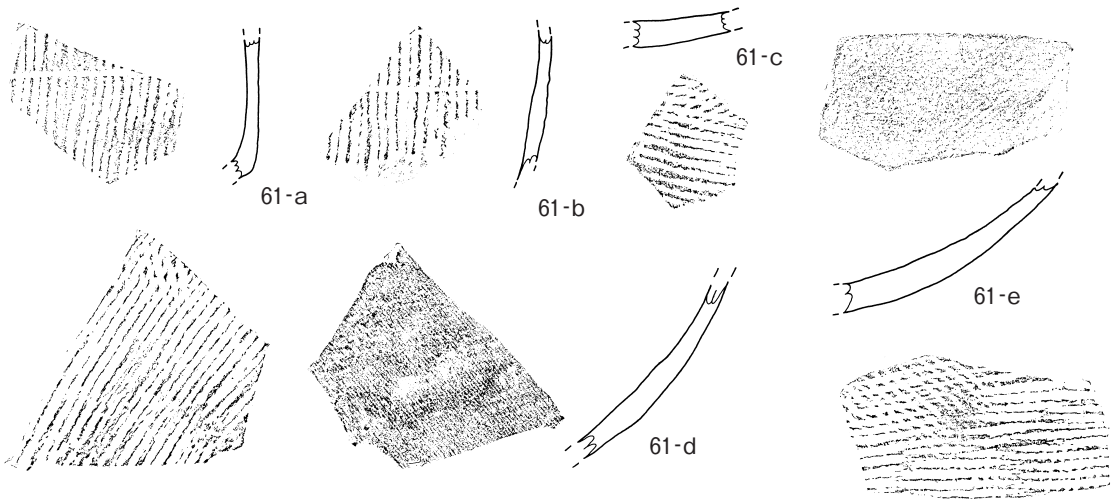
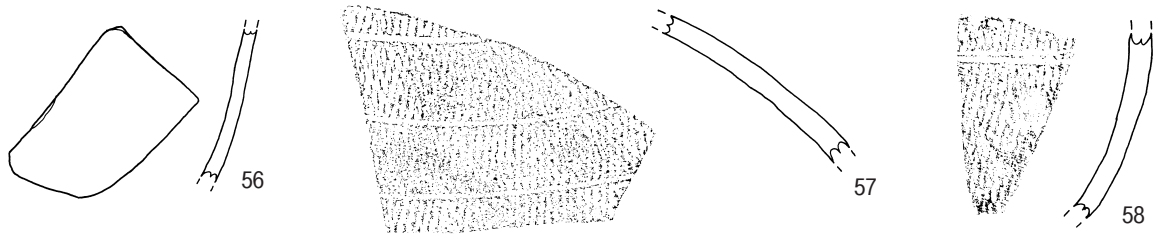


図29 未報告大陸・半島系土器⑤

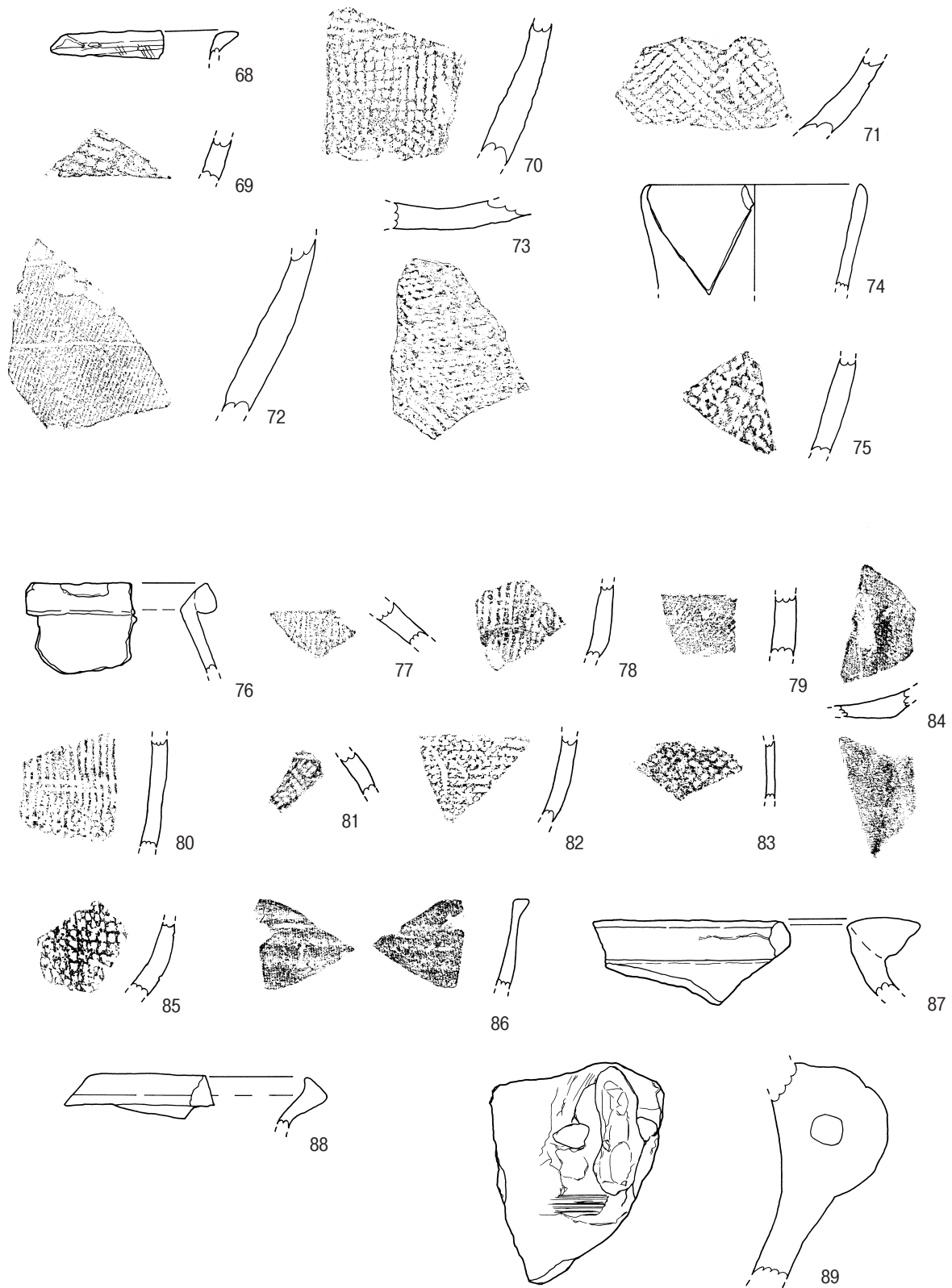


図30 未報告大陸・半島系土器⑥



图31 未報告大陸・半島系土器⑦

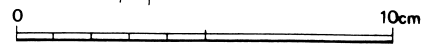
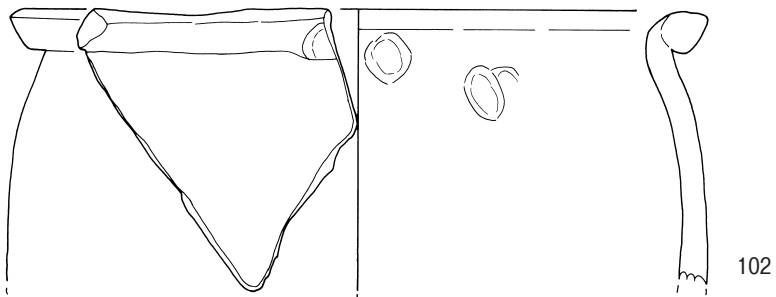
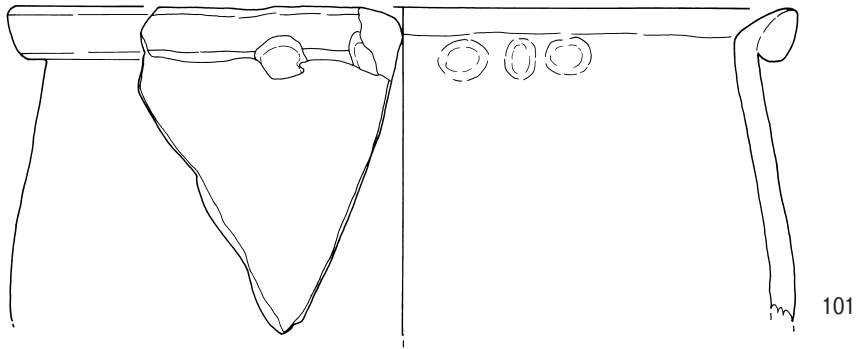
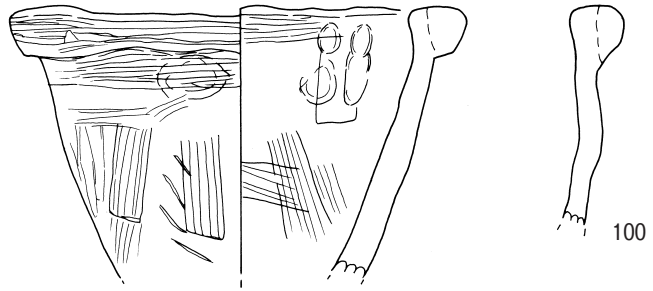
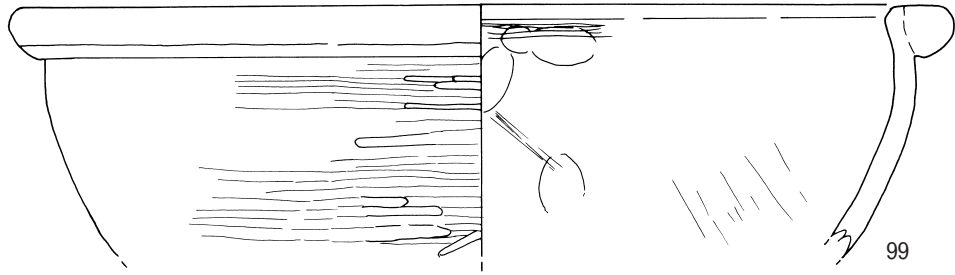
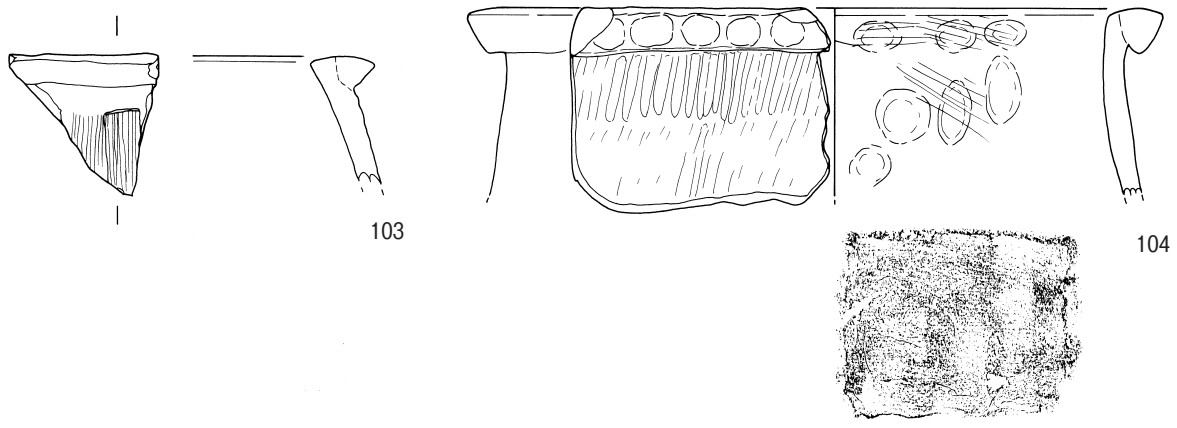
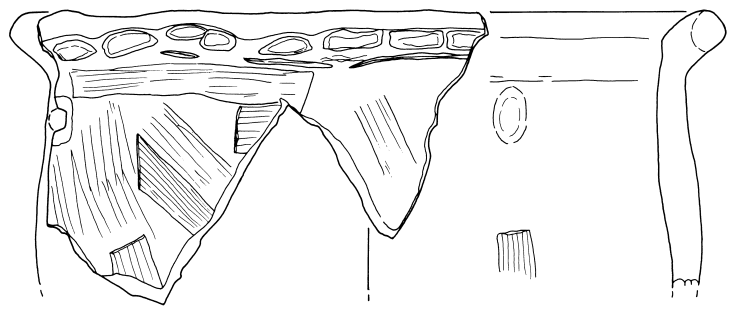


図32 未報告大陸・半島系土器⑧

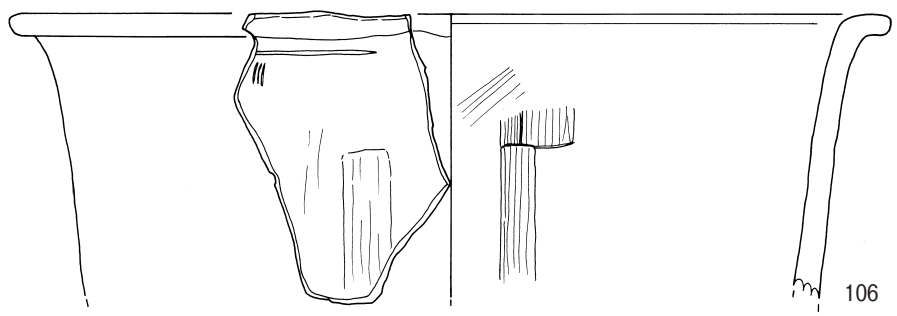


103

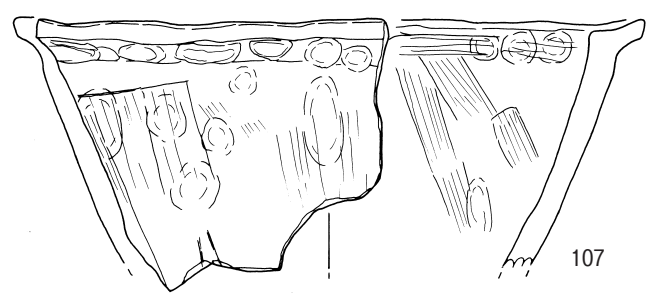
104



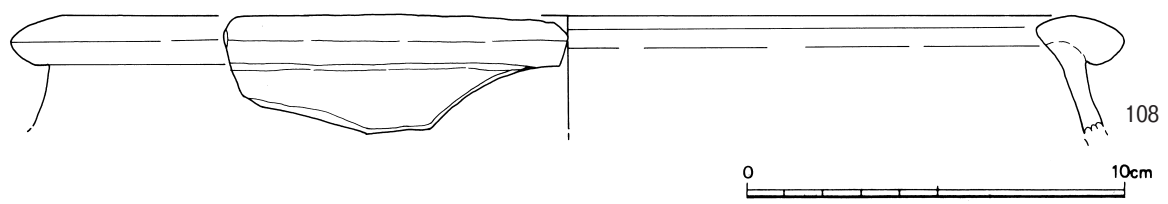
105



106



107



108

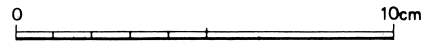


図33 未報告大陸・半島系土器⑨

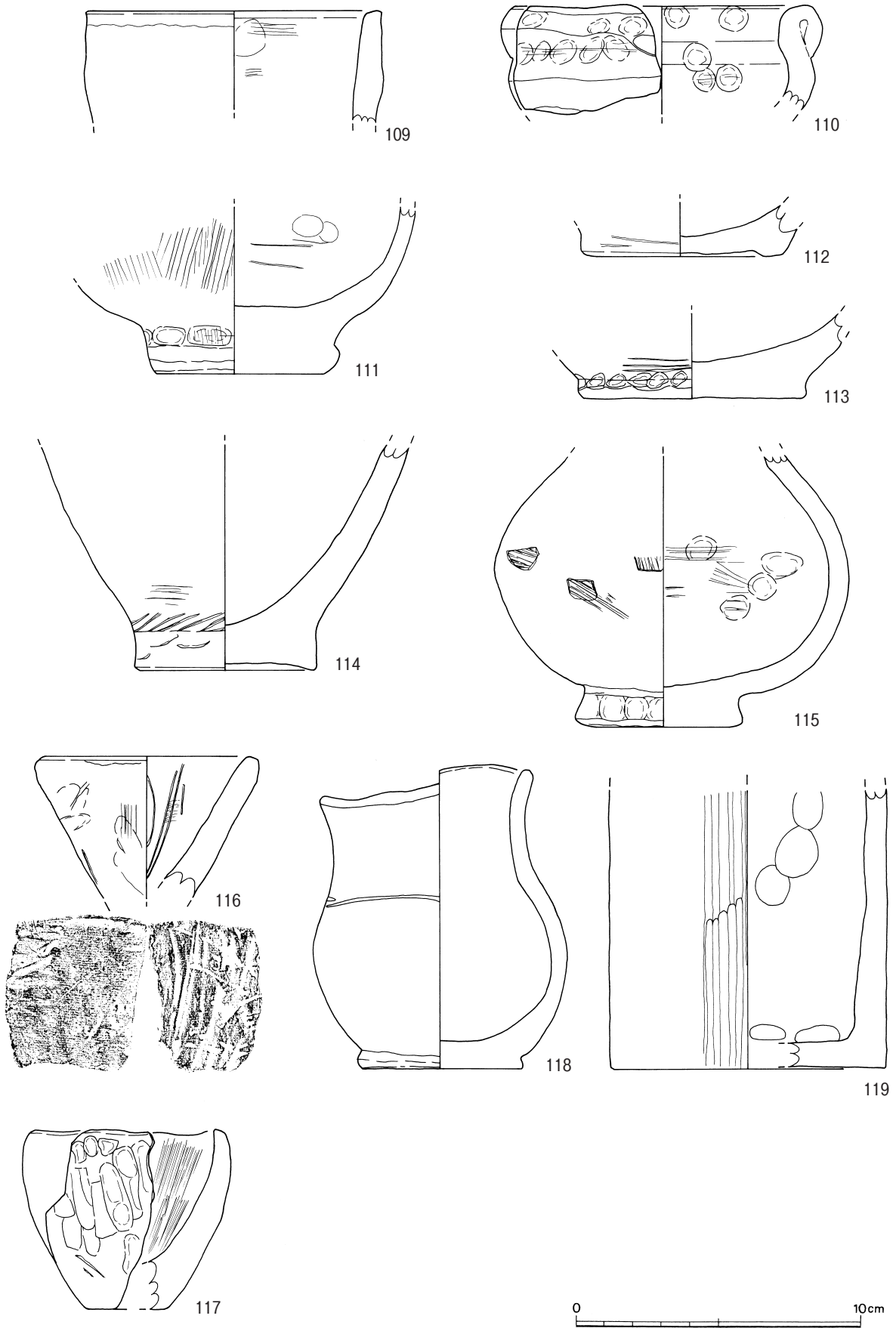


图34 未報告大陸・半島系土器⑩

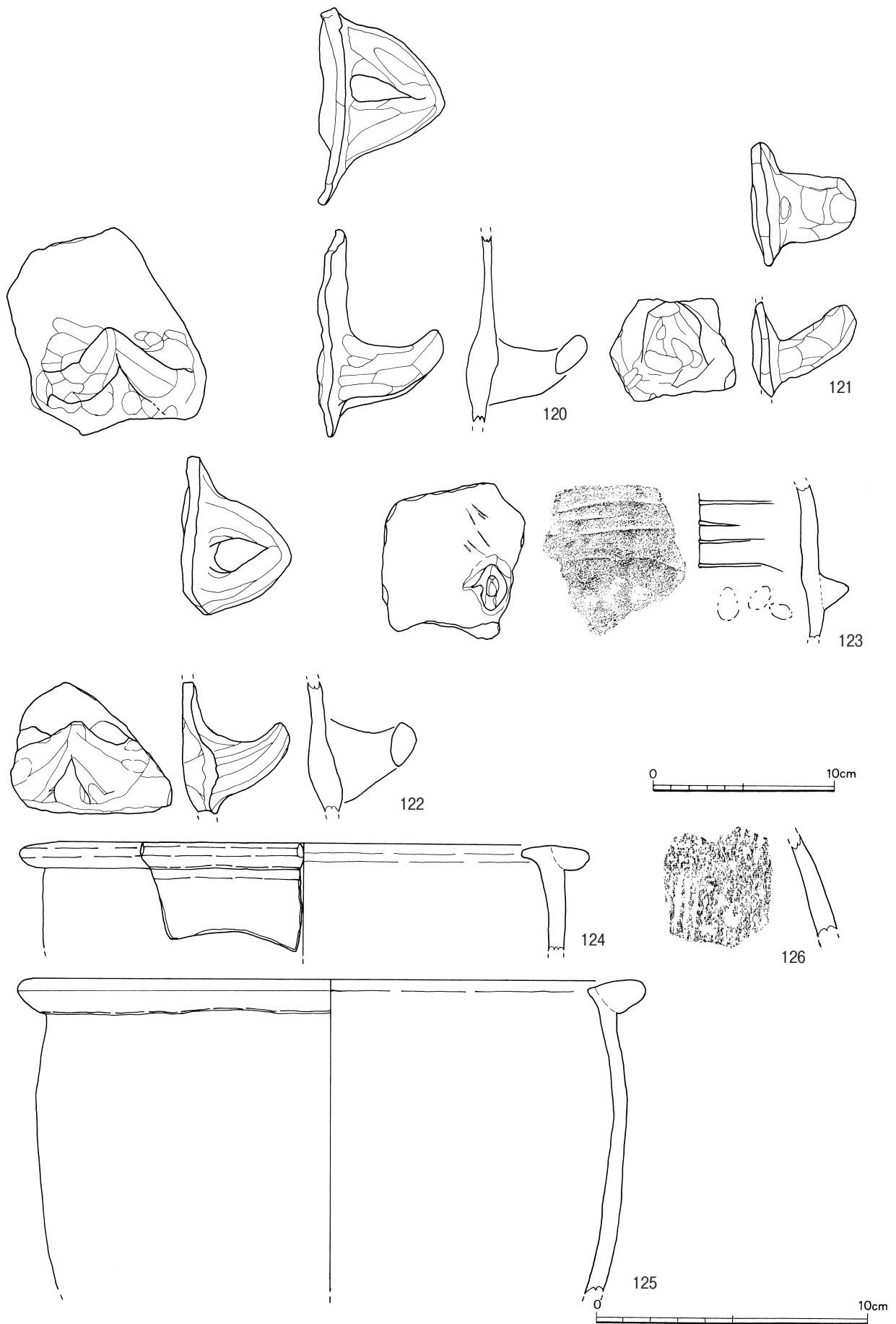
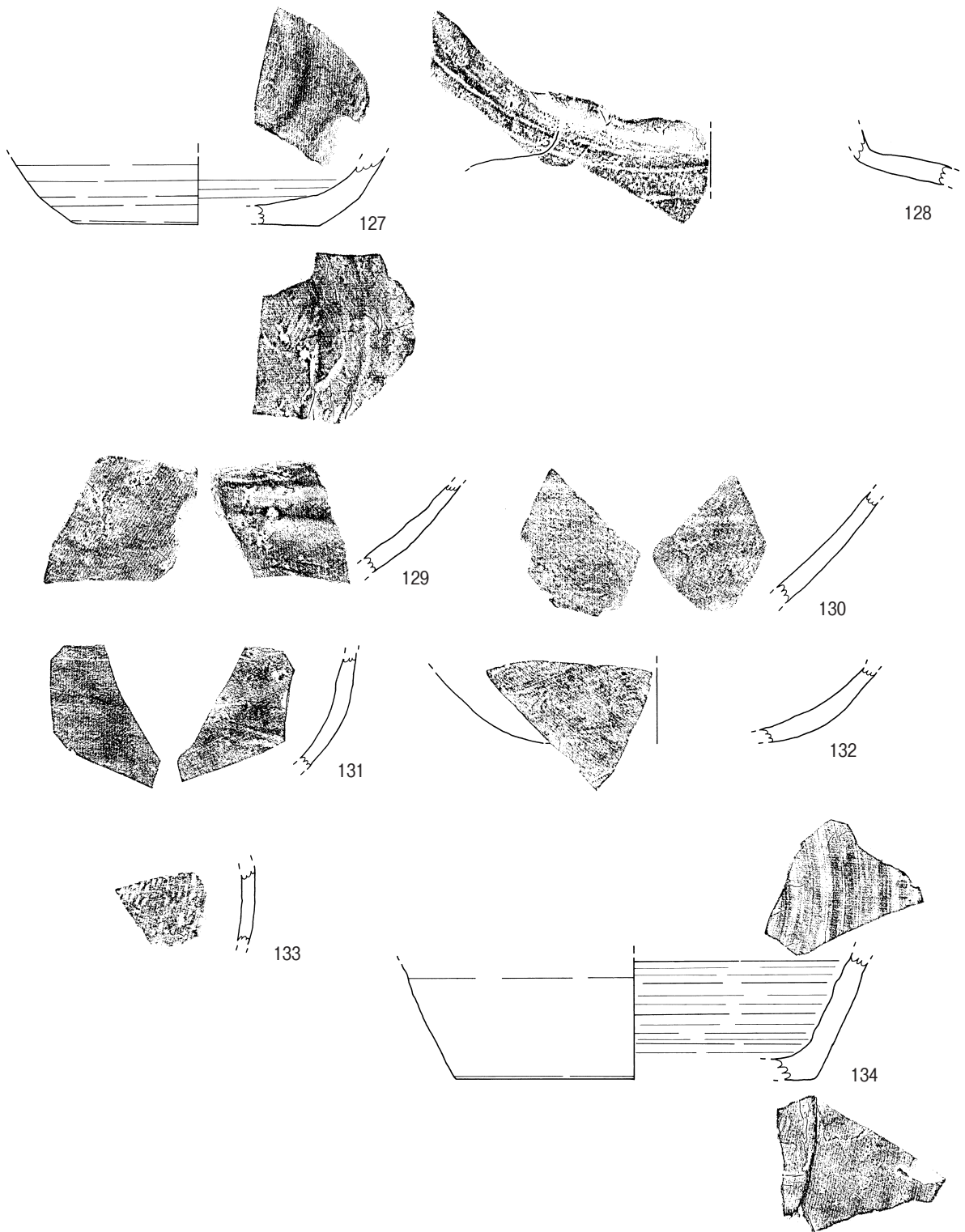


図35 未報告大陸・半島系土器①



0 10cm

图36 未報告大陸・半島系土器⑫

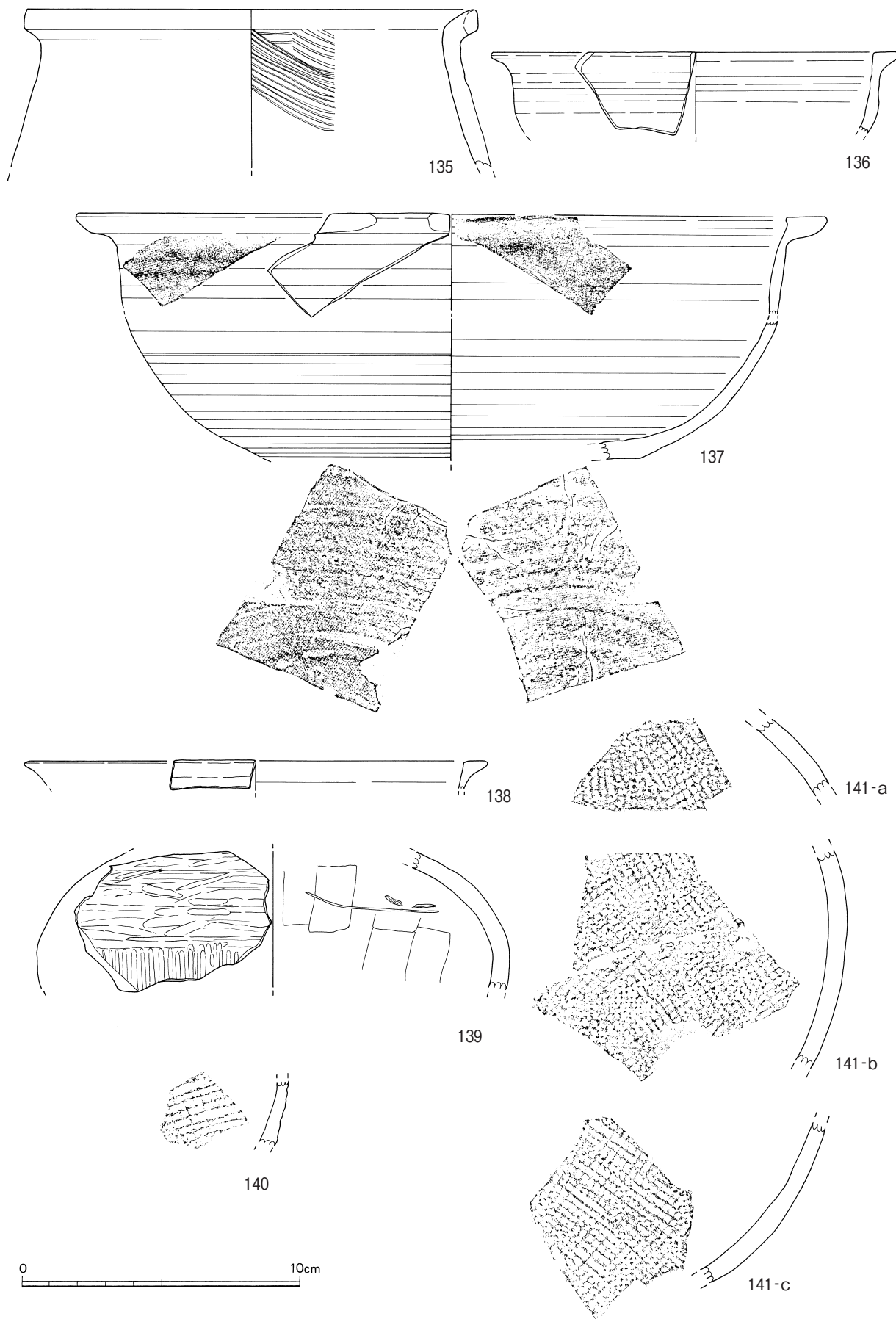


図37 未報告大陸・半島系土器⑬

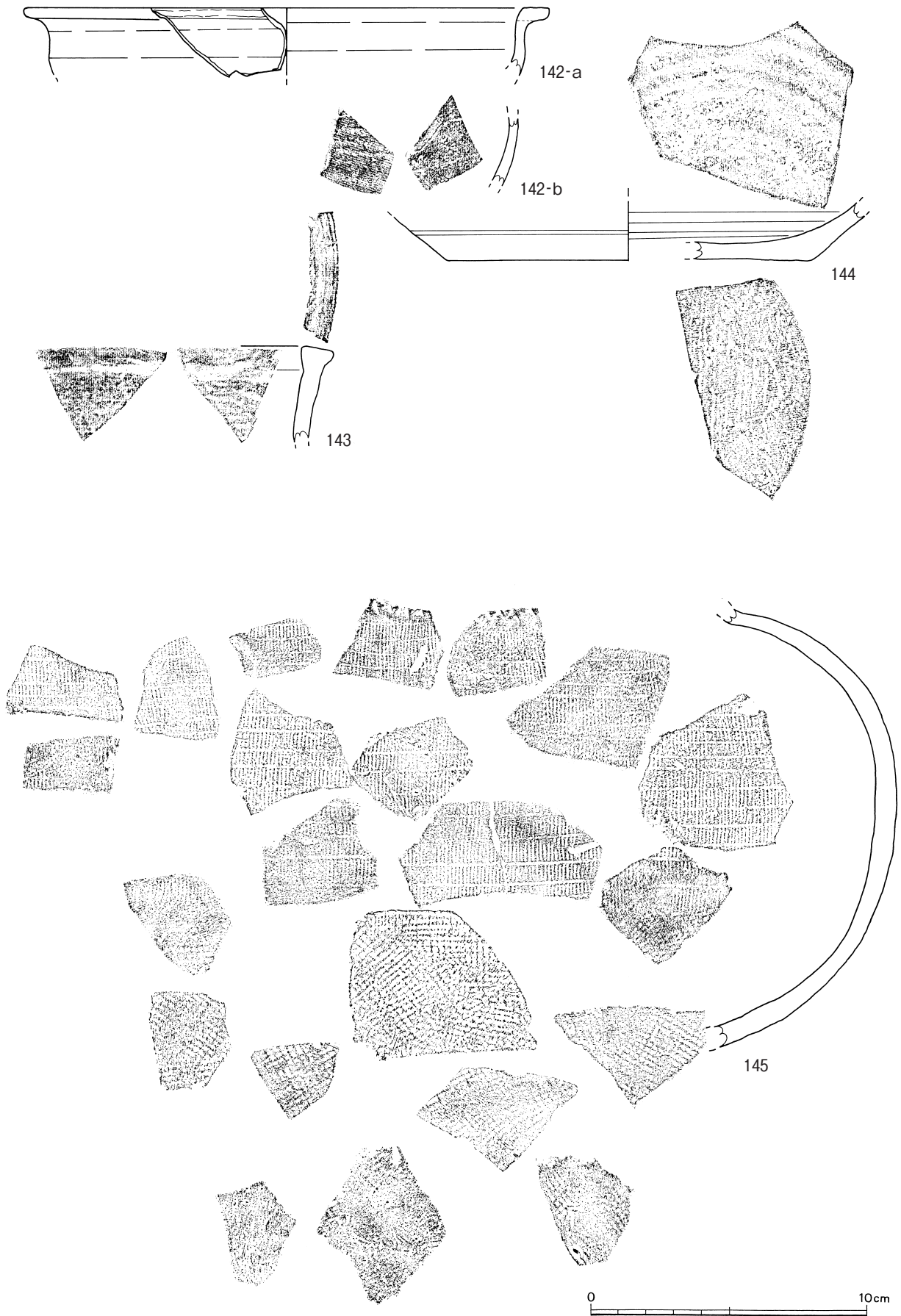


図38 未報告大陸・半島系土器⑭

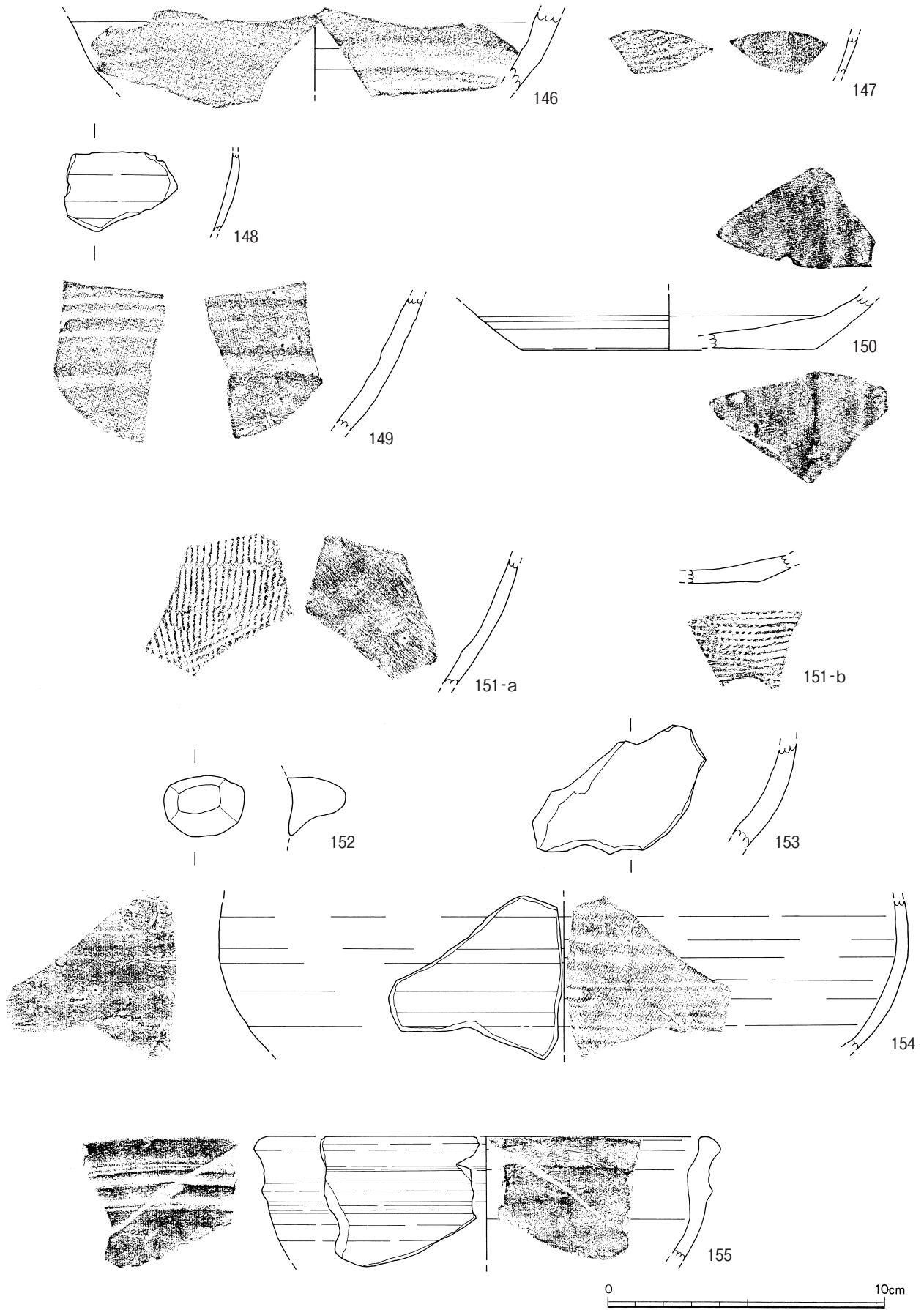


図39 未報告大陸・半島系土器⑮

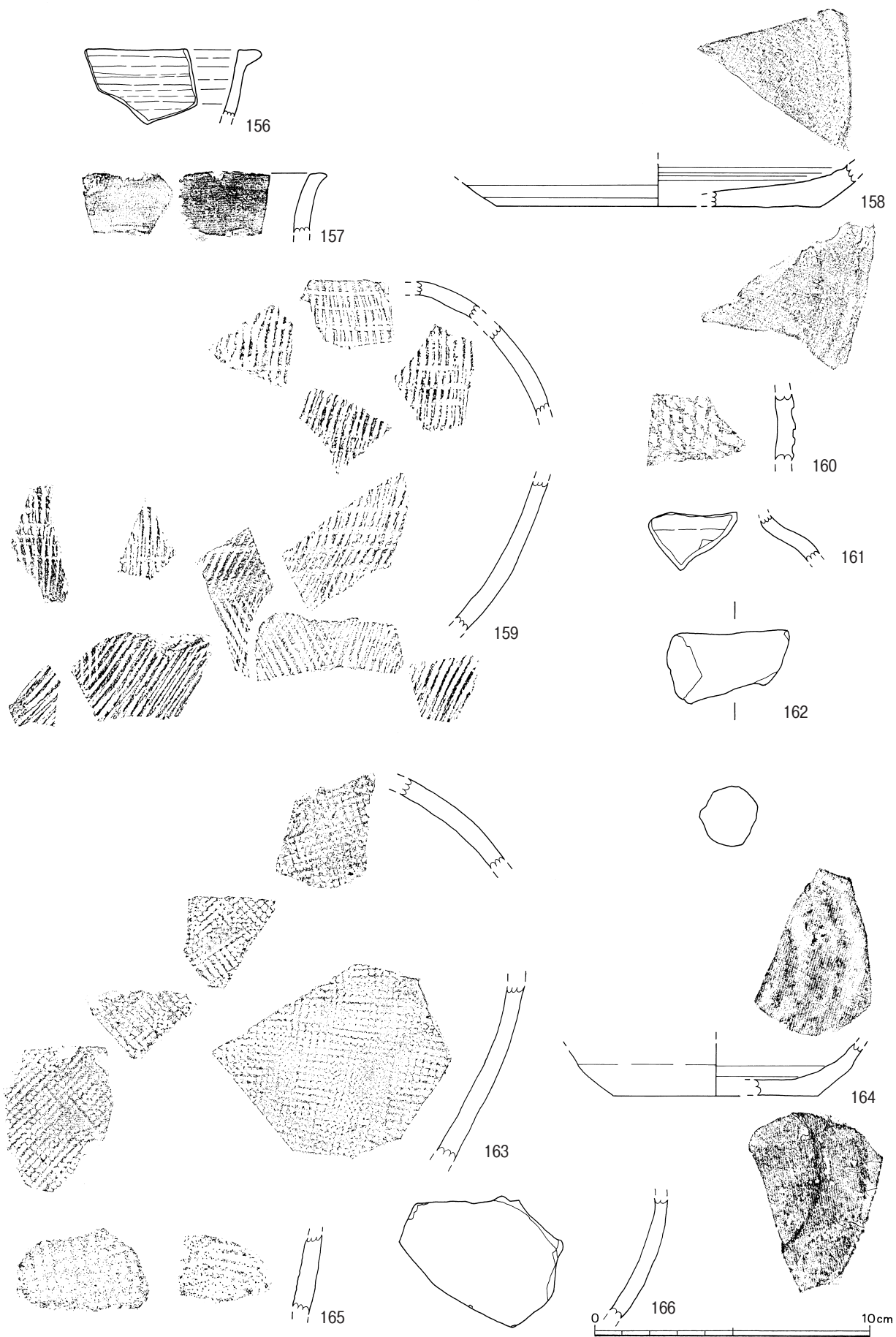


图40 未報告大陸・半島系土器⑩

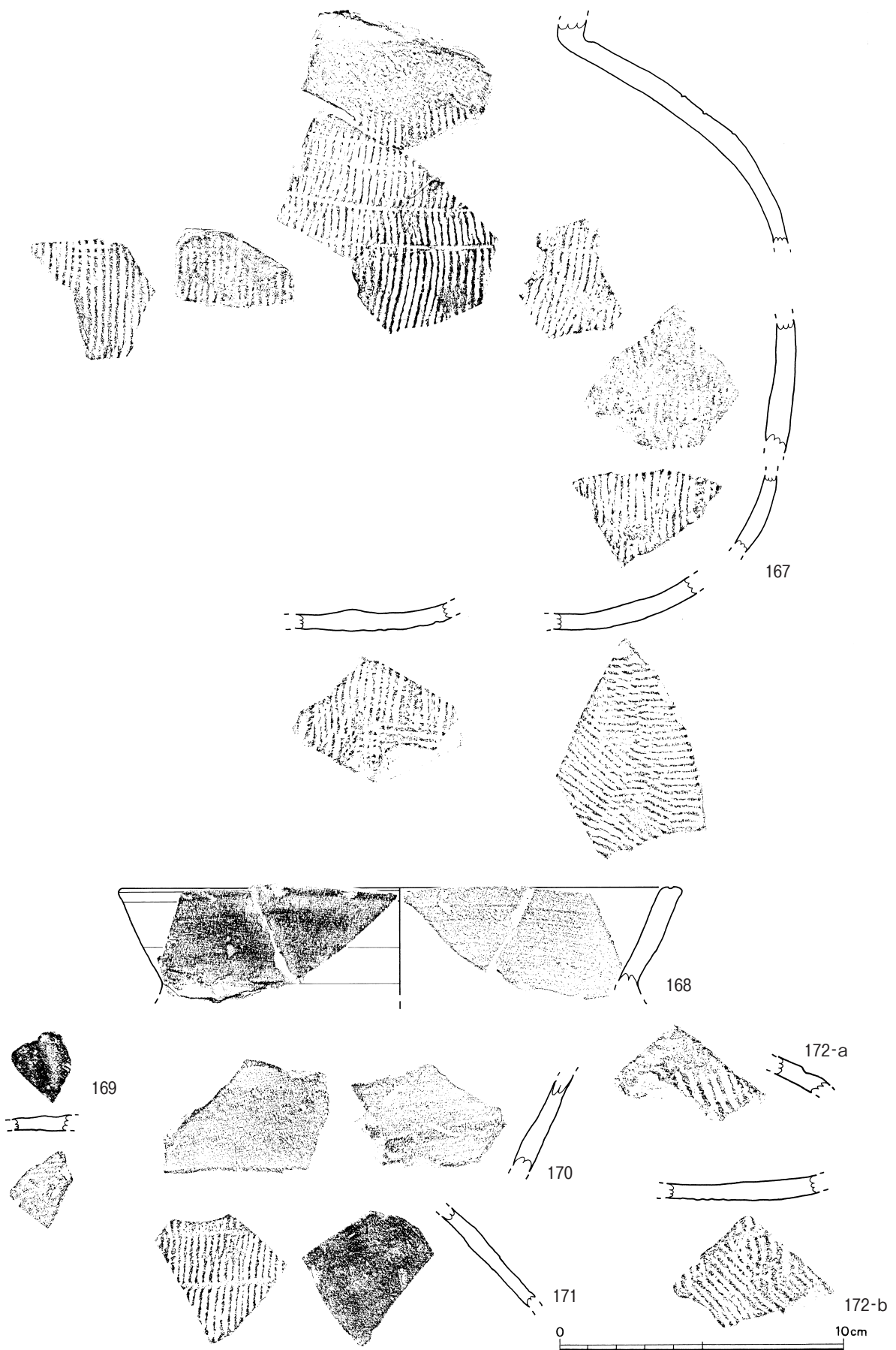


図41 未報告大陸・半島系土器⑰

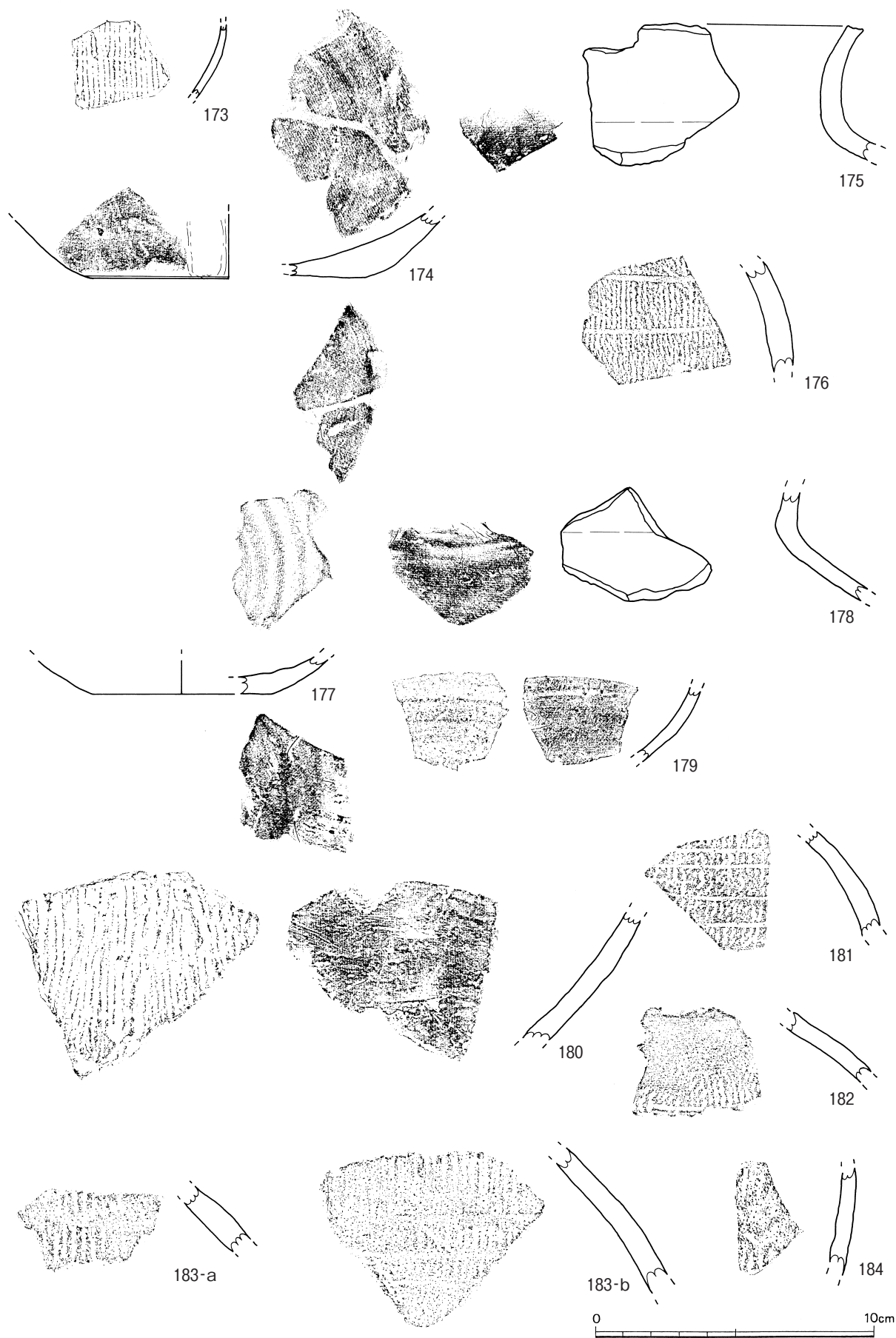


図42 未報告大陸・半島系土器^⑧

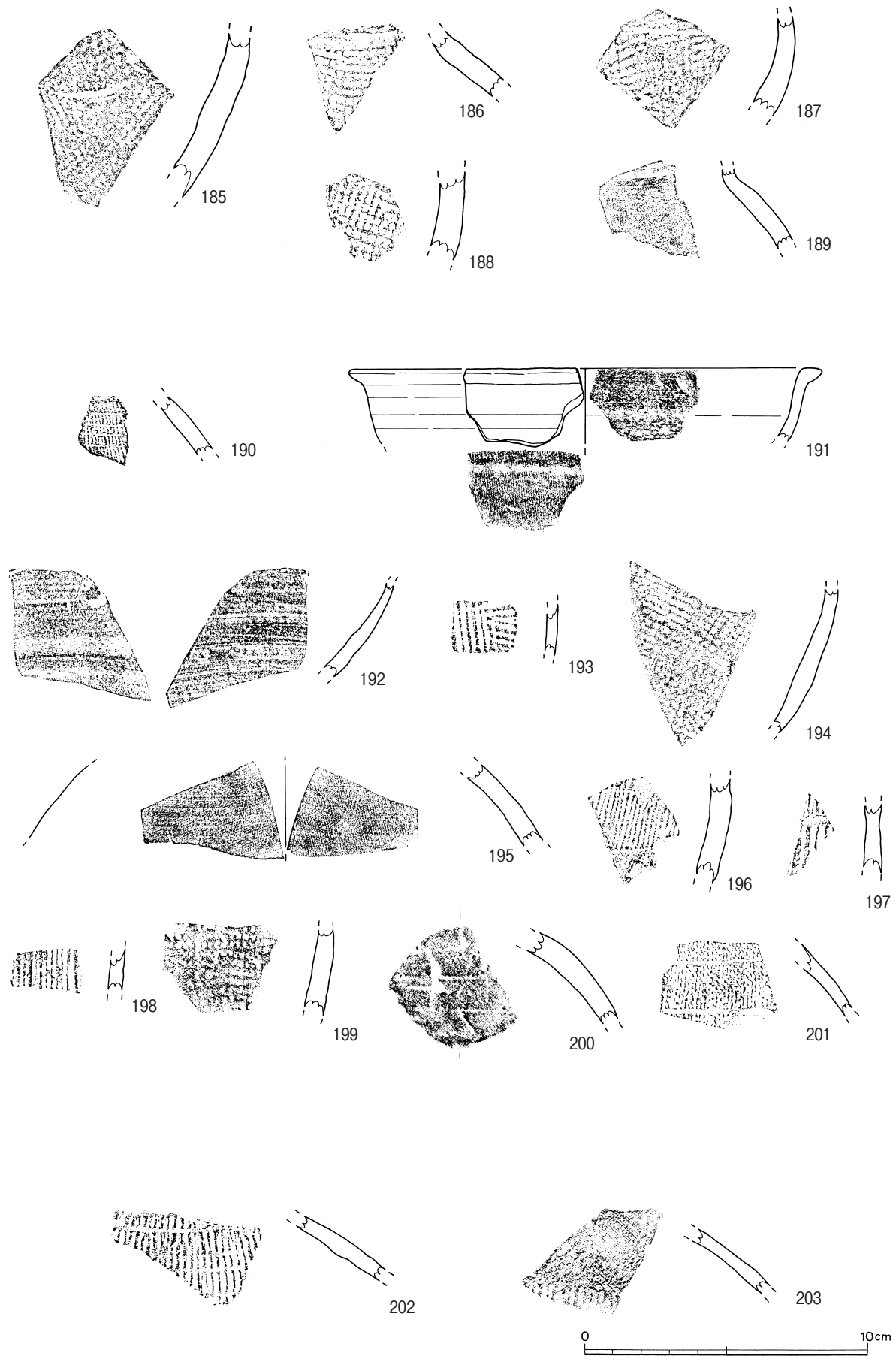


图43 未報告大陸・半島系土器⑨

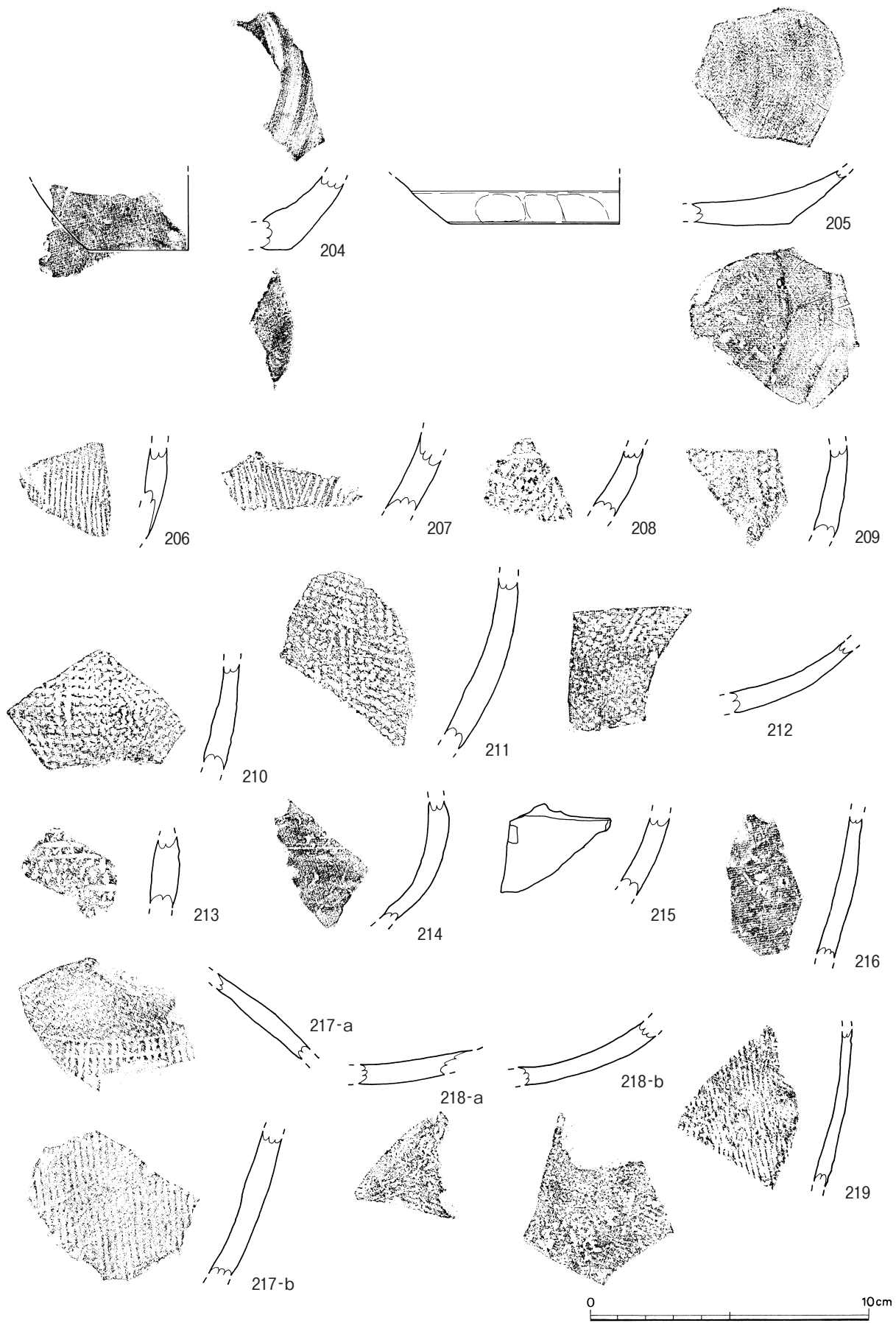


图44 未報告大陸・半島系土器②

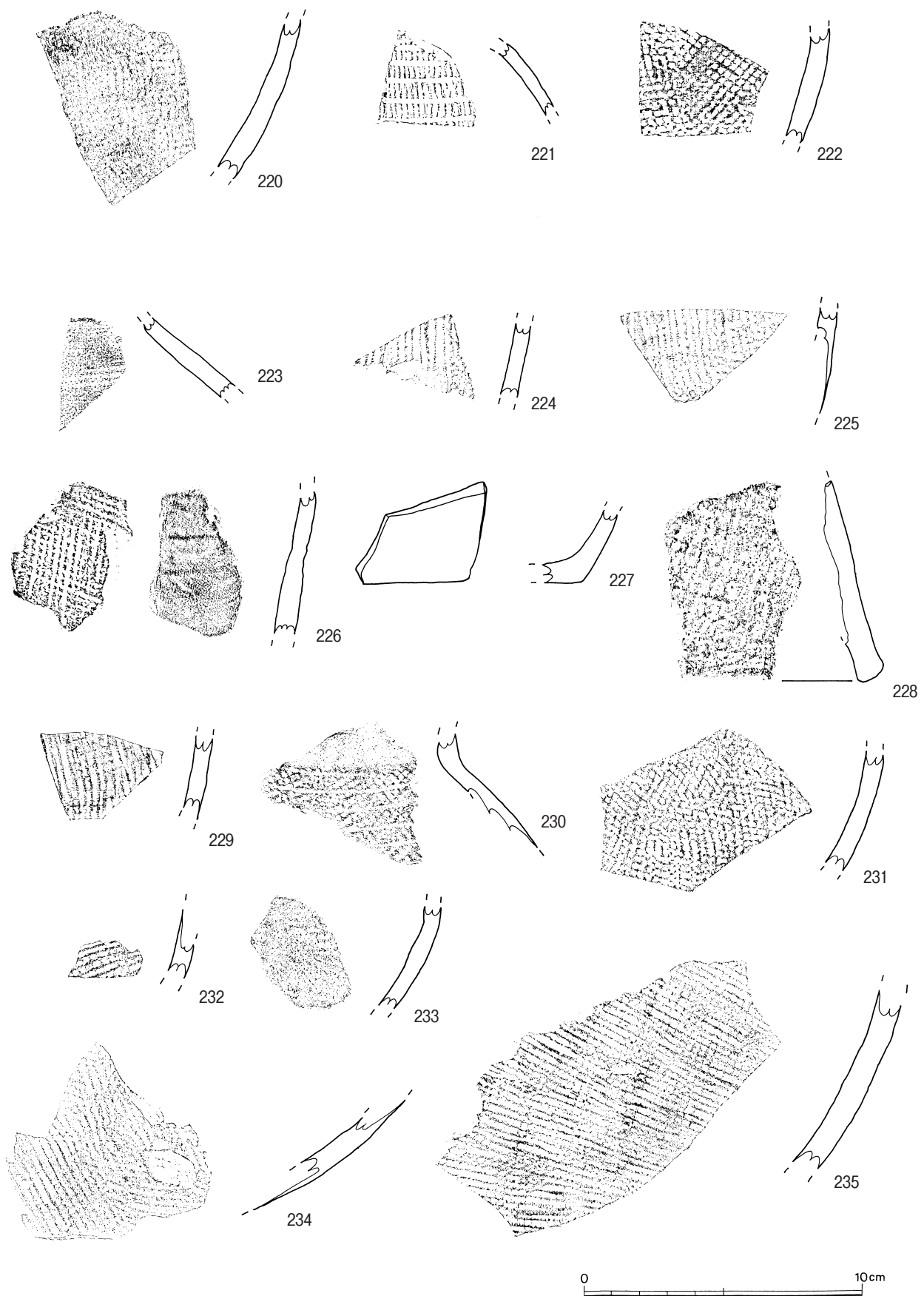


图45 未報告大陸・半島系土器②

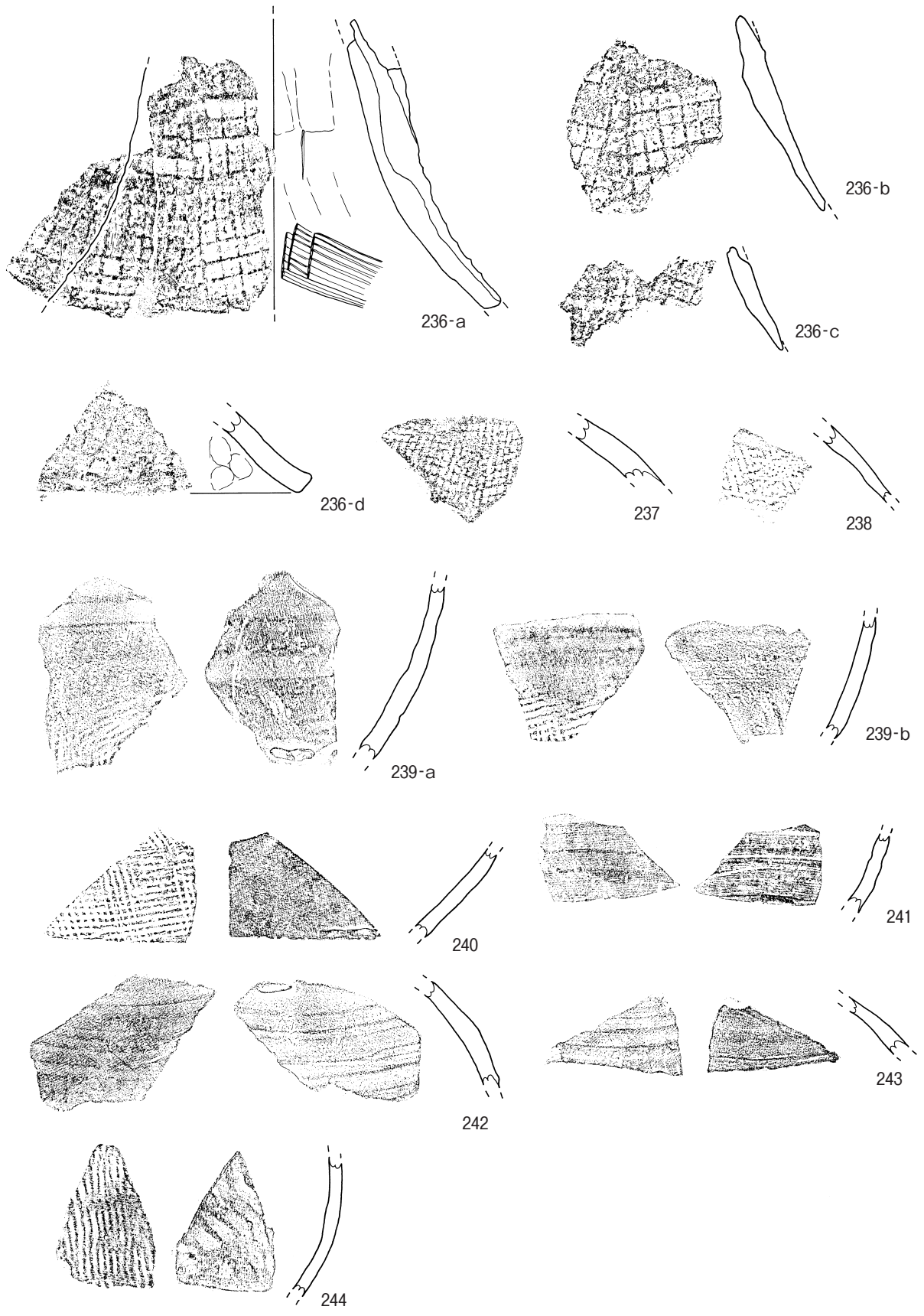


図46 未報告大陸・半島系土器②

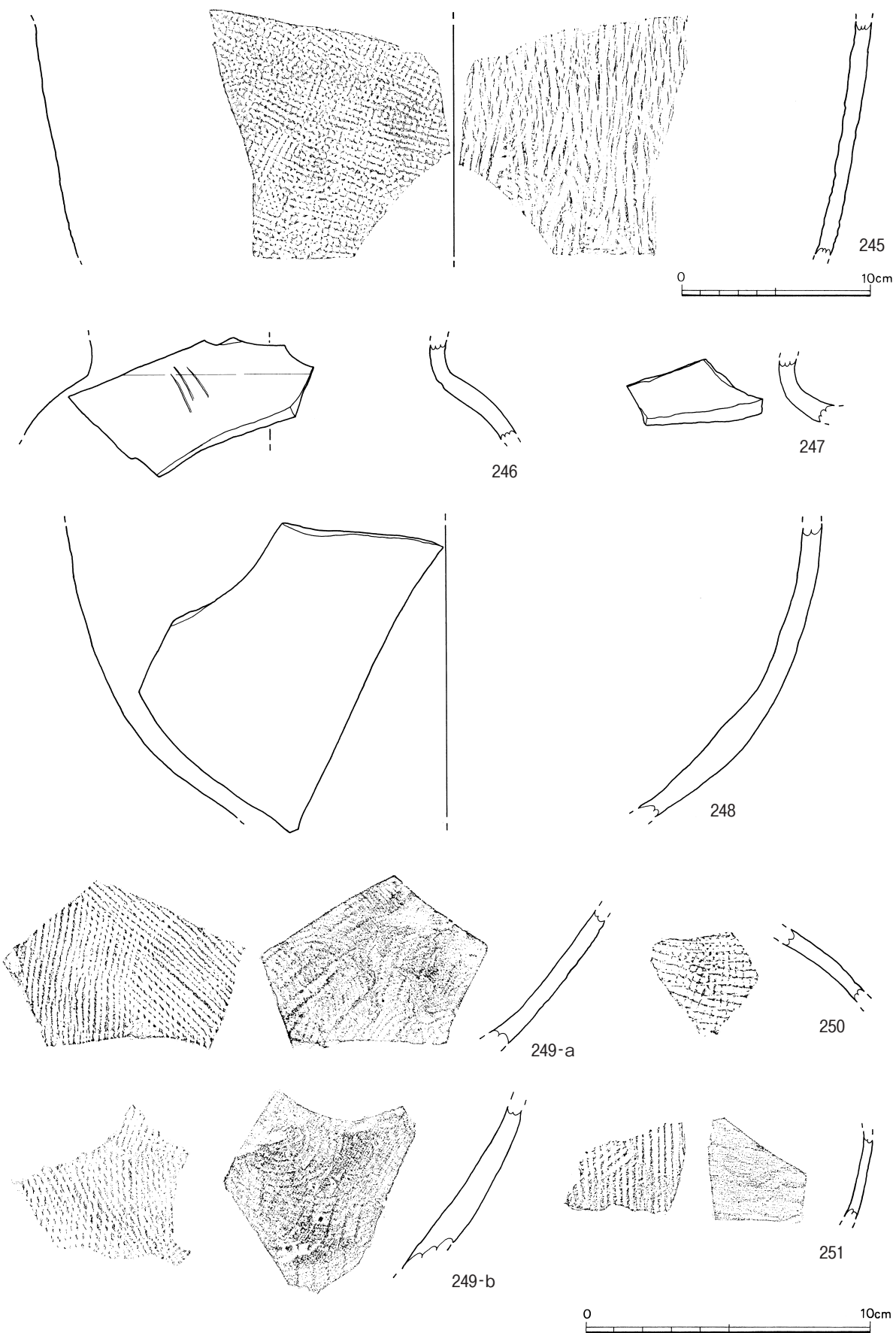
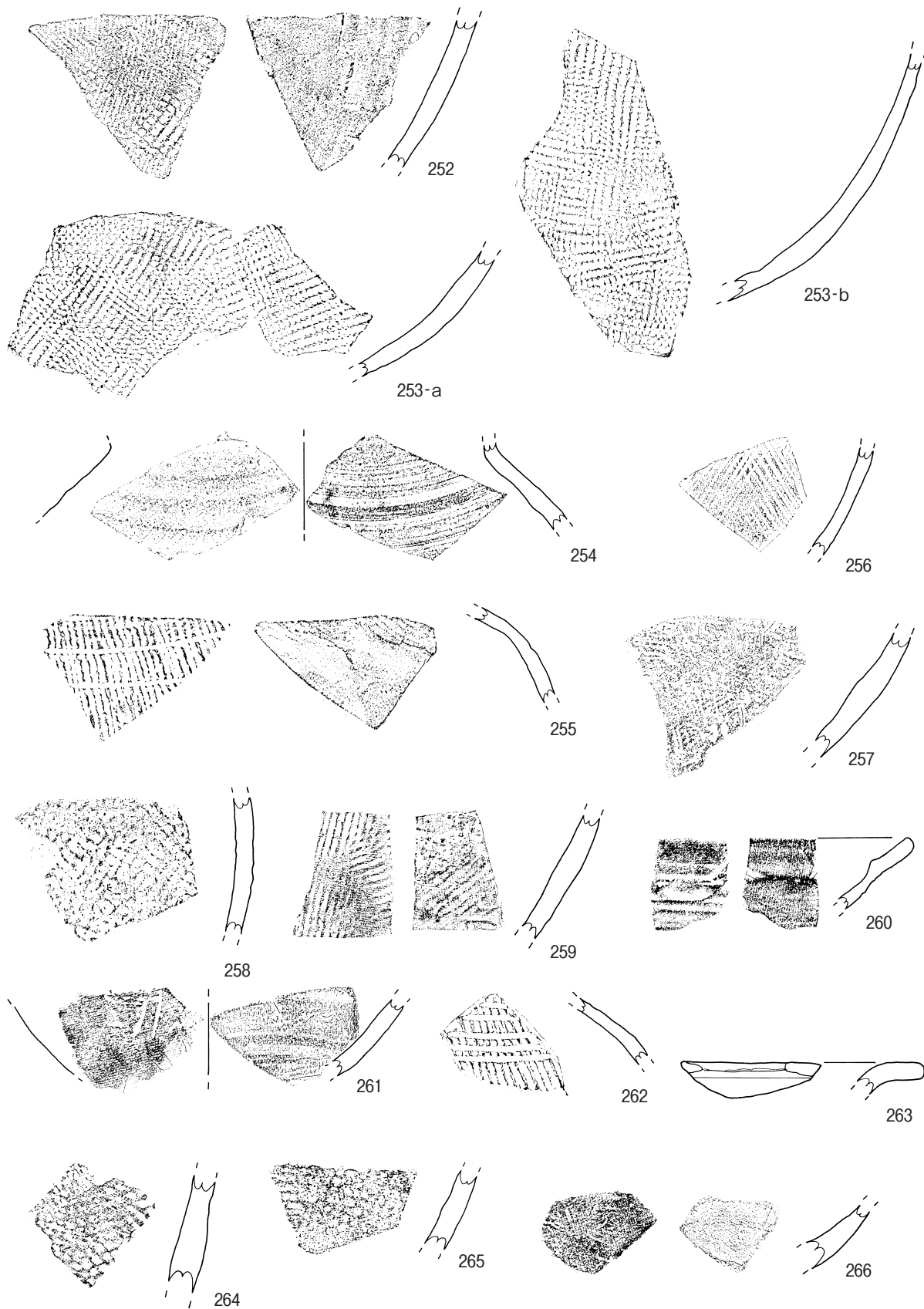


図47 未報告大陸・半島系土器②



0 10cm

图48 未報告大陸・半島系土器②

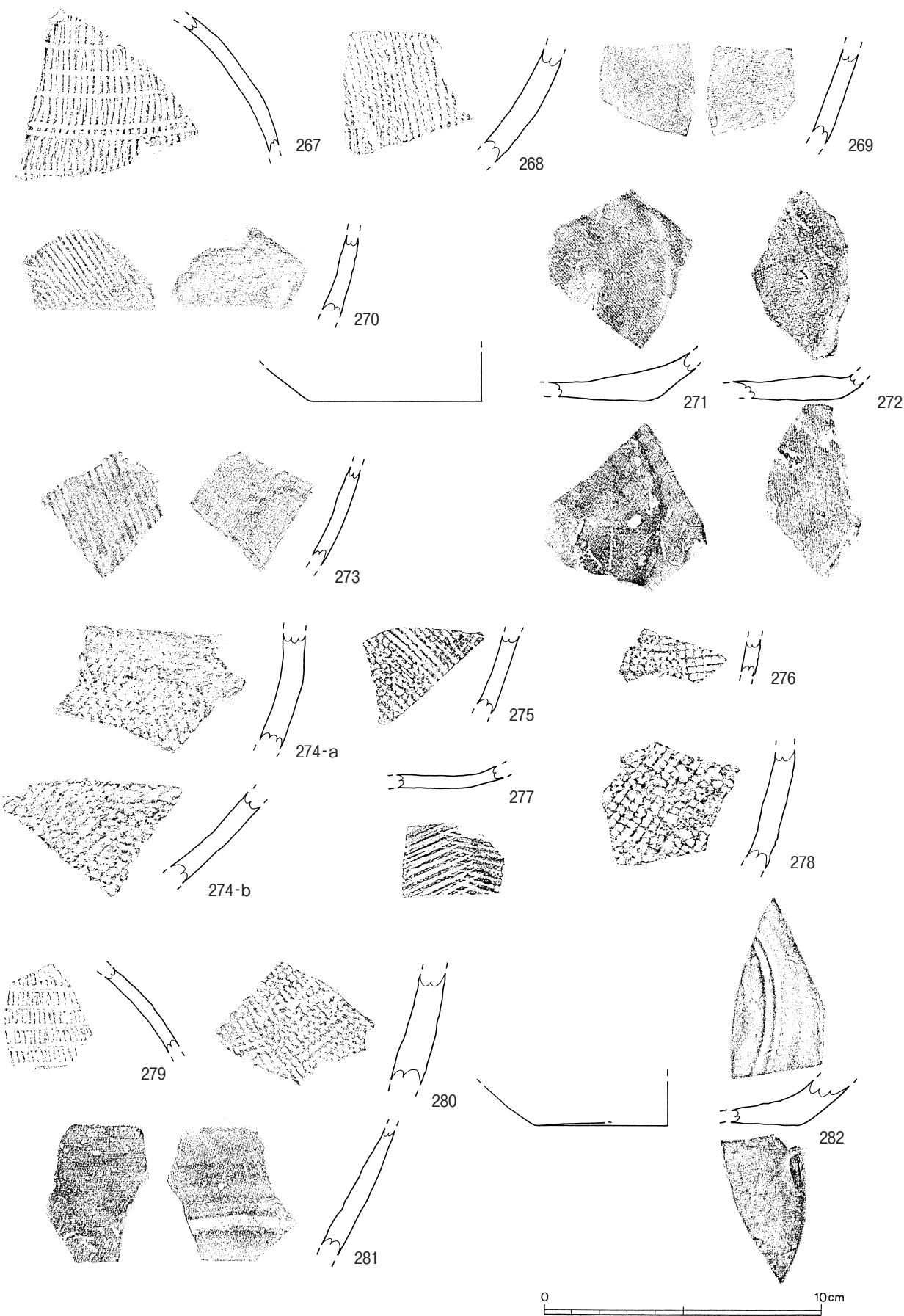


図49 未報告大陸・半島系土器②

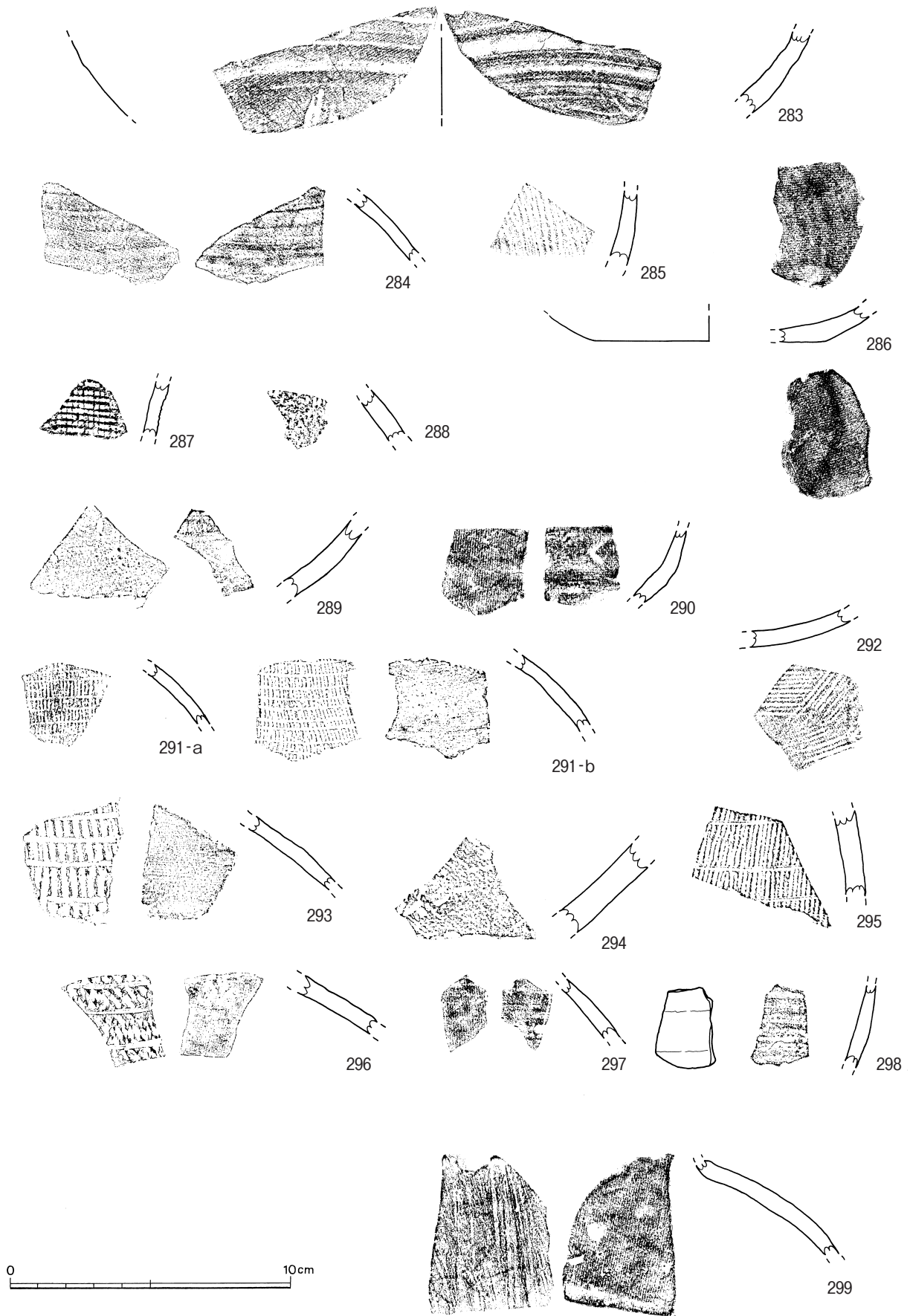


图50 未報告大陸・半島系土器²⁶

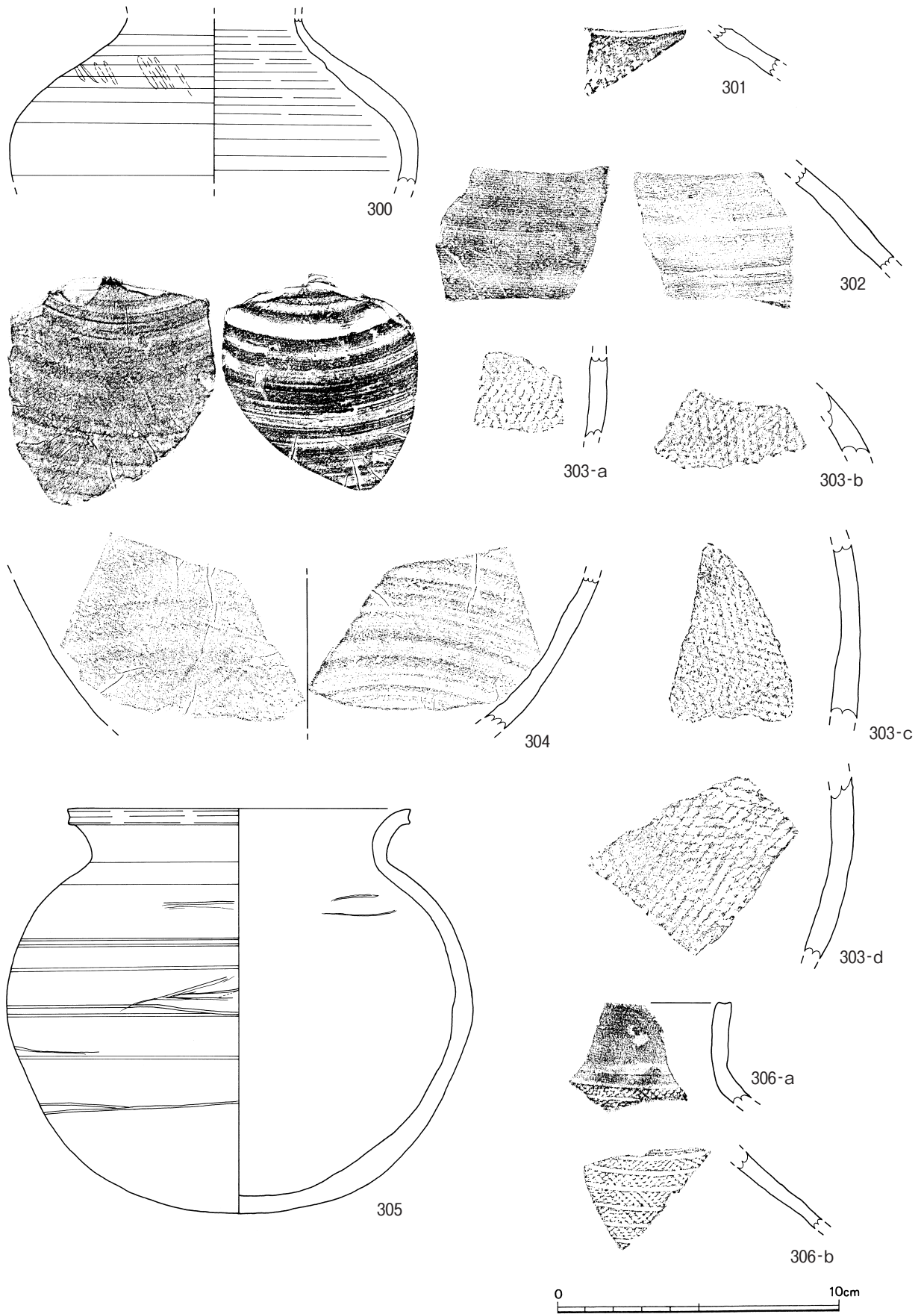


图51 未報告大陸・半島系土器②

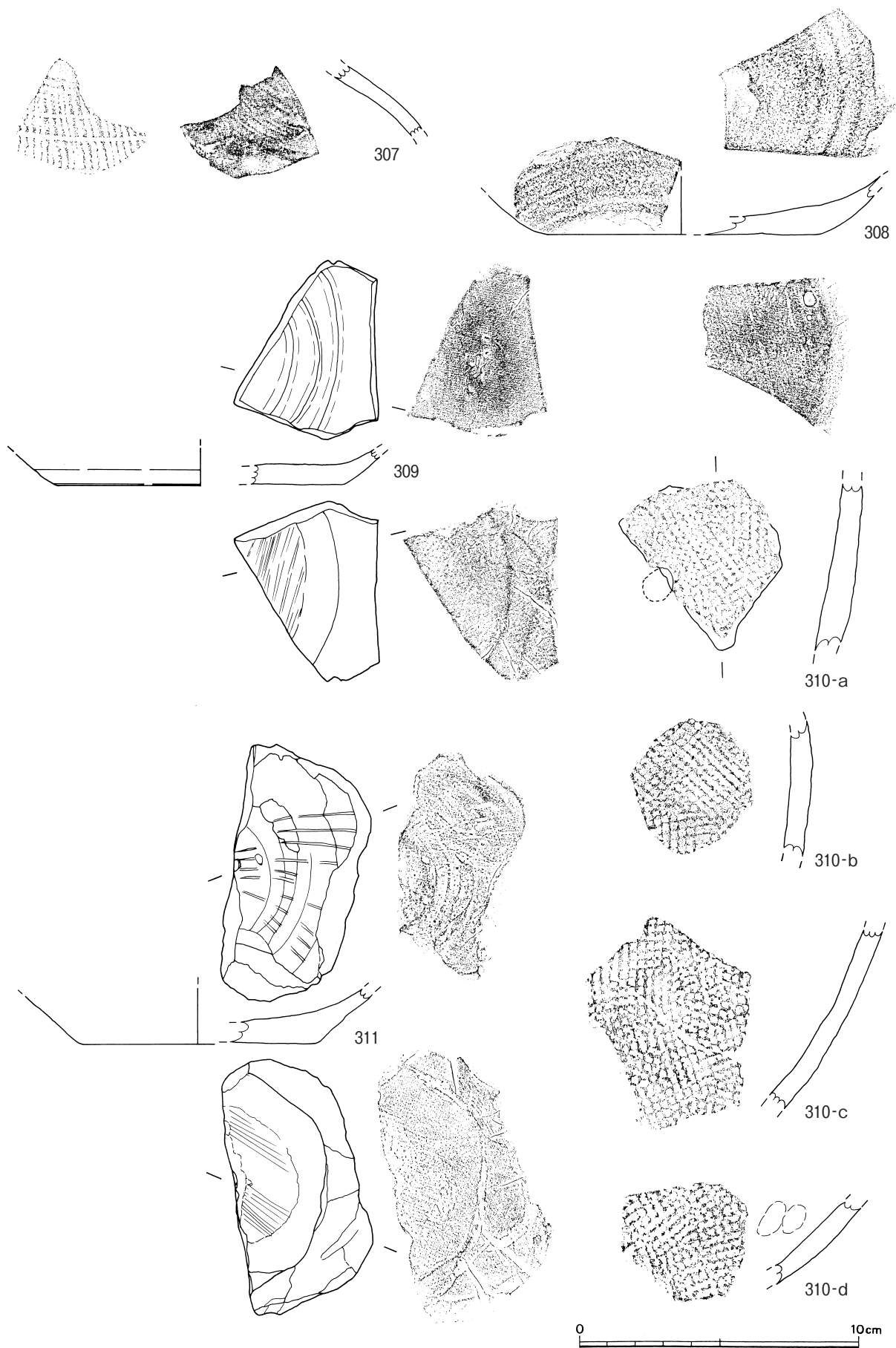


图52 未報告大陸・半島系土器²⁸

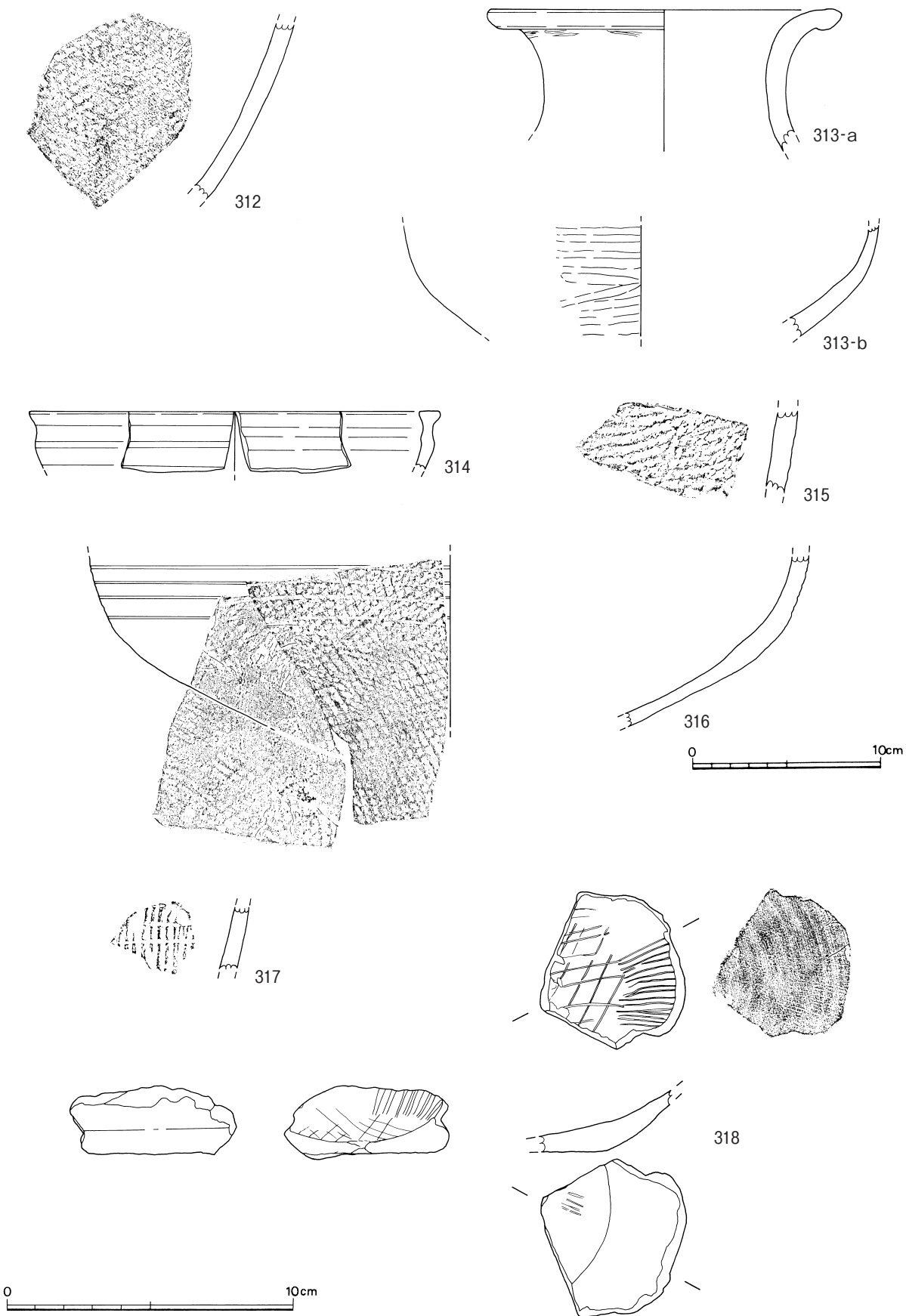


图53 未報告大陸・半島系土器²⁹

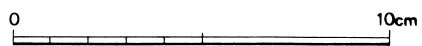
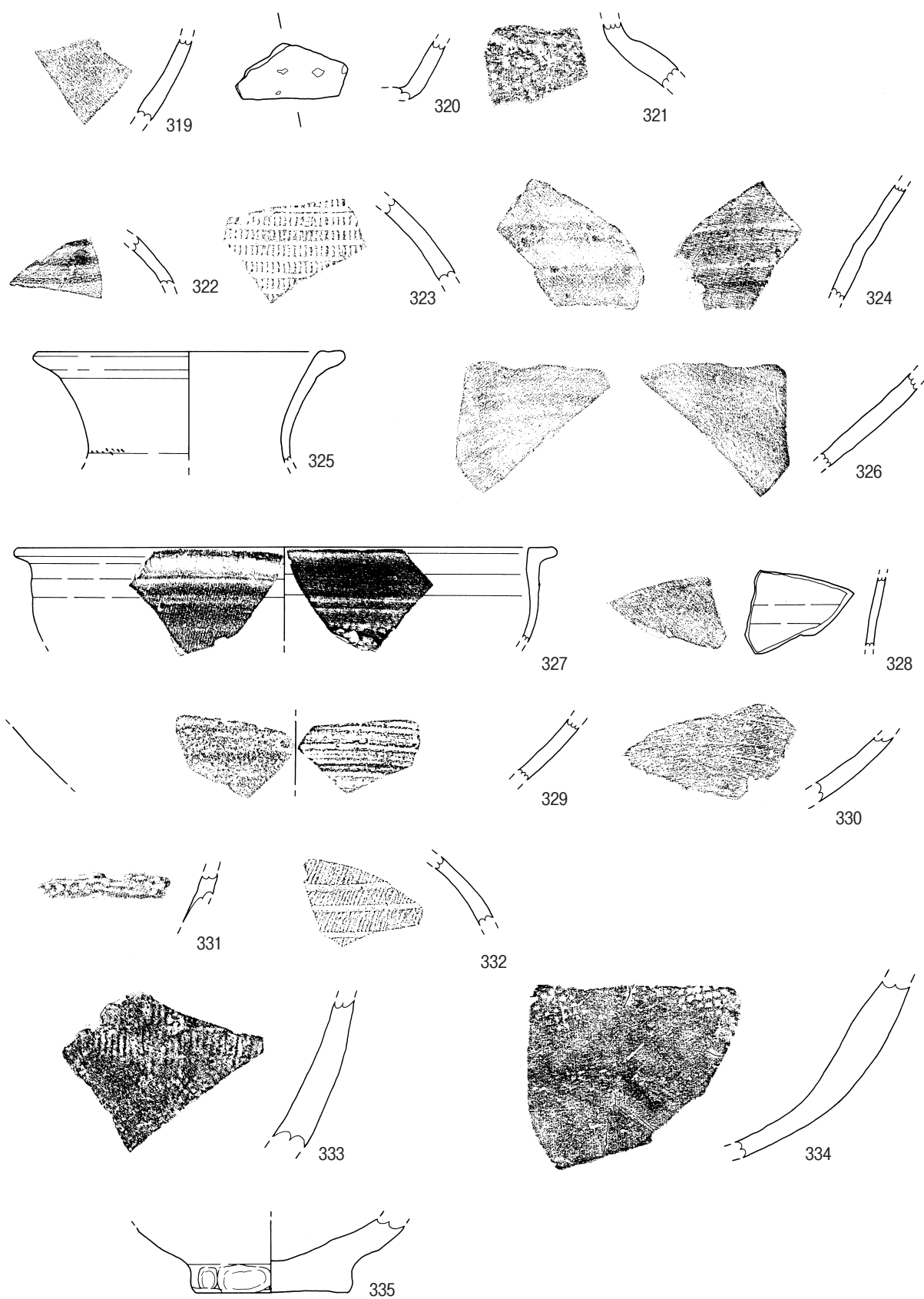


图54 未報告大陸・半島系土器③

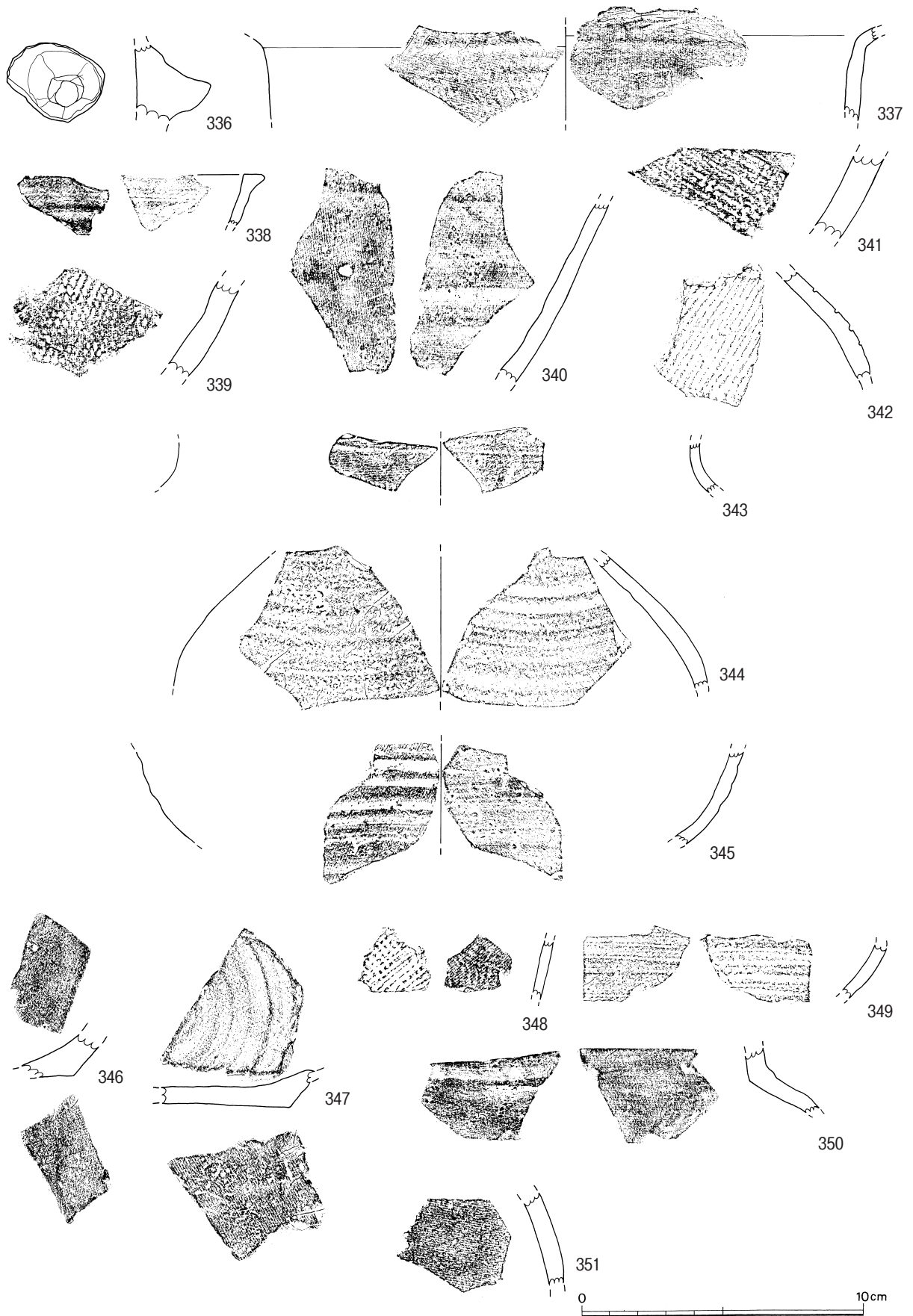


图55 未報告大陸・半島系土器③

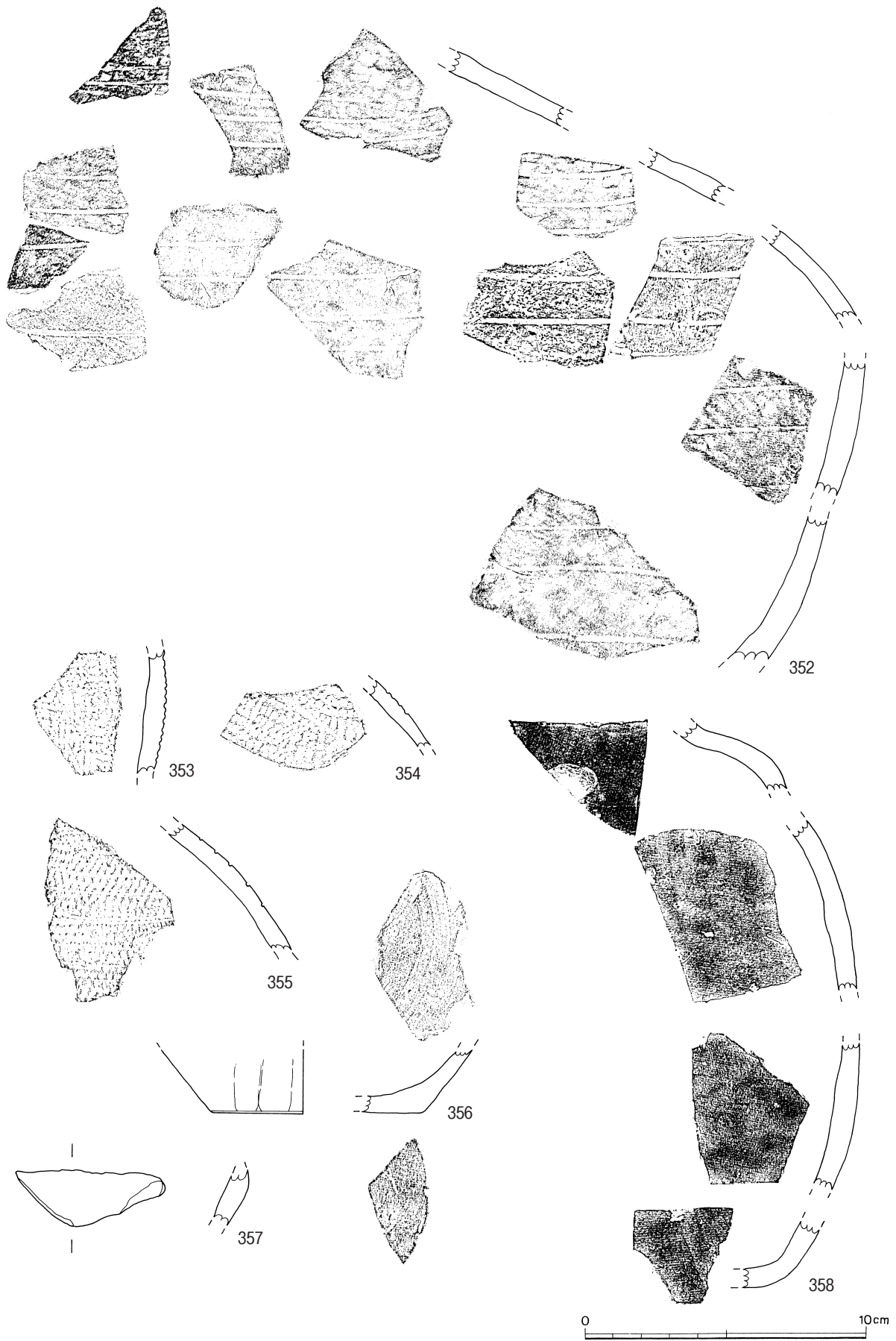


图56 未報告大陸・半島系土器②

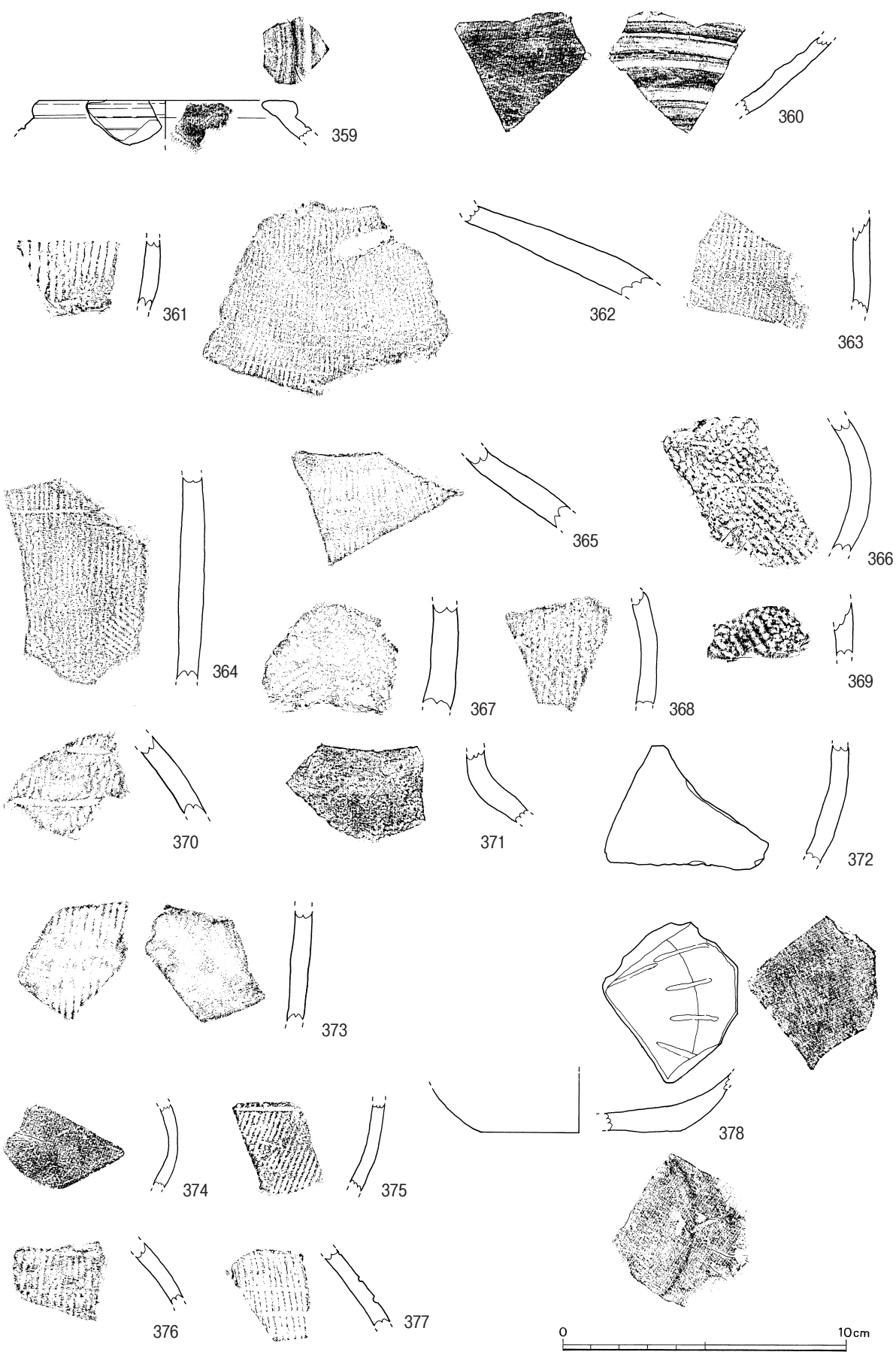


图57 未報告大陸・半島系土器③

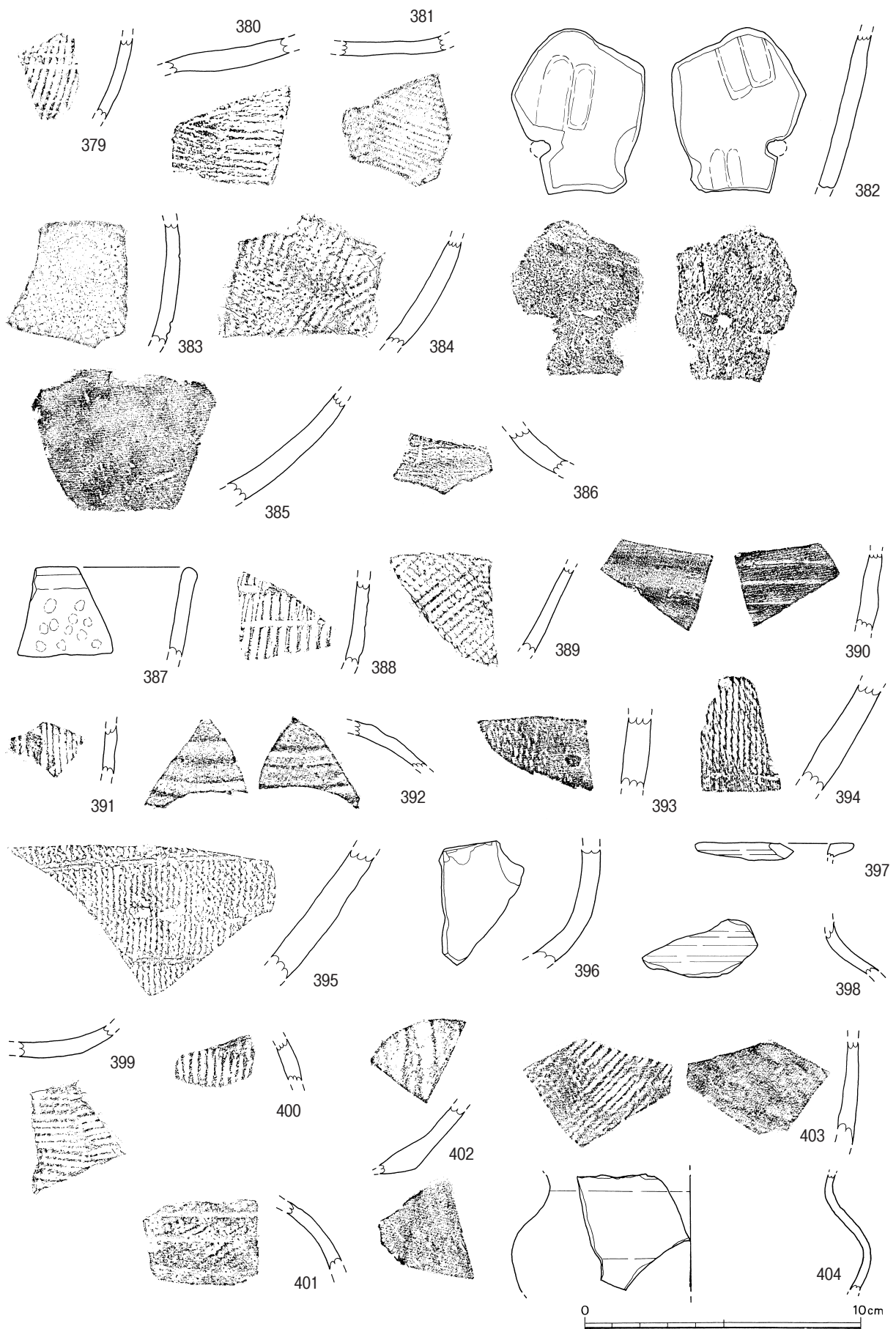


图58 未報告大陸・半島系土器③

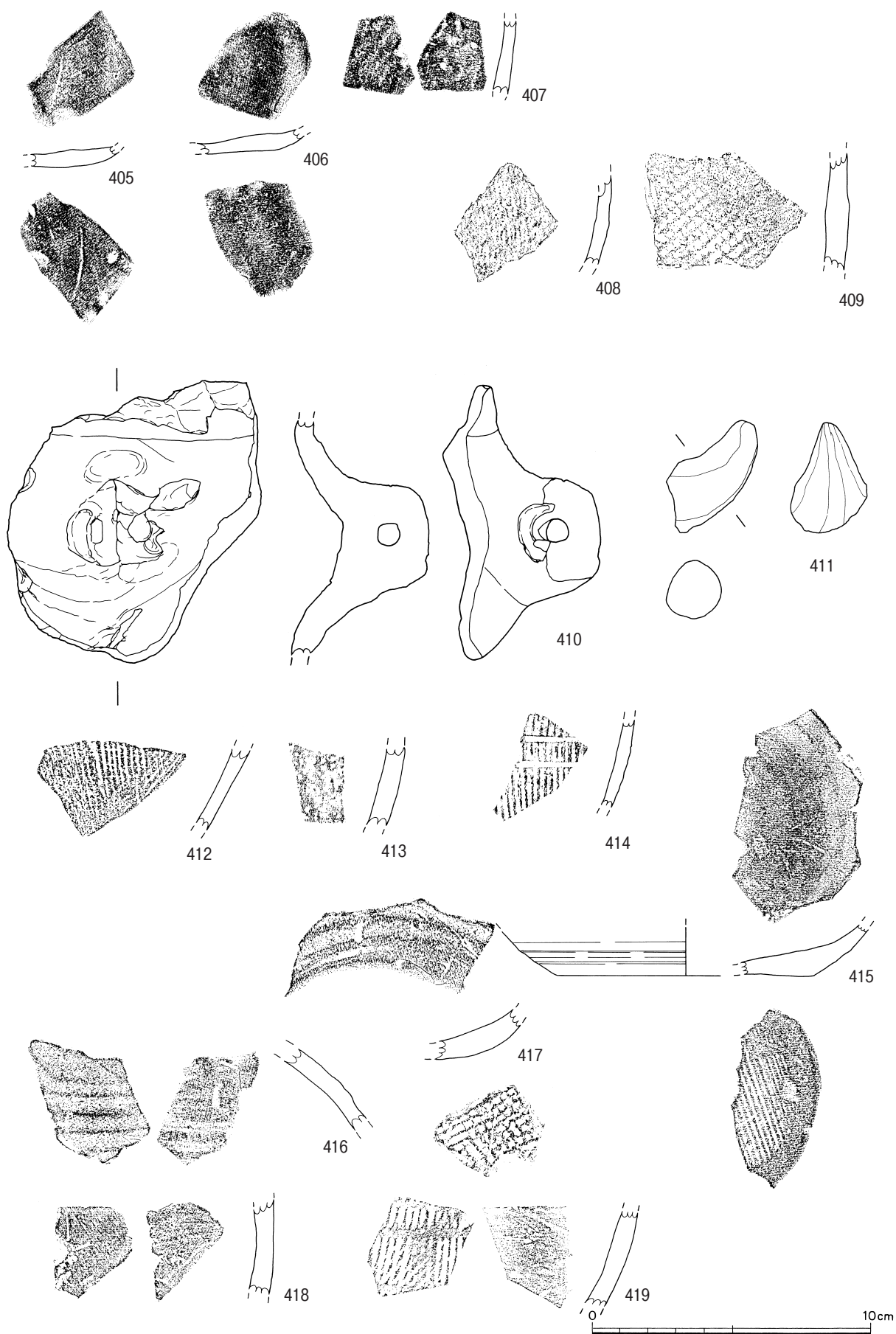


图59 未報告大陸・半島系土器③

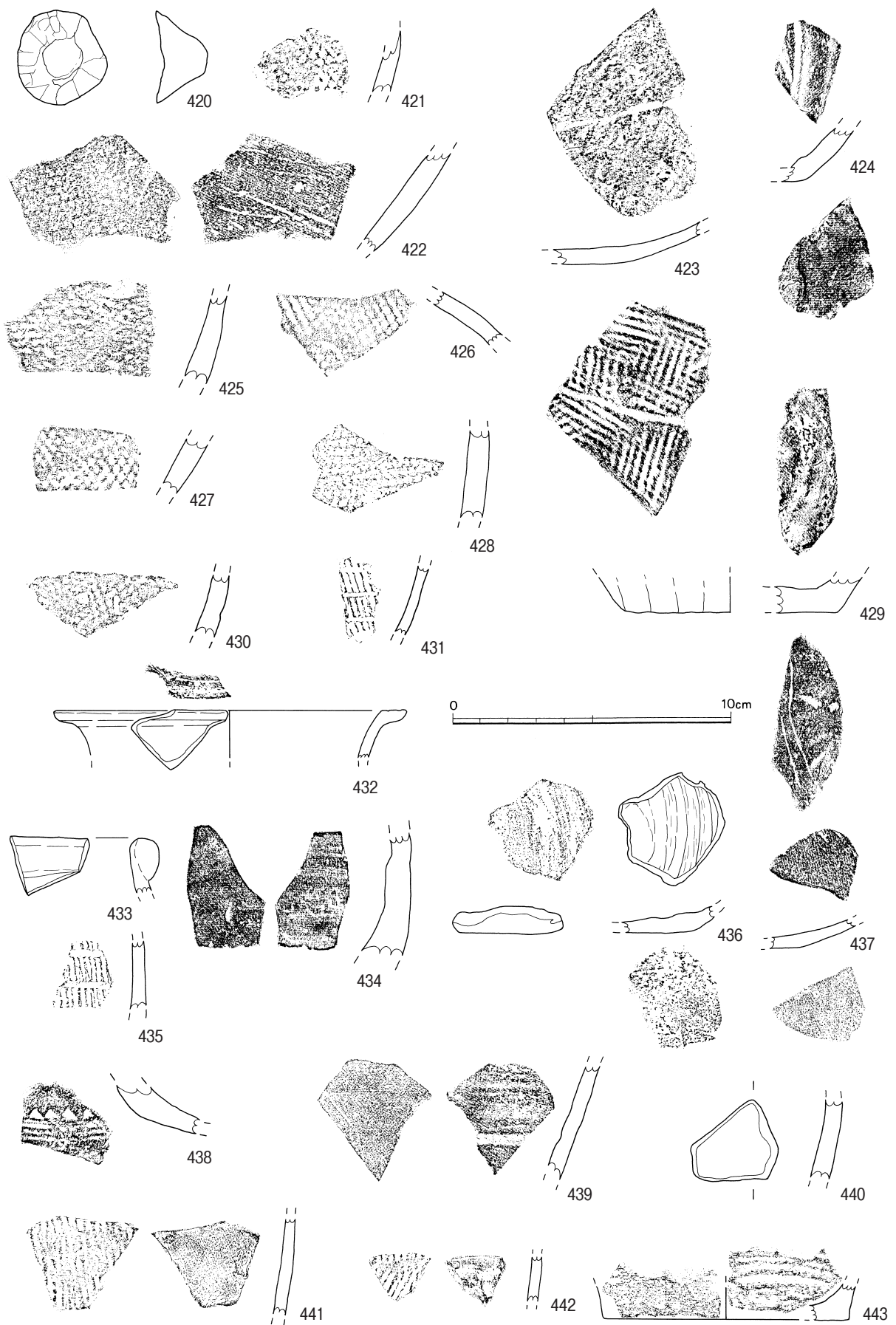


图60 未報告大陸・半島系土器③⑥

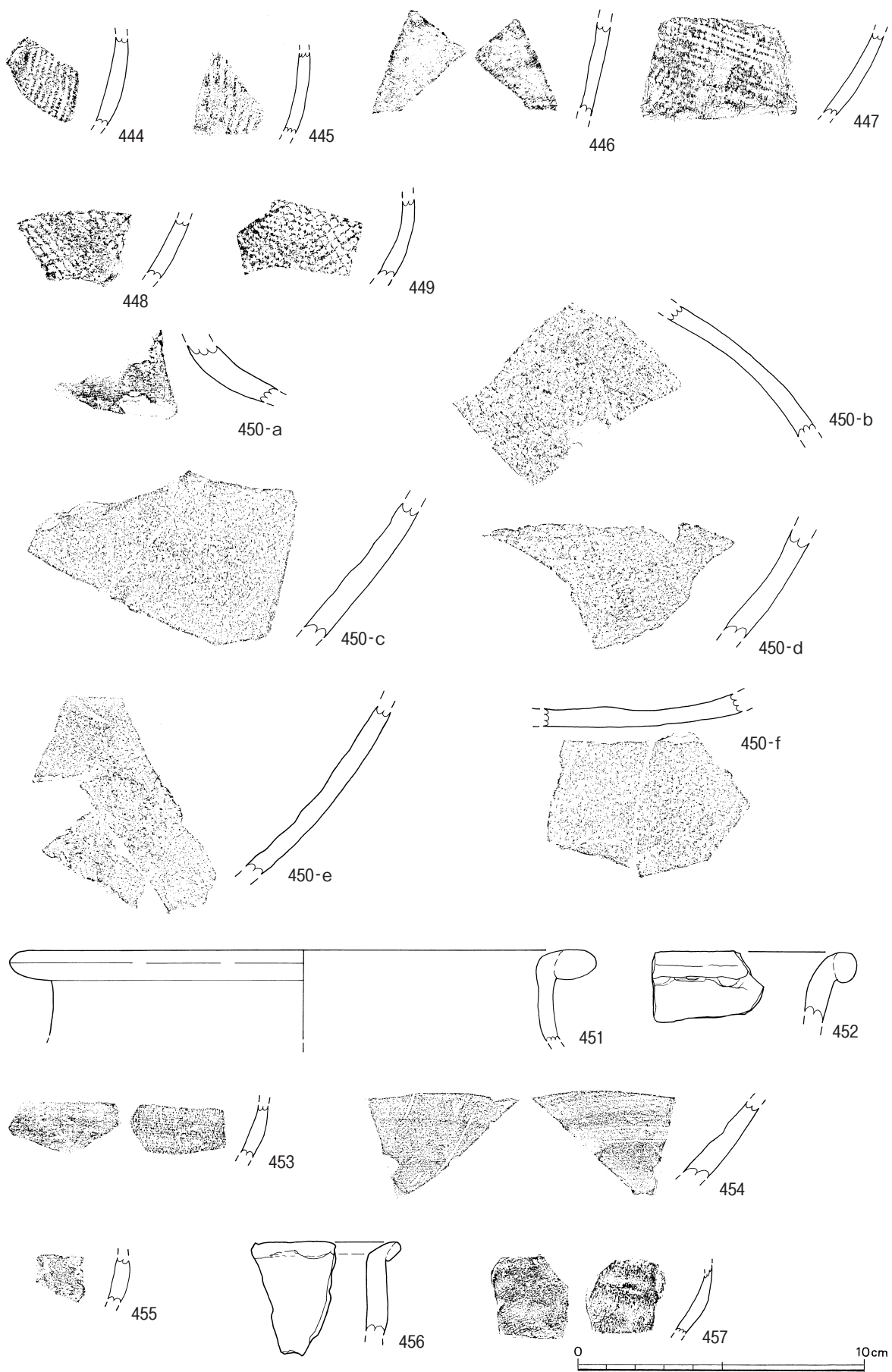


图61 未報告大陸・半島系土器③

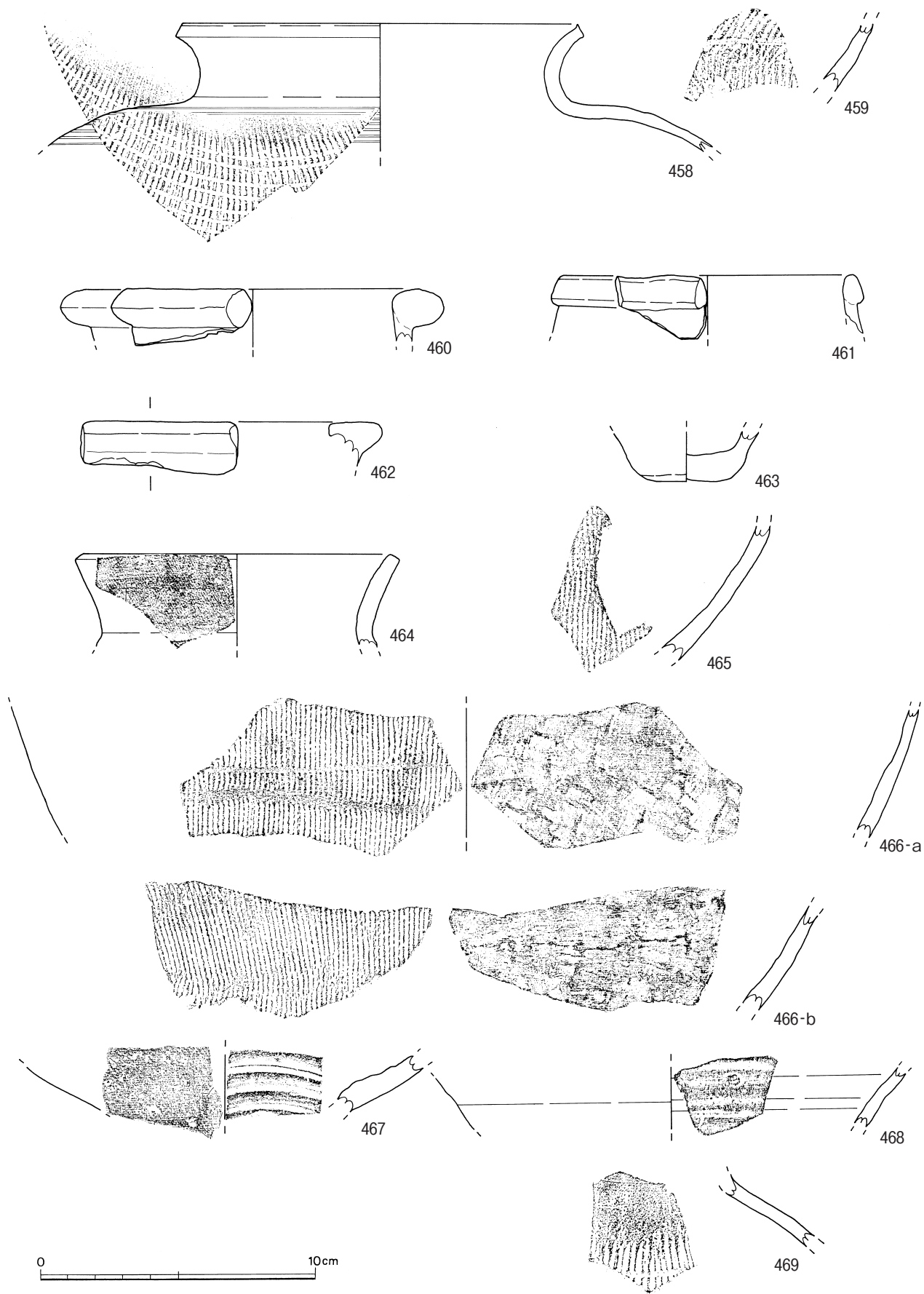


图62 未報告大陸・半島系土器³⁸

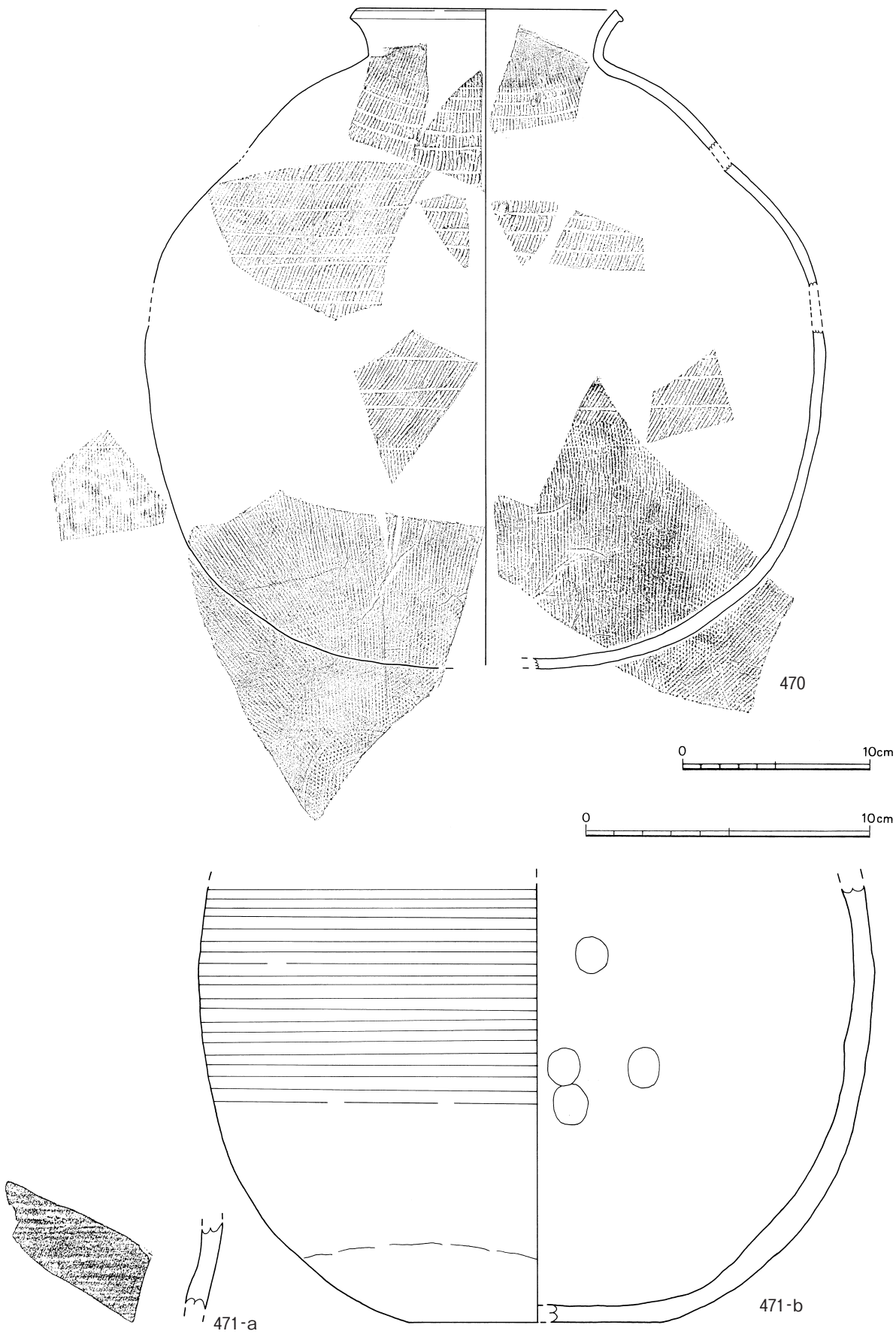


図63 未報告大陸・半島系土器³⁹

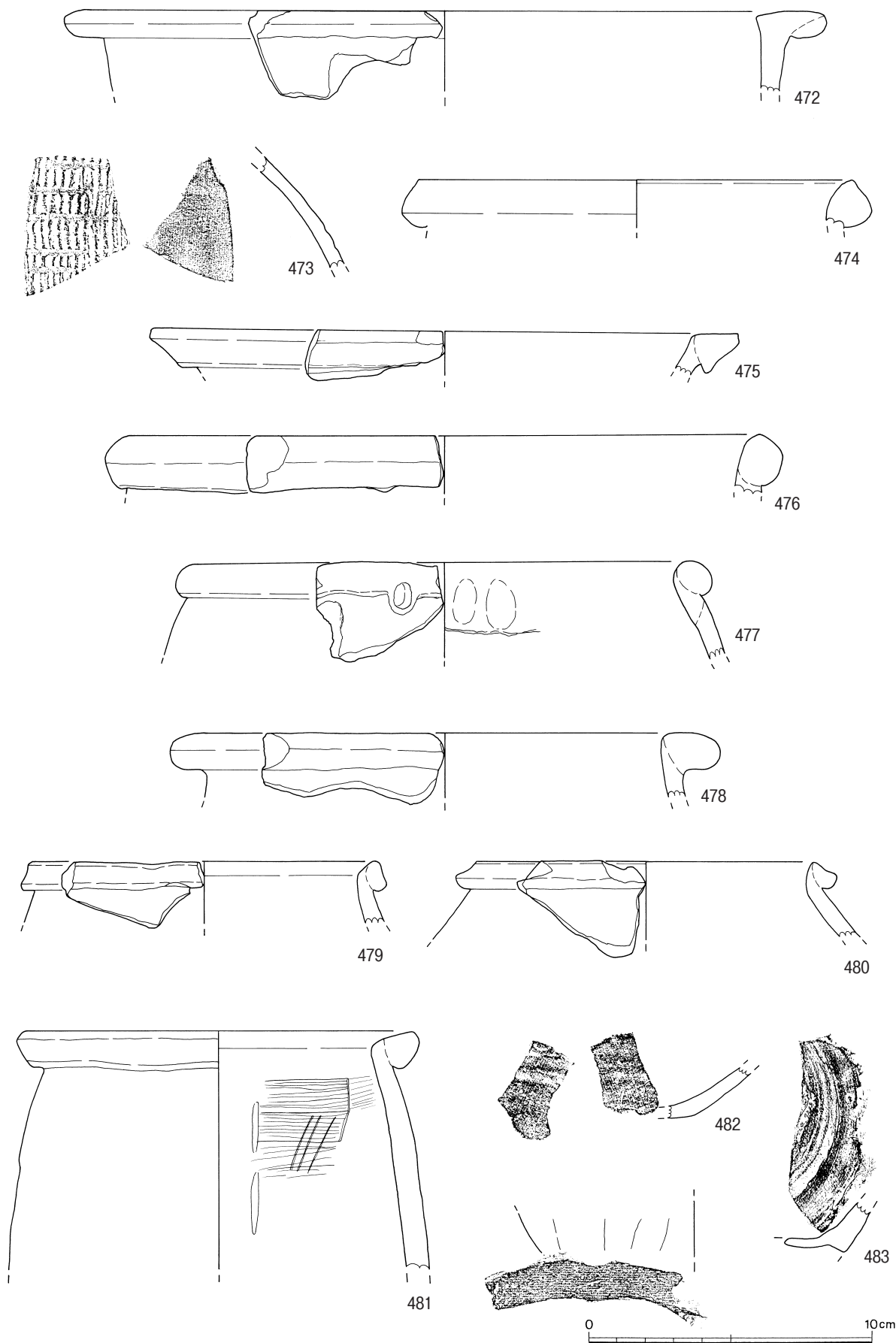


图64 未報告大陸・半島系土器④

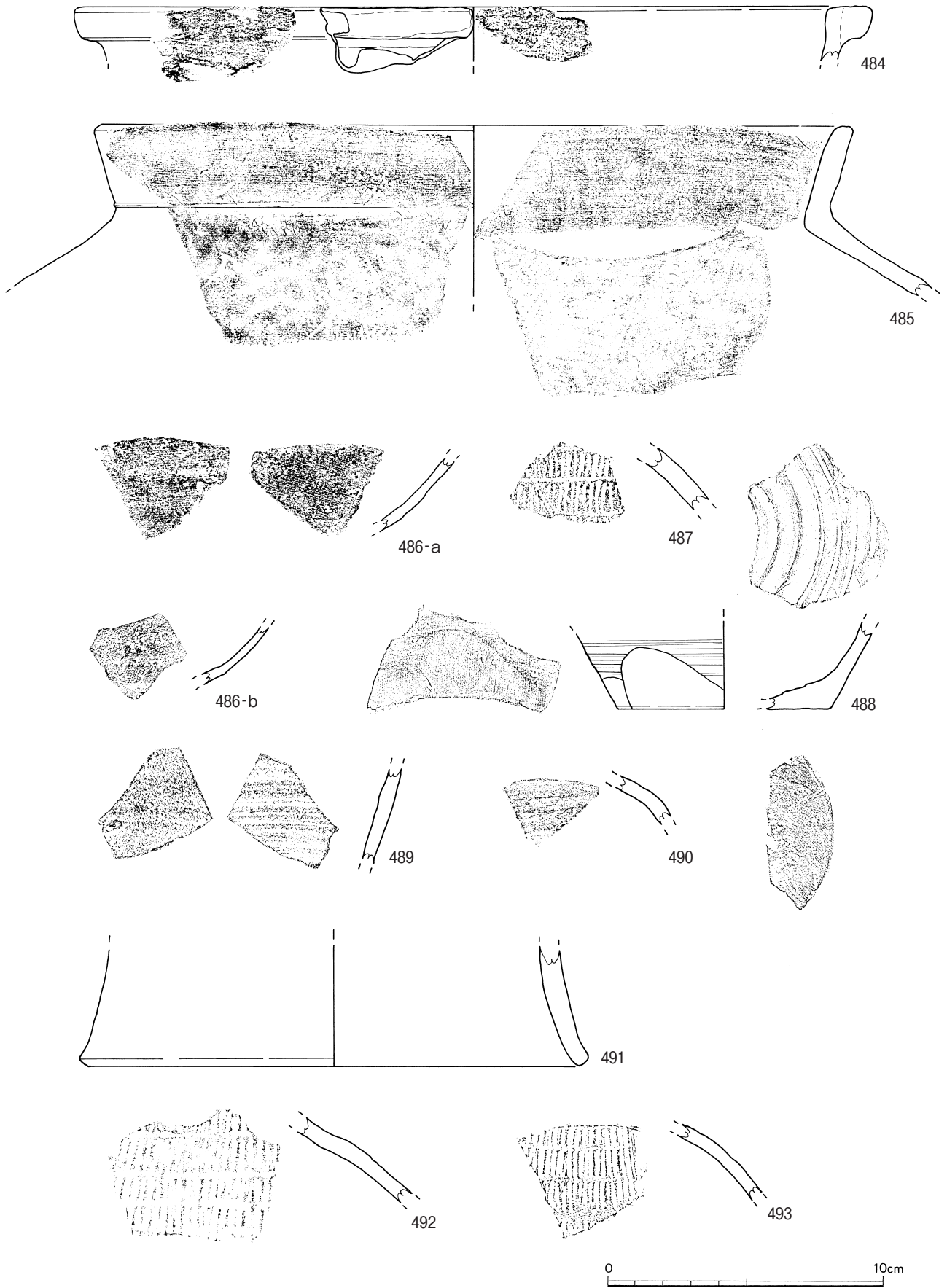


图65 未報告大陸・半島系土器④

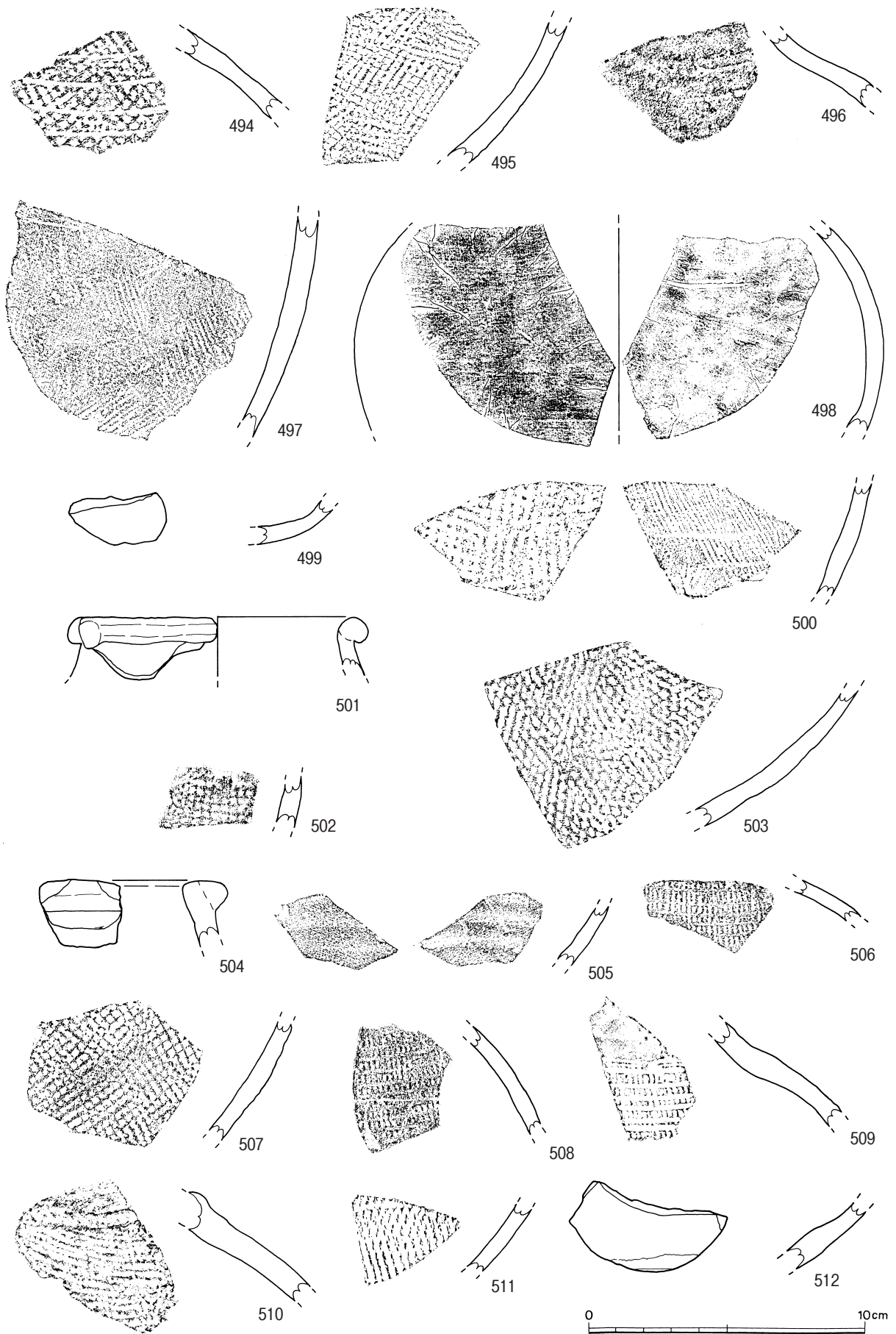


图66 未報告大陸・半島系土器④

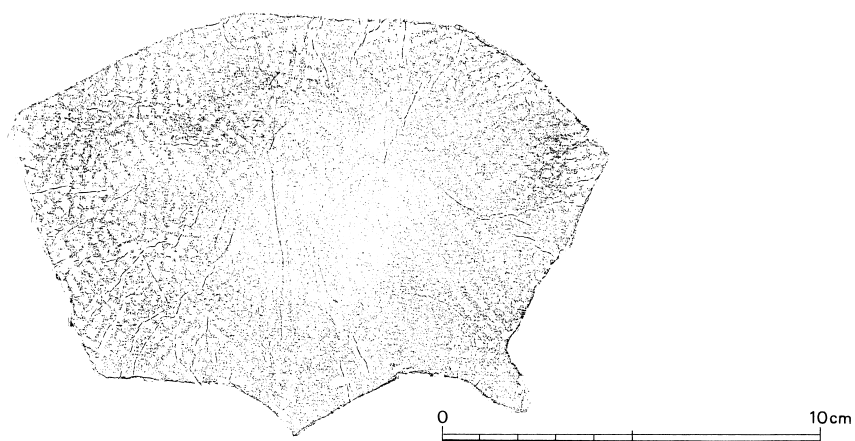
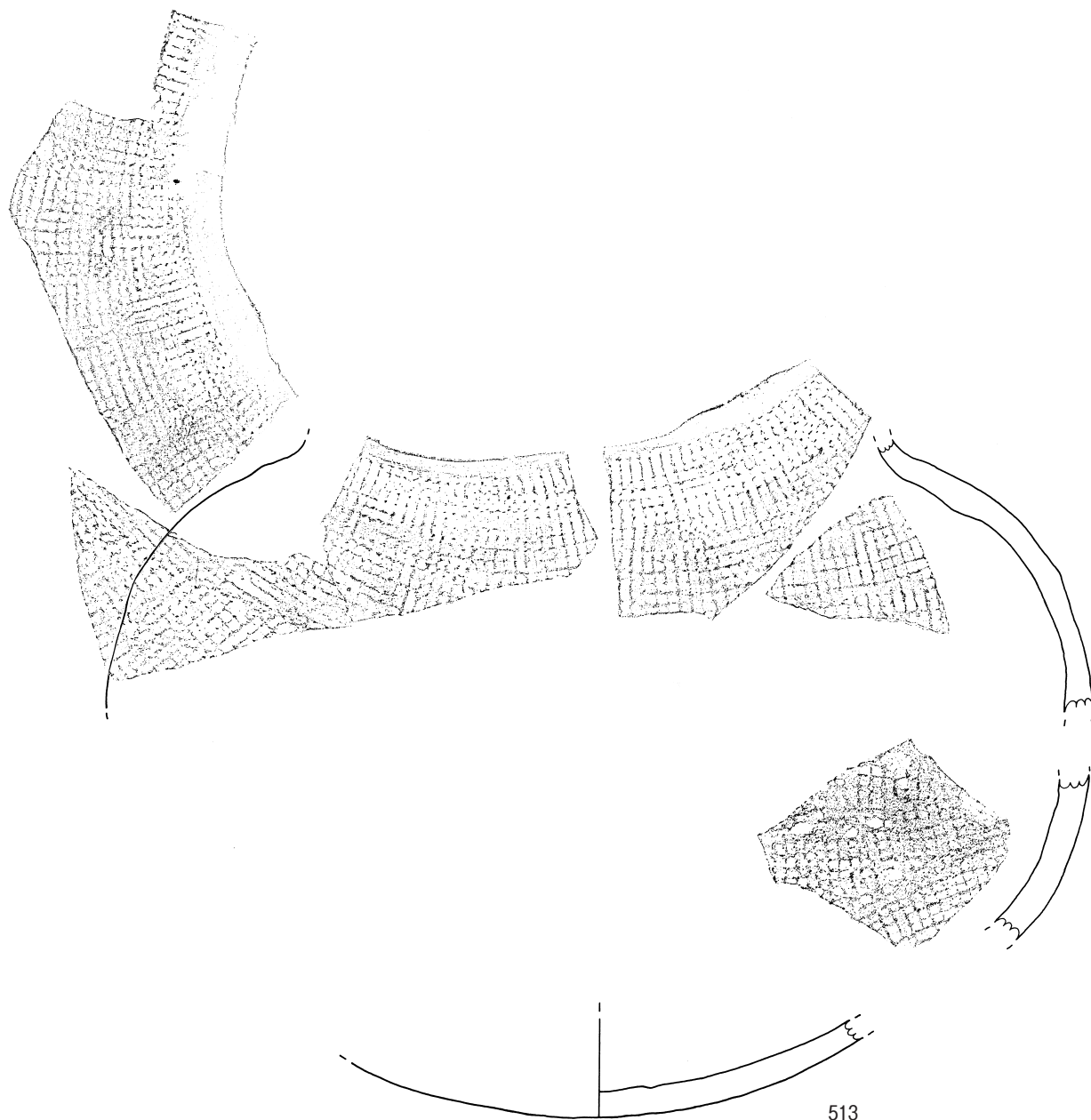


図67 未報告大陸・半島系土器④

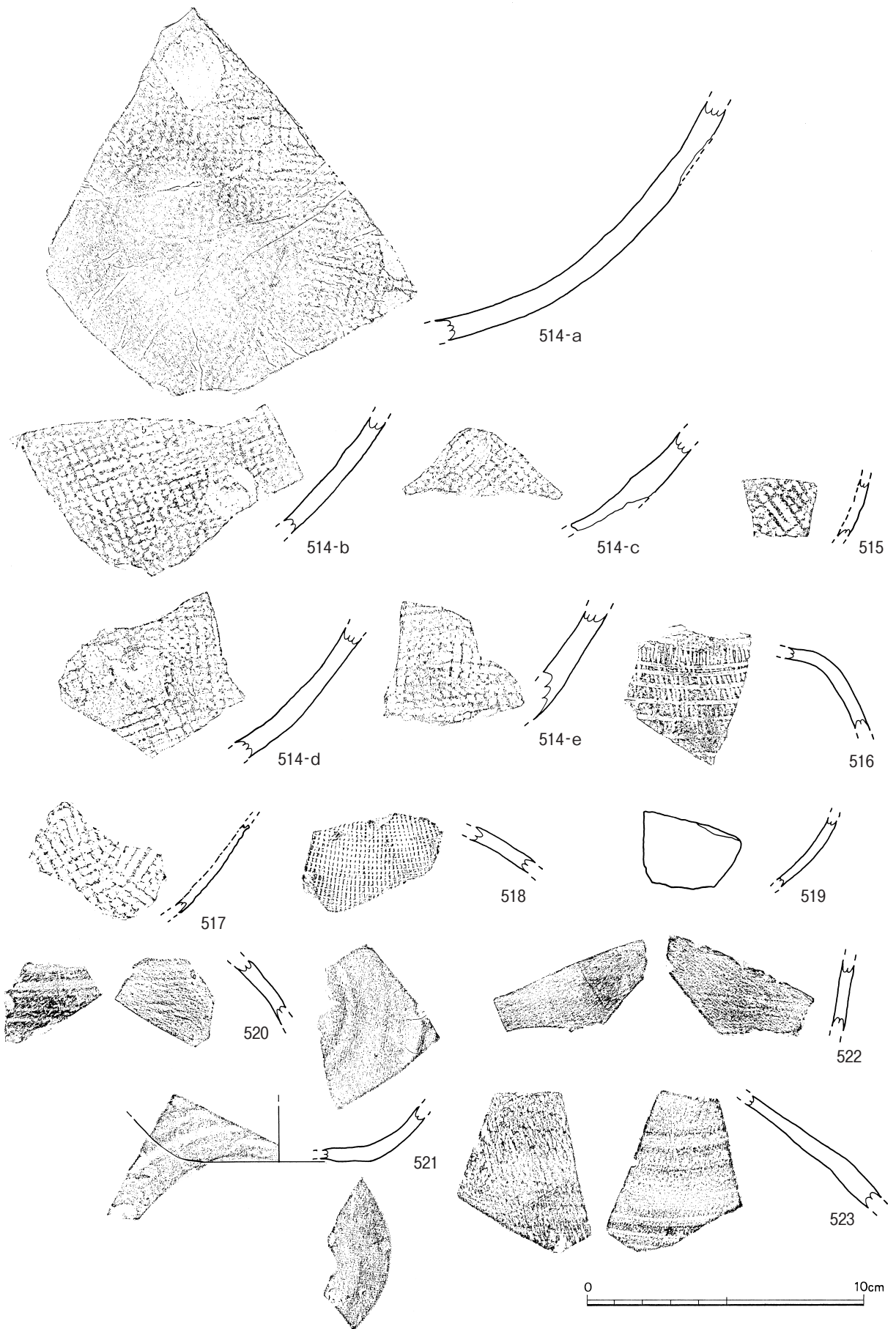


图68 未報告大陸・半島系土器④

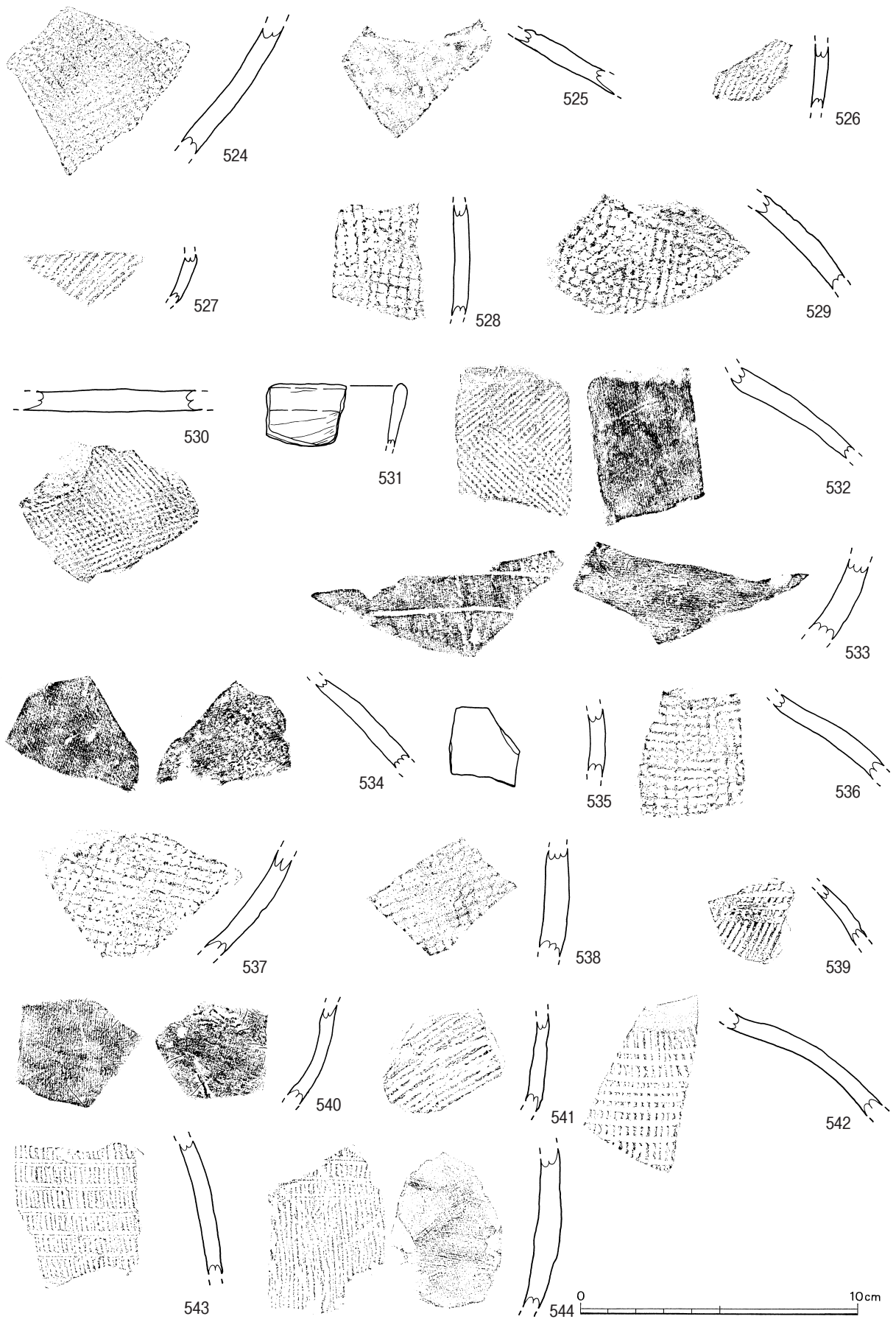
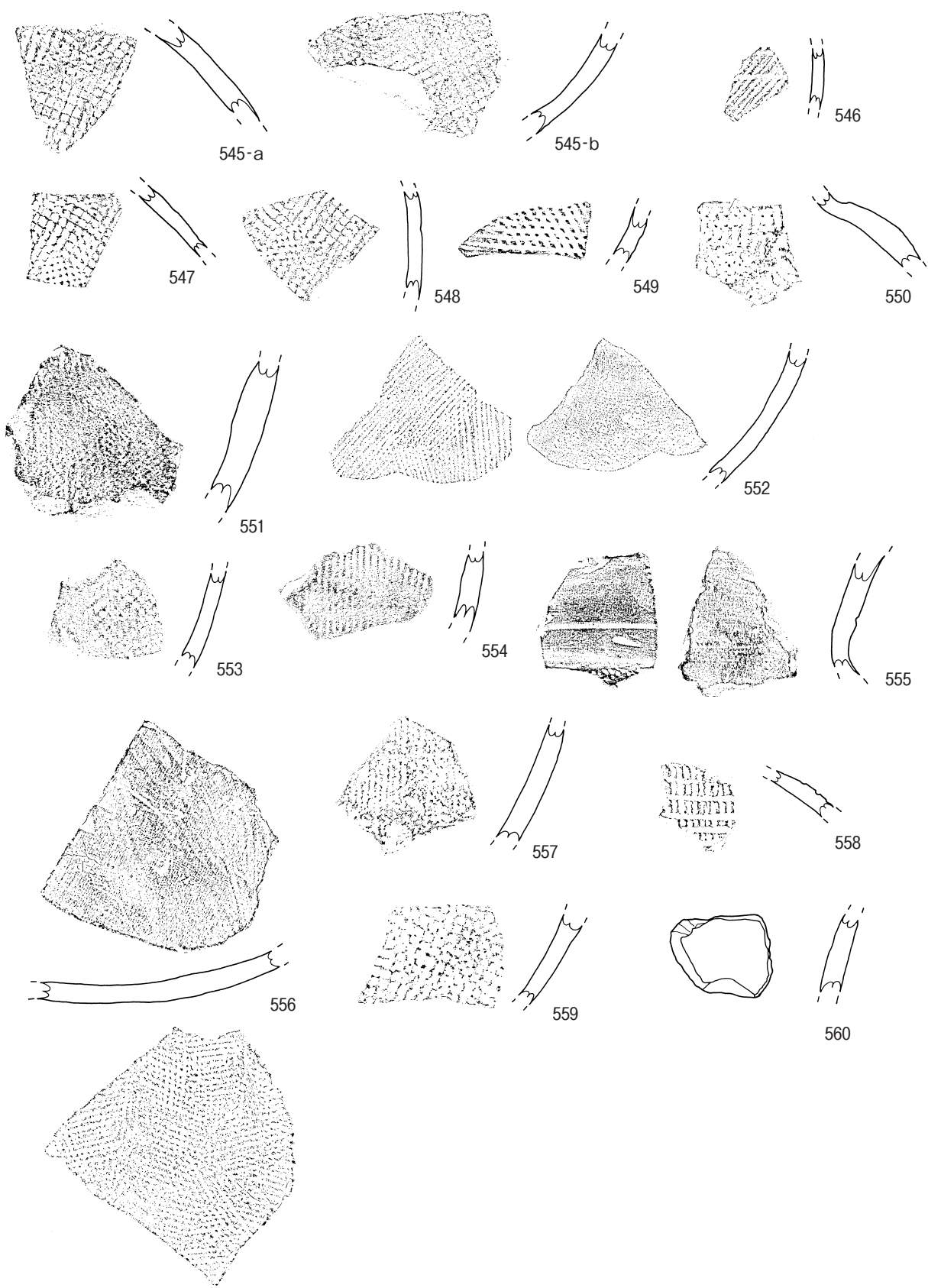


图69 未報告大陸・半島系土器④



0 10cm

图70 未報告大陸・半島系土器④

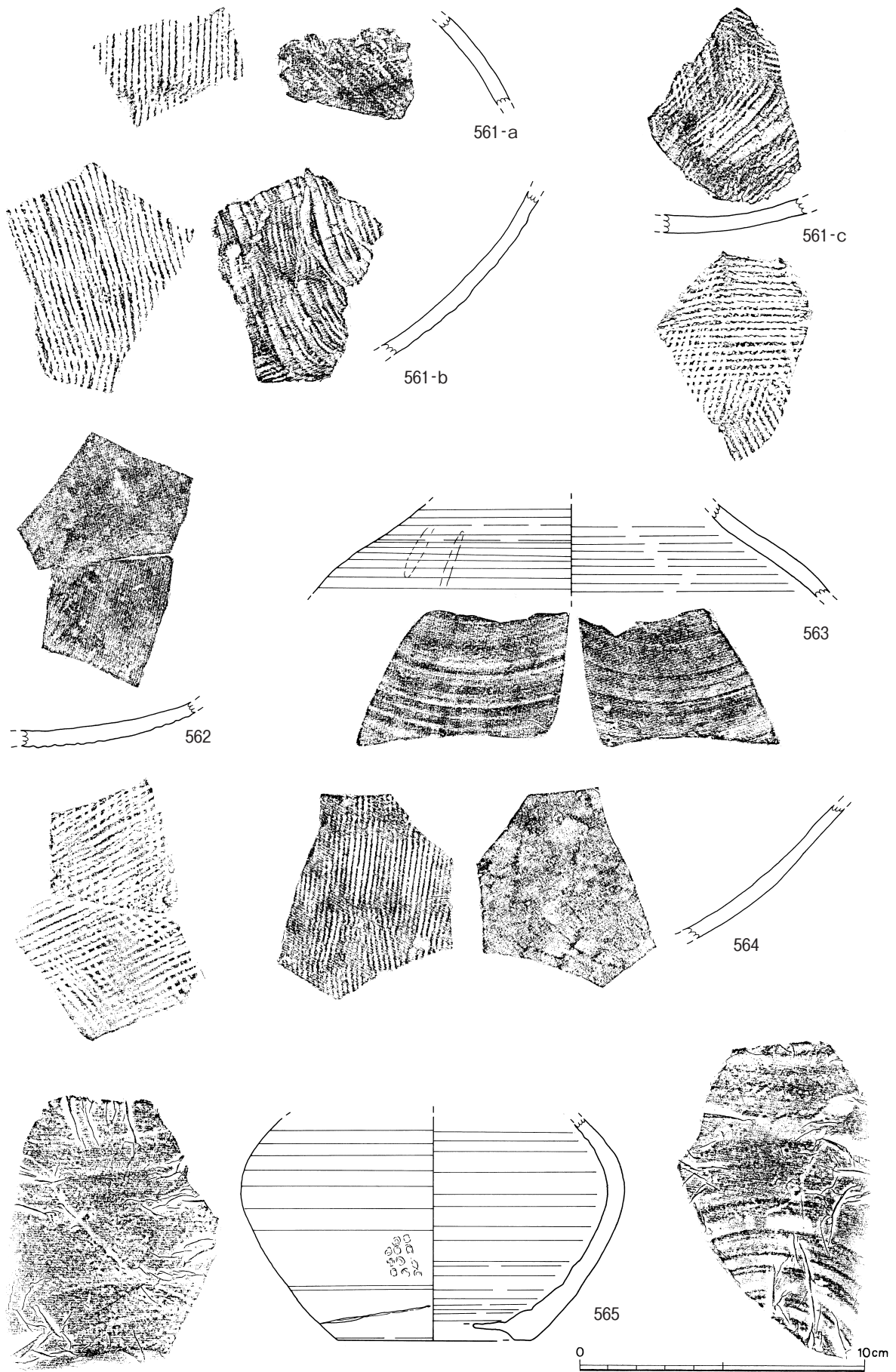


图71 未報告大陸・半島系土器④



图72 未報告大陸・半島系土器④

縁にヨコナデ、胴部に斜位のハケメ調整がみられる。口縁はいびつで直線的ではない。**115**は粘土帯土器期の黒色長頸壺である（写真32）。円盤状の底部で指押さえにより調整される。外面はナデ調整で、ミガキ調整は確認されない。外面の粘土が剥離した部分にはハケメ調整がみられる（写真33）。この粘土が剥離した部分はちょうど胴最大径付近にあたる。そのため次のような製作工程が想定されることとなる。まず、円盤状の底部を準備し、粘土を積み上げ一旦、碗状にする。この時点で、一旦ハケメ調整により器面を調整する。然る後、粘土を貼り合わせ、肩部・頸部の製作に移行し、最終的に全体をナデ調整する。このような長頸壺の製作工程を知ることができる点で本例は好資料である。内面には一部ハケメ調整がみられる。**116**は粘土帯土器小鉢であるが、器壁が1.1cmと厚みがある。内外面とも工具による調整痕が顕著に残る。**117**も粘土帯土器小鉢である。外面は指押さへの痕跡が顕著に残るが、内面はハケメ調整である。**118**は粘土帯土器に伴う小壺である。外面はナデ調整後、沈線を1条廻らせるが、始点と終点は一致しない。底部は円盤状を呈す。**119**は擬楽浪系土器としたもので、楽浪土器の筒坯を模した酸化焰焼成の土器である。ほぼ90°に直立する胴部で、外面は縦方向のミガキが施される。内面は指押さえとナデにより調整される。**123**は粘土帯土器の甕の胴部で突起が付着する。内面は工具による調整痕がみられる。

135は、甕口縁部である。断面長方形で外反する。胴はやや膨らみ、外面はナデ調整、内面はハケメ調整がみられる。大陸・半島系の模倣土器であるとみられる。そのモデルとしては粘土帯土器、楽浪系花盆形土器、原三国時代木棺段階の甕（例えば、洪濬植 外2013など）などが候補となるが、いずれとも決めがたい。ここでは暫定的に擬粘土帯土器としておく。**139**は粘土帯土器期の黒色磨研長頸壺の肩部である。肩部は横方向のミガキ、胴部は縦方向のミガキがなされる。内面はヘラナデにより調整され、一部工具痕が残る。**145**は三韓系土器である。頸部直下から底部付近にかけての胴部片であるが、互いに接合することはできなかった。頸部直下の肩部には鋸歯押捺文が廻る。胴上部は平行タタキ後沈線が数条施文される。胴下部は格子タタキが施される。重複関係から格子タタキ→平行タタキの順でなされたものと考えられる。肩部には耳がついていたものと思われる突起がある。色調は白濁色を呈する。**155**は楽浪系泥質土器鉢口縁である。口縁部はわずかに外面に突出しながらも丸くおさまり内面にもわずかに突出する。胴部には水挽による隆起がみられる。**165**は外面格子タタキ、内面平行の当て具痕が残る酸化焰焼成土器である。日本列島産であるものとみられる。

190は三韓系瓦質土器である。縄（原体Z撚）タタキ後沈線が廻る。焼成が甘く、初期の瓦質土器ではないかとみられる。

228は支脚の脚部とみられる。格子タタキが外面に施される酸化焰焼成の土器である。日本列島産であるとみられる。**236**は外面に格子タタキ、内面にハケメ及び工具痕がみられる酸化焰焼成の土器で日本列島産であるとみられる。筆者は以前器台であると考えたが支脚の脚部とした。**245**は外面格子タタキ、内面に当て具痕の残る還元焰焼成の土器片である。暫定的に大陸・半島系土器に含めているが、類例の少ない土器であるため、後世の土器である可能性もある。**249**は外面には縄（原体S撚）タタキ、内面に当て具痕がみられる。楽浪系土器としたが、内面の当て具痕には格子状以外にも同心円がみられ、楽浪土器としては異質であるため、楽浪系土器ではない可能性もある。**252**は外面には格子タタキが施された後、上部にはハケメ調整される。内面はヘラケズリで調整される。酸化焰焼成で、日本列島産とみられる。**260**は楽浪系泥質土器口縁部で、水挽による隆起がみられる。**263**は三韓

系瓦質土器で広口壺の口縁部であるとみられる。

291は三韓系瓦質土器である。縄（原体Z撚）タタキ後沈線が廻る。焼成が甘く初期の瓦質土器であると考えられる。

300は楽浪系長頸壺である。外面にはタタキの痕跡がわずかに残り、回転ナデにより消したものとみられる。**305**は陶質土器短頸壺である。口縁部は回転ナデ調整、胴上部は回転ナデ、胴下部・底部はナデ調整である。内面には指押さえと不整方向ナデが顕著で、一部に工具痕が残る。**310**は三韓系瓦質土器である。外面は格子タタキ、内面はナデ調整である。一部の破片に焼成後穿孔がみられる。

311は楽浪系鉢底部である。底は糸切後、周縁に丁寧にミガキが施されている。外面は回転ナデ後、下部は丁寧にヘラケズリが施される。内面は回転ナデ後、暗文により放射状集線文が描かれる。**313**は三韓系瓦質土器である。2片あるが、外面はヨコミガキにより調整される。図では口縁部として図示したが、台脚部の可能性もあり、判断が困難である。端部はやや肥厚し、境界に工具痕が残る。**318**は楽浪系鉢底部である。底は糸切後、丁寧にミガキが施されている。外面は回転ナデ後、下部は丁寧にミガキが施される。内面は回転ナデ後、暗文により格子文と放射状集線文が描かれる。そして、朱とみられる赤色塗布が認められる。この赤色は底部に近い部分に顕著である。回転ナデによるわずかな溝にも赤色は入り込んでいる一方、赤色を切る形で、暗文が施されている。このため赤色の塗布は焼成前になされたものとみられる。**325**は楽浪系泥質土器長頸壺である。回転ナデで調整されるが、頸部外面には縄目状の痕跡がみられる。**333**は三韓系瓦質土器である。外面上部には平行タタキ、下部には格子タタキ、内面はナデ調整が施される。

359は楽浪系泥質土器である。内湾する口縁で回転ナデにより調整される。口縁直下と肩部に沈線がみられる。このような器種は中国で瓮と呼ばれ、楽浪郡や遼東郡等の遺跡ではよくみられる。韓半島南部では新昌洞遺蹟（趙現鐘 外2003）などでも出土したことがあるが、本例は口径9.4cmと非常に小さいことが特徴である。

362は三韓系瓦質土器である。外面は平行タタキの後、沈線施文、内面はナデ調整である。内外面ともに赤色がみられるが顔料によるものか被熱によるものか判断が困難である。**364**は三韓系瓦質土器で外面は平行タタキの後、沈線が施され、内面はナデ調整が施される。屈曲度合いから長胴壺と推定される。**378**は楽浪系鉢底部である。底は糸切後、周縁に丁寧にミガキが施されている。外面は回転ナデ後、下部は丁寧にヘラケズリが施される。内面は回転ナデ後、暗文により放射状集線文が描かれる。**382**は内外面ともヘラをナデつけた痕跡がみられるため楽浪系滑石混和土器と判断した。**393**は三韓系瓦質土器である。外面は縄（原体Z撚）タタキ、内面はナデ調整である。外面には赤色がみられるが顔料によるものか被熱によるものか判断が困難である。

409は外面に格子タタキが施される酸化焰焼成土器で、日本列島産であるとみられる。**437**は楽浪系滑石混和土器底部である。外面はナデ、内面は回転によるナデが施され、凹線が生じている。

438は三韓系瓦質土器で、肩部に鋸歯押捺文がみられ、その下部は平行タタキが施される。内面はナデ調整である。**458**は陶質土器短頸壺口縁部である。外面は口縁部に回転ナデ、胴部は縄（原体Z撚）タタキの後、沈線、肩部は縄タタキをナデ消している。内面は回転ナデが施される。

470は陶質土器短頸壺である。口縁部は回転ナデ、肩部は縄タタキをナデ消している。胴部には縄（原体Z撚）タタキが施され、胴部最大径よりやや下部まで沈線が施される。このもつとも下部の沈

線付近を境界に縄タタキの方向が異なり、胴上部・中部では斜位の縄タタキである一方、下部では縦位の縄タタキとなっている。底部には陶符号がみられる。内面はナデ調整である。471は陶質土器である。外面は胴中部までカキメ状の回転ナデ痕が残り、胴下部・底部はナデ調整がなされる。底部付近は焼成不良による痕跡が残る。窯内では直立して焼成されたことを示すのではないだろうか。内面はナデ調整である。474は粘土帯土器甕口縁部で口唇部には漆状の黒色が塗布される。

484は楽浪系滑石混和花盆形土器である。口唇は面取りされ、断面は長方形に近い。外面はナデ調整、口縁上部の内面はナデ調整がなされるが、口縁肥厚部より下部の内面には布目痕が残る。485は楽浪系泥質土器短頸壺である。口縁は内外面とも回転ナデで調整される。胴外面に縄（原体S撚）タタキが施され、肩部はナデ消されている。胴内面には当て具痕が残る。口径は27.6cmで大型である。488は楽浪系泥質土器壺底部である。内面は回転ナデ、外面は回転ナデの後、大きくケズリとられている。底は糸切の後、周縁をヘラナデ調整している。491は脚部として図示したが、口縁部の可能性もある。内外面とも回転ナデ調整である。498は陶質土器壺で内外面とも回転ナデ調整であるが、内面に工具痕が残る。500は外面に格子タタキが施される酸化焰焼成の土器で日本列島産であるとみられる。内面にはハケメ調整がなされるが、原体端部を揃えて斜位に施しているため、揃った部分が沈線のように窪んでいる。512は陶質土器であるが、底部付近に焼成不良部分がある。

513は三韓系瓦質土器短頸壺で、外面肩部にナデ調整があり、それより下部は底部まで格子タタキが施される。内面はナデ調整である。

563は楽浪系泥質土器長頸壺肩部であるが、タタキの後、回転ナデ調整が施されている。565は楽浪系泥質土器長頸壺胴部・底部で、回転ナデ調整が施されているが、外面の一部にタタキ痕跡が残る。566は、NK124-173頁第3図24で報告された資料である。今回の再整理により更に破片が接合したため、改めて報告する。三韓系瓦質土器短頸壺である。頸部はヨコナデ調整がなされる。肩部にはナデにより平坦面が設けられる。肩部以下胴下部まで平行タタキが施され、胴部最大径付近までは沈線が廻らされる。胴下部は格子タタキが施される。内面は肩部で強いヨコナデがみられ、胴部ではナデ調整となる。本例は特異なことに、頸部から胴部最大径付近まで赤色顔料が塗布されている。赤色塗彩がみられることは既に原報告でも述べられていたが、破片の接合により少なくとも胴部最大径付近までその範囲が広がることがわかった。

(2) 既報告資料 (表6)

既に報告された資料全点について再度観察を行い、土器の諸属性および帰属分類について観察表で示す。

(3) 出土点数と地区別の様相

既報告資料と今回報告した資料を合算した大陸系・半島系土器の出土状況は表7のとおりである。本来であれば口縁部点数などで、集計すべきであるが、ここでは破片数としている。これまで発表された点数（宮崎 2005, 古澤 2010）と異なるのは、未報告資料を合算したこと、帰属分類の認定を新たに行ったこと、新たに同一個体の認定を行ったことに起因する。なお、今回の報告でも報告することがかなわなかった不條地区出土の粘土帯土器及び擬粘土帯土器約100点については含めていない。

表6 既報告大陸・半島系土器観察表①

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出した 遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NK37	27	21			包含層		粘土帯	甕	口縁部			
NK124	167	1	1	石田高原	I区V層(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NK124	167	1	2	石田高原	I区IV層上	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NK124	167	1	3	石田高原	I区IV層上	弥生前期末～古墳初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NK124	167	1	4	石田高原	I区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NK124	167	1	5	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯	甕	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ	
NK124	167	1	6	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯	甕	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ	
NK124	167	1	7	八反	K-7Ⅲ層		粘土帯	長胴壺	全	ナデ	ハケメ・ナデ	
NK124	167	1	8	石田高原	Ⅲ区IV層下(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯		把手	ナデ	ナデ	内面赤色
NK124	167	1	9	石田高原	I区		粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
NK124	167	1	10	石田高原	Ⅲ区IV層下(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		把手	ナデ	ナデ	軟質
NK124	167	1	11	高元	Ⅱ区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
NK124	167	1	12	石田高原	I区		三韓系	鉢	口縁部	ナデ	ナデ	軟質
NK124	170	2	13	石田高原	I区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	擬楽浪系	花盆形	口縁部	ミガキ状	ミガキ状	酸化焙焼成
NK124	170	2	14	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		胴部			
NK124	170	2	15	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NK124	170	2	16	石田高原	IV区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NK124	170	2	17	石田高原	I区Ⅱ層		楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
NK124	170	2	18	高元	Ⅱ区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	短頸壺	全	口：タタキ→回転ナデ、肩：ナデ、胴：縄(原体S撚)→沈線	口・回転ナデ、胴・底：当て具痕	
NK124	170	2	19	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		底部	回転ナデ	回転ナデ・暗文	
NK124	170	2	20	高元	Ⅱ区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		底部	胴：回転ナデ、底：糸切	回転ナデ	
NK124	170	2	21	石田高原	IV区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NK124	170	2	22	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	滑石混和花盆形	口縁部	ナデ	布痕	
NK124	170	2	23	高元	Ⅱ区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	筒坏	底部	胴：回転ナデ、底：糸切	回転ナデ	
NK124	173	3	24	石田高原	I区Ⅲ層		三韓系	短頸壺	頸・肩・胴部	上部：平行→沈線、下部：格子	ナデ	外面に赤塗
NK124	173	3	25	高元	Ⅱ区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系	長頸壺	口縁部	頸：ナデ、肩：平行→沈線	ナデ	
NK124	173	3	26	石田高原	I区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系	短頸壺	口縁部	頸：ナデ、胴：縄	ナデ	
NK124	173	3	27	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系	短頸壺	口縁部	ナデ	ナデ	
NK124	173	3	28	石田高原	I区IV層上(2号溝)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	長頸壺	全	回転ナデ	回転ナデ	
NK124	173	3	29	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	長頸壺	頸・肩部	頸：回転ナデ、肩：縄(原体S撚)	回転ナデ	
NK124	173	3	30						胴部	縄		
NK124	173	3	31	石田高原	IV区表採		三韓系		肩部	縄(原体Z撚)→沈線	ナデ	
NK124	173	3	32	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		肩部	縄(原体Z撚)→沈線	ナデ	
NK124	173	3	33	高元	Ⅱ区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→沈線	ナデ	
NK124	173	3	34	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NK124	173	3	35	石田高原	IV区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→沈線	ナデ	
NK124	174	4	36	石田高原	I区IV層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	上：平行→沈線、下：格子	ナデ	
NK124	174	4	37	高元	Ⅱ区表採		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NK124	174	4	38						胴部	縄		
NK124	174	4	39	石田高原	I区IV層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表②

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出した 遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NK124	174	4	40	高元	Ⅱ区Ⅳ層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NK124	174	4	41	石田大原	Ⅳ区Ⅳ層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		底部	縄(原体Z燃)	ナデ	
NK124	174	4	42	高元	Ⅱ区Ⅱ層		陶質		胴部	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
NK124	174	4	43	石田高原	Ⅰ区5号溝	弥生前期末～古墳初頭	陶質	長頸壺	全	回転ナデ	回転ナデ	
NK124	174	4	44	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	陶質		胴部	平行→沈線	ナデ	
NK124	174	4	45	石田大原	Ⅳ区Ⅳ層下(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	陶質		胴部	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
NK124	179	1	9	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
NK124	182	4	4	高元	Ⅱ区Ⅳ層下(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NK124	182	4	5	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層下(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NK124	182	4	6				楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NK124	182	4	9	高元	Ⅱ区Ⅳ層下(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		胴部	縄(原体S燃)	当て具痕	
NK124	182	4	10	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	陶質		胴部	縄(原体Z燃)	当て具痕	
NK124	182	4	11	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		胴部	縄(原体S燃)	当て具痕	
NK124	184	6	7	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
NK124	184	6	8				三韓系		胴部	縄(原体Z燃)→沈線	ナデ	
NK124	184	6	9	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NK124	185	7	6	石田大原	Ⅳ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		胴部	縄(原体S燃)→沈線	当て具痕	
NK124	185	7	8	石田大原	Ⅳ区Ⅳ層上(7号溝)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		底部	縄(原体S燃)	当て具痕	
NK124	185	7	10	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NK124	185	7	12	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	楽浪系		胴部	縄(原体S燃)→沈線	当て具痕	
NK124	185	7	13	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NK124	186	8	1	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	ミガキ状	ナデ	
NK124	186	8	2	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		底部	格子	ナデ	
NK124	186	8	3	石田高原	Ⅰ区Ⅲ層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NK124	186	8	4	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NK124	186	8	5	石田高原	Ⅰ区表採		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NK124	186	8	6	石田高原	Ⅲ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NK124	186	8	7	石田高原	Ⅲ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NK124	187	9	4	高元	Ⅱ区Ⅳ層中(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	陶質		胴部	ナデ	ナデ	
NK124	187	9	5	高元	Ⅱ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	陶質		胴部	ナデ	ナデ	
NK124	187	9	6	石田高原	Ⅰ区Ⅳ層上(環濠)	弥生前期末～古墳初頭	陶質		胴部	ナデ	ナデ	
NH 1	102	4	34	芦辺高原	Ⅲ区4層		三韓系		把手	ナデ	ナデ	
NH 1	102	4	35	芦辺高原	Ⅰ区2層		楽浪系		胴部	縄(原体S燃)	当て具痕	
NH 1	102	4	36	芦辺高原	Ⅲ区4層		三韓系		胴部	縄(原体Z燃)	ナデ	
NH 1	133	10	30	安国寺A	沼状落ち込み4層	柳田土器Ⅱc式(4世紀中頃)	陶質	短頸壺	口縁・胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH 1	134	11		安国寺A	Ⅵ区表採		三韓系		把手	ナデ	ナデ	
NH 9	2	1	5	不條	1号旧河道跡土器溜	弥生中期後半～後期初頭	擬粘土帯	甕	全	ハケメ		
NH 9	4	3	26	不條	1号旧河道跡土器溜	弥生中期後半～後期初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	口:ヨコナデ・指押さえ、胴:ハケメ・突帯	ナデ	
NH 9	4	3	27	不條	1号旧河道跡土器溜	弥生中期後半～後期初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	口:ヨコナデ・指押さえ、胴:ハケメ	ナデ	
NH 9	4	3	28	不條	1号旧河道跡土器溜	弥生中期後半～後期初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	口:ヨコナデ・指押さえ、胴:ハケメ	ナデ	
NH 9	4	3	29	不條	1号旧河道跡土器溜	弥生中期後半～後期初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	口:ヨコナデ・指押さえ、胴:ハケメ	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表③

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出した 遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH 9	4	3	30	不條	1号旧河道跡土器溜	弥生中期後半～後期初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ・指押さえ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	5	4	43	不條	1号旧河道跡土器溜	弥生中期後半～後期初頭	擬粘土帯	甕	全	口：胴上部：赤色、胴中部：突帯、胴下部：ハケメ	ナデ、口・胴上：赤色	
NH 9	18	15	36	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	粘土帯	甕	口縁部	ヨコナデ・指押さえ	ヨコナデ	
NH 9	18	15	37	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、胴：ハケメ	ハケメ→ナデ	
NH 9	18	15	38	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	粘土帯	甕	底部	ナデ	ナデ	
NH 9	18	15	39	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	楽浪系	甕	口縁部	口：回転ナデ、肩：ミガキ状	回転ナデ	
NH 9	18	15	40	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、胴：ハケメ	ハケメ	
NH 9	18	15	41	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、胴：ハケメ	ヨコナデ	
NH 9	18	15	42	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、胴：ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	跳ね上げ口縁で遠賀川以東系を模倣
NH 9	18	15	43	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	擬粘土帯	甕	口縁部			
NH 9	18	15	44	不條	2号旧河道	弥生前期末～古墳前期	三韓系		胴部	格子→沈線		
NH 9	22	18	27	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	鉢	全	ナデ	ハケメ→ナデ	
NH 9	22	18	31	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ・ナデ	
NH 9	22	18	32	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	底部	ナデ	ナデ	
NH 9	22	18	33	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	
NH 9	22	18	34	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	
NH 9	22	18	35	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	22	18	36	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ・指押さえ、胴：ハケメ	ナデ	粘土帯押さえ
NH 9	22	18	37	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	30	25	52	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	全	口：ヨコナデ・指押さえ、胴：縦ミガキ→斜ミガキ	ナデ	
NH 9	30	25	53	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	全	口：ヨコナデ→ミガキ・指押さえ、胴：縦ミガキ	横ミガキ	
NH 9	30	25	54	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	鉢	全	口：ヨコナデ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	30	25	55	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	鉢	口縁部			
NH 9	30	25	56	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	鉢	全	口：ヨコナデ・指押さえ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	30	25	57	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、胴：ハケメ→ナデ	ミガキ	
NH 9	30	25	58	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	30	25	59	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	底部	ナデ・指押さえ	ナデ	
NH 9	30	25	60	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	底部	ナデ	ナデ	
NH 9	30	25	61・62・83	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	30	25	63	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	蓋				
NH 9	30	25	64	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	高坏	口縁部	ミガキ	ミガキ	
NH 9	30	25	65	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	高坏	口縁部			
NH 9	31	26	66	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH 9	31	26	67・70	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ、胴：ハケメ	ナデ	
NH 9	31	26	68	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ・指押さえ、胴：ナデ	ハケメ	粘土帯押さえ
NH 9	31	26	69	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	粘土帯押さえ
NH 9	31	26	71	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ	
NH 9	31	26	72	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ・指押さえ、胴：ハケメ	ナデ	粘土帯押さえ
NH 9	31	26	73	不條	3号旧河道	弥生前期末～中期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表④

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出した 遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH9	31	26	74	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	粘土帯押 さえ
NH9	31	26	75	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ	粘土帯押 さえ
NH9	31	26	76	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	甕	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ	
NH9	31	26	77・ 78	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ→ハ ケメ、胴：ハケメ	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	
NH9	31	26	79	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ・指押 さえ、胴：ハケメ	ハケメ・ナデ	
NH9	32	27	80	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
NH9	32	27	81	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ナデ	ナデ	
NH9	32	27	82	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ナデ	ナデ	
NH9	32	27	84	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	ナデ	
NH9	32	27	85	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	蓋	把部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
NH9	32	27	86	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	蓋	全	ナデ	ナデ	
NH9	32	27	87	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	蓋	把部	ナデ	ナデ	
NH9	32	27	88	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	小型土器	脚部	ミガキ	ナデ	
NH9	32	27	89	不條	3号旧河道	弥生前期末～中 期中頃	粘土帯	甕	把手部	ナデ	ナデ	
NH9	39	33	29・ 30	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH9	39	33	31	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	粘土帯	甕	底部			
NH9	40	34	32	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	ナデ	
NH9	40	34	33	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	擬粘土帯	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
NH9	40	34	34	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ→ナデ	ナデ	
NH9	40	34	35	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	擬粘土帯	甕	口縁部	ハケメ		
NH9	40	34	36	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	ナデ	
NH9	40	34	37	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	工具痕・ナデ	
NH9	40	34	38	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	突起有
NH9	40	34	39	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH9	40	34	40	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH9	40	34	41	不條	4号旧河道	弥生前期末～中 期後半	粘土帯	甕	把手部	ナデ	ナデ	
NH11	138	68	10	原	A区1号濠	須玖I式古～布 留式	陶質	壺	口縁部	水波文・ナデ	ナデ	
NH11	182	94	10	原	1号住居跡	古墳初頭	楽浪系		底部	縄（原体S撚）	当て具痕	
NH11	182	94	11	原	5号住居跡	古墳初頭	楽浪系	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH11	188	98	30	原	1号濠上層	須玖I式古～布 留式	楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH11	199	105	5	原	A8区3層		三韓系		胴部	格子		
NH11	199	105	6	原	G2区3層				胴部	縄→沈線		
NH11	199	105	7	原	G2区3層				口縁部			
NH11	199	105	8	原	G4区3層				胴部	縄		
NH11	199	105	9	原	A6区3層		三韓系		胴部	格子		
NH11	199	105	10	原	D7区2層				胴部	縄→沈線		
NH11	199	105	11	原	D6区3層				胴部	縄→沈線		
NH11	199	105	12	原	D3区2層				胴部	縄→沈線		
NH11	199	105	13	原	A区1層				胴部	縄→沈線		
NH11	199	105	14	原	D6区2層				胴部	縄		
NH11	199	105	15	原	D8区2層				胴部	縄		

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑤

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH11	254	134	1・2	原	I 1区2層・I 5区1層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH11	254	134	3	原	1号住居跡	古墳初頭	陶質		胴部	ナデ	ナデ	
NH11	254	134	4	原	I 13区2層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚) → 沈線		
NH11	254	134	5	原	II 2区1層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚) → 沈線		
NH11	254	134	6	原	I 4区2層		三韓系		胴部	格子	無文当て具痕	
NH15	26	18	13	八反	VIII区4b2層		粘土帯		底部	ナデ	ナデ	
NH15	26	18	14	不條	III区2号溝	弥生前期末・中 期初頭	粘土帯		底部	ナデ・工具痕	ナデ	
NH16	38	29	17	不條	2号旧河道上層	古墳前期	粘土帯	甕	口縁部			
NH16	47	37	44	不條	2号濠	古墳前期柳田II b~II c	陶質	ジョッキ 形	全	回転ナデ	回転ナデ	
NH16	49	38	10	不條	4号濠	古墳前期柳田II b~II c	陶質	壺	口縁部・ 胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH16	54	42	12	不條	5号溝	弥生前期末・中 期初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	指押さえ・ハケメ	ハケメ・ナデ	
NH16	59	46	59	不條	E区1号土坑	弥生中期後葉 (須玖II式)	楽浪系	滑石混和 花盆形	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	60	47	6	不條	E区16号土坑	城ノ越~須玖I 式	粘土帯	把手附壺	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	61	48	4	不條	E20区3層		粘土帯	小型土器	底部	指押さえ	ナデ	
NH16	61	48	5	不條	B5区2層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	61	48	6	不條	D18区2層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	61	48	7	不條	2号濠2層	古墳前期	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	61	48	8	不條	B23区2層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	61	48	9	不條	2号溝	弥生中期~後期 初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	粘土帯押 さえ
NH16	61	48	10	不條	B15区2層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	粘土帯押 さえ
NH16	61	48	11	不條	5号溝	弥生前期末・中 期初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	61	48	12	不條	5号溝	弥生前期末・中 期初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH16	61	48	13	不條	2号濠2層	古墳前期	擬粘土帯	甕	口縁部	指押さえ・ナデ	ナデ	
NH16	61	48	14	不條	E5区落ち込み		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	粘土帯押 さえ
NH16	62	49	15	不條	C2区2層		陶質	壺	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH16	62	49	16	不條	C11区2層		陶質		胴部	縄(原体Z撚) → 沈線	ナデ	
NH16	62	49	17	不條	E18区2層		陶質	壺	胴部	胴上:平行タタキ →沈線、胴下:回 転ナデ	回転ナデ	
NH16	62	49	20	不條	E区ピット112		粘土帯	甕	底部	ナデ	ナデ	
NH18	83	57	1	原	7区		粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
NH18	83	57	2	原	7区		三韓系	短頸壺	口縁部・ 胴部	口:回転ナデ、 胴:平行タタキ→ 沈線	回転ナデ	横耳
NH18	83	57	3・4	原	7区		陶質		胴部	縄(原体Z撚) → 沈線	ナデ	
NH18	83	57	5	原	7区		三韓系		胴部	縄(原体Z撚) → 沈線	ナデ	
NH18	83	57	6	原	7区		三韓系		胴部	縄(原体S撚) → 沈線	ナデ	
NH18	83	57	7	原	7区		三韓系		胴部	縄(原体Z撚) → 沈線	ナデ	
NH18	83	57	8	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	83	57	9・10・ 11・12・ 13・14・ 15・16・ 17・19・ 30・32・ 35・36	原	7区		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NH18	83	57	18	原	7区		三韓系		胴部	縄(原体Z撚) → 沈線	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑥

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH18	84	58	20	原	7区		三韓系		肩部	格子→沈線	ナデ	
NH18	84	58	21・ 22	原	7区		三韓系		胴部	縄(原体S撚)→ 沈線	ナデ	
NH18	84	58	23・27 ・28	原	7区		三韓系		肩部・胴 部	格子	ナデ	
NH18	84	58	24	原	7区		三韓系		肩部	ナデ・格子	ナデ	
NH18	84	58	25	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	84	58	26	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	84	58	29	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	84	58	31	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	84	58	33	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	84	58	34	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	85	59	37	原	7区		楽浪系	滑石混和 土器	口縁部	ナデ	工具・ナデ	
NH18	85	59	38	原	7区		楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH18	85	59	39	原	4区		三韓系	短頸壺	口縁部	ナデ	ナデ	
NH18	85	59	40	原	4区		三韓系		胴部	縄(原体S撚)→ 沈線	ナデ	
NH18	85	59	41	原	7区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	85	59	42	高元	1区		陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH18	85	59	43	高元	1区		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH18	85	59	44	高元	1区		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH18	85	59	45	高元	1区		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH18	139	82	1	不條	I 3区旧河道IV b層	弥生中期～古墳 前期	粘土帯	甕	口縁部			
NH18	139	82	2	不條	I 11区II層		三韓系		胴部	格子		
NH18	139	82	3	不條	2号濠II層	弥生終末・古墳 前期	陶質		胴部			
NH18	139	82	4	不條	2号濠I層	弥生終末・古墳 前期	陶質		胴部			
NH18	139	82	5	不條	2号濠II層	弥生終末・古墳 前期	陶質		胴部			
NH18	139	82	6	不條	2号濠II層	弥生終末・古墳 前期	陶質		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH18	139	82	7	不條	I 3区IV b層		陶質		胴部			
NH18	139	82	8	不條	I 12区II層		陶質		胴部			
NH18	139	82	9	不條	I 12区II a層		陶質		胴部			
NH18	139	82	10	不條	I 10区II b層		陶質		胴部			
NH18	139	82	11	不條	I 9区II b層		陶質		胴部	格子		
NH19	48	32	71	不條	B区1号旧河道 IV a・IV b層	城ノ越式～布留 式	擬粘土帯	甕	全	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	ナデ	
NH19	48	32	72	不條	B区1号旧河道 IV b層	城ノ越式～布留 式	擬粘土帯	鉢	全	口・胴：ハケメ、 底：指押さえ	ナデ	
NH19	48	32	73	不條	B区1号旧河道 IV b層	城ノ越式～布留 式	三韓系	短頸壺	口・胴部	口：ナデ、胴：格 子→沈線	ナデ	
NH19	48	32	74	不條	B区1号旧河道 IV d層	城ノ越式～布留 式	遼東系	短頸壺	胴部	胴上：ナデ→沈線、 胴中：縄(原体S撚) 押捺、胴下： 縄(原体S撚)	ナデ	
NH19	48	32	75	不條	B区1号旧河道 IV c層	城ノ越式～布留 式	擬粘土帯	鉢	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ナデ	ナデ	
NH19	48	32	76	不條	B区1号旧河道 IV b層	城ノ越式～布留 式	擬粘土帯	鉢	口縁部・ 底部	口：ヨコナデ、胴： 縦ハケメ、底：ナデ	横ハケメ・ナ デ	口縁部・底 部別個体か
NH19	48	32	77	不條	B区1号旧河道 IV b層	城ノ越式～布留 式	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
NH19	48	32	78	不條	B区1号旧河道 IV b層	城ノ越式～布留 式	三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH19	48	32	79	不條	B区1号旧河道 III層	城ノ越式～布留 式	三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NH19	48	32	80	不條	B区1号旧河道 III層	城ノ越式～布留 式	陶質		胴部	格子	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑦

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH19	48	32	81	不條	B区1号旧河道 Ⅲ層	城ノ越式～布留 式	三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NH19	48	32	82	不條	B区1号旧河道 Ⅳb層	城ノ越式～布留 式	陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	48	32	83	不條	B区1号旧河道 Ⅳb層	城ノ越式～布留 式	陶質		肩部	縄(原体Z撚)	ナデ	耳
NH19	50	33	1	八反	E区2号旧河道	弥生後期～古墳 前期	粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：タテナデ	ヨコナデ	
NH19	50	33	2	八反	E区2号旧河道	弥生後期～古墳 前期	擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH19	50	33	3	八反	E区2号旧河道	弥生後期～古墳 前期	擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ	
NH19	50	33	4	八反	E区2号旧河道	弥生後期～古墳 前期	擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ	
NH19	50	33	5	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	粘土帯		胴部	突起附、ハケメ	ハケメ	
NH19	50	33	6	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	楽浪系	壺	底部	胴：回転ナデ・ケ ズリ、底：ナデ	回転ナデ	
NH19	50	33	7・8 ・9	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
NH19	50	33	10	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	11	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	12-17 19-23	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	陶質	短頸壺	口縁部・ 胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	13	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	陶質		底部	回転ナデ	回転ナデ	
NH19	50	33	14	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	15	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	16	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	18	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	20	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	21	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	22	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH19	50	33	24	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH19	50	33	25	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH19	50	33	26	八反	E区2号旧河道 Ⅱ層	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH19	50	33	27	八反	E区2号旧河道	弥生後期～古墳 前期	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH19	64	43	50	不條	D区2号濠	須玖I式古～布 留式	陶質	台附鉢	全	回転ナデ	回転ナデ	
NH19	68	45	16	不條	A区1号土坑	須玖I式古段階	擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ	
NH19	73	49	8	不條	B区6号土坑	須玖I式古段階	粘土帯	甕	全	口：ヨコナデ、胴： ナデ、底：工具痕	ナデ	
NH19	75	51	16	八反	E区土器溜	須玖I式新段階 ～後期末	粘土帯	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	
NH19	75	51	17	八反	E区土器溜	須玖I式新段階 ～後期末	粘土帯		底部	指押さえ・ナデ	指押さえ	
NH19	75	51	18	八反	E区土器溜	須玖I式新段階 ～後期末	三韓系	爐形土器	胴部	暗文	ヨコナデ	
NH20	21	13	9	八反	4号溝	弥生前期末～後 期	粘土帯	黒色長頸 壺	胴・底部	胴：ハケメ→ナデ	ナデ	内外面に漆 状の黒色
NH20	24	16	7	八反	3号旧河道	弥生中期～古墳 前期	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)→ 沈線	当て具痕	
NH20	24	16	8	八反	3号旧河道	弥生中期～古墳 前期	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)→ 回転ナデ	当て具痕→回 転ナデ	
NH21	36	24	6	不條	C区1号濠	弥生後期～古墳 前期	擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH21	37	25	14	不條	C区1号濠	弥生後期～古墳 前期	粘土帯	甕	口縁部	口：指押さえ、 胴：ハケメ	ナデ	粘土帯押 さえ
NH21	37	25	15	不條	C区1号濠	弥生後期～古墳 前期	粘土帯		把手	指押さえ・ナデ		
NH21	41	27	14	不條	B区2号溝	板付Ⅱb式～ 城ノ越式	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH21	44	30	25	八反	F区土器溜Ⅰ層	須玖I式古段階 ～後期前半	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH21	46	31	35	八反	F区土器溜Ⅲ層	須玖II式古段階 ～後期初頭	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
NH21	53	37	24	不條	C区落ち込み2	城ノ越～須玖II 式	粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ、胴：ハ ケメ→ナデ	ナデ	粘土帯押 さえ

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑧

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考	
NH21	56	39	1	不條	B15区Ⅲ層			粘土帯	把手	ナデ	ナデ		
NH21	56	39	2	不條	D3区Ⅳ層			粘土帯	甕	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ	
NH21	56	39	3	不條	D7区Ⅲ層			楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH21	56	39	4	不條	D3・6区Ⅳ層			楽浪系	鉢	底部	胴：ケズリ、底： 糸切	剥離	
NH21	56	39	5	八反	F7区Ⅴ層			三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH21	56	39	6	不條	D3区Ⅳ層			三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH21	56	39	7	不條	D3・6区Ⅳ層			三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NH21	56	39	8	八反	F7区Ⅴ層			三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH21	56	39	11	八反	F8区Ⅴ層			陶質		胴部	ミガキ	ナデ	
NH23	17	10	6	鏡ノ池	0号溝上部			粘土帯	深鉢	口縁部・ 底部	ナデ	ナデ	
NH23	17	10	15	鏡ノ池	1号溝2層	中期初頭～後期		粘土帯	長胴壺	全	ハケメ→ナデ	ナデ	
NH23	17	10	17	鏡ノ池	1号溝2層	中期初頭～後期		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH24	23	14	40	八反	SD1Ⅱ層	弥生後期後半・ 古墳初頭		擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	ハケメ	
NH24	23	14	41	八反	SD1Ⅱ層	弥生後期後半・ 古墳初頭		楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH24	23	14	42・ 43	八反	SD1Ⅱ層	弥生後期後半・ 古墳初頭		楽浪系	鉢	口縁部・ 底部	口：胴・回転ナデ、 底：糸切	回転ナデ	
NH24	26	17	61	八反	SD1Ⅳ層	弥生後期前半・ 後半		楽浪系	鉢	全	叩き→回転ナデ	回転ナデ	
NH24	49	33	85	八反	SD2Ⅱ層	弥生終末期～古 墳前期		三韓系	短頸壺	全	口：ナデ、胴：縄 （原体Z撚）→沈線	ナデ	三耳附
NH25	30	21	1	八反	北区SD6	弥生後期中葉・ 後葉		楽浪系	壺	口縁部	回転ナデ・黒色塗 布	回転ナデ	
NH25	30	21	2	八反	7層			楽浪系	壺	口縁部	麻点→回転ナデ	回転ナデ	
NH25	30	21	3	八反	7層			楽浪系	壺	口縁部	叩き→回転ナデ	回転ナデ	
NH25	30	21	4・6・ 7・8・ 9・10・ 11・12・ 13・14	八反	7層・SD5Ⅰ 層			楽浪系	壺	口縁部・ 胴部・底 部	口：回転ナデ、 胴・底：縄（原体 S撚）→沈線	口・回転ナデ、 胴・底・当て 具痕	
NH25	30	21	5	八反	7層			楽浪系	長頸壺	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH25	30	21	15・ 16	八反	7層			三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH25	30	21	17	八反	7層			三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH25	30	21	18	八反	7層			三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH25	30	21	19・ 20	八反	7層			三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH25	30	21	21	八反	7層			陶質		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH25	30	21	22	八反	7層			陶質		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH26	30	20	19	八反	D区落ち込み	古墳前期		楽浪系	鉢	底部	胴：ヘラナデ、 底：糸切→ヘラナ デ	回転ナデ→格 子状・放射状 集線暗文	
NH26	30	20	20	八反	D区落ち込み	古墳前期		三韓系		把手部	ナデ	ナデ	
NH26	30	20	21	八反	D区落ち込み	古墳前期		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH26	31	21	3	八反	包含層			不明		把手	ハケメ・ナデ	ケズリ	
NH26	31	21	4	八反	包含層			粘土帯		把手	ナデ	—	
NH26	76	48	1	高元	I区サブトレ			楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH26	76	48	2	高元	SK4Ⅰ層	須玖Ⅱ式		楽浪系	壺	胴部	回転ナデ・沈線	回転ナデ	
NH26	76	48	3	高元	SB2Ⅰ層	古墳前期		楽浪系	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH26	76	48	4	高元	SB3Ⅰ層	古墳初頭		不明		胴部	縄（原体S撚）	ナデ	
NH26	76	48	5	高元	SB5覆土	古墳前期		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	軟質
NH26	76	48	6	高元	SK1Ⅲ層	須玖Ⅱ式		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑨

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH26	127	73	21	石田高原	SD 3	中期中葉～古墳 初頭	粘土帯	長胴壺	全	口：ナデ、胴：ハ ケメ・ナデ	ナデ	
NH26	134	79	92	石田高原	Ⅵ区落ち込み	古墳前期	陶質		底部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	96	石田高原	落ち込み	古墳前期	楽浪系	短頸壺	胴部	叩き→回転ナデ	回転ナデ	
NH26	135	80	97	石田高原	落ち込み	古墳前期	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH26	135	80	98	石田高原	SD12排土		三韓系		底部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH26	135	80	99	石田高原	落ち込み	古墳前期	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH26	135	80	100	石田高原	落ち込み	古墳前期	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH26	135	80	105	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		楽浪系		底部	胴：回転ナデ、 底：糸切→ナデ	回転ナデ	
NH26	135	80	107	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	108	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	109	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	110	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		陶質		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH26	135	80	111・ 124	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH26	135	80	112	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH26	135	80	113	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	114	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		楽浪系		胴部	縄（原体S撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	115	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	116	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH26	135	80	117	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	118	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	119	石田高原	Ⅵ区Ⅳ層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH26	135	80	121・ 123	石田高原	Ⅱ区Ⅱ層・Ⅲ層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH26	135	80	122	石田高原	表採		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH27	78	54	1	八反	SD-2	弥生終末・古墳 前期	陶質	壺	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH27	78	54	2	八反	SD-2	弥生終末・古墳 前期	陶質		底部	沈線・ナデ	ナデ	
NH27	78	54	3	八反	SD-2	弥生終末・古墳 前期	三韓系	短頸壺		口：ナデ、胴・ 底：格子	ナデ	
NH27	78	54	4	八反	包含層		三韓系	短頸壺	肩部	口：ナデ、胴：格 子	ナデ	
NH27	78	54	5	八反	SD-3	弥生終末・古墳 前期	三韓系	長頸壺	口縁部	ナデ	ナデ	
NH27	78	54	6	八反	SD-4	弥生中期後葉～ 古墳初頭	楽浪系	長頸壺	胴部・底 部	胴：回転ナデ、 底：糸切	回転ナデ	
NH27	78	54	7	八反	SD-5	弥生中期後葉～ 古墳初頭	楽浪系		底部	底・糸切	回転ナデ	
NH27	78	54	8	八反	SD-4	弥生中期後葉～ 古墳初頭	楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH27	78	54	9	八反	SD-5	弥生中期後葉～ 古墳初頭	楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH27	78	54	10	八反	SD-3	弥生終末・古墳 前期	三韓系	二重口縁 壺	口縁・胴 部	口：ナデ、肩：鋸 歯押捺、胴：平行 →沈線	ナデ	馬韓
NH27	79	55	11	八反	SD-5	弥生中期後葉～ 古墳初頭	楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH27	79	55	12	八反	SD-5	弥生中期後葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH27	79	55	13	八反	SD-5	弥生中期後葉～ 古墳初頭	楽浪系		底部	胴：ヘラケズリ、 底：糸切→ヘラケ ズリ	回転ナデ	
NH27	79	55	14	八反	SD-7	弥生後期初頭・ 中葉	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH27	79	55	15	八反	SD-8	弥生中期中葉・後 期後葉・古墳前期	楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH27	79	55	16	八反	SD-8	弥生中期中葉・後 期後葉・古墳前期	楽浪系	筒坏	底部	胴：回転ナデ、 底：糸切	回転ナデ	
NH27	79	55	17	八反	SD-8	弥生中期中葉・後 期後葉・古墳前期	三韓系	深鉢	口縁部	格子	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑩

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出した 遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH27	79	55	18	八反	SD-8	弥生中期中葉・後 期後葉・古墳前期	三韓系	短頸壺	口縁部	口：回転ナデ、 肩：格子	回転ナデ	
NH27	79	55	19	八反	表土		三韓系	短頸壺	口縁部	口：ナデ、胴：格 子	ナデ	
NH27	79	55	20	八反	包含層		楽浪系		底部	底：糸切、胴：回 転ナデ	回転ナデ	
NH27	79	55	21	八反	包含層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH27	79	55	22	八反	包含層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH27	79	55	23	八反	包含層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH27	79	55	24	八反	包含層		楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	口縁部形 態特異
NH27	79	55	25	八反	包含層		楽浪系	蓋	蓋部	回転ナデ	回転ナデ	内面黒色
NH27	79	55	26	八反	包含層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH27	79	55	27	八反	包含層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH28	49	32	48	石田高原	SD 1	弥生中期中葉～ 古墳初頭	楽浪系	筒坏	底部	回転ナデ	回転ナデ	
NH28	79	51	21	高元	SC 8	布留式	楽浪系	鉢	底部	回転ナデ	回転ナデ	
NH28	84	56	28	高元	SK 3	弥生中期後葉・ 後期初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH28	84	56	29	高元	SK 3	弥生中期後葉・ 後期初頭	楽浪系	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH28	105	76	5	高元	II c 区 3 b 層		三韓系	袋壺	口縁部	ナデ	ナデ	
NH28	105	76	7	高元	II c 区 3 b 層		楽浪系	鉢	底部	回転ナデ	回転ナデ	
NH28	105	76	8	高元	II c 区 3 b 層		三韓系		底部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH28	105	76	9	高元	II c 区 3 b 層		三韓系		胴部	撚糸？（原体S 撚）	ナデ	
NH28	105	76	10	高元	II c 区 3 b 層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH28	105	76	11	高元	II c 区 3 b 層		三韓系		胴部	格子	ナデ	軟質
NH28	105	76	12	高元	II c 区 3 b 層		楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	当て具痕	
NH28	105	76	13	高元	II c 区 3 b 層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH28	115	85	7	高元	02SB 5	弥生中期前半・ 古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH30	130	65	7	鏡ノ池		古墳前期	三韓系	二重口縁 壺	口縁部	口：回転ナデ、肩：鋸 歯文押捺、胴：平行	回転ナデ	馬韓
NH31	64	34	48	高元	E 区 3 層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH31	64	34	49	高元	E 区 3 層		三韓系	短頸壺	口縁部	ナデ	ナデ	
NH31	71	40	73	高元	F 区 2 層		楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	口縁部形 態特異
NH31	71	40	74	高元	F 区 3 層		楽浪系	壺	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH31	71	40	75	高元	F 区 3 層		楽浪系	短頸壺	口縁部	縄叩き→回転ナデ	回転ナデ	
NH31	71	40	76	高元	F 区 表土		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH31	71	40	77	高元	F 区 3 層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH31	79	45	20	高元	H 区 4 層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH31	109	55	7	石田高原	C 区 SD 1 I 層	古墳前期	陶質		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH33	13	6	5	不條	0 号河川跡	弥生中期～古墳 初頭	三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH33	13	6	6	不條	0 号河川跡	弥生中期～古墳 初頭	陶質		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH33	25	17	67	不條	D 区河川跡Ⅲ層	弥生中期初頭～ 中期後葉	粘土帯	長胴壺	口縁部・ 胴部	頸：ハケメ→ナデ、 胴：工具痕・ナデ	ナデ	
NH33	25	17	68	不條	D 区河川跡Ⅲ層	弥生中期初頭～ 中期後葉	粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ナデ	ナデ	
NH36	41	25	4	石田高原	SF 1	弥生～古墳中期	楽浪系	滑石混和 土器	口縁部	ナデ	ナデ	
NH36	41	25	9	石田高原	SF 1	弥生～古墳中期	粘土帯		把手	ナデ	—	
NH36	41	25	10	石田高原	F 区 4 層		粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
NH36	43	26	1	石田高原	E 区 4 層		三韓系		胴部	格子	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表①

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH36	43	26	2	石田高原	B区4b層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NH36	43	26	3・4 ・7	石田高原	F区4b層・SF 1・F区4b層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH36	43	26	5	石田高原	E区3層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH36	43	26	6	石田高原	F区3層		三韓系		肩部	肩：ナデ、胴：格 子→沈線	ナデ	
NH36	43	26	8	石田高原	A区4b層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH36	43	26	9	石田高原	SF1		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH36	43	26	10・ 13	石田高原	A区4b層		楽浪系		底部	縄（原体S撚）	ナデ	
NH36	43	26	11	石田高原	A区4層		三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH36	43	26	12	石田高原	A区4b層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH36	43	26	14・ 16	石田高原	F区4層・F区 4b層		三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH36	43	26	15	石田高原	F区4層		三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH36	43	26	17	石田高原	SF1		三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH36	43	26	18・ 19・ 20・ 24	石田高原	C区4b層・A 区4b層・SF 1		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH36	43	26	21	石田高原	F区3層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH36	43	26	22	石田高原	A区4b層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH36	43	26	23・ 25	石田高原	F区4b層		陶質		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH37	12	10	12	不條	SD5	須玖I式・須玖 II式	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	著しい被 熱
NH37	15	14	61	不條	SX2	弥生前期末～中 期初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH37	15	14	62	不條	SX2	弥生前期末～中 期初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NH38	31	17	4	石田高原	SD1下層④層	弥生中期中葉～ 中期後葉	楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH38	40	24	43	石田高原	落ち込み1①層	弥生後期中葉～ 古墳初頭	陶質	鉢	口縁部	口：ナデ、胴：格 子	ナデ	
NH38	43	25	9	石田高原	落ち込み2②層	8世紀	楽浪系		底部	縄（原体S撚）	当て具痕	
NH38	48	30	1,3	石田高原	北壁際トレン チ・1層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH38	48	30	2	石田高原	3層		楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	ナデ	
NH38	48	30	4	石田高原	落ち込み3①層	中世	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	5	石田高原	落ち込み3②層	中世	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	6	石田高原	落ち込み1①層	弥生後期中葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	7	石田高原	落ち込み3①層	中世	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	8	石田高原	3層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	9	石田高原	3c層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	10・ 12	石田高原	落ち込み3② 層・①層	中世	三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	11	石田高原	落ち込み1①層	弥生後期中葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	13	石田高原	4層		楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	ナデ	
NH38	48	30	14	石田高原	落ち込み3①層	中世	楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	ナデ	
NH38	48	30	15	石田高原	落ち込み3①層	中世	三韓系		胴部	縄	ナデ	
NH38	48	30	16	石田高原	落ち込み2②層	8世紀	三韓系	短頸壺	口縁部	ナデ	ナデ	
NH38	48	30	17	石田高原	落ち込み2①層	8世紀	楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	ナデ	
NH38	48	30	18・20 ・32	石田高原	3層・落ち込み 3②層・①層	中世	三韓系		胴部	縄（原体Z撚）	ナデ	
NH38	48	30	19	石田高原	3c層		楽浪系		底部	縄（原体S撚）	ナデ	
NH38	48	30	21	石田高原	落ち込み1①層	弥生後期中葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑫

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH38	48	30	22	石田高原	3層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	23	石田高原	落ち込み3①層	中世	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	24	石田高原	落ち込み3①層	中世	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	25	石田高原	落ち込み3①層	中世	陶質		肩部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	26	石田高原	落ち込み3①層	中世	三韓系		肩部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	27	石田高原	落ち込み3①層	中世	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	28・ 30	石田高原	落ち込み3①層 ・4層	中世	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	29・ 31	石田高原	落ち込み3①層 ・落ち込み1①層	中世	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH38	48	30	33	石田高原	落ち込み3①層	中世	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	48	30	34	石田高原	落ち込み3①層	中世	陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH38	86	53		不條	16区排土		粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
NH39	22	16	70	八反	6層		擬粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	ヨコナデ・ミ ガキ	
NH39	22	16	71	八反	6層		擬粘土帯	甕	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ	
NH39	22	16	74	八反	6層		粘土帯	甕	底部	ハケメ→ナデ	ナデ	
NH39	22	16	76	八反	6層		粘土帯	甕	底部	ナデ	ナデ	
NH39	22	16	77	八反	6層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH39	22	16	78	八反	6層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH39	22	16	79・80 ・81	八反	6層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH39	22	16	82	八反	6層		楽浪系		底部	縄(原体S撚)	当て具痕	
NH39	22	16	83	八反	6層		楽浪系	短頸壺	口縁部・ 胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH39	22	16	84	八反	6層		楽浪系	短頸壺	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH39	22	16	85	八反	6層		楽浪系	壺	底部	胴：ヘラケズリ、 底：糸切→ヘラケ ズリ	回転ナデ	
NH39	22	16	86	八反	6層		三韓系		底部	縄(原体S撚)	当て具痕	当て具痕： 年輪以外に 同心円あり
NH39	22	16	87	八反	6層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NH40	61	38	1	石田高原	3区4c層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	—	
NH40	61	38	2	石田高原	3区4a層		擬粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ・指押さ え	ハケメ	
NH40	61	38	3	石田高原	3区4a層		楽浪系		底部	底：糸切、胴：回 転ナデ	回転ナデ	
NH40	61	38	4	石田高原	3区4a層		三韓系		底部	縄(原体Z撚)→ 赤色塗布	ナデ	外面に赤 塗
NH40	61	38	5	石田高原	5区落ち込み上 層	弥生後期後半	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NH40	61	38	6	石田高原	2区3a層		楽浪系		肩部	縄(原体S撚)→ 沈線	ナデ	
NH40	61	38	7	石田高原	5区3層		三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NH40	61	38	8	石田高原	2区ビット16上 層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH40	61	38	9	石田高原	1区4c層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH40	61	38	10	石田高原	5区落ち込み上 層	弥生後期後半	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH40	61	38	11	石田高原	5区2層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH40	61	38	12	石田高原	3区4a層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH40	61	38	13	石田高原	3区4b層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH40	61	38	14	石田高原	5区落ち込み上 層	弥生後期後半	陶質		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH40	61	38	15	石田高原	5区2層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NH40	61	38	16	石田高原	2区4c層		三韓系		口縁部	口：ナデ、胴部： 格子	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑬

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NH40	61	38	17	石田高原	1区4c層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NH40	61	38	18	石田高原	4区4a層		三韓系	短頸壺	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
NH40	61	38	19	石田高原	4区4a層		陶質		胴部	ナデ	ナデ	
NM1	30	18	47	八反	4b区1層		楽浪系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NM1	30	18	48	八反	3a区1層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM1	86	51	125	原	1号濠②層	古墳初頭						
NM1	86	51	130	原	1号濠①層	古墳初頭	擬粘土帯	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	
NM6	41	17	181	芦辺高原	4層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	41	17	182	芦辺高原	4層		楽浪系		底部	縄(原体S撚)	当て具	
NM6	41	17	183	安国寺A	Ⅲ区3層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NM6	41	17	184	芦辺高原	4層		三韓系		胴部	縄(原体S撚)	ナデ	
NM6	41	17	185	芦辺高原	2層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM6	41	17	186	芦辺高原	4層		楽浪系		胴部	ナデ	ナデ	
NM6	41	17	187	不條	C4区		粘土帯	甕	口縁部	剥離	剥離	
NM6	41	17	188	不條	C5区		擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ	
NM6	42	18	189	不條	B11区		粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ナデ	ナデ	
NM6	42	18	190	不條	C11区		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	42	18	191	不條	C7区3層		擬粘土帯	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	
NM6	42	18	192	不條			粘土帯	甕	底部	ナデ	ナデ	滑石多量
NM6	42	18	193	不條	C7区3層		粘土帯	甕	口縁部	指押さえ・ナデ	ナデ	突起附
NM6	42	18	194	不條	B8区		擬粘土帯	甕	口縁部	指押さえ・ナデ	ハケメ	
NM6	42	18	195	原	C区1号溝3層	弥生後期後半～ 古墳前期	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	42	18	196	原	E5区2号溝5 層	弥生中期	粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ、胴：ハ ケメ	口・ナデ、 胴・ハケメ	
NM6	42	18	197	原	D区1号溝2層	弥生中期～古墳 前期	三韓系		胴部	縄(原体S撚)	ナデ	
NM6	42	18	198	不條	E5区3層落ち 込み3		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	42	18	199	不條	E5区3層落ち 込み3		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	42	18	200	不條	C4区落ち込み B		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	42	18	201	不條	B区2号土坑	城ノ越式～須玖 I式	粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
NM6	43	19	202	原	6-5区4層		楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	ナデ	
NM6	43	19	203	原	5-3区2層		三韓系		胴部	縄(原体S撚)	ナデ	
NM6	43	19	204	原	4-1区2層		楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	ナデ	
NM6	43	19	205	原	7-3区8層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM6	43	19	206	原	4-1区2層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NM6	43	19	207	不條	I区2号溝1層	弥生終末期～古 墳前期	陶質		胴部	平行	ナデ	
NM6	43	19	208	原	7-3区4層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
NM6	43	19	209	不條	A-2区4層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	43	19	210	不條	E-20区落ち込 み3-2層		粘土帯	甕	口縁部	口：ナデ、胴：ハ ケメ	ナデ	
NM6	43	19	211	不條	B区4c層		粘土帯	甕	口縁部	口：ヨコナデ、 胴：ハケメ	ナデ	
NM6	43	19	212	不條	A区1号土坑	須玖I式古	粘土帯	鉢	口縁部	ナデ	ナデ	
NM6	43	19	213	不條	B-22区2層		粘土帯	小型甕	底部	ナデ	ナデ	
NM6	43	19	214	不條	E-20区落ち込 み3-2層		粘土帯	小型鉢	口縁部	ナデ	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑭

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NM 6	43	19	215	不條	D区7号土坑	須玖I式古	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM 6	43	19	216	不條	E-17区1号土 器溜	須玖I式新～後 期末	楽浪系	滑石混和	胴部	ナデ	布目痕	滑石多量
NM 6	43	19	217	不條	B-15区3・4 層		楽浪系	短頸壺	口縁部	叩き→回転ナデ	回転ナデ	
NM 6	43	19	218	八反	E-14区4号溝 2層		楽浪系	筒坏	底部	胴：回転ナデ、 底：糸切	回転ナデ	
NM 6	43	19	219	八反	E-21区落ち込 み3-2層		楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	剥離	
NM 6	43	19	220	不條	4層上		楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	当て具痕	
NM 6	44	20	221	不條	3層		楽浪系		胴部	縄（原体S撚）→ 沈線	ナデ	
NM 6	44	20	222	八反	E-16区土器溜 2a層	須玖I式新～後 期末	楽浪系		胴部	縄（原体S撚）	ナデ	
NM 6	44	20	223	八反	E-21区落ち込 み3-2層		楽浪系		底部	ナデ	タテナデ	
NM 6	44	20	224	八反	E-20区落ち込 み3-2層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NM 6	44	20	225	八反	E-21区落ち込 み3-2層		楽浪系		底部	剥離	回転ナデ	
NM 6	44	20	226	八反	E-21区落ち込 み3-2層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NM 6	44	20	227	八反	E-21区落ち込 み3-2層		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
NM 6	44	20	228・ 229	不條	B区4d層・B -15区4b層		楽浪系		胴部	ナデ	当て具痕	
NM 6	44	20	230	不條	C-4区2層		陶質		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NM 6	44	20	231	不條	B-23区2層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NM 6	44	20	232	八反	E-20落ち込 み3-2層		三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NM 6	44	20	233	八反	E-6区3a層		三韓系		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	
NM 6	45	21	234	不條	B-15区4b層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NM 6	45	21	235	八反	E-16区土器溜	須玖I式新～後 期末	三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NM 6	45	21	236	不條	B-21・22区3 a層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NM 6	45	21	237	不條	B-20区2層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NM 6	45	21	238	不條	B-20区2層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	239	八反	E-21区3a層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
NM 6	45	21	240	八反	E-10区3b層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	241	八反	E-18区落ち込 み3-2層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	242	不條	B-23・24区2 層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	243	不條	B-21区3層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	244	八反	E-20区落ち込 み3-2層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	245・ 247・ 248・ 249	不條	B-19区2層・ B-20区3層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	246	不條	B-20区3層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	250・ 253	八反	E-19区1号土 器溜	須玖I式新～後 期末	三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	251	不條・八 反			三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	252	不條	B-22区2層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
NM 6	45	21	254	八反	E-22区落ち込 み3-2層		三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
NM 6	45	21	256	不條	B-18区4b層		三韓系		胴部	平行	ナデ	
NM 6	46	22	257・ 266・ 267・ 268・ 269	不條	B-11区3層・ B-14区3層		陶質		口縁部・ 胴部	口：ナデ、頸：カ キメ、胴：格子	口・ナデ、 頸・ナデ、 胴・当て具痕	
NM 6	46	22	258	不條	A-7区2a層		陶質		胴部	縄（原体Z撚）→ 沈線	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑮

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
NM 6	46	22	259	不條	A-8区2a層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NM 6	46	22	260・ 261・ 262・ 263・ 264・ 265	不條	E-18区落ち込 み3-2層・B -18区4b層・ B-18区4d層		陶質		胴部	カキメ状	ナデ	
NM 6	46	22	270	八反	20区2層		三韓系		底部	格子	ナデ	
NM 6	46	22	271	不條	I-7区1号溝 2層	弥生前期末～中 期前半	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM 6	46	22	272	不條	I-10区3号溝		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM 6	46	22	273	不條	I-7区1号溝 2層	弥生前期末～中 期前半	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM 6	46	22	274	不條	I-10区3号溝		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM 6	46	22	275	不條	I-7・8区1 号溝2層	弥生前期末～中 期前半	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
NM 6	46	22	276	大川	6区1層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
NM12	53	29	175	川原畑	1号溝	弥生中期以降	擬粘土帯	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	
AS 6	40	26	9	高元	2号溝							
AS 9	46	25	1	高元	9-A区4層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
AS 9	46	25	2	高元	9号住居跡最上 面	弥生中期初頭～ 中期中葉	楽浪系	鉢		叩き→回転ナデ	回転ナデ	
AS 9	46	25	3	高元	9-A区4層		楽浪系	壺		回転ナデ	回転ナデ	
AS12	42	26	1	原	I-23-③層		粘土帯	甕	口縁部			
AS13	31	21	23	原	M-6		三韓系		胴部	格子	ナデ	
AS13	31	21	24	原	N-4ピット		三韓系	短頸壺	口縁部	口：回転ナデ、 肩：格子	ナデ	
IS 5	35	43	9	石田大原	溝		楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
IK10	119	56	15	高元	V区1号住居跡	弥生後期中葉	三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK10	119	56	16	高元	V区1号住居跡	弥生後期中葉	楽浪系	短頸壺	口縁部	叩き→回転ナデ	回転ナデ	
IK10	119	56	17	高元	V区1号住居跡	弥生後期中葉	三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK10	119	56	18	高元	V区1号住居跡	弥生後期中葉	楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
IK10	119	56	19	高元	V区1号住居跡	弥生後期中葉	楽浪系	鉢	底部	底：糸切、胴：回 転ナデ	回転ナデ	
IK10	133	66	142	高元	V区包含層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
IK10	133	66	143	高元	V区包含層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ハケメ	
IK10	133	66	144・ 145・ 146・ 147	高元	V区包含層		三韓系		頸部・胴 部	格子	ナデ	
IK10	133	66	148・ 149	高元	V区包含層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
IK10	133	66	150	高元	V区包含層		楽浪系	壺	底部	底：糸切、胴部： 回転ナデ	回転ナデ	
IK10	133	66	151	高元	V区包含層		楽浪系	鉢	底部	回転ナデ	回転ナデ→沈 線	
IK12	27	8	115	高元	Ⅲ-9-V層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
IK12	27	8	116	高元	Ⅲ-9-V層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
IK12	27	8	117	高元	Ⅲ-9-V層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ・無文当 て具痕	
IK12	27	8	118	高元	Ⅲ-9-V層		楽浪系		底部	回転ナデ	回転ナデ→暗 文	
IK12	27	8	119	高元	Ⅲ-9-V層		楽浪系		底部	縄(原体S撚)	当て具痕	
IK12	27	8	120	高元	Ⅲ-9-V層		楽浪系		底部	底：糸切、回転ナ デ	回転ナデ→暗 文	
IK12	27	8	121	高元	Ⅲ-9-V層		楽浪系		肩部	肩：ナデ、胴：縄 (原体Z撚)	当て具	
IK12	43	5	39	高元	Ⅵ-1-1包含層		楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
IK12	43	5	40	高元	Ⅵ-1-1包含層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑬

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
IK12	43	5	41	高元	VI-1-包含層		楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
IK12	67	23	86	高元	VI-2・4・5 包含層		楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
IK12	67	23	87	高元	VI-2・4・5 包含層		三韓系		肩部	格子→沈線	ナデ	
IK12	67	23	88	高元	VI-2・4・5 包含層		三韓系		肩部	格子→沈線	ナデ	
IK12	67	23	89	高元	VI-2・4・5 包含層		三韓系		肩部	格子	ナデ	
IK12	67	23	90	高元	VI-2・4・5 包含層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
IK12	67	23	91	高元	VI-2・4・5 包含層		楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
IK12	67	23	92	高元	VI-2・4・5 包含層		楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
IK12	67	23	93	高元	VI-2・4・5 包含層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK12	109	17	127	高元	VII-1・2-II 層		粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
IK12	109	17	130	高元	VII-1・2-I 層		三韓系		胴部	格子・耳	無文当て具痕 →ナデ	
IK14	33	17	112	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		三韓系		肩部	ナデ、隆帯、格子	ナデ	
IK14	33	17	113	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK14	33	17	114	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		三韓系		胴部	格子→沈線	ナデ	
IK14	33	17	115	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK14	33	17	116	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK14	33	17	117・ 118	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK14	33	17	119	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK14	33	17	120	高元	VIII-1・2・4 -遺物包含層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK14	79	26	130	原	X V E 区1号 土器溜り	弥生中期中葉・ 後葉	粘土帯	甕	口縁部	指押さえ・ナデ	ナデ	
IK14	81	28	135・ 136	原	X V E 区 包含 層		楽浪系	鉢	口縁部・ 底部	回転ナデ	回転ナデ	
IK14	81	28	137	原	X V E 区 包含 層		楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
IK14	90	34	161	原	X V F 区2号 住居跡	弥生中期後葉	擬粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ハケメ	
IK14	149	20	223	原	X VII 区1A区 3層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK14	149	20	224	原	X VII 区1A区 3層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK14	149	20	225	原	X VII 区1A区 4層		楽浪系		底部	縄(原体Z撚)	当て具痕	
IK14	149	20	226	原	X VII 区2区2層		楽浪系		胴部	縄(原体Z撚)	当て具痕	
IK14	149	20	227	原	X VII 区1b区3 層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK14	149	20	228	原	X VII 区1A区 4層		三韓系		底部	縄(原体Z撚)	ナデ	
IK14	149	20	229	原	X VII 区1A区 4層		楽浪系		底部	底:糸切、胴:回 転ナデ	回転ナデ	
IK16	35	13	32	高元	VIII区V層		陶質	短頸壺	口縁部	ナデ	ナデ	
IK16	35	13	33	高元	VIII区SC05	弥生後期	陶質		肩部	ナデ	ナデ	
IK16	35	13	34	高元	VIII区V層		陶質	壺	口縁部	ナデ	ナデ	
IK16	35	13	35	高元	VIII区I層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK16	35	13	36・ 38	高元	VIII区V層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK16	35	13	37・39・ 40・41・ 43・44	高元	VIII区V層・SC 04	弥生中期前葉～ 古墳初頭	陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK16	35	13	42	高元	VIII区SC04	弥生中期前葉～ 古墳初頭	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK16	35	13	45	高元	VIII区V層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK16	35	13	46・ 47	高元	VIII区V層		三韓系		胴部	格子	ナデ	
IK16	35	13	48・ 49・ 50	高元	VIII区V層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	

表6 既報告大陸・半島系土器観察表⑰

報告書 番号	頁	図	番号	地区	遺構・層位	遺構等で伴出し た遺物の年代	分類	器種	部位	外面	内面	備考
IK16	36	14	51	高元	Ⅶ区Ⅱ層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
IK16	36	14	52	高元	Ⅶ区Ⅱ層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)	ナデ	
IK16	36	14	53	高元	Ⅶ区SC04	弥生中期前葉～ 古墳初頭	三韓系		底部	縄(原体Z撚)	ナデ	
IK16	36	14	54	高元	Ⅶ区SC04	弥生中期前葉～ 古墳初頭	楽浪系		底部	底:糸切、胴:回 転ナデ	回転ナデ	
IK16	65	12	145	高元	X区2層		三韓系		肩部	縄(原体Z撚)	ナデ	
IK16	65	12	146	高元	X区3層		三韓系		肩部	格子	なで	
IK16	65	12	147	高元	X区SD1-3 トレンチ下層		楽浪系		底部	回転ナデ	回転ナデ	
IK16	65	12	148	高元	X区1層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK16	65	12	149	高元	X区2層		陶質		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
IK16	65	12	150	高元	X区SD1-4 トレンチ		陶質		胴部	格子	ナデ	
IK16	103	10	18	原	XⅦ区SV2-1 トレンチ	弥生中期前葉～ 古墳初頭	三韓系		肩部	縄(原体Z撚)→ 沈線・耳	ナデ・無文当 て具痕	
HH1	23	14	2	八反	コヨウ区SD01	弥生後期	楽浪系	壺	全	口・胴:回転ナデ・ハ ラケズリ、底:糸切	回転ナデ	
HH1	29	20	28	八反	コヨウ区SD04	平安	粘土帯	碗	全	ナデ	ミガキ	
HH2	29	12	27	八反	コヨウ2区SD 02	弥生後期～古墳 初頭	三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
HH2	29	12	28	八反	コヨウ2区SD 02	弥生後期～古墳 初頭	楽浪系	壺	胴部	回転ナデ	回転ナデ	
HH3	31	20	103	八反	コヨウ4区SD 05上層	弥生中期～古墳 初頭	粘土帯	甕	口縁部	ナデ・ミガキ	ナデ	
HH3	31	20	104	八反	コヨウ4区SD 05上層	弥生中期～古墳 初頭	粘土帯	長頸壺	胴部・底 部	ナデ	ナデ	
HH3	31	20	105	八反	コヨウ4区SD 05上層	弥生中期～古墳 初頭	粘土帯	碗	全	ナデ	ナデ	
HH3	31	20	106	八反	コヨウ4区SD 05中層	弥生中期～古墳 初頭	楽浪系		胴部	回転ナデ	回転ナデ	
HH3	31	20	107	八反	コヨウ4区SD 05中層	弥生中期～古墳 初頭	三韓系		全	口:ナデ、胴上:平行 →沈線、胴下:格子	ナデ	耳附
HH3	31	20	108・ 109	八反	コヨウ4区SD 05上層	弥生中期～古墳 初頭	三韓系		胴部	格子	ナデ	
HH3	31	20	110	八反	コヨウ4区SD 05上層	弥生中期～古墳 初頭	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
HH3	31	20	111	八反	コヨウ4区SD 05上層	弥生中期～古墳 初頭	楽浪系		胴部	縄(原体S撚)	当て具痕	
HH3	31	20	112	八反	コヨウ4区SD 05上層	弥生中期～古墳 前期	陶質	長頸壺	口縁部・ 胴部	回転ナデ	回転ナデ	
HH3	34	22	134	八反	コヨウ4区SD 06上層	弥生中期～古墳 前期	粘土帯	甕	口縁部	ナデ	ナデ	
HH3	34	22	135	八反	コヨウ4区SD 06上層	弥生中期～古墳 前期	粘土帯		把手	指押さえ・ナデ	剥離	
HH3	34	22	136	八反	コヨウ4区SD 06上層	弥生中期～古墳 前期	三韓系		胴部	格子	ナデ	
HH3	34	22	137	八反	コヨウ4区SD 06上層	弥生中期～古墳 前期	三韓系		胴部	平行→沈線	ナデ	
HH3	34	22	138	八反	コヨウ4区SD 06下層	弥生中期～古墳 前期	楽浪系		口縁部・ 胴部			
HH3	35	23	147	八反	コヨウ4区SD 08上層	弥生中期～古墳	陶質		耳	耳・ミガキ、胴・ ナデ	ナデ	
HH3	35	23	149	八反	コヨウ4区4b 層		粘土帯		把手	ナデ	ナデ	
HH3	35	23	150	八反	コヨウ4区4b 層		粘土帯		底部	ナデ	ナデ	
HH3	35	23	151	八反	コヨウ4区4a 層		陶質	壺	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
HH3	35	23	152	八反	コヨウ4区5層		楽浪系	鉢	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	
HH3	35	23	153	八反	コヨウ4区5層		楽浪系	鉢	底部	底:糸切、胴:回 転ナデ・ケズリ	回転ナデ	
HH3	35	23	154	八反	コヨウ4区4a 層・5層		楽浪系		底部	ケズリ	回転ナデ	
HH3	35	23	155	八反	コヨウ4区4a 層・5層		三韓系		頸部	頸・ナデ、胴・縄 (原体Z撚)→沈線	ナデ	
HH3	35	23	156	八反	コヨウ4区4b 層		三韓系		肩部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
HH3	35	23	157	八反	コヨウ4区4b 層		三韓系		胴部	縄(原体Z撚)→ 沈線	ナデ	
HH3	35	23	158	八反	コヨウ4区4a 層		三韓系		肩部	縄(原体Z撚)	ナデ	
HH3	35	23	159	八反	コヨウ4区3b 層		陶質		耳	縄(原体Z撚)	ナデ	

表7 原の辻遺跡大陸・半島系土器出土現況

	粘土帯	擬粘土帯	楽浪系	擬楽浪系	三韓系	列島産 格子タタキ	陶質	不明	計
安国寺前A	1		2		3		1		7
閨繰									0
川原畑		2							2
不條	114	48	22	1	23		26		234
八反	32	11	158		150	5	34	6	396
鐘ノ池	2				2				4
芦辺高原	3	1	6		11				21
石田高原	16	4	76	1	146		24	2	269
高元	8		67		83		21	3	182
原	6	3	17		39		4	12	81
石田大原	1		14		8	1	2		26
柏田									0
大川							1		1
原ノ久保									0
池田大原									0
萱ノ木									0
不明	2		6		9		1	2	20
計	185	69	368	2	474	6	114	25	1243

今後の課題として、再整理を実施し、新たな統計表を提示したい。

結果としては、原の辻遺跡では1200点を越える大陸・半島系土器が出土していることがわかった。弥生時代の一遺跡では日本列島で最も多量に大陸・半島系土器が出土している。併行する時期が長い楽浪系土器と三韓系土器の比率をみると約1 : 1.29で、三韓系土器が多いものの、楽浪系土器の比率も相対的に高いのが特徴である。

地区別にみると、大陸・半島系土器は丘陵部と隣接する低地部及び北西低地部の不條地区で多くみられ、丘陵より南側や河川跡よりも北側ではあまり出土しない。特に、河川跡よりも北側の川原畑地区では、近年調査事例が増加しており、弥生時代中期後半を中心とする土坑・ピット群多数と竪穴建物跡が検出されているにもかかわらず、大陸・半島系土器がほとんどみられない。このため、調査事例数に起因する出土数の少なさではなく、実態として、川原畑地区に大陸・半島系土器が出土することが少ないという状況を想定することができる。

従来から指摘されてきたとおり、粘土帯土器および擬粘土帯土器は北西低地部の不條地区で多く出土していることが確認される。また、不條地区の南に位置する西側低地部の八反地区でも比較的多く、粘土帯土器・擬粘土帯土器がみられる。これに対して、丘陵部の高元地区や原地区等では粘土帯土器・擬粘土帯土器の出土は少ない。

一方、これとは対照的に、楽浪系土器、三韓系土器、陶質土器は不條地区ではその出土比率が低下し、丘陵部や隣接する低地部での出土頻度が高くなる。西側低地部の八反地区では楽浪土器と三韓系土器の双方が多く出土しているが、その比率は約1.05 : 1程度である。一方、東側低地部の石田高原地区では、楽浪系土器と三韓系土器の比率が約1 : 1.92程度と三韓系土器が多く出土する状況を見ることが出来る。また、丘陵部の高元地区では約1 : 1.24、原地区では1 : 2.29と三韓系土器が量的に上回る状況を見せる。このようにみた場合、八反地区では三韓系土器も多く出土するものの、やはり楽浪系土器の比率が目立つものとみることが出来る。但し、楽浪系土器と三韓系土器の集中状況は、不條地区における粘土帯土器等の集中度ほど高くはなく、丘陵と西側低地及び東側低地に広く分布するという状況となる。

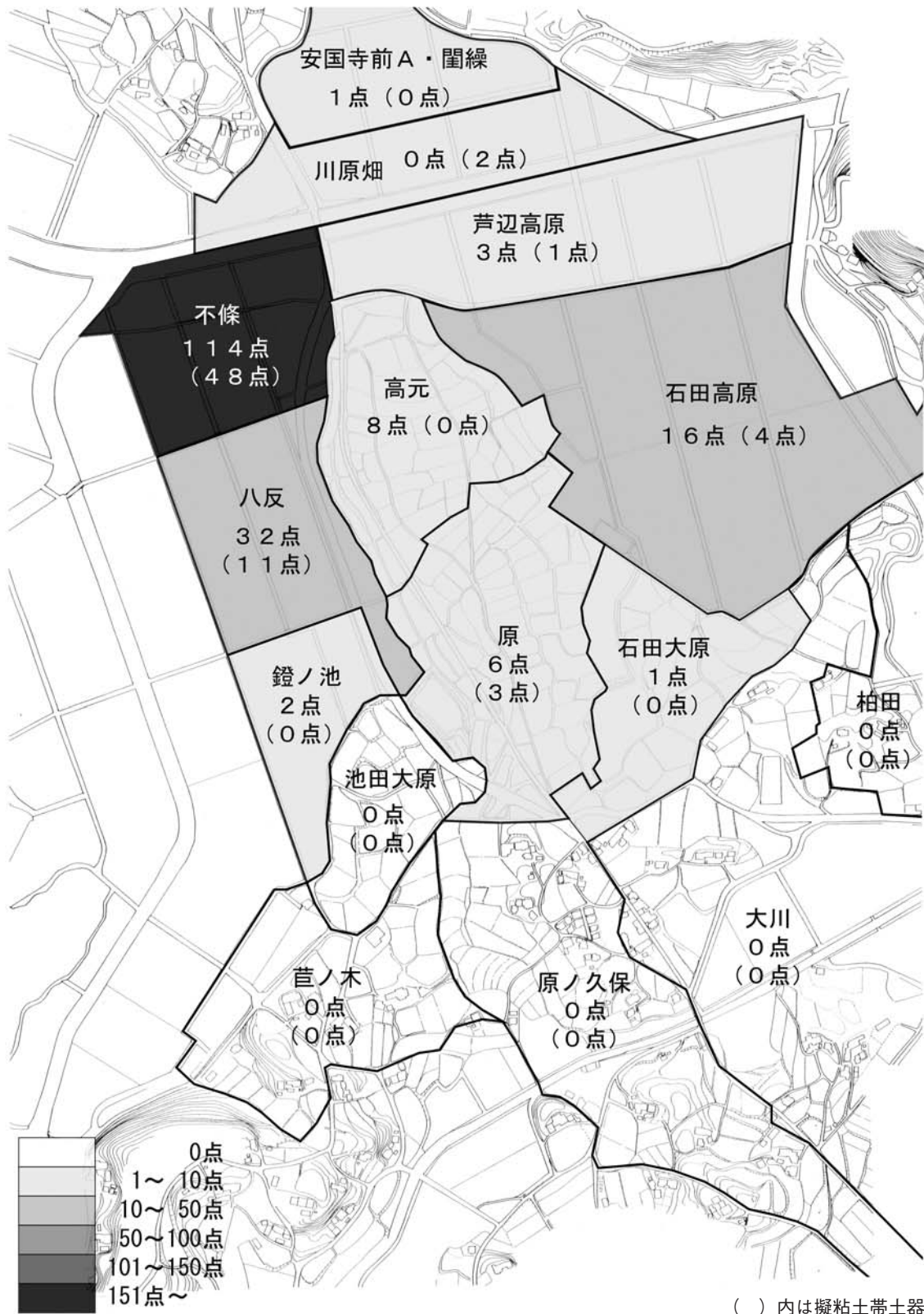


図73 粘土帯土器・擬粘土帯土器の分布

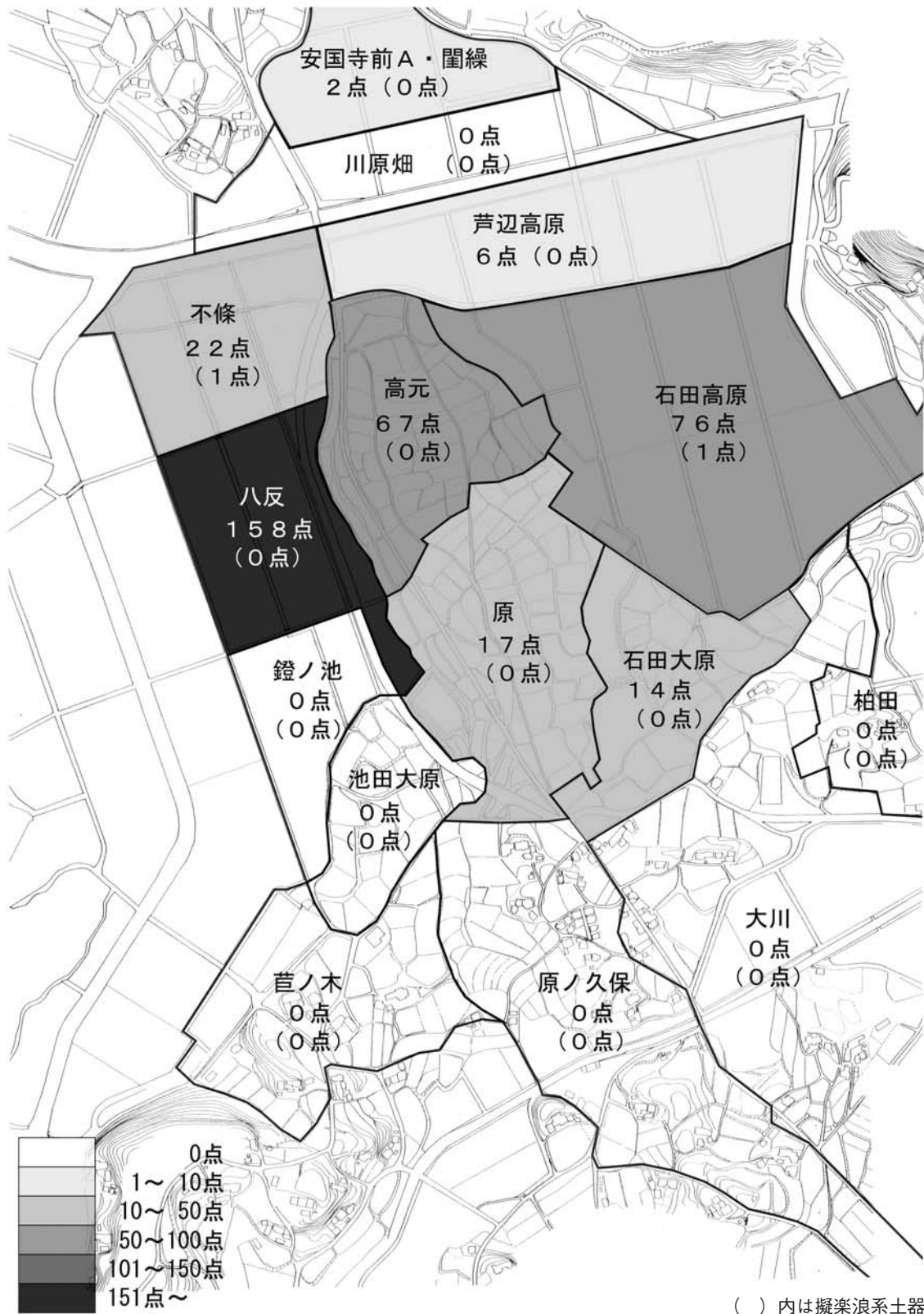
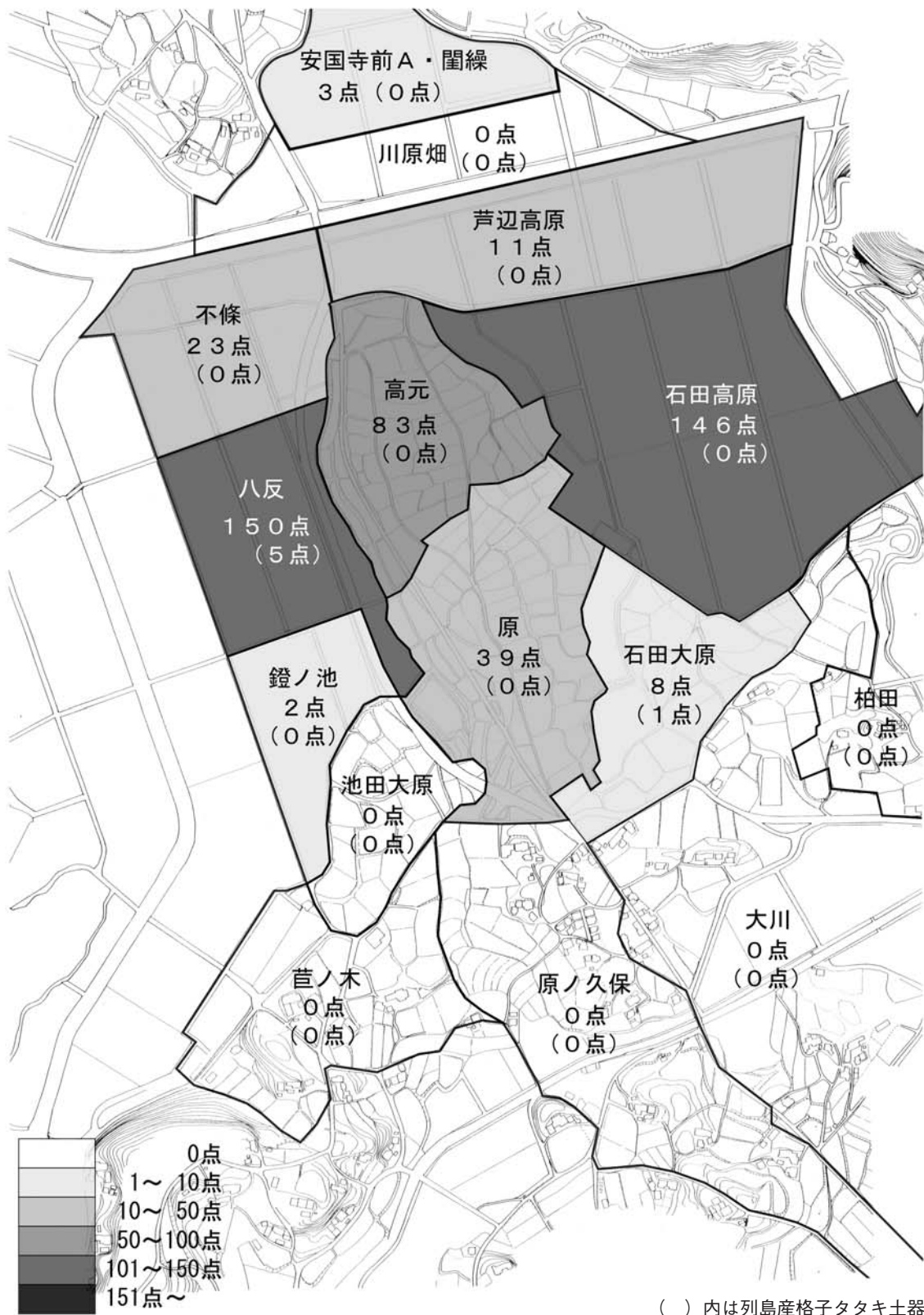


図74 楽浪系土器・擬楽浪系土器の分布



() 内は列島産格子タタキ土器

図75 三韓系土器・列島産格子タタキ土器の分布

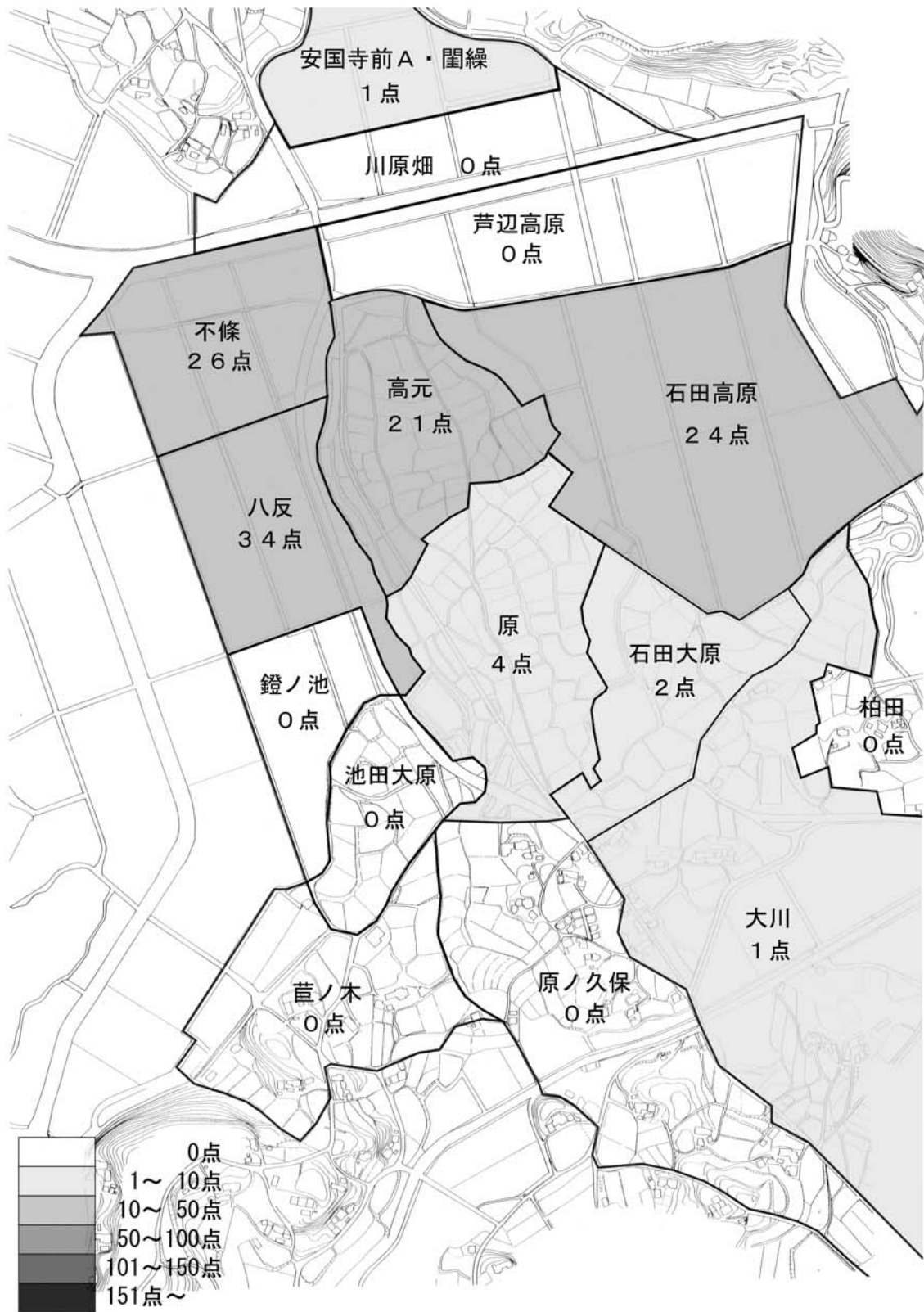


図76 陶質土器の分布

(4) 出土遺構

大陸・半島系土器がどのような遺構から出土することが多いのか検討する。粘土帯土器及び擬粘土帯土器は圧倒的に不條地区を中心に河川跡から出土する事例が多い。特に河川跡等に形成された土器溜から出土する事例も注目される。また、濠や溝から出土する例も多い。八反地区では土坑から出土する例も知られる。完形に近い状態で土坑から出土するものは本来土坑に伴うものであるとみることができる。竪穴建物跡から出土する事例もあるが、多くは破片で混入である可能性が高い。

楽浪系土器と三韓系土器、陶質土器も同様に河川跡、濠、溝から出土する事例が圧倒的に多い。土坑から出土する事例も認められる。竪穴建物跡から出土する事例もみられるが、多くは破片で埋没過程における混在である可能性もある。

一方、粘土帯土器、楽浪系土器、三韓系土器、陶質土器を含めて全ての大陸・半島系土器は墓地で出土した事例がほとんどない。

(5) 共伴関係・併行関係

先述のとおり、大陸・半島系土器は河川跡、濠、溝から出土する例が圧倒的に多く、それらの遺構等では非常に時期幅が長い遺物群が出土するため、多くは弥生土器との共伴関係を求めることができない現状である。しかしながら一部の資料は比較的時期が限定された弥生土器との良好な共伴関係を示す。

1) 粘土帯土器・擬粘土帯土器

① 粘土帯土器

円形粘土帯土器 (NH37p15f14-61, 62) が板付Ⅱ b 式～城ノ越式に伴って不明土坑 (住居跡?) SX 2 で出土している (写真30、図77- 1～4)。円形粘土帯土器 (NH16p61f48-11, 12) は5号溝から出土しているが、同遺構からは板付Ⅱ b 式～城ノ越式が出土している。円形粘土帯土器 (NH21p41f27-14) が板付Ⅱ b 式～城ノ越式に伴ってB区2号溝から出土している。円形粘土帯土器 (NM 6 p46f22-271, 273, 275) がI-7区1号溝2層で板付Ⅱ b 式～城ノ越式と共伴している。粘土帯土器期の組合式牛角形把手附長胴壺 (NH16p60f47-6) が城ノ越式から須玖Ⅰ式土器古段階の土器に伴ってE区16号土坑から出土している (図77- 5～7)。把手 (NM6p42f18-201) がB区2号土坑から城ノ越～須玖Ⅰ式とともに出土している。口縁が面取りされた粘土帯土器 (NM6p43f19-212) がA区1号土坑で須玖Ⅰ式古段階土器と共伴している (図77- 8～10)。三角形粘土帯土器がD区7号土坑で須玖Ⅰ式古段階土器と共伴している。三角形 (ソラマメ形) 粘土帯甕 (NH19p73f49-8) が須玖Ⅰ式古段階の土器とともにB区6号土坑で出土している (図77-11, 12)。三角形粘土帯土器 (NH28p84f56-28) が弥生時代中期後葉～後期初頭の土坑SK3で出土している (図77-13～16)。

以上のとおり粘土帯土器については土坑や溝内の単純層からの一括事例に比較的恵まれ、円形粘土帯土器は板付Ⅱ b 式～城ノ越式、三角形粘土帯土器は須玖Ⅰ式を中心とする時期にみられることとなる。NH28p84f56-28例の土坑での共伴が確実であれば、須玖Ⅱ式併行期の三角形粘土帯土器ということになるが、破片であるため確実ではない。なお、粘土帯土器自体の遺存状態はよい。

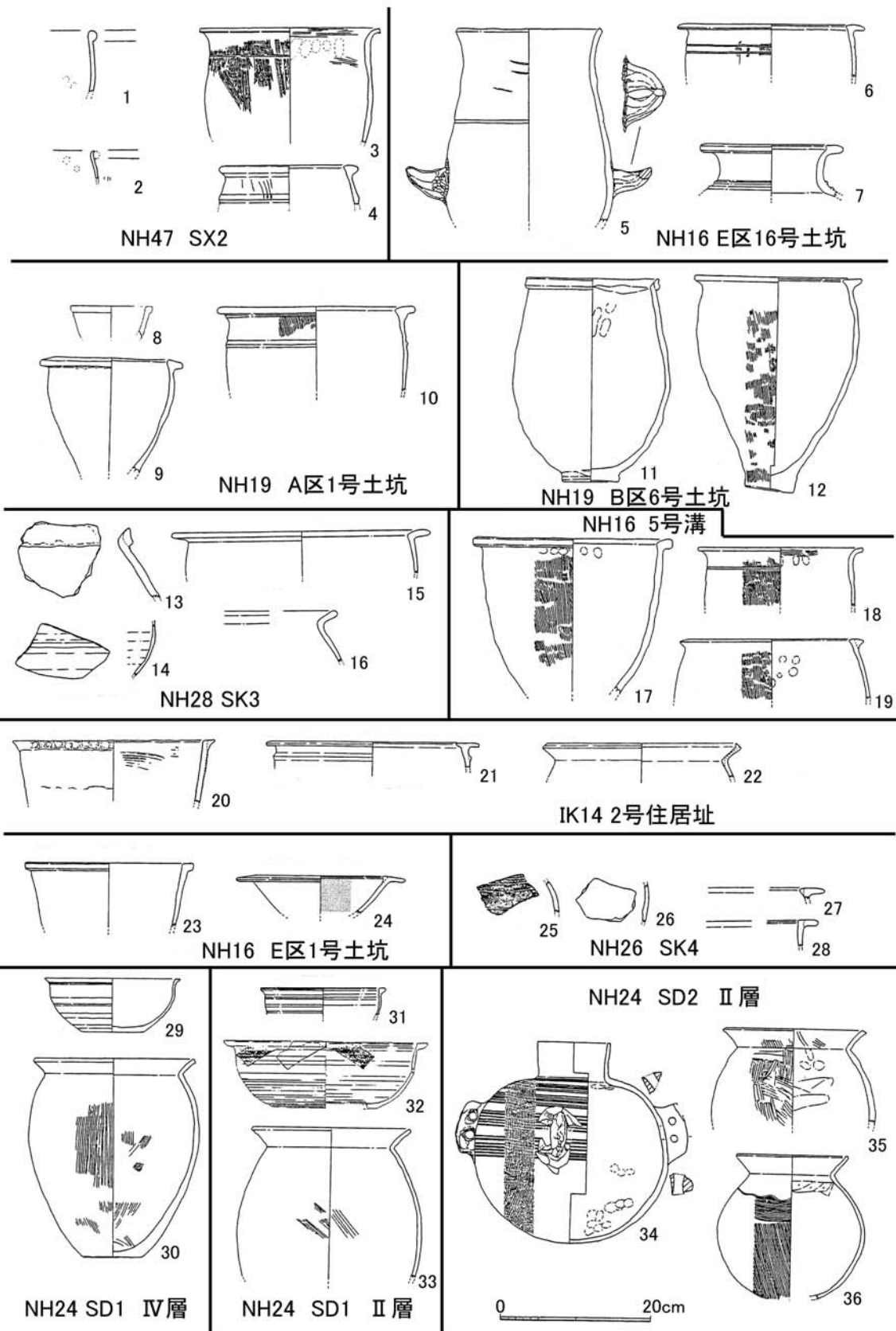


図77 共伴関係資料①

② 擬粘土帯土器

擬粘土帯土器（NH16p54f42-12）が弥生時代前期末・中期初頭の土器とともに5号溝から出土している（図77-17～19）。擬粘土帯土器（NH19p68f45-16）が須玖Ⅰ式古段階の資料とともにA区1号土坑から出土している（図77-8～10）。弥生時代中期後葉の2号住居址で擬粘土帯土器（IK14p90f34-161）が出土した（図77-20～22）。1号旧河道跡土器溜で弥生時代中期後半～後期初頭の土器とともに擬粘土帯土器（NH9p2f1-5, p4f3-5, 26～30, 43）が出土している。

以上から、擬粘土帯土器は搬入品がみられる弥生時代前期末から製作されたことがわかるが、その下限を示すのは、IK14p90f34-161例である。本例は比較的大きな破片であり、出土住居跡からは須玖Ⅱ式以前の土器がみられないことから比較的确实な共伴事例と捉えたい。併行関係上、瓦質土器が出現し、粘土帯土器が減少する時期である須玖Ⅱ式段階においても依然、粘土帯土器の影響を受けた土器が製作され続けるという状況を示すものと考えられる。須玖Ⅱ式土器に粘土帯土器製作の流儀が残存した例といえるかもしれない。

2) 楽浪系土器

① 滑石混和土器

滑石混和花盆形土器（NH16p59f46-59）が須玖Ⅱ式とともにE区1号土坑から出土している（図77-23, 24）。滑石混和土器底部（本稿436）が4号溝で出土したが、この溝では須玖Ⅱ式甕口縁部片が1点出土している。以上から滑石混和土器は既に弥生時代中期後葉段階にはみられるものと考えられる。

② 泥質土器

楽浪土器肩部片と無文破片（NH26p76f48-2, 6）は土坑SK4で須玖Ⅱ式とともに出土している（図77-25～28）。ほぼ完形の鉢（NH24p26f17-61）は溝SD1の覆土下層であるⅣ層で出土しているが、この層では弥生時代後期前半～後半の土器が出土する（図77-29, 30）。その上層にあたるSD1のⅡ層では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭を主体とする土器とともに鉢（NH24p23f14-41, 42・43, 本稿136～138）が出土している（図77-31～33）。短頸壺片（IK10p119f56-16）と鉢片（IK10p119f56-18, 19）弥生時代後期中葉の1号住居址で出土した。広口壺口縁部（NH25p30f21-1）がSD6で出土しているが、この溝では弥生時代後期中葉～後葉の土器が出土している。

鉢底部（NH26p30f20-19）がD区落ち込みで出土しているが堆積土からは1点の須玖Ⅱ式土器を除外して多量の布留式土器が出土している。鉢口縁部片（本稿191）が古墳時代初頭の住居跡SB2で出土している。短頸壺口縁部片（NH26p135f80-96）が古墳時代前期の落ち込みで出土している。楽浪土器底部片（NH11p182f94-10）が柳田康雄（1991）編年土師器Ⅱa式期の1号住居跡から出土しているが、破片であるため共伴関係に不安がある。楽浪土器壺片（NH11p182f94-11）も同様に柳田編年土師器Ⅱa式期の5号住居跡から出土しているが、破片であるため共伴関係に不安が残る。鉢底部片（NH28p79f51-21）が古墳時代前期の住居跡SC8で出土しているが、この住居跡は弥生時代中期の土坑を切っているため、共伴関係に不安がある。壺胴部片（NH28p84f56-29）が弥生時代中期後葉～後期初頭の土坑SK3で出土しているが、検出面での出土でSK3を切る古墳時代初頭の住居跡SC3に帰属する可能性が指摘されている。

以上のとおり、破片資料を積極的に解釈した場合は弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけて楽浪系土器が伴うということになるが、完形資料が時期的に限定される出土遺構は少なく、共伴関係には不確実な部分がある。泥質筒坏を模倣した土器（本稿119）が弥生時代前期末～中期末の河川から出土しており、中期までにモデルとなる泥質筒坏が搬入された可能性はある。ほぼ完形の鉢である NH24p26f17-61例は弥生時代後期前半～後半に併行することが窺える例である。この鉢の口縁部はL字状に外側に突出する（図77-29）。これとは異なり、外側に突出する口縁ではあるが、やや厚みを帯び、内側に若干突出部を持つ口縁部形態の鉢が、その上層（弥生時代後期後葉～古墳時代初頭）で出土しており（NH24p23f14-41, 42・43, 本稿137）（図77-31, 32）、楽浪系鉢の時期的変遷を追える可能性がある。

3) 三韓系土器・列島産格子タタキ土器

① 三韓系土器

格子タタキ胴部片（NH27p79f55-14）が溝 SD 7 で弥生時代後期初頭・中葉の土器とともに出土している。縄タタキ胴部片（本稿288）が弥生時代中期後葉の土坑 SK 9 で出土しているが、小片であり共伴関係は不明確である。格子タタキ胴部片（IK10p119f56-15, 17）が弥生時代後期中葉の1号住居址で出土した。ほぼ完形の三耳附短頸壺（NH24p49f33-85）がSD 2の2層で出土しているが、この層では弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器が出土している（図77-34～36）。耳附短頸壺（NH27p78f54-3）が弥生時代終末期～古墳時代前期の土器とともに溝 SD 2 から出土している。この溝からは陶質土器も出土しており、ある程度時期幅があるものとみられる。馬韓系二重口縁壺部など三韓系瓦質土器（NH27p78f54-10, 5, 本稿230～233）が弥生時代終末期～古墳時代前期の土器とともに溝 SD 3 から出土している。この溝からも陶質土器が出土しており、ある程度時期幅があるものとみられる。耳部及び格子タタキの胴部片（NH26p30f20-20, 21）がD区落ち込みで出土しているが堆積土からは1点の須玖Ⅱ式土器を除外して多量の布留式土器が出土している。格子タタキ胴部片（NH26p135f80-97, 99, 100）が古墳時代前期の落ち込みで出土している。縄タタキ肩部（本稿190）が古墳時代初頭の1号住居址で出土しているが、小片であり共伴関係は不明確である。方格タタキ胴部片（本稿287）が古墳時代前期の住居址 SC 8 で出土しているが、小片であり共伴関係は不明確である。

以上のとおり堅穴建物跡や土坑などで三韓系土器が出土しても小片が多く、共伴関係を追うことが難しい。小片を積極的に解した場合、原の辻遺跡では弥生時代後期初頭・中葉から古墳時代前期にかけてみられるということになる。そのような状況下、完形やそれに近い形態の事例としてNH24p49f33-85例やNH27p78f54-3例が挙げられ、これらは弥生時代終末期～古墳時代初頭・前期に該当する溝内の層から出土しており、三韓系土器の併行関係上の定点となる。中期までさかのぼる確実な例はこれまでのところ存在しないようである。原の辻遺跡で出土した瓦質土器の多くは後期瓦質土器に該当し、前期瓦質土器がそれほど目立たないことと関連する可能性もある。

② 列島産格子タタキ土器

格子タタキのある支脚（本稿228, 236）が弥生時代終末期～古墳時代前期の溝 SD 3 から出土しており、時期が比較的限定される。

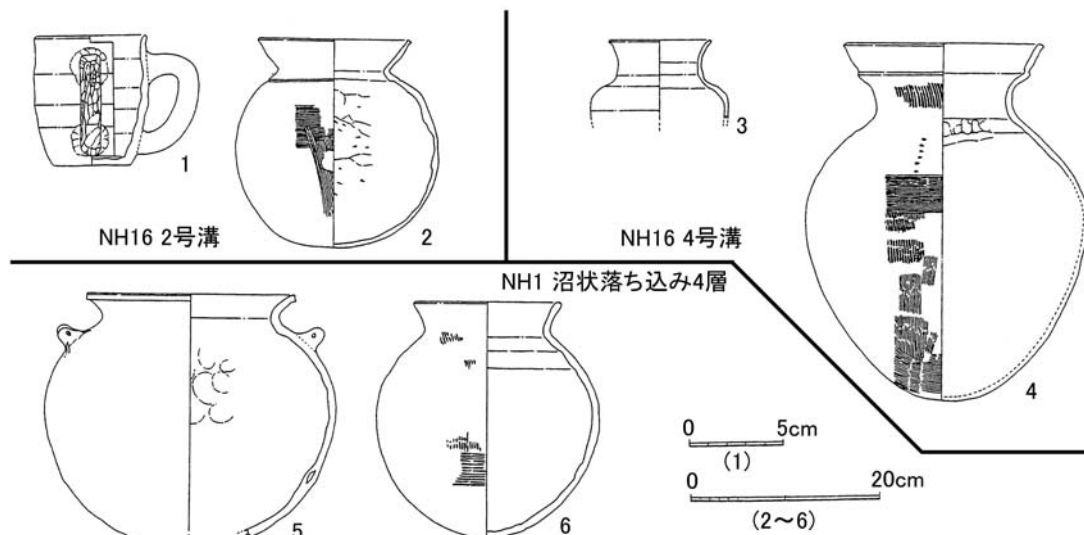


図78 共伴関係資料②

4) 陶質土器

壺口縁部など (NH27p78f54-1, 2) が弥生時代終末期～古墳時代前期の土器とともに溝 SD 2 から出土している。この溝からは三韓系瓦質土器も出土しており、ある程度時期幅があるものとみられる。陶質土器片 (本稿225, 229, 234, 235) が弥生時代終末期～古墳時代前期の土器とともに溝 SD 3 から出土している。この溝からも三韓系瓦質土器が出土しており、ある程度時期幅があるものとみられる。陶質土器片 (NH11p254f134-3) が柳田編年土師器Ⅱ b 式段階の1号住居址から出土している。ジョッキ形土器 (NH16p47f37-44) は2号溝出土であるが、ここでは柳田編年Ⅱ b～Ⅱ c 式の土器がまとめて出土しており良好な共伴関係を示すものと思われる (図78-1, 2)。また、長頸壺 (NH16p49f38-10) は同様に柳田編年Ⅱ b～Ⅱ c 式の土器がまとめて出土している4号溝から出土している (図78-3, 4)。陶質土器片 (NH18p139f82-3~6) は2号溝Ⅱ層・Ⅰ層で出土しているが、この層では弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が出土している。平行タタキ胴部片が古墳時代前期の溝 SD 1 上層①層で出土している。耳附短頸壺 (NH1p133f10-30) が沼状落ち込み4層で出土しているが、この層では柳田編年土師器Ⅱ c 式段階に相当し、4世紀中頃の年代が与えられる (図78-5, 6)。

陶質土器は遺存状況のよい共伴事例に比較的恵まれている。基本的に古墳時代初頭・前期に併行するものようである。弥生時代終末期土器と共伴する可能性もないことはないが、おおむねそのような層位では古墳時代前期土器も出土しているので、確実な弥生時代後期併行例というのはこれまでのところ確認されていない。NH1p133f10-30は原の辻遺跡でも最も遅い段階の共伴事例の一例となるが、出土地点は安国寺前 A 地点であり、原の辻遺跡の中心集落とは距離がある。

(6) 器種

粘土帯土器では甕、牛角式把手附長胴壺、高坏、蓋、小型土器などがみられる。粘土帯土器では甕・鉢が多いが、牛角把手附壺も一定量あり、器種が比較的よく揃っている。

楽浪系土器では滑石混和土器では花盆形土器、中型鉢、泥質土器では短頸壺、小型壺、鉢、筒坏、

蓋などがみられる。短頸壺が多いが、鉢が相当数みられ、筒杯や小型壺も一定量みられる。

三韓系土器では短頸壺、両耳附短頸壺、三耳附短頸壺、長頸壺などがみられる。三耳附短頸壺の類例は瓦質土器では、良洞里280号墓（林孝澤・郭東哲 2000）で出土しているが、両耳の形態はやや異なる。時期の下る陶質土器で同様の形態の土器は于巨里土器生産遺蹟（李政根 2007）等で出土している。爐形土器と報告された資料（NH19p75f151-18）もあるが、この資料は屈曲部（胴部最大径）に暗文により格子文が施文される。韓半島南部の爐形土器では肩部に格子文が施文される例が多いようであるが、これとは施文部位が異なることが注意される。三韓系土器では圧倒的に短頸壺をはじめとする壺が圧倒的に多く、そのほかの器種は少ない。

陶質土器では短頸壺、長頸壺、台附鉢、ジョッキ形土器などがみられる。陶質土器でも壺類が多い傾向は同じである。

このように粘土帯土器から三韓系瓦質土器に移行するにつれ器種に偏りがでて、セットをなさないようになるという現象について、宮崎貴夫は甕のような煮沸具を無文土器使用者が携えていたことは台地北西部で一定期間滞在し、自炊生活をしていた一方、瓦質土器や陶質土器使用者は運搬具の壺を中心に持ってきていることから弥生時代後期に入ると丘陵部や丘陵周辺部で交易従事者や使節らに対して食事等を提供して賄っていた可能性を指摘している（宮崎 2000, 2005, 2008）。原の辻遺跡の楽浪土器については川上洋一は内容物の運搬に使用可能な器種のうち複数の器種が出土する類型として設定しており、半島から列島へのルート上にある遺跡や外港的性格も考えられるとしている（川上 1995）。また、武末純一は煮炊き用の滑石混入花盆形土器からみて楽浪人の滞在を想定している（武末 2004b）。

(7) 特徴的な産地

1) 遼東系土器

近年注目されている資料として遼東系と考えられている資料がある。図79は胴上半部は回転ナデで仕上げられ、浅く2～3条を単位とする沈線が2段施されており、胴中下部には、縄目タタキをナデ消して、縄（原体S燃）の圧痕が1～2条施される。原報告書では「縄をめぐらしたような沈線」と表現されているが、縄目の粒に撚りが観察されるので、縄そのものを押しつけたものと判断される。胴下半部は横位の縄目タタキ（原体S燃）を施される。他の楽浪系土器と比較してやや器壁が厚く異なる特徴を持つ。この土器について鄭仁盛が遼東系土器であることを指摘した（鄭仁盛 2003）。また、寺井誠は本資料の類例は山東省の西漢～王莽新代の墓葬から出土することを指摘している（寺井 2007）。

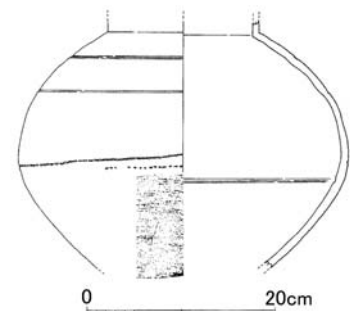


図79 原の辻遺跡出土遼東系土器

2) 馬韓系土器

三韓系瓦質土器・陶質土器の中には馬韓地域の土器と考えられる土器がある。その一つに肩部に鋸歯文がめぐる土器があり（金承玉 1997）、原の辻遺跡ではこれまでのところ NH27p78f54-10、NH30

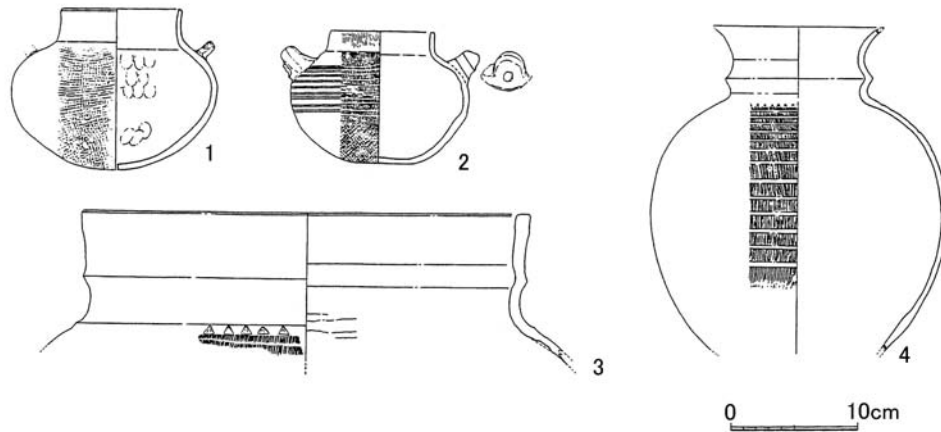


図80 原の辻遺跡出土馬韓系土器

p130f65-7、本稿145、438の4点が知られている。このうちNH27p78f54-10、NH30p130f65-7は二重口縁である(図80-3, 4)。NH30p130f65-7は焼成が硬質で、古墳時代初頭の土器に伴い出土している。これに対して本稿145は灰白色を呈し、瓦質で少し時期が遡るのではないかとみられる。

また、縦穿孔の耳を持つ短頸壺も馬韓系土器であるとみられ(金鍾萬 1999)、原の辻遺跡ではNH27p78f54-3、HH3p31f20-107などが知られる(図80-1, 2)。

(8) 模倣土器

1) 擬粘土帯土器

片岡宏二は擬化の進行度合によって1～3類に分類した。1類は韓半島からの搬入品か無文土器を製作しなれた工人によって製作されたもの、2類はプライマリーな無文土器から弥生土器の影響を受けて擬化が始まった段階、3類は擬化が更に進んだものである。原の辻遺跡では円形粘土帯土器(片岡のI類)段階でも三角形粘土帯土器(片岡のII類)段階でもともに1～3類が出土している(図2, 3)。そして、原の辻遺跡出土の擬粘土帯土器の中には韓半島南部でも「弥生系土器」等として報告される資料に類似するものがみられるという。NH9p2f1-5、NH9p4f3-26、NH9p4f3-28、NH9p22f18-33、NH9p30f25-62などの擬粘土帯土器について、福泉洞菜城遺蹟(宋桂鉉・河仁秀 1990)や大成洞焼成遺蹟(李尚律・李昶燁・金一圭 1998)で出土した「弥生系土器」と呼ばれる土器の中に非常

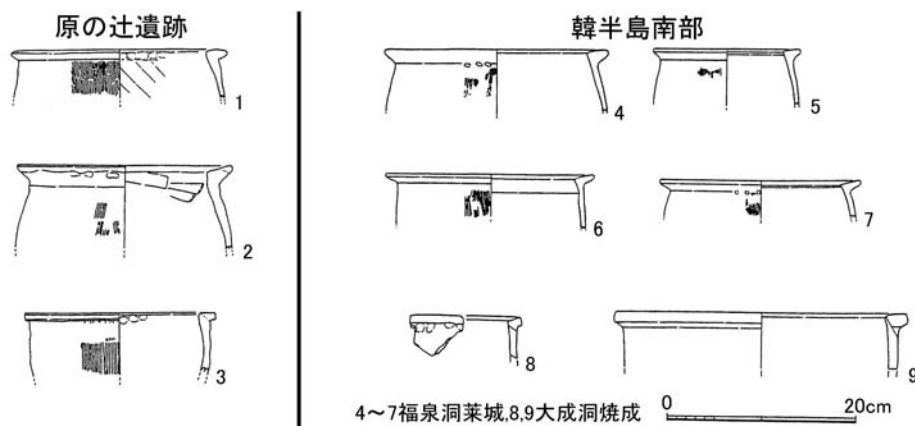


図81 片岡宏二が指摘した原の辻遺跡・韓半島南部の類似事例

に類似する資料があると(図81)、一つの共通した土器製作技術に基づく概括化可能な土器様相を呈していると述べている(片岡 2001)。

このような資料は今次の再整理資

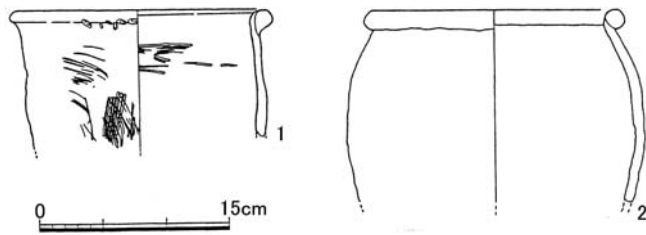


図82 興洞遺蹟 1号住居址出土土器

肥厚した外反口縁で、外反部分には指押さえ痕が顕著に残る資料（図82-1）が円形粘土帯土器（図82-2）とともに1号住居址北東側の竪穴で並んで出土した。片岡が例示した資料は三角形粘土帯土器時期のものと考えられる資料であったが、円形粘土帯土器時期にも日韓両沿岸部で同様の模倣土器が存在することが明らかとなった。

さて、このような彼我の土器を模倣した土器を日本では「擬朝鮮系無文土器」（本稿では「擬粘土帯土器」と呼び、韓国では「弥生系土器」と呼ばれることが多い。調査・報告者がこのように純正の弥生土器や粘土帯土器と区分するにはいくつかの要素がある。これを整理すると表8のとおりである。まず、該期の粘土帯土器と弥生土器では口縁の形態が異なる。また、全ての事例ではないが、粘土帯土器では口縁がいびつで上面観が真円をなさない事例も少なくない。一方、弥生土器の口縁部は直線的で、上面観が真円に近いものが多い。これは、粘土帯土器では粗雑なナデ、指押さえが顕著であること、弥生土器では口縁部に強いヨコナデを施すことといった製作技法と大きく関係している。土器の外見的形態に影響を及ぼすものではないが、粘土帯土器では弥生土器に比べて、剥離が甚だしいのが一般的である。粘土紐の積み上げや貼り付けといった製作技法に関係している。粘土帯土器では粘土帯部分に重なる部分まで、ハケメ調整がなされるものがしばしばみられる。このような土器の製作方法は、まず外器面に全体的に口縁までハケメ調整を行った後に、口縁部の粘土帯を貼り付けているものとみられる。その証左として、粘土帯が剥離してしまった部分を観察するとハケメ調整が顕著に残っている事例が、例えば、靉島8号住居址IV層（釜山大学校博物館1989）出土土器（写真34）などに見受けられる。原の辻遺跡の粘土帯土器（搬入品）の中にもハケメ調整後に粘土帯を貼り付けている資料が少なくない量存在しているので、粘土帯土器では一般的な流儀であるとみられる。一方、城ノ越式・須玖I式・II式等においてはハケメが口縁直下・胴上部でヨコナデによって切られている例が多く、口縁部作出とハケメ調整の先後関係については不分明であるものの、そのヨコナデは口縁部と一体的になされる場合が多く、また、ヨコナデがなされない場合、ハケメが口縁部が外反する部分まで及ぶ事例（NH19p40f26-10）もみられることから（写真36）、ハケメ調整をした時点で既に口縁部作出自体は終了しているのが一般的であるとみられ、粘土帯土器とは異なる。以上の特性は全ての土器にあてはまるわけではないが、おおよその傾向としては認められよう。このように我々が、「向

料にも含まれている。本稿105は外面をハケメや工具による調整を残し、口縁部はやや肥厚しながら、指頭により押さえつけることで外反させている。同様の資料は興洞遺蹟（林孝澤・金東阮 2003）1号住居址でも確認される。興洞では胴部にハケメや工具による調整痕を残し、

表8 粘土帯土器・弥生土器嚮比較

	粘土帯土器		弥生土器		種別
	製作技法	外観状の特徴	製作技法	外観状の特徴	
口縁部	粘土帯貼り付け・折り返し	粘土帯	積み上げ	L字口縁(鋤先口縁)	視覚で模倣可能
口縁部側面観	粗雑なナデ・指押さえ	いびつ	強いヨコナデ	直線的	
口縁部上面観		いびつ・楕円形		真円に近い	
粘土紐接合	比較的広い粘土貼り付け	-	比較的狭い粘土紐積み上げ	-	土器製作の
調整と口縁部作出の順序	ハケメ→口縁部粘土貼付→ナデ	-	口縁部作出→ハケメ→ヨコナデ	-	流儀・癖

こう系の土器だ」と認識する要素は種々あるが、大きく2種にわけられる。一種は製作技法の差異が、土器形態に影響を及ぼし、一見して外観が異なる種類、もう一種は製作技法は異なるが、土器形態にはほとんど影響を及ぼさない種類（粘土紐接合や調整・口縁部作出順序）である。前者は視覚的に模倣が可能な表層的な要素で、後者は土器製作の流儀や癖といった基層的な要素となろう。

原の辻遺跡で出土した擬粘土帯土器の中には、例えば、本稿4のように平坦な口唇部を持ち、明らかに須玖I式を意識して製作された「擬弥生土器」としても良いような形態であるが、ハケメ調整の後、口縁部を作出し、ヨコナデを施すという、調整・口縁部作出順序は粘土帯土器と共通する土器(写真35)がある。一方で、NH 9 p31f26-78のように形態は粘土帯土器か弥生土器か俄かには判別できないが、指押さえが顕著で口縁がいびつな部分は粘土帯土器的、口縁部を貼り付けた後に最終的にハケメで仕上げる点は弥生土器的という個体もあり、一口に「擬粘土帯土器」といっても形態及び製作技法などさまざまな要素が日韓両岸で複雑に交錯した様相を呈している。

2) 擬楽浪系土器




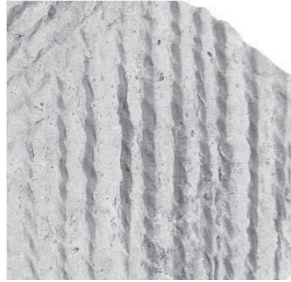
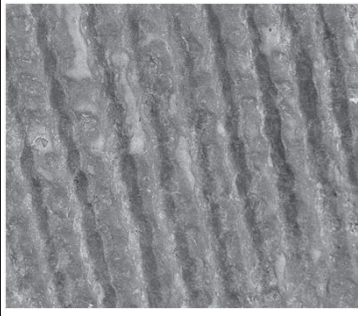
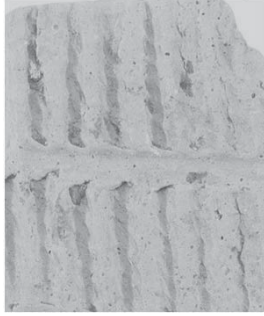
これまで原の辻遺跡で出土した土器で擬楽浪系土器とされた資料が数点存在していたが、楽浪系土器を模倣・意識したものであるか必ずしも明確ではなかった。しかし、今次の再整理で報告した119の筒坏形土器は楽浪系土器を意識したものであるとみてよいのではないだろうか。類似する擬楽浪系筒坏は門前池東方遺跡4号住居址柱穴（則武ほか 1994）などでも出土している。この資料が擬楽浪系としてみなせるならば、出土した河川跡では弥生時代前期末から中期末にいたる土器が出土しているので、中期末までに楽浪系土器が原の辻遺跡にもたらされていた可能性が高くなる。

3) 列島産格子タタキ土器

武末純一により早くから元岡遺跡の格子タタキのある器台が注目されていたが（武末 1991）、近年、元岡・桑原遺跡群（米倉編 2012など）でまとまった発見例がみられる。原の辻遺跡ではこれまで報告されたことがなかったが、今次の再整理で確認され、その器種は支脚、甕または壺などである。韓半島との交流によって原の辻遺跡で製作された可能性もあるが、このような土器は元岡遺跡群を中心とする極めて狭い範囲に分布するので、原の辻遺跡と糸島地域との関係でもたらされた可能性についても念頭に置く必要がある。

(9) 縄タタキの原体

楽浪系土器、三韓系土器、陶質土器には縄を巻きつけたタタキ具によるタタキ痕であるいわゆる縄蓆文がみられる。一部には例外があるかもしれないが、これまで観察した楽浪系土器、三韓系土器、陶質土器の縄目においてはそのほとんどが二本どりの縄の打捺によって、つけられたものようである。そこで、本再整理では、この縄原体について原体S撚と原体Z撚の2種に大きく分類して報告している。S撚の撚糸2本でZ撚の二本どりの縄、Z撚の撚糸2本で、S撚の二本どりの縄を作成することが一般的であり、実際に一部の資料には撚糸の撚りの方向がわかるものもあるが、大部分は、還元焰焼成という高温での焼成や埋没状況での磨耗によって肉眼観察できないものが多くを占めるため、本稿では最終的に完成した縄の撚りの方向のみをS撚/Z撚で記載することとした。なお、原体の撚

	原体S撚	原体Z撚
原体		
土器	 楽浪系(466)	 三韓系(552)
	 楽浪系(561)	 三韓系(377)

原体図出典：Crowfoot, G.M. 1954 *Textiles, Basketry, and Mats. A History of Technology.*

図83 縄原体と土器器面

りの方向で記載したので、土器に転写された撚りの方向は逆となる。

日本列島先史土器の縄文原体については既に山内清男による一連の研究がある。山内の原体研究は極めて精緻で重要であるが、遺憾なことに東アジア諸国でその研究内容がよく知られているとは必ずしもいえない。縄の撚りの方向については、国際的にはS撚／Z撚の区分が既によく知られており、また、タタキ技法にみられる縄原体は大部分が二本どりであるとみられることから、今後の東アジア諸国との共同研究等を見据えて、本稿では、S撚／Z撚の区分を採用することとした。

観察結果は表9、図84のとおりとなった。原の辻遺跡で出土した資料に限定すると、楽浪系土器では原体S撚の使用が多く、対照的に三韓系土器では原体Z撚の使用が多い。陶質土器になると原体Z撚の使用比率はさらに高くなる。また、これまで1点のみ確認されている遼東系土器では、胴中部に押捺される縄、胴下部にみられる縄タタキのいずれも原体S撚であり、楽浪での比率との共通性が高い。このような差異は縄の作成方法に関して地域性が存在する可能性を示唆する。

但し、注意しなければならないのは楽浪土器であれば必ず原体S撚が用いられ、三韓系・陶質土器では必ず原体Z撚が用いられるというわけではないということである。実際に筆者も韓半島南部出土三韓系瓦質土器に原体S撚が利用されている事例があることを確認している。比率としては上述の傾向がみられる可能性が高いが、時期や小地域などにより、比率が変化する可能性もある。そのような具体像を明らかにするために、今後、国外研究機関との共同研究を推進する必要があるものと考えら

表9 縄原体S燃/Z燃出土点数

	原体S燃	原体Z燃	不明
楽浪系	98	13	3
三韓系	15	147	3
陶質	2	45	
不明	3		10

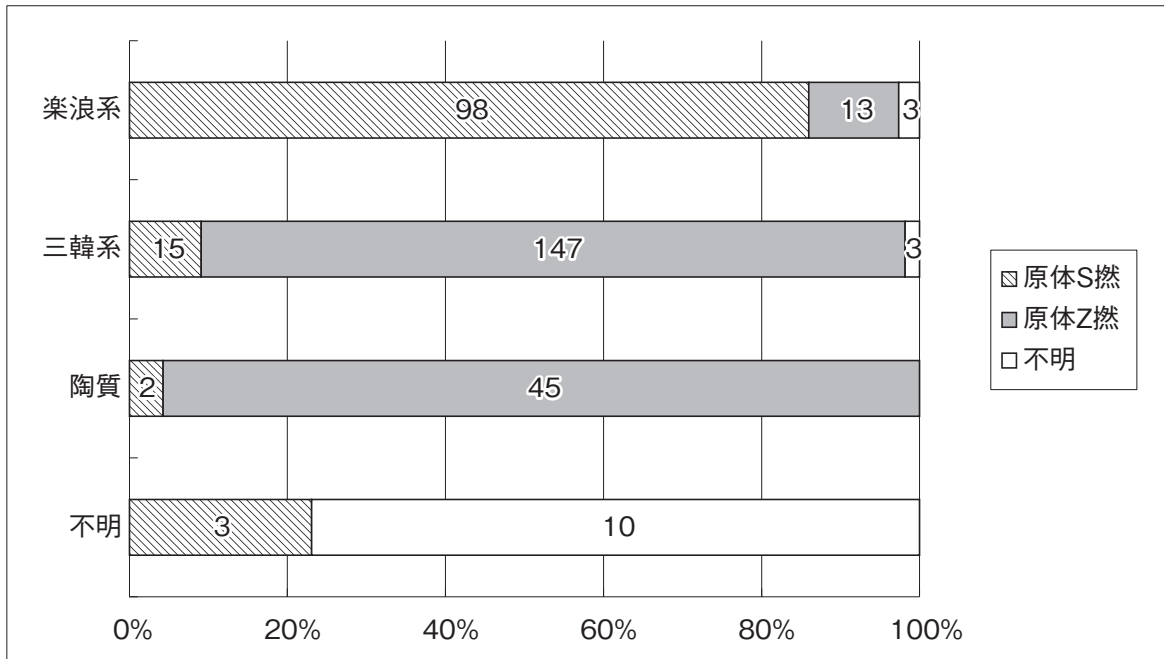


図84 縄原体S燃/Z燃出土比率

れる。

(10) 赤色塗彩瓦質土器 (カラー写真14)

大陸・半島系土器の中には、赤色塗彩された資料もある。楽浪系鉢底部 (318) には先述のとおり内面の回転ナデ後、赤色が塗彩され、その後、暗文が施されているため、暗文との重複関係から焼成前に塗彩されたものとみられる。楽浪郡や遼東郡などの漢代灰陶にはしばしば赤色塗彩された土器がみられるため、そのような土器が原の辻遺跡に搬入されたとみることができる。そして、成分分析の結果、非赤色部と対比して赤色部では、水銀が多く検出されたことから硫化水銀を主成分とする朱が用いられた可能性がある (今西報告参照)。

一方、三韓系瓦質土器に赤色塗彩された資料も存在する。確実に赤色塗彩された資料としては566が挙げられる。現状では短頸壺の頸部から胴最大径付近まで赤色塗彩されているのが確認されるが、塗彩は容易に消えるようで、平行タタキ目の隙間に僅かに赤色が残存している部分もみられ、本来の塗彩範囲の確定は困難である。赤色が塗彩された段階についてはよくわからない。そして、成分分析の結果、非赤色部と対比して赤色部では、鉄が多く検出されたことから鉄を主成分とするベンガラが用いられた可能性がある (今西報告参照)。出土遺構は環濠であり、ベンガラなどが散布される可能性のある墓地等の出土ではないので、土器廃棄・放置後に付着したと考えるのは困難である。

ところで、韓半島南部において赤色塗彩される瓦質土器の事例は不明確で、これまでほとんど報告されることがなかったことから、存在するとしても少数に留まり、一般的ではないのではないかとと思われる。また、先に述べた赤色顔料が楽浪系土器とは異なる可能性が大きいことから楽浪系土器との直接的な関係を考えるのも困難である。韓半島南部における赤色塗彩瓦質土器の存否によって、この土器の位置づけが異なる。韓半島南部に赤色塗彩瓦質土器が少数存在する場合、そのような特殊な土器が選択されて原の辻遺跡に搬入されたと位置づけられる。一方、韓半島南部において赤色塗彩瓦質土器が絶無であった場合は、考えられる可能性として、弥生土器に赤色塗彩土器が多く認められることから推察すると、運搬具等として搬入された三韓系瓦質土器が、赤色塗彩の風習を持つ弥生人の手によって赤色塗彩された後、環濠に廃棄されるという状況もありうる。この場合、弥生人による半島系土器の二次利用を示し、半島系土器に対する弥生人の考え方的一端を反映したことになり、興味深い。

- 片岡宏二1999「壹岐原の辻遺跡出土土器にみる日韓交渉」『第11回人類史研究会発表要旨』
片岡宏二2001「海峡を往来する人と土器」『山中英彦先生退職記念論文集 勾玉』
武末純一1991「福岡市元岡遺跡の器台」『交流の考古学』
寺井誠2007「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』56
則武忠直・岡秀明・塩見真康1994「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』32
古澤義久2010「壹岐における韓半島系土器の様相」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討』
宮崎貴夫2000「原の辻遺跡の朝鮮半島系土器について」『原の辻ニュースレター』5
宮崎貴夫2005「V遺物 1. 土器」『原の辻遺跡 総集編 I』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
宮崎貴夫2008「壹岐・原の辻遺跡における弥生時代の渡来集団」『考古学ジャーナル』568
柳田康雄1991「土師器の編年・九州」『古墳時代の研究6』, 雄山閣
米倉秀紀編2012『元岡・桑原遺跡群21』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集
金承玉1997「鋸齒文土器：政治的 權威의 象徴的 表象」『韓国考古学報』36
金鍾萬1999「馬韓圈域出土 兩耳附壺 小考」『考古学誌』10
釜山大学校博物館1989『勒島住居址』釜山大学校博物館遺蹟調査報告第13輯
宋桂鉉・河仁秀1990『東萊福泉洞萊城遺蹟』釜山直轄市立博物館遺蹟調査報告書第5冊
李尚律・李昶燁・金一圭1998『金海大成洞焼成遺蹟』釜慶大学校博物館遺蹟調査報告第3輯
李政根2007『咸安于巨里土器生産遺蹟』国立金海博物館学術調査報告第5冊
林孝澤・郭東哲2000『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書7
林孝澤・金東阮2003『金海興洞遺蹟』東義大学校博物館学術叢書9
鄭仁盛2003「弁韓・加耶의 对外交渉 -楽浪郡과의 交渉關係를 中心으로-」『伽耶 考古学의 새로운 照明』
趙現鐘・申相孝・李宗哲2003『光州 新昌洞 低湿地 遺蹟V』国立光州博物館学術叢書 第49冊
洪潛植・申東昭・정주희2013『東萊 温泉洞遺蹟II』釜山博物館学術研究叢書第39集

本稿をなすにあたっては、当センターと釜山博物館との友好交流協定に基づく資料調査等で羅東旭、河炳嚴、安海成、朴程郁各氏をはじめとする釜山博物館文化財調査チームの多大なご協力をいただいた。また、資料調査では国立金海博物館、釜山大学校博物館にお世話になり、釜山大学校博物館からは撮影写真の掲載をご快諾いただいた。さらに次の各氏も直接資料をご覧いただき多くのご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

金武重、宋満榮、李東冠、李永澈、李政根、鄭仁盛、洪潛植、王智遠、張翠敏、徐光輝、武末純一、寺井誠

三韓系土器と楽浪系土器に付着した赤色顔料について

原の辻遺跡で出土した三韓系土器（短頸壺）片と楽浪系土器（碗）片に、赤色顔料が付着したと思われる部分があるため、当センターの蛍光 X 線分析装置（SEA1200VX）を用いて赤色部と非赤色部を測定し、顔料の成分分析を試みた。

赤色顔料には酸化鉄を主成分とするベンガラ、硫化水銀を主成分とする朱、酸化鉛を主成分とする鉛丹が知られているため、鉄（Fe）、水銀（Hg）、鉛（Pb）が赤色部と非赤色部とで検出の違いがあるかを比較することで顔料の有無を判断した。

三韓系土器は平行タタキの隙間に残る赤色部と、土器の裏面の非赤色部を 1ヶ所ずつ、楽浪系土器は碗底部に残る赤色部と、その裏面の非赤色部を 1ヶ所ずつ分析したところ、下図の結果となった。

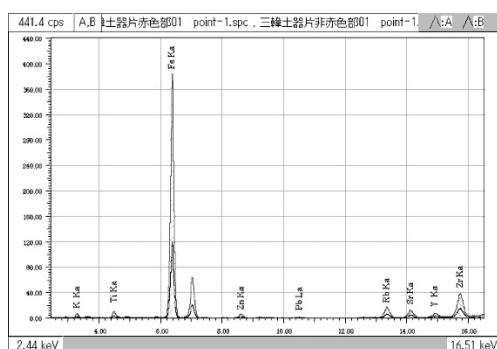


図85 三韓系土器片赤色部、非赤色部分析結果

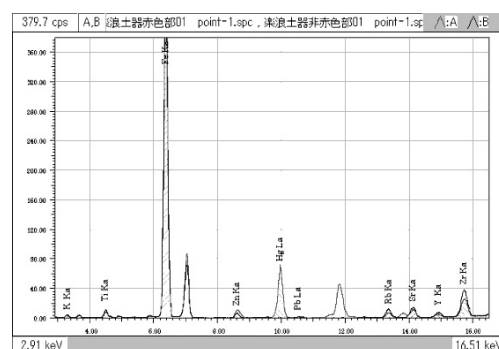


図86 楽浪系土器片赤色部、非赤色部分析結果

三韓系土器片では赤色部で鉄が多く検出され、非赤色部ではそれほど検出されなかった。また、水銀や鉛がほとんど見受けられないことから、鉄分を多く含む赤色顔料であるベンガラを用いた可能性が考えられる。

楽浪系土器は赤色部、非赤色部共に鉄が検出されたが、赤色部で検出された水銀が非赤色部ではほとんど検出しなかったため、朱を用いた可能性が考えられる。

今回は時間の都合上、資料、分析回数ともに少なく、赤色顔料にベンガラや朱を用いたとは断定できないが、今後類例品の分析や測定データの増加と共に、これら土器に用いられた赤色顔料の特定の一助になると考察される。

表10 三韓系土器分析結果
三韓系土器赤色部 (A) 非赤色部 (B)

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	B (cps)	ROI (keV)
19	K	カリウム	K α	48.465	16.720	3.19-3.44
22	Ti	チタン	K α	77.663	27.863	4.37-4.65
26	Fe	鉄	K α	2878.471	897.663	6.25-6.55
30	Zn	亜鉛	K α	59.153	23.126	8.46-8.80
37	Rb	ルビジウム	K α	187.140	68.526	13.17-13.58
38	Sr	ストロンチウム	K α	144.561	54.651	13.93-14.35
39	Y	イットリウム	K α	101.718	42.228	14.72-15.15
40	Zr	ジルコニウム	K α	486.678	191.489	15.53-15.96
82	Pb	鉛	L α	17.891	7.375	10.36-10.73

表11 楽浪系土器分析結果
楽浪系土器赤色部 (A) 非赤色部 (B)

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	B (cps)	ROI (keV)
19	K	カリウム	K α	25.175	32.010	3.19-3.44
22	Ti	チタン	K α	67.107	83.320	4.37-4.65
26	Fe	鉄	K α	3861.101	3392.584	6.25-6.55
30	Zn	亜鉛	K α	108.243	57.985	8.46-8.80
37	Rb	ルビジウム	K α	84.421	141.258	13.17-13.58
38	Sr	ストロンチウム	K α	144.802	163.744	13.93-14.35
39	Y	イットリウム	K α	67.457	99.126	14.72-15.15
40	Zr	ジルコニウム	K α	338.872	482.548	15.53-15.96
80	Hg	水銀	L α	683.656	6.890	9.80-10.16
82	Pb	鉛	L α	26.492	18.397	10.36-10.73

日本列島の楽浪系土器概観

(1) はじめに

楽浪土器とは楽浪郡が機能した時期に楽浪郡治を中心に製作され平壤市を中心に平安南道や黄海道に分布する土器や、その搬入品・忠実模倣品を指す。胎土によって泥質系（瓦質）土器、石英混入土器（白色土器）、滑石混入土器があり、日本列島では瓦質土器と滑石混入土器が出土するが、瓦質土器が多い。また、胎土が弥生土器と同一例や、つくりや形が一部異なる例は擬楽浪土器と呼び、楽浪土器と擬楽浪土器を合わせて、楽浪系土器と総称する。なお、楽浪土器の中には帯方郡でつくられた土器も含み、一括して楽浪土器と呼んでいる。

楽浪土器は粘土紐の積み上げで作るが、瓦質土器の精良な胎土、ロクロ回転での器壁の凹凸と平底の外底面に残る糸切痕跡、短頸壺・盆などの縄目タタキと内面の同心弧（平行文）や縄目の当具痕跡を目安に、弥生土器や韓半島南部の原三国時代の土器と区別される。器壁の凹凸はロクロ回転の際に、ヘラサキを使ったケズリでできるとする実験結果もある（2013-2）。

今回は、最近の研究でつかわれている時期的な枠組みに従って、弥生時代後半期～古墳時代前半のうち、中期後半（須玖Ⅱ式期）を1期、後期前半（高三瀨式期）を2期、後期後半（下大隈式期）を3期、弥生時代後期末～古墳時代初（西新式期）を4期、古墳時代前期前半を5期とする。

なお本稿は、文献2014-4（武末純一「弥生文化の展開と楽浪郡」）のうち、楽浪系土器について述べた部分をもとに書き直したことを明らかにしておく。今回は紙幅の都合で省略したが、文献2014-4では日本出土楽浪系土器に一連番号を付した表を作成した。図88から図99の楽浪系土器の番号がそれで、出土遺跡との対応関係は下記の通りである。また共伴遺物などの関連資料はカッコ付の番号で示した。

1：長崎県対馬市経隈遺跡／2・3：長崎県対馬市木坂遺跡／4：長崎県対馬市三根遺跡山辺地区／5・6：長崎県対馬市大田原ヤモト遺跡／7：長崎県対馬市瀬のさえ遺跡／8：長崎県対馬市（伝）観音鼻遺跡／9：長崎県対馬市小式崎遺跡第1号石棺／10：長崎県対馬市白蓮浦遺跡第2地点第2号石棺／11～110：長崎県壱岐市原の辻遺跡／111～121・251～253：長崎県壱岐市カラカミ遺跡／122：長崎県壱岐市戸田遺跡／123～160：福岡県糸島市三雲・井原遺跡／161～168：福岡県糸島市深江井牟田遺跡／169～180：福岡県糸島市一の町・ウスイ遺跡／181～185：福岡県糸島市御床松原遺跡／186：福岡県糸島市潤地頭給遺跡／188・189：福岡県糸島市石崎曲り田遺跡／190～191：福岡県糸島市浦志井尻遺跡／192～212：福岡市今宿五郎江・大塚遺跡／213：福岡市元岡桑原遺跡／214：福岡市博多遺跡／215～225：福岡市比恵・那珂遺跡／226：福岡市高畑遺跡／227～230：福岡市下月隈遺跡／231：福岡市雀居遺跡／232：福岡市東入部遺跡／233：福岡市コノリ遺跡／234：福岡市吉武遺跡／235：福岡県筑紫野市立明寺遺跡／236：福岡県久留米市ヘボノ木遺跡／237：福岡県宗像市ろくどん遺跡／238：福岡県筑上町十双遺跡／239：島根県鹿島町／240・241：島根県出雲市山持遺跡／242：島根県出雲市青木遺跡／243：岡山市門前池遺跡／244～246：沖縄県浦添市嘉門貝塚／247：沖縄県宜野湾市荒地原遺跡／248・249：沖縄県読谷村大久保原遺跡／250：沖縄県読谷村中川原貝塚／254：北九州市城野遺跡

(2) 研究小史と問題点

1) 研究小史

日本列島出土楽浪土器の認識と研究は、第二次世界大戦後の東亜考古学会による長崎県壱岐市原の辻遺跡の発掘から始まった。その後、1969・1970年に行われた長崎県対馬島の浅茅湾の考古学的調査では「漢式系」の名称も使われた(1974-1)が、谷豊信による楽浪土城出土土器の研究成果(1984-1, 1985-4, 1986-3)が公表された結果、楽浪土器の名称が定着した。

以後、1990年代にかけては福岡県糸島市三雲・井原遺跡番上地区での楽浪土器の大量出土(1982-1)や、日本国内の博物館での楽浪に関する特別展の開催により関心が高まった。筆者は北部九州や壱岐・対馬の出土例の整理を試み、1～2期(弥生時代中期後半から後期前半)には大型の器種が多く、3期(後期後半以降)では鉢類などの小型品が目立つと指摘した。また、楽浪土器の出土相を、1遺跡1～2点程度の対馬型、複数の器種が散漫に出土するカラカミ型(のちに原の辻型に変更)、複数の器種が一ヶ所で大量に出土する三雲番上型に分類し、対馬型はなにかを運ぶための容器や小規模な交易、あるいは間接的な流入、カラカミ型は度重なる通交や交易の結果、あるいは一時的な楽浪人の滞在、三雲番上型は楽浪人の集団的居住を示すと考えた(1991-4, 2004-4)。

その後は川上洋一、白井克也、鄭仁盛、寺井誠、長友朋子などの研究が相次ぎ、現在にいたっている。寺井誠は2000年代にも継続した原の辻遺跡での調査成果や福岡市内での楽浪土器の相次ぐ検出を受けて、日本出土の楽浪土器を集成し、これまでよりも全体的に年代を新しく捉え、盛行する時期を3期以降とした(2007-3)が、時期認定の方法に問題が残る。いっぽう鄭仁盛は、楽浪土城の土器を再検討して製作技法をさらに考究すると共に、中国の土器にまで視野を広げて、楽浪土器以外の中国系土器を摘出しており(2003-9, 2008-3)、森本幹彦は北部九州の弥生時代後期前後の外来系土器全体の様相を検討し、その中での楽浪系土器の位置付けを考察した(2015-2)。楽浪土器研究は新しい局面を迎えつつある。

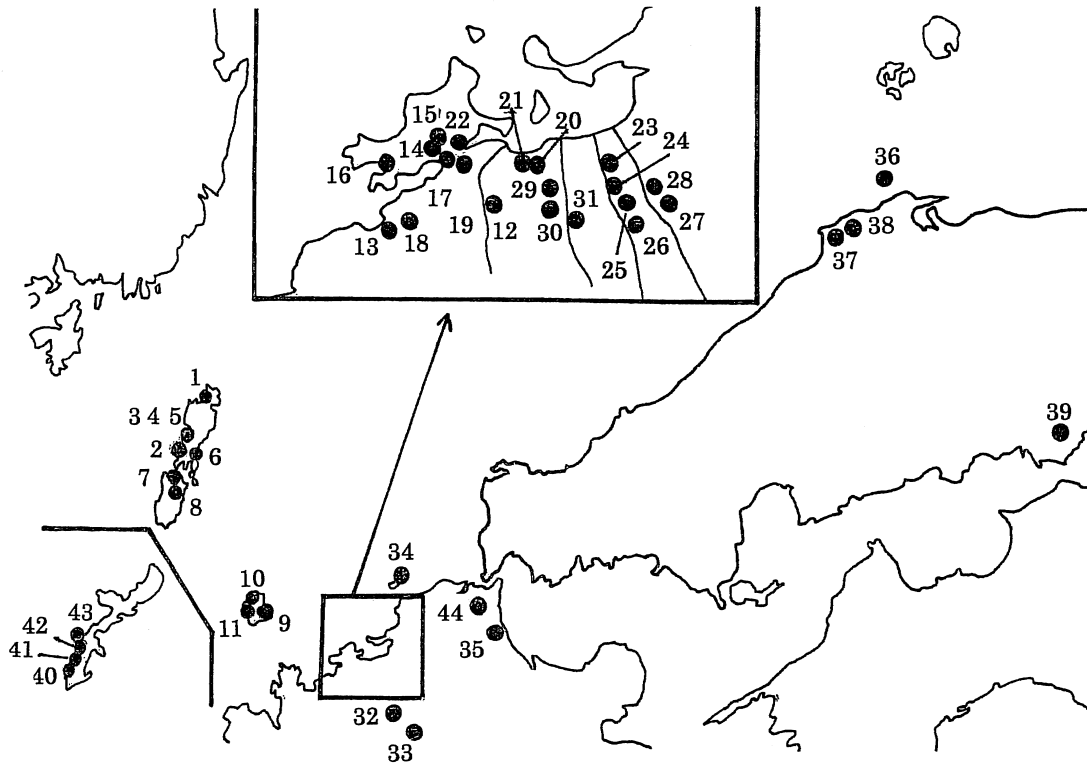
2) 日本列島出土楽浪土器研究の問題点

日本列島で出土した楽浪土器を研究するには、以下のような困難がある。

まず、楽浪土器が製作された北韓での集落出土一括資料の不在である。墳墓資料は器種に限られるため、すべての器種を網羅した編年はない。とくに、鉢や短頸壺・筒坏の細かな変遷が不明である。戦後に北韓で出た資料の正確な図面がない点も、これに輪をかけている。

つぎに、日本列島で出土した楽浪系土器は多くが小片で、全形の把握や、出土個体数の正確な把握が難しい。しかも多くは一括遺物ではなく、包含層や溝などから出るため、編年的位置の特定が困難である。また、北部九州の玄界灘沿岸地域を除けば極めてまれなため(図87)、小片は認定されにくい。玄界灘沿岸地域でも弥生土器ほどの詳細な観察の訓練は一般化しておらず、再点検・再実測が必要な報告もあって、実態の正確な把握には時間がかかる。

楽浪土器の研究は、常に弥生時代の交易論と密接に結びついて議論されてきた。楽浪土器は弥生文化の展開に密接に関わった楽浪郡を体現するから致し方ないが、これからは出土した遺跡での遺構・遺物全体の脈絡の中に楽浪土器を位置づける必要がある。



1 経隈、2 木坂、3 三根、4 大田原ヤモト、5 瀬のさえ、6 観音鼻、7 小式崎、8 白蓮江浦、9 原の辻、10 カラカミ、11 戸田、12 三雲、13 深江井牟田、14 一の町、15 ウスイ、16 御床松原、17 潤地頭給、18 石崎曲り田、19 浦志井尻、20 今宿五郎江、21 大塚、22 元岡・桑原、23 博多、24 比恵、25 那珂、26 高畑、27 下月隈 C、28 雀居、29 東入部、30 コノリ、31 吉武、32 立明寺、33 ヘボノ木、34 ろくどん、35 十双、36 鹿島海揚り、37 山持、38 青木、39 門前池、40 嘉門貝塚、41 荒地原、42 大久保原、43 中川原貝塚、44 城野遺跡

図87 日本列島の楽浪系土器

表12 北部九州と韓半島南部の併行関係

縄文土器		弥生土器										古式土師器	
晩期		早期		前期			中期			後期		宮の前式	
広田式	黒川式	山ノ寺式	夜白式	板付Ⅰ式	板付Ⅱ式			城ノ越式	須玖Ⅰ式	須玖Ⅱ式	高三猪式		下大隈式
					a	b	c						
(突帯文)	漢沙里式	可楽里式	欣岩里式	休岩里式	松菊里式	水石里式			勒島式	古	中	新	古式新羅 加耶土器 古式百濟土器
早期	前期	後期	後期			前期	後期	前期		後期	後期		三国時代
青銅器時代				初期鉄器時代				原三国時代					

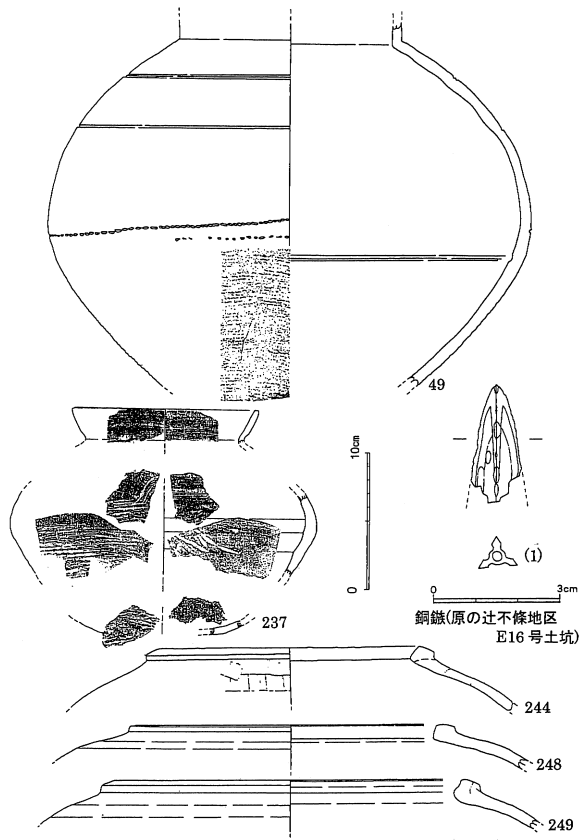


図88 楽浪土器以前とみられる中国系土器・関連資料

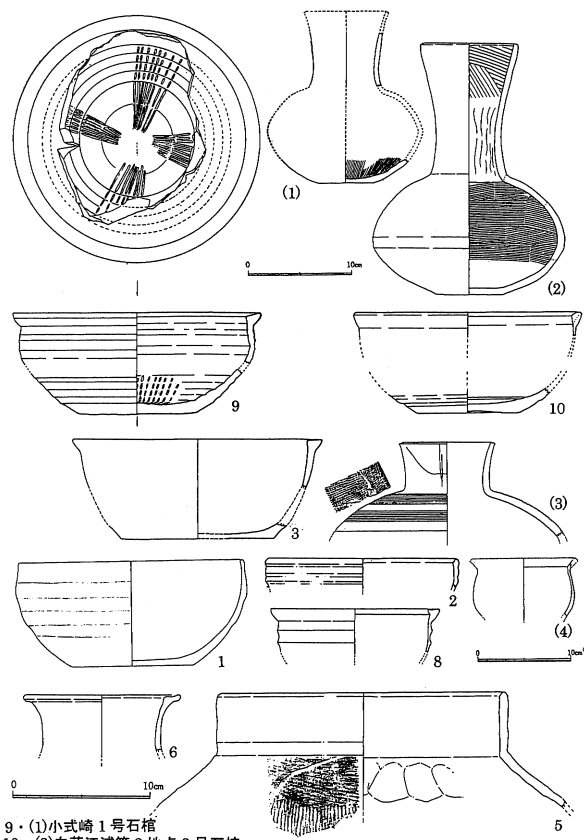


図89 対馬の楽浪系土器

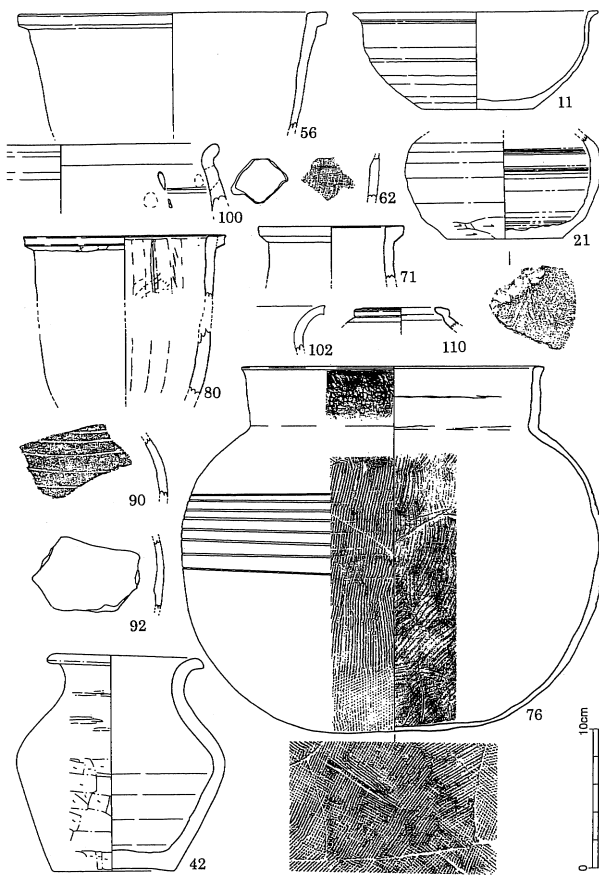


図90 壱岐の楽浪系土器①

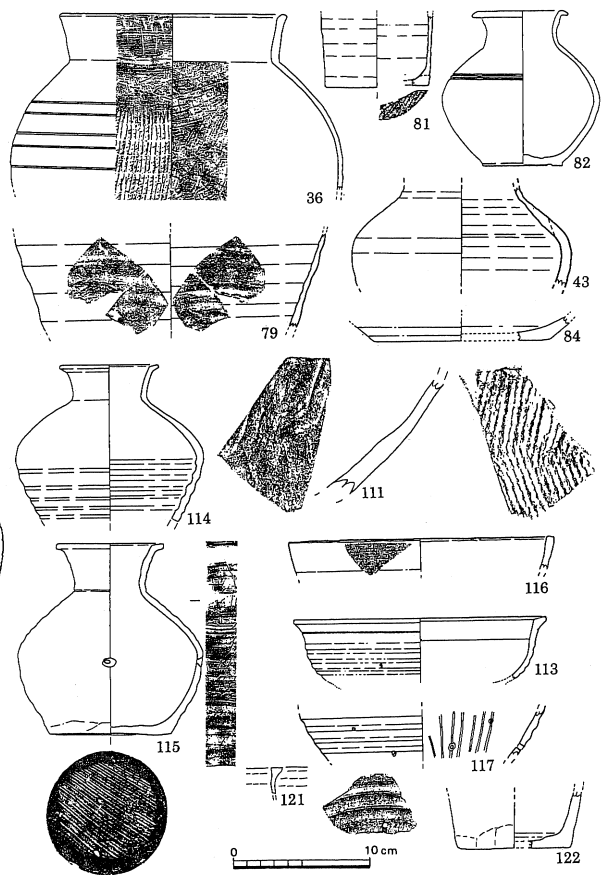


図91 壱岐の楽浪系土器②

(3) 楽浪土器以前

近年、楽浪土器が流入する前の中国系土器が問題になっている。鄭仁盛は、沖縄出土で口頸部が内傾して口縁部が肥厚する滑石混入深鉢（244～250）も念頭に置きながら、原の辻遺跡から出て横方向の縄目タタキを施し最大径の部分に縄を1条巻いた痕跡が残る壺（49）を取り上げて中国遼東地方の類例と関連付け、日本列島と沖縄までを連結する国際交流網が紀元前3世紀末まで遡る可能性を提起した（2003-9、2008-3）。これを後押しする資料には、原の辻遺跡大原地区の城ノ越式に属する2号甕棺墓及び3号甕棺墓出土のトンボ玉や、城ノ越～須玖I式に属する不條地区E16号土坑出土の三翼銅鏃（図88（1））がある（1999-2）。山東半島の前漢～王莽代にも類例が多くあり、共伴土器は古墳時代前期前半とする指摘（2007-3）もあるが、遺構や包含層の形成時期と、そこに含まれる遺物の製作時期は、まずは別個に考えるのが考古学の鉄則である。例えば、1～5期の弥生土器を含む層の形成時期は後の混入ではない限り5期でよいが、その中の時期不明の遺物はまず1～5期の時期幅で考え、次に型式学的検討を加えるのである。49が出た1号河道IV d層の弥生土器の時期は、中期前半から本稿の5期だから、49の時期もその幅の中にある。

上述した口頸部が内傾して口縁部が肥厚する滑石混入深鉢は沖縄の4遺跡から7点出ており（244～250）、楽浪土器以前の中国遼東系土器とする説が多い。宮本一夫は最近、これらの中心年代を共伴の弥生系土器から弥生中期前半とするとともに、遼東地域や楽浪土城の出土品とも比較検討して、沖縄出土例は燕系遺物と捉え、紀元前3世紀～紀元前2世紀初頭に位置付けた（2014-1）。また、同じく沖縄で出た明刀銭や、切り込みが3面にある三稜銅鏃も同時期の燕系遺物で、有機的な関連を持つとした。そして、交易ではなく、遼東から船による漂着のような一方向的な文化交流を考え、燕滅亡時や衛満朝鮮建国期という複数回の遼東移民の結果と解釈した。解釈はともかく、沖縄出土の滑石混入深鉢は紀元前3世紀が上限で、楽浪土器以前の中国遼東系土器としてよい。

福岡県宗像市ろくどん遺跡の壺（237）も、胴部下半に横方向の縄目タタキを持つ瓦質壺である（2011-6）。包含層の出土で共伴土器は弥生時代全般にわたるが、口縁部の形態からは中国の戦国時代ではなく前漢代まで下って、紀元前2世紀が中心年代とみられ、弥生中期前半に相当するとみられる。

(4) 日本列島の楽浪系土器

日本列島の楽浪系土器の様相を地域ごとに概観すれば、以下のとおりである。

1) 対馬

対馬の韓半島系土器は三韓土器が圧倒的に多く、楽浪系土器（図89）は1遺跡1～2点程度で、対馬型の設定はまだ有効である。これまでは墳墓出土で半球形平底の鉢が多かったが、集落での出土品も増え、短頸壺や壺も見られる（5・6）。小式崎第1号石棺の鉢（9）に伴う弥生土器（図89（1））は、下大隈式古段階（3期）の長頸壺である。白蓮江浦第2地点2号石棺の鉢（10）に伴う弥生土器（図89（2））は、これより新しく下大隈式（3期）新段階の長頸壺である。経隈1号例や木坂1・2号例（1～3）も2～4期の時期幅で捉えてきた。したがって、対馬島の楽浪系土器の中心時期は3～4期とされる。しかし、瀬のさえ遺跡では滑石混入の花盆形土器（7）が出ている。滑石混入土器はほかの例からみると1・2期に属するから、対馬でも1・2期から楽浪系土器が存在したことになる。

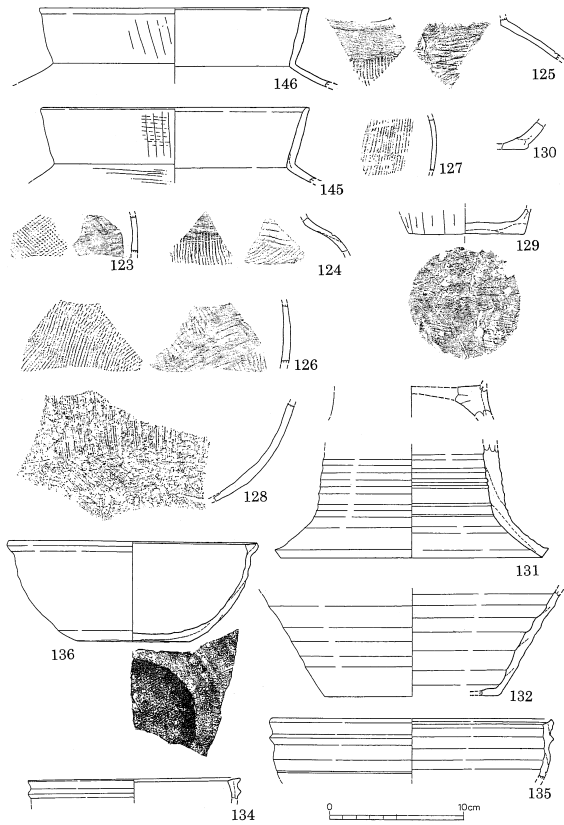


図92 糸島の楽浪系土器①

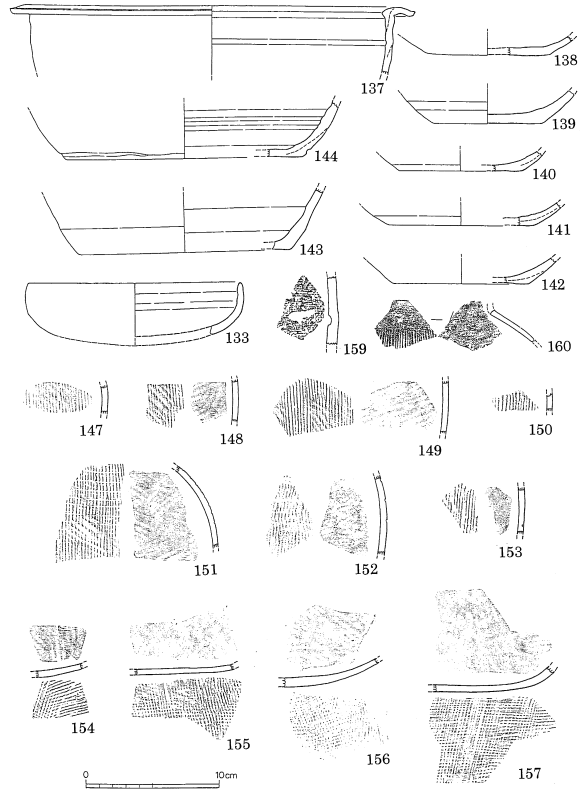


図93 糸島の楽浪系土器②

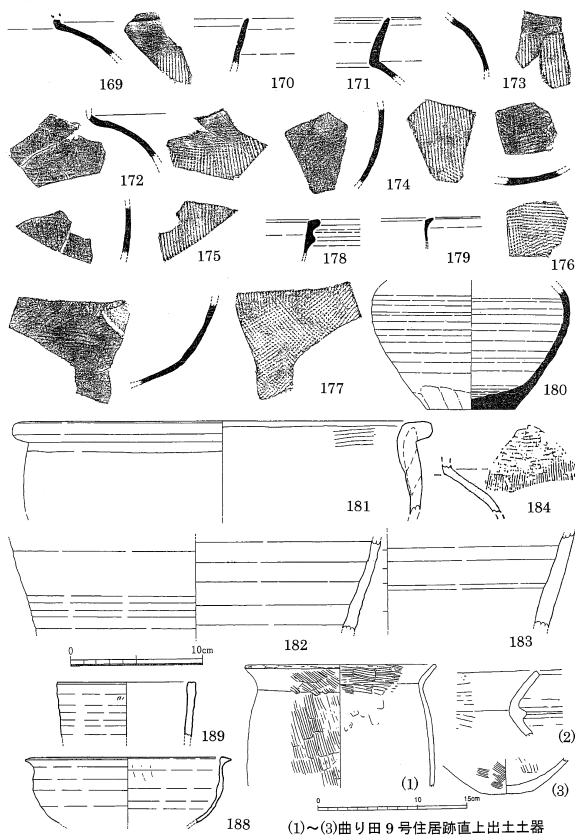


図94 糸島の楽浪系土器③

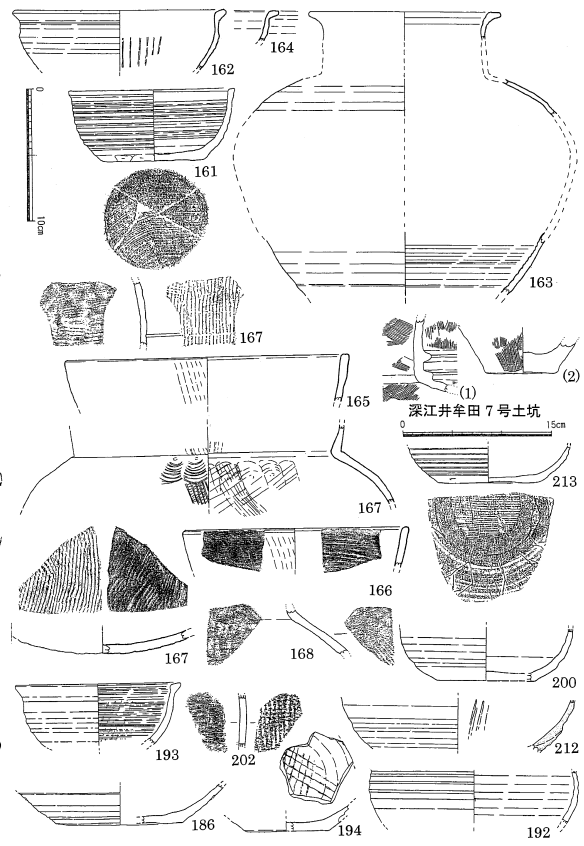


図95 糸島の楽浪系土器④

2) 壱岐

壱岐では一支国の中心集落である原の辻遺跡での出土が圧倒的で、これまで破片や略完形品が100点以上出ている。時期を限定できない資料が多いが、中期後半の土器と滑石混入の花盆形土器が共存しており(56)、滑石混入土器は中期後半から後期前半(1~2期)に位置付けられる。また、縄目タタキをもつ短頸壺も1期にあり(91)、口縁部が二重になって内側に内屈する短頸甕のミニチュア品(110)は、その形態から1期まで遡りうる。また、100も酸化炎焼成の滑石混入土器だが、実見したところ報告書の図面とは異なり、口頸部が立ち上がって胴部がふくらむ深鉢と判明した。口径22.5cmの大型品で、宮本一夫分類のⅥ式(2014-1)になるかと思われる。

筒坏や平底の盆などは3~4期が主体とみられる。原の辻遺跡の楽浪系土器は、不條地区や八反地区が中心に出るが、全体的に散漫に分布する点と、器種が豊富で、対馬に比べると三韓土器の量にかなり近い点が特徴である。これは原の辻遺跡での弥生時代後半期全体の特徴だから、原の辻型が設定できる。また、炊事用の滑石混入土器が一定量みられるから、楽浪人の滞在も考えうる。

なお、確実に2期に属する42は、遼寧地域の後漢代の壺にも通じる器形との説もあり、弥生後半期の中国系土器の中に非楽浪系土器が存在する可能性がある。

カラカミ遺跡の楽浪系土器は古くから完形の壺(114・115)が知られて有名だが、これらの壺は頸が細くて口縁部に平坦面を持つことから、口縁に平坦面を持つ鉢(113・119・120)とともに3~4期に位置付けられる。しかし、滑石混入土器片も出ており、始まりは1期まで遡るとみられる。最近ではカラカミⅢ区で出た大きな鉢の完形品(251)が、Ⅳ区で出た壺(252)と短頸壺の胴部片(253)が報告された(2014-2)。251は2~3期に属する。

3) 糸島・早良・福岡地域とその周縁地域

糸島地域は伊都国に相当し、楽浪土器は鉢、盆、短頸壺、筒坏が主体である。糸島市御床松原遺跡(181~185)、糸島市一の町・ウスイ遺跡(169~180)^①、糸島市深江井牟田遺跡(120~146)、福岡市今宿五郎江・大塚遺跡(192~212)などでは、複数器種が3個体以上出土し、原の辻型に属する。その中で深江井牟田と今宿五郎江・大塚は、鉢が卓越して注目される。筒坏と鉢が出土した糸島市石崎曲り田遺跡(188・189)と浦志井尻遺跡(190・191)は、いまのところ対馬型だが、今後の調査では原の辻型に変わる可能性もある。

いっぽう、三雲・井原遺跡番上地区ではⅡ-5区土器溜から、88㎡の調査区で数十点ほどの楽浪土器片が出土した。実際の個体数は15点前後であろうが、ほかに番上Ⅱ-6区や隣接するサキノ地区でも楽浪土器が出て、この一帯に集中し、それ以外ではほとんど出ない。国邑の中央部の狭い範囲から集中出土し、器種も鉢、盆、短頸壺、筒坏ほかに器台などもあってセットがそろった特徴から番上型が設定でき、楽浪人の居住を示すと考える。

糸島地域の楽浪系土器の時期は、深江井牟田で壺の破片、石崎曲り田の筒坏と鉢が、いずれも3期の弥生土器と共に出た。番上Ⅱ-5区土器溜の楽浪土器の時期は中期後半から後期で、近年は3期を中心とする考えが強い。しかし、番上Ⅱ-6区6号住居跡では4期の弥生土器に、1・2期に搬入されたとみられる滑石混入土器(159)が混在している。番上Ⅱ-5区土器溜の楽浪土器にも1・2期の例があるとみられる。御床松原の滑石混入深鉢(181・185)も1・2期まで遡る。ただし、181は原の辻遺跡の200よりも口縁上面が広く平坦面を作る深鉢で、しかもⅠ~Ⅴ式とは異なるため、200よ

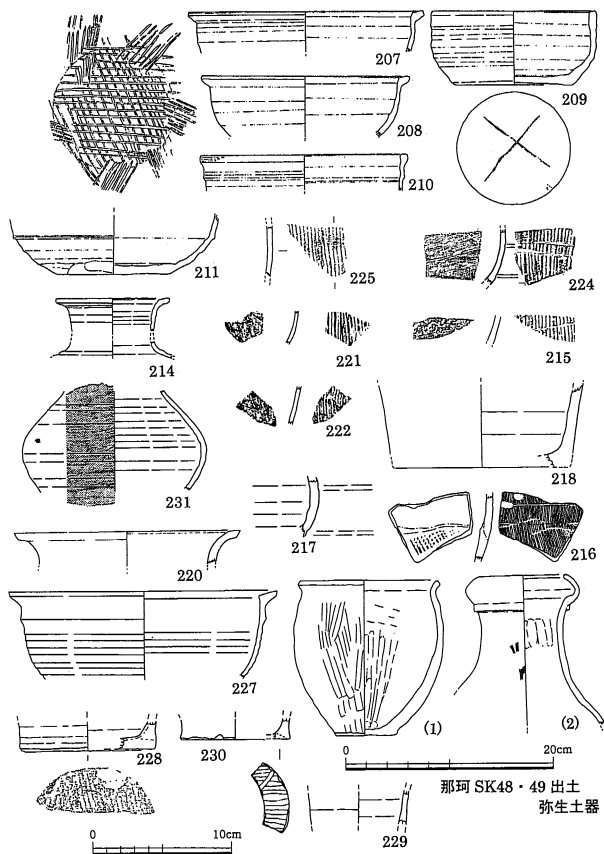


図96 糸島の楽浪系土器⑤および福岡の楽浪系土器

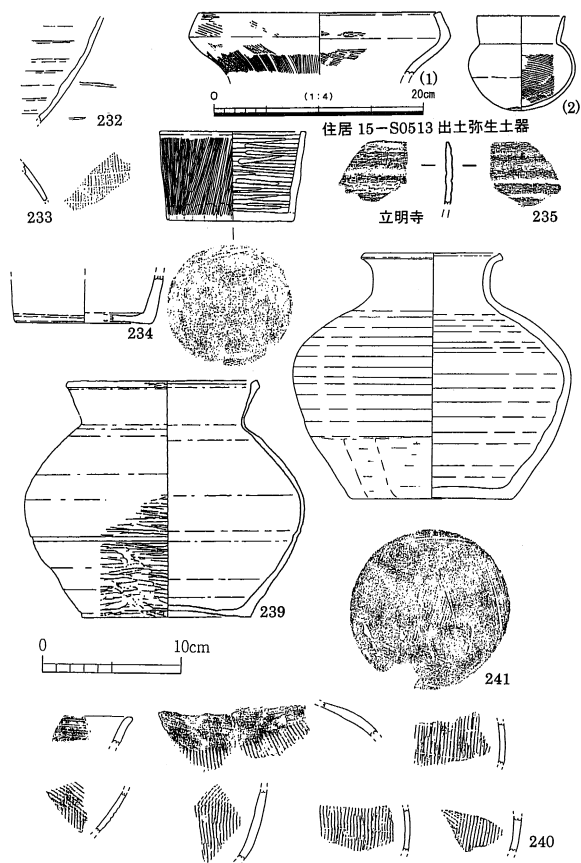


図97 早良および周縁地域、中国・四国地域の楽浪系土器

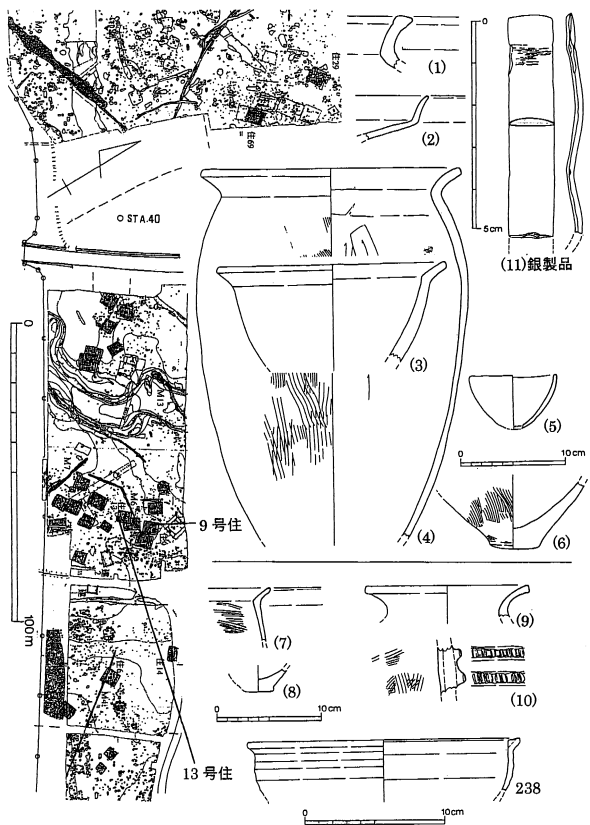


図98 十双遺跡の楽浪系土器と関連資料 ((1)~(11))

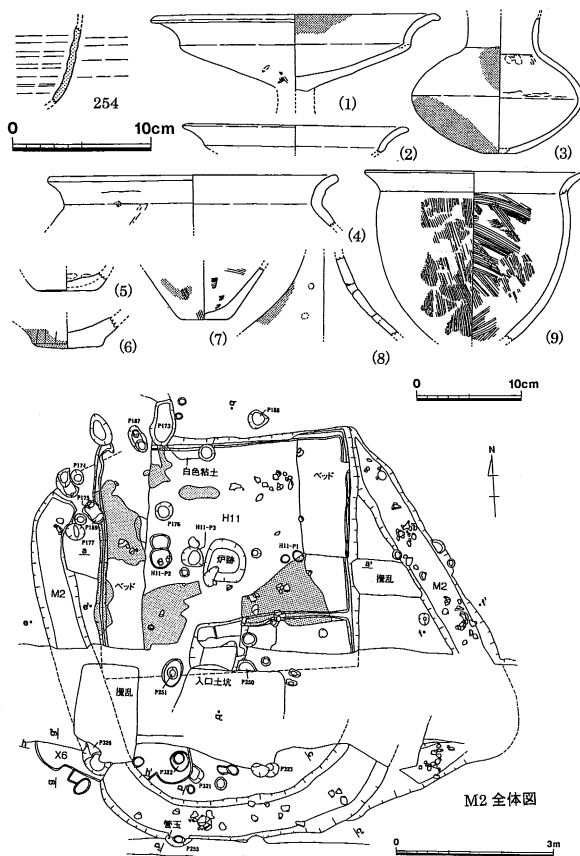


図99 城野遺跡 3区 M2 の楽浪系土器と共伴土器

りもさらに新しいと思われる。これに対して、深江井牟田や今宿五郎江の半球形平底鉢は全体に小型で、4～5期に下る可能性がある。

福岡地域は奴国に相当する。楽浪系土器はいまのところ、質量ともに糸島地域に及ばない。しかし、福岡市比恵・那珂遺跡、下月隈遺跡では調査を積み重ねた結果、複数器種が3個体以上に達して、原の辻型に属することが判明した。注目されるのは那珂SK48・49でそれぞれ1・2期の弥生土器と共伴した楽浪土器短頸壺の胴部片が接合して、1・2期にも確実に楽浪土器短頸壺が存在したことを示す。そのほかの盆や壺、筒坏は3～5期が多いとみられる。

早良地域の楽浪土器は今のところいずれも1遺跡1点と散発的な対馬型で、二次的な波及とみられる。明確に時期を定められないが、筒坏や鉢は3～4期が中心であろう。

玄界灘沿岸諸国の周縁地域である福岡県筑紫野市立明寺遺跡、久留米市ヘボノ木遺跡、築上町十双遺跡、北九州市城野遺跡も1遺跡1点の対馬型に属する。器種はいずれも半球形平底鉢で、やはり二次的な波及とみられる。

これらの中で注目されるのは十双第13号住居から出た半球形平底鉢(238)である。十双では後期後半(3期)に直線的な溝を組み合わせた首長層区画ができる(図98)。第13号住居は3～4期で区画の内側にあるが、この区画を切る。3期の土器(図98(1)～(6))と共に楽浪系の不明銀製品(図98(11))が出た9号住居は区画に接した外側にあり、第13号住居にも近接する。これらの銀製品と鉢は、周縁地域の拠点集落での二次的な入手と首長層の集落での楽浪系文物の保有相を示す。

城野遺跡3C区の半球形平底鉢とみられる破片は遺跡南端の方形周溝M2から出た。弥生時代後期終末(4期)の竪穴建物H11に切られ、共伴の土器も下大隈式(3期)新段階だから、この鉢も3期に属する。方形周溝M2の内部施設は不明だが、北側の3G区にも方形周溝があって内部に掘立柱建物が立つから、M2内部に掘立柱建物があってもよい。福岡市蒲田・水ヶ元遺跡でも方形周溝の中に掘立柱建物があって集落をまとめたとみられ、M2にも同様な機能があれば、十双と同様な意義が付与できる。

海村以外の北部九州周縁地域の対馬型には、首長層の交易による二次的伝播の結果が考えられる。

4) 中国・四国地域

島根県出雲市山持遺跡では、6区第12層(砂礫層)から楽浪土器が2点出ている。241は完形の瓦質壺で内外面の凹凸が著しく、頸は太く短い。胴部外面は底部近くを横にヘラケズリ、外底面は静止糸切後に広い範囲でヘラケズリする。240は表面黒灰色の瓦質短頸壺の破片8片で、外面は縄目タタキに横沈線がめぐり、内面は同心弧の当具痕跡が残る。この砂礫層の時期は下限が後期前半だから、弥生中期後半～後期前半(1～2期)の年代が与えられる(2011-5)。また、3区SR3(旧河道)の砂礫層では原三国時代の薄型三角形粘土帯甕が7点でており、注目される。

同じ島根県の鹿島町沖揚がり楽浪土器(239)は黒色研磨の瓦質壺で、底面に糸切痕は確認されない。この他に、岡山市門前池遺跡では後期後半の弥生土器とともに、弥生土器の胎土・焼成で形態のみ筒坏を模倣し、大きな平底の上に身部を乗せた擬楽浪土器(243)が出た。この土器には外底面の糸切痕やヘラケズリ痕は確認されない。

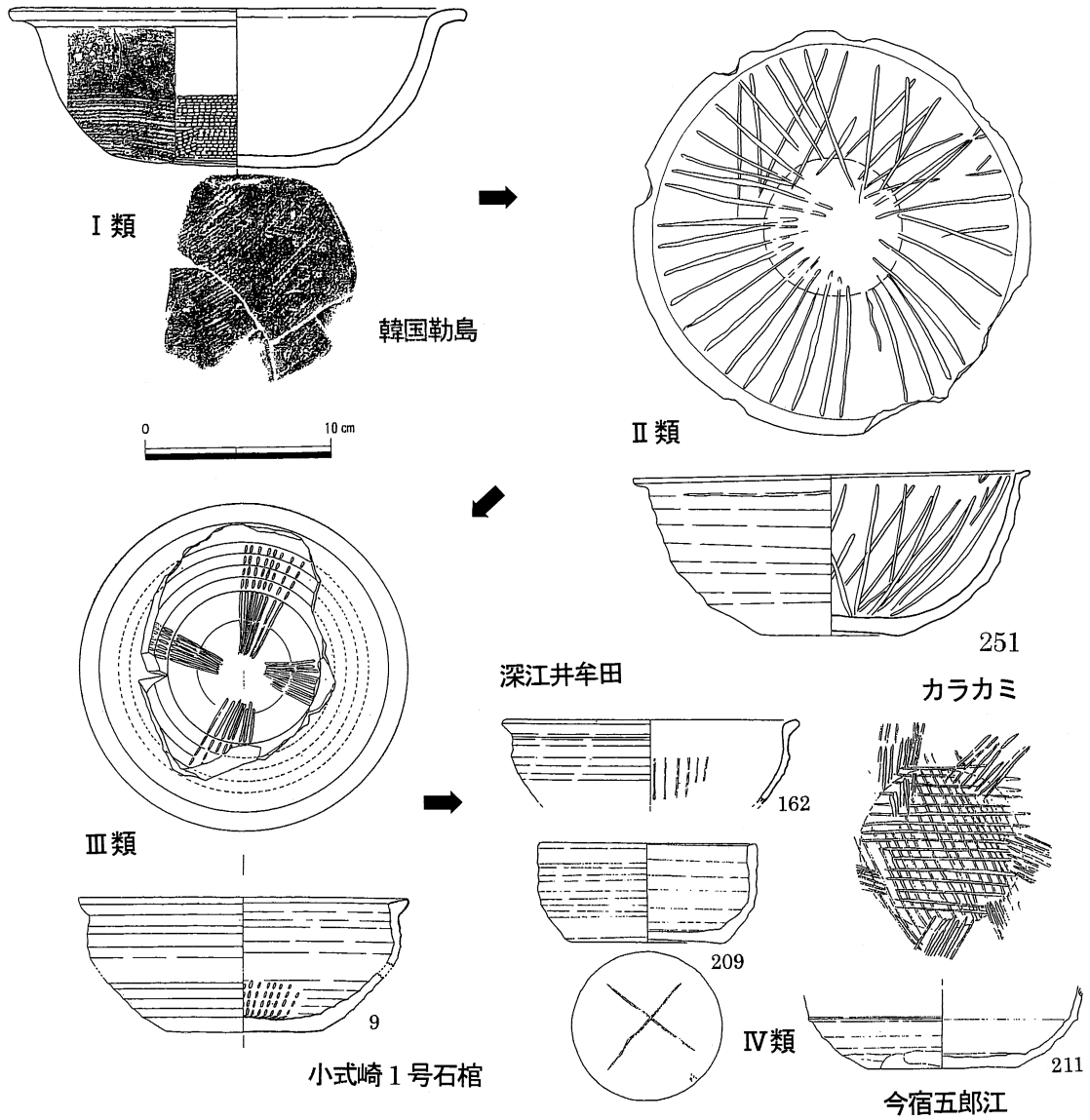


図100 半球形平底鉢の変遷

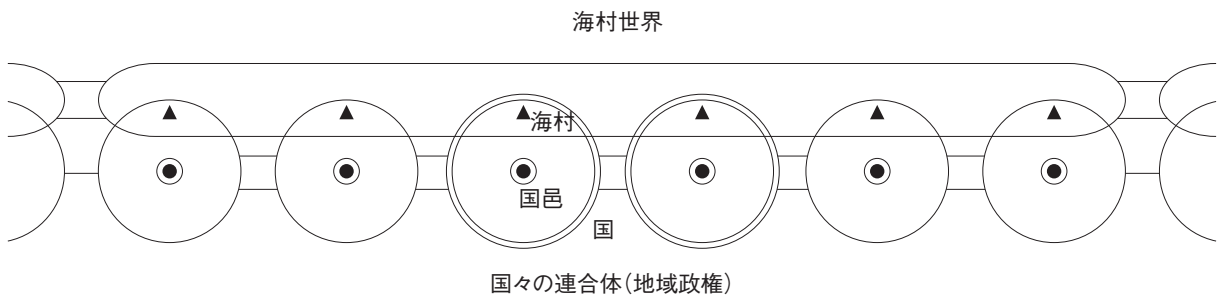


図101 海村と国邑の関係模式図

(5) 楽浪系土器の全体的な様相

以上の楽浪系土器は弥生時代後半期の1期に始まり、3期にピークがある。

短頸壺や筒坏・盆の型式組列は不明確だが、半球形平底の鉢は確実な3期までの例が口径15.8～20cmなのに対して、深江井牟田や今宿五郎江の例では口径12～15cmが多く、胴体部もあまり開かず、4・5期の可能性が高い。

勒島A地区ナ-61号焼成遺構から出た図100左上の半球形鉢(2006-10の図面140-1)は、1期かそれより前⁽²⁾に位置付けられ、口縁部はゆるやかに水平に近く外反し、口径25cm、器高8.6cm、底径12.7cmで、丸底に近い。タタキ目も横方向の縄目である。これをⅠ類としてそこからの変化を考えれば、口縁部断面の三角形化と縮小退化、口径の小型化と平底の相対的な大型化、体部直立化という方向での型式組列が想定できそうである。

Ⅱ類は2期～3期の弥生土器と共伴したカラカミ遺跡例(251)で、器高は8.7cmと変わらないが、口径21.4cm、底径7.4cmでⅠ類より小さくなるため、丈が高くなり、特に底部が小さくなった感を与える。内面には縦方向の直線的な暗文が、全面に施される。

Ⅲ類は3期を中心に日本列島で最も多くみられる。小式崎1号石棺例(9)が典型で、器高7.2cm、口径18.0cm、底径8.5cmで、全体にⅡ類よりも小型化し器高も低くなるが、底径だけはⅡ類より大きくなるため底部がかなり大きくなった印象を与える。口縁断面は三角形、内面の暗文は集線となり、口縁直下は直立か僅かに内傾する。原の辻遺跡の半球形平底鉢も、このⅢ類が多い。

Ⅳ類は深江井牟田や今宿五郎江の小型化した鉢が相当し、直口もある。深江井牟田例(161)は、器高5.5cm、口径12.6cm、底径7.8cmで、Ⅲ類とくらべて底部の大きさは変わらないが、口と高さが大きく縮小し、体部から口縁部が直立する。これらⅣ類の鉢は楽浪土城でもあまり類例はなさそうで、帯方郡の土器の可能性が出てくる。原の辻遺跡でも今宿五郎江例(211)のように内底面に細線で斜格子のヘラ描文を入れた底部が出ている。

壺の型式組列も不明確だが、3期以前は頸が太いのに対して、4・5期は細頸化して、口縁の平坦面形成と長胴化が進むようである。

日本列島の楽浪系土器は、対馬を除けば、多くが海辺の集落から出ている。弥生時代中期後半以降には、漁具が卓越するだけでなく、対外交渉を示す多くの遺物からみて海上交易活動の比重が高い海辺の集落がかなりある。そうした集落を海村と呼ぶ。海村には対馬の諸集落や原の辻、カラカミ、御床松原、今宿五郎江・大塚などがあり、対馬を除けば楽浪系土器の様相は原の辻型に属する。また、楽浪系土器の出土はないが、鳥取県青谷上寺地遺跡も海村であり、原の辻以外は規模が小さい点も海村の大きな特色である。

ただし、原の辻型でも一の町・ウスイ、比恵・那珂、下月隈は、大型の掘立柱建物があつて漁具は卓越しないから、海村とはできない。国の中心集落と海村の間にあつて海村を統括した拠点集落と性格づけておく。

弥生時代に日本列島の海村を中心に出土する楽浪系土器の最も大きな特色は、対馬島を除けば、いずれも集落内の竪穴建物・土坑や包含層など日常生活域から出土し、墓地では出ない点にある。これは、地域の中心集落(国邑)での完形中国鏡がもっぱら首長層の墓に副葬されることとは著しい対照をなす。同じ時期の中国製品でありながら、その取り扱いが異なるのである。また、中国銭貨ももつ

ばら海村の日常生活域から出土し、国邑からはほとんど出ない。中国鏡は海村では破片しか出ないから、国邑から制御されたことは間違いないが、海村も独自の交易世界を形成して国邑を制御したとみられる。楽浪土器はそれを裏付ける重要な資料である。

原の辻遺跡では、滑石混入土器や半球形平底鉢などから見て、本稿の1～5期まで継続して楽浪系土器が見られ、海村交易世界で重要な結節点であったことがわかる。

(6) おわりに

弥生時代後半期の対外交渉は、3層を成して進行した。下層には、対馬と韓半島南部の日常的で濃密な交渉が存在する。楽浪系土器の様相では対馬型が対応する。その上の中層にはそれぞれの地域ごとのまとまりが連結する形で海村世界の交易網が形成され、楽浪郡から日本海沿岸地域までつながる。楽浪系土器の様相では原の辻型が対応し、中国銭貨が対価に使われ、文字使用も視野に入る。そして頂点には、伊都国の国邑に居住した楽浪（帯方）人によるツクシ政権と漢王朝や楽浪（帯方）郡との政治的な外交交渉が位置し、番上型が対応する⁽³⁾。もちろんこの3層は截然と分離はせず、大まかな傾向である。楽浪土器が対馬でも出るから、対馬も中層や上層の交易・交渉に関わり、逆に原の辻型の海村も下層や上層の交易・交渉に関わったとみられる。

位相が異なる対外交渉の弥生社会での併存は、同時期に日本列島にもたらされた中国（楽浪）系の取り扱いにも影響する。すなわち、完形中国鏡は国邑が入手して首長層墓にもつばら副葬されるのに対して、楽浪系土器は、対馬での副葬例を除けば、すべて日常生活空間から出土して、墳墓に副葬されないだけでなく墳墓祭祀にも使用されない。楽浪系土器は、完形中国鏡に込められた首長層のための権威とは全く無縁の存在で、漢帝国の経済活動の一環に加わる形で展開した弥生社会の様相対外交渉の一端を示すといえる。

註

- (1) 一の町の169は無頸壺と報告されたが、胎土焼成・成形技法ともに173と同一で、短頸壺の口縁下部と考えられ、169～177は同一個体の可能性が高い。
- (2) 文献2014-4では、筆者の錯誤からこの土器を1・2期としたが、今回改めて検討した結果、共伴の土器は1期かそれより前の時期で、弥生後期の土器は含まないため、訂正する。
- (3) 2015年度の三雲番上Ⅱ-5区土器溜の確認調査で出土した石硯の破片はこれを裏付ける。

【引用参考文献】

- 1922-1 後藤守一「対馬国上縣郡佐須奈発掘品」『考古学雑誌』12—8
1954-1 水野清一・岡崎敬「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』
1961-1 日本考古学協会『日本農耕文化の生成』第一冊 本文篇（東京堂）
1968-1 金関恕「天理参考館蔵の銅鍔と銅甑」『朝鮮学報』第49輯
1974-1 長崎県教育委員会『対馬—浅茅湾とその周辺の考古学的調査—』
1976-1 坂田邦弘『対馬の考古学』縄文文化研究会
1977-1 小田富士雄「対馬・クビル遺跡の再検討」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』
1980-1 福岡県教育委員会『三雲遺蹟』I 福岡県文化財調査報告書第58集
1980-2 日本住宅公団『瑞穂』福岡市比恵台地遺跡

- 1982- 1 福岡県教育委員会『三雲遺蹟』Ⅲ 福岡県文化財調査報告書第63集
- 1982- 2 小田富士雄「対馬発見の弥生時代瓦質系壺形土器—失われた漢式土器の追跡—」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』
- 1983- 1 福岡市教育委員会『久保園遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集
- 1983- 2 志摩町教育委員会『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第 3 集
- 1984- 1 谷豊信「楽浪土城址出土の土器(上)—楽浪土城研究その 2—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 3 号
- 1985- 1 勝本町教育委員会『カラカミ遺跡—範囲確認調査—』勝本町文化財調査報告書第 3 集
- 1985- 2 福岡市教育委員会『博多』Ⅲ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集
- 1985- 3 福岡県教育委員会『三雲遺蹟 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
- 1985- 4 谷豊信「楽浪土城址出土の土器(中)—楽浪土城研究その 3—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 4 号
- 1986- 1 福岡市教育委員会『今宿五郎江』Ⅰ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集
- 1986- 2 青柳種信・鹿島久平太『柳園古器略考・鉢の記(復刻版)』文献出版(原本は1930年刊行)
- 1986- 3 谷豊信「楽浪土城址出土の土器(下)—楽浪土城研究その 4—」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 5 号
- 1988- 1 福岡市教育委員会『比恵遺跡群』(8) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第174集
- 1988- 2 志摩町教育委員会『新町遺跡』Ⅱ 志摩町文化財調査報告書第 8 集
- 1990- 1 福岡市教育委員会『大塚遺跡・女原遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集
- 1990- 2 福岡市教育委員会『比恵遺跡群』(9) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集
- 1991- 1 福岡市教育委員会『今宿五郎江』Ⅱ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集
- 1991- 2 福岡市教育委員会『大塚遺跡第 7 次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第256集
- 1991- 3 小田富士雄・韓炳三『日韓交渉の考古学』弥生時代編 六興出版
- 1991- 4 武末純一「西日本の瓦質土器—九州を中心に—」『地方史研究』41- 5 (233号)
- 1992- 1 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告— 8 —』下巻
- 1992- 2 福岡市教育委員会『那珂』5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集
- 1992- 3 福岡県教育委員会『椎田バイパス関係文化財調査報告— 8 —』
- 1992- 4 穂波町教育委員会『穂波地区遺跡群』第 4 集 穂波町文化財調査報告書第 7 集
- 1992- 5 福岡市教育委員会『比恵遺跡群』(11) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集
- 1993- 1 峰町教育委員会『大田原ヤモト遺跡』峰町文化財調査報告書第10集
- 1993- 2 大阪府立弥生文化博物館『弥生人の見た楽浪文化』平成 5 年秋季特別展
- 1993- 3 福岡県教育委員会『アジア文明交流展 邪馬台国への道のり』
- 1994- 1 二丈町教育委員会『深江井牟田遺跡』二丈町文化財調査報告書第 8 集
- 1994- 2 則武忠直・岡秀昭・塩見真康「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』第32集
- 1994- 3 武末純一「弥生時代の朝鮮半島系土器」『倭人の世界—楽浪海中の弥生文化—』
檀原考古学研究所附属博物館特別展図録 第43冊
- 1995- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集
- 1995- 2 福岡市教育委員会『雀居遺跡』2 福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集
- 1996- 1 福岡市教育委員会『比恵遺跡群』20 福岡市埋蔵文化財調査報告書第451集
- 1996- 2 福岡市教育委員会『比恵遺跡群』21 福岡市埋蔵文化財調査報告書第452集
- 1996- 3 福岡市教育委員会『今宿五郎江』Ⅲ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集
- 1996- 4 福岡市教育委員会、鎌田・水ヶ元遺跡調査会『鎌田・水ヶ元遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集

- 1997- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡・安国寺前 A 遺跡・安国寺前 B 遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 1 集
- 1998- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 9 集
- 1999- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集
- 1999- 2 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第16集
- 1999- 3 白木守「久留米市へボノ木遺跡出土の楽浪系土器」『福岡考古』第18号
- 1999- 4 下地安広「沖縄県嘉門貝塚出土の楽浪系土器」『人類史研究』第11号
- 2000- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書台18集
- 2000- 2 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第19集
- 2000- 3 原の辻遺跡保存等協議会『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第 1 集
- 2000- 4 角浩行「伊都国の遺跡と遺物」『考古学からみた弁・辰韓と倭』九州考古学会・嶺南考古学会第 4 回合同考古学大会
- 2000- 5 岡山県教育委員会『高塚遺跡 三手遺跡 2』（第 1 分冊）岡山県文化財調査報告150
- 2001- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第21集
- 2001- 2 原の辻遺跡保存等協議会『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第 2 集
- 2001- 3 二丈町教育委員会『石崎曲り田遺跡—第 3 次調査—（中）』二丈町文化財調査報告書第27集
- 2001- 4 島根県教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅹ
- 2001- 5 仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村歴史民俗資料館紀要』
- 2001- 6 鳥取県教育文化財団『青谷上寺地遺跡』 3 鳥取県教育文化財団調査報告書72
- 2002- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第24集
- 2002- 2 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第25集
- 2002- 3 原の辻遺跡保存等協議会『原の辻遺跡』原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第 3 集
- 2002- 4 福岡市教育委員会『久保園遺跡 2 席田青木遺跡 4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第712集
- 2002- 5 福岡市教育委員会『那珂』 32 福岡市埋蔵文化財調査報告書第713集
- 2002- 6 福岡市教育委員会『コノリ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第728集
- 2002- 7 柳田康雄『九州弥生文化の研究』学生社
- 2002- 8 芦辺町教育委員会『特別史跡 原の辻遺跡—青銅製権に関する自然科学分析の研究成果—』芦辺町文化財調査報告書第14集
- 2003- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集
- 2003- 2 郷ノ浦町教育委員会『戸田遺跡・車出遺跡』範囲確認発掘調査報告Ⅱ 郷ノ浦町文化財調査報告書第 5 集
- 2003- 3 峰町教育委員会『峰町日韓共同遺跡発掘事業記録集』
- 2003- 4 福岡市教育委員会『今宿五郎江』Ⅳ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集
- 2003- 5 福岡市教育委員会『下月隈 C 遺跡』Ⅲ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第750 集
- 2003- 6 福岡市教育委員会『吉武遺跡群』ⅩⅤ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第775 集
- 2003- 7 鄭仁盛「楽浪円筒形土器の性格」『東京大学考古学研究室紀要』第18号
- 2003- 8 鄭仁盛「楽浪土城出土土器の編年的位置—「滑石混入系土器」を中心に—」『百済と楽浪』忠南大学校百済研究所
- 2003- 9 鄭仁盛「弁韓・加耶の対外交渉—楽浪郡との交渉関係を中心に—」『加耶考古学の新しい照明』釜山大学校韓国民族文化研究所
- 2004- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集
- 2004- 2 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第28集
- 2004- 3 福岡市教育委員会『高畑遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第799集

- 2004- 4 武末純一「遺物からみた楽浪郡と北部九州の交流—土器を中心に—」『海を越えたメッセージ～楽浪交流展～』伊都国歴史博物館図録 1
- 2005- 1 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
- 2005- 2 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集
- 2005- 3 寺井誠「朝鮮半島系土器」『第8回九州前方後円墳研究会 九州における渡来人の受容と展開』
- 2005- 4 宮本一夫・辻田淳一郎・谷直子・上條信彦・渡邊堯志・渡邊芳久「壱岐カラカミ遺跡の調査」『弥生時代成立期における渡来人問題の考古学的研究』
- 2005- 5 福岡市教育委員会『久保園遺跡』3 福岡市埋蔵文化財調査報告書第837集
- 2006- 1 福岡市教育委員会『今宿五郎江』5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第872集
- 2006- 2 福岡市教育委員会『下月隈 C 遺跡』VI 福岡市埋蔵文化財調査報告書第881集
- 2006- 3 福岡市教育委員会『比恵』42 福岡市埋蔵文化財調査報告書第898集
- 2006- 4 志摩町教育委員会『稲留地区遺跡群 木藤丸遺跡・ウスイ遺跡』志摩町文化財調査報告書第25集
- 2006- 5 志摩町教育委員会『新町遺跡』VI 志摩町文化財調査報告書第26集
- 2006- 6 前原市教育委員会『潤地頭給遺跡』I 前原市文化財調査報告書第93集
- 2006- 7 島根県教育委員会『青木遺跡』II (弥生～平安時代編)
- 2006- 8 武末純一「豊前地域の弥生集落—山国川以北を中心に—」『行橋市史 資料編 原始・古代』
- 2006- 9 鳥取県埋蔵文化財センター『青谷上寺地遺跡』8 鳥取県埋蔵文化財センター発掘調査報告書10
- 2006-10 慶南考古学研究所『勒島貝塚 II A 地区住居群』
- 2007- 1 福岡市教育委員会『今宿五郎江』6 福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集
- 2007- 2 福岡市教育委員会『下月隈 C 遺跡』VII 福岡市埋蔵文化財調査報告書第932 集
- 2007- 3 寺井誠「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』第56集
- 2007- 4 長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集
- 2008- 1 福岡市教育委員会『今宿五郎江』7 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1013集
- 2008- 2 宮本一夫『壱岐カラカミ遺跡』I
- 2008- 3 鄭仁盛「瓦質土器の‘楽浪土器影響説’検討」『日・韓交流の考古学』九州考古学会・嶺南考古学会第8回合同考古学大会
- 2008- 4 森本幹彦「福岡市西区今宿五郎江・大塚遺跡群」『嶺南考古学会・九州考古学会第8回合同考古学会 日・韓交流の考古学』
- 2008- 5 武末純一「茶戸里遺跡と日本」『茶戸里遺跡発掘成果と課題』国立中央博物館
- 2008- 6 宮崎貴夫『原の辻遺跡』日本の遺跡32 (同成社)
- 2009- 1 福岡市教育委員会『大塚遺跡』3 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1025集
- 2009- 2 株式会社島田組『立明寺地区遺跡 B 地点』
- 2009- 3 志摩町教育委員会『一の町遺跡発掘調査概要』志摩町文化財調査報告書第30 集
- 2009- 4 島根県教育委員会『山持遺跡』Vol. 5 (6 区)
- 2009- 5 武末純一「三韓と倭の交流—海村の視点から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集
- 2010- 1 福岡市教育委員会『今宿五郎江』8 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1066集
- 2010- 2 福岡市教育委員会『入部』X III 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1070集
- 2010- 3 島根県教育委員会『山持遺跡』Vol. 6 (4, 6, 7 区)
- 2010- 4 森本幹彦「玄界灘沿岸地域における朝鮮半島系土器の様相 2—弥生時代後期前後の楽浪系土器と三韓系土器の様相—」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討—弥生時代を中心に—』第59回埋蔵文化財研究集会発表資料集
- 2010- 5 長友朋子「楽浪土器からみた交流関係」『待兼山考古学論集』II
- 2011- 1 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室『壱岐カラカミ遺跡 III』
- 2011- 2 福岡市教育委員会『今宿五郎江』9 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1109集

- 2011- 3 福岡市教育委員会『今宿五郎江』10 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1110集
- 2011- 4 福岡市教育委員会『大塚遺跡』4 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1111集
- 2011- 5 島根県教育委員会『山持遺跡』Vol.7 (6区)
- 2011- 6 武末純一「沖ノ島祭祀の成立前史」『「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」研究報告』I
- 2011- 7 武末純一「朝鮮半島との往来」『列島の考古学 弥生時代』(河出書房新社)
- 2012- 1 長崎県埋蔵文化財センター『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第6集
- 2012- 2 壱岐市教育委員会『国特史跡 原の辻遺跡 カラカミ遺跡』壱岐市文化財調査報告書 第19集
- 2012- 3 福岡市教育委員会『今宿五郎江』11 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1137集
- 2012- 4 福岡市教育委員会『大塚遺跡』5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1144集
- 2012- 5 福岡市教育委員会『元岡・桑原遺跡群』21 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集
- 2012- 6 宮本一夫「楽浪土器の成立と拡散—花盆形土器を中心として—」『史淵』第149 輯
- 2013- 1 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ』
- 2013- 2 永島聡士「楽浪土器製作実験ノート」『七隈史学会第15回大会研究発表報告集』七隈史学会
- 2013- 3 (財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室『城野遺跡6』北九州市埋蔵文化財調査報告書第494集
- 2014- 1 宮本一夫「沖縄出土滑石混入系土器からみた東シナ海の対外交渉」『史淵』第151輯
- 2014- 2 壱岐市教育委員会『天手長男神社遺跡 市史跡 カラカミ遺跡2次』壱岐市文化財調査報告書第23集
- 2014- 3 岡市教育委員会『比恵66—比恵遺跡群第125次調査の報告—』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第1237集)
- 2014- 4 武末純一「弥生文化の展開と楽浪郡」『楽浪考古学概論』(ジニジン)
- 2015- 1 宮本一夫「沖縄出土燕系遺物の位置付と対外交渉」『九州考古学会・嶺南考古学会第11回合同考古学大会 海洋交流の考古学』
- 2015- 2 森本幹彦「外来系土器からみた対外交渉の様相—弥生時代終焉に向けての北部九州—」『古代文化』第66巻第4号

【図・表の出典】

図87は2010- 5をもとに武末作成。図88～図101の楽浪系土器と関連資料は基本的に報告書より引用し、一部の資料は観察結果で修正した。82・227は2007- 3より、図88(1)は1999- 2より引用。100・110・162・163・165・181・224・234は武末作成。

3. 石器

原の辻遺跡から出土する弥生時代の石器については『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（以下、『Ⅰ』）において石器ごとに詳細な分析・報告がなされている。ここでは『Ⅰ』刊行後に出土した石器のうち未報告のものについて取り上げる。

(1) 敲石・磨石類（図102～図105）

『Ⅰ』刊行後に出土した磨石・敲石・凹石（以下「敲石類」）は、量的にも多数にのぼる。なお『Ⅰ』では磨石類と称したが機能的に見て敲石・磨石類とした方が適切と思われる。ここで報告するのはいずれも土坑や集石遺構・包含層からの出土で、住居跡から出土したものはない。『Ⅰ』では、平面形態や使用痕の特徴から磨石類をA類：平面形が円形もしくは楕円形のもの、B類：平面形が棒状となるものに分類し、A類をさらに敲打痕・磨耗痕のあり方から4類6形態に細分した。素材となる石材は、海岸礫丘を形成する転礫で、波浪によって水磨され円礫状を呈する海岸礫である。海岸礫丘は、原の辻遺跡の周辺にも点在し原石の獲得は容易であったと思われる。

1～6は『総集編Ⅰ』でいうB類にあたる棒状の敲石である。1・5は下端に、2～4・6は上下両端に敲打痕がある。磨耗痕をもつものや凹石状のものは認められない。3・4は強い敲打によって剝離面が形成されている。4・6の側面には浅い抉りが施されている。

7～27までは円礫状の敲石である。平面形態は円形が多数を占める。楕円形になるものは少なく不整な隅丸方形が1点ある。扁平なものが大半であるがやや肉厚なものもある。原石の形状を基本的に保持しており、敲打痕はそれほど明瞭ではない。

28～55は凹石・敲石・磨石の仲間である。平面形態は円形が多いが、不整形なものや楕円形のものもある。平面の表裏中央部に集中的な敲打痕を有し、明確な凹みとなるものがある。そうした傾向は扁平なものに顕著である。敲打痕は側面にも残されており、この種の石器が一連の動作のなかで対象物の状態に合わせて表裏・側面を意識的に選択使用したことが推測される。

この石器には「割る・砕く・磨る」という機能を想定できるが、敲打痕の残る石器が磨耗痕を持つものをはるかに凌駕している。『Ⅰ』では対象物を穀物種子・堅果類のみならず赤色顔料の精製や石器・鉄器の製作にも使われた可能性を指摘している。

敲石・磨石類と石皿類はセット関係にあり、敲石・磨石が単独使用される頻度は高くない。石皿類の量と比べて敲石・磨石類が圧倒的に多い。敲石・磨石類は破損の度合いが大きく消耗度が高いことがわかる。

(2) 石皿類（図106）

『Ⅰ』では石皿を使用する石材で2類に分ける。Ⅰ類は扁平な礫を使用するもの、Ⅱ類は厚みある円礫を使用するものである。それぞれ機能面の形状によってさらに細分している。それに従えば1・3～7がⅠ類、2がⅡ類と分類できる。石皿の機能面には磨耗痕のみならず敲打痕による凹みを複数有するものがある。

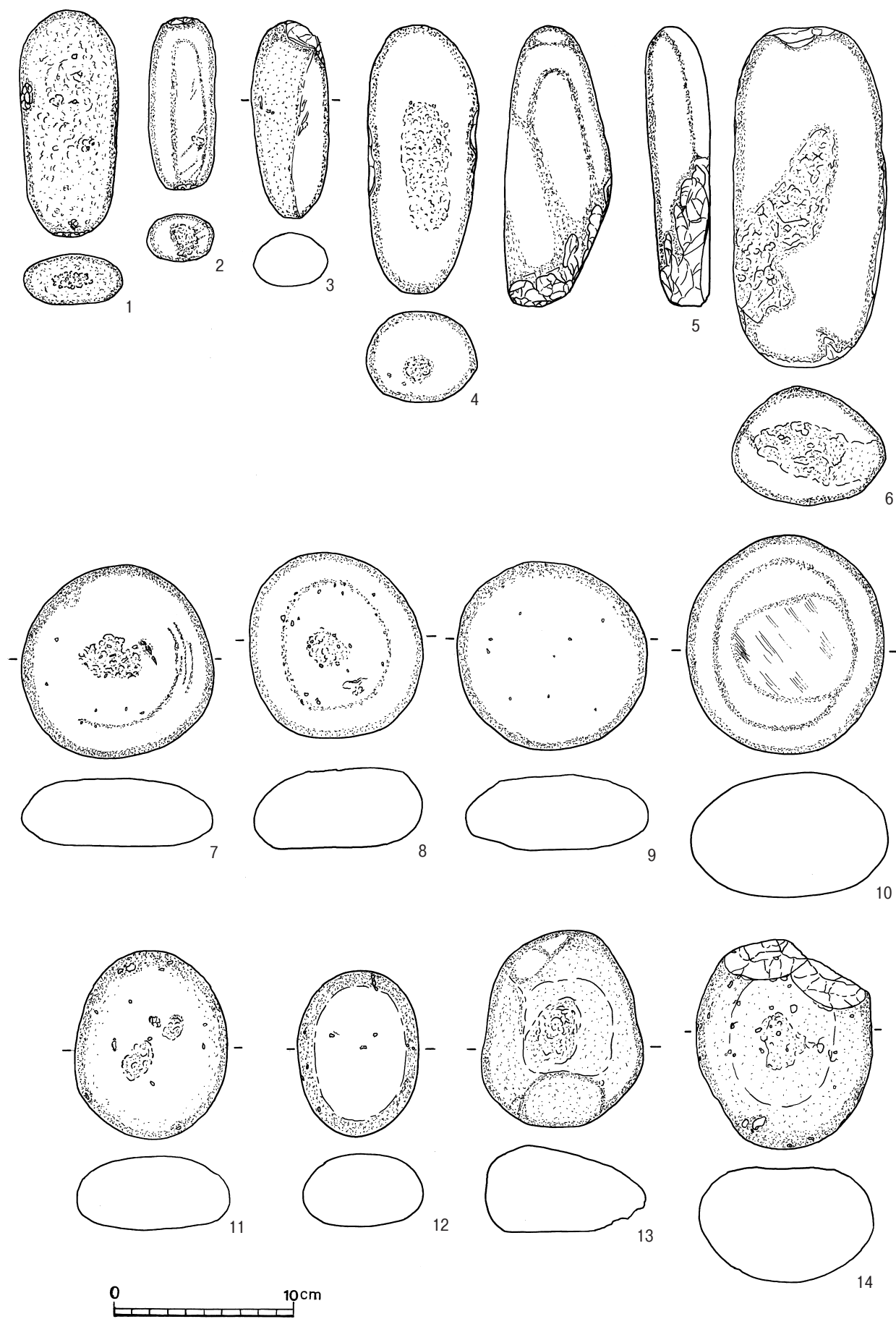


图102 敲石·磨石類①

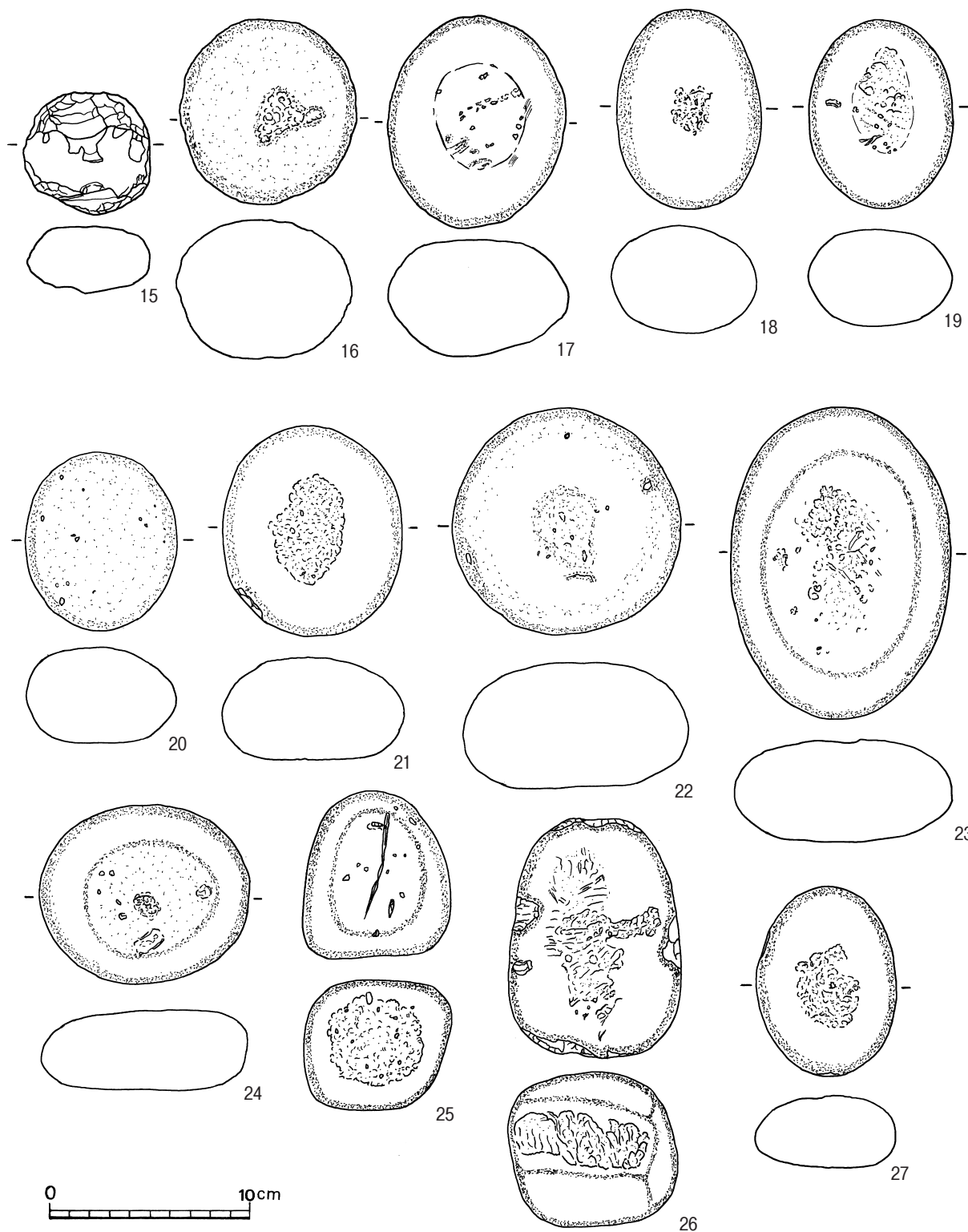


图103 敲石·磨石類②

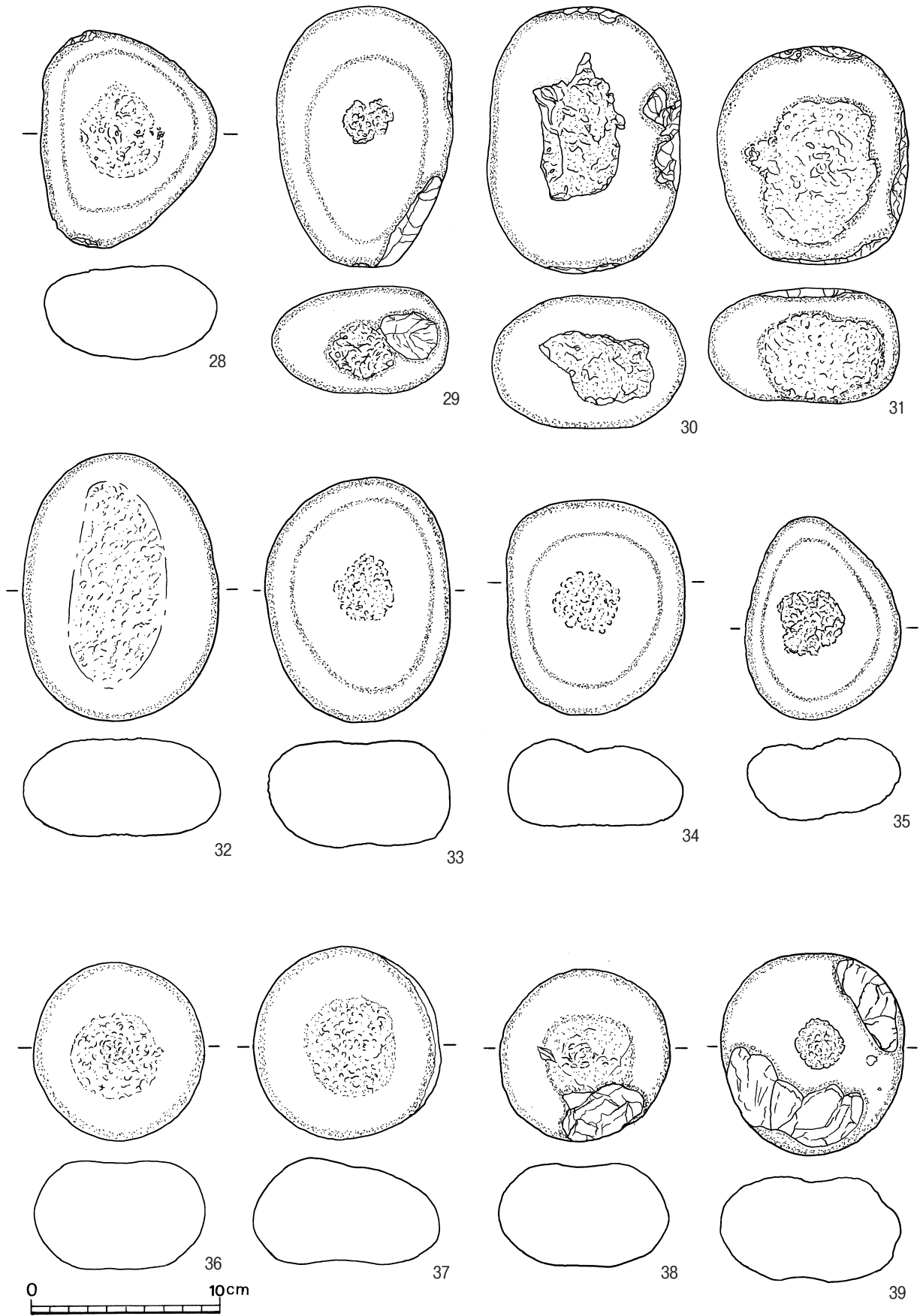


图104 敲石·磨石類③

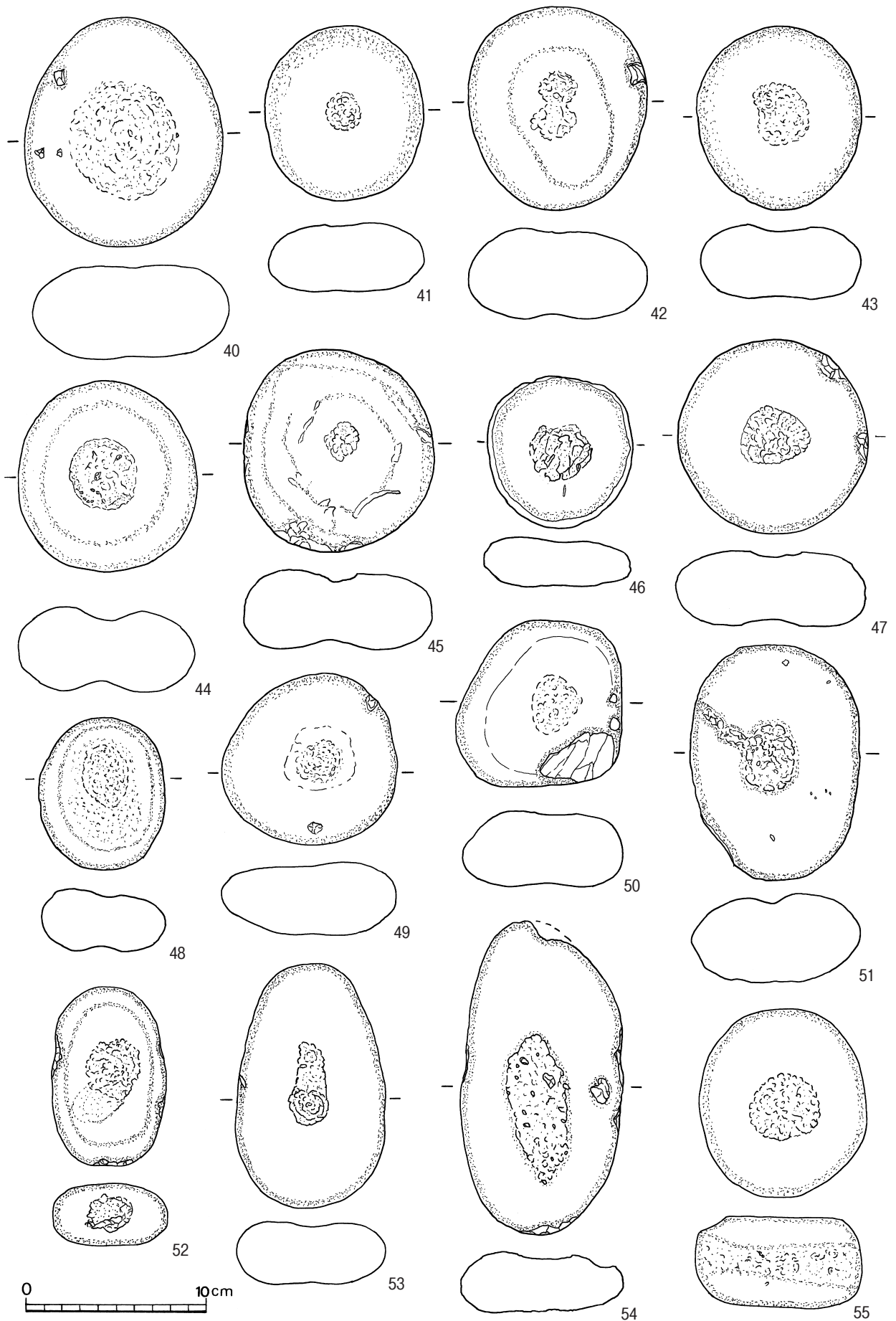


图105 敲石·磨石類④

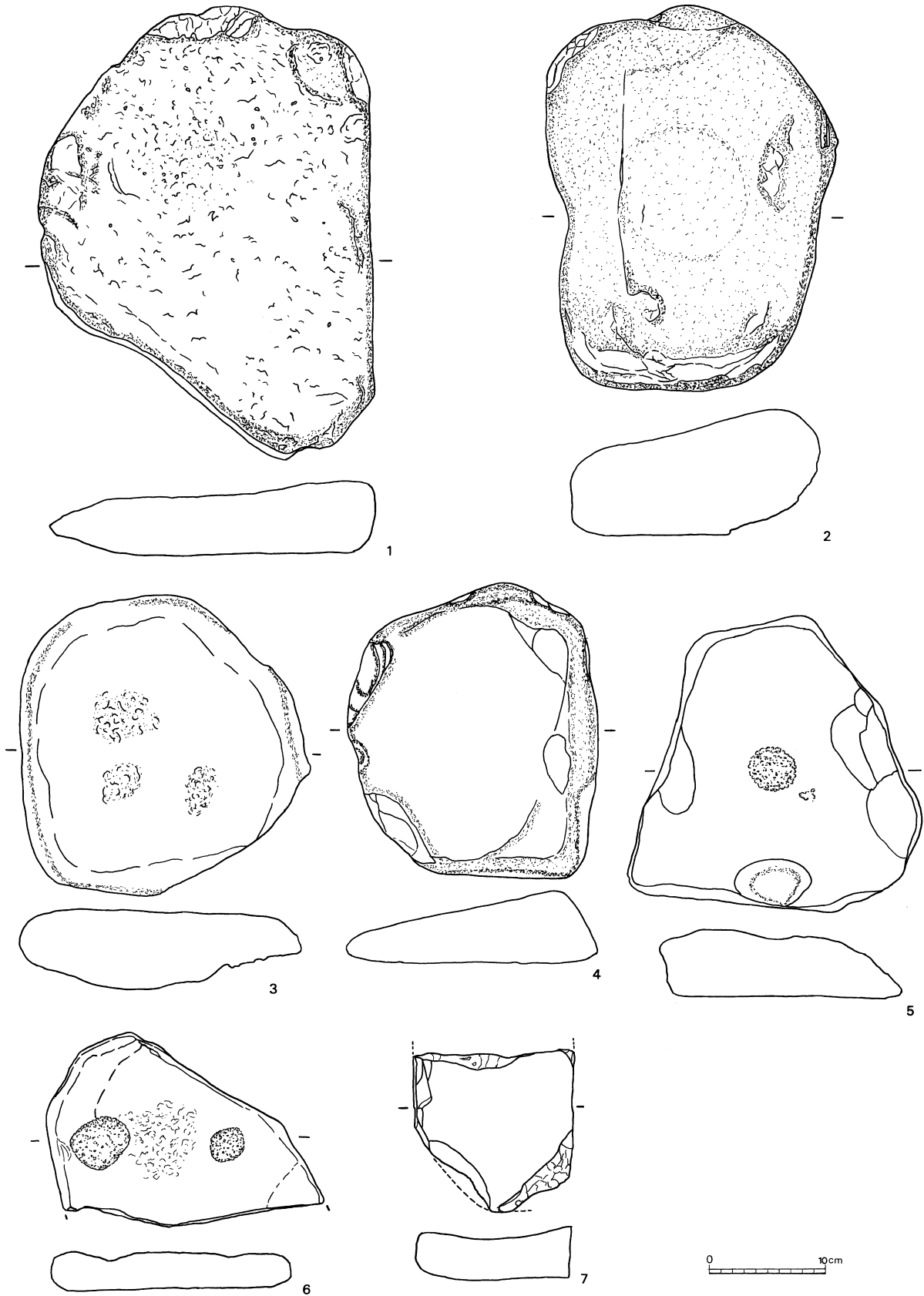


图106 石皿類

(3) 砥石類 (図107・図108)

砥石類の出土量も多い。小形から大形のものまで多様である。素材となる石材の形状は海岸で採集できる平たい礫や円礫を素材とする一群(8~11・14)と板状の砂岩を素材とする一群(1~7・12・13)に分類できる。機能面を複数有するものがほとんどである。



図107 砥石類①

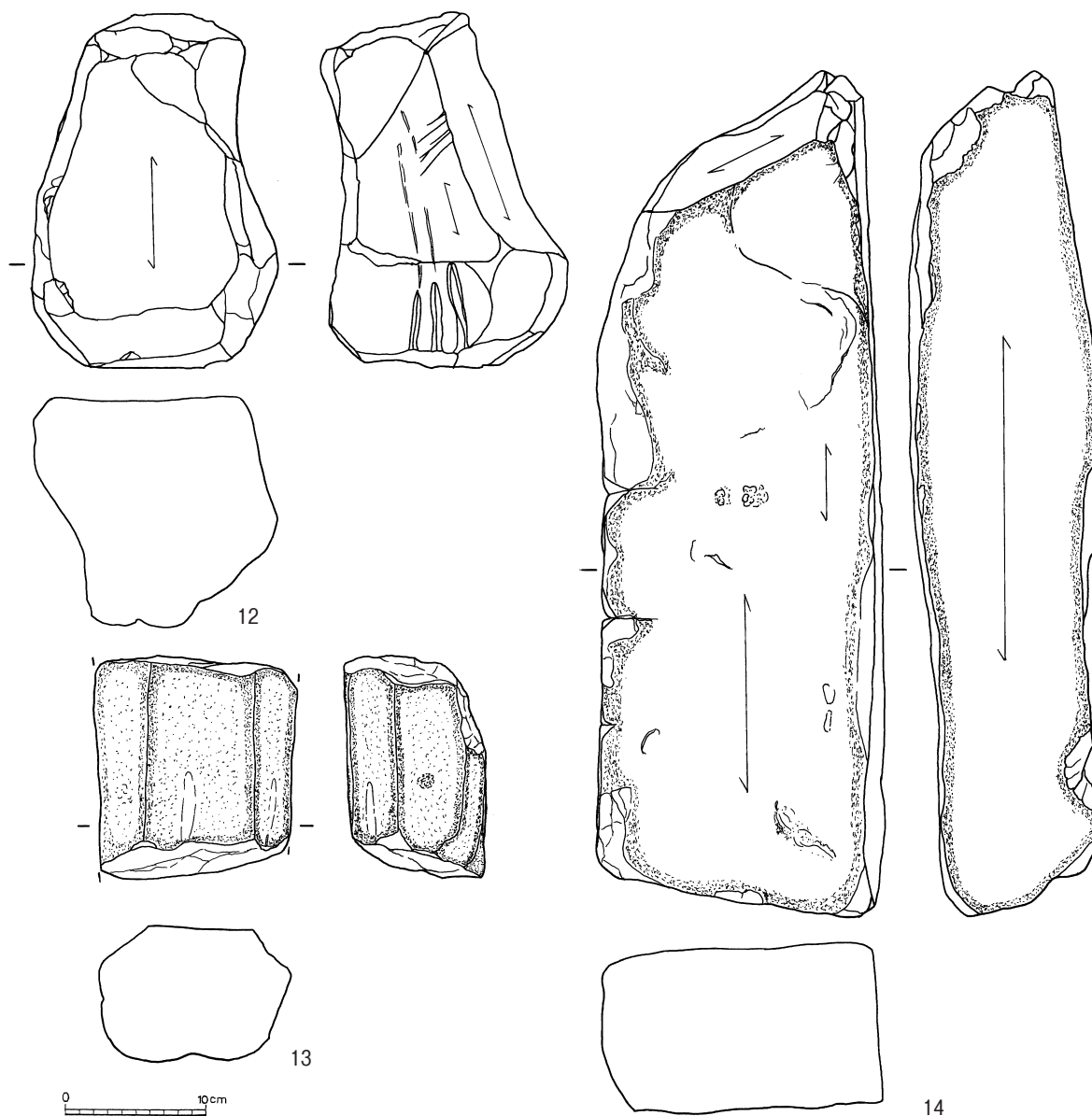


図108 砥石類②

(4) 扁平片刃石斧

扁平片刃石斧も原の辻遺跡で多出する石器の一つである。石材は3がホルンフェルス、他は頁岩製である。素材となる頁岩は『I』によれば原産地の候補として島内の勝本層群と対馬の対州層群に産出する頁岩をあげるが断定はしていない。しかし石器に見られる節理や縞模様、石質からみて後者の可能性が高い。頁岩を使った扁平片刃石斧の製作工程の復元は『I』で詳細に報告されている。

1は刃部を含め全面を丁寧に研磨している。裏面の刃部側に幅2mmの使用痕と思われる光沢（ポリッシュ）がみられる。

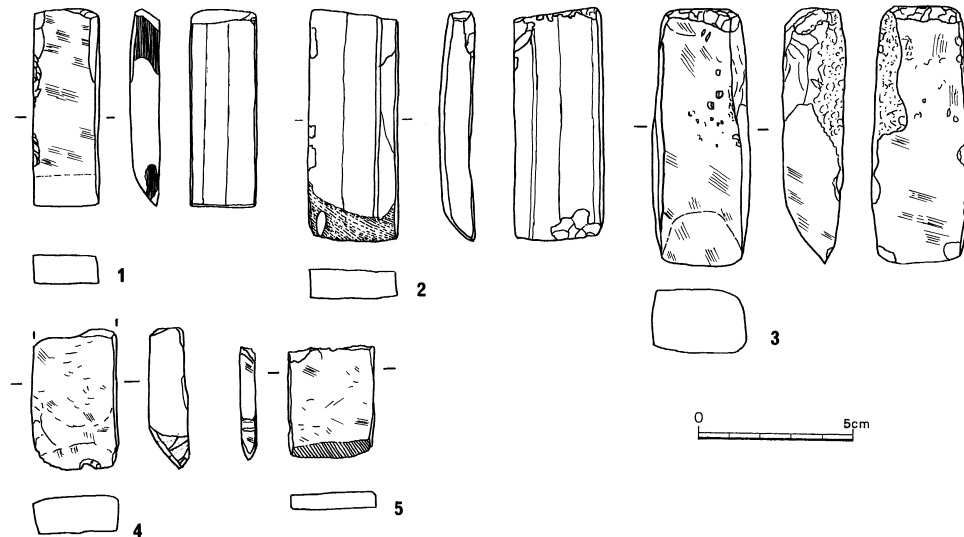


図109 扁平片刃石斧

(5) 石庖丁

石庖丁の多くは報告済みである。2点とも素材は頁岩である。1は刃部が直線になる弧背直刃形である。刃部は両刃である。金属工具によると思われる穿孔が2箇所施されている。2は直線的な背部と弧状の刃部をもつ。刃部は片刃である。

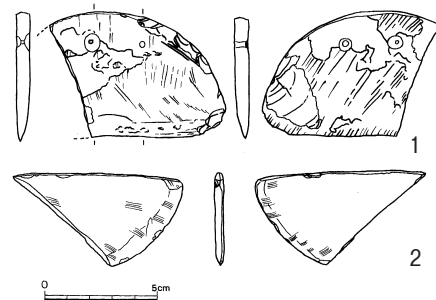


図110 石庖丁

(6) 石鎌

石鎌は原の辻遺跡から大量に出土しており、代表的な石製収穫具と位置づけられている。

ここで報告する資料は6を除く7点はいずれも破損品であり、『I』での分類基準に当てはめることはできない。6は薄い砂岩を素材とした背面と基部側面が直角になるB類で、直刃である。刃部を局部磨製している。他の7点はいずれも頁岩を素材とする。いずれも背縁と刃部を研磨している。1～3・5・7は背縁もしくは刃部を研磨しており使用による破損と思われる。8は未製品の可能性がある。4は製作途上の放棄されてものと思われる。

(7) 石製支脚

石製支脚（クド石）は原の辻遺跡を特徴付ける石器にひとつである。『I』では背面のつまみに着目してA類：突起を削りだしたもの、B類：体部を削ってつまみをつけたもの、C類：つまみを持たないものの3類に区分した。それに倣うと、1はC類にあたる。玄武岩製で被熱痕が顕著である。2・3はA類である。2は多孔質の重量感のある石材を素材とする。側面が被熱し赤化している。3は多孔質で重量感に乏しい軽石のような石材を使用している。上下両端は破損している。4はつまみが付いておりA類と思われる。

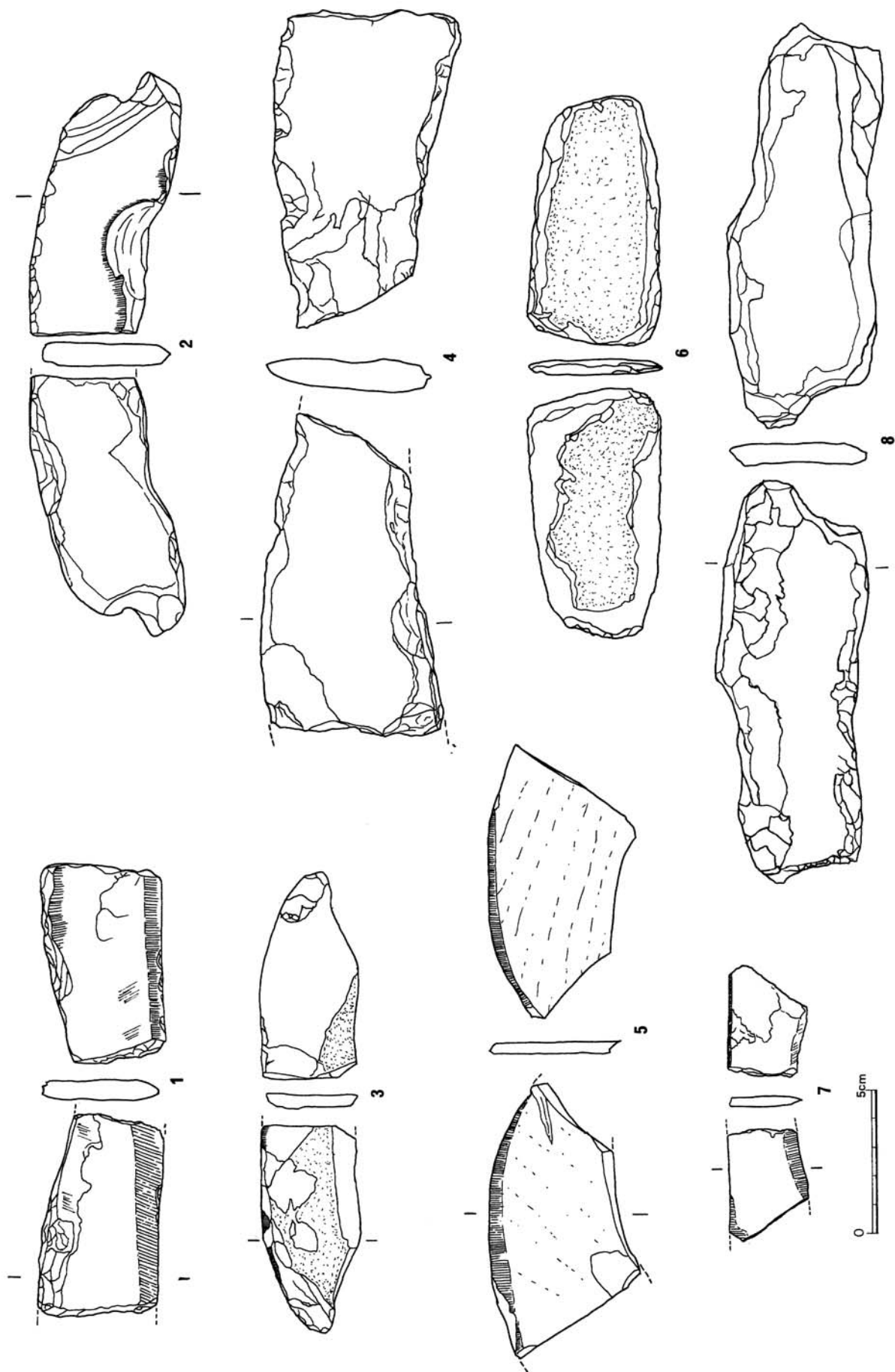


图111 石鎌

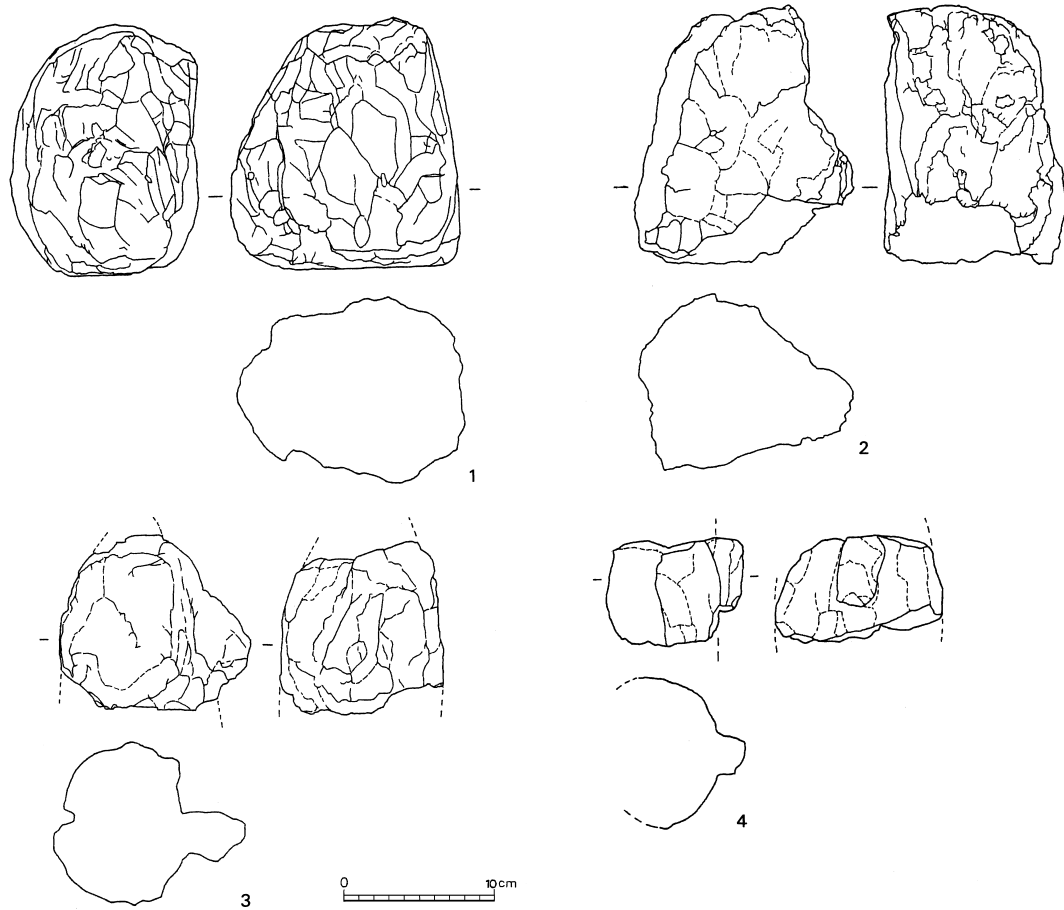


図112 石製支脚

(8) 石製漁撈具

未報告の石製漁撈具は3点である。1は『I』の長軸に1条、短軸に1条の溝を持つA2類にあたる。両端と裏面を欠損している。2は長軸に1条の溝をめぐらせるA1類である。溝は断面V字形でしっかりしている。1・2はいずれも頁岩を素材とする。3は海浜礫を素材としたもので礫の短軸の端部を粗く打ち欠いて緊縛部を作り出したものでD2類に該当する。玄武岩製である。

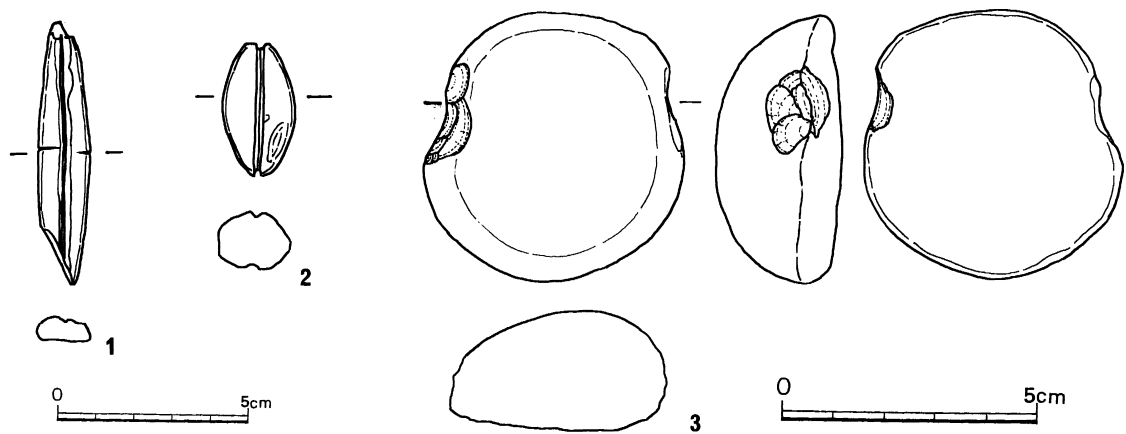


図113 石製漁撈具

表13 弥生時代石器観察表①

図	番号	調査区	遺構	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
102	1	不條 G 区	SR01	3 層	敲石	玄武岩	12.40	5.50	2.80	287.1	
	2	石田高原 C 区拡張		3 層	敲石	玄武岩	9.60	3.60	2.60	158.3	
	3	石田高原 A 区	西	4b 層	敲石	ホルンフェルス	10.85	4.10	2.85	204.1	
	4	石田高原 A 区	SD 4	1 層	敲石	玄武岩	14.80	6.15	5.00	727.1	
	5	石田高原 A II 区	東トレ		敲石	玄武岩	15.40	5.80	3.50	415.0	
	6	石田高原 A 区	SD 4	1 層	敲石	玄武岩	18.55	8.50	6.50	1152.1	
	7	不條 D 区	南トレ		敲石	玄武岩	10.60	10.60	4.80	638.1	
	8	不條 G 区	SR01	3 層	敲石	玄武岩	10.20	9.30	4.30	681.9	
	9	不條 G 区	SR01	3 層	敲石	凝灰岩	10.40	10.50	4.30	589.0	
	10	不條 G 区	SR01	3 層	敲石	玄武岩	12.00	10.90	6.70	1382.2	
	11	不條 D 区	南トレ		敲石	玄武岩	10.30	8.40	4.00	540.2	
	12	不條 E 区	集石周辺		敲石	玄武岩	13.60	14.60	6.10	1762.6	
	13	不條 E 区	集石周辺		敲石	玄武岩	10.80	8.90	4.90	686.8	
	14	不條 E 区	集石遺構		敲石	硬質砂岩	11.50	9.70	6.40	1026.5	
103	15	石田高原 B 区		5 層	敲石	硬質頁岩	6.05	6.30	3.40	190.5	
	16	石田高原 B II 区	落ち込み	②層	敲石	玄武岩	9.10	8.70	6.90	775.0	
	17	石田高原区	SD 4	1 層	磨石・敲石	玄武岩	10.50	9.40	5.70	790.0	
	18	石田高原 A 区	SD 3	1 層	磨石・敲石	玄武岩	9.80	7.20	5.30	583.3	
	19	石田高原 A 区	SD 4	1 層	磨石・敲石	玄武岩	9.40	7.15	4.75	492.1	
	20	石田高原 D 区	北	2 層	磨石・敲石	玄武岩	8.80	7.50	4.80	500.5	
	21	石田高原 A 区	SD 4	1 層	磨石・敲石	玄武岩	10.45	9.05	5.10	769.5	
	22	石田高原 C 区	南	4b 層	磨石・敲石	玄武岩	11.20	11.20	6.25	1244.8	
	23	石田高原 A 区	SD 5	1 層	磨石・敲石	玄武岩	15.40	10.80	5.10	1396.4	
	24	石田高原 D 区	南西南サブトレ		磨石・敲石	玄武岩	10.50	8.80	4.00	623.2	
	25	石田高原 A 区	西	4b 層	敲石	玄武岩	8.35	7.45	6.50	647.0	
	26	不條 G 区	SR01	3 層	敲石	玄武岩	12.00	8.50	7.70	1225.2	
	27	高元 H 区		3 層	敲石	玄武岩	9.45	6.95	3.60	355.4	
104	28	不條 G 区	トレ SR01	3 層	磨石・敲石	玄武岩	11.60	10.30	5.00	741.3	
	29	石田高原 B 区	北礫群		磨石・敲石	玄武岩	14.00	9.50	5.80	1177.5	
	30	石田高原 F 区	南 SD 3		磨石・敲石	玄武岩	14.30	10.50	7.20	1650.7	
	31	石田高原 B 区	北礫群		磨石・敲石	玄武岩	11.80	10.30	6.20	1252.2	
	32	高元 I 区		3 層	磨石・敲石	玄武岩	14.15	10.40	5.15	1288.6	
	33	不條 G 区	SR01	3 層	磨石・敲石	玄武岩	13.00	9.85	5.60	1223.9	
	34	不條 G 区	SR01	3 層	敲石・凹石	玄武岩	11.40	9.60	4.60	818.4	
	35	不條 G 区	表採		敲石・凹石	玄武岩	10.75	8.30	4.30	467.4	
	36	石田高原 A 区	SD 3	1 層	敲石・凹石	玄武岩	9.50	9.05	5.75	763.9	
	37	石田高原 A 区	SD 4	1 層	敲石・凹石	玄武岩	10.25	9.50	5.70	869.0	
	38	石田高原 B I 区	西	3C 層	敲石・凹石	玄武岩	9.20	9.00	5.40	630.0	
	39	石田高原 B I 区	西	3C 層	敲石・凹石	玄武岩	9.90	9.50	5.60	880.0	
105	40	石田高原 A 区	SD 3	1 層	敲石・凹石	玄武岩	12.65	11.00	5.20	1144.3	
	41	石田高原 B II 区	落ち覆土	①層	敲石・凹石	玄武岩	9.70	8.70	3.75	550.0	
	42	石田高原 A 区	SD 5	1 層	敲石・凹石	玄武岩	11.30	9.90	5.00	926.3	
	43	石田高原 B II 区	落ち込み	②層	敲石・凹石	凝灰岩	10.20	8.90	4.10	585.0	
	44	石田高原 E 区	北	4 層	敲石・凹石	玄武岩	10.50	9.90	4.80	730.0	
	45	石田高原 A 区	SD 5	1 層	敲石・凹石	玄武岩	11.20	10.65	4.70	859.5	
	46	石田高原区	SD 6	1 層	敲石・凹石	玄武岩	8.45	8.00	2.70	300.5	
	47	石田高原 F 区	南	3 層	敲石・凹石	玄武岩	10.80	10.40	4.20	764.6	
	48	石田高原 A 区	SD 3	1 層	敲石・凹石	砂岩	8.45	7.05	3.70	326.4	
	49	石田高原 F 区	南	3 層	敲石・凹石	玄武岩	10.80	10.40	4.20	764.6	

表13 弥生時代石器観察表②

図	番号	調査区	遺構	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
105	50	石田高原 B II 区	落ち込み	①層	敲石・凹石	玄武岩	9.25	9.25	4.50	635.0	
	51	石田高原 B II 区	落ち込み	②層	敲石・凹石	玄武岩	13.10	9.40	4.90	940.0	
	52	石田高原 A 区	西	4 b 層	敲石・凹石	玄武岩	10.05	6.45	3.50	391.2	
	53	石田高原区	SD 1		敲石・凹石	玄武岩	13.40	8.30	3.50	660.0	
	54	高元 E 区		3 層	敲石・凹石	玄武岩	17.40	9.05	3.40	702.2	
	55	原地区	SD 1	1 層	敲石・凹石	玄武岩	10.50	9.30	5.00	855.8	
106	1	原地区	SD 1	2 層	石皿	玄武岩	38.90	28.90	6.10	9000	
	2	石田高原 B II 区	落ち込み I	①層	石皿	玄武岩	30.30	24.90	10.70	1400.0	
	3	石田高原 A 区	SD 4	1 層	石皿	玄武岩	25.00	26.05	6.75	6320.0	
	4	石田高原 A 区	SD 4	1 層	石皿	玄武岩	21.80	24.60	6.30	5080.0	
	5	石田高原 A 区	SD 3	1 層	石皿	玄武岩	25.45	25.15	5.70	5760.0	
	6	高元 I 区	トレンチ内	4 層	石皿		16.85	23.65	3.30	1920.0	
	7	北区 E-4	SD 5		石皿	砂岩	14.00	13.40	5.20	1180.0	
107	1	石田高原 D 区	北	3 層	砥石	砂岩	5.30	2.75	2.15	48.3	
	2	石田高原 C 区	北	4 c 層	砥石	砂岩	69.90	4.80	3.10	123.4	
	3	石田高原 E 区	南	4 層	砥石	砂岩	7.60	4.60	2.20	119.2	
	4	石田高原 D 区	南	4 層	砥石	砂岩	10.50	8.30	1.10	167.0	
	5	原地区	SD 1	3 層	砥石	砂岩	16.80	12.00	3.30	806.5	
	6	不條 E 区		2 層	砥石	砂岩	11.20	10.15	5.80	978.3	
	7	高元 E 区		3 層	砥石	砂岩	12.30	8.20	2.10	151.0	
	8	石田高原 A 区	SD 4	1 層	砥石	砂岩	12.60	10.70	3.70	649.2	
	9	石田高原 A 区	SD 3	1 層	砥石	砂岩	15.00	11.20	4.55	990.3	
	10	不條 H 区	旧調査区		砥石	硬質砂岩	7.60	7.30	5.00	353.9	
	11	石田高原 B I 区	西	3 C 層	砥石	硬質砂岩	9.90	9.50	5.60	880.0	
108	12	原ノ辻	5号溝(上)		砥石	砂岩	15.10	10.50	10.50	1720.0	
	13	高元 H 区	TP	4 層	砥石	砂岩	9.45	8.60	6.00	616.9	
	14	石田高原 A 区	SD 3	1 層	砥石	砂岩	36.00	12.35	8.05	5780.0	
109	1	2 原河	C 3-5		扁平片刃石斧	頁岩	6.60	2.20	1.00	40.0	
	2	2 原河	CD-5 ヤ	3 層	扁平片刃石斧	頁岩	7.70	3.00	1.15	60.0	
	3	E 区	SX 2	3 層	扁平片刃石斧	ホルンフェルス	8.50	3.10	2.10	120.0	
	4	石田高原 C 区	南集石内		扁平片刃石斧	頁岩	4.60	2.80	1.30	29.5	
	5	石田高原 E 区	北	4 層	扁平片刃石斧	頁岩	3.70	2.90	0.50	11.2	
110	1	02県道第 9		6 層	石包丁	頁岩	5.70	8.00	0.65		
	2	北区 A-3	SD 5	最下層	石包丁	頁岩	4.25	7.75	0.45	20.0	
111	1	石田高原 C 区	南	4 c 層	石鎌	頁岩	7.20	4.40	0.70	45.3	
	2	石田高原 D 区	北	2 層	石鎌	頁岩	9.30	5.40	0.90	67.9	
	3	不條 D 区	南トレ	旧河川	石包丁	砂岩	7.30	3.50	0.50	23.7	
	4	石田高原 B 区	南	4 b 層	石鎌	頁岩	11.30	6.50	1.20	119.3	
	5	南区	SD 5	下層ベルト	石鎌	頁岩	4.60	9.70	0.40	40.0	
	6	高元 B 区	落ち込み北側	3 層	石鎌	頁岩	8.80	4.65	0.50	300.0	
	7	石田高原 E 区	南	2 層	石鎌	頁岩	3.90	3.00	0.40	7.9	
	8	高元 E 区		4 層	石鎌	頁岩	14.30	5.30	0.85	90.0	
112	1	石田高原 F 区	南	3 層	石製支脚	玄武岩	16.50	15.20	12.60	2130.0	
	2	石田高原 A 区		5 層	石製支脚	玄武岩	17.10	14.60	12.10	2722.5	
	3	石田高原 A 区	SD 3	1 層	石製支脚	玄武岩	11.50	12.70	10.90	658.4	
	4	石田高原区	表探	-	石製支脚	玄武岩	7.10	9.20	11.20	461.1	
113	1	池田大原10区		2 層	石錘	頁岩	7.00	1.40	0.70	20.0	
	2	原 9-B		土坑	石錘	頁岩	3.55	2.00	1.50	20.0	
	3	中区		4 a 層	石錘	玄武岩	10.85	10.40	5.15	800.0	

4. 金属器

(1) 青銅器

平成17年度～平成26年度の10年間で原の辻遺跡で出土した青銅器は表14、図114のとおりである。

銅鏃

原の辻遺跡出土の青銅器の中で、銅鏃は出土点数が最も多い。多数存在して機能する鏃という性質を反映している面が強いものの、以前の出土品の点数を合わせ180点以上これまで出土していることは注意される。これまで銅鏃は包含層以外に、濠、溝、住居址、墓地など各種遺構で発見されてきたが、2006年度調査（IK10）高元地区では土器溜から4点の銅鏃が出土している。

出土する銅鏃について福田一志は、A類：篋被を持つ原の辻を代表する中期後葉の銅鏃、B類：A類からやや退化傾向をみせ、篋被の造りが雑でやや扁平となる銅鏃、C類：逆刺の造りが弱く、篋被が消滅し、樋が特徴的な銅鏃、D類：断面三角形を呈し、逆刺は短いが鋭く、茎の側面から削りだす銅鏃、E類：茎が刃部よりも長くなり、造りも概ね雑となる銅鏃の5類に分類している。時期的には丁寧な造りのものから篋被や、茎の面取りが退化し、全体に扁平になると指摘されている（福田 2005）。近年10年間で周度した銅鏃でもA類（図114-13）、C類（図114-9）、D類（図114-2）、E類（図114-4, 6, 25）などが確認される。このほか図114-23のように扁平で幅広い銅鏃も出土している。

武器形青銅器

総集編I刊行時点での剣の出土事例は戦国式銅剣1点、細型銅剣8点の総計9点であったが、2004年度調査（IK2）石田大原355区5号土壙墓で1点細型銅剣の先端部（図114-28）が出土しており、総計は10点となった。これまで1996年度調査不條地区3号旧河道出土の細型銅剣1点を除外すると、残りは石田大原地区の墓域から出土することが指摘されていたが（福田 2005）、本例にもこの出土傾向を補強する。一方、2007年度調査（IK12）高元地区I層では武器形青銅器の先端部（図114-29）が出土している。本例は刃部残存状況から鋒に近い部分であり、樋も鋒の近くまで及んでいる。直径4mm程度の円孔になる縁部がみられる。細型銅剣、細型銅矛、細型銅戈などの可能性があるが特定できない。ミニチュア製品の可能性もある。丘陵居住域における武器形製品の出土は稀で、貴重な事例となった。

鏡

2006年度調査（NH36）石田大原地区1層整地層から出土した銅鏡縁は2003年度出土品と同一個体であるとみられ、図114-30のように復元される。内行花文鏡で四葉座の銘は「長宜子孫」であるとみられる。2008年度調査（IK14）石田大原地区344-A区で地山層に突き刺さった状態で出土した鏡（図114-31）は異体字銘帯鏡で、銘は「光而象夫而日之月心塞」であることから「内清以質昭明」鏡であるとみられる。付近では銅鏡片とみられる銅片が出土している（図114-32）。

带状円環形青銅製品

2007年度調査（IK12）高元Ⅶ区Ⅲ層出土带状円環形青銅製品（図114-33）は、全長3.6cm、最大幅

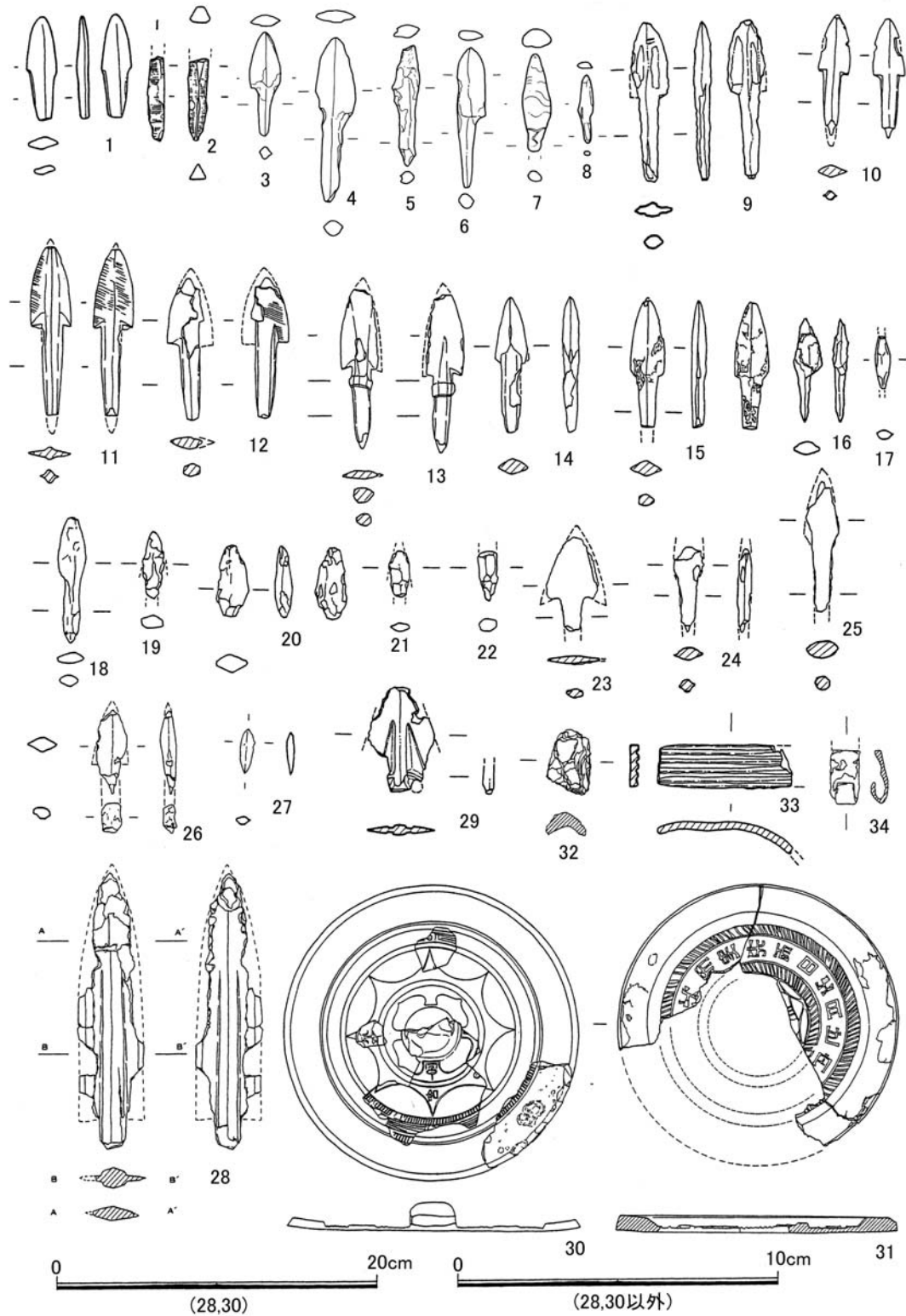


図114 原の辻遺跡出土青銅器

2.2cmで、幅約1.5mの凹線が4条平行にみられる。腕輪の可能性が指摘されている。これまで原の辻遺跡では円環型銅釦4点と有鉤銅釦3点が出土している。大陸・半島系の円環型銅釦は、例えば、平壤美林里、慶州舎羅里130号墓、対馬塔ノ首などでみられるように複数点を同時に装着するので、外観上はこの帯状円環形青銅製品に類似するが、大きさが小さいので不確実な点が残る。

表14 平成17～26年度原の辻遺跡出土青銅器

番号	報告書				地区	遺構・層位	伴出した遺物の年代	器種
	集号	頁	図	番号				
1	NH33	51	46	1	石田高原	E区Ⅲ層		銅鏃
2	NH33	51	46	2	石田高原	F区Ⅲ層		銅鏃
3	NH36	49	31	3	石田高原	C区4b層		銅鏃
4	NH36	49	31	4	石田高原	B区4層		銅鏃
5	NH36	49	31	5	石田高原	A区4層		銅鏃
6	NH36	49	31	6	石田高原	A区4b層		銅鏃
7	NH36	49	31	7	石田高原	D区4層		銅鏃
8	NH36	49	31	8	石田高原	E区4層		銅鏃
9	IK9	67	30	1	原	XV-A区3層		銅鏃
10	IK10	70	40	196	高元	Ⅲ区土器溜	弥生後期	銅鏃
11	IK10	70	40	197	高元	Ⅲ区土器溜	弥生後期	銅鏃
12	IK10	70	40	198	高元	Ⅲ区土器溜	弥生後期	銅鏃
13	IK10	70	40	199	高元	Ⅲ区土器溜	弥生後期	銅鏃
14	IK10	140	72	188	高元	V区SC02	弥生中期中葉 ～古墳初頭	銅鏃
15	IK10	140	72	189	高元	V区包含層		銅鏃
16	IK12	45	7	51	高元	Ⅵ区包含層		銅鏃
17	IK12	74	29	146	高元	Ⅵ区包含層		銅鏃
18	IK14	35	19	133	高元	Ⅷ区包含層		銅鏃
19	IK14	35	19	134	高元	Ⅷ区包含層		銅鏃
20	IK14	35	19	135	高元	Ⅷ区包含層		銅鏃
21	IK14	35	19	136	高元	Ⅷ区包含層		銅鏃
22	IK14	35	19	137	高元	Ⅷ区包含層		銅鏃
23	IK14	153	23	256	原	XⅦ区1A区3層		銅鏃
24	IK14	153	23	257	原	XⅦ区1A区3層		銅鏃
25	IK14	153	23	258	原	XⅦ区1A区3層		銅鏃
26	IK16	36	14	57	高元	Ⅷ-4区V層		銅鏃
27	IK16	36	14	58	高元	Ⅷ-4区V層		銅鏃
28	IK2	26	9	9	石田大原	355区5号土壙墓		細型銅剣
29	IK12	114	20	162	高元	Ⅶ-1・2区I層		武器形青銅器切先
30	NH36	69	39	17	石田大原	1層整地層		銅鏡（内行花文鏡。2003年出土鏡と同一個体）
31	IK14	172	8	27	石田大原	344-A区地山直上		銅鏡（異体字銘帯鏡「内清以質昭明」）
32	IK14	173	9	28	石田大原	344-B区Ⅱ層		不明銅製品（銅鏡破片？）
33	IK12	113	20	163	高元	Ⅶ-1・2区Ⅲ層		带状円環形青銅製品
34	IK14	173	9	29	石田大原	344-B区Ⅳ層		不明銅製品

不明銅製品

図114-34は2008年度調査（IK14）石田大原地区344-B区Ⅳ層から出土した青銅板の先端が曲げられた不明銅製品である。弥生時代のものではない可能性がある。

中国貨幣

平成17～26年度に限定せず、これまで原の辻遺跡で出土した中国貨幣の状況は、表15、図115のとおりである。長崎県埋蔵文化財センターでは原の辻遺跡出土不明銭2点の透過X線分析を行い、ともに貨泉であることが判明したと（片多報告参照）、原の辻遺跡出土遺物に対する再整理により石田高原地区で貨泉1点が出土していたことが判明したことで、前漢五銖銭1点、大泉五十1点、貨泉14点の総計16点が出土していることとなった。現時点では日本列島弥生遺跡中で第3位の中国貨幣出土量となる。2004年度調査石田高原地区（NH31）で出土した貨泉1点（図115-13）は正式報告がないので、ここで報告する。B区5層（古代～近代層）で出土した。左上がやや欠損している。直径は2.4cmで孔は6mm四方である。最大厚は1.64mmで、残存重さは1.31gである。面には内郭を持つ型式である。側面は面取りされず、丸い。側面では合わせ目は観察されないが、孔ではわずかにズレが観察される。

原の辻では、埋没時期が比較的確実性の高い事例として八反地区土器溜で弥生後期中葉～後葉の壺に入った状態で発見された貨泉（図115-5）が挙げられる。近辺で出土した3点の貨泉の埋没時期も同様であろう。原の辻では濠や溝、包含層から貨泉が出土する事例が多く、濠等ではさまざまな時期の遺物が混入するため、時期決定が困難である。しかし、環濠の埋土から出土する貨泉は比較的上部で出土する例が目立つ。埋土形成時期が新しいからといって、埋没時期も新しいとは限らないが、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に形成された埋土から多くの貨泉が出土することは注目される。このことは原の辻だけでなくカラカミ遺跡や車出遺跡でも認められ、原の辻など北部九州を中心に弥生時代後期後半～終末期に属する貨泉も存在すると考えられる。

原の辻では西側低地の八反地区で11点（大泉五十1点、貨泉10点）、北西側低地の不條地区で1点（五銖銭1点）、丘陵北部の高元地区で3点（貨泉3点）、東側低地の石田高原地区で1点（貨泉1点）が出土しており、西側低地部での出土が目立つ。これと外来系土器の分布を比較すると、最も近い分布を示すのが楽浪・遼東系土器の分布（図74）である。従って、中国貨幣の流入に際しては、楽浪人が関与した可能性が最も高いものと考えられる（古澤 2011, 2015）。

原の辻遺跡にもたらされた中国貨幣の用途については、土器溜や濠等に廃棄される事例が多く「物送り」のような祭祀が行われたと想定する見解がある（宮崎 2004, 2009）。但し、このような事例は廃棄された時点での使用法を示しており、原の辻遺跡に搬入された時点での用途を示すものではない。海村では中国貨幣が交易の対価として用いられたとする見解（武末 2008, 2015, 宮崎 2009）も提示されているが、反対論（古澤 2015）もあり、今後の研究の深化が期待される。

武末純一2008「茶戸里遺蹟斗 日本」『茶戸里遺蹟発掘成果斗 課題』

武末純一2015「弥生時代中国貨幣の機能・用途」『ロード・オブ・ザ・コイン - 弥生時代中国貨幣からみる交流 - 』

福田一志2005「青銅器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

古澤義久2011「東北アジアからみた原の辻遺跡出土中国貨幣の諸様相」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』1

古澤義久2015「長崎県の弥生時代遺跡出土中国貨幣」『ロード・オブ・ザ・コイン - 弥生時代中国貨幣からみる交流 - 』

宮崎貴夫2004「長崎県壱岐出土の弥生時代中国貨幣」『出土銭貨』20

宮崎貴夫2009「壱岐・原の辻遺跡と出土銭貨」『出土銭貨研究の課題と展望』

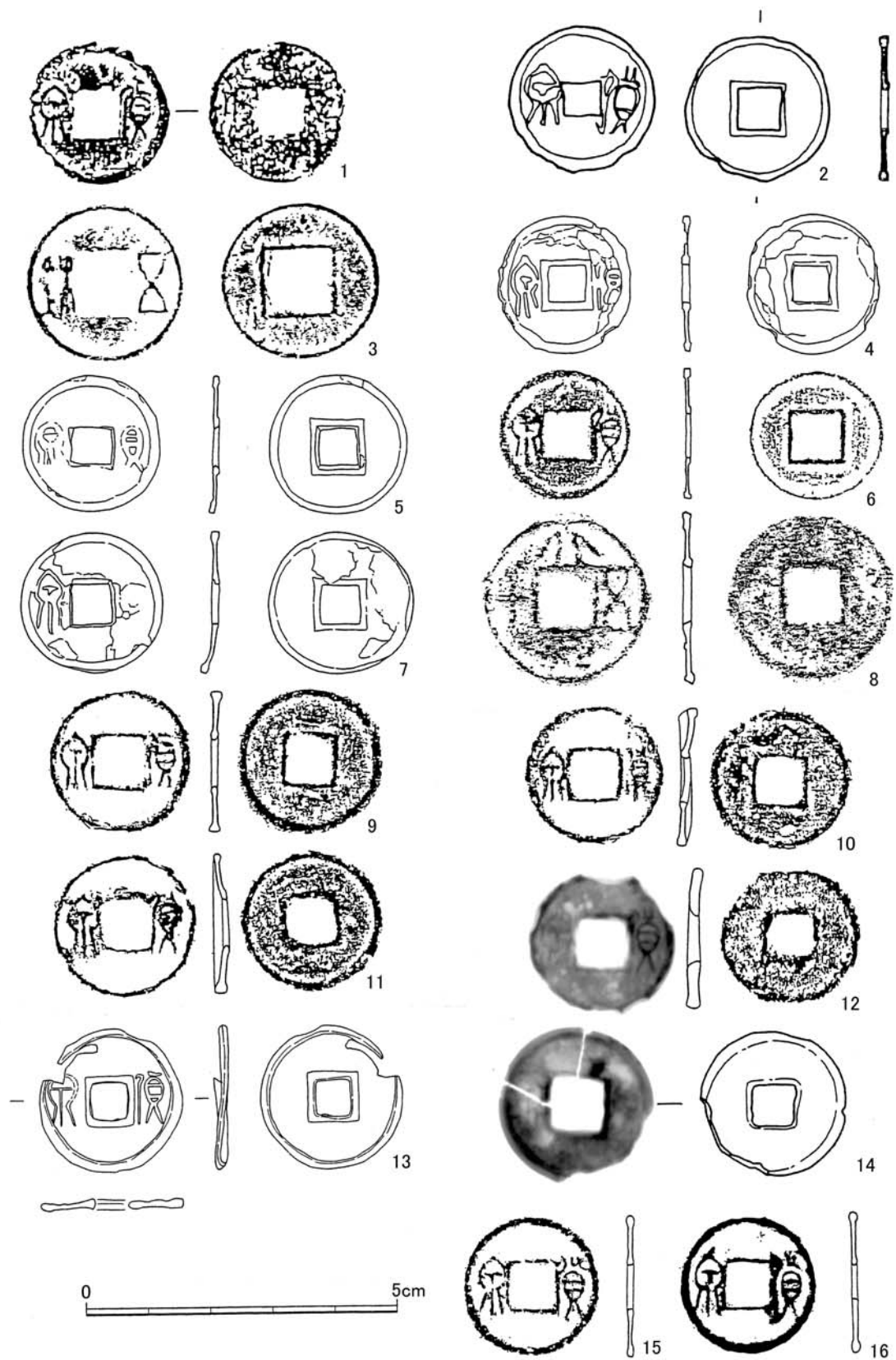


图115 原の辻遺跡出土中国貨幣

表15 原の辻遺跡出土中国貨幣

番号	報告書	出土地区	遺構・層位	種類	出土年度	共伴遺物	推定埋没年代
1		高元	第1層最上面	貨泉	1951	弥生後期中葉～終末期土器、鉄斧、鉄釣針、青銅鏃、ガラス小玉、鹿角製管玉等	弥生後期中葉～終末期
2	NK124	高元	1号溝(環濠)中層	貨泉	1993	弥生中期・後期・古墳初頭土器、瓦質土器、鑄造鉄斧	弥生後期～古墳初頭
3	NH16	不條	D区2号濠	前漢五銖銭	1998	(2号濠) 弥生中期中葉～古墳初頭土器、陶質土器(周辺の土坑) 弥生中期主体	弥生中期土坑に伴う五銖銭が弥生後期の濠に混入した可能性
4	NH19	八反	E区土器溜Ⅰ層	貨泉	1999	須玖Ⅰ式新～後期末土器、粘土帯土器、三韓系瓦質土器	弥生後期
5	NH19	八反	E区土器溜Ⅰ層	貨泉	1999	弥生後期中葉～後葉の壺の中に貨泉	弥生後期中葉～後葉
6	NH19	八反	E区土器溜Ⅲ層	貨泉	1999	須玖Ⅰ式新～後期末土器、粘土帯土器、三韓系瓦質土器	弥生後期
7	NH19	八反	2号旧河道Ⅱ層	貨泉	1999	弥生中期～古墳前期土器、粘土帯土器、楽浪系瓦質土器、三韓系瓦質土器	本来隣接する土器溜に伴う可能性
8	NH21	八反	E区Ⅱ層	大泉五十	2000	近世・近代層	下層の弥生時代層からの混入
9	HH3	八反	コヨウ4区5層	貨泉	2001	SD5を覆う層	弥生後期末～古墳初頭
10	HH3	八反	コヨウ4区5層	貨泉	2001	SD5を覆う層	弥生後期末～古墳初頭
11	HH3	八反	コヨウ4区5層	貨泉	2001	SD5を覆う層	弥生後期末～古墳初頭
12	HH3	八反	5号濠(SD5)上層	貨泉	2001	弥生中期後葉～古墳初頭土器、粘土帯土器、楽浪系土器、三韓系瓦質土器、陶質土器	SD5埋没最終段階である弥生後期末～古墳初頭
13	NM18	石田高原	B区5層	貨泉	2004	古代～近代層	下層の弥生時代層からの混入
14	IK10	高元	包含層	貨泉	2006	弥生中期～古墳初頭土器、粘土帯土器、三韓系瓦質土器、楽浪系瓦質土器	弥生後期～古墳初頭
15	NH39	八反	1号溝(SD1)8層	貨泉	2007		
16	NH39	八反	1号溝(SD1)8層	貨泉	2007		

(2) 鉄器

平成17年度～平成26年度の10年間で原の辻遺跡で出土した鉄器は表16、図116のとおりである。

1) 鉄器の種類

工具としては鑄造鉄斧(図116-1～3)、袋状鉄斧(図116-4～7)、板状鉄斧(図116-8～10)、ヤリガンナ(図116-11～13)、刀子(図116-14,15)、農具としては鉄鎌(図116-16～18)、漁具としてはヤス(図116-23)、釣針(図116-24)、武器としては鉄鏃(図116-19～21)、鉄剣(図116-25,26)などがあり、そのほかに棒状鉄製品や鉄片が出土している。

2) 出土遺構と特異な出土状況

包含層のほか、竪穴建物跡、土器溜、土壙墓からの出土例がある。特異な出土状況としては、船着き場跡3区落ち込みから出土した鑄造鉄斧(図116-1)で刃先や体部の一部に赤色顔料が塗布されていた事例が挙げられる。この鑄造鉄斧は2条突帯を有し、刃先はやや裾広がり、全体は台形状を呈している。刃部は再加工され、段を有している。赤色顔料の塗布、再加工、船着き場の落ち込みからの出土という点を勘案すると、船着き場における祭祀に用いられた可能性がある。2004年度の調査事例であるが、原地区SD1中層(周溝状遺構の周溝)で、鉄鎌とともに鉄剣(図116-25)が出土している。保存処理が完了したため、ここに掲載した。切先が欠失しているが、現存長37cm、最大幅(関)3cm、最大厚(関)0.7cm、茎長さ3cmで、段を作り出した短い茎である。刃関双孔がみられる。周溝状遺構から出土したことから祭祀との関連が考えられる。

3) 年代が比較的明確な資料

年代が比較的限定される資料が幾例か発見されている。2005年度調査船着き場跡落ち込み出土鑄造鉄斧(図116-1)が弥生時代中期前葉～中葉の資料となる。2013年度調査川原畑地区1号竪穴建物跡出土鑄造鉄斧片(図116-3)及び刀子(図116-15)や2008年度調査原地区11号土壙墓出土刀子(図116-14)は弥生時代中期後葉の資料となる。このほか弥生時代中期後葉に属する鉄片も2009年度調査高元X区SD1、2013年度調査川原畑1号竪穴建物跡・河川跡等で発見されている。

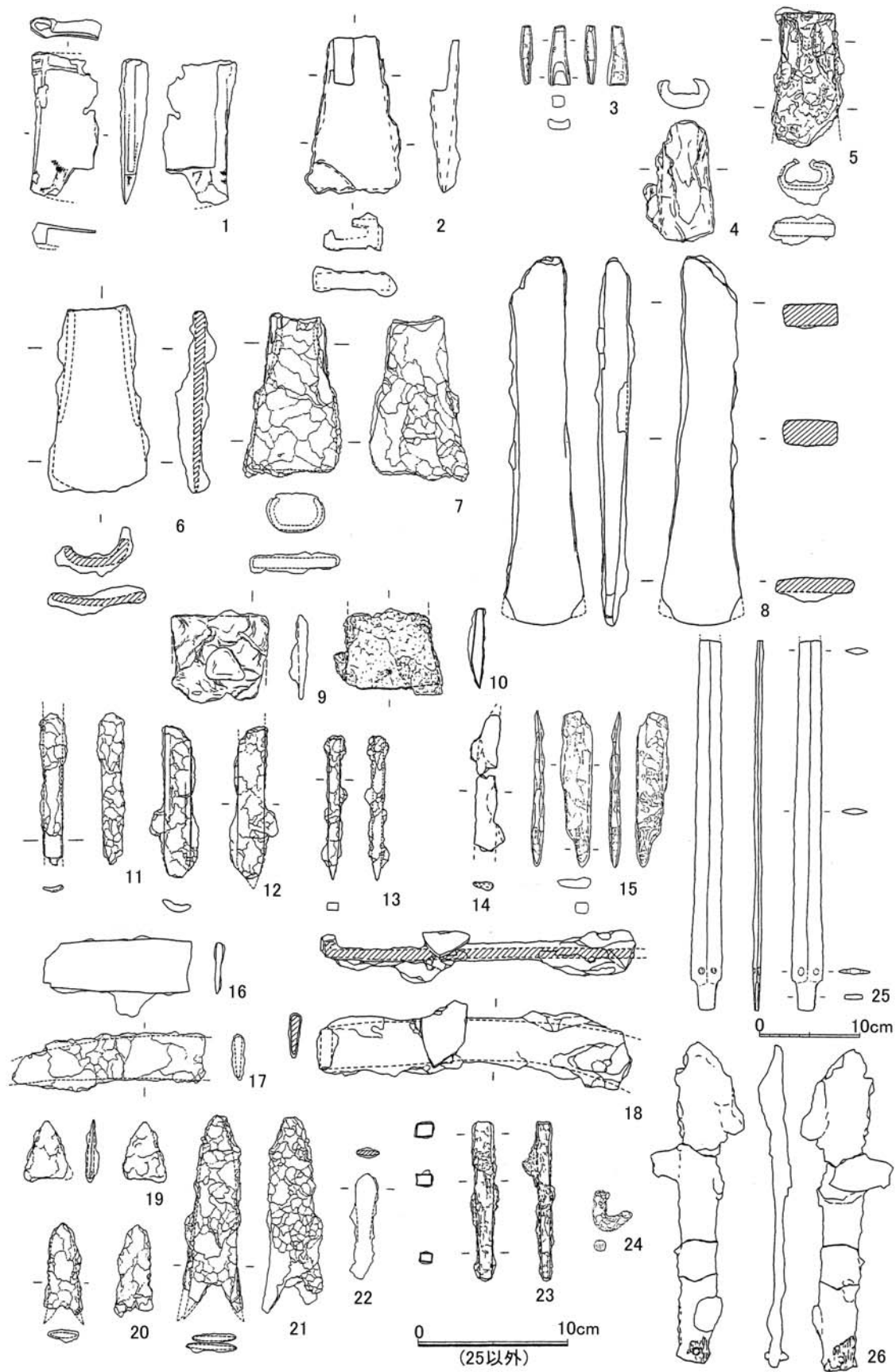


図116 原の辻遺跡出土鉄器

表16 平成17～26年度原の辻遺跡出土鉄器

番号	報告書				地区	遺構・層位	伴出した遺物の年代	器種
	集号	頁	図	番号				
1	NH33	86	63	-	八反	3区落ち込み	弥生中期前葉～中葉	鑄造鉄斧
2	NH39	74	55	60	原	濠⑦層	弥生後期前葉	鑄造鉄斧
3	NM12	35	20	90	川原畑	1号竪穴建物跡①層	弥生中期後葉	鑄造鉄斧片
	IK16	70	15	166	高元	X区2層		鑄造鉄斧
4	IK12	74	29	147	高元	V-2～5区包含層		袋状鉄斧
	IK9	67	30	5	原	XV-A区2層		袋状鉄斧
7	IK10	70	40	191	高元	Ⅵ区土器溜	弥生後期	袋状鉄斧
5	IK10	140	72	185	高元	V区SD01	弥生中期後葉・後期後葉	袋状鉄斧
6	IK12	213	18	29	大川	605-1区包含層		袋状鉄斧
	NH40	63	41	2	石田高原	2区4a層		板状鉄斧・鉄素材
9	IK12	74	29	148	高元	V-2～5区包含層		板状鉄斧
8	IK12	213	18	28	大川	605-1区包含層		板状鉄斧
	NH33	125	89	-	高元	B-1区表土		板状鉄製品
	IK9	67	30	6	原	XV-A区2層		板状鉄製品(斧?)
	IK9	67	30	7	原	XV-A区2層		板状鉄製品(斧?)
	IK9	67	30	8	原	XV-A区2層		板状鉄製品(斧・鋤?)
	IK14	153	23	259	原	XⅦ-1A区1層		鍛造鉄斧
10	IK16	36	14	59	高元	Ⅷ区SC04	弥生中期前葉～古墳前期	鉄斧
11	IK10	70	40	190	高元	Ⅵ区土器溜	弥生後期	ヤリガンナ
	IK12	45	7	47	高元	V-1区包含層		ヤリガンナ
	IK12	45	7	48	高元	V-1区包含層		ヤリガンナ
12	IK12	45	7	49	高元	V-1区包含層		ヤリガンナ
13	IK12	45	7	50	高元	V-1区包含層		ヤリガンナ
	IK14	153	23	260	原	XⅦ-1A区4層		ヤリガンナ
	NH33	51	46	4	不條	Ⅲ層		刀子?
14	NH39	74	55	59	原	11号土壙墓	弥生中期後葉	刀子
15	NM12	35	20	91	川原畑	1号竪穴建物跡①層	弥生中期後葉	刀子?
	IK14	35	19	140	高元	Ⅷ区包含層		刀子
	IK16	70	15	165	高元	X区2層		刀子
16	NH38	56	37	1	石田高原	SD1②層	弥生後期中葉～後葉	鉄鎌
	NH40	63	41	1	石田高原	2区4a層		鉄鎌
	IK9	67	30	4	原	XV-A区3層		鉄鎌
17	IK10	70	40	192	高元	Ⅵ区土器溜	弥生後期	鉄鎌
	IK10	70	40	193	高元	Ⅵ区土器溜	弥生後期	鉄鎌
	IK10	140	72	186	高元	V区包含層	弥生中期後葉・後期後葉	鉄鎌
	IK12	75	30	149	高元	V-2～5区包含層		鉄鎌
	IK12	213	18	30	大川	605-1区包含層		鉄鎌
	IK14	35	19	138	高元	Ⅷ区包含層		鉄鎌
	IK14	35	19	139	高元	Ⅷ区包含層		鉄鎌
	IK14	81	28	145	原	XV-E区包含層		鉄鎌
18	IK14	105	47	259	原	XV-F区1号土器溜	弥生中期後葉～古墳前期	鉄鎌
23	IK16	36	14	60	高元	Ⅷ区SC05	弥生中期・後期	ヤス
24	IK14	173	9	30	石田大原	344-B区Ⅱ層		釣針
19	IK9	67	30	2	原	XV-A区4層		鉄鍬
	IK9	67	30	3	原	XV-A区4層		鉄鍬
20	IK10	70	40	194	高元	Ⅵ区土器溜	弥生後期	鉄鍬
21	IK10	70	40	195	高元	Ⅵ区土器溜	弥生後期	鉄鍬
	IK10	140	72	187	高元	V区SD01	弥生中期後葉・後期後葉	鉄鍬
	IK12	75	30	153	高元	V-2～5区包含層		鉄鍬?
22	IK14	153	23	254	原	XⅦ-1A区4層		鉄鍬
26	NH39	74	55	58	原	4号土壙墓		鉄剣
	IK9	67	30	9	原	XV-A区2層		棒状鉄製品
	IK9	67	30	10	原	XV-A区3層		棒状鉄製品
	IK9	67	30	11	原	XV-A区2層		棒状鉄製品
	IK9	67	30	12	原	XV-A区3層		棒状鉄製品
	IK12	75	30	150	高元	V-2～5区包含層		棒状鉄製品
	IK12	75	30	151	高元	V-2～5区包含層		棒状鉄製品
	IK12	75	30	152	高元	V-2～5区包含層		棒状鉄製品
	NM12	35	20	89	川原畑	1号竪穴建物跡①層	弥生中期後葉	鉄片
	NM12	61	36	206	川原畑	2a区河川跡9層	弥生中期後葉	鉄片
	IK14	153	23	255	原	XⅦ-1A区1層		鉄片
	IK16	70	15	167	高元	X区SD1-4トレンチ	弥生中期後葉	鉄片

5. 木器・骨角器

(1) 木器

平成17年度～平成26年度の10年間で原の辻遺跡で出土した木器は表17、図117のとおりである。2005年度調査石田高原地区0号河川跡、1号河川跡などで横槌、堅杵?未成品、陽物形木製品、短甲(札甲)、ねずみ返し、建築材など多くの木製品が出土している。横槌にはさまざまな寸法のものがあるが、現代の民族誌・民俗事例でも用途に応じてさまざまな寸法の横槌が準備されることは参考となる。2006年度石田高原地区1号道路状遺構出土火きり臼は弥生時代のものではない可能性もあり注意が必要である。

表17 平成17～26年度原の辻遺跡出土木器

番号	報告書				地区	遺構・層位	伴出した遺物の年代	器種	樹種
	集号	頁	図	番号					
1	NH33	52	47	1	不條	0号河川6～8層	弥生後期後半	横槌	クリ?
2	NH38	56	37	6	石田高原	B-II区落ち込み1-②層	弥生中期中葉～後期初頭	横槌	
3	NH33	54	49	9	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	堅杵?未成品	
4	NH33	54	49	10	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	陽物形木製品	マキ属
5	NH33	54	49	11	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	短甲(札甲)	
6	NH36		31	17	石田高原	1号道路状遺構	弥生中期前半～8世紀前半	火きり臼	スギ?
7	NH33	52	47	2	不條	0号河川9層	弥生中期前葉～後期前半	建築部材?	ノグルミ
8	NH33	52	47	3	不條	0号河川9層	弥生中期前葉～後期前半	ねずみ返し	クスノキ科
9	NH33	53	48	4	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	建築材	マキ属
10	NH33	53	48	5	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	建築材	マキ属
11	NH33	53	48	6	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	建築材	マキ属
12	NH33	53	48	7	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	建築材	マキ属
13	NH33	53	48	8	不條	1号河川III層	弥生中期初頭～中期後葉	二股受材	イスノキ属
	NH38	56	37	5	石田高原	A-I区落ち込み2-①層	8世紀代	不明木製品	針葉樹

(2) 骨角器

平成17年度～平成26年度の10年間で原の辻遺跡で出土した骨角器は表18、図118のとおりである。鹿角製刀子柄、鯨骨製紡錘車、鯨骨製剣形製品、鯨骨製篋?などが出土した。鯨骨製紡錘車は、カラカミ遺跡などでもみられ、壱岐島の弥生時代に特徴的な紡錘車である。

表18 平成17～26年度原の辻遺跡出土骨角器

番号	報告書				地区	遺構・層位	伴出した遺物の年代	器種	素材
	集号	頁	図	番号					
1	NH38	56	37	3	石田高原	B-II区落ち込み1-②層	弥生中期中葉～後期初頭	刀子柄	鹿角
2	NH40	63	41	3	石田高原	表採		紡錘車	鯨骨
3	IK10	70	40	200	高元	VI区土器溜	弥生後期	紡錘車	鯨骨
4	IK14	153	23	261	原	XVII-1B区7層		剣形骨製品	鯨骨
5	NH38	56	37	4	石田高原	B-II区落ち込み1-②層	弥生中期中葉～後期初頭	篋?	鯨骨

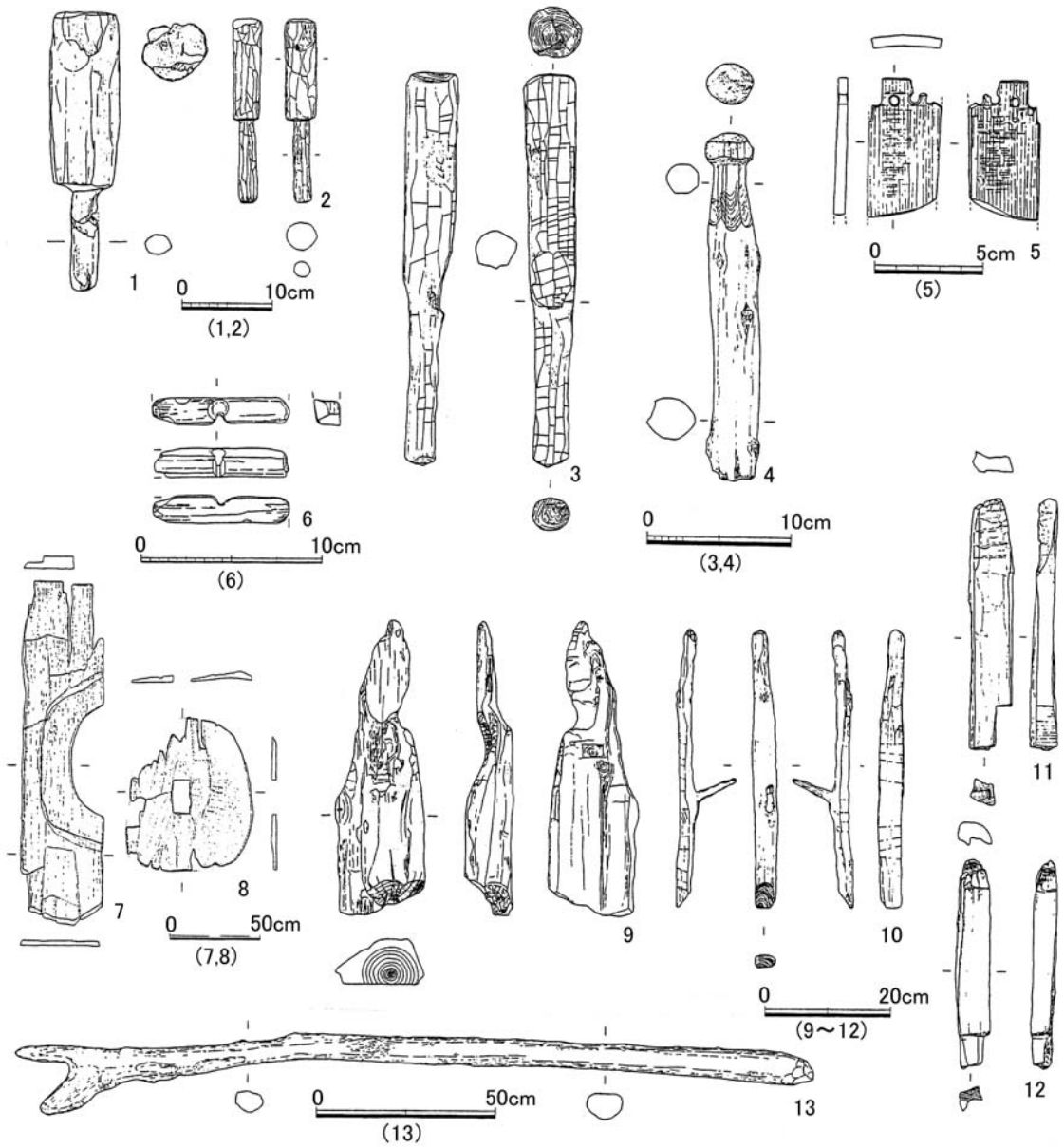


図117 原の辻遺跡出土木器

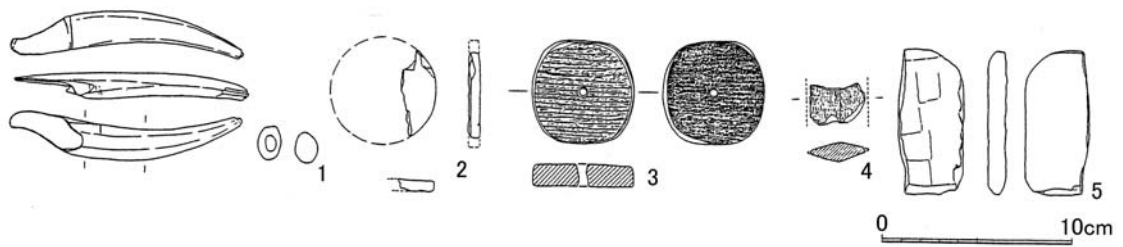


図118 原の辻遺跡出土骨角器

IV. 自然科学分析

1. 原の辻遺跡出土石器の蛍光 X 線分析による原産地推定

(1) 判別図の作成

長崎県埋蔵文化財センターでは、遺跡から出土した黒曜石製資料の原産地を推定する作業を行っている。その前段としてセンターに導入されているエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置を用いて、主に九州圏内の黒曜石原産地から採集してきた黒曜石原石を分析し、望月明彦氏が考案した判別図法(池谷信之2009)を用いて原産地の区分を行っている。

使用したエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置は SSI ナノテクノロジー社製：SEA1200VX。下面照射式で照射径は 8 mmΦ。Rh(ロジウム)管球、SDD 検出器で液体窒素は必要としない。分析条件は管電圧40kV で管電流は抵抗値によって自動設定とした。大気雰囲気、測定時間100秒で分析を行った。

検出した元素のうち、K, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr の 7 元素の X 線 (CPS 値：Count Per Second / 1 秒間に蛍光 X 線を検出した量) から下記の式によって求められる 4 つのパラメーターを用いて、2 種類の散布図 (判別図) を作成する。

- ① Rb 分率 = $\{Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})\}$
- ② Sr 分率 = $\{Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})\}$
- ③ Mn 強度 $\times 100 /$ 鉄強度
- ④ Log (Fe 強度 / K 強度)

分析で得られた 7 元素の蛍光 X 線強度 (CPS 値結果) および、その CPS 値から算出した 4 つのパラメーター値を求め、パラメーター値をもとに作成した判別図 (Rb 分率 vs Mn 強度 $\times 100 /$ Fe 強度) を図119に示す。

黒曜石原産地の基準試料として用いているのは、

佐賀県 伊万里市 腰岳

嬉野市 椎葉川

長崎県 松浦市 星鹿半島牟田、松浦大崎

佐世保市 牛ノ岳、土器田、東浜、淀姫神社、前畑弾薬庫、針尾米軍基地、久木島米軍基地、
砲台山、針尾中町、電波塔、小鯛、古里海岸、無窮洞

西海市 亀岳、上土井行

川棚町 川棚大崎

雲仙市 神代海岸

壱岐市 印通寺、原の辻

大分県 姫島村 姫島

以上、28個所から採集された黒曜石原石を事前に分析し判別図を作成した。

原産地の現況と判別図のあり方は以下のとおりである。

- ①腰岳系黒曜石 伊万里市腰岳は日本でも有数の黒曜石原産地として知られているが、判別図では松浦市牟田・松浦大崎①および古里海岸①と重なる。これらの黒曜石はガラス質に富み断面現在の蛍光 X 線分析ではこれらを分離することは出来ない。特に腰岳産と牟田産の違いは礫面を除いて

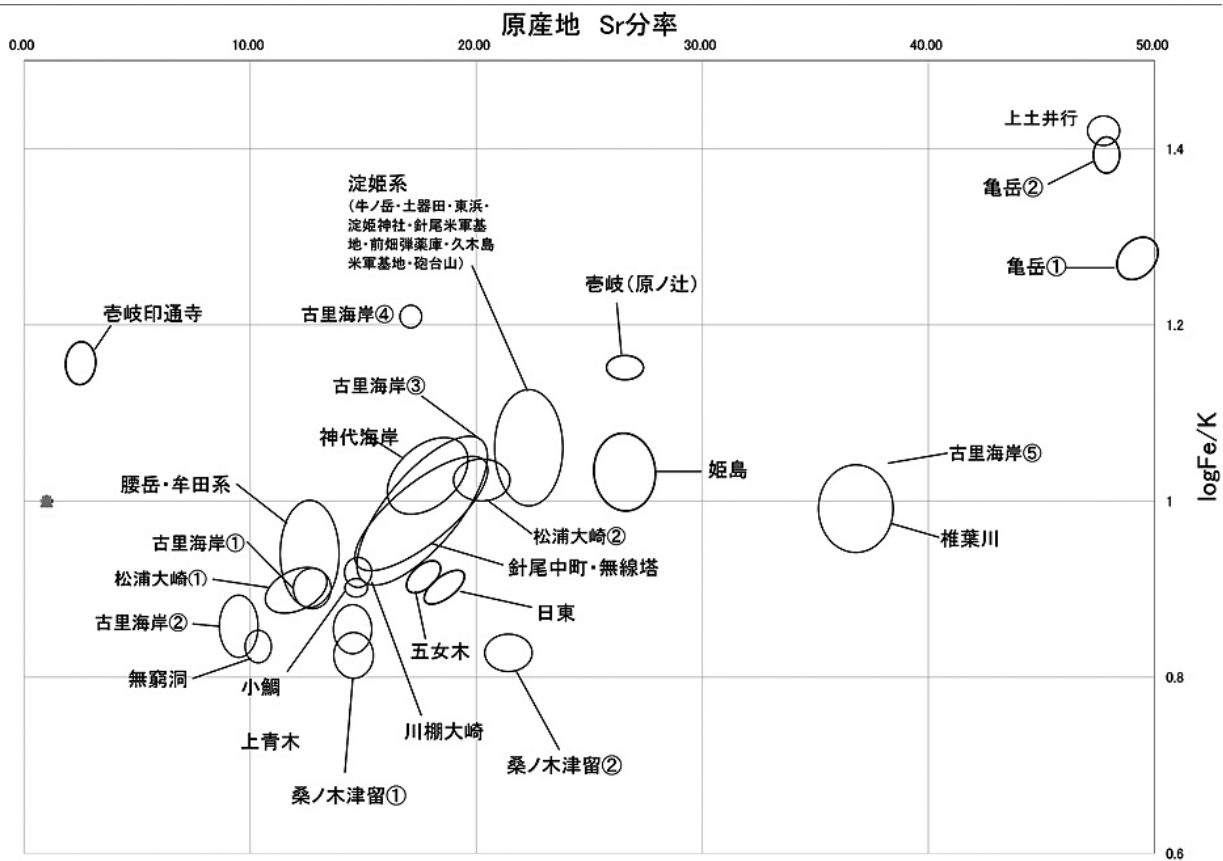
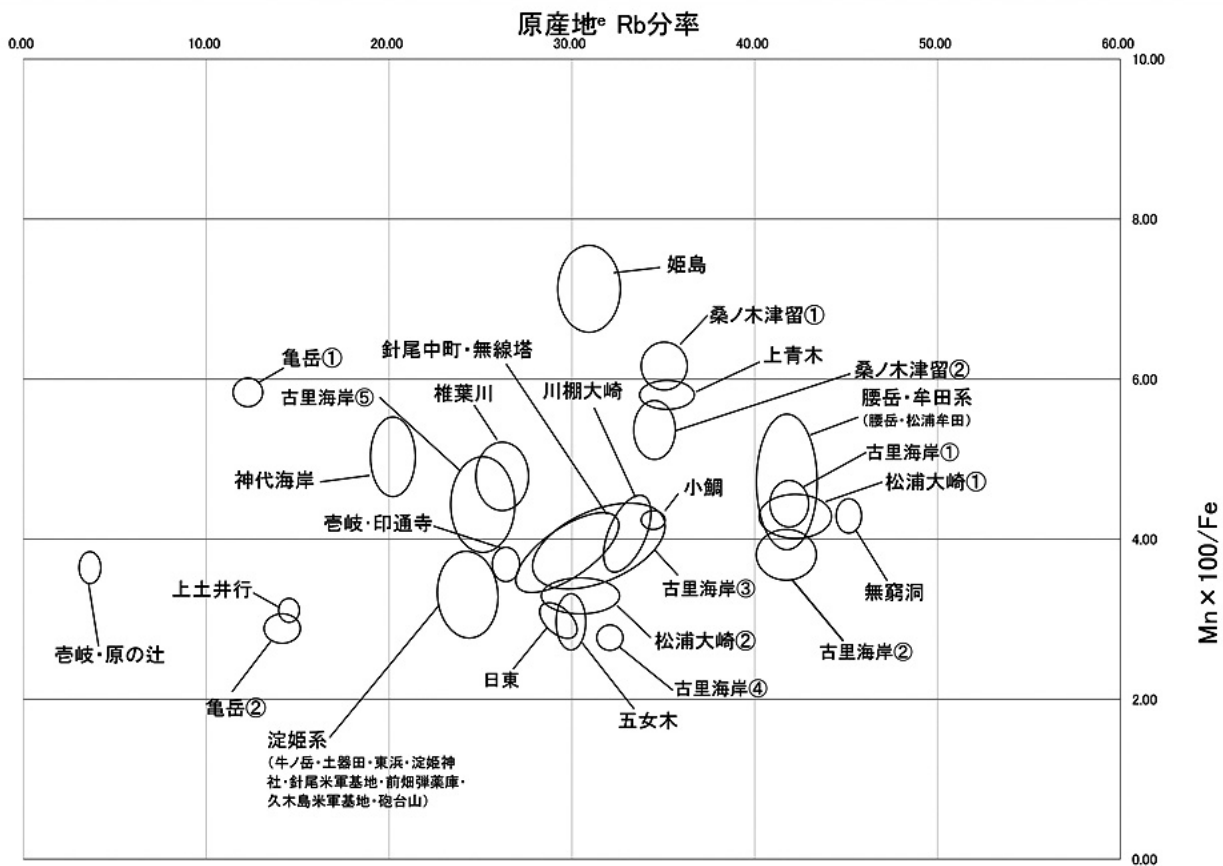


図119 黒曜石原産地の Rb 分率・Sr 分率判別図

は両者を区分することは不可能である。自然科学者の知見によれば松浦市牟田および大崎の黒曜石の産状は海成段丘の礫層であり、付近に流紋岩帯がみられないことや原石の形状が河川等の長距離運搬によって円礫になったと評価した。蛍光 X 線分析では判別できない両者は原礫面（自然面）の状態就容易に区別できる。腰岳産黒曜石は角礫状を呈しており平らな礫面であるのに対し、牟田産黒曜石は、平滑な礫面もしくは爪形のついたやや扁平な亜円礫となる。ここでは腰岳産と牟田産を合わせた呼称として「腰岳系」と表記する。

- ②淀姫系黒曜石 針尾島北部の牛ノ岳を給源とする。風化した面が青白～青灰色になりガラス光沢が乏しいが、新鮮な割れ面では漆黒色で良質な石材である。砲台山では赤色を呈するものも確認されている。牛ノ岳を中心の分布しており、土器田、砲台山、前畑弾薬庫、針尾米軍基地といった針尾島北部一帯と対岸の淀姫神社・東浜で同じような原石が採集できる。判別図ではほとんど同じ箇所プロットされることから牛ノ岳起源と考えられるが、最も早く学会へ報告された淀姫神社にちなんで「淀姫系」と呼ぶことにする。
- ③針尾中町・無線塔 針尾島南部の西海橋に近い国重要文化財に指定されている針尾無線塔から針尾中町のみかん畑一帯に広く分布する別当礫層の赤色土層の上位に黒曜石を包含する礫層があり、地表に露出しているため容易に原石が採集できる。原石の形状は亜角礫～亜円礫で礫面は溶食が激しいが長距離の運搬は考えられない。現況では付近に流紋岩帯は見当たらないため給源の確認が課題である。判別図では幅広くプロットされることや肉眼による観察でも数種類が混在する様相を呈している。
- ④古里海岸 針尾中町の古里海岸に形成された浜堤を中心に潮間帯で採集できる。判別図では5エリアにプロットされ、肉眼でも黒色～乳白色と容易に識別できる。複数の産地から潮汐等の作用により運搬堆積したもので、縄文海進以降の形成されたものと思われる。従来古里海岸を特徴付けてきた乳白色の原石は、椎葉川と同一エリアにプロットされる。
- ⑤亀岳 亀浦流紋岩に由来する亀岳産黒曜石は山頂付近からの崖錐堆積物として山麓に広く分布して採集は容易である。形状は角礫～亜角礫を呈する。分析資料は少ないが判別図では2箇所に分かれてプロットされるため複数の地点が想定される。
- ⑥上土井行 表土の土壤中に包含されており、付近に流紋岩帯がないことから二次堆積とされている。人頭大以上の非常に大きな原石も採集できる。形状は亜角礫で断口面は鉛色を呈し、ガラス質に乏しい。
- ⑦椎葉川 佐賀県嬉野市を流れ、有明海に注ぐ椎葉川の上流域に産出する。椎葉川流紋岩起源の黒曜石である。色調は特徴的で乳白色を呈する。大振りの原石が採集できる。
- ⑧神代海岸 阿蘇4火砕流起源の溶結凝灰岩である。小指大から親指大で形状は亜角礫である。旧石器時代には石器素材としては用いられず、縄文時代草創期になって細石刃核に多用される。雲仙地方の在地系黒曜石といえる。

(2) 原の辻遺跡における蛍光 X 線分析

原の辻遺跡の再整理の一環として、遺跡から出土した旧石器時代の黒曜石製石器について原産地を推定する試みを実施した。

1) 鶴田遺跡

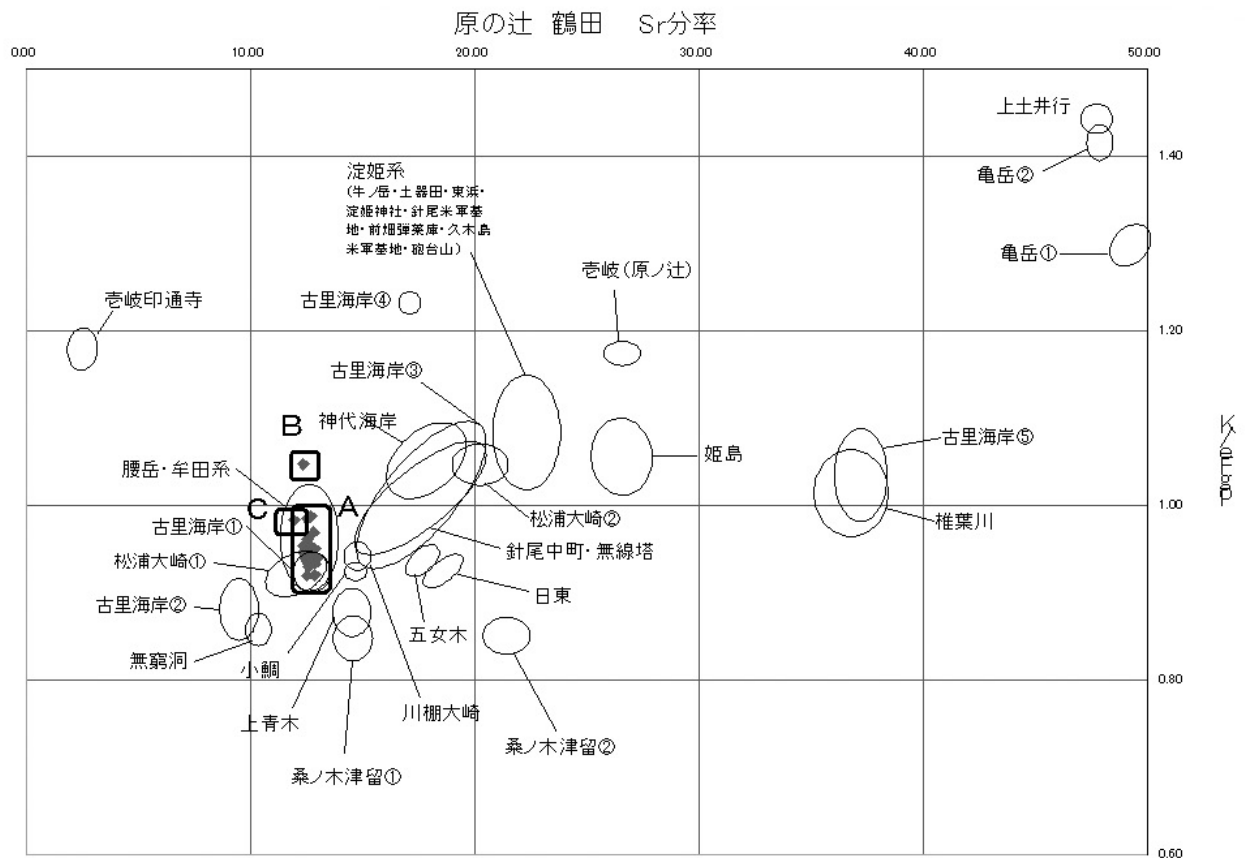
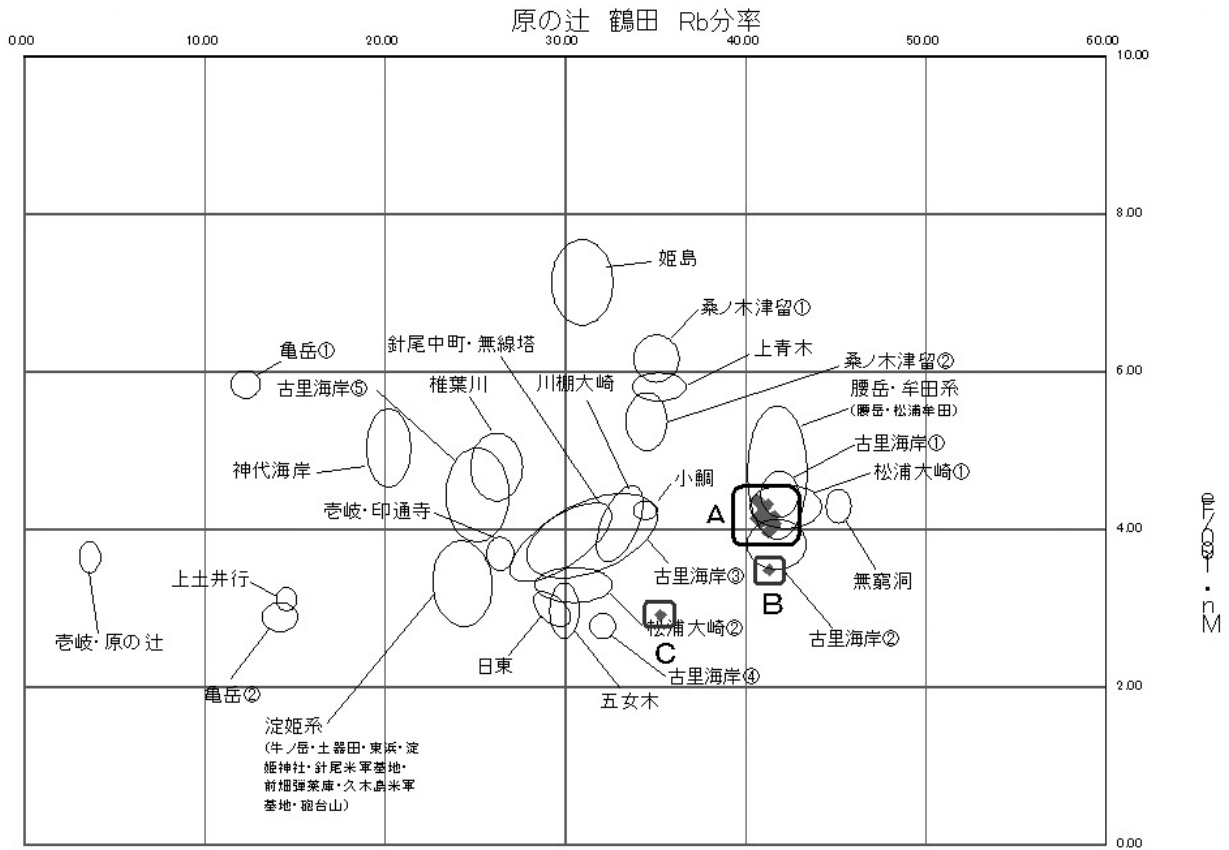


図120 鶴田遺跡出土石器のRb分率・Sr分率判別図

鶴田遺跡はAT降灰前後の石器群で大小の二側縁加工のナイフ形石器を主体とする。原の辻遺跡分の中では最も古い段階に当たる。

腰岳系牟田産の円礫を素材として石刃状の縦長剥片剥離作業を行ったブロックが検出されている。判別図からも腰岳系に特化した単一石材に依存した石器群であることがわかる。利器であるナイフ形石器の多くは腰岳系黒曜石製で占められる。その一方淀姫系がまったく見られないことは注目される。またその他とした産地不詳の原産地の石材を素材としたナイフ形石器が1点認められる。

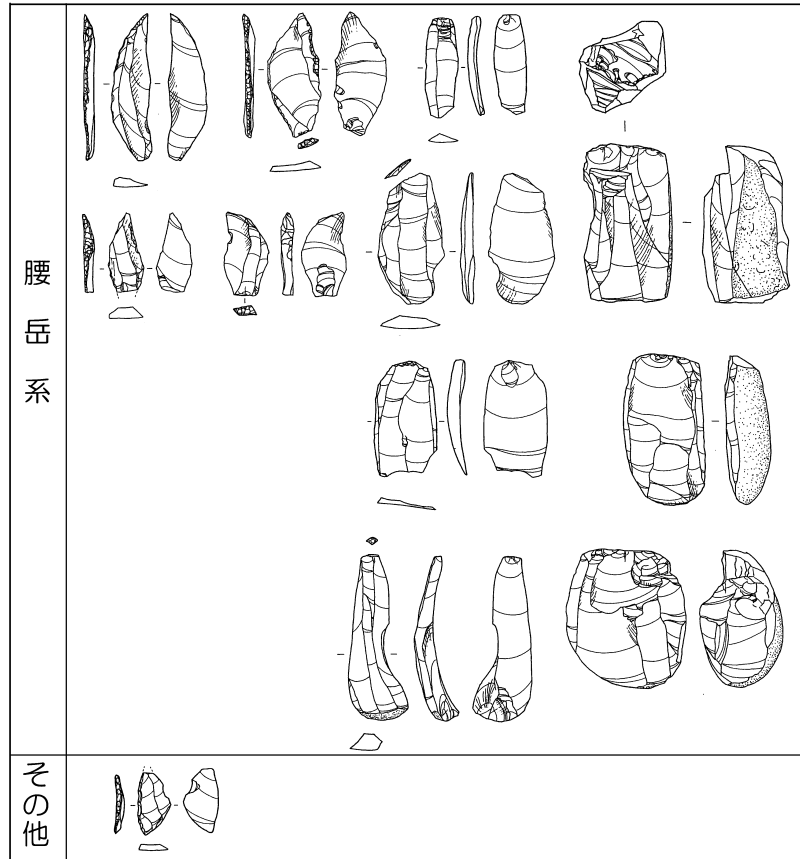


図121 鶴田遺跡原産地別出土遺物

このナイフ形石器は遺跡内で製作されたものでなく、ほかのところで作られ、鶴田遺跡には製品として搬入されたものと思われる。

2) 原の辻遺跡原ノ久保地区

2014年に調査された原ノ久保地区の石器群は、包含層から出土した石器を全点ドットで取り上げている。ここでは黒曜石製の石器全169点の分析結果を示す。通常は報告されることの少ない剥片や破片にいたる全点分析の結果は、報告書記載（選択された）遺物のみの分析とは若干異なった様相を呈する。原産地が多様化するということである。その要因としては、原の辻遺跡が所在する壱岐特有の事情がまず挙げられる。壱岐島の表層地質を見ると各地に火山が点在し、黒曜石の給源となる流紋岩帯も複数ヶ所存在する。勢い黒曜石原産地としても複数ヶ所が知られているが、本センターではそれらをすべて掌握できていないのが最大の要因であることは否定できない。産地不詳の黒曜石の多くは破片かもしくは剥片でも石器製作にまっていたるものは少なく、遺跡内で試し割りをした程度の出土状況である。こうしたあり方は遺跡近傍で採取できる壱岐在地系黒曜石をとりあえず割ってみただけという姿を彷彿させる。

原ノ久保地区の判別図をみると主体となるのはF群とした腰岳系である。原石の礫面から円礫であることや断面が漆黒色を呈しガラス質に富んでいることから牟田産と思われる。この時代に多用されるC群の淀姫系はわずかに1点のみである。A群は数は少ないが上土井行もしくは亀岳①のいずれかにおくことができる。B群は単体で遺跡内に持ち込まれた剥片である。野岳遺跡の細石刃核に多

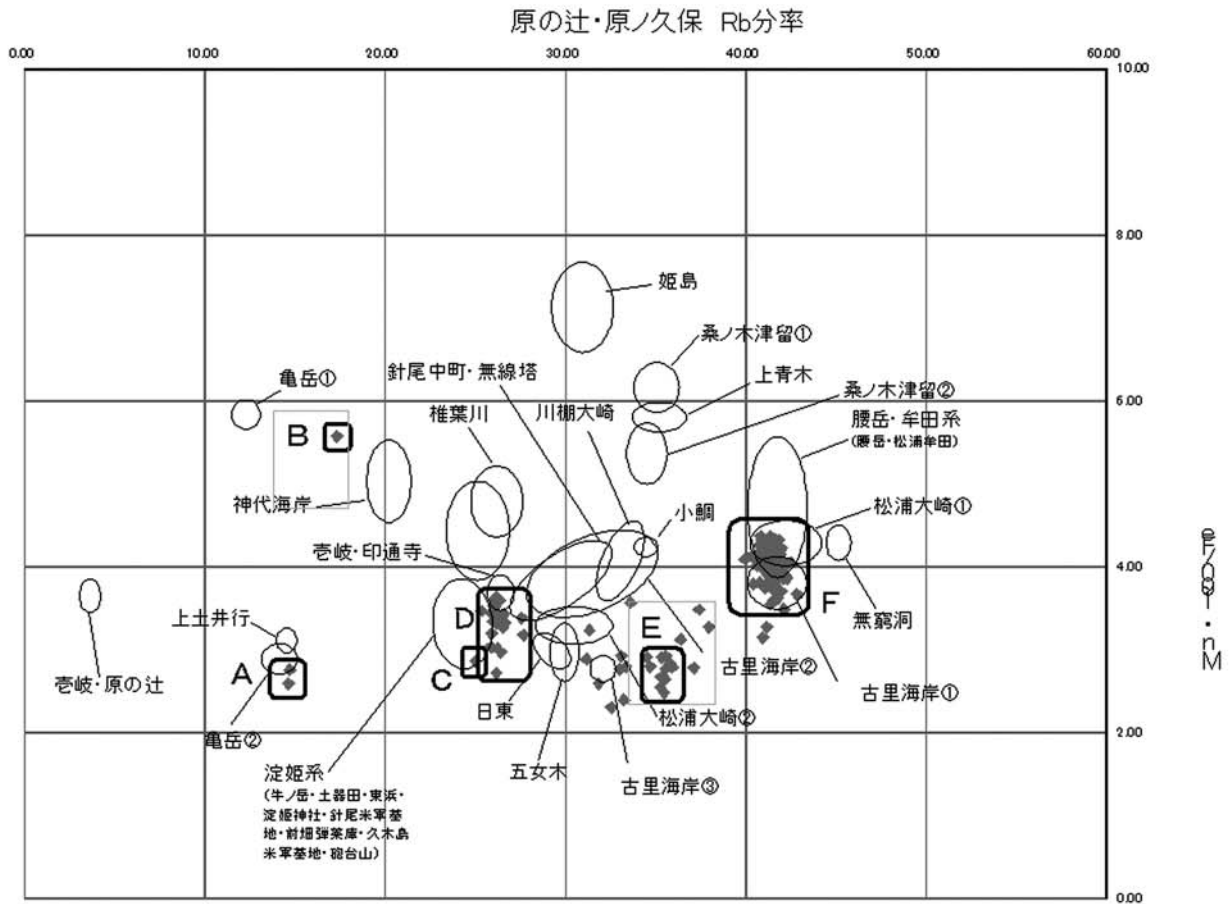


図122 原ノ久保地区出土石器の Rb 分率・Sr 分率判別図

用されている石材であるが産地は不詳である。D群は杵岐印通寺産と思われる石材である。在地系石材として入手が容易だった可能性が高い。石器への利用は余り認められない。E群も量的にまとまる石材で、良質で台形石器などの素材となる。その他群では図示していないものも多数あり、想像以上の原産地の存在が予測される。

原ノ久保地区の主要石材は腰岳系黒曜石であることは他の石器群と同様である。ナイフ形石器はすべて腰岳系で占められている。石器や剥片の多くに礫面が残されており原石の状態です遺跡内に搬入され石器製作が

行われたことがわかる。原石の大きさには大小があり、大きいものはソフトボール大のものもみられる。

産地不詳のE群でも台形石器やその素材剥片が出土している。台形石器用石核もみられることから遺跡内で台形石器の製作も行われたことがわかる。

杵岐印通寺産黒曜石で作られた剥片が1点出土しているが石器には加工されていない。

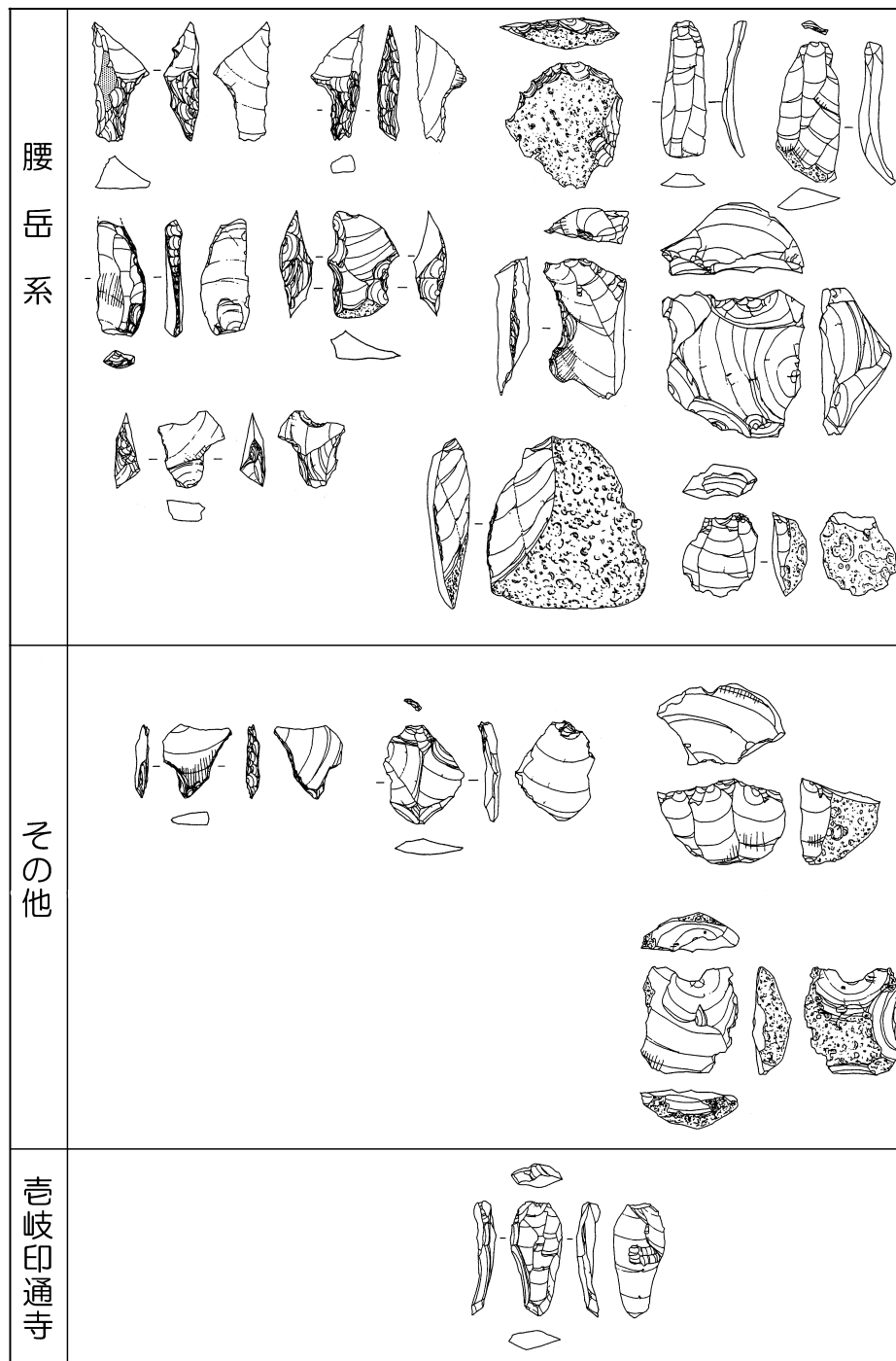


図123 原ノ久保地区原産地別出土遺物

3) 原の辻遺跡原地区

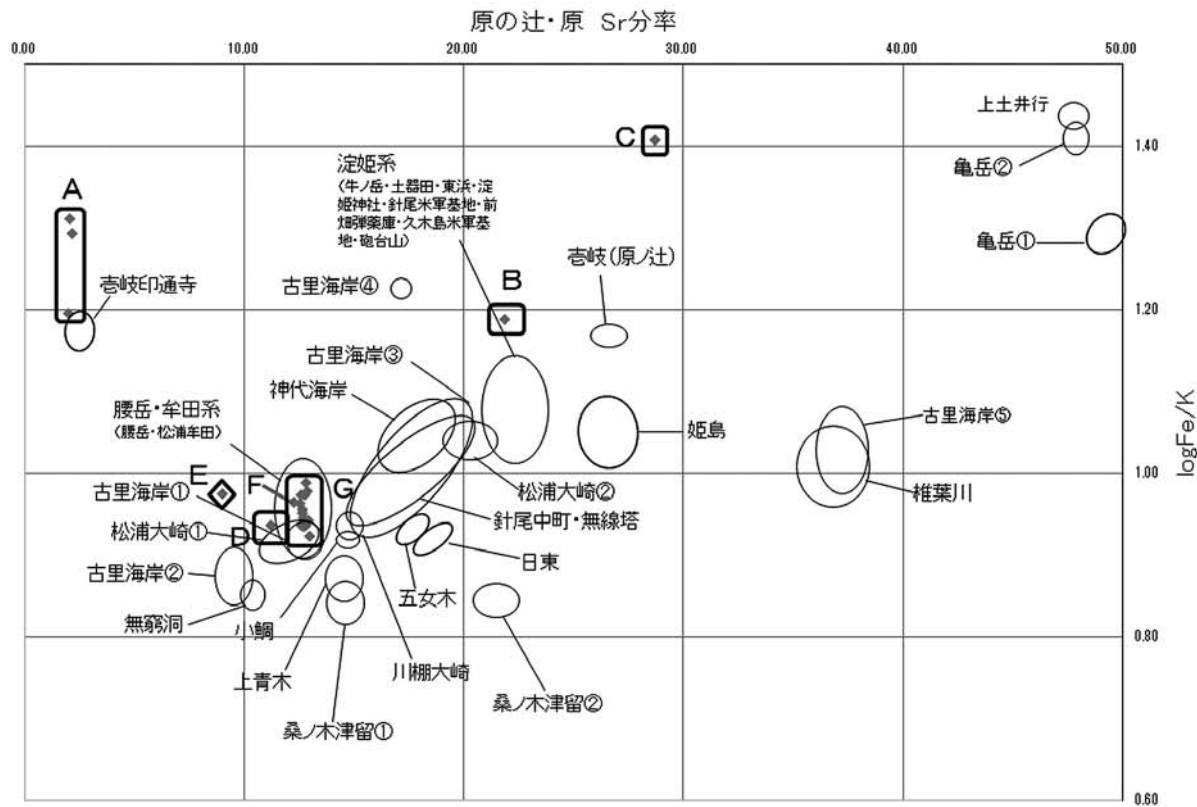
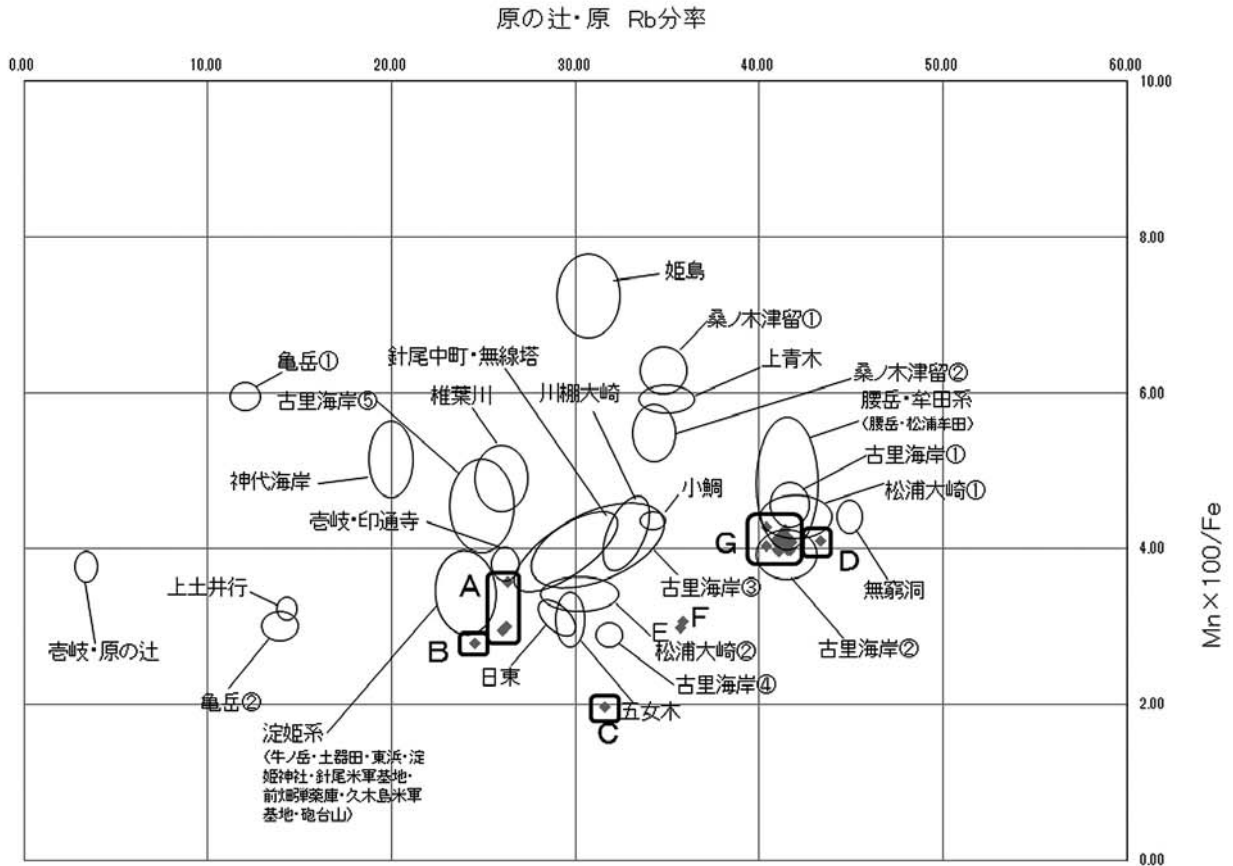


図124 原地区出土石器のRb分率・Sr分率判別図

原地区の石器群は報告書記載遺物に限定したため全体を把握しているとはいえないが、おおよその傾向はつかめる。ここでも主体を占める黒曜石は腰岳系牟田産である。判別図ではG群が該当する。淀姫系は1点のみで、しかも判別図では上下にわずかにずれてプロットされる。ただし1点のみではあるが資料は石核であり、石器製作が行われた可能性もある。判別図でF群とした資料も数は少ないが重要

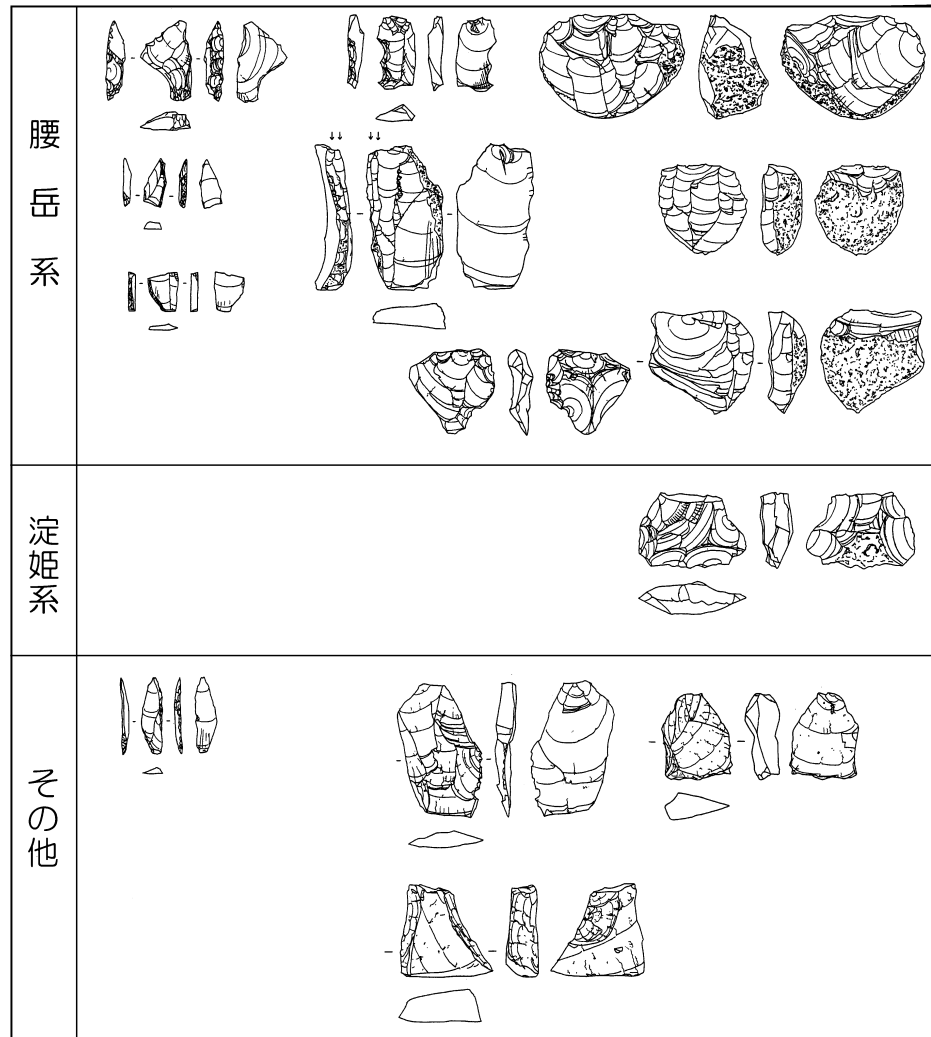


図125 原地区原産地別出土遺物

である。その他の欄に図示した柳葉形の二側縁加工のナイフ形石器が該当する。

以下原の辻遺跡の旧石器時代（特にナイフ形石器文化期）における黒曜石利用のあり方の特徴を列記する。

- ①この時期の石器群において主体的に使用されるのは腰岳系牟田産黒曜石である。
- ②腰岳系牟田産黒曜石は原石の状態で遺跡内に搬入される。
- ③淀姫系黒曜石の利用頻度が県本土部の遺跡に比べて著しく低い。
- ④産地不詳の黒曜石の出現頻度が県本土部の遺跡に比べて高い。在地系島内産黒曜石の可能性が高い。

池谷信之2009『黒曜石考古学』新泉社

表19 鶴田遺跡蛍光X線分析

No.	遺物番号	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K	備考
1	NH010004001-point1	64.04	22.71	566.61	304.42	92.15	126.51	212.34	41.39	4.01	12.53	0.95	
2	NH010004002-point1	72.87	27.24	631.44	325.14	101.69	136.34	225.52	41.23	4.31	12.89	0.94	
3	NH010004003-point1	72.05	25.89	636.49	318.53	95.11	134.98	220.18	41.43	4.07	12.37	0.95	
4	NH010004004-point1	67.50	24.39	600.00	319.83	97.54	134.01	222.58	41.32	4.06	12.60	0.95	
5	NH010004005-point1	70.04	24.72	595.90	315.79	95.84	129.95	220.22	41.45	4.15	12.58	0.93	
6	NH010004006-point1	69.99	25.31	609.51	323.88	98.07	134.90	234.93	40.91	4.15	12.39	0.94	
7	NH010004007-point1	63.05	24.08	554.13	301.91	94.22	130.43	215.87	40.66	4.35	12.69	0.94	
8	NH010004008-point1	68.18	24.38	568.14	314.68	98.88	133.07	220.88	41.00	4.29	12.88	0.92	
9	NH010004009-point1	64.73	24.64	591.97	312.91	94.43	126.52	218.40	41.60	4.16	12.55	0.96	
10	NH010004010-point1	69.72	19.52	670.58	284.93	96.58	125.35	301.12	35.26	2.91	11.95	0.98	
11	NH010004011-point1	66.00	25.83	589.95	317.20	99.68	136.29	227.83	40.61	4.38	12.76	0.95	
12	NH010004012-point1	71.54	26.36	618.53	331.86	103.02	138.79	235.25	41.02	4.26	12.74	0.94	
13	NH010004013-point1	63.47	23.20	559.06	313.72	96.24	131.69	219.84	41.20	4.15	12.64	0.94	
14	NH010004014-point1	73.06	27.04	680.40	344.77	106.74	141.99	239.46	41.39	3.97	12.81	0.97	
15	NH010004015-point1	61.86	24.00	690.16	313.13	93.69	129.89	221.59	41.29	3.48	12.36	1.05	
16	NH010004016-point1	66.53	23.76	582.82	315.58	94.85	128.82	217.80	41.69	4.08	12.53	0.94	
17	NH010004017-point1	65.33	25.60	635.00	313.77	95.85	129.32	215.19	41.61	4.03	12.71	0.99	
18	NH010004018-point1	64.33	22.45	534.43	292.91	89.92	125.93	208.60	40.83	4.20	12.53	0.92	
19	NH010004019-point1	68.30	24.42	585.64	314.47	99.52	133.48	224.98	40.71	4.17	12.88	0.93	
20	NH010004020-point1	64.18	23.29	558.96	302.04	91.26	124.85	207.83	41.60	4.17	12.57	0.94	
21	NH010004021-point1	61.30	21.79	525.90	285.94	87.74	119.18	204.64	40.99	4.14	12.58	0.93	
22	NH010004022-point1	65.48	23.65	570.02	305.36	96.42	129.18	212.00	41.10	4.15	12.98	0.94	
23	NH030331003-point1	72.75	26.00	638.35	337.00	105.30	142.11	240.97	40.83	4.07	12.76	0.94	
24	NH030331004-point1	65.52	25.04	632.77	315.40	95.77	132.55	221.13	41.24	3.96	12.52	0.98	
25	NH030331008-point1	62.26	22.98	555.42	301.22	95.59	126.33	219.81	40.54	4.14	12.87	0.95	
26	NH030331009-point1	64.21	23.86	577.11	306.64	92.13	130.97	216.01	41.12	4.13	12.35	0.95	

表19 原ノ久保地区蛍光X線分析①

No.	遺物番号	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K	備考
1	1 A-2	66.68	27.56	867.17	243.02	164.13	107.16	364.59	27.65	3.18	18.67	1.11	
2	1 A-3	68.11	25.41	615.18	310.04	98.48	134.25	226.27	40.31	4.13	12.81	0.96	
3	1 A-4	70.16	25.63	645.70	323.46	100.33	133.22	225.13	41.36	3.97	12.83	0.96	
4	1 A-6	65.17	24.07	560.94	303.20	94.06	127.59	215.21	40.97	4.29	12.71	0.93	
5	1 B-1	71.65	20.16	692.53	292.69	99.49	125.77	310.23	35.34	2.91	12.01	0.99	
6	1 B-10	74.47	41.31	1265.20	333.10	25.23	197.27	700.30	26.52	3.27	2.01	1.23	
7	1 B-11	66.72	25.58	610.48	324.54	98.59	134.09	232.39	41.10	4.19	12.49	0.96	
8	1 B-12	67.06	26.12	602.51	318.99	97.49	133.23	223.76	41.24	4.33	12.60	0.95	
9	1 B-13	80.27	28.55	749.53	359.74	109.51	148.16	249.86	41.48	3.81	12.63	0.97	
10	1 B-14	72.32	28.31	796.66	316.41	98.69	129.85	219.76	41.38	3.55	12.91	1.04	
11	1 B-15	63.59	22.59	551.13	299.54	91.62	127.10	217.82	40.69	4.10	12.45	0.94	
12	1 B-16	66.52	25.86	621.44	331.79	100.54	135.83	231.03	41.52	4.16	12.58	0.97	
13	1 B-17	61.03	26.38	923.39	219.08	197.54	101.85	357.96	25.00	2.86	22.54	1.18	
14	1 B-18	69.68	41.45	1244.61	306.36	25.48	181.96	656.58	26.18	3.33	2.18	1.25	
15	1 B-2	70.27	19.17	656.68	289.38	99.55	123.76	300.90	35.57	2.92	12.24	0.97	
16	1 B-20	67.43	25.19	608.97	316.52	96.48	129.70	221.53	41.42	4.14	12.62	0.96	
17	1 B-21	69.44	25.54	647.85	330.64	100.48	138.12	229.71	41.38	3.94	12.58	0.97	
18	1 B-22	72.66	25.83	641.21	341.05	106.08	143.75	239.67	41.06	4.03	12.77	0.95	
19	1 B-3	66.56	23.81	597.19	303.58	92.93	127.83	214.48	41.09	3.99	12.58	0.95	
20	1 B-4	67.40	24.73	605.46	325.41	98.77	135.02	227.38	41.37	4.08	12.56	0.95	
21	1 B-5	63.40	38.23	1059.98	300.45	23.48	179.23	651.13	26.03	3.61	2.03	1.22	
22	1 B-6	70.93	25.49	606.75	323.86	98.66	133.43	223.89	41.53	4.20	12.65	0.93	
23	1 B-7	73.35	26.15	625.85	333.15	100.99	137.26	230.64	41.54	4.18	12.59	0.93	
24	1 B-8	86.98	30.82	765.93	375.61	112.12	147.81	251.80	42.33	4.02	12.64	0.94	
25	1 B-9	72.38	24.97	626.21	343.53	102.02	142.66	236.46	41.66	3.99	12.37	0.94	
26	1 C-1	67.59	25.68	603.08	304.28	96.64	128.83	217.18	40.74	4.26	12.94	0.95	
27	1 C-2	64.35	40.87	1138.18	301.32	22.46	176.66	644.47	26.32	3.59	1.96	1.25	
28	1 C-3	69.05	25.49	599.51	318.32	93.93	129.91	227.17	41.38	4.25	12.21	0.94	

表19 原ノ久保地区蛍光X線分析②

No.	遺物番号	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K	備考
29	1C-4	84.54	29.92	740.03	372.80	109.22	151.72	243.25	42.51	4.04	12.45	0.94	
30	1C-5	76.92	41.02	1230.13	324.87	24.20	194.60	692.05	26.29	3.33	1.96	1.20	
31	1C-7	68.53	18.92	683.34	290.40	99.04	125.34	301.77	35.56	2.77	12.13	1.00	
32	1C-8	66.53	24.86	602.62	308.73	90.06	129.65	210.44	41.78	4.13	12.19	0.96	
33	1D-1	78.71	28.36	699.37	350.50	106.82	147.26	238.85	41.56	4.05	12.67	0.95	
34	1D-2	68.85	20.50	790.65	284.47	133.69	112.82	362.61	31.83	2.59	14.96	1.06	
35	1D-3	74.83	40.70	1177.27	328.34	24.07	195.72	718.48	25.92	3.46	1.90	1.20	
36	1D-4	65.07	19.56	738.15	276.83	95.71	118.34	288.79	35.51	2.65	12.28	1.05	
37	1D-5	70.73	40.98	1164.04	320.13	24.19	193.47	691.79	26.04	3.52	1.97	1.22	
38	1D-6	76.82	21.64	584.63	334.59	80.57	130.70	251.61	41.96	3.70	10.10	0.88	
39	2B-1	62.07	23.31	556.48	307.88	95.15	124.86	213.02	41.55	4.19	12.84	0.95	
40	2B-10	65.08	22.50	549.75	298.23	91.66	122.60	210.92	41.23	4.09	12.67	0.93	
41	2B-11	71.11	26.53	682.78	334.82	102.07	138.95	232.29	41.43	3.89	12.63	0.98	
42	2B-16	73.85	22.91	818.65	291.02	128.79	118.17	334.38	33.36	2.80	14.76	1.04	
43	2B-2	68.76	24.51	595.45	318.31	97.78	133.07	225.73	41.08	4.12	12.62	0.94	
44	2B-3	70.43	25.66	613.99	330.17	99.29	133.49	228.88	41.70	4.18	12.54	0.94	
45	2B-4	69.35	25.39	632.65	318.16	101.12	135.56	228.81	40.60	4.01	12.90	0.96	
46	2B-5	62.84	24.60	563.39	308.32	95.50	131.18	220.49	40.81	4.37	12.64	0.95	
47	2B-6	76.53	28.80	666.03	348.66	104.86	143.06	238.86	41.73	4.32	12.55	0.94	
48	2B-7	62.84	24.60	563.39	308.32	95.50	131.18	220.49	40.81	4.37	12.64	0.95	
49	2B-8	68.85	23.97	671.29	259.09	134.44	108.20	269.34	33.60	3.57	17.44	0.99	
50	2B-9	64.15	18.76	641.22	270.91	117.82	111.38	319.08	33.07	2.93	14.38	1.00	
51	2C-1	69.74	25.87	638.94	329.37	97.93	134.83	241.75	40.97	4.05	12.18	0.96	
52	2C-2	61.32	23.48	537.70	293.55	88.76	120.55	206.65	41.37	4.37	12.51	0.94	
53	2C-3	58.74	24.58	646.31	295.75	90.80	123.80	214.49	40.80	3.80	12.53	1.04	
54	2C-4	70.91	26.87	771.02	335.97	98.68	136.56	227.00	42.09	3.48	12.36	1.04	
55	2C-6	72.57	22.96	959.25	296.80	132.32	120.83	343.19	33.23	2.39	14.81	1.12	
56	2C-7	71.32	20.73	663.46	296.15	71.63	134.28	311.71	36.39	3.12	8.80	0.97	
57	2C-8	72.31	25.81	650.98	332.93	102.09	136.42	231.30	41.47	3.96	12.72	0.95	
58	2C-9	69.26	22.56	980.51	290.68	133.86	119.58	349.60	32.52	2.30	14.98	1.15	
59	2D-10	68.92	24.88	609.72	326.75	100.92	137.94	232.11	40.96	4.08	12.65	0.95	
60	2D-11	72.47	41.42	1231.86	316.67	23.58	189.98	675.07	26.27	3.36	1.96	1.23	
61	2D-12	70.52	18.11	647.06	279.08	95.40	121.70	308.44	34.68	2.80	11.86	0.96	
62	2D-13	68.82	20.81	780.54	296.46	102.93	129.60	310.70	35.31	2.67	12.26	1.05	
63	2D-14	71.15	22.86	698.32	305.01	108.00	129.62	260.81	37.96	3.27	13.44	0.99	
64	2D-15	73.39	20.60	726.56	303.25	103.13	131.75	309.32	35.78	2.84	12.17	1.00	
65	2D-16	60.45	18.12	622.49	265.10	94.24	120.69	288.31	34.50	2.91	12.27	1.01	
66	2D-17	67.19	23.98	648.18	322.95	97.98	132.80	221.42	41.66	3.70	12.64	0.98	
67	2D-18	70.50	25.58	589.52	322.62	99.29	134.44	224.67	41.31	4.34	12.71	0.92	
68	2D-19	59.83	38.34	1264.41	296.00	25.73	177.64	645.71	25.85	3.03	2.25	1.32	
69	2D-2	72.16	22.29	874.92	309.75	107.96	135.39	325.94	35.24	2.55	12.28	1.08	
70	2D-3	68.64	45.76	1541.43	319.68	24.05	185.67	681.14	26.41	2.97	1.99	1.35	
71	2D-4	76.16	41.69	1145.85	315.72	24.85	189.60	676.83	26.16	3.64	2.06	1.18	
72	2D-5	75.42	20.97	750.77	311.88	103.03	132.58	320.85	35.92	2.79	11.86	1.00	
73	2D-6	68.28	23.63	623.33	295.41	71.49	121.71	242.25	40.42	3.79	9.78	0.96	
74	2D-7	69.52	41.53	1250.12	315.04	23.39	181.75	662.00	26.65	3.32	1.98	1.25	
75	2D-8	76.12	26.03	747.36	309.41	112.43	131.15	274.35	37.40	3.48	13.59	0.99	
76	2D-9	71.37	19.05	721.16	297.34	102.11	129.36	311.02	35.41	2.64	12.16	1.00	
77	3A-1	71.71	27.20	644.72	320.81	97.09	130.29	219.19	41.81	4.22	12.65	0.95	
78	3A-2	75.46	43.64	1272.14	344.68	25.90	204.21	722.15	26.58	3.43	2.00	1.23	
79	3A-3	62.05	39.82	1465.34	299.36	24.81	180.08	640.14	26.16	2.72	2.17	1.37	
80	3A-4	39.26	29.67	1144.16	117.40	378.76	55.96	250.04	14.64	2.59	47.22	1.46	
81	3A-7	71.13	41.06	1238.42	322.16	25.63	188.88	694.14	26.17	3.32	2.08	1.24	
82	3A-8	60.05	35.45	1022.46	282.51	24.24	175.23	633.36	25.33	3.47	2.17	1.23	
83	3B-1	67.50	25.68	619.96	323.25	99.92	132.34	223.14	41.51	4.14	12.83	0.96	
84	3B-2	63.15	22.08	589.88	309.02	92.81	129.91	214.52	41.41	3.74	12.44	0.97	
85	3B-3	70.36	25.12	651.20	329.93	97.68	135.94	225.45	41.82	3.86	12.38	0.97	
86	3B-4	67.01	25.28	650.07	330.79	98.84	138.05	234.59	41.23	3.89	12.32	0.99	

表19 原ノ久保地区蛍光X線分析③

No.	遺物番号	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K	備考
87	3B-5	65.21	25.07	601.17	313.02	96.95	132.97	221.45	40.95	4.17	12.68	0.96	
88	3B-6	72.08	26.51	628.14	332.38	102.74	138.61	229.13	41.40	4.22	12.80	0.94	
89	3B-7	67.70	23.99	590.27	314.21	96.19	130.46	215.92	41.52	4.06	12.71	0.94	
90	3C-10	66.56	20.51	826.10	304.02	102.64	128.27	322.38	35.46	2.48	11.97	1.09	
91	3C-11	65.27	20.18	699.03	252.44	121.35	107.04	329.17	31.17	2.89	14.98	1.03	
92	3C-12	73.34	25.64	650.59	337.37	103.12	140.30	228.88	41.67	3.94	12.74	0.95	
93	3C-13	71.53	26.94	650.52	329.59	98.70	137.50	224.71	41.69	4.14	12.49	0.96	
94	3C-14	79.03	30.24	782.10	364.25	108.58	146.63	255.75	41.62	3.87	12.41	1.00	
95	3C-15	66.50	25.58	590.98	319.30	98.44	133.58	229.53	40.89	4.33	12.61	0.95	
96	3C-16	66.84	24.54	610.09	325.08	99.84	134.83	231.71	41.07	4.02	12.62	0.96	
97	3C-17	68.62	25.21	589.68	314.51	97.38	129.24	218.41	41.41	4.27	12.82	0.93	
98	3C-18	73.15	26.43	677.85	343.19	103.75	138.48	230.08	42.08	3.90	12.72	0.97	
99	3C-19	63.70	23.80	557.38	313.06	97.18	130.16	219.12	41.22	4.27	12.80	0.94	
100	3C-3	69.35	38.04	1106.82	299.28	24.49	182.17	648.30	25.93	3.44	2.12	1.20	
101	3C-4	67.84	24.91	578.11	320.59	99.37	132.94	224.50	41.24	4.31	12.78	0.93	
102	3C-5	70.37	20.87	754.38	294.57	130.13	119.34	348.26	33.01	2.77	14.58	1.03	
103	3C-7	76.53	27.47	687.32	341.98	105.22	138.46	231.73	41.84	4.00	12.87	0.95	
104	3C-8	69.68	24.43	589.61	317.90	97.59	129.52	223.72	41.35	4.14	12.70	0.93	
105	3C-9	67.60	21.22	762.03	285.78	124.25	12.63	347.62	37.10	2.78	16.13	1.05	
106	3D-11	65.86	24.53	601.91	313.57	93.65	129.94	216.59	41.60	4.08	12.42	0.96	
107	3D-12	40.97	18.52	588.02	182.45	57.40	75.22	130.78	40.92	3.15	12.87	1.16	
108	3D-13	67.56	25.43	643.25	327.29	97.30	134.19	224.66	41.78	3.95	12.42	0.98	
109	3D-14	77.09	25.79	689.59	315.01	76.01	128.08	248.06	41.06	3.74	9.91	0.95	
110	3D-15	66.01	41.61	1382.44	306.95	23.61	179.72	660.04	26.23	3.01	2.02	1.32	
111	3D-3	67.94	25.14	627.81	318.58	96.17	129.03	213.88	42.05	4.00	12.69	0.97	
112	3D-4	75.08	26.87	663.17	349.30	106.41	145.67	240.85	41.47	4.05	12.63	0.95	
113	3D-5	77.37	27.60	667.08	354.63	108.48	146.69	244.51	41.51	4.14	12.70	0.94	
114	3D-6	65.41	24.78	612.83	297.56	91.63	123.77	207.93	41.28	4.04	12.71	0.97	
115	3D-7	72.55	27.30	631.06	329.56	100.87	133.48	223.61	41.85	4.33	12.81	0.94	
116	4A-1	65.48	24.76	640.35	316.45	96.82	131.48	218.51	41.46	3.87	12.68	0.99	
117	4A-11	69.13	25.38	629.91	313.74	95.24	131.57	220.79	41.21	4.03	12.51	0.96	
118	4A-12	70.16	24.87	618.65	323.25	100.28	131.86	221.93	41.59	4.02	12.90	0.95	
119	4A-13	68.67	24.94	687.91	331.51	100.23	137.66	225.87	41.69	3.63	12.60	1.00	
120	4A-14	67.30	24.49	645.27	321.42	97.89	131.98	225.96	41.35	3.79	12.59	0.98	
121	4A-15	72.82	24.77	617.86	326.53	99.72	135.32	231.22	41.19	4.01	12.58	0.93	
122	4A-16	71.06	26.13	615.78	323.95	99.05	133.24	221.35	41.66	4.24	12.74	0.94	
123	4A-17	81.10	31.74	864.67	380.75	111.29	149.98	247.19	42.82	3.67	12.52	1.03	
124	4A-18	64.70	23.34	561.06	302.10	93.57	129.80	217.13	40.68	4.16	12.60	0.94	
125	4A-19	64.01	25.68	670.18	318.94	99.09	130.22	222.82	41.36	3.83	12.85	1.02	
126	4A-2	65.05	23.50	566.57	314.34	94.97	129.66	220.48	41.39	4.15	12.51	0.94	
127	4A-20	58.79	21.93	536.19	283.08	90.92	123.77	210.77	39.95	4.09	12.83	0.96	
128	4A-22	69.05	25.85	669.88	319.32	94.79	131.82	218.19	41.79	3.86	12.41	0.99	
129	4A-3	71.49	26.25	664.44	329.87	99.43	135.63	229.24	41.54	3.95	12.52	0.97	
130	4A-4-1	68.42	24.68	597.73	325.30	96.70	128.13	227.95	41.81	4.13	12.43	0.94	
131	4A-6	70.87	26.58	663.07	337.92	104.32	136.56	235.99	41.47	4.01	12.80	0.97	
132	4A-7	69.07	25.62	626.44	318.92	95.03	131.39	220.83	41.63	4.09	12.40	0.96	
133	4A-8	63.44	22.44	593.75	297.80	88.36	121.67	207.47	41.63	3.78	12.35	0.97	
134	4A-9	69.76	26.23	679.12	340.94	98.32	138.67	228.56	42.27	3.86	12.19	0.99	
135	4B-1	63.19	23.65	583.53	303.96	95.30	128.95	219.10	40.67	4.05	12.75	0.97	
136	4B-10	67.25	25.73	614.49	313.66	96.44	129.61	217.57	41.42	4.19	12.74	0.96	
137	4B-11	52.25	19.26	588.03	217.11	67.14	89.31	154.09	41.15	3.27	12.72	1.05	
138	4B-12	72.83	26.63	660.24	329.19	99.67	134.67	226.00	41.69	4.03	12.62	0.96	
139	4B-14	72.73	25.77	636.37	326.66	102.23	136.74	227.59	41.18	4.05	12.89	0.94	
140	4B-15	70.09	26.23	619.39	324.24	96.10	133.94	223.36	41.70	4.23	12.36	0.95	
141	4B-16	74.32	25.79	632.96	338.76	100.93	136.71	232.11	41.90	4.07	12.48	0.93	
142	4B-17	71.82	25.61	664.08	327.78	97.59	132.61	221.46	42.05	3.86	12.52	0.97	
143	4B-18	73.85	27.46	701.32	350.89	107.05	144.78	236.86	41.79	3.92	12.75	0.98	
144	4B-2	64.39	23.46	554.47	310.34	95.60	131.75	218.09	41.06	4.23	12.65	0.94	

表19 原ノ久保地区蛍光X線分析④

No.	遺物番号	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K	備考
145	4 B- 3	72.63	26.18	640.24	327.21	98.93	133.53	224.07	41.75	4.09	12.62	0.95	
146	4 B- 4	65.36	24.88	589.82	312.95	98.29	130.83	216.11	41.28	4.22	12.96	0.96	
147	4 B- 5	45.13	47.99	861.40	156.12	401.95	89.61	253.96	17.31	5.57	44.58	1.28	
148	4 B- 7	69.08	38.72	1213.06	302.82	24.38	183.27	658.53	25.90	3.19	2.09	1.24	
149	4 B- 8	68.72	26.17	648.54	324.73	97.84	134.95	221.35	41.69	4.04	12.56	0.97	
150	4 C- 1	62.31	22.06	556.75	309.88	95.00	130.01	220.70	41.01	3.96	12.57	0.95	
151	4 C-10	64.93	23.50	588.58	300.38	92.03	124.59	210.88	41.27	3.99	12.64	0.96	
152	4 C-11	69.50	25.57	603.78	337.78	103.66	140.90	237.04	41.22	4.24	12.65	0.94	
153	4 C-12	72.95	27.13	654.86	339.67	101.26	140.52	229.55	41.88	4.14	12.49	0.95	
154	4 C-13	68.07	26.21	622.08	330.09	97.76	137.40	226.25	41.70	4.21	12.35	0.96	
155	4 C- 2	77.11	26.55	679.86	333.89	100.36	134.50	222.75	42.18	3.91	12.68	0.95	
156	4 C- 3	70.16	26.18	619.70	319.10	96.86	129.02	215.55	41.96	4.22	12.74	0.95	
157	4 C- 4	68.95	24.06	599.30	323.16	99.54	134.91	223.58	41.37	4.02	12.74	0.94	
158	4 C- 5	78.98	29.02	719.99	363.12	108.31	147.92	242.46	42.13	4.03	12.57	0.96	
159	4 C- 6	72.42	41.43	1192.69	318.36	25.08	190.80	690.33	26.00	3.47	2.05	1.22	
160	4 C- 7	69.31	25.18	599.04	324.74	97.54	132.72	220.10	41.90	4.20	12.58	0.94	
161	4 C- 8	68.39	25.55	636.85	312.88	94.83	126.94	220.46	41.43	4.01	12.56	0.97	
162	4 C- 9	76.74	43.24	1268.67	320.80	23.98	188.90	677.56	26.49	3.41	1.98	1.22	
163	5 A- 1	69.13	24.28	601.10	330.41	99.77	134.19	227.71	41.71	4.04	12.60	0.94	
164	5 A-12	83.62	48.69	1439.93	339.01	24.60	192.18	674.55	27.55	3.38	2.00	1.24	
165	5 B- 2	71.99	40.40	1207.95	322.14	25.35	193.61	699.07	25.98	3.34	2.04	1.22	
166	5 B- 3	78.24	22.04	608.52	332.89	79.24	130.26	254.85	41.76	3.62	9.94	0.89	
167	5 B- 4	52.79	17.60	544.14	227.32	120.60	104.98	272.94	31.32	3.23	16.62	1.01	
168	5 B- 5	77.45	28.69	705.89	365.63	110.09	148.67	246.32	41.99	4.06	12.64	0.96	
169	5 B- 6	41.44	31.82	1154.14	142.12	459.78	64.60	299.88	14.71	2.76	47.58	1.44	

表19 原地区蛍光X線分析

No.	遺物番号	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K	備考
1	NM001079094	66.80	23.62	597.15	319.86	98.36	133.68	226.88	41.07	3.96	12.63	0.95	
2	NM001079095	75.52	20.75	695.19	312.61	107.43	133.37	321.82	35.72	2.98	12.27	0.96	
3	NM001079096	71.66	26.79	673.38	345.73	106.38	143.28	236.96	41.54	3.98	12.78	0.97	
4	NM001079097	69.11	24.83	608.59	330.29	100.30	134.46	225.73	41.77	4.08	12.68	0.94	
5	NM001079098	64.49	24.06	592.65	315.13	95.93	128.94	225.96	41.14	4.06	12.52	0.96	
6	NM001079099	73.18	25.80	631.10	348.62	90.14	140.47	225.65	43.31	4.09	11.20	0.94	
7	NM001079100	65.71	26.64	623.14	320.68	102.06	137.33	233.45	40.41	4.28	12.86	0.98	
8	NM001079101	74.97	27.09	660.60	348.57	107.55	146.14	244.55	41.16	4.10	12.70	0.95	
9	NM001079102	72.01	20.86	679.97	285.13	71.54	129.87	308.03	35.89	3.07	9.00	0.98	
10	NM001079103	69.02	40.60	1353.18	311.13	25.66	183.11	666.05	26.23	3.00	2.16	1.29	
11	NM001079104	69.45	38.84	1089.69	308.98	23.42	183.29	658.26	26.32	3.56	1.99	1.20	
12	NM001079105	69.47	25.44	627.45	309.96	95.53	130.23	220.25	41.00	4.05	12.64	0.96	
13	NM001079106	72.36	25.67	606.02	327.10	102.69	135.74	224.49	41.40	4.24	13.00	0.92	
14	NM001079107	65.37	39.45	1336.86	308.32	24.53	183.91	667.11	26.04	2.95	2.07	1.31	
15	NM001079108	63.02	31.53	1607.62	346.47	314.72	158.50	277.34	31.58	1.96	28.69	1.41	
16	NM001079109	66.84	23.67	575.59	309.25	96.18	130.86	219.82	40.90	4.11	12.72	0.94	
17	NM001079110	69.69	24.68	601.36	326.85	100.57	133.31	224.91	41.60	4.10	12.80	0.94	
18	NM001079111	67.64	24.63	588.24	322.11	99.02	134.29	223.18	41.37	4.19	12.72	0.94	
19	NM001082112	75.87	27.11	660.46	346.86	105.78	138.96	241.13	41.65	4.11	12.70	0.94	
20	NM001082113	56.21	21.99	546.47	292.12	92.57	127.14	211.49	40.39	4.02	12.80	0.99	
21	NM001082114	73.35	25.48	641.37	329.79	102.07	135.31	223.72	41.70	3.97	12.91	0.94	
22	NM001082115	69.38	24.59	602.94	325.50	99.82	132.93	228.60	41.37	4.08	12.69	0.94	
23	NM001082116	57.73	21.57	541.63	293.88	90.21	123.98	208.63	41.00	3.98	12.59	0.97	
24	NM001082117	66.14	23.71	570.00	326.07	99.72	136.23	230.65	41.14	4.16	12.58	0.94	
25	NM001082118	63.30	27.24	976.50	231.69	206.48	106.24	399.93	24.53	2.79	21.87	1.19	

V. 原の辻遺跡の保存整備と活用

1. はじめに

近年、埋蔵文化財行政において、遺跡の保護とともにその活用ということが以前に増してより一層重要視される様になってきている。そして、その遺跡の保護や活用について考える場合には、その前提としてまず遺跡の保存について考えておく必要があるといえる。遺跡は、人類の過去の活動痕跡が遺構や遺物という形で土地の中に保存された存在と言い換えることもできるが、それらに対して開発行為や学術研究にともなう発掘調査を行うことによって、実物資料として残る遺物以外の遺構や土層、個々の位置・空間的な関係など、土地に刻まれた情報については図面や所見、写真や映像などの記録としてのみ後世に残され、保存されることとなる。遺構や土層については、切り取りや剥ぎ取り、レプリカ作成などによって一部を実物（準実物資料）として後世に残すことも可能であるが、遺物や遺構を総体としてそれらが包蔵されている土地から切り離すことなく保存しようとする場合、遺跡地内での開発・掘削行為を制限して現地でそのままの状態での保存が必要がある。しかし、全ての遺跡地に対してその様な制限を設けることは実際的に不可能であることから、遺跡の評価と価値付けを行い、その結果、史跡指定などのしかるべき保存措置が取られることによって、それらの行為が制限されることとなる。

一方、遺跡の活用の在り方については、学術研究における活用、普及・教育活動における活用、観光分野における活用など、様々な場面での活用の形がある。その中で、学術研究における活用の場合は、発掘調査成果（発掘調査報告書の図面や写真、報告文章など）として保存された記録資料と実物資料としての遺物が主な活用対象となる（さらに、遺跡の立地や景観、位置情報などが研究対象となる場合もある）。普及・教育活動や観光分野においてもそれらの資料が大いに活用されているが、遺跡を視覚的な効果や現地での臨場感なども含めて活用しようとする、史跡指定による保存と復元整備が非常に有効な手段であると考えられる。また、遺跡が史跡として保存されることによって、将来的にも学術資料としての活用が担保されることにもつながっている。

特別史跡「原の辻遺跡」についても、遺跡の発見から発掘調査、研究、評価・価値付けという過程を経て、史跡から特別史跡の指定に至り、様々な場面での活用を目指して指定地の一部が遺跡公園として復元整備されている。ここでは、遺跡の発見から保存、復元整備に至るまでの経緯と管理・活用状況についての概要をまとめることとする。

2. 原の辻遺跡の発見から発掘調査、保存に至るまでの経過（表20）

ここではまず、原の辻遺跡の発見から発掘調査成果の蓄積をもとに史跡等への指定を受け、保存に至るまでの経過について簡単に整理することとする。これは、保存整備や活用に関心が向けられたとしても、その前提となる史跡等指定の根拠となる発掘調査で得られる一次資料やその研究が重要であるからである。なお、平成17（2005）年度以降の発掘調査成果については本書第I章でも整理されている。

原の辻遺跡は、明治37（1904）年頃に地元の尋常高等小学校教諭で郷土史研究者でもあった松本友雄が、原の辻と呼ばれる丘陵上の畑で土器片を採集したことによって発見された。そして、大正12～

15（1923～1926）年にかけて小規模な発掘調査を実施し、昭和初期に中央学会誌において原の辻遺跡を紹介し、その存在が学界で知られることとなる。

戦後、昭和26～36（1951～1961）年に九学会連合・東亜考古学会による発掘調査が実施され、韓半島系土器とともに各種鉄製品、銅鏃、貨泉、卜骨などが出土したことから、遺跡の国際性とともに、石器から鉄器への道具の変換を示す標識的な遺跡として学界で注目されることとなった。昭和49（1974）年には、石田大原地区において耕作地の造成工事途中に石棺墓・甕棺墓を中心とする埋葬遺構群（墓域）が発見され、発掘調査が実施された。そのことを契機として、昭和50～52（1975～1977）年にかけて遺跡の範囲確認調査が実施され、遺跡が丘陵全体に広がっている点や大川地区や原ノ久保地区などでも墓域が形成されていることが確認されたことなどから、遺跡の重要性が再認識されることとなった。この発掘調査成果を受けて、昭和53（1978）年に文化庁と長崎県教育委員会によって地元芦辺・石田両町民に対して遺跡の価値について説明がなされ、史跡指定への動きが始まることとなった。

その後しばらくの間、目立った調査成果は認められないが、平成時代に入ってから調査および史跡指定の動きが活発化する。まず、平成3（1991）年に原の辻遺跡が所在する平野（深江田原）の北側を東西方向に流れている幡鉾川の流域総合整備事業計画に伴う確認調査が長崎県教育委員会によって開始されるとともに、史跡指定に関する芦辺・石田町内の地区別説明会が開催されている。発掘調査については、平成5（1993）年以降は芦辺町および石田町の地元教育委員会（現壱岐市教育委員会）も加わって本格的かつ組織的に実施されることとなった。その結果、平成5年に集落の中心となる南北方向に長い丘陵の東側低地部で複数条の溝（環濠）が検出されるとともに、平成6（1994）年には丘陵北側で竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑・貯蔵穴などが調査され、居住域が丘陵全体に広がっていることが確認されたことから、原の辻遺跡が大規模な多重環濠集落であったことが明らかになった。また、平成7（1995）年には丘陵最頂上部の調査が実施され、その南端で丘陵を横断する様にして掘削された2条の区画溝、その北側では主軸方向をほぼ同じくする高床建物跡と平地建物跡、竪穴建物跡、そしてさらにそれらの北側で柱穴群（小型高床建物群）などが調査された。このことを受けて、丘陵頂上部の空間が特別な意味を持った空間（「祭儀場跡」）として認識されることとなり、その年の調査指導委員会で原の辻遺跡が『魏志』倭人伝に記載された「一支国」の王都であることが特定された。さらに、平成8（1996）年の日本最古の船着き場跡の確認など、重要な遺構・遺物の発見が相次ぐこととなった。そして、その後の発掘調査成果も含めて、丘陵の周囲に多重の環濠を巡らせた居住域を中心としてその外側に複数の墓域を伴う環濠集落で、遺跡範囲が約100ヘクタールの広大な範囲に及ぶこと、中国・朝鮮半島および日本列島の主に西日本各地より搬入された遺物が他の遺跡と比較して多数出土するという特徴や、遺物や遺構の構成内容と位置関係、集落の時期的な変遷過程などが徐々に明らかになってきており、現在も「一支国」の中心集落の実態解明に向けて、原の辻遺跡の発掘調査が学術調査を中心として継続的に実施されている。

一方、先述した様に昭和53年の文化庁・長崎県教育委員会による地元住民への説明によって原の辻遺跡の史跡指定への動きが始まるが、平成5年に地元研究者団体から「原の辻遺跡の保存に関する陳情書」が提出され、同じく地元有識者による「原の辻遺跡保存推進協議会」が発足するなど、発掘調査の本格化と同調する形で地元での遺跡保存運動の気運も高まって行った。そして、平成8年に原の

年 度	主な調査成果
平成5年度 (1993年度)	丘陵東側裾部(石田高原地区)の調査が実施され、丘陵裾部に沿って掘られた多重の溝を確認。溝内より大量の弥生土器とともに、楽浪系土器や無文土器・貨泉などの交流を示す遺物や木製桶や短甲、銅鏃、鉄鏃等の武器類の他、骨製離頭銛が出土。
平成6年度 (1994年度)	丘陵北側の高元地区が調査され、堅穴建物13基、土坑30基等が検出されるとともに、卜骨、獣帯鏡片が出土した。原地区の丘陵最頂部において掘立柱建物群確認。大川地区において古代の溝を確認し、初期貿易陶磁器、緑釉陶器、墨書土器などが出土。
平成7年度 (1995年度)	長崎県原の辻遺跡調査事務所、壱岐・原の辻展示館開設。原地区の丘陵最頂部で主軸方向を同じくする高床建物と平地建物、大型堅穴建物を検出、さらにその南側で丘陵を横断する区画濠2条が確認され、「祭儀場跡」とされる。
平成8年度 (1996年度)	丘陵北西低地で弥生前期後葉～中期の生活域確認。不條地区で船着き場跡、八反地区で水田畦畔跡が調査され、幡鉾川河川改修に伴う発掘調査では旧河道内よりココヤシ笛、細形銅剣片、石製把頭飾、木製短甲などが出土するとともに、韓半島系無文土器がまとまって出土。原ノ久保A墓域で甕棺墓、石棺墓の列埋葬。内行花文鏡・筒形青銅器、小型仿製鏡が出土。
平成9年度 (1997年度)	国史跡に指定される。溜池造成に伴う発掘調査で、船着き場跡につながる旧河道内において弥生中期の床大引材を発見。
平成10年度 (1998年度)	不條地区で弥生前期後葉～中期の住居遺構、弥生中～後期の多重の溝などが確認され、多重溝が丘陵を取り囲む環濠であることが判明。楽浪系滑石混入土器・五銖銭・三翼鏃などが出土。
平成11年度 (1999年度)	丘陵西側裾部の不條・八反地区で環濠・土坑・掘立柱建物・土器溜りなどが確認され、銅鏃、青銅製車馬具、貨泉、鉄鎚、鑄造鉄斧、鑄造鉄鏝、卜骨などが出土。
平成12年度 (2000年度)	国特別史跡指定。丘陵部(原地区)で掘立柱建物、堅穴建物跡を検出。人骨を伴う土坑墓調査。不條・八反地区の環濠ほかの調査で大泉五十、建築部材、堅杵などが出土。
平成13年度 (2001年度)	原地区で大型堅穴建物が確認され、鉄鏃(弥生中期)、青銅製権が出土。八反地区の環濠で人面形石製品、水晶玉が出土。環濠内に遺棄された人骨と獣骨が出土。石田大原地区墓域で弥生中期～後期の甕棺墓、約20基を検出。多鈕細文鏡、後漢鏡、細形銅剣、銅銭などが出土。隣接する苜ノ木地区でも新たに甕棺墓群を確認。青銅製釧、ガラス小玉など出土。
平成14年度 (2002年度)	高元地区の丘陵縁辺部の調査で、銅鐸の舌部が出土。丘陵東側環濠で出入口と想定される通路状遺構を検出。濠の中から龍線刻土器、机部材、ココヤシ笛などが出土。石田大原墓域周辺の調査で、甕棺墓1基、土坑2基などが確認される。
平成15年度 (2003年度)	丘陵南側(原地区)で住居跡埋土内より中広形銅矛片、包含層から鋳型が出土。丘陵西側裾部(不條地区)の旧河道内で長さ40mの石積み護岸遺構、樹皮敷遺構を確認。
平成16年度 (2004年度)	原地区、祭儀場跡南側の建物跡の並びの延長線上で、区画濠と重複関係にある周溝状遺構を確認。石田大原地区墓域で甕棺墓・土坑墓と周溝墓が検出され、周溝墓主体部より細形銅剣出土。原・高元地区の調査で住居跡、ピット・土坑などを確認。
平成17年度 (2005年度)	原・高元地区で住居跡、ピット・土坑、土器棺墓などが調査され、高元地区では大規模土器溜り遺構を確認。大川地区墓域で甕棺墓・石棺墓、(石蓋)土坑墓、祭祀土坑、掘立柱建物などを確認、八反地区の船着き場跡で、船着き場跡本体が水路によって陸地から切り離され、河川中に独立した島状の遺構になることを確認。
平成18年度 (2006年度)	高元地区の土器溜り遺構南東側で住居跡、ピット・土坑、溝状遺構などを確認。石田高原地区で環濠、土坑などの弥生時代の遺構と古墳時代～古代にかけて利用された敷石道路状遺構を確認。船着き場跡の構造確認調査が行われる。
平成19年度 (2007年度)	高元地区で土器溜り遺構西側の範囲を確認。周辺の住居やピット・土坑、溝状遺構などを調査。石田高原地区では、環濠の一部と湧水を溜めたと想定される溜め井状落ち込み、ピット群などが検出される。不條地区の船着き場跡で、西突堤と船渠、南側石積み分水遺構、西側濠、河川などの状況を調査。関線地区の旧河道内より石斧や石剣の未成品が出土。
平成20年度 (2008年度)	高元地区の土器溜り遺構東側でピット・土坑群と堅穴建物跡を確認。丘陵東側低地部、石田高原地区で濠・土坑・柱穴群・溜め井状の落ち込みを調査。原地区で丘陵東側斜面にピット・土坑群、畔状の溝、裾部で落ち込み状地形が確認される。石田大原地区墓域でガラス製小玉が副葬された小児甕棺・土坑墓、ピット・土坑が確認され、遺物包含層内から「昭明」銘帝鏡片が出土。原地区の原の久保C墓域で甕棺墓、石棺墓、土坑墓、埋納遺構を確認。

表20 原の辻遺跡発掘調査成果等概要①【平成5～20年度】(壱岐市教育委員 2011を参考に作成)

辻遺跡国史跡指定のための申請書が提出され、平成9（1997）年9月2日に国史跡、さらに平成12（2000）年11月24日には、「倭人伝に記載された国々の中で、国の中心が明らかになったのは、原の辻遺跡が初めてのことであり、弥生時代の国の構造を解明できる希有の事例として学術的価値は極めて高く重要である」との理由で国特別史跡として指定されたことによって、遺跡の保存措置が図られることとなった。

年 度	主な調査成果
平成21年度 (2009年度)	祭儀場跡南側約50m 地点の原地区で丘陵を横断する濠1条を確認。高元地区の丘陵東斜面でピット・土坑群と竪穴建物跡、環濠へつながる大溝遺構を確認。丘陵西側低地部の八反地区で旧河道、環濠、濠を部分的に埋め戻した土橋、構（弥生～古代）、沼状落ち込みなどを検出。
平成22年度 (2010年度)	丘陵南側の原地区で丘陵基部を東西方向に横断する形でのびる濠を、平成21年度に調査した濠の南側約60m で1条、そこからさらに50m 程度の間隔を空けて1条の計2条確認され、竪穴建物、小児甕棺墓なども調査された。その他、後期旧石器時代の遺物集中区も検出。丘陵西側低地部の八反地区で、昨年度調査区とつながる旧河道、環濠・溝（古代～中世）などを調査。
平成23年度 (2011年度)	丘陵部南西側斜面（原地区）において、祭儀場跡南端の2条の区画濠とその南側約50m で丘陵部を横断していた濠の、それぞれの延長となる溝状遺構を確認。丘陵北西側低地の不條地区では、船着き場跡の北西で2条の旧河道を確認し、河岸に構築された水利施設と見られる石列遺構などを調査。
平成24年度 (2012年度)	丘陵部北端から幡鉾川を挟んで対岸に位置する低地部（川原畑地区）において、ピット・土坑群、溝、旧河道などを確認。
平成25年度 (2013年度)	平成24年度に調査を実施した北側低地部の調査地点と隣接する場所で、旧河道、溝、弥生時代中期後葉の竪穴建物跡およびピット・土坑群などを確認。
平成26年度 (2014年度)	遺跡範囲南側の原の久保地区において、旧石器時代の土坑2基が検出され、ナイフ形石器・台形石器を中心とする石器群が面的に散布した状況で出土。
平成27年度 (2015年度)	平成24・25年度に調査した川原畑地区から幡鉾川を挟んだ南側の対岸に位置する芦辺高原地区において旧河道を検出。

表21 原の辻遺跡発掘調査成果等概要② [平成21～27年度] (壱岐市教育委員 2011を参考に作成)

3. 原の辻遺跡の公有化と復元整備

(1) 公有化と復元整備計画

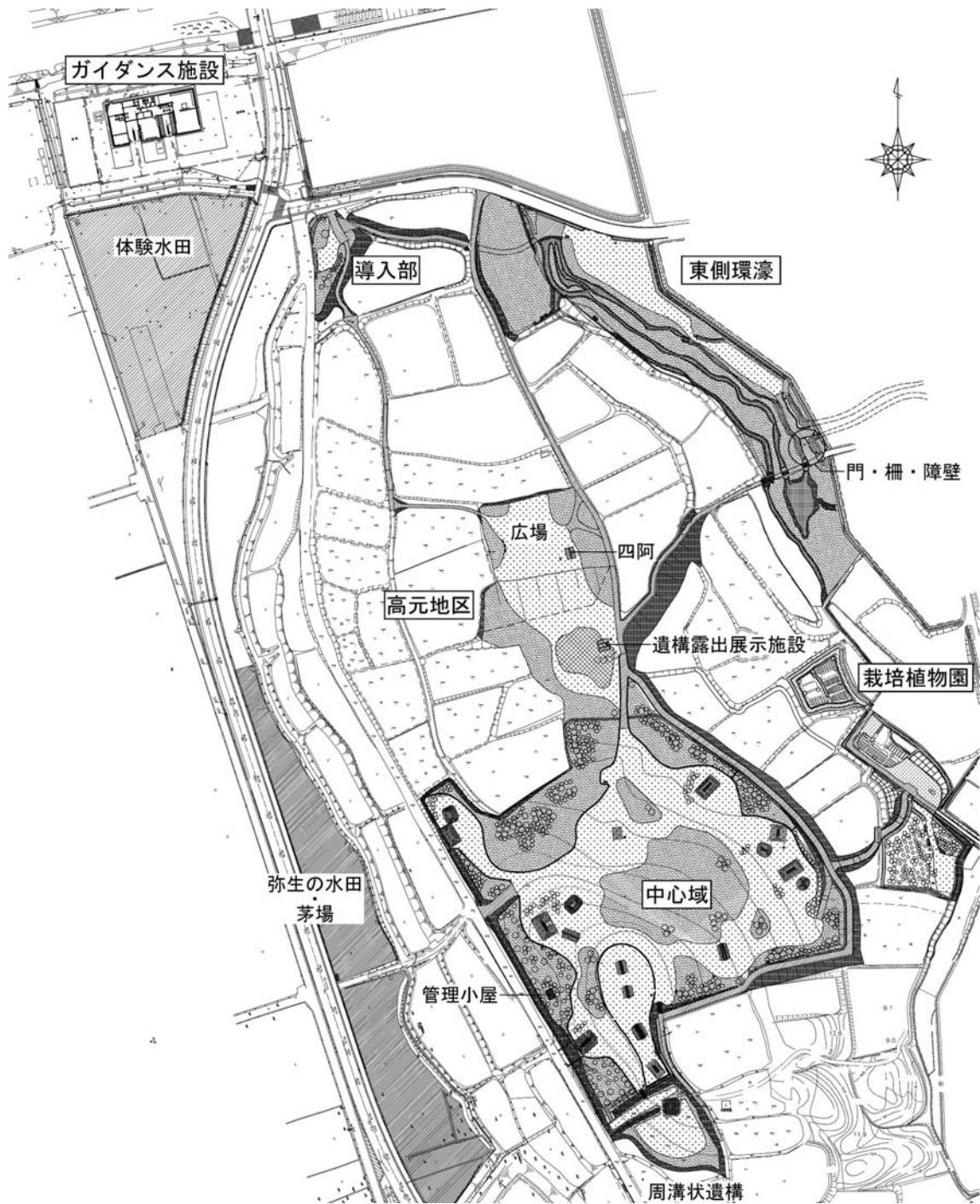
原の辻遺跡が平成9（1997）年に国史跡として指定された当初の指定面積は161,493.23㎡であったが、そのほとんど（指定面積の約91%）は水田や畑などの耕作地として個人が所有する土地であった。史跡等を保存・継承するとともに、市民が学びや憩いの場として利用できるように整備するための前提として土地の公有化が必要である。原の辻遺跡においては、指定地の公有化に平成10（1998）年度以降着手し、追加指定と並行して現在も継続して進められており、平成28（2016）年3月末現在での特別史跡指定面積は212,327.79㎡、その内の公有地面積が193,226.79㎡で、約91%の公有化が完了している状況にある。

原の辻遺跡の復元整備事業は平成9（1997）年10月25日に発足した原の辻遺跡保存整備委員会による指導・助言を受けながら進められ、平成10（1998）年度に「国指定史跡原の辻遺跡保存整備基本計画」（原の辻遺跡保存等協議会 1999）、平成13・14（2001・2002）年度に「特別史跡原の辻遺跡保存整備実施計画」（原の辻遺跡保存等協議会ほか 2003）、そして平成15（2003）年度に「特別史跡原の辻遺跡整備基本設計」（原の辻遺跡保存等協議会ほか 2004）が策定された。更に、その「基本設計」をもとにして、保存整備委員会における協議・検討が重ねられ、実施設計が作成を経て実際の整備工

事へと移行されることとなった。原の辻遺跡の整備工事は、平成16（2004）年度の記念物保存修理事業（一般整備）による復元公園導入部と体験広場の整備に始まるが、平成17（2005）年度以降は史跡等総合整備活用推進事業（総合整備）による本格的な整備事業が開始され、平成22（2010）年度にかけて第Ⅰ段階復元整備が行われた。原の辻遺跡保存整備委員会には、管理運営施設部会・建物復元部会（平成20年度以降は遺構復元部会に名称変更）・生活復元部会・環境復元部会の各専門部会が設置され、本委員会において諮られる議案については、それぞれの専門部会において事前に協議した上で本委員会に提案するようにした。平成9年の委員会発足から第Ⅰ段階整備事業の事業最終年度である平成22年度までの間に、計31回の本委員会と計53回の専門部会（複数の専門部会による合同部会もそれぞれ1回の専門部会として算定）が開催されている。

原の辻遺跡の整備基本計画（原の辻遺跡保存等協議会 1999）では、原の辻遺跡を歴史・文化と自然を大きな軸としてまちづくりをする際の核として位置付け、保存・活用を図ることにより文化豊かな環境の創造を目指すことが重要であるという認識のもと、整備事業の目的を「遺跡の保存、歴史的景観や環境の保全と再生、歴史学習・生涯学習の体験場所としての効果的活用、島民の文化活動や憩いの場の提供、地域のシンボルの創出、観光資源としての活用」にあるとしている。そして、原の辻遺跡が一支国の「王都」としてもっとも繁栄した当時の状況や社会情勢も含めて生活全体を表現することを目指し、①「遺跡の評価を十分に行い、遺跡の特性を明確にした上で、整備の目的・方針を定める」、②「遺跡は確実に保護・保存する」、③「遺跡を取り囲む環境を保全し、風景を守り伝える」、④「施設づくりや運営に環境共生の考え方を取り入れる」、⑤「土地のもつ特性を活かした質の高いデザインにより、豊かな風景を創出する」、⑥「管理運営手法を十分検討し、遺跡の特性を表現する」、⑦「遺跡は地域の資産である」という認識の下に、地域住民の積極的な参加を得ながら整備を進めるという7つの整備理念がまとめられた。これらの整備理念は、復元整備完了後の管理や活用の中でも活かされるべき考え方であると考えられる。また、これらの整備理念に沿って、「時代・遺構・遺物・環境」に着目しながら原の辻遺跡を壱岐全島の中で位置づけ、弥生時代の一支国の「王都」を保存しつつ、分かり易く表現で学習・研究拠点づくりを進めるための7つの基本方針が示された。その基本方針とは、①「遺跡の保存を前提に「一支国」の中心部を遺跡博物館として整備する（一支国遺跡博物館）」、②「つねに新しい発見ができる場とする（変化する遺跡）」、③「遊んで、学んで、体験学習の場を提供する（弥生人の生活を知る・体験学習場）」、④「弥生時代を中心とする東アジアの視点に立った研究の拠点とする（研究拠点）」、⑤「壱岐のシンボルとして島民の心のよりどころとする（現代の一支国）」、⑥「遺跡成立のもととなった風景を守る（弥生の風景）」、⑦「地域の活性化、まちづくり・島づくりの拠点とする（振興拠点）」の7つである。

以上の様に、原の辻遺跡の復元整備の準備は国史跡指定直後より進められてきた。その中で、復元整備対象について、発掘調査によって明らかにされた「一支国」時代の集落の状況とするという方針が決められた。ただし、「魏志」倭人伝に記述された時期に限定して復元対象遺構を特定することが困難であったことから、原の辻遺跡が国際交流拠点として最も盛行した弥生時代後期の時間幅の中で復元対象遺構の選択が行われることとなった。一方、整備エリア（図126）については、計画とその後整備委員会における議論を通じて、遺跡公園への入り口となる導入部、原の辻の集落を特徴づける多重環濠の一部と集落への出入り口となる門および柵・障壁と溜め井（東側環濠域）、多目的に活



【整備内容一覧】

中心域	地形復元 建物復元17棟 祭儀場門2箇所 周溝状遺構復元 植栽 給水設備 電気設備 管理小屋1棟 解説板
東側環濠	環濠・溜め井復元 門・柵・障壁復元 舗装 植栽 解説板
高元地区	遺構露出展示施設 地形復元 土器溜り範囲表示 植栽 電気設備 解説板
栽培植物園	モモ園 展示畠 生産畠 棚もの園 造成 舗装 給水設備 電気設備
広場	導入部広場 高元地区広場 四阿1棟
共通事項	広場：芝舗装 芝保護材 通路：土質舗装 整備全域：放送設備
ガイダンス施設	展示室 体験学習室 管理室 便所 地域振興室 倉庫

図126 第I段階整備のゾーニング図 (岐阜市教育委員会 2011)

用できる体験広場と土器溜り遺構露出展示施設（高元地区）、集落の中心的位置にあったと想定される「祭儀場跡」と周辺的生活空間（中心域）と当時の植生を復元した栽培植物園、遺跡公園の管理と展示・体験学習などを行うガイダンス施設とされた。また、当初の計画では、石田大原墓域の埋葬遺構群も復元整備する予定であったが、計画変更によって第Ⅱ段階整備以降に延期されることとなった。実際の第Ⅰ段階整備事業としては、平成16（2004）年度の記念物保存修理事業および平成17～22（2005～2010）年度の史跡等総合整備活用推進事業によって実施され、「原の辻一支国王都復元公園」として平成22年3月14日に東側環濠域を除く部分が先行開園し、平成23年4月より全面公開されることとなった。

(2) 復元整備工事

復元整備工事に際して、事前の遺構確認調査はもちろんのこと、ボーリングによる地質調査、植生調査、遺構露出展示のための保存処理試験などの事前調査を並行して行いながら計画・設計を行った。

原の辻遺跡の丘陵部は、過去の耕作や耕地整理によって階段状に造成されており、浅い所で現地表面から約20cm掘り下げるとすぐに遺構検出面に到達する地点もある。その様な状況で、現況地盤面において復元整備工事を進めると地下の遺構が破壊されてしまうことから、復元整備の手順として、まず当時の地形を復元し、遺構復元整備を行う範囲についてはその復元地表面より丘陵上で約1m 低地部で約1.5mの厚さで遺構保護盛土を行うことから作業を開始した（図127）。旧地形の復元方法は、発掘調査でそれまでに検出されていた柱穴で最も深いものが70～80cmであったことから、地形復元地点周辺において検出された柱穴の中で深いものの底面から70～80cm上位をその当時の地表面として想定した。

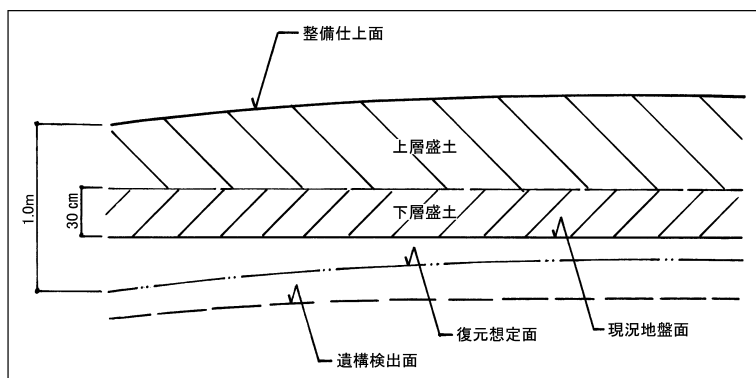


図127 復元整備盛土構成模式図（沓崎市教育委員会 2011）

中心域における第Ⅰ段階の復元建物としては、整備範囲内で調査された弥生時代後期に該当することが想定される建物跡の内、同時期に存在した可能性の高い建物跡17基を対象とした（図128）。それぞれの復元建物については、建物跡の位置関係（遺構配置や立地状況）、規模と構造、遺構内および遺構周辺における出土遺物などをもとに、整備委員会において検討して建物の性格付け（機能設定）を行った。中心域における17棟の復元建物は、丘陵最頂部に位置し、クニの祀りの中心であったと考えられる祭儀場を中心にして整備されている。祭儀場には「一支国王」による祭祀行為が執り行われた「主祭殿」とその準備（身支度）を行った「脇殿」、祭祀の道具や食材を保管した「祭器・儀器の

倉」と「食材の倉」が南北に直線状に配され、その南側に周溝状遺構の復元も行っている。祭儀場の西側の大型竪穴建物は、集落の中心である祭儀場に近い場所に位置しており、重要な人物が居住したことが想定されたことから「王の館」として性格付けされた。また、祭儀場の北西側に所在する大小の竪穴建物と比較的規模が大きな高床倉庫は、外国から一支国を訪れた使節団の長の滞在場所（「迎賓の建物」）とその従者が滞在する建物（「従者の宿舎」）とされ、高床倉庫は使節団の迎接に使う道具類や使節団滞在時にその持参品を保管する倉とされた。中心域北西端に位置し、その外側に存在したと思われる集落の一般住民の居住域と接する地点には、様々な話し合いが行われた「集会所」や集会を取り仕切った「長老の家」、中心域の東側エリアとの中間に位置する「交易の倉」と「穀倉」、そして、中心域東側エリアには渡来系の人々や外国使節団の滞在場所として、大型方形壁立建物（「交

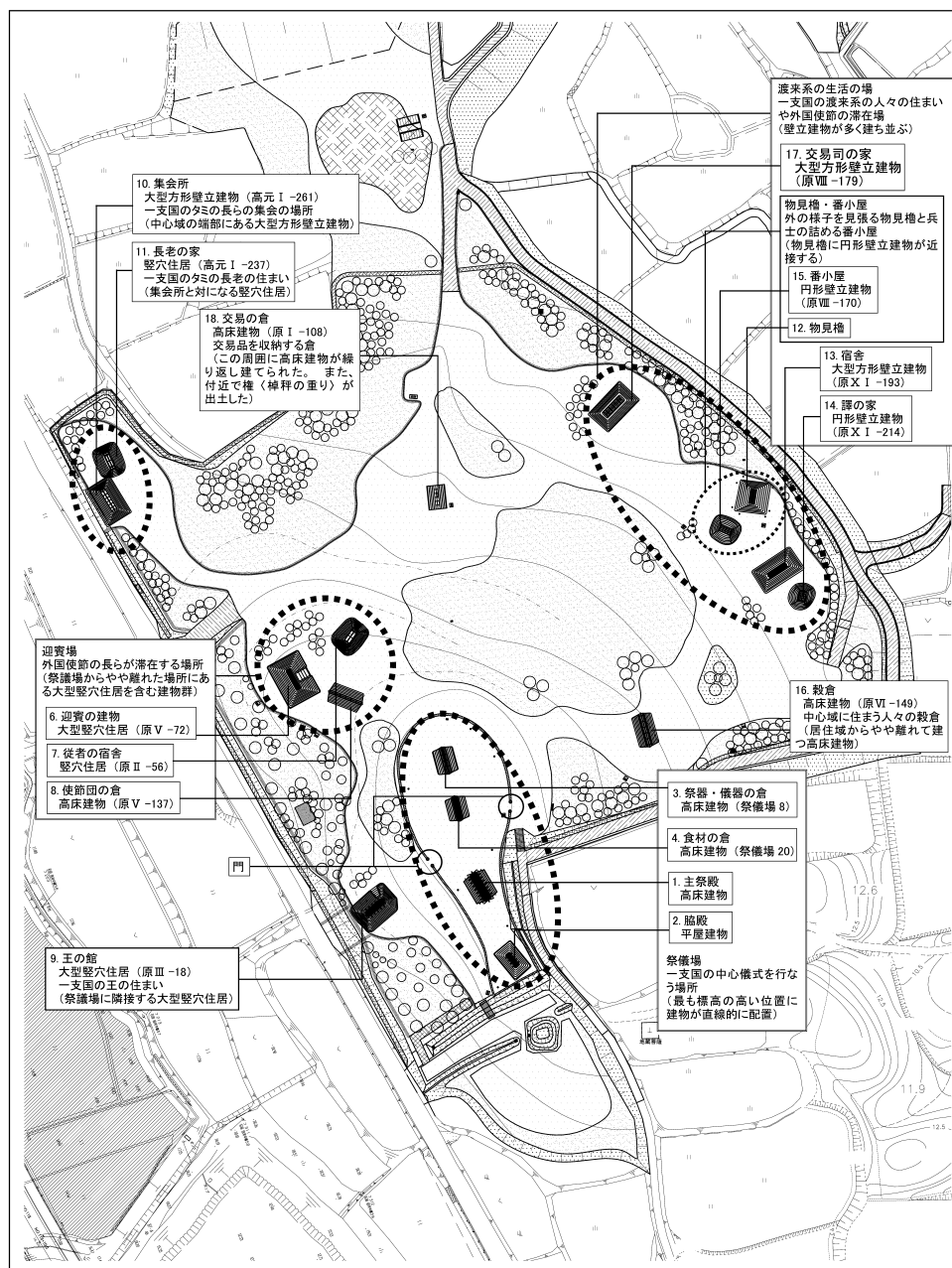


図128 中心域復元建物配置図（壱岐市教育委員会 2011）

易司の家]、「使節団の宿舎]）、円形壁立建物（「譚の家]）、集落の外側を見張る「物見櫓」とそれに隣接する円形壁立建物（「番小屋]）がそれぞれ復元された。この様に復元建物の機能分けとそれに基づく整備地内のゾーニングを行ったことによって、『魏志』倭人伝の時代における原の辻の集落における弥生人たちの生活の各場面を見学者が理解しやすい様に工夫したコンパクトな整備を行うことができた。

一方、復元建物の平面形については発掘調査で確認された遺構に基づいて設計してあるが、遺構の大部分が既にながりの削平を受けた状態であったことから、高床建物における束柱（床柱）の様遺構としては確認されていないものの構造的には存在した（本来は存在したが削平によって失われた）可能性が高い柱などを追加した部分もある。削平によって失われたものの中には遺構深度についての情報もあるが、特に竪穴建物の深度については復元地形を参考にして推測した。その結果、竪穴建物の深度は、深い場合で約1.0~1.1m（迎賓の建物、従者の宿舎、王の館）、浅いもので約0.6m（長老の家）の深さで復元されることとなったが、雨水の流入を防ぐための周堤を巡らせてあることから壁際においても十分に活動可能な屋内スペースを確保できる構造となった（図129）。建物の下部構造に

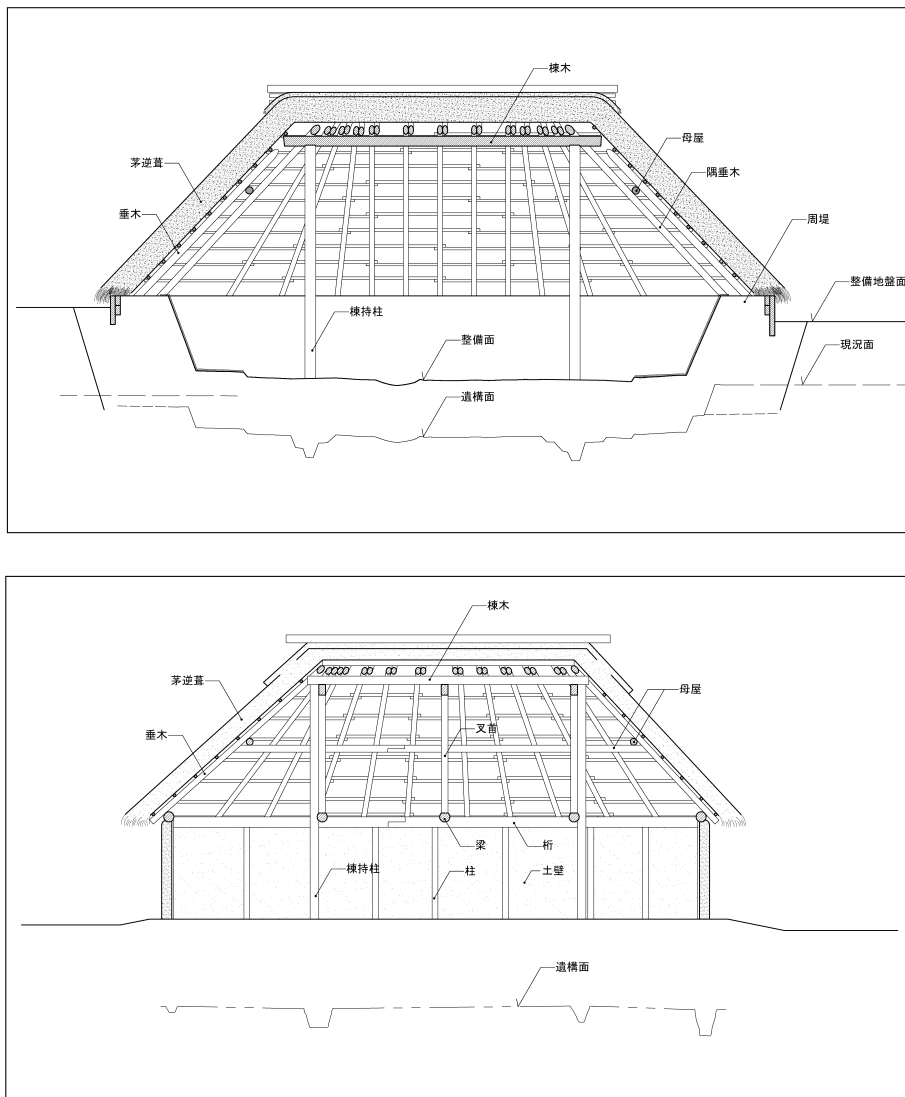


図129 建物復元状況断面模式図 [上：竪穴建物，下：壁立建物]（壱岐市教育委員会 2011）

つについては上記のような手順で設計されたが、遺構として残りにくい上屋構造については、遺構の平面形状と規模、柱の位置関係などを基本としつつも、様々な遺跡における調査事例、遺跡出土の建築部材、家屋が描かれた絵画土器や家形の形象土器（埴輪など）、民族（民俗）例における建築物などに基づいて設計を行った。特に、原の辻遺跡における復元建物の特徴として、同時期の日本列島内ではあまり認められない土壁の採用や、茅葺屋根を穂先を下向きにする逆葺（さかぶき）とした点があげられる。これらは原の辻遺跡と同時期の韓国三韓時代の遺跡の発掘調査で土壁構造の建物跡が確認されていることや韓半島の伝統古民家における茅葺屋根の葺き方を参考にしたものであり、中国大陸・韓半島に地理的に近い壱岐島における先進性を表現するものとして採用してある。

以上、地形復元と建物の復元整備工事を中心に概要説明を行ったが、先述した様にそれ以外に東側環濠域、土器溜り遺構露出展示施設、栽培植物園、ガイダンス施設などについても整備工事を実施している（図126）。今回、詳しく紹介できなかった個々の復元建物の構造的な特徴を含め、その他の復元整備内容、地質・植生調査や生活表現に関する検討結果などの詳細については、『特別史跡 原の辻遺跡 - 第Ⅰ段階整備事業報告書-』（壱岐市教育委員会 2011）に詳しい。

4. 原の辻遺跡の維持管理と活用

遺跡の復元整備は整備工事の完成をもって終了するのではない。その後の活用の在り方も含めて計画的に復元整備が行われるべきであり、そのためには復元整備地内やその周辺環境の維持管理ということも重要になってくる。つまり、維持管理や活用も見据えての復元整備計画の立案が当初から行われる必要があると考える。原の辻遺跡の復元整備においても、復元整備委員会で維持管理や活用についての議論が行われたが、実際の運用において当初の計画通りに行えていないところがある。特に復元建物の茅葺屋根や屋根飾り、土壁などの劣化・破損は想定していた以上に激しく、修理や取り換えの周期も短くなる傾向にあることから、それらの修理費用が管理団体としての市の財政的な問題となってきた。今後はイベント的に修理体験を行うなど、市民力を活用した維持管理の在り方についても考えていかななくてはならないと考える。また、復元整備地を含む特別史跡指定地内の雑草伐採などの環境維持管理についても大きな費用負担となっており、年間を通じた計画的な管理が必要になっている。

一方、活用に関しては、勾玉・ガラス玉作り、土器作り、「まい切り法」による火起こしなどの様々な古代技術体験を遺跡公園に併設したガイダンス施設内で行っている、また、月毎に「モノづくり」をテーマにした多様なイベントを開催して、できるだけ多くの人にガイダンス施設や遺跡公園を訪問してもらい、遺跡や歴史に親しんでもらえるように努力している（図130）。そして、ガイダンス施設内には、実物資料や遺跡周辺のジオラマ模型、パネル、映像資料などを使って、発掘調査や復元整備の手順と方法、原の辻遺跡の発見と調査の歴史などについて分かり易く紹介した展示スペースも備えており、復元公園を見学する上での基礎知識を得ることができるようにしてある。さらに、原の辻遺跡を一望できる丘陵上に立地する壱岐市立一支国博物館・長崎県埋蔵文化財センターにおける調査・研究成果の展示公開と現地での復元整備とを連携させることによって、「弥生の原風景」が残る現地での臨場感と出土遺物を使った具体的な遺跡の説明という、それぞれに欠ける部分を補い合うような活用の広がりを期待できるものとする。



勾玉作り体験



火起こし体験



ガラス玉作り体験



土器作り体験



古代米作り体験（田植え）



古代米作り体験（稲刈り）



凧作り・凧揚げ体験



遺跡復元公園周回駅伝大会

図130 原の辻一支国王都復元公園活用状況

5. おわりに

以上が、国特別史跡原の辻遺跡の保存整備および活用状況の概要である。原の辻遺跡の第Ⅰ段階復元整備では、中心域における17棟の復元建物、東側環濠と門および柵・障壁、土器溜り遺構露出展示施設、栽培植物園、導入部と体験広場、ガイダンス施設などの整備を行い、復元整備完了後は維持管理と活用を継続しているところである。

全ての遺跡を保存整備して残す事が出来ない以上、保存されることとなった遺跡を管理・活用していく立場のものとしては、ただ漫然と構えるのではなく、その遺跡の価値や意味を多くの人々に伝えることを意識して努力を怠るべきではないと考える。しかし、全ての人々が遺跡や歴史に関心を持っているわけではないことから、活用を通じて出来るだけ遺跡に足を運んでもらえるように様々な試みを行っているところである。まずは遺跡という存在に慣れてもらうことから始めて、次に遺跡や歴史への興味につなげてもらえれば、地域の中における先人の足跡としての遺跡の価値や意味についても考えるきっかけとなるのではないかと考える。

その復元整備後の維持管理・活用については整備委員会の議論の中で様々な想定が行われ、たくさんの意見やアイデアが出された。しかし、第Ⅰ段階復元整備が完了してはや6年が経過し、計画段階に当初意図していた通りの維持・管理や活用ができていない部分も出てきており、それらについての見直しや工夫が必要になってきていると言える。

【参考文献】 ※原の辻遺跡発掘調査報告書については割愛した。

原の辻遺跡保存等協議会 1999『国指定史跡原の辻遺跡保存整備基本計画報告書』

原の辻遺跡保存等協議会ほか 2003『特別史跡原の辻遺跡保存整備実施計画書』

2004『特別史跡原の辻遺跡保存整備基本設計報告書』

壱岐市教育委員会 2011『特別史跡 原の辻遺跡 - 第Ⅰ段階整備事業報告書 -』

壱岐市文化財調査報告書第18集

VI. 総括

1. 東アジアにおける原の辻遺跡

原の辻遺跡は日本列島で最も多量の大陸・半島系遺物が出土しており、大陸・半島との関係抜きには理解することのできない遺跡である。ここでは、近年の調査・研究成果に基づき原の辻遺跡と東アジア世界との関係について整理する。

(1) 原の辻遺跡の成立

原の辻遺跡が集落として成立するのは、弥生時代前期末を前後する段階である。原の辻遺跡の成立については既に宮崎貴夫が縄文時代の遺跡と断絶している点から北部九州から壱岐へ移住によって成立し、その契機は半島から渡来する人々を受け入れる基地として条件整備をしたことに求められるという見解を提示している（宮崎 2001）。この見解が提示されて15年程度が経過したが、近年の研究からもこのことが強く支持されるように思われるので、より具体的にみてみたい。

1) 集落成立の人為性

壱岐島における縄文時代の遺跡は松崎遺跡、大柳遺跡、内野遺跡、鎌崎海岸遺跡・名切遺跡、馬立海岸遺跡など、西海岸の岩石海岸の潮間帯に多く位置する。縄文時代遺跡は内陸にも存在するが、そのほとんどは草創期の細石刃関係遺跡で、縄文時代早期以降の遺跡は基本的には海岸部に位置する。縄文時代晩期に入ると、大久保遺跡や堂崎遺跡など南東海岸の砂浜も利用されるようになり、遺跡立地がやや変化する。このほか壱岐島北端にある申山ミルメ浦遺跡でも夜臼式土器が出土したことがある。原の辻遺跡では縄文時代遺物も出土しているが、少量で、石鏃、石匙などの石器類が多く、土器は坂ノ下式土器が3または4片出土しているにすぎず、人々が定住していたとは考えにくい（古澤・田中 2014）。

その後の板付Ⅰ式段階の遺跡が壱岐島ではほとんど知られていない。そして、板付Ⅱb式期に至り原の辻遺跡に生活の痕跡が残されるようになる。このような点は宮崎の指摘のとおり、原の辻遺跡は前段階から人々の生活があって、発展することで成立した集落ではないと考えられる。

このように突然発生した集落はどのように形成されたのかについて遺跡立地の観点から考えてみる。縄文時代の遺跡は西海岸に多いとはいえ、岬や丘陵の陰を利用し、冷たい北西風をうまく避けることができるような箇所には遺跡が形成されている（古澤 2014）。縄文時代の遺跡は、住みやすい箇所に自然に形成された遺跡であるともいえる。これに対して、原の辻遺跡の立地する丘陵部および周辺低地部は現在でも「耳切りの辻」と呼ばれるほど、冬季には厳しい北西風が吹き込み、生活しやすい箇所というわけではない。しかし、そのような箇所であるにも関わらず、集落が形成されたことは、その立地について、住みにくいけれども、あえて選定したという点で、集落形成にあたっての人為性を看取することができる。原の辻遺跡の立地する深江田原平野には原の辻遺跡に良く似た低い舌状台地が何箇所もあり、原の辻遺跡の西方約300mにもそのような丘陵がある。しかし、ここでは、弥生時代の遺跡が確認されていない。単純に生業上の理由で平野部に集落を築いたとすれば、同様の立地に遺跡が分布してもおかしくないが、そうではない。ここにも集落形成の人為性をみることができる。

2) 集落成立の契機

集落が人為的に形成されたとすれば、その原因は何か。宮崎の指摘のとおり海外との交流が要因であった可能性は非常に高い。本書「大陸・半島系土器」の項で述べたとおり、原の辻遺跡で出土する最古の大陸・半島系土器は円形粘土帯土器である。そして、宮崎の見解が提示された時点では不條地区の旧河道における弥生前期末・中期初頭の土器と粘土帯土器との相伴関係が想定されていたが、本書でも検討したとおり、その後相伴事例が増加し、八反地区でも円形粘土帯土器と弥生時代前期末・中期初頭土器の相伴が確認されるに至った。

このようにみると、原の辻遺跡では集落が形成され、時間の経過とともに、韓半島と交流を持つようになったという状況ではなく、集落が形成された時点からほどなくして、既に韓半島との交流は行われていたということが了解される。そこで、先述の集落形成の人為性と併せて考えると、原の辻遺跡は韓半島との交流を目的の一つとして形成された集落であるという可能性が高いとみることができる。この場合、なぜ、居住不適な原の辻遺跡の丘陵が選択されたのかという問題にも一定の解決の道筋がみえてくる。原の辻遺跡を流れる幡鉾川が注ぐ内海湾は、湾口に青嶋、赤嶋といった島があり、外海が荒れていても、比較的穏やかなことで知られる。船待ちのできる内海湾への連結が容易で、なおかつ定住に必要な生産力が維持される平野部を持つ箇所、それこそが原の辻の丘陵ではなかったのかとも考えられる。

この交流の開始の背景には半島側での政治変動と青銅器や鉄器に対する倭人の需要の刺激があったとみる白井克也の重要な指摘があるが（白井 2001）、原の辻遺跡の集落形成地選定にはこのような要因も作用したのであろう。ただし、半島系土器が弥生土器を凌駕する量を占める地点は存在しないので、集落形成の目的のうちの一つであると捉えるべきであろう。

(2) 弥生時代前期末～中期の交流

既に指摘されてきたように粘土帯土器期に原の辻遺跡に持ち込まれた土器には、当時の韓半島で用いられていた器種全般がみられる。甕、長胴壺をはじめ、ミニチュア土器や今次の再整理でも報告した黒色長頸壺など祭祀色の強い土器に至るまで搬入されている。祭祀土器も含めた生活全般の土器が持ち込まれていることと、模倣土器も多く出土しているため、原の辻遺跡でも模倣土器が生産されたとみた場合、ある程度の期間、粘土帯土器文化人が滞在していたものとみられる。但し、粘土帯土器の出土密度が高い不條地区であっても、弥生土器が圧倒的に主体であるため、渡来人のみで構成される居住地があったというわけではない。

片岡宏二は日韓両岸で、互いに類似した模倣土器がみられることについて、一つの共通した土器製作技術に基づく概括化可能な土器様相を呈していると述べている（片岡 2001）。このような日韓で類似する模倣土器は円形粘土帯土器期には存在し、粘土帯土器人との接触開始後まもなく製作が開始されたものである。しかし、本書でも述べたとおり、彼我の類似と差異が複雑に交錯しており、一つの様式として認識するのは容易ではないようにも感じられる。むしろ、いろいろな面での模倣が許された土器群で、先・原史土器としてはかなり特殊な事例なのではないだろうか。土器の製作には通常、強い規制があるとみられるが、原の辻では、さまざまな要素を取り入れたり、模倣した土器が製作されたり、使用が許容されていることからみて、比較的規制の緩い、彼我の土器様式の緩衝地区として

一種の特区となっていたかもしれない。先・原史時代にあつてこのような規制の緩い土器の製作が許された状況というのはどのような状況であったのか、研究の深化が望まれる。

粘土帯土器文化人が原の辻遺跡に来た理由は何であつたらうか。円形粘土帯土器期には政治的変動等により韓半島南部から北部九州へ移住があつたという見解（白井 2001, 李昌熙 2009, 川上 2012 など）が多くみられる。原の辻遺跡を移住の最終目的地とする可能性もないことはないだろうが、原の辻遺跡の墓地から、半島系土器が出土したことはなく、その可能性は小さい。しかし、九州本島への移住の中継地であつた可能性はある。それを示すと思われるのが、「大陸・半島系土器」の項で述べた原の辻遺跡出土擬粘土帯土器の中に、視覚により模倣可能な要素ではなく、粘土帯土器の流儀・癖を示す弥生土器を模倣した土器がみられることである。このような土器は、原の辻遺跡で初めて土器を作つた人物によるものではなく、もともと粘土帯土器製作の流儀を身につけていた人物により、弥生土器を意識して製作したものである可能性が最も高い。当該土器が原の辻で製作されたものであつた場合、先・原史時代の土器製作が、女性によってなされたという一般的な理解を踏まえ、女性も渡来していた可能性が指摘できる。女性を含む集団が渡来したとなると、単なる交易だけが目的ではなく移住という可能性も考慮したほうがよい。

では、交易はなかつたかというところでもないようである。該期の居住域のある丘陵より南に位置する石田大原地区では弥生時代前期後葉以降、甕棺墓などが営まれているが、ここでは戦国式銅剣、トンボ玉、細形銅剣、多鈕細文鏡、天河石製白玉・勾玉などの渡来文物が出土している。石田大原地区では環濠内から半島系土器が出土することはあるが、墓域では半島系土器がほとんど出土することはない。甕棺からみても弥生人の墓地である。渡来文物の中でも貴重な物品が弥生人の手に渡り、副葬されているという状況からは交易も存在していたことは十分に考えられる。白井は弥生時代中期前半では日本列島で粘土帯土器が目立たず、靉島を舞台とする貿易がなされた一方、須玖Ⅱ式古段階には靉島貿易が終了し、代わつて原の辻遺跡が中心となり遅い段階の三角形粘土帯土器が流入するという見解を提示したことがある（白井 2001）。しかし、原の辻遺跡の三角形粘土帯土器の共伴関係をみると須玖Ⅰ式段階の共伴例もあり、むしろ、須玖Ⅱ式段階での粘土帯土器の確実な共伴事例は多くないという状況になっている。加えて、参考となるのが、交流の現場となつたであろう船着き場である。船着き場跡では2条突帯鑄造鉄斧や粘土帯土器期の把手が出土しており、大陸由来の工法からみても大陸・半島色の強い遺構である。この船着き場の構築は、須玖Ⅰ式古段階頃であるとみられ、須玖Ⅱ式古段階頃までは利用されたとみられる。従つて、弥生時代前期末に開始された交流は原の辻遺跡では、弥生時代中期前半にも継続され、靉島遺跡も原の辻遺跡も同様に交流拠点となつていたのではないだろうか。そして原の辻遺跡では弥生時代中期後葉段階でも交易が継続するとみるべきであろう。

楽浪郡との関係については土器からは須玖Ⅱ式段階の滑石混和楽浪系土器の確実な共伴例も認められ、武末純一らの指摘（武末 2004）のとおり煮沸具がもたらされたとみると、須玖Ⅱ式段階には楽浪人の直接渡来が想定される。前漢五銖銭も楽浪郡との交流でもたらされたものである。須玖Ⅱ式段階より前段階の楽浪郡との関係を示す可能性がある資料としては、先述の戦国式銅剣、トンボ玉といった墓地出土品以外に、1998年度不條地区E区16号土坑では弥生時代中期初頭～前葉の土器、粘土帯土器に伴う組合式牛角把手付長胴壺とともに出土した三翼鎌が挙げられるが、粘土帯土器との共伴もあり、韓半島南部を經由した楽浪郡との交流であつた可能性もある。楽浪系筒坏を模倣したとみられ

る土器が弥生時代前期末～中期末の河川跡から出土していることは、粘土帯土器とともに、楽浪系土器の模倣も許容される「特区」であったことを示す。

交流は移住・交易に留まらず、弥生人の精神文化にも及んでいた。1995年高元地区調査における弥生時代中期後葉の9-B7号住居址で肩甲骨6点（内2点は確実に卜骨）の卜骨が発見されており、大陸由来の卜占が既に、受容されていたことがわかる。

(3) 弥生時代後期の交流

弥生時代後期になると三韓系瓦質土器と楽浪系土器の双方が原の辻遺跡に多く搬入されるようになる。三韓系土器の弥生時代中期における確実な共伴事例はまだ発見されておらず、大部分は弥生時代後期に併行するようである。楽浪系土器も滑石混和土器については弥生時代中期後葉共伴事例があるが、泥質土器については弥生時代中期共伴事例としては確実性に問題がある資料しかまだ発見されていない。そのため、楽浪系土器も多くは弥生時代後期に属するものであろうと考えられる。弥生時代中期末・後期初頭頃の大陸・半島系土器が相対的に少ないことは、原の辻遺跡における集落の再編と関係する可能性がある。

楽浪系土器と三韓系土器の分布は粘土帯土器とは異なる様相を示す。宮崎は、丘陵部に運搬具を中心とする器種が搬入されたとみて、粘土帯土器期の自炊生活から、丘陵内での饗応を受けるように変化したとみている（宮崎 2000, 2005）。宮崎の指摘のとおり丘陵内、特に北部の高元地区でも一定量の楽浪系土器、三韓系土器が出土している。そのため、丘陵が果たした役割も重要であるが、一方では低地部も交流の場だったのではないかと考えられる兆候がある。丘陵をめぐる環濠内から大陸・半島系土器が多く出土するため、投棄が丘陵側からなのか、低地側からなのか問題になるが、不條地区や八反地区では環濠の外側を流れる旧河川からも大陸・半島系土器が出土することからみて、弥生時代中期段階の船着き場は廃絶するものの、西側低地部では継続的に交流が行われていたとみるべきだろう。

楽浪系土器と三韓系土器でもやや分布が異なる部分があり、三韓系土器は丘陵の東西で同程度出土する一方、楽浪系土器は明確に西側で多く出土する。このように三韓系土器と楽浪系土器の分布が異なることは、三韓人が楽浪土器も携えて渡来したという状況ではなく、三韓系の集団と楽浪系の集団がそれぞれ別途渡来したという状況を示唆する。楽浪人の基本的な所持品であった中国貨幣の分布も西側低地に偏ることと併せて考えると、楽浪系集団と三韓系集団が丘陵内の東西、あるいは低地部の東西で、ある程度わかれていた可能性がある。

弥生時代中期では土器以外の渡来文物は墓地で出土することが多い。しかし、弥生時代後期以降では、墓地でも渡来文物が出土することはあるが、丘陵部や丘陵付近の低地部でも渡来文物が出土することが多くなる。特に八反・不條地区など西側低地部を中心に、土器溜や環濠、溝などの遺物集中部で、中国貨幣、ミニチュア車馬具、銅釧、木製櫛などの漢系文物が出土しており、交易によって得られたものとみられる。そのうち、土器溜出土品などは弥生人の手に渡った後、祭祀などに利用されたものとみられ、交易後の使用事例を示すものといえよう。

精神文化面では、弥生時代中期に引き続き1951年東亜考古学会高元地区調査で弥生時代後期後半に属する9点の卜骨が発見されている。また、1999年度八反地区1号土器溜（弥生中期中葉～後期末）

でもト骨が出土している。注目されるのは2002年度調査石田高原地区環濠から出土した弥生時代後期中頃～後葉に属する龍線刻土器である。この土器は伏龍と昇龍が描かれ、その中間には雷文が描かれる。許慎『説文解字』〈永元12（紀元100）年〉には「龍 鱗蟲之長。能幽，能明，能細，能巨，能短，能長。春分而登天，秋分而潛淵。从肉，飛之形，童省聲。凡龍之屬皆从龍。」と記述され、龍は春分に天に登り、秋分に淵に潜む動物であった。土器に描かれた龍は昇龍と伏龍によってその生態が表現され、雷文は、天に昇る際の雷鳴表現であると解される（宮崎 2005）。この土器自体は弥生土器であるため弥生人の製作によるものであることは間違いないが、実際に生態を観察することのできない、大陸人の想像上の動物である龍の生態を把握し、かつ物語りを弥生人が正確に描いていることは、大陸・半島との交流が思想面、精神文化にまで深く及ぶものであったことを示している。

(4) 集落の終焉

古墳時代前期の遺構から陶質土器が出土するが、その分布は北部丘陵、丘陵西側低地、丘陵東側低地と分布が散漫になり、特段丘陵部に集中するという状況はみられなくなる。大陸・半島系土器の中でも最も遅い段階であるとみられる4世紀中葉の陶質土器が、丘陵から離れた安国寺前A地点で発見されたことも、丘陵部の求心力が既になくなってしまったことを示唆するのではないかと考えられる。

李昌熙2009「在来人と渡来人」『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』同成社

片岡宏二2001「海峡を往来する人と土器」『山中英彦先生退職記念論文集 勾玉』

川上洋一2012「九州出土の水石里式土器とその製作者集団に関する検討」『研究紀要』17, 由良大和古代文化研究協会

白井克也2001「勒島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』

武末純一2004「遺物からみた楽浪郡と北部九州の交流」『海を越えたメッセージ～楽浪交流展～』伊都国歴史博物館展示図録1

古澤義久2014「玄界灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格」『東京大学考古学研究室研究紀要』28

古澤義久・田中聡一2014「縄文時代の原の辻遺跡」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』4

宮崎貴夫2000「原の辻遺跡の朝鮮半島系土器について」『原の辻ニュースレター』5

宮崎貴夫2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』4

宮崎貴夫2005「土器」『原の辻遺跡 総集編I』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集

2. 原の辻遺跡の盛衰

原の辻遺跡は弥生時代前期後葉に集落が形成され、古墳時代初頭に解体されるまでの約600年間栄えた「海の弥生都市」である。これまでの発掘調査成果をふまえ、集落の画期に注目しながらI期～VI期の6段階に区分する。I期は原の辻集落形成期〔弥生時代前期後葉～前期末〕、II期は原の辻集落確立期〔弥生時代中期初頭～中期中葉〕、III期は原の辻集落第1次盛行期〔弥生時代中期中葉～中期末〕、IV期は原の辻集落後退期〔弥生時代後期前葉〕、V期は原の辻集落第2次盛行期〔弥生時代後期中葉～後期後葉〕、VI期は原の辻集落解体期〔古墳時代初頭〕にそれぞれ該当する。

I 期. 原の辻集落形成期〔弥生時代前期後葉～前期末〕

原の辻遺跡の発掘調査では旧石器時代の石器や縄文時代の遺物が出土しているものの、これら遺物は“人の存在を明らかにしているものの、定住していたことを裏付けるには乏しい”資料である。

縄文時代の遺跡は沓岐島の西海岸部に集中しており、原の辻遺跡で、見つかっている遺物は島内で狩猟中もしくは移動中に廃棄又は脱離したものと考えられている。“定住”という視点でみたとき、原の辻遺跡に集落が形成され始めるのは、検出された遺構や出土した遺物から弥生時代前期後葉から前期末のことである。

生活関連遺構は舌状にのびた丘陵の先端部に集中している。居住域は丘陵の頂部〔高元地区〕に集中し、円形竪穴建物跡や貯蔵穴などが検出されている。東側低地部には大溝が掘られ、大溝を流れる水は沼地状の落込みに集中している。このころ既に、北西部低地河川沿い〔不條地区〕を中心に韓半島からの渡来人が弥生人と雑居する形で、滞在・居住していた。

墓域は丘陵の最頂部付近〔原地区〕に集約して形成し、のちにこの丘陵を越えて南東側に広がる別の丘陵部〔大原地区〕へと移動する。丘陵の最頂部付近〔原地区〕には、原の辻遺跡の中でも最も古い弥生時代前期後葉の甕棺墓を有する。墓域の構成も、はじめにつくられた甕棺墓を取り囲むように墓坑が形成されていることから、小集団の有力者が埋葬された墓地群の可能性が考えられ、家族的・血縁的関係の強い関係性がみえてくる。この時期はやや大型の壺を棺とし、蓋を被せて埋葬し、棺中には副葬品は持たず、赤色顔料を散りばめた程度である。この甕棺形成後、弥生時代前期末～中期初頭に2基の石棺墓が主軸を揃えるようにしてつくられている。この石棺墓は頁岩を薄く割ったものを側壁に用いているのが特徴で、同遺跡内で検出される弥生時代中期以降の石棺墓に使用する石材と異なる。別丘陵に形成された大原地区の墓域からは、弥生時代前期末の金海式の甕棺墓が検出されている。大原地区の墓域は甕棺墓と石棺墓が混在する形であるが整然と並べられた列埋葬になっており、ある一定の規則下のもとで墓域を形成していることが窺える。

この時期の大規模な生活関連遺構〔居住区〕の存在は未確認であるが、墓域の変遷からみたときに墓域の拡張とともに集団も拡大していく傾向がみられ、集団内にも組織的社会的意識が芽生え始めたことが窺える。原の辻遺跡が国としての条件を整えつつある形成段階の時期である。

II 期. 原の辻集落確立期〔弥生時代中期初頭～中期中葉〕

弥生時代前期に形成された集団が丘陵部全体に拡大するとともに、周辺の丘陵部に小集団が居住区を構える。原の辻遺跡の北側を流れる幡鉾川の対岸の丘陵の麓に広がる甕棺墓や石棺墓で構成される墓域〔閩線地区〕が確認されている。高元地区や原地区がある丘陵の西側に広がる別丘陵〔鶴田地区〕からも甕棺墓で構成される墓域が確認されている。どちらの墓域も弥生時代中期初頭から埋葬が始まっていることから、この時期頃から集団内の分散もしくは人口増加による居住区の分住があったことが想定できる。

丘陵部のエリア区分も I 期では、北側半分は居住域、丘陵頂部に墓域と棲み分けがあったのに対し、この時期には丘陵全体を居住域として利用している点からも集落内における画期が見られる。この時期は、多くの外来系遺物の搬入が見られ、渡来人の存在が大きくなる時期である。検出された粘土帯土器・擬粘土帯土器は丘陵北西側の河川跡に集中していることから、一支国に滞在した渡来人は、丘

陵部ではなく北西側の別丘陵を中心に集落を構成する一員として行動していたことが窺える。

対外交流が盛んに行われるようになって必要になったのが船着き場の存在である。船着き場の調査は本体を中心に周辺部まで広げられ、一定の成果が得られている。2つの突堤を持ち船渠部が2箇所あり、島状の形になっていることが判明している。突堤は何重にもわたる版築を重ね、底面には樹皮を敷き詰め一定の水分を保つための工夫や崩落を防ぐために側面に人頭大の礫石を積み重ねている。また、底面付近には土の流出を防ぐために矢板を打って土留めしている点など随所に最先端の技術「敷租朶工法」を用いていることから、渡来人の存在が船着き場の建設に大きな影響を与えていることはいうまでもない。

低地を中心に、環濠が掘り巡らされ、一部を既存の河川とつなぐことで丘陵部の空間とそれ以外の空間を区画している。掘られた環濠は防衛機能を満たしつつも排水効率を良くするための側溝的役割を兼ねており、生活空間の向上に直結している。

この時期の廃棄土坑は大きく2箇所に区分される。丘陵北西側の低地部に集中する土坑群と丘陵上の谷部に集中する土器溜り遺構がある。北西側の土坑群の中には石器の破片のみがまとまって出土したものもあり、石器生産との関連が想定されている。丘陵上の土器溜り遺構は径20メートルにも及ぶ大規模なものであり、長期間連続して使用されていたことが発掘調査で判明している。廃棄された土器は土器溜り遺構の北側斜面に集中していることから、丘陵先端部〔高元地区〕付近を居住区としていた者たちが主に利用していたことが窺える。

この時期の墓域は長さ30メートルにも及ぶ列埋葬〔閩繰地区〕や前期末から形成され始めた大原地区の墓域が拡張していくなど組織的な階層別埋葬が確立する。大原地区の墓域では、墓坑に周溝を巡らす特定有力者の墓も築造されている。弥生時代中期になると細形銅剣や蜻蛉玉などを副葬品に持つ有力者も出現する。

この時期はI期で形成した集落をさらに整備し、多重の環濠で囲まれた「海の弥生都市」が確立する時期である。

Ⅲ期. 原の辻集落第1次盛行期〔弥生時代中期後葉～中期末〕

Ⅲ期はⅡ期で確立した環濠集落が盛行する時期である。集落の様相はⅡ期と変わらないものの集落自体の規模は拡張していく。丘陵周辺に広がる閩繰地区や鶴田地区の墓域や生活域は規模縮小の傾向がみられる。

対外交流の発展と共に、中国大陸や韓半島から多くの交易品が原の辻に集まるようになり、1つの弥生都市から対外交流の拠点施設へと進化を遂げる。このことが壱岐に多くの弥生人を惹きつける要因の1つとなり、大陸や半島から持ち込まれる交易品を求め多くの弥生人が海を渡り、原の辻を訪れたため一気に人口が増加していったものと考えられる。急激な人口増加に伴って、丘陵上の住居跡も増加していく傾向がみられる。丘陵部では丘陵全体に広がっていた居住域が統率され、丘陵頂部周辺〔原地区〕に集約される。急激な人口増加によって原の辻遺跡に居住域を構えることができなかった集団は、原の辻遺跡周辺の丘陵部や幡鉾川の上流部に形成された車出遺跡群さらには島の北西部の山地頂上に形成されたカラカミ遺跡へと広がっていく。急激な人口増加は原の辻遺跡に集中していた島内の動きが一気に島全体へと広がる画期になったとも云える。丘陵の頂部周辺〔原地区〕の居住域の

構成は、最頂部にはあまり建物が建てられていないことから、公共性の高い空間になっていたことが窺える。この最頂部を取り囲むように有力者の居住区がつくられている。

低地では船着き場を中心に環濠が複雑化し、多重の環濠が掘り巡らされる。船着き場周辺からは、機械仕掛けの弓に用いる矢の先に取り付ける鏃〔三翼鏃〕、前漢で使われていた貨幣〔五銖銭〕や楽浪郡で使われていた土器〔滑石混入楽浪土器〕などの大陸や半島から持ち込まれた交易品が多数出土している。大陸や半島から交易品を入手したものは、日本本土から持ち込まれた品と物々交換していたと想定されるが、現段階では市〔バザール〕の存在は確認されていない。対外交流の拠点施設だった原の辻遺跡には、組織的な市〔バザール〕が集落の中に存在し、交易を取りまとめていた可能性が考えられる。原の辻遺跡では小規模な鉄器や青銅器生産は行っていた可能性があるものの、大規模な工房などの存在は確認されていない。この背景には、原の辻遺跡が対外交流の拠点だったことから、必要なものは交易によって手に入れることができたため、在地生産を行う必要がそれほどなかったのではないかと考える。それまでほとんど利用されていなかった丘陵北側低地部の川原畑地区ではこの時期に多数の土坑・ピット群が築かれており、土地が利用されていることに加え、住居跡も確認されているので、居住域でもあったとみられる。この集団は、出土品から遠賀川以東の集団との結びつきも考えられる。

集落が拡張していく中で、Ⅱ期で墓域の中心だった大原地区の墓域が環濠内に入ったため、新たに掘り巡らされた環濠外の大川地区や原の久保地区・苜ノ木地区へ墓域が広がっていく傾向がみられる。この墓域の変遷には、環濠内に墓域をつくらないという明確な棲み分けが存在していたことが窺える。

この時期は、めまぐるしく変化する東アジア情勢の中で、大陸や半島との対外交流の主導権を握り、交易を通じて盛行していく時期である。

Ⅳ期. 原の辻集落後退期〔弥生時代後期前葉〕

盛行を極めたⅢ期と一転して、紀元前後を境に集落は後退する。弥生時代中期初頭に築造された船着き場が解体される。船着き場の解体とともに複雑に掘り巡らされた環濠も埋まる。

船着き場の解体や環濠の埋没の背景には、大規模な自然災害による集落の崩壊が想定される。これを裏付ける資料として、低地部に堆積した粒子の細かい砂粒を含む灰白色の粘土質の土層が挙げられる。この土層が船着き場の底面だけでなく、突堤の上面まで堆積していることから短期間に一気に船着き場全体を覆ったものと推定される。船着き場は紀元前後に解体したことが判明しているが、その原因が集落の中で不必要になり解体されたのではなく、大規模な水害に伴う低地部の水没によって消滅を余儀なくされたのではないだろうか。その水没は、船着き場を覆うだけのものであったことが土層の体積状況からもわかるように、低地部のほとんどが一時的に埋没したものと推定される。このことによって、集落の存続が難しくなるだけの破壊的な痛手を負ったものと考えられる。船着き場が解体されたにもかかわらず、原型に近い状態を保っていたことから埋まるまでの時間がいかに短かったか推測できる。集落にとって最大の農耕地だった低地を水害で失ったことで、日常生活が困難になり生活拠点を移動せざるを得ない状況になったのではないだろうか。その結果、集団が移動先として選んだのが車出遺跡であり、カラカミ遺跡だったと考えられる。これらの遺跡に共通することは、弥生時代中期中葉に集落が形成され、弥生時代後期になってから盛行している点である。また、この時期

の大陸・半島系土器の量も他の時期に比べて相対的に少ないことも、交易の不振を物語る。

原の辻遺跡の丘陵部からこの時期の居住域が確認されていないものの、墓域はⅢ期に続き大川地区・原の久保地区・萱ノ木地区で検出されていることから、集落の拠点が一時的にさらに南側丘陵の奥もしくは遺跡内の別丘陵に移ったことが考えられる。

この時期は、紀元前後に起きた自然災害によって後退した集落を立て直し、後に盛行するⅤ期の礎を築いていく時期である。

Ⅴ期. 原の辻集落第2次盛行期〔弥生時代後期中葉～後期後葉〕

Ⅳ期で後退した集落も、時間の経過と共に再び丘陵部に生活拠点が戻る。集落もⅡ期よりも、より計画的に集落が機能的に配置される。環濠も再掘削され、多重の環濠集落の姿を取り戻す。

前回の集落形成との大きな違いは、弥生時代中期の集落形成では丘陵の最頂部が公共性の高い空間として利用されていたのに対し、今回は、祭儀場と呼ばれる祭祀的な空間として集落の象徴として存在する。祭儀場に建てられた建物は主軸を揃え、一直線に並ぶ形で建てられているなど、意図的に配置されたことが調査から見えてくる。また、丘陵を縦断していた2本の環濠も、今回は1本が最頂部付近で区切られ、途切れた環濠の間には周溝状遺構が祭儀場に建てられた建物群の延長線上につくられる。居住区も最頂部を取り囲むようにつくられていたが今回は、東側斜面に集中してつくられている。中には斜面を造成して平坦に改良し、その上に竪穴建物を建てている例もみられる。丘陵の北側には東側斜面につくられた竪穴建物とは一線を画す大型の竪穴建物がつくられている。祭儀場の東側斜面に建てられた竪穴建物は縦4メートル、横4メートルの床面積16平方メートル程度のもが多いが、祭儀場の北側に建てられた竪穴建物は縦8メートル、横6メートルの床面積48平方メートルと約3倍の大きさを誇る。この大型竪穴建物は、日常的に使用する空間ではなく、迎賓や集会など非日常的に使用する空間だったのではないかと考えられている。また、丘陵内でも大陸・半島系土器が一定量みられ、丘陵内で渡来人も弥生人と共に生活していたものとみることができる。

墓域はⅣ期に存在したものが拡大していく傾向がみられる。中でも原の久保地区の墓域は、他の墓域と異なり多くの副葬品を所持している。調査では径20センチを超える内行花文鏡をはじめ小形仿製鏡などの青銅器が見つかっている。大川地区の墓域からも銅釧や鉄矛などが見つかっている。この2つの墓域の大きな違いは、原の久保地区の墓域が列埋葬で構成されているのに対し、大川地区の墓域はグループ埋葬になっているのが特徴である。埋葬配置から原の久保地区の墓域は社会・組織的要素が強く、大川地区の墓域は家族・血縁的要素が強いものと考えられる。大川墓域では土器を土坑の床面に供える儀式的な被葬者を祭る祭祀行為が定期的に行われていた跡や被葬者を一時安置する殯屋的な掘立柱建物跡が確認されている。墓域の構成はⅡ期以降、一貫して環濠の外につくられてきたが、成人墓はこれまでどおり環濠外に埋葬されているものの、小児の一部は環濠内の居住域周辺で確認されていることから、小児に対しては特例的な埋葬習慣があったものと考えられる。Ⅱ期で形成された土器溜り遺構もこの時期も同じ場所に存在しているものの、日常土器よりも高坏や脚付き土器、丹塗土器など祭祀系の遺物が集中して見つかっており、祭儀場で行われた祭祀行為との関係性が見えてくる。

この時期は、再び交易の拠点として栄え、「海の弥生都市」から「一支国の王都」へと発展を遂げ

る時期である。

Ⅵ期. 原の辻集落解体期〔古墳時代初頭〕

古墳時代の幕が開けると同時に、一支国の集落の解体が始まる。解体の原因となった1つの要素に交易のルートの変化が挙げられる。弥生時代後期の終わり頃には伊都国に一大率が配置され、朝鮮半島との交易権を握り、交易の拠点が伊都国に移る。弥生時代の終焉を迎える頃には福岡市早良区の西新町周辺に交易の拠点が移っていたことが推測される。船の造船技術と航海技術が格段に向上したことによって交易ルート〔海の道〕が変わり、ものの流れだけでなく人の流れも大きく変わったものと思われる。一支国が“交易の拠点”から“交易の中継点”へと姿を変えていく中で、壱岐島に住んでいた多くの人々が新たな交易の拠点へと活動の場を求めて移っていったことが人口の減少につながったものと考えられる。調査の結果、原の辻遺跡では古墳時代前期までは低地に環濠も存在し、環濠内で生活が営まれていたものの、その後、人口の減少とともに国としての機能も衰退し、多重の環濠も徐々に埋まり解体されていく。時期を同じくして車出遺跡群やカラカミ遺跡にあった集落も原の辻遺跡と同じ時期に同じ道をたどっている。

この時期は、交易ルートの変更に伴い人口が減少し、国としての機能が衰退し、集落が解体される時期である。

おわりに

弥生時代前期後葉に集落が形成され、古墳時代初頭に集落が解体されるまで、原の辻遺跡は「一支国の王都」として存在し続ける。Ⅳ期になり、一度は後退するものの、途切れることなく集落は営まれ続ける。集落は対外交流が盛んになる時期に形成され、対外交流の拠点の役割を終えるとともに解体される歴史から、もともと壱岐島に存在していた集団が集まったのではなく、対外交流の中で同じ目的を持った集団が壱岐島に集まり集落を形成したものと考えられる。故に、集落の解体も争いが原因による集落の解体ではなく、交易ルートの変更に伴う集落の自然消滅が解体の理由として考えられる。

集落が解体された後も、壱岐島に残る集団もいたと思われるが、これまでの発掘調査において、その足どりを確認することはできていない。島内には280基にも及ぶ古墳が存在しているが、前期古墳は1基も発見されてない。島内で最も古い古墳は原の辻遺跡のある深江田原を見下ろす山頂に築造された大塚山古墳であるが、出土品から5世紀中頃の築造と判断できる。原の辻遺跡の解体から約100年の間、壱岐島内における古墳時代前期の歴史を知る手がかりはまだ発見されていない。これからの古墳調査によって原の辻遺跡解体後の人の流れや生活の様相など解明していくことが求められている。

原の辻遺跡は弥生時代に形成された大規模環濠集落でありながら、大陸や半島と日本本土を結ぶ架け橋として重要な役割を担った「海の弥生都市」であり、対外交流の歴史を解明する上で欠かすことができない貴重な遺跡である。また、原の辻遺跡の実態解明に向けて、島内にある車出遺跡群やカラカミ遺跡といった弥生集落の発掘調査を実施し、それぞれの集落の実態解明を行うことが必要不可欠であり、調査成果を原の辻遺跡と結びつけることで一支国としての対外交流の歴史を解明できるものとする。

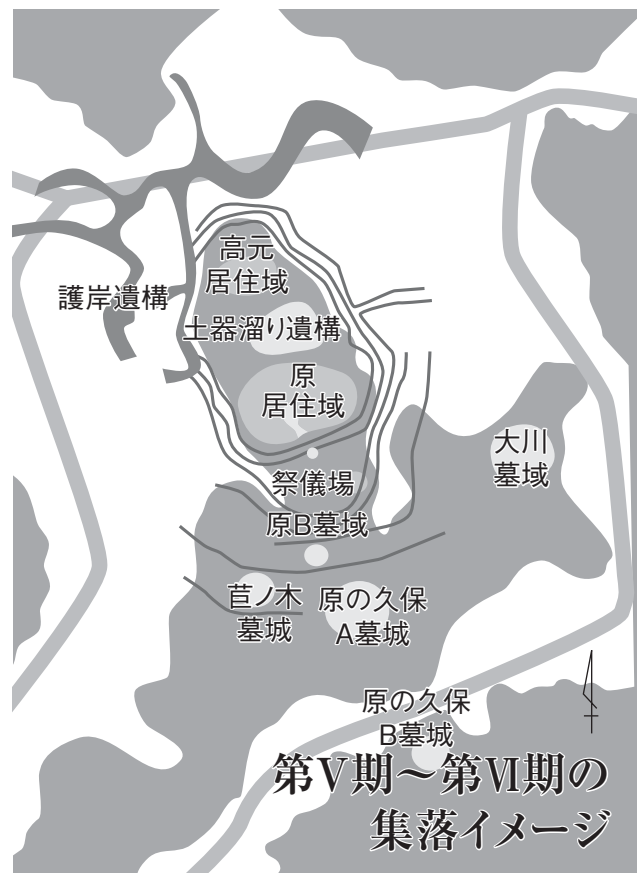
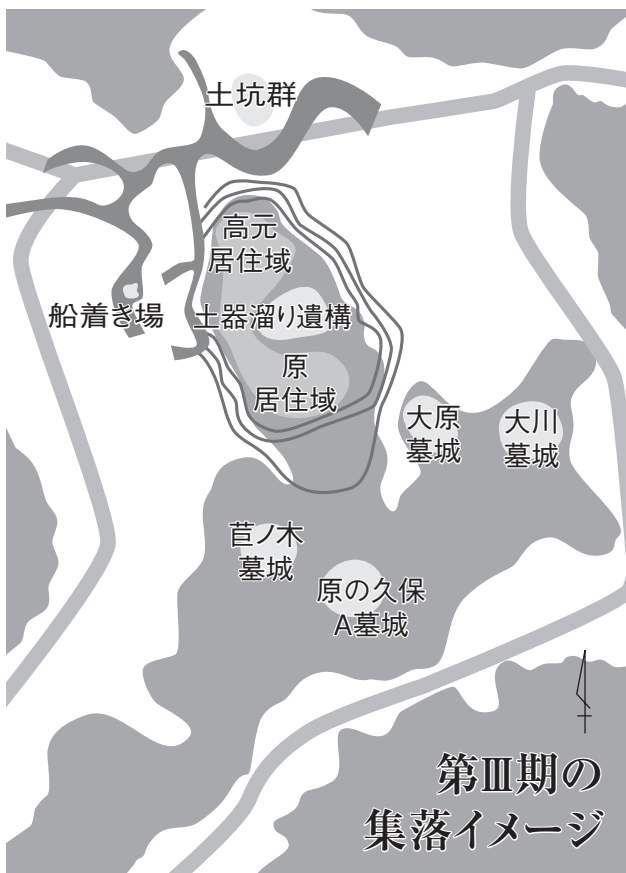


図131 原の辻遺跡における集落の変遷

Ⅶ. 附 編

1. 原の辻遺跡の旧石器時代～縄文時代草創期

(1) はじめに

弥生時代の集落遺跡として国特別史跡に指定されている原の辻遺跡はあまりにも有名である。この原の辻遺跡が実は旧石器時代の遺跡としても重要な位置を占めることはあまり知られていない。幡鉾川の河川改修工事の伴う調査によって明らかになった更新世のナウマン象やヤバオオツノシカの化石骨は人類遺物との共伴は確認されておらず今後の重要な研究課題である。

現在は島嶼となっている壱岐は、最終氷期最寒冷期には海面の下降によって九州本土と陸続きであった。マイナス120mを想定すると対馬とも陸続きとなり大陸とは指呼の距離となる。対馬に旧石器遺跡は確認されていないことから原の辻遺跡は大陸に最も近い場所にある日本の旧石器の遺跡といえる。旧石器時代の大陸との架け橋として西回廊とも称されるこの壱岐・原の辻遺跡の旧石器時代の研究の進展によって日本旧石器文化の初現期の姿を明らかに出来る可能性を秘めている。

(2) 壱岐島における旧石器時代の発掘

壱岐で旧石器時代の発掘調査が始めて実施されたのは1977年である。原の辻遺跡では圃場整備の進展が予想されたため遺跡の範囲確認調査が広範囲に行われ、丘陵南部の荳ノ木地区・原ノ久保地区でも多くの試掘坑が設定された。なかでも荳ノ木地区第1試掘坑では旧石器包含層が確認され、遺物ブロックおよび落とし穴遺構が検出された。荳ノ木地区第1試掘坑から出土した台形石器はきわめて特異な形態をしており、萩原博文によって「原の辻型台形石器」と命名され、その形態の特徴、製作技法について見通しを示した（萩原・川道1981、萩原1983）。

1997年には原の辻丘陵から谷を挟んだ西側の低丘陵の先端部の鶴田遺跡の調査が行われ、磯道型石核と縦長剥片を中心とする良好なブロックが検出され、旧石器の分布範囲が大きく西側にも広がることが確認された。

1999年には郷ノ浦町大宝遺跡が調査され、ナイフ形石器・台形石器を主体とする石器群を原位置の状態で検出された。包含層である4a層は、玄武岩の風化した黄褐色粘質土層で、層厚10～20cmである。石器素材はすべて漆黒色の良質な腰岳・牟田系黒曜石であり、剥片等に見られる礫面の状態から松浦市牟田産と思われる。

以上は圃場整備等に伴う緊急調査であったが、近年では「原の辻遺跡調査研究事業」による範囲確認調査にシフトしており、2011年には丘陵中央部の原地区の調査によって包含層から原位置の状態でブロックが検出された。小形のナイフ形石器を主体とする石器群が検出された。2014年には丘陵南側に所在する原ノ久保地区の旧饅頭畑から狸谷型ナイフ形石器を主体とする石器群と原の辻型台形石器を主体とする石器群が出土した。浅い皿状土坑2基が検出されたことも大きな成果である。

また2010年に壱岐に設置された長崎県埋蔵文化財センターでは保存処理・精密分析にも精力的に取り組んでおり、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて黒曜石の原産地分析を進めている。その成果については節を改める。

(3) 旧石器時代の遺構

1) 荳ノ木地区で検出した落とし穴状遺構

1977年に調査された荳ノ木地区第1試掘坑から落とし穴と思われる土坑が1基検出されている。平面

的な発掘の時点では確認できず、土層断面で初めて確認したらしい。トレンチの北東隅にかかり、大略半分程度を検出している。その規模は径1m強で隅丸に近い平面形で、断面はピーカー形を呈する。規模や形状から落とし穴と評価できよう。遺物の垂直分布図から判断して覆土からの遺物の出土は見られなかったらしい。4層最下面に構築され、上位を旧石器時代の包含層が覆っていることから旧石器時代の所産として差し支えない。

県内には平戸市堤西牟田遺跡の円形の落とし穴があげられる程度で、落とし穴自体は北部九州では稀有な存在である。

2) 原ノ久保地区で検出した皿状土坑

2014年の範囲確認調査で2基の浅い皿状の土坑を検出している。

1号土坑は、4C区東壁南側に土層断面の精査中に、土質の違いによって、土坑の断面を発見した。土坑は3層に掘り込まれている。そこで、平面形態を知るために、4B区の西側畦の一部を3層まで掘削し、平面形態を把握した。土坑の構造は、平面プランはほぼ楕円形に近く、南北長52cm、残存する東西の幅17cmであり、本来の約半分を検出したとすると、東西幅は約2倍の値となる。深さは中央の最深部で14.5cmである。平面形態が楕円形を呈しているため、倒木痕ではなく遺構であることは確実である。充填している覆土は明黄褐色粘質土1層で粘性はあるもののしまりは弱くパサパサしている。掘り込まれた3層とは、掘削の感触等で区分され、色調上での区分は困難である。土坑内から遺物は出土していないものの、2層最下部から3層を掘り込んでおり旧石器時代の所産である。

2号土坑は、4C区中央部に位置する。1号土坑と同様2層最下部から3層を掘り込んでいる。土坑の平面形はほぼ円形に近く、南北長64cm、東西幅69cmを測る。深さは中央の最深部で13cmである。立ち上がりも明確で、遺構であることは確実である。土坑の覆土は1層が認められた。半截した覆土からの遺物の出土はなかった。3層を掘り込んでおり、上に旧石器時代の包含層である2層が堆積しているので、旧石器時代の所産であると考えられる。

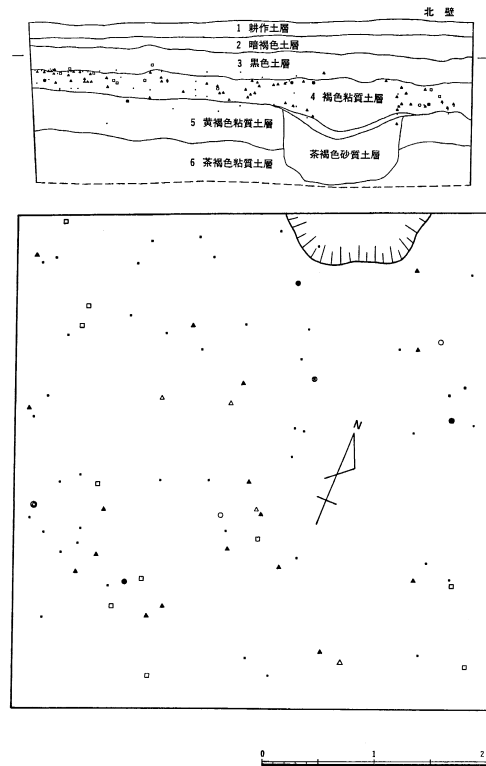


図132 菅ノ木地区第1試掘坑の落とし穴状遺構

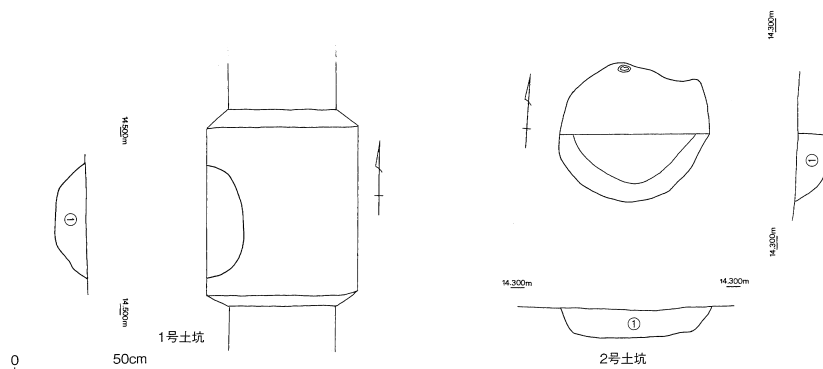


図133 原ノ久保地区検出の皿状土坑

こうした浅い皿状土坑は類例がない。形態から墓坑の可能性もあろうが、覆土から遺物も出土しておらず、土坑の規模が小さいことから墓坑して積極的に評価できない側面もあり、その性格は不明といわざるを得ない。しかし2基が同じ2層最下面という同一平面上に約6mの間隔と15cmの高低差をもって構築されており、今後類例の増加を待ちたい。

(4) 包含層から出土した石器群

原の辻遺跡（ここでは西方直近に所在する鶴田遺跡を含めて考える）の丘陵部を構成する地層は主として礫層Bとよばれる土石流および火砕流堆積物である。旧石器時代の包含層はその上位に乗る黄褐色を基調とした粘質土層である。厚さは50~100cm程度あるが、多くの地点で後世の環濠等の造成により消滅もしくは著しく厚さを減じている。そのため原位置を遊離した旧石器遺物が多くの地点で遺構の覆土中もしくは表面採集によって明らかになっている。明らかに原位置を保った石器群は、鶴田遺跡、苜ノ木地区、原地区、原ノ久保地区などに限定されている。そうしたことの背景にはもともと存在していた旧石器時代の包含層の調査まで手が及ばなかった可能性もあろう。ここでは上述した4箇所の石器群について検討する。

1) 鶴田遺跡

鶴田遺跡は、原の辻丘陵とは浅い谷を挟んだ約400m西側に位置し原の辻丘陵と並行するように北側に伸びる低丘陵の先端部に所在する。標高は7mで、原の辻丘陵で包含層が確認される苜ノ木地区よりも低い。圃場整備の一環で調査されている。石器を包含する土層は3層の淡黄褐色土で、原地区・苜ノ木地区の包含層と若干色調は異なるがほぼ同一と見られる。石器ブロックは1箇所で、径2m程度のほぼ円形を呈する。遺物分布を見るとブロックの中央部に径2mほどの剥片剥離作業に特

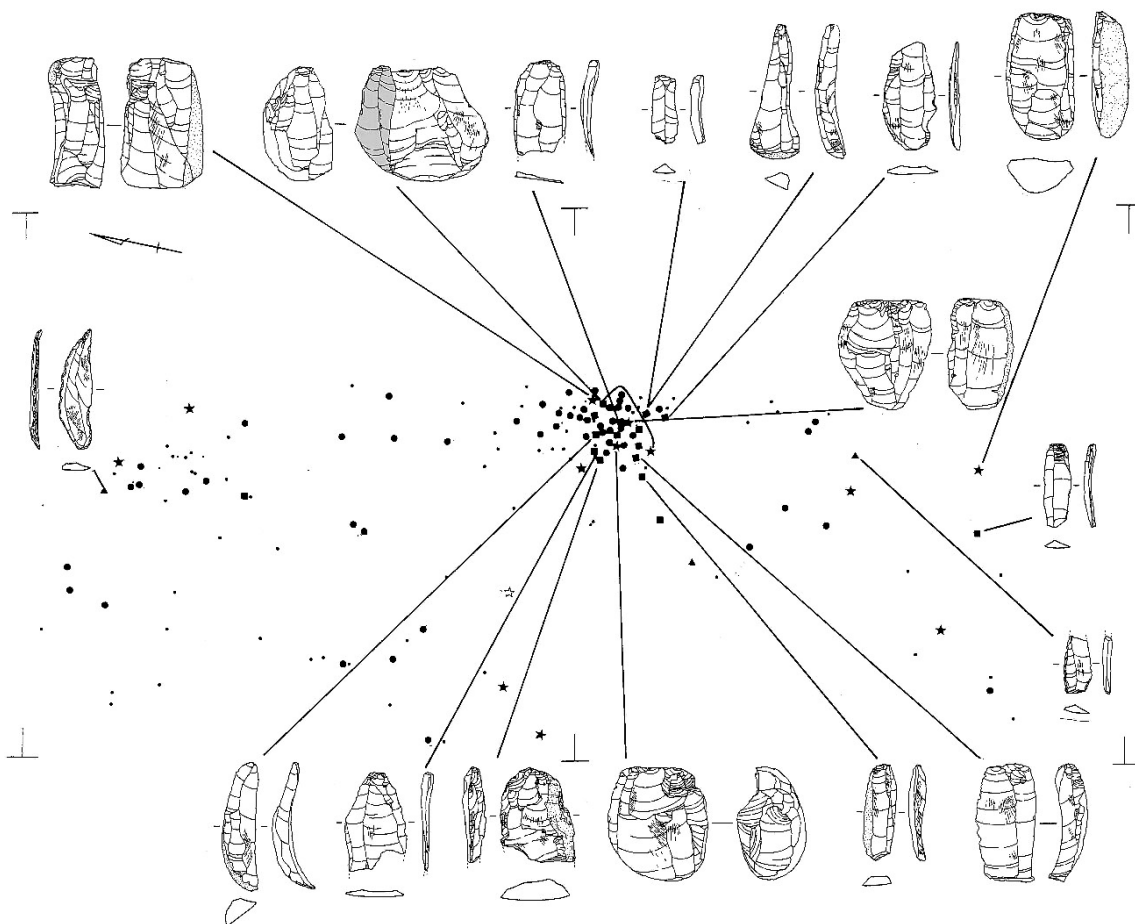


図134 鶴田遺跡遺物分布

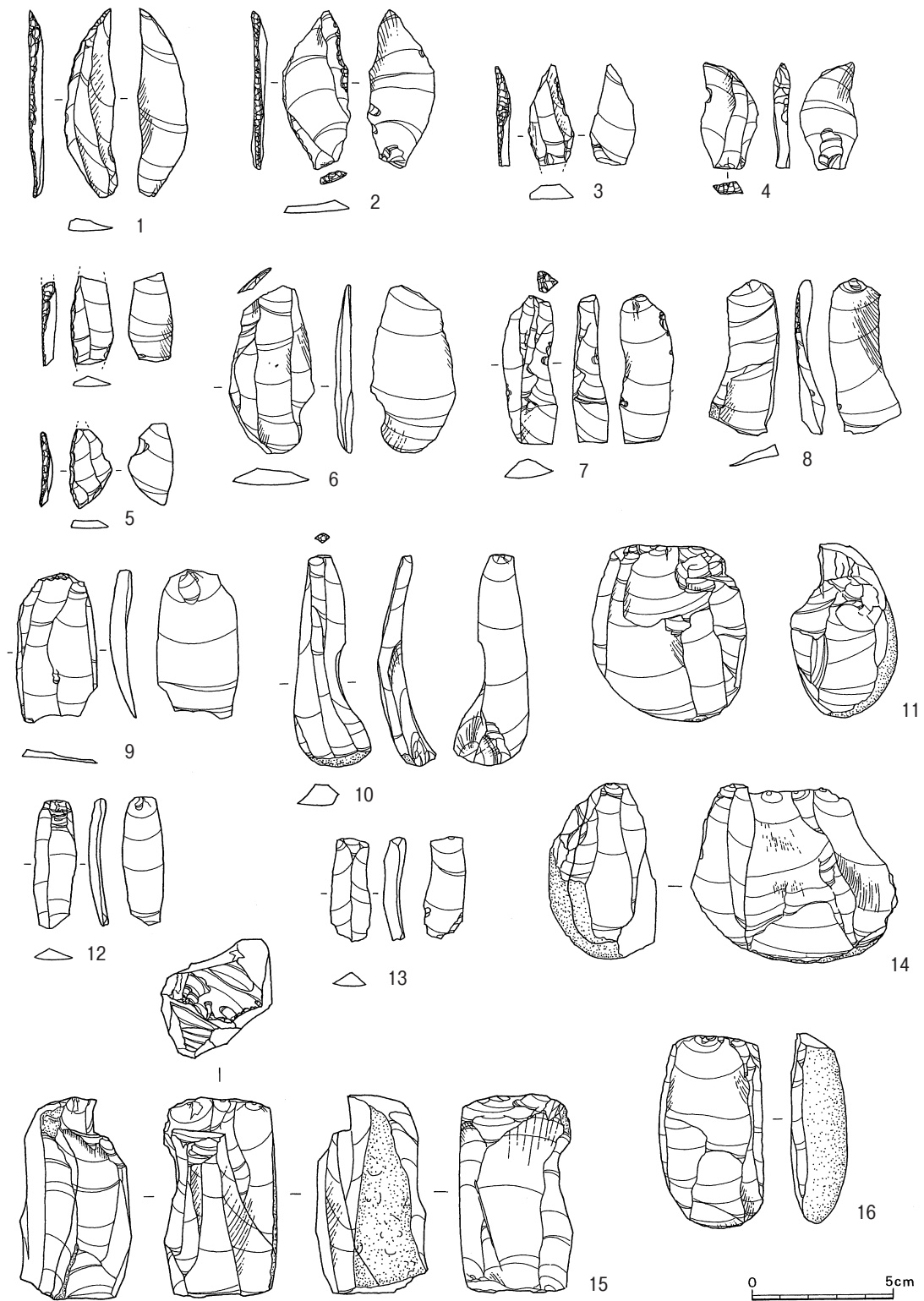


図135 鶴田遺跡出土の石器

化したエリアがあり、磯道型石核3点、方柱形石核1点と多数の石刃状の縦長剥片が集中する。その一方でナイフ形石器は少量でその周辺の離れたエリアから出土する。剥片剥離作業に関して、原礫面をもった剥片が多いことから、円礫状の牟田産黒曜石は、原石のまま遺跡内に搬入され、石核打面形成から縦長剥片の生産までを集中的に行い、石器への整形作業は他の地域で行ったものと考えられる。

鶴田遺跡で出土した石器の概要は次のとおりである。1～6はナイフ形石器である。原位置で出土したのはドットマップに記した1・4がE・F区から、2がD区から出土した。ほかは表土もしくは耕作土からの採集品である。1・2は大形の薄手の縦長剥片を素材とする。1は一側縁に細調整加工を施す柳葉形を呈する。2はやや幅広な二側縁加工で基部に打瘤を残す。小形の一群は、3・4が柳葉形を5・6が切出し状を呈する。

7～13は剥片である。8・10は大形厚手の石刃状の縦長剥片、7・9・13は大形薄手の縦長剥片、11・12は小形の石刃状の縦長剥片である。遺跡から出土したナイフ形石器の素材に用いられているのは大形薄手と小形の石刃に限定されている。8・9を除いてブロック内からの出土である。石核はすべてブロックから出土した。大きく2種類がある。一つは16・17のような牟田産の拳大の黒曜石円礫を用いた磯道型である。もう一つは14のような打面転移を行う方柱形を呈するものがある。この違いは入手できた石材の形状に起因すると考えられる。

石材ではほとんどの石器が牟田産の腰岳系黒曜石である。そのなかに1点だけ5のナイフ形石器は産地不詳である。この石器は製品として遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。

鶴田遺跡の石器群は、小形の柳葉形と幅広のナイフ形石器の組み合わせや石核の構成から判断して、佐世保市江迎町の根引池遺跡のそれとほぼ同じと考えられる。その編年的位置としては、AT（始良丹沢火山灰）降灰前後の時期を付与できよう。

2) 原の辻遺跡菅ノ木地区

菅ノ木地区は、原の辻遺跡のなかでも旧石器を包含する土層の形成に恵まれた地点である。丘陵の南西部にあたり、標高14m前後である。1977年の調査での第1・4試掘坑および1999年の1・2区から旧石器包含層が確認されている。

遺物分布図が報告されている1977年第1試掘坑は4×4mで調査区の北側に落とし穴と思われる遺構が半分程度検出されている。剥片尖頭器1点、ナイフ形石器1点、台形石器3点、搔器2点、石核9点、剥片

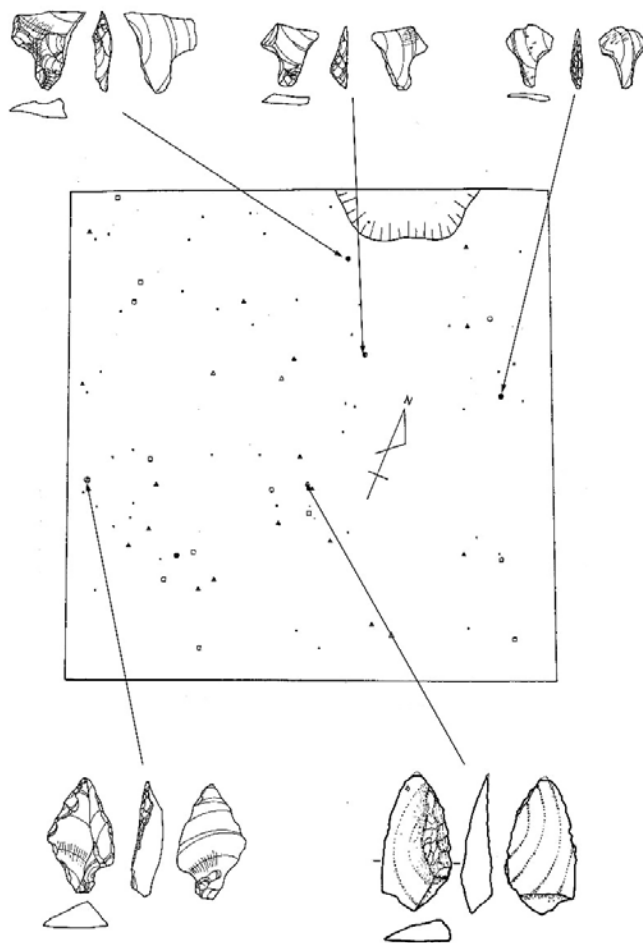


図136 菅ノ木地区第1試掘坑の遺物分布

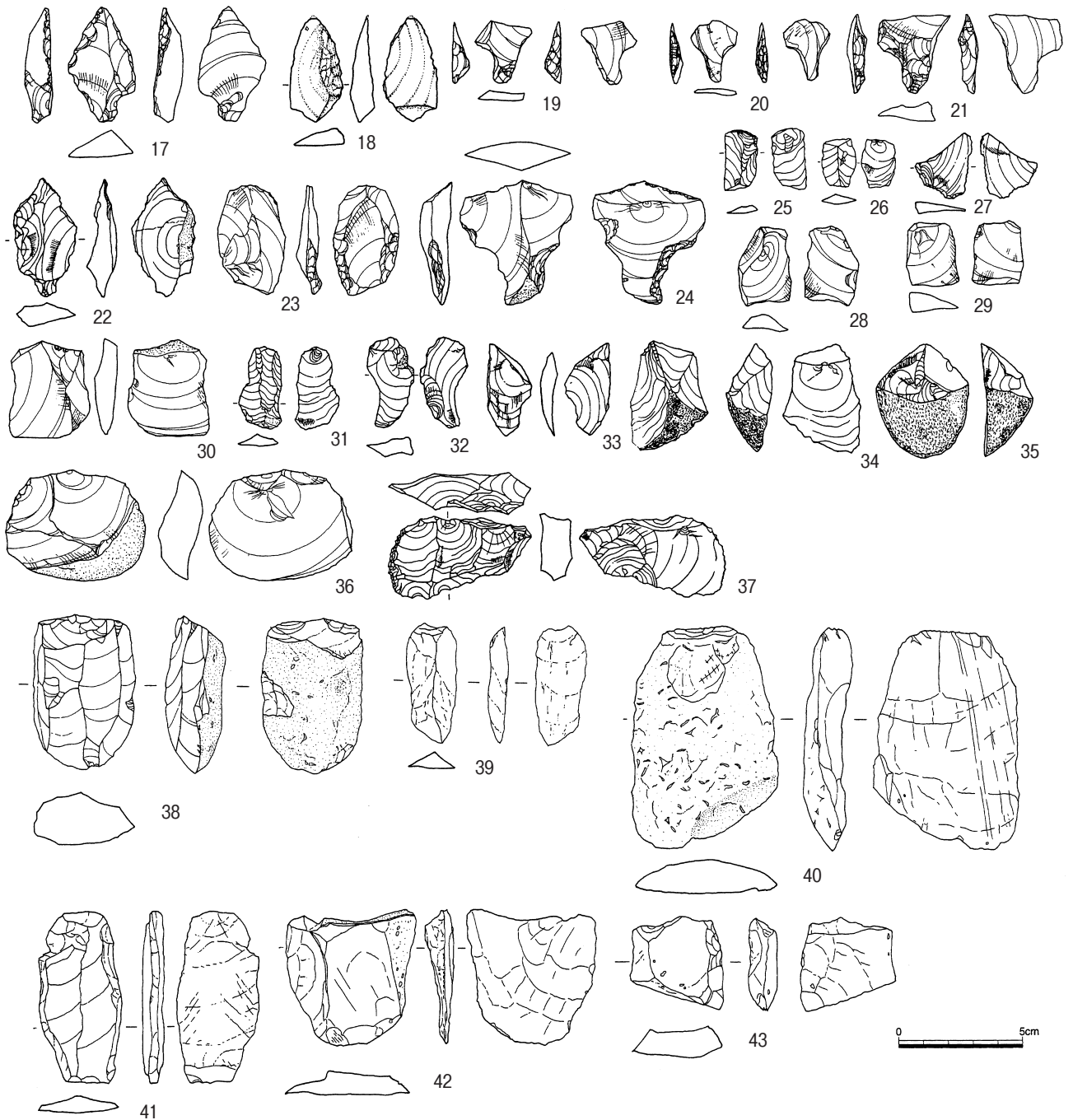


図137 菅ノ木地区出土石器

17点、碎片42点の総数75点からなる石器群が出土しているがその出土状態は全体に散漫であり、調査区の制約も相まって積極的にブロックと評価することは難しい。定形石器である剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器の分布は集中しない。石核も多数出土しているがそれらも集中することはない。

出土した石器群の詳細は以下のとおりである。17は小形の剥片尖頭器である。腰岳系の黒曜石製で粗い調整によって基部を作り出し、先端部にも細調整を施している。打瘤は除去されていない。18は安山岩製のナイフ形石器である。下半部を欠損しているが瀬戸内技法による横長剥片を素材とする国府型ナイフ形石器である。遺跡内には単体で搬入されたものであろう。19~21は特徴的な形態の台形石器である。ともに腰岳系黒曜石を素材とする。刃部に肩をもつ左右非対称の原の辻型台形石器で原

の辻型台形石器の標式資料である（萩原1983）。22は横長の不定形剥片を素材とする彫器である。先端部に2条の彫刀面をもつ。23・24は搔器である。23は両側縁に刃部加工をもつ。24は分厚い不定形剥片を素材とし、表裏両面に抉入状の加工を施した抉入搔器である。25～35は剥片であるが、不定形剥片が多く、ナイフ形石器の素材となるような石刃状の縦長剥片はみられない。36・37は石核である。いずれも台形石器等の素材を生産したものと思われる。

このように第1試掘坑から出土した石器群は、原の辻型台形石器を主体とする石器群であり、それに小形の黒曜石製剥片尖頭器と国府型ナイフ形石器が伴う段階の石器群といえる。

1999年の1・2区は、1977年調査で第4試掘坑が設定された同じ水田である。包含層は3層の褐色粘質土で、一部を後世の土地造成によって破壊されている。ドットマップが報告されておらずブロック等の有無が検証できないが写真で見るとまともに出土しているようである。図示した1・2区包含層から出土したのは6点である。ここではナイフ形石器や台形石器は認められないが、縦長の円礫を素材とした石核（38）を用いたナイフ形石器の素材となる縦長剥片（39・41）の生産が行われており、それと同時に安山岩製の縦長剥片（40・42・43）が出土しているところである。安山岩製の石核が認められないことから遺跡内で生産されたかほかから搬入されたかは不明であるが、これらの安山岩製剥片は剥片尖頭器の素材と考えられ、そうであればAT直後の時期におくことができる。

3) 原の辻遺跡原ノ久保地区

原ノ久保地区は原の辻丘陵の南部に所在する南向きの緩斜面でかつて壱岐特有の饅頭畑が存在していた地点である。標高は約14mで、過去2度の範囲確認調査が行われていた。1977年長崎県教育委員会が実施した範囲確認調査の記録が残っている。それによると第16試掘坑は、当時現存していた饅頭

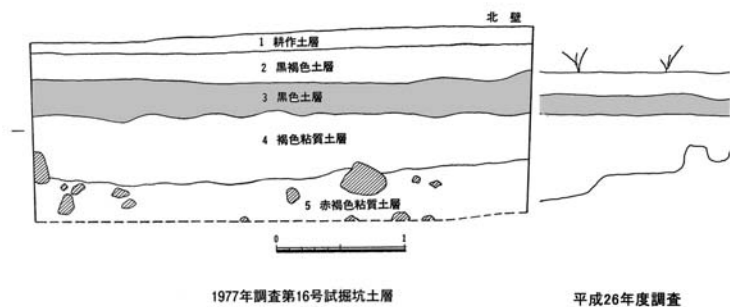


図138 原ノ久保地区土層断面図

畑のほぼ中央部に設定され4m四方の調査区である。旧石器時代の遺物包含層である4層は所見によれば、褐色粘質土層で東から西へ傾斜し層厚が増しており、もっとも厚いところでは50cm、薄いところでは30数cmであった。2014年の調査では遺物包含層である2層の厚さは20cm程度であったことを考えると、平成7年に饅頭畑を平坦化工事の際、包含層の上半が削平されたといえる。

ドットマップを見ると、原位置を保って出土した石器群は、調査範囲に散漫に分布する傾向があり、ブロックとしてのまとまりを捉えることが難しい。出土した石器群は狸谷型ナイフ形石器のA群と原の辻型台形石器のB群である。狸谷型ナイフ形石器を主体とする石器群の分布は3・4区を中心として広範囲にわたる傾向があるのに対し、原の辻型台形石器を主体とする石器群は1・2区の南西側に小さくまとまりを見せる。両者の垂直分布を見ると前者が後者よりも深い震度で出土する傾向が認められることから編年的には前者が先行する石器群といえる。

石器群の概要を述べる。44・45は分厚い横広剥片を素材とする典型的な狸谷型ナイフ形石器である。46は先端を欠損する一側縁加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、バルブは除去されてい

ない。47は分厚な幅広い不定形剥片を素材としたナイフ形石器で左側縁の中央に角状の突出部が残る。48・49は原の辻型台形石器である。48は薄手、49は厚手の不定形剥片を素材する。50は黒曜石円礫の礫面を大きく取り込んだ剥片を素材とする搔器である。51は横長の不定形剥片を素材とした抉入状を呈する搔器である。52は大振りの礫面を大きく残す剥片を素材とする使用痕のある剥片である。

53はナイフ形石器の素材となる石刃状の縦長剥片である。

54は先端部に礫面を

わずかに有する縦長剥片である。55は寸詰まりの不定形剥片で、原の辻型台形石器の素材剥片と思われる。56は先細りになる縦長剥片である。57は先端部を折断する剥片。だ面を転移する石核から剥離したものである。58・59は厚手の不定形剥片。58は黒曜石製、59は安山岩製である。60・61は黒曜石円礫の分割剥片である。62は求心状の石核から剥出した安山岩製の大型剥片である。63は安山岩製の大型で分厚い縦長剥片で剥片尖頭器など大型石器の素材と考えられる。

64～70は石核である。64は分割した円礫を素材とする。65は四周からの調整でおおむね四角錐状の形態を作り出し、求心状剥離によって狸谷型ナイフ形石器の素材となる厚手の剥片を作出した石核である。66は礫面を保持した剥片を素材とする原の辻型台形石器の素材剥片を作出する石核である。67・68は厚手の剥片を素材とする石核である。69は残核である。70は円礫を分割した石核で、その分割面を打面としており、打面調整は施されていない。

原ノ久保地区から出土した石器群で用いられた石材は、黒曜石を主体とし安山岩を客体とする。黒曜石の原産地分析を蛍光X線分析によって行っている。2014年の原ノ辻遺跡の報告書では、腰岳系が大きく2分され、そのうちの一群を産地不詳とした経緯がある。その後分析を進める過程で一部デー



図139 原ノ久保地区遺物分布図



图140 原ノ久保地区出土石器①

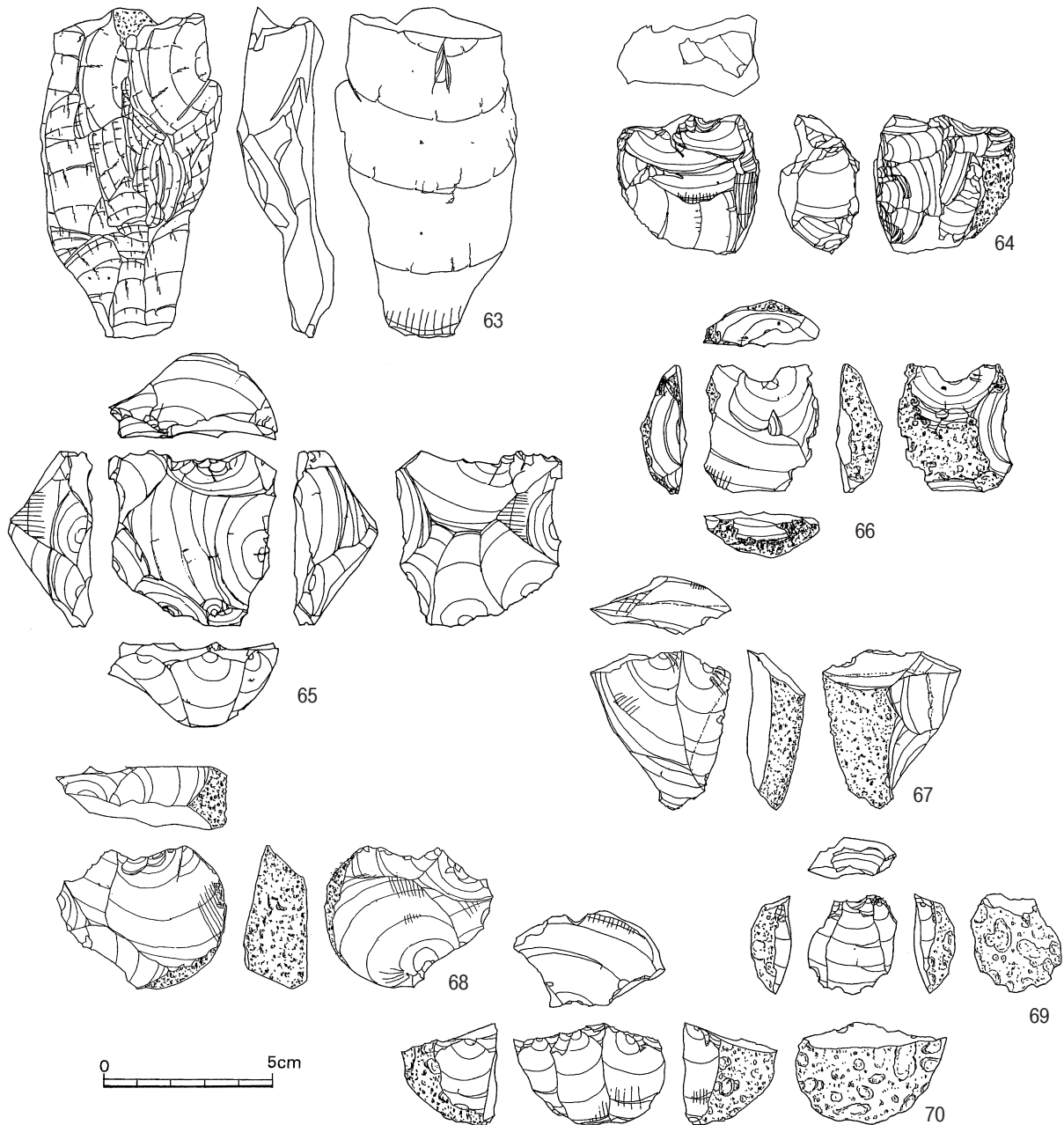


図141 原ノ久保地区出土石器②

タの取り扱いの不備が見つかり修正した結果2分されていたものはすべて腰岳系としてまとまった。ここで修正することを明記しておきたい。(詳細は自然科学分析を参照)

4) 原の辻遺跡原地区

丘陵の中央部にあたる原地区は、標高13mあまり、最高点の祭儀場跡の南にあたる。2011年に調査した3b・3e区で石器ブロックが検出された。旧石器を包含する土層は5層で明黄褐土である。3b区ではトレンチの北半のほぼ全面にわたって出土しており、周辺の未発掘区へ広がることが予想される。出土した石器群の構成は、ナイフ形石器2点、抉状搔器1点、石核6点、剥片、碎片からなり、石器製作が行われたことは確実であろう。

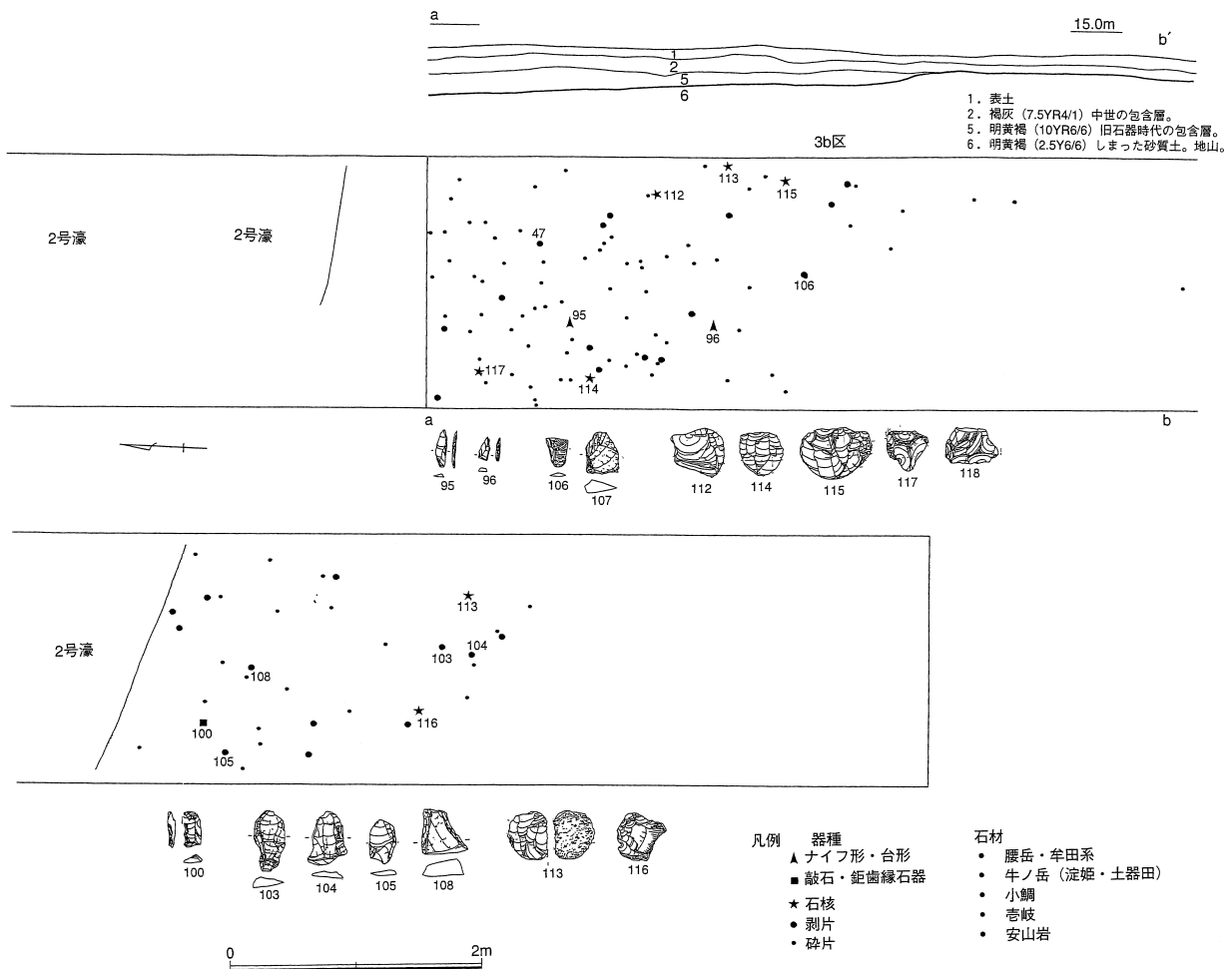


図142 原地区遺物分布

71・72は、薄手の石刃様縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器である。71は産地不詳、72は腰岳系黒曜石が使用されている。73は、抉入搔器である。縦長の石刃様剥片を素材とし、左側辺に2箇所の小規模な抉入加工を施して刃部を鋸歯状に作り出している。腰岳系黒曜石を素材とする。74・75は腰岳系黒曜石を素材とする縦長剥片である。76～78は在地の沓岐印通寺産黒曜石を素材とした縦長を基調とした剥片である。79は安山岩製の不定形剥片である。80は腰岳系黒曜石を素材とした不定形剥片である。石核には石刃様の縦長剥片を作出した磯道技法のもの（81～83）、円礫を横位に用い、剥片剥離面が交差する2面の作業面を持つもの（84）のほか、85・86のようなは求心的剥離を行った薄手の石核で、原の辻型台形石器用石核の残核ともいべきものもある。85は淀姫系黒曜石がその他の石核には腰岳系黒曜石が使用されている。

(5) 旧石器時代最終末の石器群

平成24年度の原ノ久保地区の調査で、2層最上面（重機による攪乱部と思われ、原位置とは認められない）から細石刃核が1点出土している。後期旧石器時代末期の稜柱状を呈する野岳・休場型である。漆黒色の良質な腰岳系黒曜石を素材とし、背面にわずかに礫面を残している。礫面の状態から円礫と想定できることから原石は牟田産黒曜石と推測される。打面調整が丁寧になされており平坦な打面を作り出している。側面の調整は上下両方向から行われている。正面の細石刃剥離作業面をみると

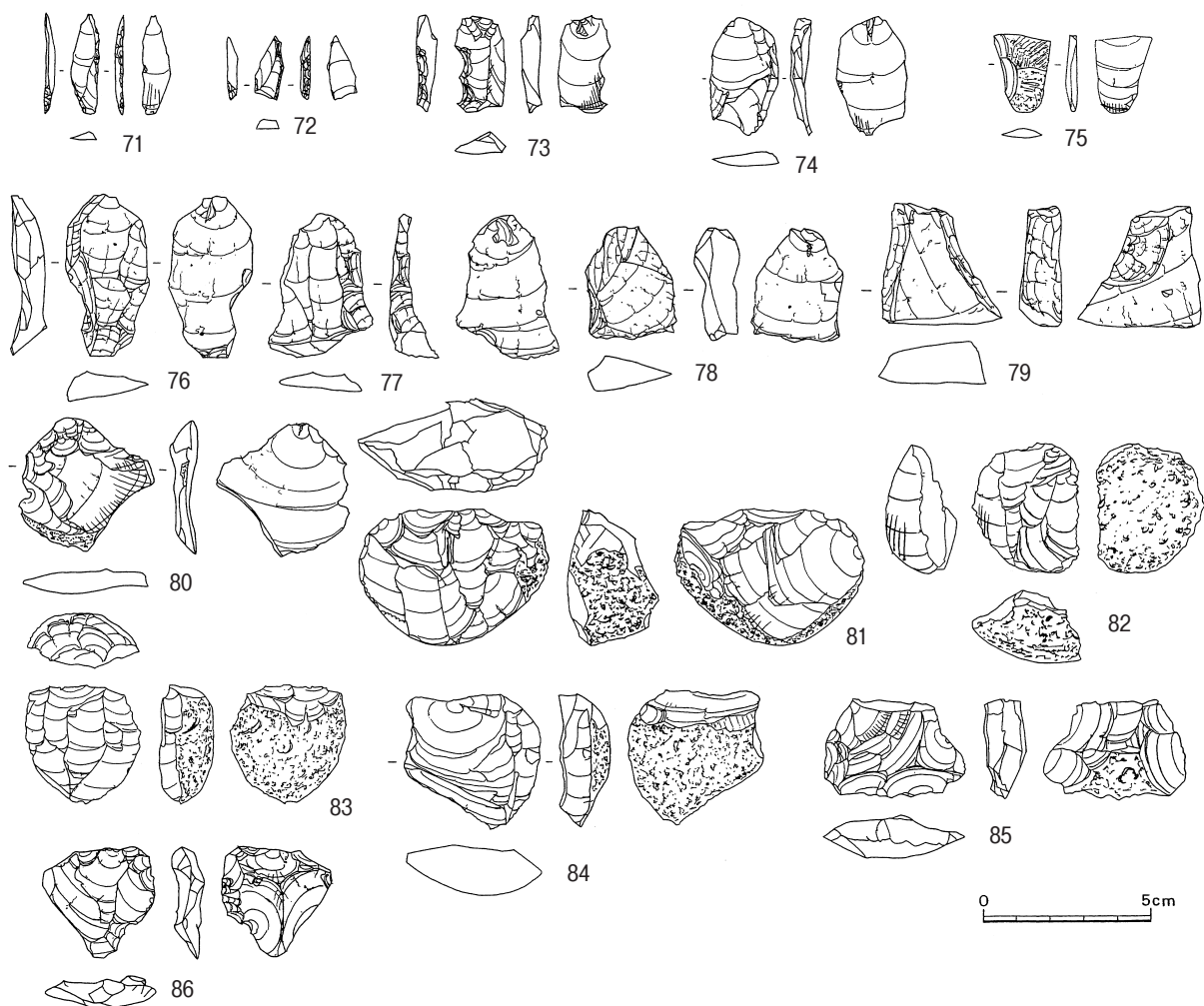


図143 原地区出土石器

細石刃剥離が途中で終わる階段状剥離となったために細石刃剥離を途絶し、下方からの大きい剥離を施してスクレイパーエッジを作出してスクレイパーに転用したものであろう。石器リダクションの一例である。

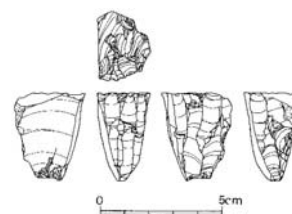


図144 原ノ久保地区細石刃核

(6) 縄文時代草創期

原の辻遺跡から出土した細石器関連遺物は、河川跡や後世の遺構・包含層から原位置を遊離した状態で出土したものがほとんどである。そのため細石刃石器群を構成する石器組成の実態は不明瞭であり、ここで取り上げる資料は、縄文時代草創期に帰属する細石刃核およびスポール・細石刃であり、細石刃核には福井型・石ヶ元型・「野岳」型・その他の型式が見られる。以下低地部と丘陵部に分けて説明する。

1) 低地部出土の細石刃石器群

原の辻遺跡の丘陵部を取り囲むように広がる低地部では、更新世の幡鉾川層とその上位の完新世の原の辻層の堆積が確認されている。幡鉾川層の上部はトラフ型斜交層理を持つ砂層で最上位は固結して硬い。ナウマン象等の絶滅動物の化石骨を産出する。2014年の調査で得られた14C年代は、現時点

での測定限界である43500年BPより古い年代であった。花粉分析によればトウヒ属とマツ属等の寒冷種が検出されており、現在よりも冷涼な環境であった推測されている。一方、完新世の原の辻層は『総集編 I』では4200±40YBP以降の堆積とされていたが、2014年調査で計測した¹⁴C年代は補正年代で6420±40yBP、暦年代（西暦）cal BC5470～5360が得られ、おおよそ縄文時代前期まで遡ることが明らかになった。さらに2015年度に行われた老岐市教育委員会による原の辻ガイダンス西側の溜池改修工事の伴う調査では固結した更新統面に載る旧石器時代の包含層が確認されている。低地部においても地点によっては旧石器時代から縄文時代草創期の原位置での確認も時間の問題であろう。

①不條地区

原の辻遺跡北西部に位置する不條地区からは20数点の細石刃核が、河川跡や後世の遺構などからいずれも原位置を遊離した状態で出土している。**87～95**は西海技法による福井型細石刃核である。両面加工体のブランク形成と背縁調整を施した後、横打調整による打面形成を行うのが一般的であるが、側面には主要剥離面や礫面を残すものがある。**87**はその典型的な例である。**89**は両側面の稜線を研磨している。こうした側面の研磨痕をこれまで装着痕と考えられてきた経緯があるが、左側面の研磨は稜線上を越えて面的に拡大しており特異である。**95**は打面が幅広・長大になる一回り大きな細石刃核で泉福寺洞穴8層段階に出現するもので開地遺跡での出土例は松浦市田川遺跡に見られる程度で希少である。**96～105**は石ヶ元型である。打面調整のあり方は、細石刃剥離作業面側および側方から単打面がある。いずれも縦長で下縁をもたない。背縁は直線的なものと弧状になるものの2者があり、丁寧な鱗状の調整剥離が施される。**108**は細石刃核の打面再生剥片である。細石刃剥離作業面側からの打撃による。**109～111**はいわゆる「野岳」型である。牟田産の小形の黒曜石円礫を分割したものを素材としており、**109**は小形の円礫を分割した素材の小口に細石刃剥離作業面を設けたもので、原礫面を大きく保持している。**110・111**は背面に礫面を残し、3面は細石刃の剥離作業面となっている。**112**はほぼ完形の細石刃である。丁寧な頭部調整がみられるもので細身の形態から草創期段階の所産であろう。不條地区の細石刃核には顕著な摩滅痕が認められず長距離を運搬されたとは考えられない。また量的にも保障されており近傍に原郷土が存在したと想定される。



図145 原の辻遺跡細石器関連資料の地区別出土状況

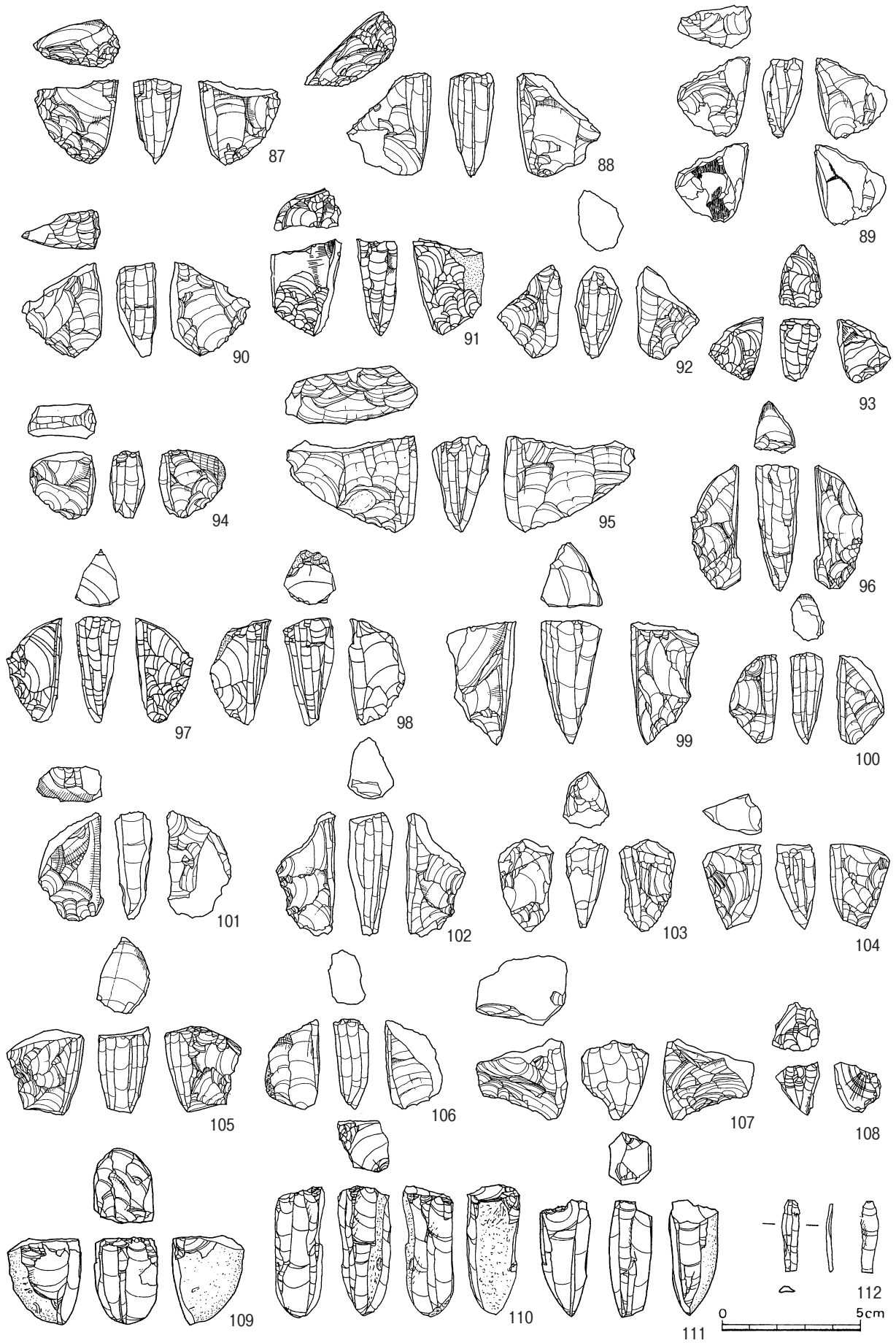


図146 原の辻遺跡低地部出土の細石器関連資料①

113は芦辺高原地区のⅢ区沼状の落ち込みから出土した。側縁部の鱗状調整は簡素であるが打面は丁寧な横打調整が施されている福井型細石刃核である。114は川原畑地区から出土した細石刃核ブランクである。丁寧なつくりの両面加工で鱗状の背縁調整も見られる。115・116は丘陵東側の石田高原地区から出土した資料である。115は下縁が弧状を呈する縦長の細石刃核である。類例としては佐世保市吉井町直谷岩陰で爪形文土器と共伴するものがある。116は細石刃剥離作業を小口にもつ打面再生剥片である。117は不條地区から南へ200mほど離れた八反地区から出土した細石刃核である。「野岳」型で、不條地区の109に類似した資料である。

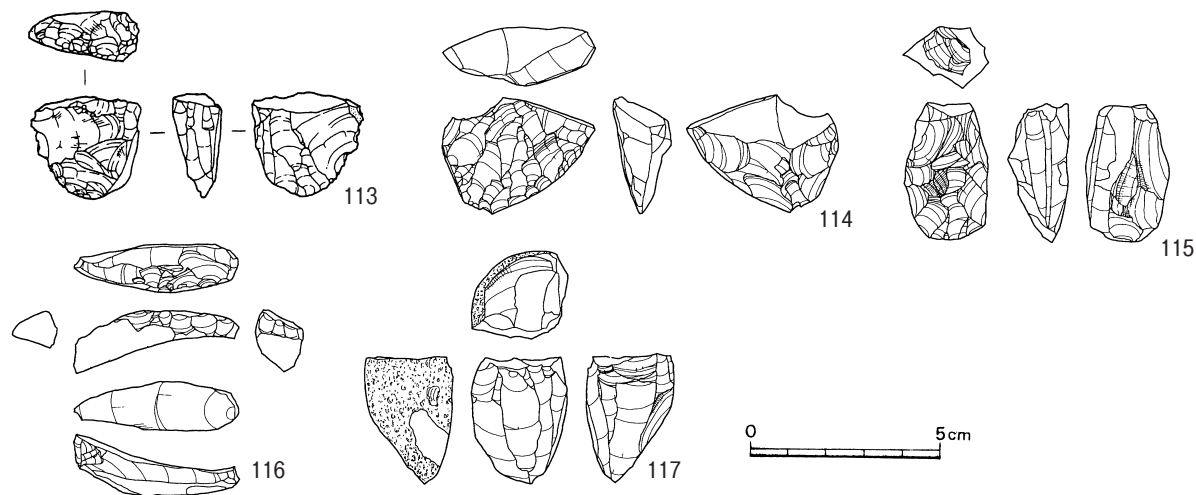


図147 原の辻遺跡低地部出土の細石器関連資料②

2) 丘陵部出土の細石刃石器群

118～122は丘陵北部の高元地区から出土した資料である。118は円礫を輪切りにした素材を使用しており背縁ではなく面となり、背面の下半から底面にかけて原礫面が残る。主要剥離面の一部を保持する。形態的には泉福寺洞穴11層出土資料に類似する。119は縦長の石ヶ元型である。下端部を欠損し、打面は横打の細調整によって平坦に仕上げている。120・121は板状の分厚い剥片を素材としたもので主要剥離面の一部を残す。120の打面調整は横打による。122は作業面からすると細石刃よりも幅広となり、形態的には福井洞穴7～9層の例に近いものとも考えられる。そうだとすれば旧石器時代の所産となる。

123～126は丘陵東側の大川地区出土資料である。123は原の辻遺跡で最初に発見された資料である。この資料は福井型ではあるが特異である。もともとは平坦な打面があり、それを横打調整によって斜めに断ち切っている。平坦な打面には擦痕がみられる。打面に擦痕をもつ資料は希少で、平戸市中の原遺跡1点、長崎市重籠遺跡2点、唐津市竹木場前田遺跡1点、福岡市有田遺跡178地点1点の計5点が知られており、中の原例を除いていずれも横長で船野型とされている。この資料は、縦長の楔形であり側面調整は基本的には背縁からなされるが打面の部分は打面側から施される。打面形成に擦痕を施しかつ横打調整がみられるなど船野の要素と西海技法の折衷した姿を見取することができる。124は福井型、125は石ヶ元型の細石刃核である。

127・128は丘陵中央部の原地区出土資料である。127は背縁調整は施されていないが全体の形状を楔形に整え、横打調整によって打面を形成している。128は細石刃核ブランクである。薄い剥片を素



図148 原の辻遺跡丘陵部出土の細石器関連資料

材としており両面には主要剥離面を残す。129は原の久保地区からの出土資料。典型的な福井型である。打面は長軸方向のスポール？を出してつくりだし、下縁から背面にかけて丁寧な鱗状の調整がみられる。

原の辻遺跡から出土した細石刃核について一部ではあるが原産地分析を行っている。分析は継続中ではあるが紹介する。

腰岳系 不條地区 87 89 90 92 95 96 99 102 103 104 105 106 107

川原畑地区 114

石田高原地区 115 116

高元地区 120 121

原地区 128

産地不詳 不條地区 88 94 101

八反地区 117

大川地区 123

(7) まとめ

原の辻遺跡から出土した旧石器時代から縄文時代草創期の石器群の編年の見通しを述べてまとめとする。

1) 原の辻Ⅰ期

AT降灰直前～直後の段階で、鶴田遺跡の石器群が該当する。牟田産の黒曜石円礫を用いた磯道型石核・方柱型石核とそれから剥出された石刃状の縦長剥片からなる石器集中部とその周囲から出土した大小の二側縁加工のナイフ形石器からなる。

2) 原の辻Ⅱ期

AT降灰直後の段階で原ノ久保地区の狸谷型ナイフ形石器を持つA群や原3区の小形のナイフ形石器や切出状のナイフ形石器、磯道技法による縦長剥片を剥取する石核、抉入部をもつ鋸歯縁石器、大形彫器からなる石器群が該当する。

3) 原の辻Ⅲ期

原の辻型台形石器を指標とする石器群である。原ノ久保地区B群および萱ノ木地区第1試掘坑の石器群が該当する。小形の剥片尖頭器、横剥ぎのナイフ形石器、原の辻型台形石器からなる。

包含層が確認された地点の編年は、おおむね鶴田遺跡→原ノ久保地区A群・原地区3区→原ノ久保地区B群・萱ノ木第1試掘坑という変遷が考えられる。

原位置からの出土ではないが原の辻遺跡からは、西北九州型角錐状石器、基部裏面加工のナイフ形石器・枝去木型台形石器、百花台型台形石器、野岳型細石刃核などが採集されており、旧石器時代後半から最終末にかけて連綿と続いている様相がみてとれる。

以上、原の辻遺跡の旧石器時代～縄文時代草創期について概略を説明してきたが、遺跡が弥生時代の大遺跡という制約上旧石器は等閑視されるきらいは否めない。事実未報告の資料も数多くあることから今後も再整理を進めて行きたいと思っている。

引用・参考文献

安楽勉1976「壱岐島における旧石器」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第26集、長崎県教育委員会。

川道寛2005「日本列島最西端の細石器文化」『地域と文化の考古学』I、明治大学考古学研究室。

川道寛2012「西北九州における楔形細石刃核の基礎的研究」『西海考古』第8号、西海考古同人会。

下川達彌1970「資料紹介 長崎県内壱岐島発見の石器」『長崎県立美術博物館館報昭和44年度』長崎県立美術博物館。

杉原敏之2007「九州縄文文化成立期の諸相」『考古学』V。

橘昌信2012a「九州島の「細石器文化」」『西海考古』第8号、西海考古同人会。

橘昌信2012b「西北九州の楔形細石刃核の位置づけ」『旧石器考古学』76、旧石器文化談話会。

萩原博文1983「原の辻型台形石器について」『人間・遺跡・遺物 わが考古論集』発掘者談話会。

萩原博文1995「第2章 平戸の旧石器時代」『平戸市史 自然・考古編』長崎県平戸市。

萩原博文2001「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第12号、日本考古学協会。

福田一志2005「旧石器時代の遺物」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』第30集、長崎県教育委員会。

なお報告書は紙面の関係で割愛した。

2. 原の辻遺跡出土遺物の保存処理

(1) はじめに

原の辻遺跡は昭和49年（1974年）から行政（長崎県教育委員会、旧石田町・芦辺町教育委員会、平成16年合併後の壱岐市教育委員会）による調査が開始され、およそ100次にのぼる発掘調査が行われ、これまでに10万点を超える遺物が出土している。これら出土遺物の材質は、土・石・木・骨・金属など多岐にわたり、その内訳の多くは土器や石器などであるが約1400点の木製品と約600点の金属製品が出土しており、恒久的な保管及び展示等活用のために、これまでに約1,000点の原の辻遺跡出土遺物に対して保存処理が施されてきた。

表22にこれまでの原の辻遺跡出土遺物の保存処理点数一覧を示す。原の辻遺跡の発掘調査が始まった当初は業者委託によって保存処理を行ってきた。平成7年4月に開所した原の辻遺跡調査事務所には、平成9年度にPEG含浸処理槽や金属製品の錆取り工具などが導入されたが、保存処理専門職員は配置されていなかったため、簡易的な処理を局所的に行っていたが、引き続き業者委託により保存処理が進められた。平成22年1月に開所した長崎県埋蔵文化財センターには保存処理機器並びに精

表22 原の辻遺跡出土遺物の保存処理点数一覧

年度	帰属元	適用	実施者	木器	鉄器	銅製品	その他	年度計
平成10年度以前	長崎県	委託	株式会社東都文化財研究所	30				30
平成11年度	長崎県	委託	株式会社東都文化財研究所		37	1		38
平成12年度	長崎県	委託	株式会社東都文化財研究所		1			1
平成13年度	長崎県	委託	株式会社東都文化財研究所	21				21
平成14年度	長崎県	委託	株式会社東都文化財研究所	11	4	2		17
平成15年度	長崎県	委託	株式会社東都文化財研究所	7				7
平成16年度	長崎県	自前	原の辻遺跡調査事務所	25				43
		委託	株式会社東都文化財研究所	18				
平成17年度	長崎県	委託	株式会社東都文化財研究所	5	3	1		9
平成18年度	長崎県	委託	財団法人元興寺文化財研究所	12	2			14
平成19年度	長崎県	自前	原の辻遺跡調査事務所	104				117
		委託	株式会社東都文化財研究所	11	1	1		
平成21年度	長崎県	自前	原の辻遺跡調査事務所	69				69
平成22年度	長崎県	自前	長崎県埋蔵文化財センター	140				140
平成23年度	長崎県	自前	長崎県埋蔵文化財センター	205	33	5		243
平成24年度	壱岐市	センター利用	長崎県埋蔵文化財センター	104				106
		委託	財団法人元興寺文化財研究所	2				
平成25年度	長崎県	自前	長崎県埋蔵文化財センター	29			6	155
	壱岐市	センター利用		118		2		
平成26年度	壱岐市	センター利用	長崎県埋蔵文化財センター	9	3			14
		委託	株式会社東都文化財研究所	2				
合計				922	84	12	6	1024

密分析機器が導入され、また保存処理専門職員も配置されたことから長崎県教育委員会に帰属する出土品に関しては自前で保存処理を行っている。また、壱岐市教育委員会に帰属する原の辻遺跡出土品に関しても、利用規定に法りセンターの機器を利用して保存処理を進めている。

ここからは、長崎県埋蔵文化財センターにおける原の辻遺跡出土遺物の保存処理実施状況に関して概説する。

1) 事前調査 (診察)

目で見ると、手で触るなどの人間の感覚による観察と、精密機器を使った調査分析を行い、「材質」「劣化や破損の状態」「構造」などを調査する。

2) 保存処理 (治療)

薬品を使って腐食の進行をおさえ、弱くなっている部分を強化するために化学処理を施したり、壊れたり欠けている部分の修復復元を行う。

3) 保管・管理 (アフターケア)

保存処理後の良い状態を維持するために、温度や湿度などを管理したり、異常がないか定期的に観察するなど、処理後のアフターケアを行う。

(2) 木製品の保存処理

遺跡から出土する木製品のほとんどは、埋土中に微生物などの影響で腐食し消失してしまっているが、低湿地や河川跡などの地下水が豊富にある環境に埋まった木製品は、空気と遮断され、腐食のスピードが遅くなり、発掘調査によって見つかることがある。長い年月、地下水の豊富な環境に埋まっていた木製品は、細胞内の成分が溶け出して水と入れ替わり、細胞壁だけでかろうじて形を保っているスポンジのような状態になる。木製品の劣化度を表す指標に含水率があるが、これは木製品全体における木質と水分の割合を表す。現生材でおよそ100%と表され、これは木質と水分がほぼ均等であることを示す。対して出土木製品は300%~500%と現生材と比較すると3倍から5倍の水分を保有した状態で出土する。原の辻遺跡からも木製品はブヨブヨの状態で出土し、乾燥によって細胞が収縮し、変形やひび割れをおこしてしまわないよう水漬けの状態でも保管している。これらの木製品を展示等活用できるよう、木製品の樹種や劣化度、大きさ、形状を考慮し、主に下記にあげる保存処理法を選択して実施している。

1) PEG 含浸処理法

PEG (ポリ・エチレン・グリコール) は常温では固体、60℃まで加熱すると液体になる水に溶ける蠟のような樹脂で、PEG 含浸処理法ではこの樹脂を木製品に漬け込ませることで強化する。水温を60℃



図149 PEG 含浸処理

程度に保てる PEG 含浸処理槽に木製品を浸漬させ、はじめは30%程度の PEG 水溶液から 1～2 年かけて少しずつ濃度を上げていき、最終的に木製品の中の水分と PEG を置換させる。木製品を処理槽から取り出して常温に冷ますことで内部に浸透した PEG が固まることで木製品の形状を保持させる。本法の長所は、使用する樹脂が安全で、比較的どのような劣化状態の木製品にも対応できることである。一方短所としては、1～2 年という処理に長い時間がかかること、処理後に重たくなること、高温多湿の環境下では PEG が溶解する恐れがあることなどがあり、保管環境の管理が必要となる。

2) 真空凍結乾燥法

真空凍結乾燥法はカップラーメンの具材やドライフルーツを作るフリーズドライの技術を応用したもので、木製品内の水分を凍結させ、真空環境におくことで水（個体）から一気に気化させる昇華の原理を応用し、変形させることなく水分を乾燥させることができる。本法の長所は、処理期間が短いこと、処理後は比較的色調が明るくなることなどがあり、大型の木製品などは真空凍結乾燥法にて処理を行う。一方短所としては、木製品の細胞内が空の状態になるため強度がなく、そのため通常は PEG などの樹脂を50%程度まで染み込ませて真空凍結乾燥するなど、他の方法と合わせて処理を行う。

3) 糖アルコール含浸処理法

工業的に作られる人工甘味料を用いた比較的新しい処理法である。糖アルコールの30%前後の水溶液（まさに砂糖水）を作成し木製品を浸漬させ、濃度を徐々に上げていき、80%程度で取上げたのち、結晶化させることで強化を図る。本法の長所は、人工甘味料としても使われる安全な樹脂であること、木の細胞と似た成分であることが上げられる。また、PEG と比べると分子量が小さいため、木材に染み込みやすく処理時間が1～数週間と短期間であり、細胞構造の複雑な広葉樹や漆器などにも適している。また、吸湿性が低いため処理後に湿度の影響を受けることが少ない。漆塗り木製品や墨書の施された木簡などに実施している。

(3) 金属製品の保存処理

金属製品の多くは、埋土中に酸化し錆びていく。その際、周囲の土や石を巻き込みながら錆びていくため、出土したときには本来の姿がわからないほど厚いサビに覆われていることもあり、そのままでは展示等の活用が難しい。また、環境の変化を受けやすいため、発掘したことにより状態が急激に悪化するため、早急な保存処理が必要である。金属製品の保存処理は材質により使用する薬品や処理方法が異なるため、ここでは主に鉄器と銅製品について記す。

1) 事前調査

透過 X 線写真（レントゲン写真）を撮影し、表面を覆っている錆や砂を透過させて元々の形状や劣化状態を調査する。また資料の表面に繊維や顔料などの付着残存物がないか実体顕微鏡で観察する。必要に応じて成分分析を行い、材質や製作技法などを調べる。

2) 錆取り・クリーニング

透過X線写真をもとに物理的に錆を取り除く。鉄器であれば、精密グラインダーや精密噴射加工機を用いて、銅製品であれば顕微鏡下でメスや針を使って表面の錆を取り除く。



図150 鉄器の錆取り

3) 脱塩処理・BTA処理

鉄器の内部に含まれる塩化物イオンを取り除くため脱塩処理を施す。脱塩処理には湿式や乾式、また使用する薬品によってさまざまな種類がある。センターには高温高压式の脱塩処理装置が導入されており、本装置により脱塩処理を行っている。蒸留水にひたした鉄製品を、脱塩処理装置に入れ高温高压をかけることで、塩化物イオンを蒸留水に強制的に溶かし出す。水は100℃で沸騰するが、高压下では沸点が上がるため、本装置では120℃まで温度を上げても処理水は沸騰しない。また高压化では水の粘度も下がるため、鉄器の内部にまで高温の蒸留水が浸透し脱塩を促進させる。

銅製品に関しては薬品を用いた安定化処理を実施している。BTA（ベンゾ・トリ・アゾール）のメタノール溶液に浸漬することで、銅の表面に保護膜を形成する。

4) 樹脂強化含浸処理

溶剤に溶かしたアクリル樹脂等を資料内部にまで浸透させ強化する。錆びによってもろくなった資料を強化するほか、表面をコーティングし空気（酸素）と直接触れないよう保護膜を形成する。樹脂を十分にしみ込ませるために減圧含浸装置を使用する。

5) 接合・修復

必要に応じて接着剤で接合、また欠けている部分の復元作業を行う。使用する接着剤や樹脂は、後で取り除くことができるよう、可逆性のある材料を使用する。

6) 脱酸素脱水処理

展示や資料調査など活用するとき以外は、脱酸素脱水剤と共に密封パックして保管する。

(4) 事前調査

前述したように保存処理を行う前には、どのような材質なのか、どのくらい劣化しているのかなど、保存処理対象資料の診察を行う。この診察に用いる事前調査機器類は非破壊で調査できることが前提である。ここでは使用する主な事前調査機器類を紹介する。

1) 透過X線撮影装置

透過力の高い電磁波の一種であるX線を用いた、いわゆるレントゲン撮影である。資料の内部構造や劣化状況を調べるのに使用する。錆でおおわれて本体の形状がうかがい知れない金属製品などのもの、

鍍と本体との透過率の差異から形状を確認できる。

2) 蛍光X線分析装置

資料にX線を照射すると、資料表面より二次的なX線（蛍光X線）が発生する。この蛍光X線は元素により固有のエネルギーを有しているため、このエネルギー値を検出器で捕らえることで、どのような元素を含むのか非破壊で分析することができる。金属やガラス、顔料、土器、石器などの成分分析に用いる。

3) 走査型電子顕微鏡

走査した電子線を資料に照射し、反射もしくは二次的に発生した電子を検出器でとらえ画像化する装置で、最高で30万倍まで拡大観察できる顕微鏡である。可視光線でないため色情報は得られないが、被写界深度（ピントの合う深さ）が深いため、凹凸のある微細な形状を観察するのに用いる。



透過X線撮影装置



蛍光X線分析装置



走査型電子顕微鏡

図151 事前調査機器

(5) 科学分析の成果

保存処理前の診察に使用する事前調査機器類を用いた調査では、考古学的に重要な情報が得られることもある。ここでは、原の辻遺跡出土遺物の調査成果に関してトピック的に紹介する。

1) 銅銭の透過X線撮影

平成13年の八反地区の調査では4枚の銅銭が包含層より出土している。3枚は中国貨幣である貨泉と分かったが、残りの1枚【HH003051012】は銭面が鍍で覆われ銭文が判読できない状態だったが、透過X線撮影により銭文が浮かび上がり、他の3枚と同じ貨泉であると判明した。詳細はⅢ章-4. 金属器「中国貨幣」参照。使用した機器は、エクスロン・インターナショナル社製 [MUJ225VD]。撮影条件は、管電圧100kV、管電流0.5mA、FPD（フラット・パネル・ディテクター）でデジタル画像を取得。

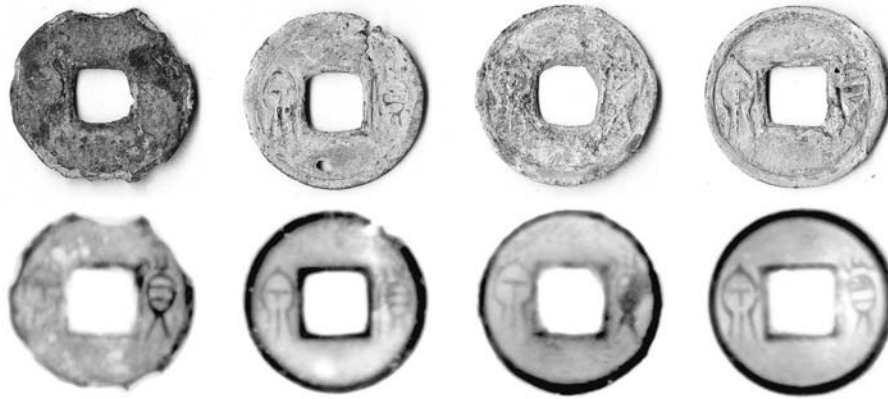


図152 貨泉の透過X線写真

2) 赤色顔料の分析

赤色顔料には酸化鉄を主成分とするベンガラ、硫化水銀を主成分とする朱、酸化鉛を主成分とする鉛丹が知られている。石田高原地区より出土した木製の桶【NK124080001】の表面には鮮やかな赤色顔料が塗布されていた。この赤色部を分析すると明瞭な Hg（水銀）のピークが検出されたため、この赤色顔料は水銀朱であることが分かった。使用した機器は、エスアイアイ・ナノテクノロジー社製【SEA1200VX】。分析条件は、電圧40kV、電流207 μ A、照射径8.0mm ϕ 。

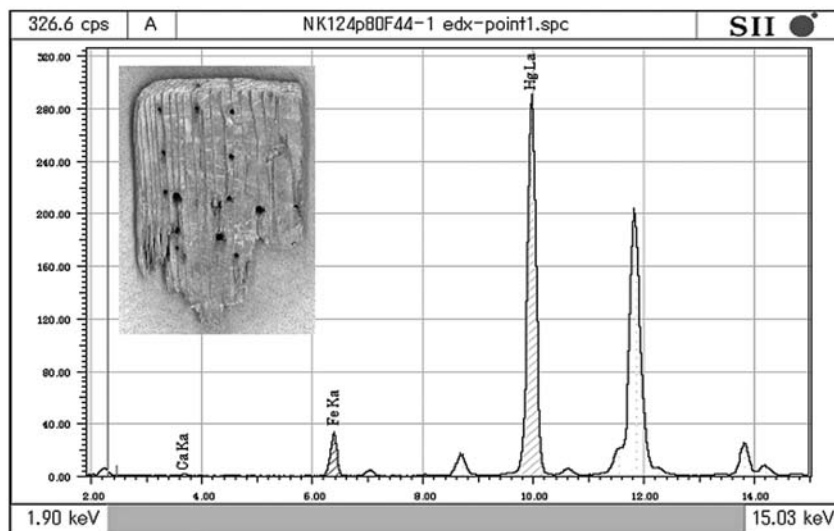


図153 赤色顔料の成分分析

3) 黒曜石の産地推定

蛍光X線分析装置を用いて遺跡から出土した黒曜石石器の原産地を推定する作業を進めている。黒曜石は特定の場所でのみ産出するガラス質の石で、九州圏内の黒曜石原産地から採集してきた黒曜石原石を分析し、K（カリウム）・Mn（マンガン）・Fe（鉄）・Rb（ルビジウム）・Sr（ストロンチウム）・Y（イットリウム）・Zr（ジルコニウム）の7つの元素比率（CPS 値比）を用いて判別図を作成し、平成26年度原の辻遺跡発掘調査から出土した黒曜石169点の分析データと照らし合わせた。結果、原

の辻遺跡発掘調査から出土した黒曜石は8グループに分かれることがわかり、内3グループが九州圏内の黒曜石原産地のデータと合致した。詳細はIV章「原の辻遺跡出土石器の蛍光X線分析による原産地推定」参照。使用した機器は、エスアイアイ・ナノテクノロジー社製 [SEA1200VX]。分析条件は電圧40kV、電流500~1000 μ A、照射径8.0mm ϕ 。

4) トンボ玉の分析

昭和49年の大原地区の墓域の調査で2基の甕棺墓から4点のトンボ玉【NH035016K2, K3】が出土している。青を基調としたガラス玉に白色のガラスで文様を施している。この青色部と白色部の成分分析を行ったところ、Pb（鉛）とBa（バリウム）が検出されたことから鉛バリウムガラスであることがわかり、青色部のみCu（銅）を検出したことから、青の着色成分が銅であることが分かった。使用した機器は、アメテック社製 [EAGLE III XXL]。分析条件は、電圧40kV、電流135 μ A、照射径0.3mm。

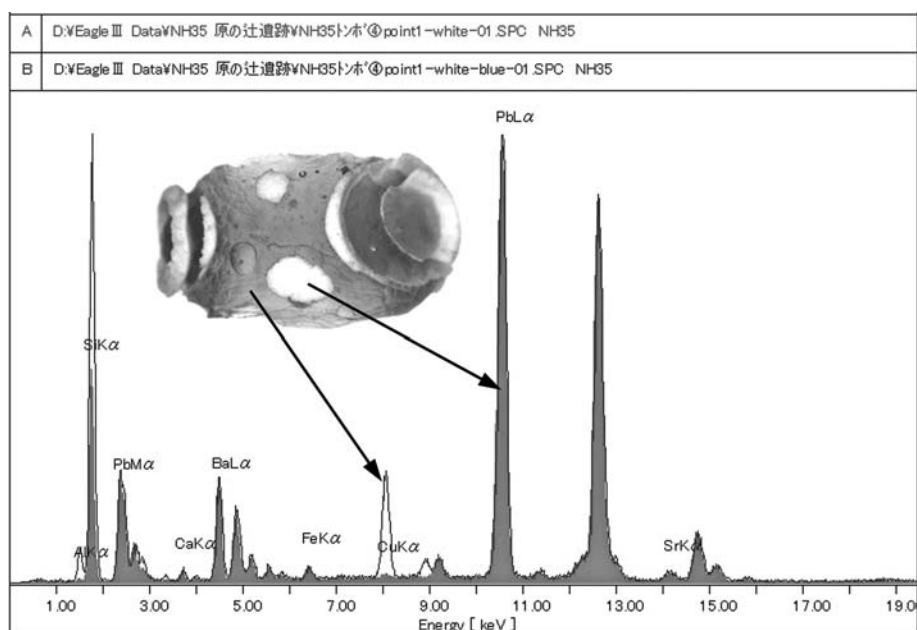
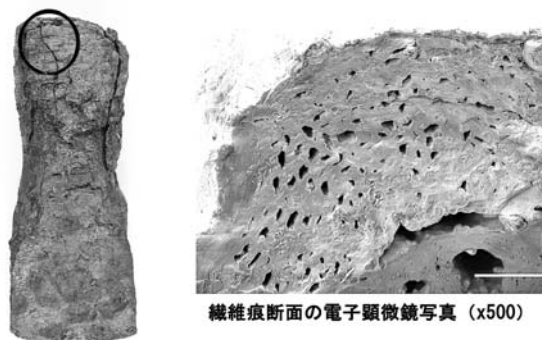


図154 トンボ玉の成分分析

5) 鉄器残存繊維痕の調査

平成15年度の高元地区の調査から出土した鍛造製の袋状鉄斧【NH028103019】の袋部には細い糸状の繊維を巻きつけた痕跡が残っていた。錆びにより剥落していた破片を走査型電子顕微鏡で観察したところ、単繊維断面形状が隅丸の不等辺三角形を呈していることが分かった。これは絹の単繊維断面と同じ形状であり、絹糸を用いて柄を縛り付けていたと考えられる。使用



繊維痕断面の電子顕微鏡写真 (x500)

図155 繊維痕の断面観察

した機器は、日本電子社製 [JSM-6610LA]。

6) 三次元計測器と3Dプリンター

三次元計測器は資料を立体的に計測する機械で、平面的な写真や図面とはちがい、計測されたデータは立体画像になるため360度どこからでも観察することができる。また、三次元計測器で計測したデータを元に、3Dプリンターでレプリカを造形することもできる。八反地区の溝跡から出土した人面石【NH024072013】を三次元計測器で計測し、3Dプリンターで造形し

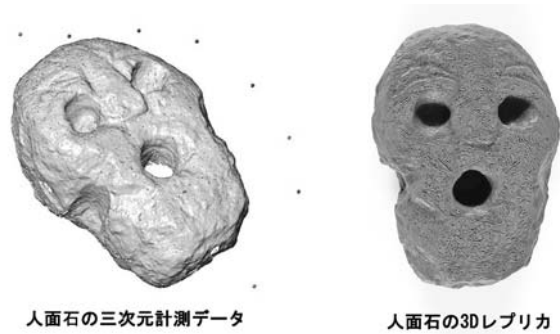


図156 人面石のレプリカ作成

たレプリカを、博物館の子ども向けコーナーなどで活用している。使用した機器は、三次元計測器：GOM社製 [ATOS III/Model 400システム]、3Dプリンター：シトラタシス社製 [Dimention Elite 3D Printer] ABS樹脂で出力。

(6) おわりに

出土品の保存処理は脆弱な資料をより良い状態、形で後世に残すことを目的としている。また展示等活用しやすい形に修復したり、必要に応じてレプリカの作成なども実施している。この保存処理や修復には可逆性（元に戻すことが可能）のある材料を用いるのが前提であり、それは、将来によりよい方法が発見された際や、再処理が必要な際にやり直すことができるようにするためである。そのため保存処理を実施する前にはカルテ（保存処理カード）を作成し、いつ、どのような薬品を使って、どのような処置を施したのかなどを記録している。平成25年には原の辻遺跡の出土品の一部である1,760点が、国の重要文化財に指定され、今後さらなる保存と活用が見込まれる。保存処理を施せば永久に良い状態が続くわけではなく、展示や収蔵環境によっても劣化の度合いが変わってくるため、今後も新たな出土品の保存処理を進めるとともに、展示資料を含め状態観察を実施するなどアフターケアを実施していきたい。

参考文献

沢田正昭1997『文化財保存科学ノート』Science selection series Vol. 1

松井敏也2009『出土鉄製品の保存と対応』考古学研究調査ハンドブック③

片多雅樹2015「原の辻遺跡出土黒曜石の蛍光X線分析による判別図の作成」『原の辻遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第14集

布目順郎1992『目で見る繊維の考古学』染織と生活社

写 真



写真1 平成17年度不條地区船着き場跡8区 礫検出状況



写真2 平成17年度不條地区船着き場跡2区 礫検出状況1



写真3 平成17年度不條地区船着き場跡2区 礫検出状況2



写真4 平成17年度不條地区船着き場跡9区 礫検出状況



写真5 平成18年度不條地区船着き場跡11区東 石組検出状況（北から）



写真6 平成18年度池田大原地区 1号濠完掘状況

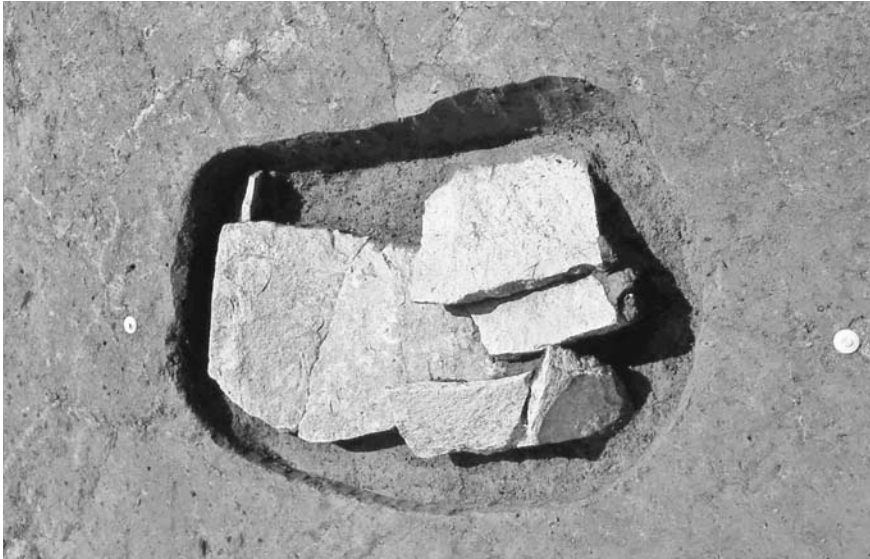


写真7 平成20年度原地区 箱式石棺墓検出状況



写真8 平成20年度原地区 箱式石棺墓完掘状況

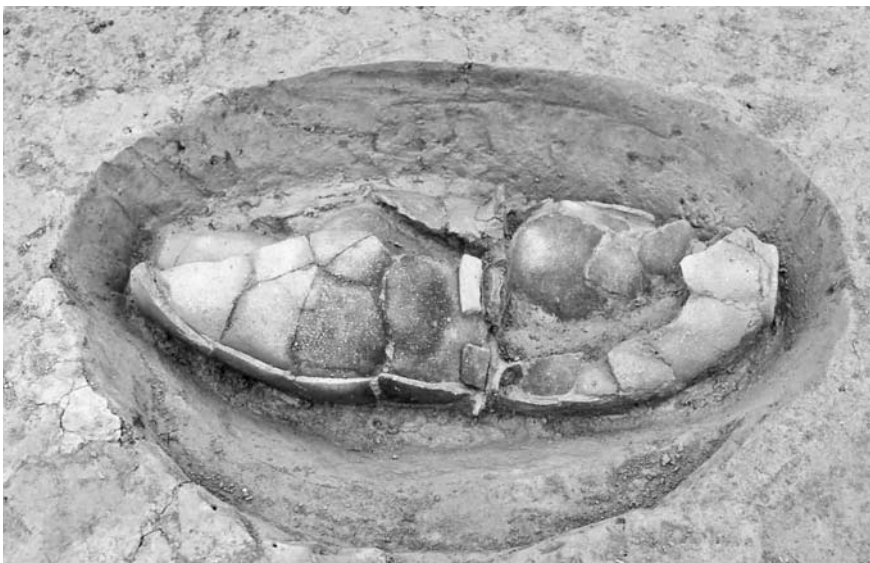


写真9 平成20年度原地区 11号甕棺墓検出状況



写真10 平成20年度原地区 13号甕棺墓検出状況



写真11 平成20年度石田高原地区 箱式石棺墓完掘状況



写真12 平成21年度八反地区 土橋検出状況



写真13 平成22年度八反地区 2号濠と竹検出状況



写真14 平成22年度八反地区 竹検出状況



写真15 平成22年度原地区 小児甕棺検出状況



写真16 平成23年度不條地区船着き場跡北側石組遺構



写真17 平成23年度不條地区1号礫群

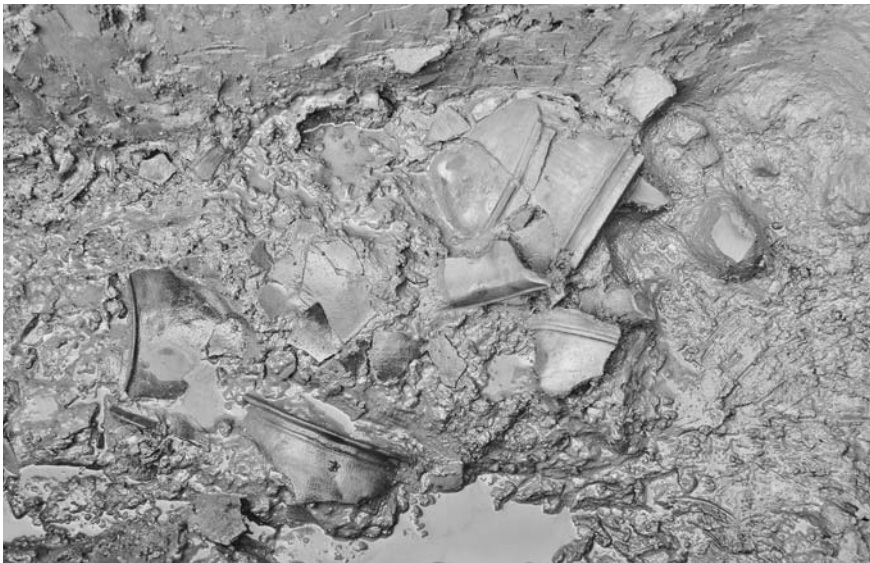


写真18 平成24年度川原畑地区河川土器出土状況



写真19 平成24年度川原畑地区河川土器出土状況



写真20 平成24年度川原畑地区 2号土坑



写真21 平成24年度川原畑地区 9号土坑



写真22 平成25年度川原畑地区 1号竪穴建物跡炉跡



写真23 平成25年度川原畑地区炉跡直上壺出土状況



写真24 平成25年度川原畑地区 1号土坑



写真25 平成25年度川原畑地区14号土坑



写真26 平成25年度川原畑地区細石刃出土状況

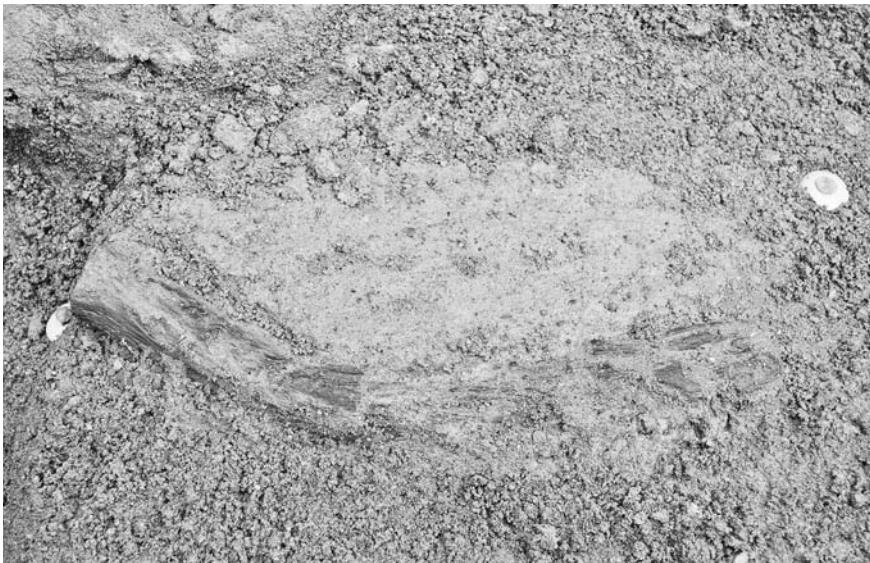


写真27 平成25年度川原畑地区更新統自然木出土状況



写真28 平成26年度原ノ久保地区 1号土坑断面



写真29 平成26年度原ノ久保地区 2号土坑



写真30 平成18年度不條地区 SX2 出土遺物



写真31 平成18年度池田大原地区 1号濠下層出土遺物



写真32 未報告黒色長頸壺 (115)

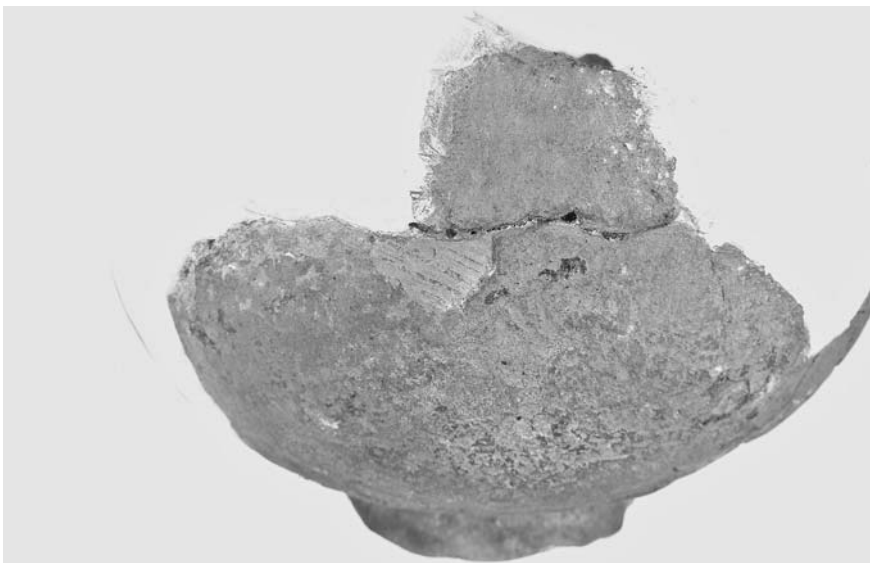


写真33 未報告黒色長頸壺 (115) 細部



写真34 靛島 8 号住居址Ⅳ層出土三角形粘土帯甕



写真35 原の辻遺跡石田高原環濠出土「擬弥生土器」甕

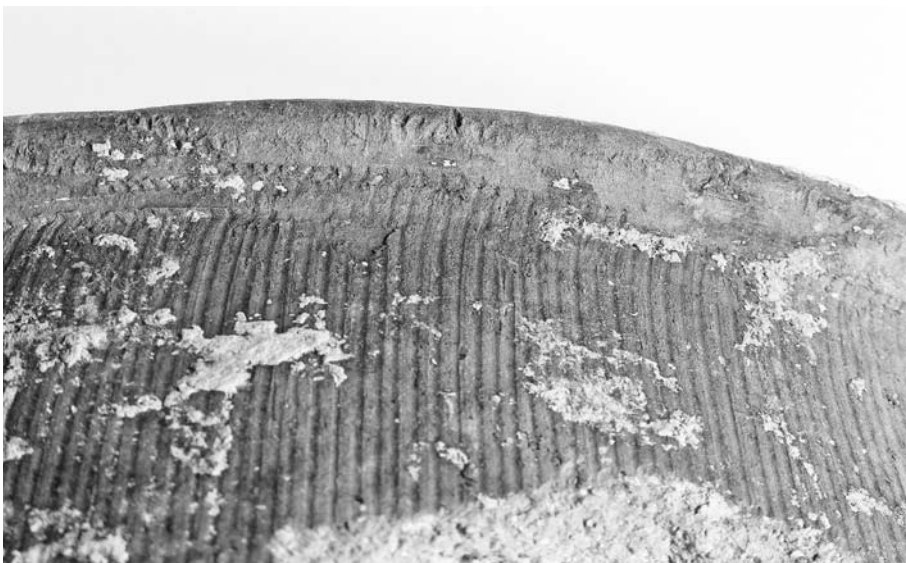


写真36 原の辻遺跡不條 1 号旧河道出土城ノ越式甕

하루노쓰지유적 총집편Ⅱ 요지

본서는 2005년부터 2014년까지 나가사키현 교육위원회와 이키시 교육위원회에 의해 실시된 하루노쓰지유적의 발굴성과를 정리한 조사보고서이다. 2005년 3월에 간행된 총집편Ⅰ 이후의 조사연구 성과를 한 권으로 정리한 것이다.

총집편Ⅱ에 있어서는 총집편Ⅰ에서 다룬 조사 경과, 유구, 유물, 자연 과학 분석에 대해서 새로운 성과를 추가해 가필한 것 이외에 보존 처리에 대해서도 새로이 항목을 마련하여 연구 성과로 기술하였다.

아울러 2015년 5월에 우호기관 협정을 체결한 부산박물관을 비롯한 국내외 연구기관의 협력을 얻으면서, 지금까지 하루노쓰지유적에서 출토된 중국 대륙·한반도계 토기 전체에 대한 전면적인 재검토를 행하여 얻을 수 있었던 새 지견에 대하여 정리하였다.

본서의 구성은 아래와 같다.

- I. 2005년부터 2014년의 조사 경과
- II. 야요이시대의 유구
 1. 구릉상의 유구
 2. 구릉 서쪽 저지대의 유구
 3. 구릉 북쪽 저지대의 유구
- III. 야요이시대의 유물
 1. 야요이토기
 2. 대륙·반도계 토기
 - ◆ 삼한계 토기와 낙랑계 토기에 부착된 적색안료에 대하여
 - ◆ 일본열도의 낙랑계 토기 개관
 3. 석기
 4. 금속기
 5. 목기·골각기
- IV. 자연 과학 분석
 1. 하루노쓰지유적 출토 석기의 형광 X선분석에 의한 원산지 추정
- V. 하루노쓰지유적의 보존 정비와 활용
- VI. 총괄
 1. 동아시아에서의 하루노쓰지유적
 2. 하루노쓰지유적의 성쇠
- VII. 부편
 1. 하루노쓰지의 구석기시대~조몬시대 초창기
 2. 하루노쓰지유적 출토 유물의 보존처리

하루노쓰지유적에 관한 최근 10년간의 조사 결과로서, 구릉상의 토기무지 유구의 양상,

선착장의 구체상, 하천과 토갱군의 양상 등이 밝혀진 점, 대륙·반도계 토기가 1200 점 이상 출토되었으며 그 종류도 풍부한 점, 하루노쓰지유적 출토 흑요석제 석기의 원산지가 고시다카계 무타산을 주제로 하면서 다양한 산지가 보이는 점 등을 들 수 있다.

이상을 총괄하면 하루노쓰지유적은 야요이시대 동아시아 교류에 있어서의 중대한 연결점이며, 교역이나 이주와 같은 교류의 구체상을 잘 보여주는 귀중한 유적이라고 할 수 있다.

(翻譯：古澤義久 校閱：金恩瑩)

原之辻遗址总篇Ⅱ提要

本书是 2005 年至 2014 年的长崎县教育委员会与壱岐市教育委员会对原之辻遗址考古发掘的总结报告，也是自 2005 年 3 月刊行总篇 I 以来的考古发掘与调查研究的整理。

本次不仅对总篇 I 的调查经过、遗存、遗物及科技考古里增加了新见解以外还增设“保存处理”一项作为研究成果写进总篇Ⅱ里了。

我得到了以韩国釜山博物馆（2015 年 5 月建立了友好关系）为中心的国内外相关机构的大力支持，才完成了对原之辻遗址出土的中国大陆系及朝鲜半岛系陶器的全面系统的研究并把得到的新认识也加进了本书里。

本书结构如下：

- I. 2005 年至 2014 年的调查经过
- II. 弥生时代的遗存
 1. 丘陵上的遗存
 2. 丘陵西侧的遗存
 3. 丘陵北侧的遗存
- III. 弥生时代的遗物
 1. 弥生陶器
 2. 中国大陆系陶器和朝鲜半岛系陶器
 - ◆ 关于附着在三韩系陶器和乐浪系陶器上的红色颜料
 - ◆ 日本列岛乐浪系陶器的概况
 3. 石器
 4. 金属制品
 5. 木制品和骨角器
- IV. 科技考古
 1. 对原之辻遗址出土的石器做 X 射线分析推定其原产地
- V. 原之辻遗址的保存整備和运用
- VI. 总结
 1. 东亚的原之辻遗址

2.原之辻遗址的盛衰

VII. 续篇

1.原之辻遗址的旧石器时代至绳文时代草创期

2.原之辻遗址出土遗物的保存处理

近 10 年来原之辻遗址取得的成果有如下几点：确认了集中出土陶器的丘陵上的遗存性质，发现过弥生时代的码头及古代河床遗迹，明确了灰坑群的情况，出土了中国大陆系和朝鲜半岛系的陶器 1200 件以上，其种类丰富多样。还确定了原之辻遗址出土的黑曜石石器的主要产地为腰岳系牟田。

原之辻遗址如实展现了古代人口移动和贸易往来，是名副其实的弥生时代东亚交流的据点。

(翻译：王達来)

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき そうしゅうへん に							
書名	原の辻遺跡 総集編Ⅱ							
副書名	平成17年度から平成26年度までの調査成果							
巻次								
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	川道寛・古澤義久(編)・楠本正樹・松見裕二・今西亮太・武末純一・片多雅樹・田中聡一							
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地1 電話0920(45)4080							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
はるのつじ 原の辻遺跡	長崎県壱岐市 芦辺町・石田町	42424	73-92	33°45'30"	129°45'55"			
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	濠、竪穴建物、 船着き場、墓地 群等	弥生土器、大 陸・半島系土器、 石器、青銅器、 鉄器、木器、骨 角器等	遺跡は特別史跡に指 定されている。 遺物は重要文化財に 指定されている。			

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

原の辻遺跡 総集編Ⅱ

—平成17年度から平成26年度までの調査成果—

2016（平成28）年3月31日

発行 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 昭和堂